

金沢市

畝田西遺跡群Ⅲ

2 0 0 6

石 川 県 教 育 委 員 会

(財) 石川県埋蔵文化財センター

うねだにし
畝田西遺跡群Ⅲ

2006

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター



遺跡上空写真（真上が北）

写真提供 金沢西部開発事務所



竪穴系建物跡（弥生時代）



絵画土器（弥生時代）

例 言

- 1 本書は畝田西遺跡群の発掘調査報告書Ⅲ（6分冊のうち第3分冊）である。
- 2 本書で報告する遺跡は畝田・寺中遺跡、畝田遺跡及び畝田大徳川遺跡（以下、畝田・寺中遺跡他2遺跡）である。各遺跡は範囲が重なるため、一体的に「畝田西遺跡群」として報告する。
- 3 本書（第3分冊）では縄文時代～古墳時代前期の遺構・遺物について報告する。
- 4 遺跡の所在地は石川県金沢市畝田西3丁目地内である。
- 5 調査原因は金沢西部第二土地区画整理事業であり、同事業を所管する石川県土木部都市計画課（金沢西部開発事務所）が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 6 発掘調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 7 調査に係る費用は石川県土木部都市計画課（金沢西部開発事務所）が負担した。
- 8 現地調査は平成11（1999）年度～平成15（2003）年度に実施した。面積・期間・担当は下表のとおりである。

年 度	平成11（1999）	平成12（2000）	平成13（2001）	平成14（2002）	平成15（2003）
期 間	平成11年4月15日～ 平成12年1月16日	平成12年4月26日～ 平成13年1月11日	平成13年4月11日～ 12月20日	平成14年4月19日～ 12月20日	平成15年7月7日～ 9月3日
面 積	12,800㎡	9,650㎡	11,000㎡	11,150㎡	1,120㎡
担当課	調査部調査第2課	調査部調査第4課	調査部調査第4課	調査部調査第4課	調査部調査第4課
担 当 者	中森茂明（調査専門員） 白田義彦（主事） 和田龍介（主事） 西田昌弘（主事）	浜崎悟司（調査専門員） 中西洋司（主事） 河村美紀（主事） 和田龍介（主事） 宮川彩子（囑託）	岩崎英雄（調査専門員） 岡本恭一（調査専門員） 浜崎悟司（調査専門員） 白田義彦（主任主事） 立原秀明（主事） 菅野美香子（囑託）	伊藤雅文（課長） 岡本恭一（調査専門員） 浜崎悟司（調査専門員） 金山哲哉（主事） 立原秀明（主事） 荒木麻理子（主事） 兼田康彦（主事）	浜崎悟司（調査専門員） 渡邊大輔（主事）

- 9 出土品整理は平成12（2000）年度～平成15（2003）年度に実施し、企画部整理課と調査部調査第4課が担当した。
- 10 出土した木製品の樹種同定・年代測定については（株）パレオ・ラボに委託して行った。
- 11 出土した石器・石製品の石材鑑定については（株）パレオ・ラボに委託して行った。
- 12 発掘調査報告書の刊行は第1・2分冊を平成16（2004）年度に実施し、第3・4・5・6分冊は平成17（2005）年度に実施した。担当課は調査部調査第4課である。
- 13 本書の執筆分担は下記のとおりである。編集は立原が行った。
第1章・第4章・第5章：安 英樹（調査部調査第4課調査専門員）、第2章：金山哲哉（調査部調査第1課主任主事）、第3章：立原秀明（調査部調査第1課課主査）
- 14 発掘調査には下記の個人、機関の協力を得た。
石川県土木部都市計画課、金沢西部開発事務所、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、山中敏史、出越茂和、谷口宗治、小西昌志、庄田知充、楠 正勝、向井裕知、谷口明伸、下濱貴子、福田弘光、大藤雅男（敬称略）
- 15 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 16 本書についての凡例は次頁に一括する。

凡 例

- 1 方位は座標北であり、座標は建設省告示の平面直角座標第Ⅶ系（日本測地系）に準拠している。
- 2 水平基準は海拔高であり、TP（東京湾平均海面標高）による。
- 3 グリッドは平面直角座標（日本測地系）に準拠した10m方眼を金沢西部第二土地区画整理事業の事業地全体に設定している。グリッド名は南北方向にアルファベット大文字、東西方向に算用数字を与えて北から南へA～（Z以降はAA、AB…）、西から東へ1～の番号を振り、両者を組み合わせて「A1」のように方眼交点を表記した。畝田・寺中遺跡他2遺跡ではF～AP、13～43までが相当し、平面直角座標との関係はZ21：X = +66,000、Y = -49,900となる。グリッドの名称については、方眼の北西交点をあてるものとした。
- 4 遺構は略号で表記している。主なものはSB（掘立柱建物跡）・SH（竪穴系建物跡）・SE（井戸跡）・SD（溝・大溝）・SK（土坑）・SX（落ち込み／不明遺構）・P（穴）等である。
- 5 遺構番号は、平成11年度調査では調査区が細分割されていてもA～K区の各単位で昇順の通し番号を振っているが、平成12年度以降の調査区では細分割された調査区ごとに振っている。ただし、Q1区とQ2区、S3区とS4区では通し番号である。また、二年次に分けて調査しているA5区とL4区ではそれぞれ年度ごとに振っている。
- 6 SB（掘立柱建物跡）・SH（竪穴系建物跡）については報告に際して、全体での通し番号を付している。掘立柱建物跡の遺構番号については時代区分と対応させており、詳細は下表のとおりである。ただし、弥生時代～古墳時代前期（100番台）と古墳時代中後期（200番台）は絶対的な区別が難しく、判然としない。

SB101～（100番台）：弥生時代～古墳時代前期	SB201～（200番台）：古墳時代中後期
SB301～（300番台）：古代	SB401～（400番台）：中世

- 7 遺構挿図の縮尺はSB・SH：1/100、その他：1/40を基本とし、大きさや重要度に応じて調整した。
- 8 遺物はW（木製品）・S（石製品）・E（土製品）・M（金属製品）・U（滑石製白玉）・J（石製玉）・D（土製玉）・F（墨書土器）等の略号を付けて区分している。通有の土器類については番号表記のみで示している。
- 9 遺物番号は全体で通し番号となっており、欠番を生じるが基本的に重複しない。詳細は下表のとおりである。

所収分冊名	区分 略号	土器	墨書土器 F	木製品 W	石製品 S	土製品 E	金属製品 M	石製玉 J	土製玉 D	ガラス玉 G	滑石製品 K	白玉 U	剥片 H	玉未成品 T
2	南・東部	1～	1～	1～	1～	1～	1～	1～	1～	1～	1～	1～		
3	縄文	401～			11～									
3	弥生	501～		76～	31～	21～		21～					1～	1～
3	古墳前	1001～			101～	31～	5	31～						
4	古墳中後	1501～		79～	111～	71～	6～	41～	21～		11～	201～		
5	古代	4001～	9～	501～	131～	101～	11～		34					
5	中世	5001～		701～	141～	151～	13～							

- 10 遺物挿図の縮尺は主体を占める土器類と木製品が1/4を基本とし、大きさや重要度に応じて調整した。
- 11 遺構番号・遺物番号は挿図と写真で対応する。
- 12 注・文献は執筆分担に応じて章・節ごとに付した。

目 次

第1章 畝田西遺跡群の概観	1
第1節 遺跡の沿革	1
第2節 報告の方針	1
第2章 縄文時代の遺構と遺物	7
第1節 遺構	7
1 V2区下層	7
2 W区下層	7
第2節 遺物	8
1 土器	8
2 石器・石製品	9
第3節 小結	9
第3章 弥生時代の遺構と遺物	20
第1節 概要	20
第2節 竪穴系建物跡・掘立柱建物跡	20
第3節 井戸跡	30
第4節 土坑	32
第5節 溝	61
第6節 河道	63
第7節 その他の遺物	84
1 土器	84
2 土製品	85
3 石器	85
第8節 小結	86
第4章 古墳時代前期の遺構と遺物	104
第1節 概要	104
1 遺構と遺物	104
2 時期区分	104
第2節 竪穴系建物跡	105
第3節 掘立柱建物跡	138
第4節 大溝群	172
第5節 井戸跡	190
第6節 小溝群	200
第7節 その他	202
1 その他の遺構	202
2 土製品	227
3 石製品・石製玉・金属製品	228
第5章 まとめ	238
第1節 縄文時代	238
第2節 弥生時代の集落	239
第3節 古墳時代前期の集落	240
1 遺構配置	240
2 古墳前期の動態	241

挿 図 目 次

〔第 1 章〕

第1図	遺跡位置図 (S=1/25,000)	3
第2図	調査区位置図 (S=1/5,000)	4
第3図	調査区割り図	5
第4図	グリッド配置図 (S=1/2,000)	6

〔第 2 章〕

第5図	V2区下層実測図 (S=1/40・1/100)	11
第6図	W区下層実測図 (S=1/40・1/150)	12
第7図	土器実測図1 (S=1/3・1/4)	13
第8図	土器実測図2 (S=1/3・1/4)	14
第9図	土器実測図3 (S=1/3・1/4)	15
第10図	石器・石製品実測図1 (S=1/3)	16
第11図	石器・石製品実測図2 (S=1/4)	17
第12図	石器・石製品実測図3 (S=1/5)	18

〔第 3 章〕

第13図	弥生遺構配置図1 (北東部) (S=1/1,000)	22
第14図	弥生遺構配置図2 (南西部) (S=1/1,000)	23
第15図	S B105、S H23・36実測図 (S=1/100・1/40)	24
第16図	S H37実測図 (S=1/100・1/40)	25
第17図	S H41実測図 (S=1/100・1/40)	26
第18図	S H42実測図 (S=1/100・1/40)	27
第19図	S H43・44実測図 (S=1/100・1/40)	28
第20図	竪穴系建物跡出土土器実測図 (S=1/4)	29
第21図	井戸跡実測図 (S=1/40・1/20)	31
第22図	土坑実測図1 (S=1/40)	38
第23図	土坑実測図2 (S=1/40)	39
第24図	土坑実測図3 (S=1/40)	40
第25図	土坑実測図4 (S=1/40)	41
第26図	土坑実測図5 (S=1/40)	42
第27図	土坑実測図6 (S=1/40)	43
第28図	土坑実測図7 (S=1/40)	44
第29図	土坑実測図8 (S=1/40)	45
第30図	土坑実測図9 (S=1/40)	46
第31図	土坑実測図10 (S=1/40)	47
第32図	土坑実測図11 (S=1/40)	48
第33図	土坑実測図12 (S=1/40)	49
第34図	土坑実測図13 (S=1/40)	50
第35図	井戸跡・土坑出土土器実測図 (S=1/4)	51
第36図	土坑出土土器実測図1 (S=1/4)	52
第37図	土坑出土土器実測図2 (S=1/4)	53
第38図	土坑出土土器実測図3 (S=1/4)	54
第39図	土坑出土土器実測図4 (S=1/4)	55
第40図	土坑出土土器実測図5 (S=1/4)	56
第41図	土坑出土土器実測図6 (S=1/4)	57
第42図	土坑出土土器実測図7 (S=1/4)	58
第43図	土坑出土土器実測図8 (S=1/4)	59
第44図	土坑出土土器実測図9 (S=1/4)	60
第45図	溝実測図1 (S=1/100・1/80・1/40)	65
第46図	溝実測図2 (S=1/80・1/40)	66

第47図	溝実測図3 (S=1/80・1/40)	67
第48図	DN9 (弥生) 案内図 (S=1/500)	68
第49図	E区SD04、DN9 (弥生) 土層図1 (S=1/80・1/40)	69
第50図	DN9 (弥生) 土層図2 (S=1/40)	70
第51図	溝出土土器実測図1 (S=1/4)	71
第52図	溝出土土器実測図2 (S=1/4)	72
第53図	溝出土土器実測図3 (S=1/4)	73
第54図	溝出土土器実測図4 (S=1/4)	74
第55図	溝出土土器実測図5 (S=1/4)	75
第56図	DN9 (弥生) 出土土器実測図1 (S=1/4)	76
第57図	DN9 (弥生) 出土土器実測図2 (S=1/4)	77
第58図	DN9 (弥生) 出土土器実測図3 (S=1/4)	78
第59図	DN9 (弥生) 出土土器実測図4 (S=1/4)	79
第60図	DN9 (弥生) 出土土器実測図5 (S=1/4)	80
第61図	DN9 (弥生) 出土土器実測図6 (S=1/4)	81
第62図	DN9 (弥生) 出土土器実測図7 (S=1/4)	82
第63図	DN9 (弥生) ・その他遺構出土土器実測図 (S=1/4・1/2)	83

第64図	土製品実測図 (S=1/2)	88
第65図	石器実測図1 (S=1/2)	89
第66図	石器実測図2 (S=1/3)	90
第67図	石器実測図3 (S=1/3)	91
第68図	石器実測図4 (S=1/3)	92
第69図	石器実測図5 (S=1/3)	93
第70図	石器実測図6 (S=1/2)	94
第71図	石器実測図7 (S=1/2)	95
第72図	石器実測図8 (S=1/2)	96
第73図	玉未成品・石製玉実測図 (原寸)	97
第74図	木製品実測図 (S=1/6)	98

〔第 4 章〕

第75図	竪穴系建物跡配置図1 (S=1/1,000)	106
第76図	竪穴系建物跡配置図2 (S=1/1,000)	107
第77図	SH15・SH16実測図 (S=1/100・1/40)	113
第78図	SH18実測図 (S=1/100・1/40)	114
第79図	SH19実測図 (S=1/100・1/40)	115
第80図	SH22実測図 (S=1/100・1/40)	116
第81図	SH24実測図 (S=1/120・1/40)	117
第82図	SH25実測図 (S=1/100・1/40)	118
第83図	SH26実測図 (S=1/100・1/40)	119
第84図	SH29実測図 (S=1/100・1/40)	120
第85図	SH31実測図 (S=1/100・1/40)	121
第86図	SH32実測図 (S=1/100・1/40)	122
第87図	SH33実測図 (S=1/100・1/40)	123
第88図	SH34実測図 (S=1/100・1/40)	124
第89図	SH35実測図 (S=1/100・1/40)	125
第90図	SH38実測図 (S=1/100・1/40)	126
第91図	SH39・SH40実測図 (S=1/100・1/40)	127
第92図	SH47実測図 (S=1/100・1/40)	128
第93図	SH47遺物出土状況図 (S=1/20・1/40・1/100)	129

第94図	竪穴系建物跡出土土器実測図1 (S=1/4) ……	131	第135図	DN 9 出土土器実測図1 (S=1/4) ……	184
第95図	竪穴系建物跡出土土器実測図2 (S=1/4) ……	132	第136図	DN 9 出土土器実測図2 (S=1/4) ……	185
第96図	竪穴系建物跡出土土器実測図3 (S=1/4) ……	133	第137図	DN 9 出土土器実測図3 (S=1/4) ……	186
第97図	竪穴系建物跡出土土器実測図4 (S=1/4) ……	134	第138図	DN 9 出土土器実測図4 (S=1/4) ……	187
第98図	竪穴系建物跡出土土器実測図5 (S=1/4) ……	135	第139図	DN 9 出土土器実測図5 (S=1/4) ……	188
第99図	竪穴系建物跡出土土器実測図6 (S=1/4) ……	136	第140図	DN 9 出土土器実測図6 (S=1/4) ……	189
第100図	SH39接合図 (S=1/300) ……	136	第141図	井戸跡・土坑・溝・落ち込み配置図 (S=1/1,000) ……	192
第101図	SH40接合図 (S=1/300) ……	136	第142図	井戸跡・土坑・溝・落ち込み配置図 (S=1/1,000) ……	193
第102図	竪穴系建物跡出土土器実測図7 (S=1/4) ……	137	第143図	井戸跡実測図1 (S=1/40) ……	194
第103図	掘立柱建物跡配置図1 (S=1/1,000) ……	139	第144図	井戸跡実測図2 (S=1/40) ……	195
第104図	掘立柱建物跡配置図2 (S=1/1,000) ……	140	第145図	井戸跡出土土器実測図 (S=1/4) ……	196
第105図	SB104・SB106～SB109実測図 (S=1/100・1/40) ……	151	第146図	小溝群土層図 (S=1/40) ……	197
第106図	SB110～SB113実測図 (S=1/100・1/40) ……	152	第147図	小溝群案内図 (S=1/1,000・1/2,500) ……	198
第107図	SB114～SB117実測図 (S=1/100・1/40) ……	153	第148図	小溝群出土土器実測図 (S=1/4) ……	199
第108図	SB118～SB121実測図 (S=1/100・1/40) ……	154	第149図	Q2区SK91層6詳細図 ……	203
第109図	SB122～SB126実測図 (S=1/100) ……	155	第150図	土坑実測図1 (S=1/40) ……	207
第110図	SB127～SB129・SB131実測図 (S=1/100) ……	156	第151図	土坑実測図2 (S=1/40・1/20) ……	208
第111図	SB123・SB126・SB127・SB129土層図 (S=1/40) ……	157	第152図	土坑実測図3 (S=1/40) ……	209
第112図	SB130・SB132・SB134・SB135 (S=1/100) ……	158	第153図	土坑実測図4 (S=1/40・1/20) ……	210
第113図	SB205～SB209・SB241実測図 (S=1/100) ……	159	第154図	土坑実測図5 (S=1/40) ……	211
第114図	SB210～SB213実測図 (S=1/100) ……	160	第155図	土坑実測図6 (S=1/40) ……	212
第115図	SB214～SB216・SB240実測図 (S=1/100・1/40) ……	161	第156図	土坑実測図7 (S=1/40) ……	213
第116図	SB215・SB216土層図 (S=1/40) ……	162	第157図	土坑実測図8 (S=1/40) ……	214
第117図	SB217・SB219～SB221実測図 (S=1/100) ……	163	第158図	土坑実測図9 (S=1/40) ……	215
第118図	SB222～SB225実測図 (S=1/100) ……	164	第159図	土坑実測図10 (S=1/40) ……	216
第119図	SB226～SB229実測図 (S=1/100) ……	165	第160図	溝土層図 (S=1/40) ……	217
第120図	SB230～SB233実測図 (S=1/100・1/40) ……	166	第161図	V 2 区溝群遺物散布図 (S=1/100) ……	218
第121図	SB234～SB237実測図 (S=1/100) ……	167	第162図	落ち込み実測図1 (S=1/40・1/100) ……	219
第122図	SB238・SB239実測図 (S=1/100・1/40) ……	168	第163図	落ち込み実測図2 (S=1/40) ……	220
第123図	SB133・SB218・SB242実測図 (S=1/100・1/40) ……	169	第164図	その他遺構出土土器実測図1 (S=1/4) ……	222
第124図	掘立柱建物跡出土土器実測図 (S=1/4) ……	171	第165図	その他遺構出土土器実測図2 (S=1/4) ……	223
第125図	DS 1・DS 2 土層図 (S=1/40・1/1,000) ……	174	第166図	その他遺構出土土器実測図3 (S=1/4) ……	224
第126図	DS 1 (A 1 区SD04) 遺物散布図 (S=1/100) ……	175	第167図	その他遺構出土土器実測図4 (S=1/4) ……	225
第127図	DN 2 土層図 (S=1/40) ……	176	第168図	その他遺構出土土器実測図5 (S=1/4) ……	226
第128図	DN 3 土層図 (S=1/40) ……	177	第169図	土製品実測図 (S=1/3) ……	229
第129図	DN 2・DN 3 案内図 (S=1/500・1/2,500) ……	178	第170図	石製品実測図 (S=1/3) ……	230
第130図	DN 9 土層図 (S=1/40) ……	179	第171図	石製玉・金属製品実測図 (S=1/2) ……	231
第131図	DN 9 案内図 (S=1/500) ……	180	[第5章]		
第132図	DS 1 出土土器実測図1 (S=1/4) ……	181	第172図	縄文時代の畝田西遺跡群 (S=1/5,000) ……	238
第133図	DS 1・2 出土土器実測図 (S=1/4) ……	182	第173図	弥生時代の畝田西遺跡群 (S=1/2,000) ……	242
第134図	DN 2・3 出土土器実測図 (S=1/4) ……	183	第174図	古墳時代前期の畝田西遺跡群 (S=1/2,000) ……	243

表 目 次

第1表	縄文時代土器観察表 ……	19	第4表	弥生竪穴系建物跡一覧 ……	29	第8表	弥生木製品一覧 ……	98
第2表	縄文時代石器・石製品観察表 ……	19	第5表	弥生井戸跡・土坑一覧 ……	37	第9表	弥生土器一覧 ……	99～102
第3表	弥生掘立柱建物跡一覧 ……	24	第6表	弥生溝・河道一覧 ……	64	第10表	弥生土製品一覧 ……	103
			第7表	弥生剥片・石製玉一覧 ……	97	第11表	弥生石器一覧 ……	103

第12表	古墳竪穴系建物跡一覧… 130	第16表	古墳小溝群一覧… 191	第20表	古墳石製品一覧… 237
第13表	古墳掘立柱建物跡一覧… 170	第17表	古墳その他遺構一覧… 221	第21表	古墳石製玉一覧… 237
第14表	古墳大溝群一覧… 189	第18表	古墳土器一覧… 232～236	第22表	古墳金属製品一覧… 237
第15表	古墳井戸跡一覧… 189	第19表	古墳土製品一覧… 237	第23表	古墳古墳前期遺構の推移… 241

図版目次

図版 1	縄文時代の遺構 1 下層 1	図版45	弥生時代の遺物16 土器16・土製品
図版 2	縄文時代の遺構 2 貯蔵穴 1	図版46	弥生時代の遺物17 石器 1
図版 3	縄文時代の遺構 3 貯蔵穴 2・下層 2	図版47	弥生時代の遺物18 石器 2
図版 4	縄文時代の遺物 1 土器	図版48	弥生時代の遺物19 石器 3
図版 5	縄文時代の遺物 2 石器・石製品	図版49	弥生時代の遺物20 石器 4
図版 6	弥生時代の遺構 1 竪穴系建物跡 1	図版50	弥生時代の遺物21 石器 5・石製玉・木製品
図版 7	弥生時代の遺構 2 竪穴系建物跡 2	図版51	古墳前期の遺構 1 竪穴系建物跡 1
図版 8	弥生時代の遺構 3 井戸跡	図版52	古墳前期の遺構 2 竪穴系建物跡 2
図版 9	弥生時代の遺構 4 土坑 1	図版53	古墳前期の遺構 3 竪穴系建物跡 3
図版10	弥生時代の遺構 5 土坑 2	図版54	古墳前期の遺構 4 掘立柱建物跡 1
図版11	弥生時代の遺構 6 土坑 3	図版55	古墳前期の遺構 5 掘立柱建物跡 2
図版12	弥生時代の遺構 7 土坑 4	図版56	古墳前期の遺構 6 掘立柱建物跡 3
図版13	弥生時代の遺構 8 土坑 5	図版57	古墳前期の遺構 7 掘立柱建物跡 4
図版14	弥生時代の遺構 9 土坑 6	図版58	古墳前期の遺構 8 掘立柱建物跡 5
図版15	弥生時代の遺構10 土坑 7	図版59	古墳前期の遺構 9 掘立柱建物跡 6
図版16	弥生時代の遺構11 土坑 8	図版60	古墳前期の遺構10 井戸跡 1
図版17	弥生時代の遺構12 土坑 9	図版61	古墳前期の遺構11 井戸跡 2
図版18	弥生時代の遺構13 土坑10	図版62	古墳前期の遺構12 大溝群 1
図版19	弥生時代の遺構14 土坑11	図版63	古墳前期の遺構13 大溝群 2
図版20	弥生時代の遺構15 土坑12	図版64	古墳前期の遺構14 小溝群
図版21	弥生時代の遺構16 土坑13	図版65	古墳前期の遺構15 土坑 1
図版22	弥生時代の遺構17 土坑14	図版66	古墳前期の遺構16 土坑 2
図版23	弥生時代の遺構18 土坑15・溝 1	図版67	古墳前期の遺構17 土坑 3
図版24	弥生時代の遺構19 溝 2	図版68	古墳前期の遺構18 土坑 4
図版25	弥生時代の遺構20 溝 3	図版69	古墳前期の遺構19 溝 1
図版26	弥生時代の遺構21 溝 4	図版70	古墳前期の遺構20 溝 2・落ち込み
図版27	弥生時代の遺構22 溝 5・河道 1	図版71	古墳前期の遺物 1 土器 1
図版28	弥生時代の遺構23 河道 2	図版72	古墳前期の遺物 2 土器 2
図版29	弥生時代の遺構24 河道 3	図版73	古墳前期の遺物 3 土器 3
図版30	弥生時代の遺物 1 土器 1	図版74	古墳前期の遺物 4 土器 4
図版31	弥生時代の遺物 2 土器 2	図版75	古墳前期の遺物 5 土器 5
図版32	弥生時代の遺物 3 土器 3	図版76	古墳前期の遺物 6 土器 6
図版33	弥生時代の遺物 4 土器 4	図版77	古墳前期の遺物 7 土器 7
図版34	弥生時代の遺物 5 土器 5	図版78	古墳前期の遺物 8 土器 8
図版35	弥生時代の遺物 6 土器 6	図版79	古墳前期の遺物 9 土器 9
図版36	弥生時代の遺物 7 土器 7	図版80	古墳前期の遺物10 土器10
図版37	弥生時代の遺物 8 土器 8	図版81	古墳前期の遺物11 土器11
図版38	弥生時代の遺物 9 土器 9	図版82	古墳前期の遺物12 土器12
図版39	弥生時代の遺物10 土器10	図版83	古墳前期の遺物13 土器13
図版40	弥生時代の遺物11 土器11	図版84	古墳前期の遺物14 土器14
図版41	弥生時代の遺物12 土器12	図版85	古墳前期の遺物15 土器15
図版42	弥生時代の遺物13 土器13	図版86	古墳前期の遺物16 土器16
図版43	弥生時代の遺物14 土器14	図版87	古墳前期の遺物17 土製品
図版44	弥生時代の遺物15 土器15	図版88	古墳前期の遺物18 石製品・石製玉・金属製品

第1章 畝田西遺跡群の概観

第1節 遺跡の沿革

本書で報告する遺跡は畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡である。各遺跡の発見は、『大徳郷土史』によれば昭和42（1967）年に遡るようであり、金沢市畝田町の「大徳川遺跡」と記載されている。発見者は荒木繁行・福田弘光の両氏となっている。なお、同書で「畝田遺跡」と記載されているものは位置と内容から見て、現在の畝田ナベタ遺跡に相当するものである。その後、昭和44（1969）年には荒木繁行・吉岡康暢の両氏によって大徳川の下流側西方の地点で弥生時代の遺構・遺物が確認され、この地点が「畝田弥生遺跡」として報告されている。また、遺構・遺物の分布が寺中町地内へ連続する地点があり、昭和49（1974）年の石川県および金沢市の遺跡地図に記載された時点で「畝田・寺中遺跡」と命名されたようである。以上をもって畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田・大徳川遺跡の遺跡名が揃い、大まかな位置関係が確定することになる。

本格的な発掘調査は大規模開発事業に伴って行われるようになった。昭和57（1982）年の民間分譲地造成に伴う畝田・寺中遺跡の発掘調査を皮切りとして、昭和60（1985）～平成元（1989）年の県営住宅建設に伴う畝田遺跡、平成11（1999）～15（2003）年の金沢西部第二土地区画整理事業に伴う畝田・寺中遺跡他2遺跡（本書報告）、平成14（2002）～16（2004）年の民間区画整理事業に伴う畝田・寺中遺跡の発掘調査がその主なものであるが、この他にも中小規模の開発事業に伴い発掘調査が数多く行われている。昭和57年の調査では古墳時代前期の竪穴建物跡を検出し（方形周溝墓として報告）、昭和60～平成元年の調査では河川跡から玉丈形木製品や弧文板、卜骨が出土している。これら発掘調査により、南北600m以上・東西400m以上の広い範囲に遺構・遺物が分布することが明らかになっているが、周辺は急速に市街地化が進行しており、水田地帯であった往時の景観は失われつつある。

第2節 報告の方針

本書で報告する発掘調査地点は畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡（以下、畝田・寺中遺跡他2遺跡）の範囲が重なることが著しく、各遺跡を区分することが不可能であるため、本書では一体的に「畝田西遺跡群」として報告する。当然ながら、地域の歴史や遺跡動態を考慮した名称ではないことをまずお断りしておきたい。本書は全6分冊であり、第1分冊は空中写真測量図と空中写真、第2分冊は調査区南部・東部域、第3分冊は縄文時代～古墳時代前期、第4分冊は古墳時代中後期、第5分冊は古代・中世、第6分冊は自然科学的分析・総括で構成する。第1・2分冊は平成16（2004）年度に刊行されており、第3～6分冊は平成17（2005）年度に刊行されることとなった。

本書の構成は、基本的に時代別の分冊としており、年度・調査区別の分冊としなかったことに特徴がある。理由については、確認された縄文時代から中近世までの幅広い時代、特に弥生時代・古墳時代・古代・中世の各時代で大量に存在する複合遺跡の遺構・遺物を切り離し、各時代の遺跡像を明確にしたかったことがある。また、調査区の錯綜や調査区間にまたがる遺構が多く存在することがあり、年度や調査区の制約を受けずに面的・一体的に報告される必要があったことにもよる。なお、時代別に報告することの弊害も考慮し、空中写真測量図・空中写真を第1分冊に、調査区の制約が多い南

部・東部域の報告を第2分冊に、全体の総括と補遺、自然科学的分析を第6分冊としている。

以上のような報告の方針により、各調査区の遺構・遺物を時代毎に区分して資料を整理する作業、また、調査区間で遺構のつながりを検討する作業が整理作業の中に生じてくることとなった。この作業には浜崎悟司（当時は当センター調査専門員）が従事し、平成16年度にはほぼ完了した。同年度に刊行された第2分冊には5段階にわたる区分が大まかにではあるが提示されている。同時に、主要な建物の復元も行っており、その一部が報告されている。第3～5分冊は各担当者が浜崎の区分に基本的に準拠して執筆した。よって、本書の第2～5分冊の骨子は基本的に浜崎が作成したものといっただろう。本来は、第3分冊の古墳前期関係と、第4分冊を浜崎が執筆する予定であったが、平成17年度に県文化財課へ異動したため、他の担当者に引き継がれることとなった。

時代区分については、縄文時代と弥生時代の境界は土器型式でいうところの下野式と長竹式の間、同じく弥生時代と古墳時代では月影式と白江式、古墳時代と古代では7世紀の前半と後半、古代と中世では10世紀と11世紀の間に大まかに引かれている。古墳時代から中世にかけては時代というよりも遺構・遺物の空白期で区分したといったほうが適切であろう。ただし、実際の作業では出土遺物が少ない等の理由で時期が不明確な遺構や、時期判断が難しい種類の遺物など、区分し切れない資料が確認された。また、遺構の平面図・断面図については、錯綜する地点では各時代のものが重複しており、切り離すことが困難であった。このため、時期が不明確な遺構・遺物は主に第4分冊、一部は第3分冊に掲載し、切り離すことが困難な図面のうち複写や再製図が間に合わなかったものについては一つの時代のみ限定して掲載せざるをえなかった。今後、同種の作業で留意すべき課題であろう。

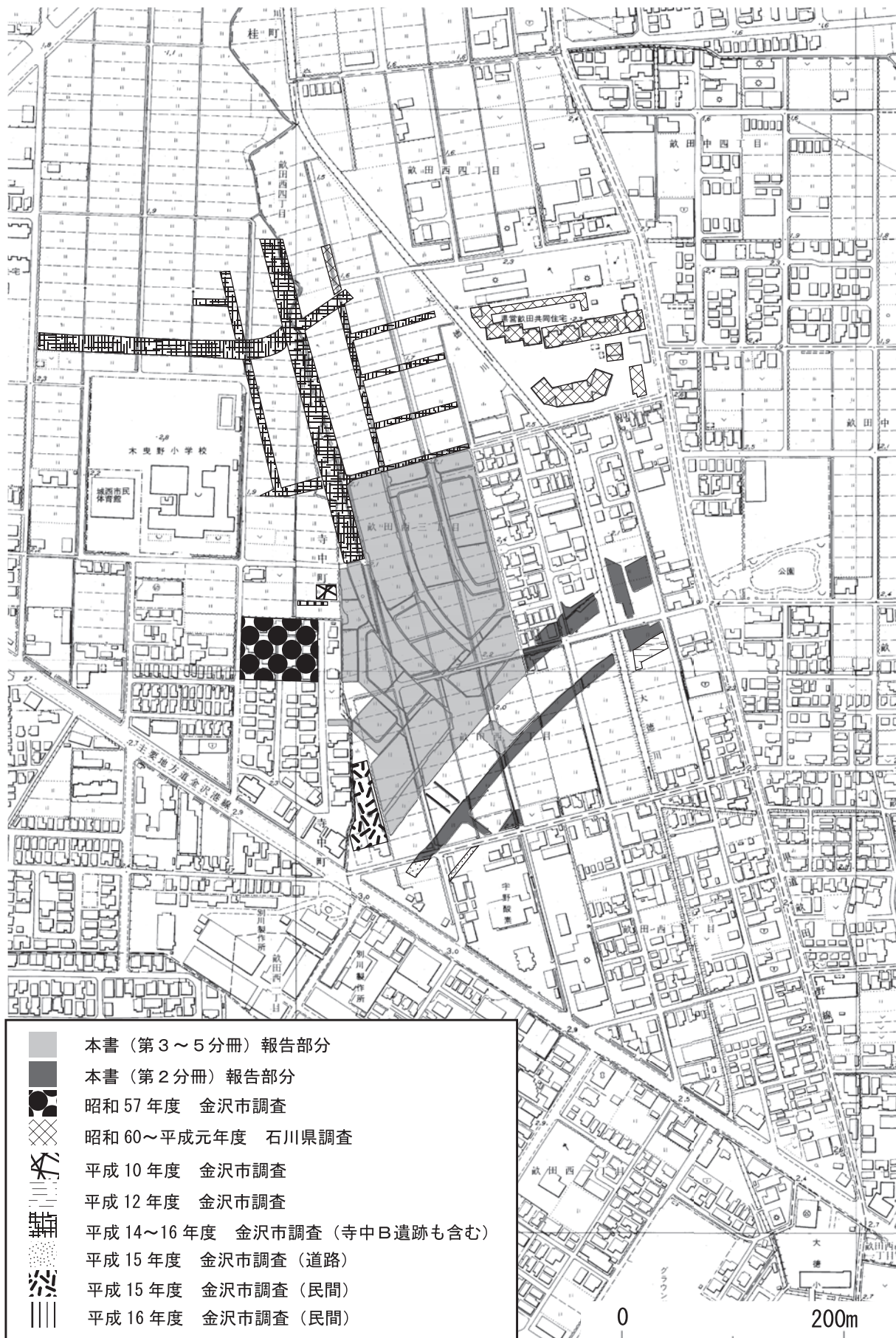
なお、すでに刊行されている第1分冊で問題がある部分について、ここで修正しておきたい。平成15年度に調査したU区については標高値が周囲の調査区よりはっきりと高くなっており、測量時に何らかのミスで生じたものと予想されるが原因は不明である。第3分冊以降の報告では数値を機械的に70cmマイナスすることで補正を測ることにした。また、遺跡全体図（第1図）の縮尺、グリッド配置図（第2図）の配置と縮尺が誤っており、第3分冊以降のものが正しいことをお断りしておく。

本分冊（第3分冊）には縄文時代、弥生時代、古墳時代前期の遺構・遺物を掲載している。古墳前期については浜崎が担当する予定だったことは前述したが、当該時期の建物遺構や土器の挿図は浜崎が在任中に作成したものを調整して使用している。ただし、古墳前期の土器については、古墳中後期とした遺構から出土している場合は、第4分冊に掲載している。同様に古墳中後期の土器で古墳前期の遺構から出土している場合は本分冊古墳前期の章に掲載している。また、概ね弥生時代から古墳時代の間に属することが予想されるが、厳密な時期区分が難しい遺構・遺物については区分せず一括しており、遺構では掘立柱建物跡と小溝群、遺物では木製品、石製品（一部）、土製品（一部）が該当する。具体的には掘立柱建物跡と小溝は本分冊、木製品は第4分冊に掲載している。

石製品では、本分冊縄文時代の章に打製石斧、弥生時代の章に石鏃、すり石類、磨製石斧、剥片類の他、細身の碧玉製管玉や瀬戸内型とされる石錘、古墳時代前期の章に太身の碧玉製管玉や九州型とされる石錘をそれぞれ一括して掲載した。砥石は製玉関係を除いては第4分冊に掲載している。土製品のうち有孔土製品は本分冊古墳時代前期の章、支脚は第4分冊に掲載している。これらには時期が特定できないものや、掲載された分冊の時代とは異なる可能性があるものも含まれており、浜崎の区分を一部変更したのものもある。以上のように、本分冊と第4分冊は時代別とはいっても完全に振り分けられたものではない。特に第4分冊については、古墳時代中後期が各時代の遺構・遺物中で最大量を有することから、時代が不明確で区分しきれない遺構・遺物も積極的に掲載しており、結果として不確定な要素を多く含む内容となっている。



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000) 国土地理院『数値地図25000』金沢を使用

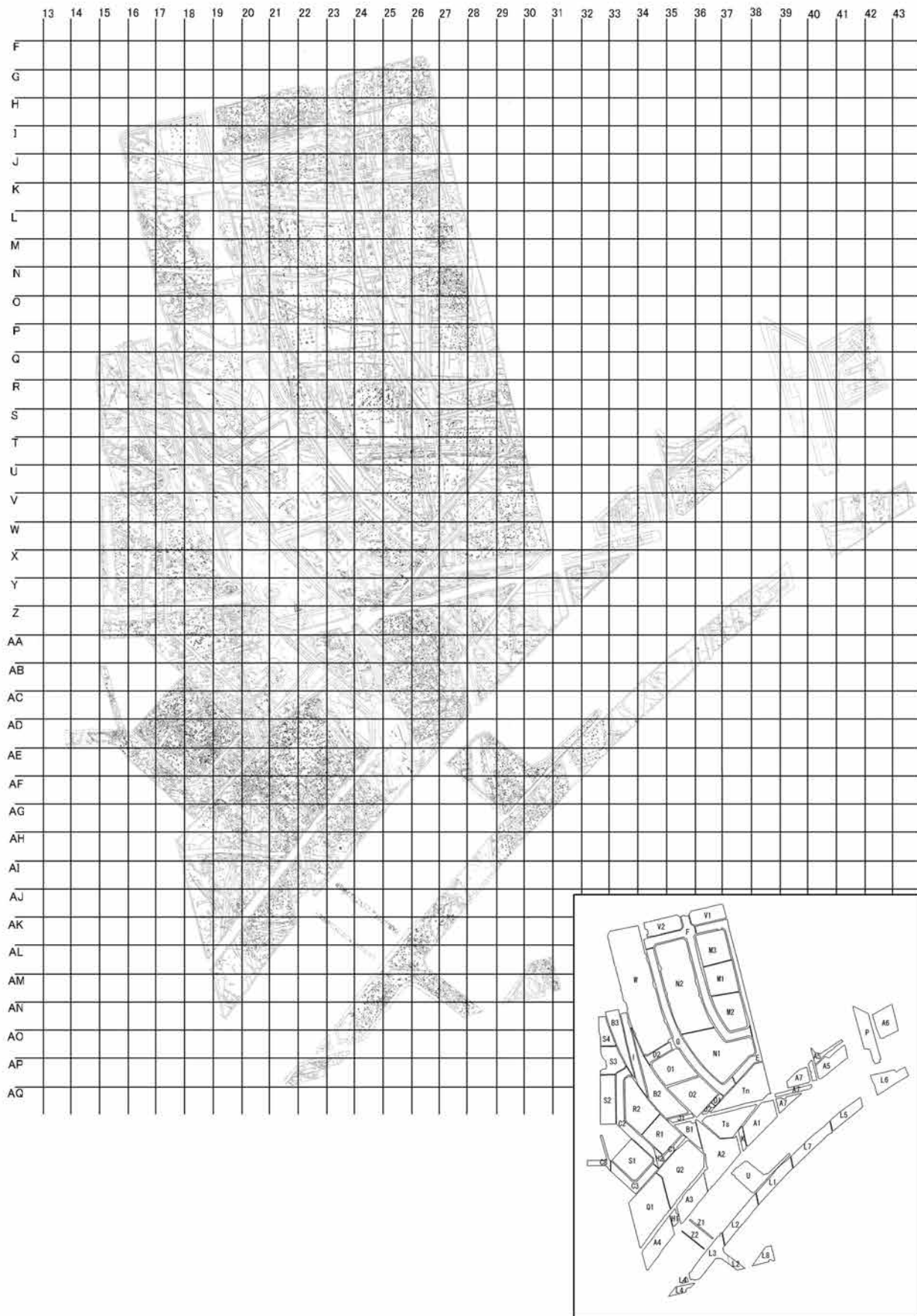


第2図 調査区位置図 (S=1/5,000)



第3図 調査区割り図

第2節 報告の方針



第4図 グリッド配置図 (S=1/2,000)

第2章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 遺 構

当該期の遺構については、V2区及びW区の2調査区で計9基の土坑が確認されたに過ぎない。最も多く確認されたのはV2区であり、可能性のあるものも含め計5基の土坑を検出した。土器資料のみをみれば各調査区で散見される状況であるが、本章で報告すべき明瞭な縄文時代の遺構については上記2調査区以外では確認されていない。以下、各調査区の状況について報告する。

1 V2区下層（第5図、図版1・2）

上層遺構面から約50cm下の、標高約0.7～0.8m付近を検出面として調査を行った。明瞭な包含層は確認できなかったが、重機による間層除去の際に上述の標高付近で少量の縄文土器が出土している。地山は黄褐色シルトである。遺構・遺物ともに南側でのみ確認されているが、湧水の多い環境から軟弱な状況であった。対して北側では遺構・遺物ともに全く検出されず、ベースも南側にも増して軟弱であり、また緩やかではあるが北傾していたことから、土坑分布域を以て遺跡の北限と判断した。

V2区では、上層調査段階においてSK18を、また下層調査段階においてはSK19～22ほか小土坑合わせた6基を、計7基の土坑を確認した。いずれも、直径50～80cm程度の円形プランを呈し、検出面からの深さは削平のため僅かに10cm程度を測るに過ぎない。SK18については、埋土出土遺物から中世の遺構である可能性があり、したがって中世の部分でも報告されている。しかしながら、埋土最下層から縄文土器のみが出土したことや、堅果類こそ出土しなかったものの規模や形状などの調査所見から縄文時代の遺構である可能性も高いものと考え、本章においても報告した。なお、これらの土坑の内、SK19・20の2基については、土坑内から各1点ずつではあるがクルミが出土しており、この点から周辺で検出した類似の土坑についても同様に貯蔵穴の可能性が高いものと判断した。SK19は、直上に弥生期の溝SD41が重なったことから土坑下部を僅かに残すにとどまる。本土坑については上層調査段階からその存在を確認していたが、全体のプランを確認できたのは間層除去後である。プランの確認後に断面の再精査を試みるも、同土坑検出箇所は湧水が特に顕著であり且つ極めて軟弱なシルト層であったことから、下層調査段階において良好な状態での記録作業は不可能であった。出土遺物については、SK18で八日市新保式期の深鉢片が、SK19では八日市新保式期と下野式期に属するとみられる深鉢片が出土している。また、SK21では後期中葉の所産とみられる深鉢資料が出土しており、時期的にやや幅のある内容となっている。

2 W区下層（第6図、図版3）

W区でも、上層遺構面から約50cm下の、標高約0.4～0.7mを下層検出面として調査を行った。ベースは暗青灰色粘質土であり、湧水多く軟弱である。本調査区では、上層調査段階において調査区北端部で土坑1基を、下層調査段階では北西隅で小土坑1基をそれぞれ確認している。その内の後者については出土遺物もなく、確実に縄文時代の遺構と判断されたのは前者の土坑1基に過ぎない。

確認した前者の土坑の直径は約1m、検出面からの深さも同様に約1mを測る。埋土中より多数のトチの実が出土したことから、貯蔵穴と判断した。土器資料等については、本貯蔵穴は元より、周辺

からも全く出土していない。

なお、本貯蔵穴の検出が上層調査段階であったことから、近接して同様の遺構が分布する可能性を考え、貯蔵穴検出位置から北側を対象に重機による間層除去を行い下層遺構の検出を試みている。しかしながら、調査区北端部に小土坑を確認するもその他の遺構は皆無であったため、西側の下層確認は貯蔵穴から南へ約12mの位置でとどめることとした。

第2節 遺物

1 土器（第7～9図、図版4、第1表）

401～443の43点について報告する。縄文時代の遺構から出土した資料は401～405の5点であり、以下の406～443の38点は、包含層及び弥生時代以降の遺構より出土した資料である。その38点の内、22点がV2区からの出土であり、残る16点の内、M3区が5点、B2区とN2区が各2点、A2区、C2区、F区、O2区、R1区、R2区、T区の7調査区が各1点という内訳となっている。また、同じくこの38点については、遺構出土の資料が26点と大半を占めるものの、上述のようにすべて弥生時代以降の遺構からの出土資料である。このように出土点数が少なくV2区以外まとまった出土調査区も認められない点や、弥生時代以降の遺構出土資料が大半であることから、この38点については所属時期ごとにまとめて報告することとした。以下、順に報告することとしたい。

（1）遺構出土の土器（第7図401～405）

401はSK18出土の八日市新保式期の波状口縁深鉢である。口縁部には波頂部を結ぶ3条の平行沈線を、胴部には区画内を1条の沈線によって2分割した楕円区画帯を横位に連続して施している。波頂部には山字状三叉文と、それを縁取るように列点文や沈線文を施している。402～404はSK19からの出土資料であり、402は八日市新保式、403は下野式の、いずれも粗製深鉢。404は深鉢の底部か。底面にはスタレ状圧痕が認められる。405も粗製深鉢であり、外面は縄文調整、内面にはナデ調整が施される。後期中葉の所産と考えられる。

（2）包含層及び弥生時代以降の遺構から出土の土器（第7～9図406～443）

406は深鉢口縁部に貼付された装飾部、407は深鉢波頂部片である。前者は申田新式期に、後者は中～後期に位置付けられるものと考えられる。ともにB2区からの出土資料である。408は酒見式期の注口土器の胴部と考えられる。A2区出土資料である。

409～423は八日市新保式期の資料である。409は沈線に縁取られる三叉文を施した平縁深鉢口縁部、410は縦位短沈線で分断される三叉文を施した波状口縁の深鉢口縁部である。411は口縁部に4条、胴部には3条の平行沈線が施され、且つ胴部の沈線文の上下には横位の列点文が配されている。胴部の沈線を境に、上半はナデ調整、下半には縄文施文が為される深鉢である。412も口縁部と胴部に平行沈線が施される波状口縁の深鉢である。残存する上半については内外面ともにナデ調整が施される。413は楕円区画帯が施された波状口縁の深鉢口縁部である。414～416は粗製深鉢、417～420は浅鉢である。417は狭い口唇部に縦位の短隆帯を4条一組で貼り付け、その間に連結三叉文を施している。また、同端部には赤彩が施されている。418も狭い口唇部に縦位隆帯を417と同様に4条一組で貼り付けている。隆帯間については、417とは異なり三叉文は1条の平行沈線に変わり、上部に刺突が施された円形貼付文をもつ。419は口縁端部に2条の平行沈線を、420は口縁部内面に2条の平行沈線を施す。421・422は鉢である。421は、口縁部から胴部にかけて3条の平行沈線を施し、沈線間に楕円区画帯を配置。上段の区画のみ連結三叉文が収まる。422は底部付近に三叉文を配し、沈線と列点文により縁取っている。

423は注口の口縁部付近か。人体文土器であると考えられる。以上、409～423は、すべてV2区からの出土資料である。443は鉢か。「へ」字状に内屈させた口縁端部の外面に1条の沈線を巡らし、その沈線の上下に縄文を施している。R1区河道からの出土資料である。後期の所産と考えられる。

424～431は御経塚式期の深鉢口縁部である。424は2条の沈線間に、三叉文が相対するように施している。425は入り組むように配置された三叉文の一部が平行沈線化し、口縁部を巡っている。426は波頂部に三叉文を施し、周囲を沈線で縁取っている。頸部には2条の平行沈線を巡らし、波頂部の三叉文と縦位置を合わせるように沈線に連続する菱形文が施されており、その内部は抉られている。また、八日市新保式段階にみられた頸部内面の段差は認められず、1条の凹線を巡らしている。なお、波頂部は山形あるいは台形を呈すると考えられるが、頂端部を失っているため詳細な形状は不明である。427は波頂部下に内部を抉った三叉文を配し、周囲を沈線で縁取っている。内面にも外面同様の内部を抉った三叉文が配されており、内外面いずれも三叉文の中心部を通るように穿孔されている。428は口縁部形状に沿わせるように上部に、口縁下部にもそれぞれ2条の平行沈線を配し、口縁下部沈線間には列点の他、頸部沈線よりやや幅広の平行沈線を施している。また、無文化した頸部付近に2条の平行沈線を配し、沈線間には上と同様にやや幅広の沈線を配している。429は玉抱き三叉文が施された深鉢口縁波頂部。430には山字状三叉文下に玉部分を穿孔した玉抱き三叉文が施されている。431は平行沈線間に横位の波状沈線が配置される深鉢胴部片と考えられる。

432・433はともに中屋式で、432は入組三叉文が施された深鉢胴部、433は口縁上部と口縁下部にそれぞれ2条の平行沈線が施された粗製深鉢の口縁部である。

434～439は下野式と考えられる。434は浅鉢か。下野式に特徴的にみられる眼鏡状隆帯文が施される。435・436はともに口縁部に2条の平行沈線を巡らし、沈線間に押引列点文を施す粗製深鉢である。437・438も粗製深鉢であり、いずれも口唇部に指頭圧痕が施される。また、437の底部底面には、スタレ状圧痕が認められる。439は浅鉢である。

440～442は深鉢底部である。440には網代圧痕が、441にはスタレ状圧痕がそれぞれ底面に認められる。442の底面にも縄圧痕らしき痕跡が認められるが、判然としない。

2 石器・石製品（第10～12図、図版5、第2表）

S26の石冠を除き、その他の15点はすべて打製石斧である。S19とS21を除く13点はいずれも遺構から出土した資料であるが、すべて弥生時代以降と認識されている遺構からの出土資料である。出土調査区については、A1区とB2区がもっとも多く各3点が出土しており、その他の9点はA3区、E区、F区、M3区、Q1・2区、R1・2区、S3区の9調査区において各1点という内訳になっている。

先述のとおり、打製石斧以外の石器については弥生時代を扱う第3章で一括報告している。同章で報告の石鏃20点中4点は土器が集中したV2区出土資料であり、これらについては形状や大きさから縄文時代の資料である可能性が高いと考えている。この他、V2区以外で出土の石器にも、縄文時代に帰属する可能性の高い資料が数点認められる。以上の点から、本項で報告する資料以外にも、その他の石器を伴う可能性が十分に考えられるということを承知いただきたい。

（1）打製石斧（第10～12図 S11～S25）

平面形状別に短冊形と撥形の、大きく2種に分類できる。短冊形としたのは、S11～S15の5点である。S11のみ側縁部が直線的で、S12～S15はやや内曲する形状を呈する。S11は正面観左側縁の摩耗が顕著である。S12は基端が欠損している。S13は両側縁の括れ部からやや下部の摩耗が顕著である。刃部にも摩耗が認められるが、擦痕は確認できない。S14は、図示していないが両側縁の括れ部に強い

摩耗が認められる。刃部は使用により全体的に潰れている。S15の両側縁の括れ部にも摩耗が認められる。刃部から僅かに残る自然面にかけての部分に、使用による摩耗痕が顕著である。石材はS14のみ砂岩で、他4点は凝灰角礫岩である。基端を欠損しているS12については不明であるが、長さ12cm前後の小型品（S11・S12）と、20cm以上の大型品（S13・S14）に大別できよう。重量では小型品のS11が246gであるのに対し大型品は約800～1000gを量り、最大で約4倍の重量差があることが判る。

S16～S24は撥形とした。側縁部の平面形状に差異が認められ、S16、S17は基部から刃部に向かって側縁が直線的形状を、S18～S24については内曲する形状を呈する。使用に伴うとみられる痕跡については、S16は両側縁に、S17には両側縁の摩耗は顕著ではないものの、刃部の剥離痕から自然面の下端部にかけて、それぞれに摩耗痕が認められる。S18は両側縁とも括れより下部に摩耗が認められる。刃部も摩耗が顕著である。S19は、正面観右側縁の括れ部に摩耗が認められる。刃部には全体に摩耗が観察できる。S20は両側縁の括れ部の摩耗が顕著。刃部の自然面遺存部分には、摩耗と僅かではあるが擦痕が認められる。S21の刃部には摩耗痕が殆ど認められない。正面観刃部左側の大きな剥離痕は、破損により刃部の大部分を失った痕跡と考えられる。S22は両側縁括れ部と刃部全体に摩耗が確認できる。S23は刃部の大部分を失っているが、僅かに遺った部分に摩耗が認められる。S24については、刃部形状からは大きな破損は認められないものの、使用に伴うような摩耗痕は刃部には観察できない。S25は基端を残すのみであり、平面形状ならびに刃部形状は不明である。石材は、S16は砂岩、S21は凝灰岩質砂岩で、S17～S20、S22～S25の8点は凝灰角礫岩である。なお、撥形資料についても12cm前後の小型品（S17・S20）と、18cm以上の大型品（S16・S18～S24）に2大別できるかと思う。重量面でも、小型品が約300gであるのに対し大型品は約400～1000gを量ることから、先述の短冊形同様、撥形資料についても大型品と小型品との間に、最大約4倍の重量差のあることが窺える。

（2）その他石製品（第12図 S26）

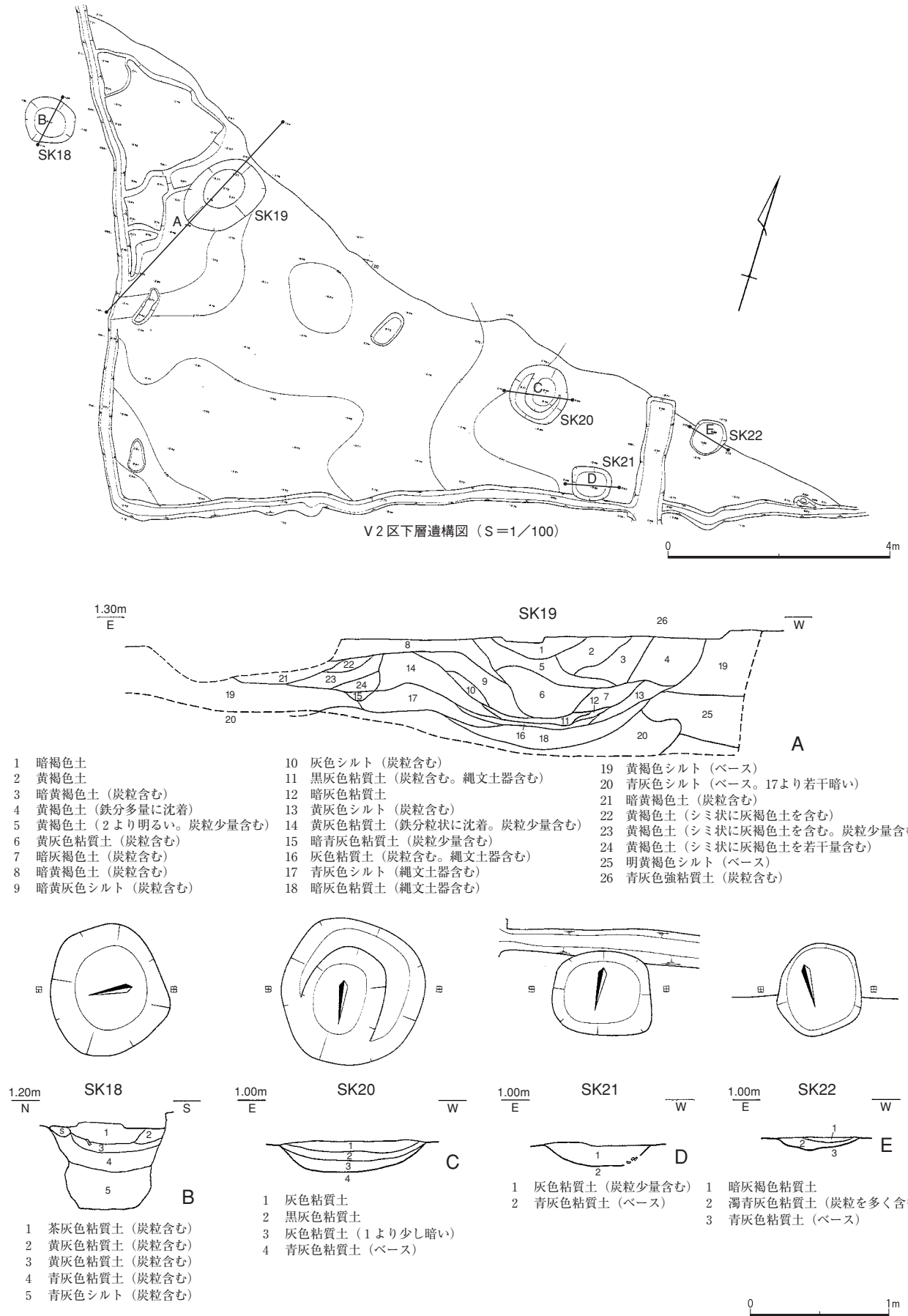
本項で報告対象となるのは、A2区から出土したS26の石冠のみである。石棒状の頭部をもち、基底部は側面観三角形、上面観は楕円形を呈する。石材は凝灰岩（砂岩質）である。

第3節 小 結

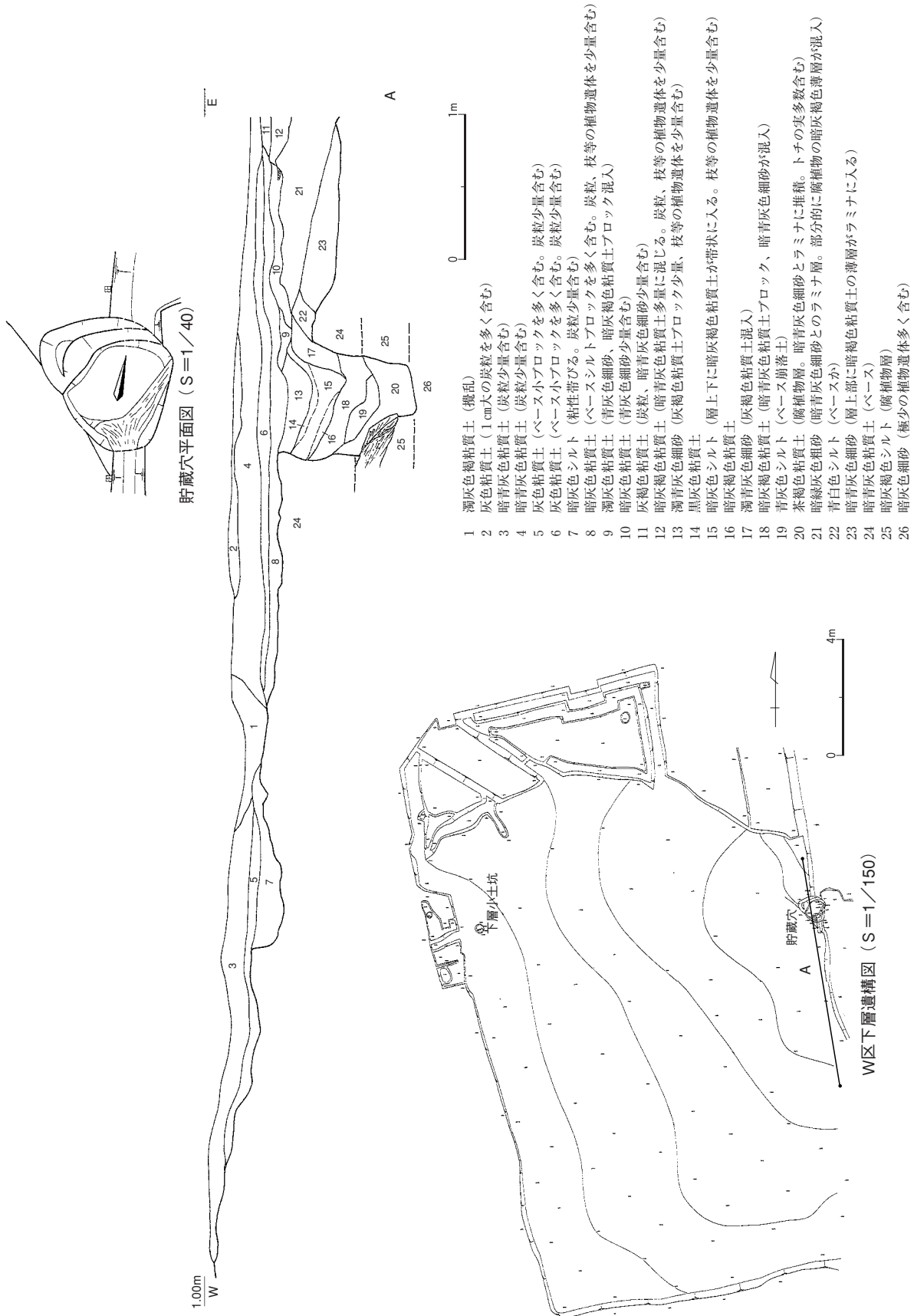
以上のように本遺跡で確認された縄文時代の遺構と遺物について報告した。遺構は貯蔵穴を中心とする僅かな土坑のみであり、遺物についても後期後葉の八日市新保式期の資料をもっとも多く確認している。これらの遺構・遺物はともに遺跡の北西端部のV2区に集中しており、分布の中心は当該区域にあることが窺われた。しかしながら、これらの資料内容からは活発な活動状況は想定されず、本調査区域が集落の縁辺部であることを物語る程度に過ぎない。以上から集落本体については、調査区外に求めざるを得ないものとする。

参 考 文 献

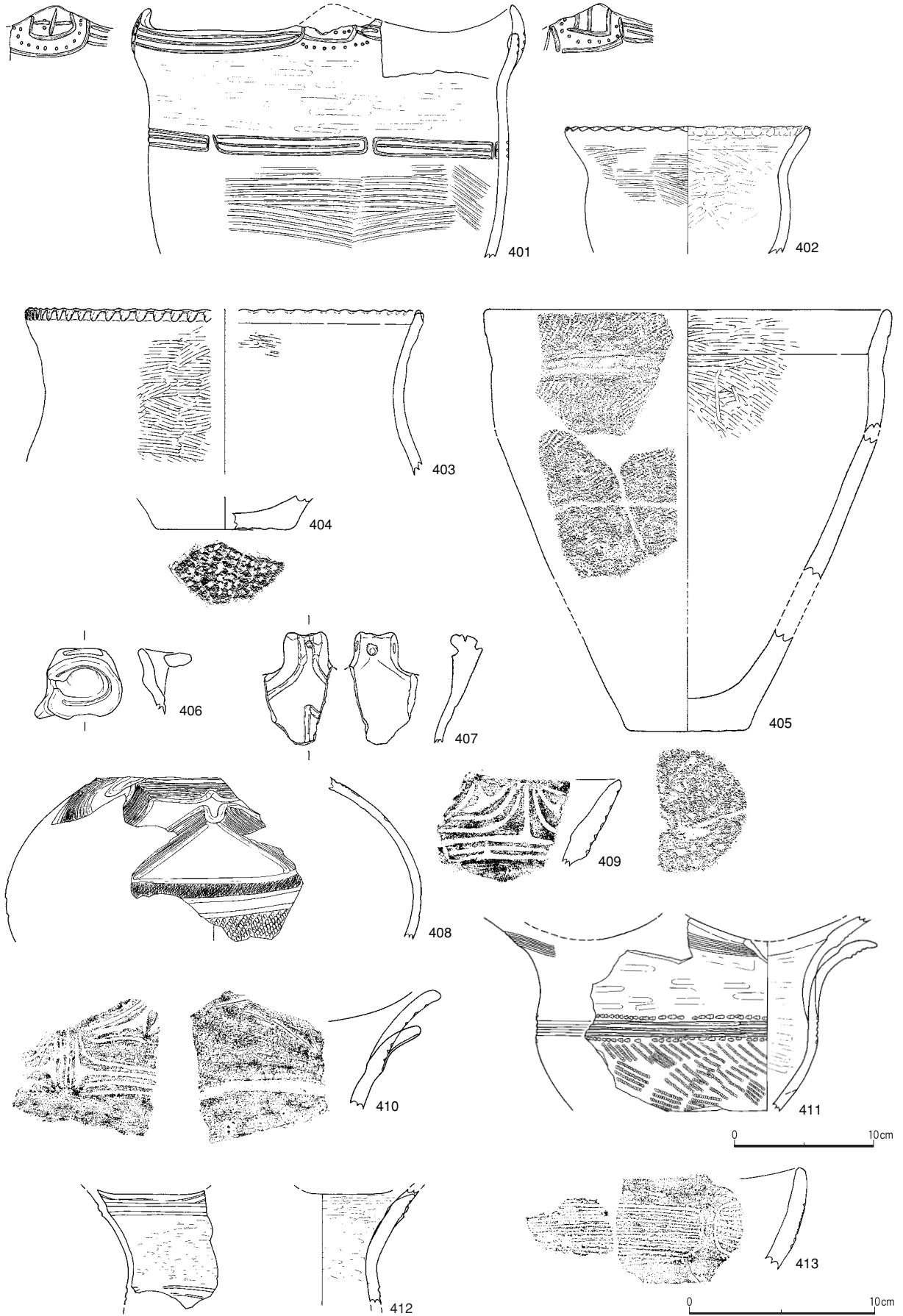
- 米沢義光 1986 「第17群土器 酒見式・井口I式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 173－174頁
久田正弘 1986 「第18群土器 井口II式期～第23土器群 下野式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 175－193頁
布尾和史ほか 2002 『金沢市 藤江C遺跡IV・V第1分冊 縄文時代編』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
※土器の所属時期については、当センター久田正弘氏より教示いただいた。



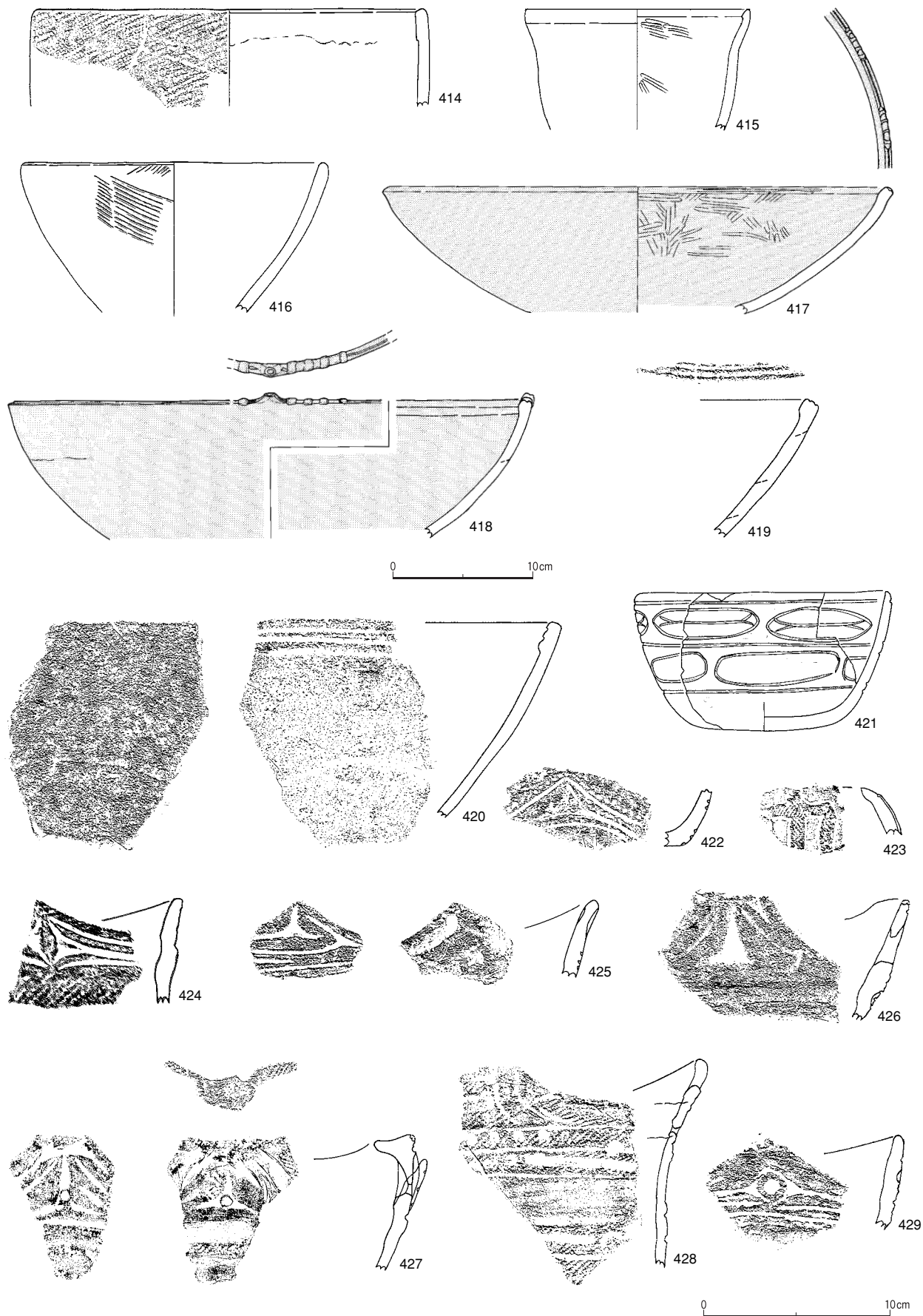
第5図 V2区下層実測図 (S=1/40・1/100)



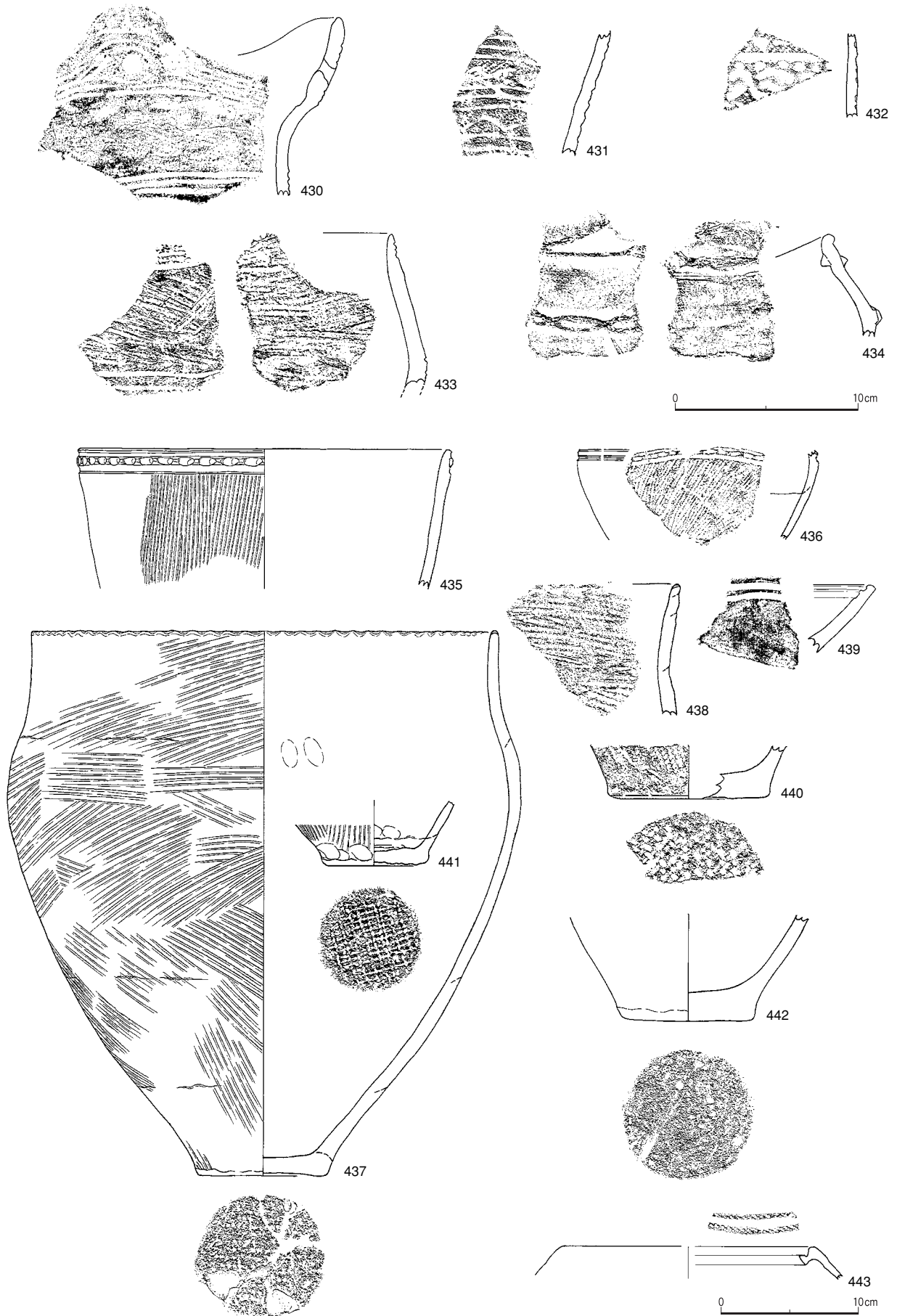
第6図 W区下層実測図 (S=1/40・1/150)



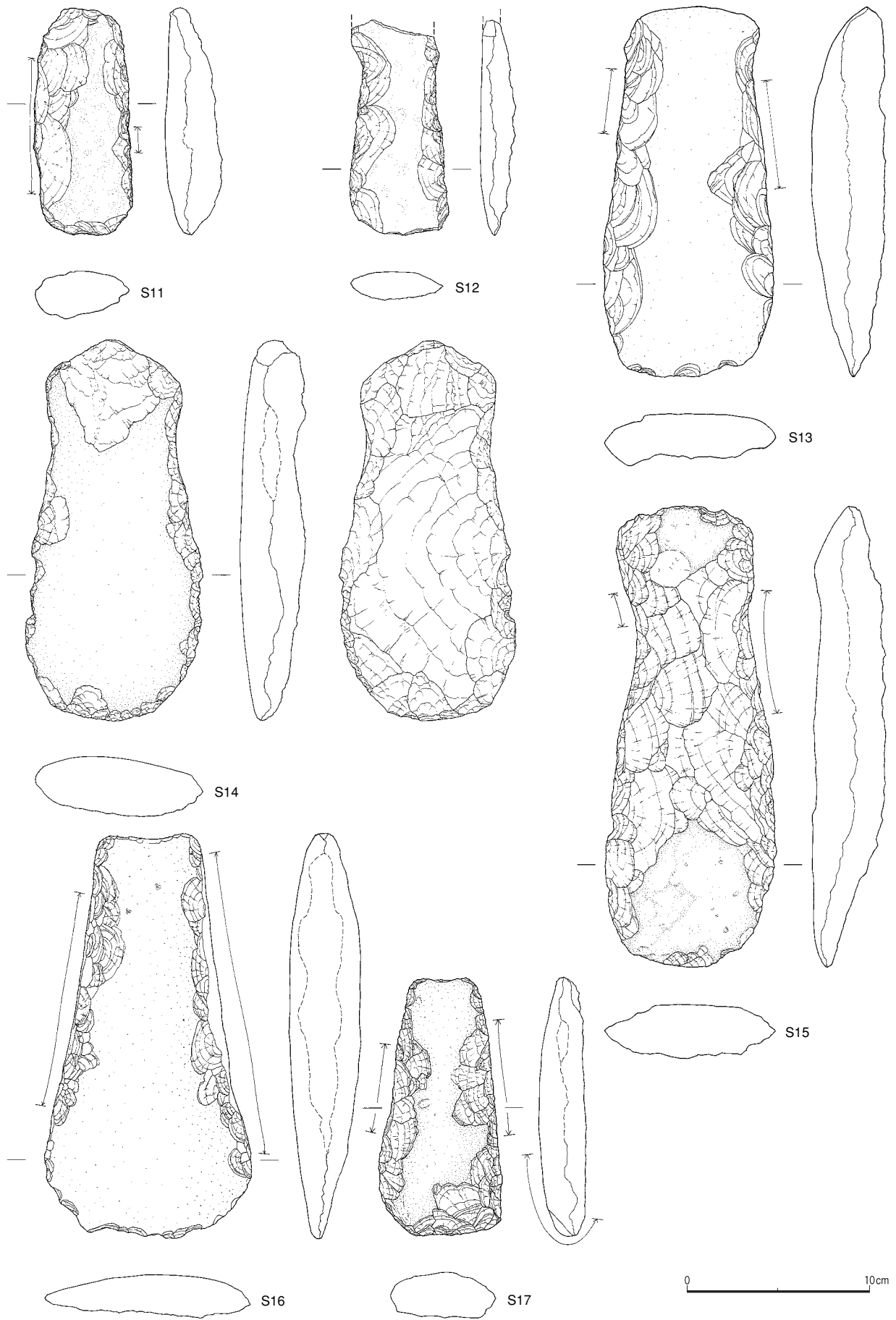
第7図 土器実測図1 (409、410、413はS=1/3、他はS=1/4)



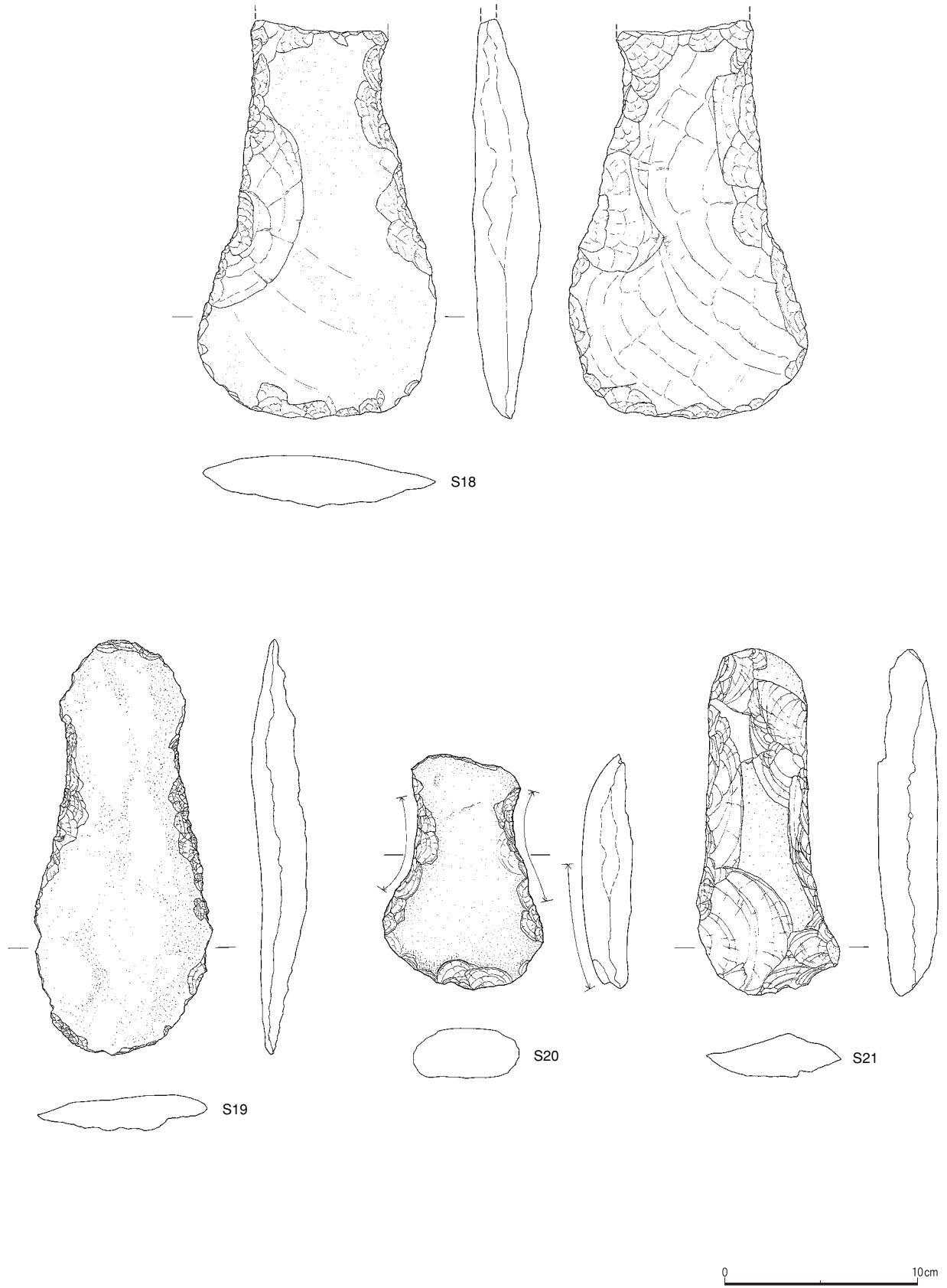
第8図 土器実測図2 (414~418、421はS=1/4、他はS=1/3)



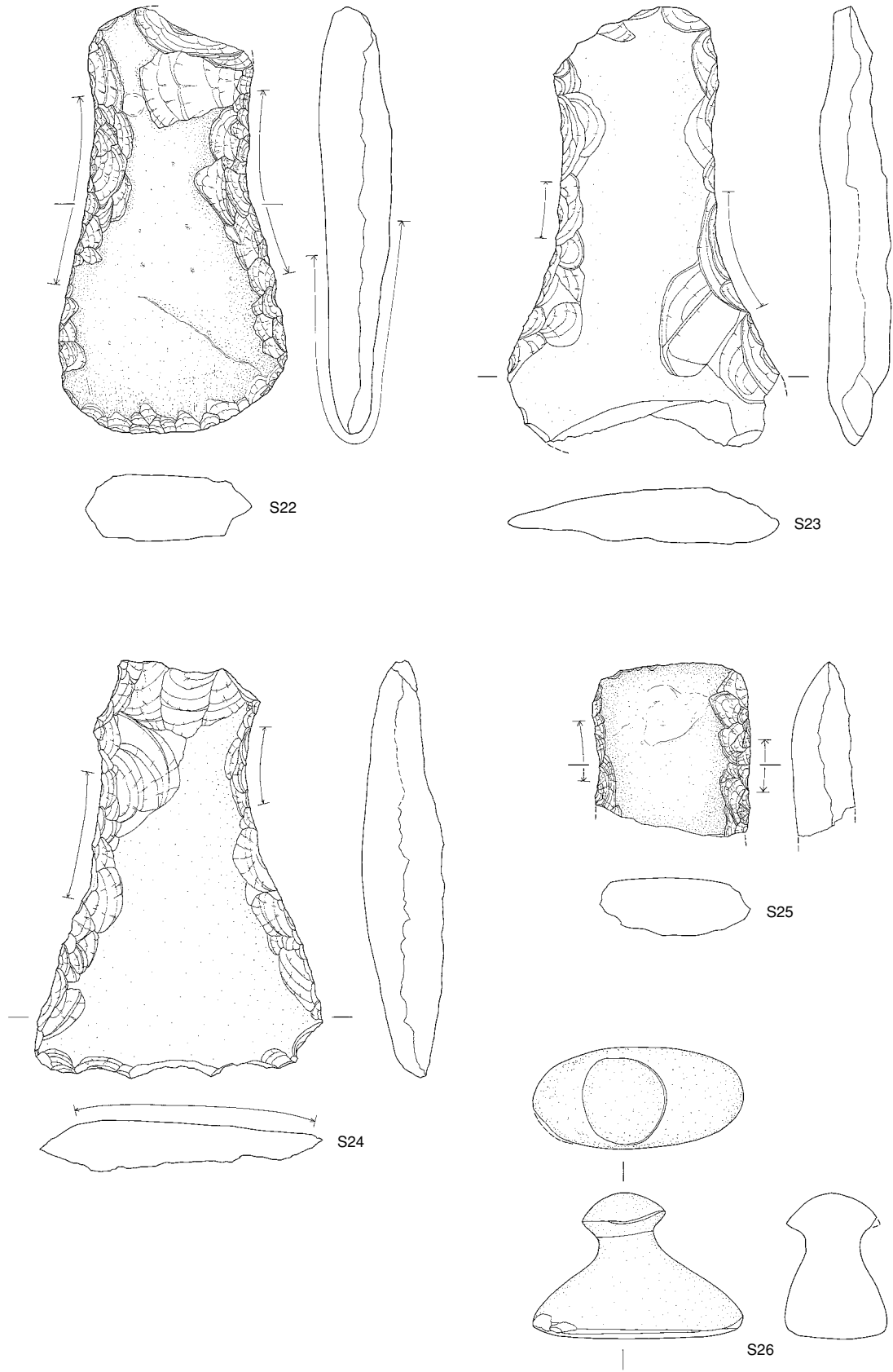
第9図 土器実測図3 (430~434、438~440は S = 1 / 3、他は S = 1 / 4)



第10図 石器実測図1 (S = 1 / 3)



第11図 石器実測図2 (S=1/3)



0 10cm

第12図 石器実測図3 (S = 1 / 3)

第1表 縄文時代土器観察表

報告番号	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	口径(mm)	器高(残存高)	底径	調整		文様	色調		胎土	焼成	実測班	ランク	実測番号
											内面	外面		内面	外面					
401	深鉢	02	V2	SK18	H19	畦外		(260)	(181)		ミガキ	ミガキ、条痕	沈線文、山字状三叉文、列点文、横円区画文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1~2mm大の粗砂粒多量を含む	良	03b1	A	11
402	深鉢	02	V2	SK19	H19		下層	(278)	(118.5)		ヘラミガキ	ヘラミガキ、指圧痕	口縁外部部キザミ	灰黄	灰黄	粗砂多量	良	03b1	B	34
403	鉢	02	V2	SK19	H-119		下層	168	(91)		ナデ	条痕	口縁外部部キザミ	褐灰	灰黄	粗砂多量	良	03b1	B	33
404	深鉢	02	V2	SK19	H-119				(2.3)		ナデ	ナデ	底部スダレ状圧痕	灰褐色	灰褐色	1~3mm大の砂粒少量含む	良	—	—	K-1
405	深鉢	02	V2	SK21	I20		下層	286	(303)		ヘラミガキ	縄文、ヘラミガキ		灰黄	にぶい橙	粗砂多量	良	03b1	A	9
406	深鉢口縁部加飾	99	B2	SD16	U19	1-3-a	3層						沈線文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂粒を多量含む	良	01t	C	429
407	深鉢	99	B2	SD16	U19	2-3-a	3層		(81)		ナデ		沈線文、刺突文	灰黄褐	にぶい黄橙	細砂粒、粗砂、礫を多量含む	良	01t	C	433
408	注口	99	A2	SD08	AC25	アゼ北	3層		(117)		ナデ			黄灰	黄灰、黒	粗砂多量を含む	良	01t	C	148
409	深鉢	02	V2			西部	検出面		(50)		ナデ		三叉文	灰白	灰白	細砂粒多く含む	良	03b1	D	169
410	深鉢	02	V2	SD35	H19						ミガキ	ナデ	三叉文、縦位短沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm前後の粗砂粒多く含む	良	03b1	D	154
411	深鉢	02	V2	SD33+SD33下	H19		縄文包含層		(138)		ミガキ	ミガキ、縄文	平行沈線、横位列点文	灰黄褐	にぶい黄橙	1mm前後の粗砂粒多量を含む	良	03b1	A	8
412	深鉢	02	V2	SX03	I20			(238)	(81)		ミガキ	ミガキ	平行沈線	灰黄褐	にぶい黄橙	粗砂多、赤色粒、海綿骨針	良	03b1	D	164
413	深鉢	02	V2				検出面		(57)		ナデ	ナデ	横円区画文、平行沈線	灰黄褐	灰黄褐	粗砂粒、2・3mmの礫少量含む	良	03b1	D	168
414	深鉢	02	V2	SX03	I20			(276)	(70)		ヨコナデ	縄文		にぶい橙	にぶい橙	粗砂多	良	03b1	D	162
415	深鉢	02	V2			西部	検出面	158	(86)		ミガキ			灰黄褐	灰黄褐	海綿骨片、砂礫多く含む	良	03b1	B	35
416	深鉢	02	V2	SX03	I20			(210)	(107)		ナデカミガキ	条痕		にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多、赤色粒	良	03b1	D	163
417	浅鉢	02	V2		H19		検出面	353	(90)		ミガキ	ナデ	口縁端部に縦位短隆帯、連結三叉文	褐灰	にぶい橙	粗砂含む、海綿骨針含む	良	03b1	B	36
418	浅鉢	02	V2	SD33	H19		検出面	(374)	(103)		ナデ	ナデ	口縁端部に縦位短隆帯、沈線、円形粘付文	浅黄橙	にぶい黄橙	微細~2mm大の粗砂多量を含む、赤色粒含む	良	03b1	C	158
419	浅鉢	02	V2	SD41	I19-20				(73)		ナデカ	ナデカ	口縁端部に平行沈線	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm前後の粗砂粒多量を含む	良	03b1	D	156
420	浅鉢	02	V2	SD41	I19-20						ナデカ	ナデカ	口縁内面に平行沈線	にぶい黄橙	にぶい橙	微細~1mm大の粗砂粒多量を含む	良	03b1	D	155
421	鉢	02	V2			西部	検出面	(136)	97		ミガキ	ミガキ	平行沈線、横円区画文、連結三叉文	灰黄	灰黄	1mm前後の粗砂粒多量を含む	良	03b1	A	10
422	鉢	02	V2	SD33	H19						ミガキ	ナデ	平行沈線、列点文、三叉文	浅黄橙	浅黄橙	1mm前後の粗砂粒含む	良	03b1	D	157
423	注口?	02	V2		H19		検出面		(32)		ナデ		人体文	にぶい黄橙	にぶい橙	粗砂粒多く含む	良	03b1	D	171
424	深鉢	02	V2			西部	検出面		(55)		ナデ	縄文、ナデ	平行沈線、三叉文			粗砂粒多く含む	良	03b1	D	170
425	浅鉢	02	V2	SD41	I19-20						ナデ	ミガキ	平行沈線、三叉文	灰黄褐	灰黄	1~2mm大の粗砂粒多量を含む	良	03b1	D	159
426	深鉢	2	N2	SD01	I16				(7.4)		ミガキ	ミガキ	平行沈線、三叉文、菱形文	黄灰色	灰褐色	細砂、粗砂少量含む	良	—	—	K-2
427	深鉢	02	V2	SD41	I19-20						ミガキ	ナデ	三叉文、円形刺突文	にぶい橙	にぶい黄橙	1mm大の粗砂粒多量を含む	良	03b1	D	158
428	深鉢	02	V2		H-120		下層検出面		(114)		ナデ	縄文	穿孔、短沈線、円形刺突文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂粒多く含む	良	03b1	D	165
429	深鉢	02	V2		H-120		下層検出面		(51)		ナデ		玉拍三叉文、平行沈線	浅黄橙	にぶい黄橙	粗砂粒、砂礫多く含む	良	03b1	D	166
430	深鉢	02	V2		H19		検出面		(98)		ナデ	ナデ	山字状三叉文、玉拍三叉文、平行沈線			粗砂粒含む	良	03b1	D	167
431	深鉢	01	R2	SK36	Z18				(79)		不明	縄文、ナデ	平行沈線、縦位波状沈線	褐灰	灰黄褐	粗砂含む	良	03b2	D	102
432	深鉢	01	T	SE12	Z26				(38)		ナデ		入組三叉文、列点文、平行沈線	浅黄	灰黄	1mm弱の粗砂多く含む	良	03b2	D	20
433	深鉢	02	M3	SD46	J24		灰1		(82)		条痕	条痕	平行沈線	にぶい黄橙	灰褐	砂礫多く含む	良	03b1	B	5
434	浅鉢?	02	M3	SD46	J24		茶		(63)		ナデ	ナデ	眼鏡状隆帯文	灰褐	褐灰	砂礫多く含む	良	03b1	B	7
435	深鉢	99	F	SD29	J22			268	(102)		不明	条痕	平行沈線、押し列点文	灰褐	灰黄褐	0.5mm程度の砂粒と海綿骨片を含む	良	02s2	A	7
436	深鉢	02	M3	SD46	J24		灰2		(66)		ナデ	条痕	平行沈線、押し列点文	黒褐	黒褐~にぶい黄橙	粗砂粒多く含む	良	03b1	B	6
437	深鉢	02	N2		P24		検出面一括	(336)	397	92	ナデ	条痕、ナデ	口縁外部部キザミ	褐灰	にぶい橙	1~2mm大の粗砂粒多量を含む、3~7mm大の礫多量を含む	良	03b1	B	25
438	深鉢	01	O2	SD04	W23		下層		(71)		条痕	条痕	口縁外部部キザミ	灰白	灰黄褐	粗砂多量、海綿骨針含む	良	03b2	D	259
439	浅鉢	02	M3	SD46	J24		茶		(44)		ミガキ	ミガキ	口縁内面に平行沈線	褐灰	灰黄褐	粗砂粒多く含む	良	03b1	B	12
440	底部	99	C2	SK33	X16				(39)	116	ナデ	縄文	底部網代圧痕	灰黄褐	にぶい橙	粗砂多く含む	良	02s2	D	155
441	底部	02	M3	SD46	J24		灰1	(116)	(48)	76	ナデ		底部スダレ状圧痕	灰白	にぶい黄橙	礫多く含む		03b1	D	2
442	底部	02	V2	SD41	I19-20				(77)	94	ナデ	ナデ	底部縄圧痕?	にぶい黄橙	にぶい橙	1mm前後の粗砂粒多量を含む	良	03b1	D	153
443	口縁部	01	R1	河道					(182)	(23)	ナデ	ナデ	口縁端部に縄文、沈線	灰黄褐	灰黄褐	細砂多量多く含む	良	03b2	C	204

第2表 縄文時代石器・石製品観察表

報告番号	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	平面形状	種別	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	実測班	ランク	実測番号
S11	打製石斧	99	A1	SD51	AA28、AA・AB29	⑦		短冊形	凝灰角礫岩	125.0	55.0	31.0	246	02s石	石全	27
S12	打製石斧	99	A1	SD02	AB28			短冊形	凝灰角礫岩	(118.0)	(53.0)	(20.0)	(140)	02s石	石全	32
S13	打製石斧	99	F	SD13	K24			短冊形	凝灰角礫岩	203.0	93.0	40.0	944	02s石	石全	28
S14	打製石斧	01	Q1	SD09	AG18	1		短冊形	砂岩	209.0	97.0	31.0	8129	03m1	石	52
S15	打製石斧	99	A2	SD16	U18・19	2-3	暗青灰砂層	短冊形	凝灰角礫岩	253.0	93.0	40.0	1069	02s石	石全	29
S16	打製石斧	99	B3				側溝	楕形	砂岩	222.0	114.0	40.0	1050	02s石	石全	1
S17	打製石斧	02	S3	SD07	T15、U16		裏側(SD08含む)	楕形	凝灰角礫岩	141.0	67.5	26.0	317	03b1	石全	15
S18	打製石斧	01	Q2	川跡	AC23	SE		楕形	凝灰角礫岩	203.0	121.8	35.5	877	03b1	石	57
S19	打製石斧	99	B2	SD16	U18・19	2-3-a	暗青灰砂層	楕形	凝灰角礫岩	216.0	92.0	28.0	498	02s石	石全	30
S20	打製石斧	02	M3	SD46	K25		黒	楕形	凝灰角礫岩	122.0	83.5	26.0	269	03b1	石全	8
S21	打製石斧	99	E	SD03	T29			楕形	凝灰質砂岩	180.0	74.0	31.0	394	02s石	石全	6
S22	打製石斧	01	R1	SD18	AA19			楕形	凝灰角礫岩	207.0	110.0	35.0	851	03b2	石	6
S23	打製石斧	99	B2	SD16	U18・19	3-1-a	暗青灰砂層	楕形	凝灰角礫岩	(212.0)	(132.0)	(35.0)	(928)	02s石	石全	31
S24	打製石斧	99	A1	SD51	AA28、AA・AB29	⑤		楕形	凝灰角礫岩	203.0	140.0	40.0	1005	02s石	石全	34
S25	打製石斧	01	R2	SK31	Y19			分類不可	凝灰角礫岩	(85.0)	(76.5)	(31.0)	246	03b2	石	7
S26	石冠	99	A2	SD08	AC24・25、AD25、AE25	アゼ北	赤褐~暗灰沖	—	凝灰岩(砂岩質)	72.0	102.0	50.0	330	02s2	石全	15

第3章 弥生時代の遺構と遺物

第1節 概要

報告する遺構は竪穴系建物跡7棟、掘立柱建物跡1棟、井戸跡5基、土坑76基、溝21条、河道1本である。弥生時代の遺構覆土は黒褐色系の色調を呈する特徴があり、他時代の遺構と区別する際の目安となった。報告に際して遺物の出土が確認された遺構を中心とするが、前述の理由から遺物の出土は少なくとも当時代の遺構と判断可能なものは本章に含めた。また、記述は調査区全体を南から北へ貫流する古墳時代～古代の大溝（DN5・6、DS8）を境に南西部と北東部に大別して、南西から北東に向け調査区毎とした。

報告する遺物は土器364点、土製品10点、石器65点、剥片17点、管玉未成品4点、玉類4点、木器2点である。時代が複合する本遺跡においては、弥生時代以外の遺構に混入した遺物も多くあり、当時代に属すると判断できたものは本章に収録した。

調査で確認された弥生時代の遺構・遺物は古墳時代などに比べて質量共に多いとはいえない。しかし、その分布状況から調査区全体をみると、南西部のC2区、S1～3区、R2区周辺と北東部のF区、M3区、N2区、V1・2区周辺の2地点に大きなまとまりがある。南西部の遺構ではS1区、C2区、C3区、R2区において土坑を多く検出している。その他にはR2区北側で竪穴系建物跡、S1区で掘立柱建物跡、Q1区、Q2区、S1区では井戸跡が少数ながら小範囲にまとまってみられた。北東部の遺構には蛇行しつつ東西方向に流れる河道（DN9）を挟んで両岸に竪穴系建物跡、土坑、溝などの遺構がみられ、本章で図示した土器の3分の1はこの河道からの出土である。

時期については土器を基として、出土量の多い中期を前半と後半に分け、縄文晩期末～前期、後期、終末期を加えて5区分とした。

第2節 竪穴系建物跡・掘立柱建物跡

南西部

S H36（遺構：第15図、図版6）

W18・X18区に位置する。環状を呈するR2区SD03を建物の周溝に想定しているが、東半分はI区SD16によって削平されているため定かではない。他の建物に比べ径が5mと小さいので壁溝の可能性も考えられようか。竪穴状の掘り込みや柱穴は確認していない。

S H37（遺構：第16図、図版6）

主にV17区に位置する。S3区SX03・SX01、C2区SD13、R2区のSD02を建物の外周溝に想定している。外周溝は幅70cm前後、深さ15cm前後を測り、径約18.8mに復元されるが、東半分がB3区SD16によって削平されている。竪穴状の掘り込みや柱穴は確認していない。

SB105（遺構：第15図）

AC19区に位置する掘立柱建物跡である。1×1間または2×1間（320×230cm）の側柱建物である。主軸はN21°Eを指す。古墳時代の建物と主軸方位が異なることから弥生時代に想定した。

北東部

SH23（遺構：第15図）

W30区に位置する。弧状を呈するT区SD06を建物の外周溝に想定しているが、中心部が調査区外にあるため詳細は不明である。

SH41（遺構：第17図、図版6）

主にM24区に位置する。N2区SD29、M1区SD08、F区SD16・SD20を建物の外周溝に想定している。外周溝の幅は35～230cmと開きがあるが、径18mと推定できる。竪穴状の掘り込みや柱穴は確認していない。遺物はM1区SD08から出土しているが、小片のため図化していない。

SH42（遺構：第18図、図版6・7 遺物：第20・53・54・67図、図版30、39、47）

主にH21区に位置する。V1区SD10・15・18・19・20・24を外周溝に想定しており、13m規模の建物と推定している。外周溝の幅は40～90cm、深さはSD18・19の一部で30cm以上を測るが、他は10cm前後である。SD18とSD19やSD15と北側の溝では外周溝が重複しており、建て替えまたは外周溝の掘り直しが行われた可能性がある。切りあいから内側のSD19が新しい。柱穴として想定できる配置は六角形状になるが、柱穴の間隔は2.2～3.2m、深さは7～50cmとばらつきがある。

遺物は外周溝から出土した土器501～507、701～705と石器S64・S65を図示した。501の甕は口縁の内面端に綾杉状文、外面端の下部に刻みをいれる。505の無頸壺は2個1単位の穿孔がある。507の壺は器面の剥離が著しい。かろうじて残りの良い胴部上位に縦方向の綾杉状文がみられる。ハケ調整後に先の尖った施文具で縦に線を引き、その横に上向きの綾杉状文を施文する。同一個体とみられる別の体部片にも縦方向の綾杉状文がみられる。しかし前者に比べややサイズが大きいうえに施文具も異なるようである。S64の凹石は長軸線上の中心部に2箇所凹みの凹みが表裏にあり、凹みの周囲には敲打痕がみられる。また、側面も使用されており、右側は摩り痕が顕著で、もう片方は凹み2箇所と敲打痕がみられる。S65はSD15から出土（図版6）した軟質の凝灰岩（砂岩質）でつくられた磨製石包丁である。正面は乳白色を呈し、背面は灰色の自然面を残す。元は半月形を呈していたとみられるが、半分ほどを欠損する。紐孔は両面からの穿孔である。時期は中期後半に比定できよう。

SH43（遺構：第19図）

主にG23区に位置する。V2区SD15・16を建物の外周溝に想定している。外周溝の幅は40～60cm、深さは5～10cmほどである。径は約10mと想定している。竪穴状の掘り込みや柱穴は確認していない。

SH44（遺構：第19図、図版7 遺物：第20図、図版30）

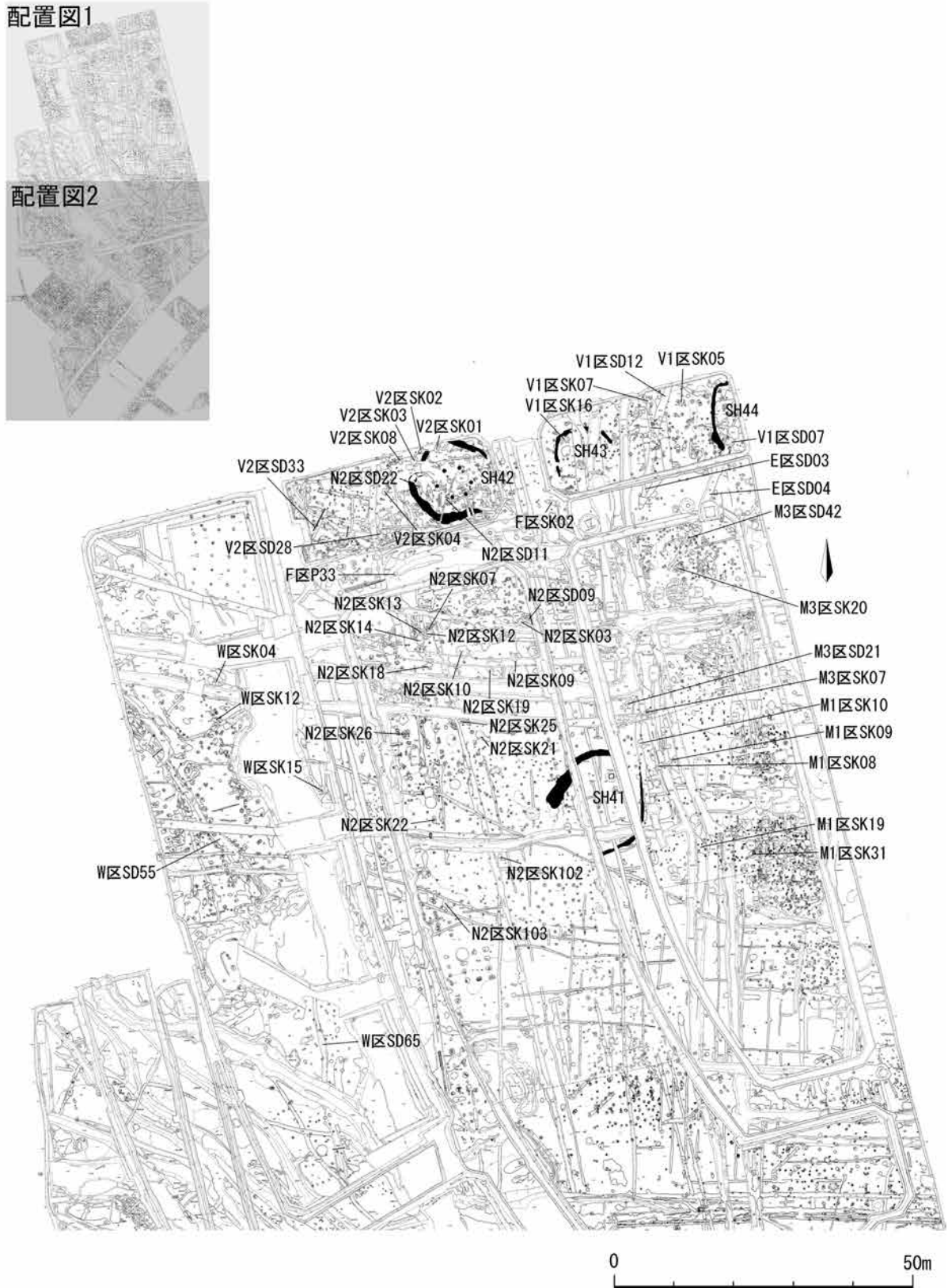
主にG26区に位置する。V2区SD01を建物の外周溝に想定している。外周溝の幅は45cm前後、深さは20cm前後である。径は約13.6mと想定している。竪穴状の掘り込みや柱穴は確認していない。

遺物は508と509の2点を図示した。508は有段疑凹線の甕。509は高杯の脚部で裾と棒状部の境に明瞭な段をもち、その位置に透かし孔がある。時期は終末期に比定できよう。

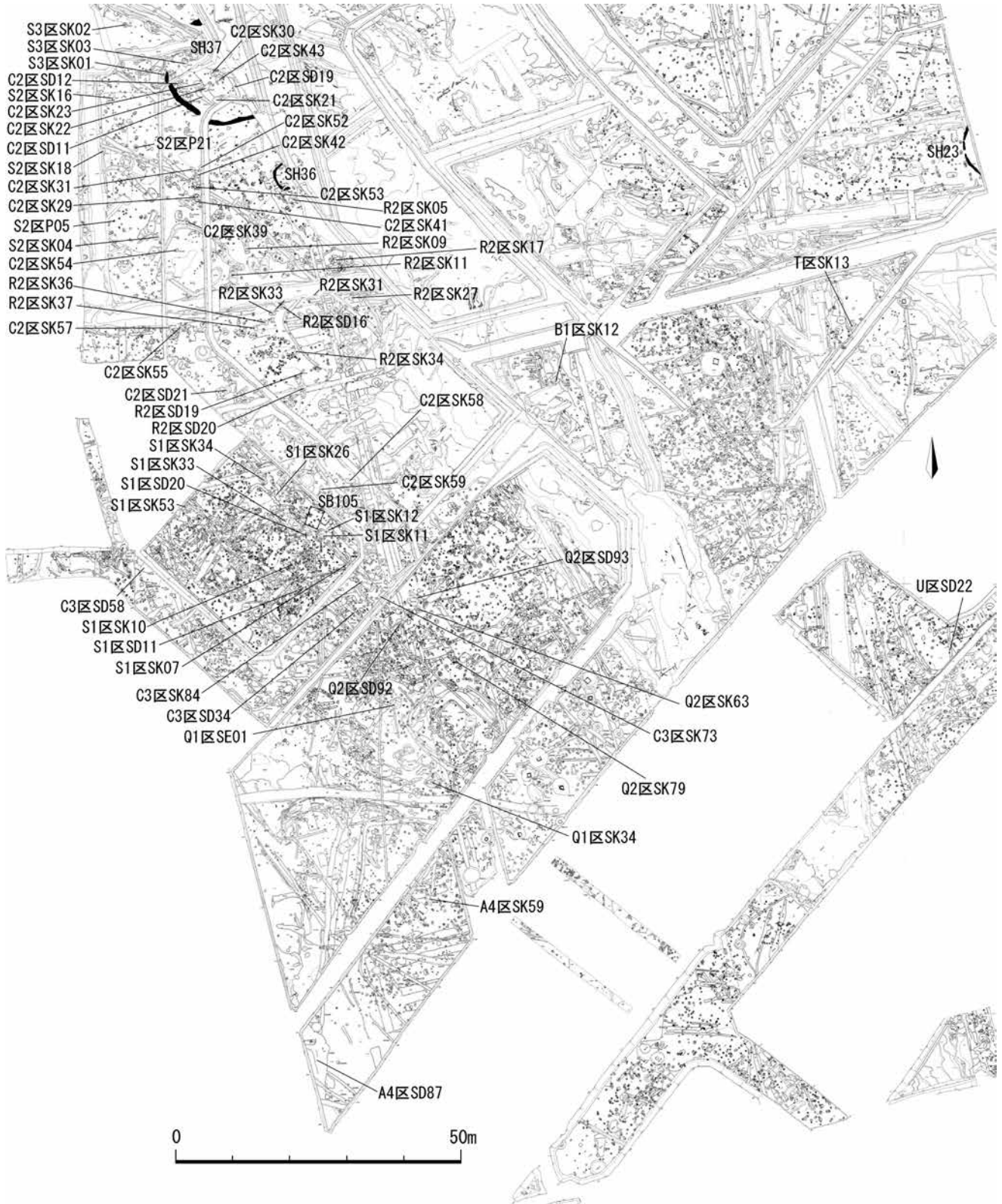
竪穴系建物跡の補足としてW区のJ16区に位置するSD10は、西側に隣接する金沢市教育委員会調査区で検出された溝とつながる可能性がある。詳細は市教委の報告を待たねばならないが、建物周溝としての可能性を指摘しておきたい。

配置図1

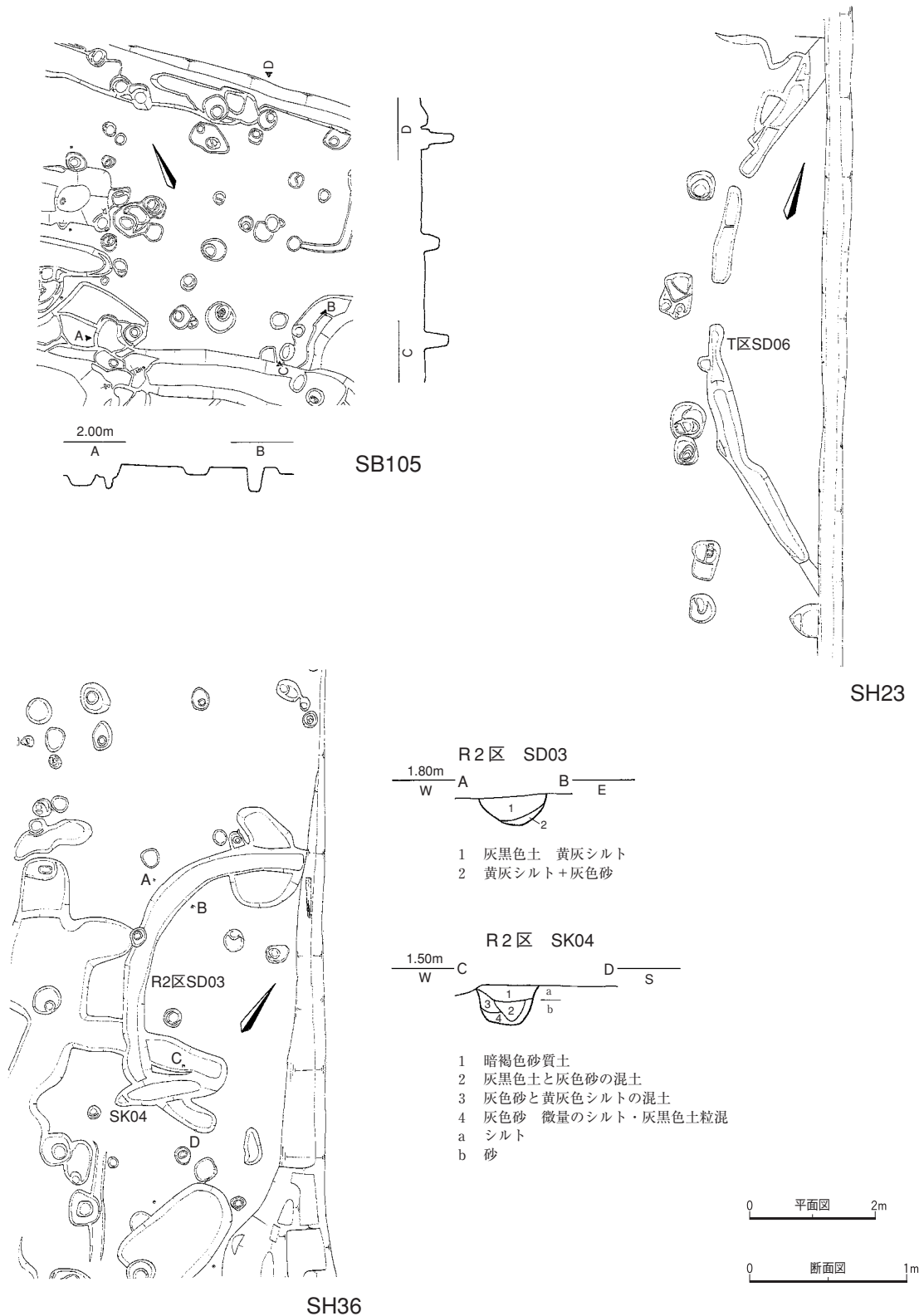
配置図2



第13図 弥生遺構配置図1 (北東部) (S = 1 / 1,000)



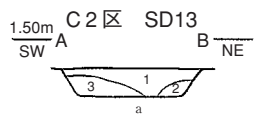
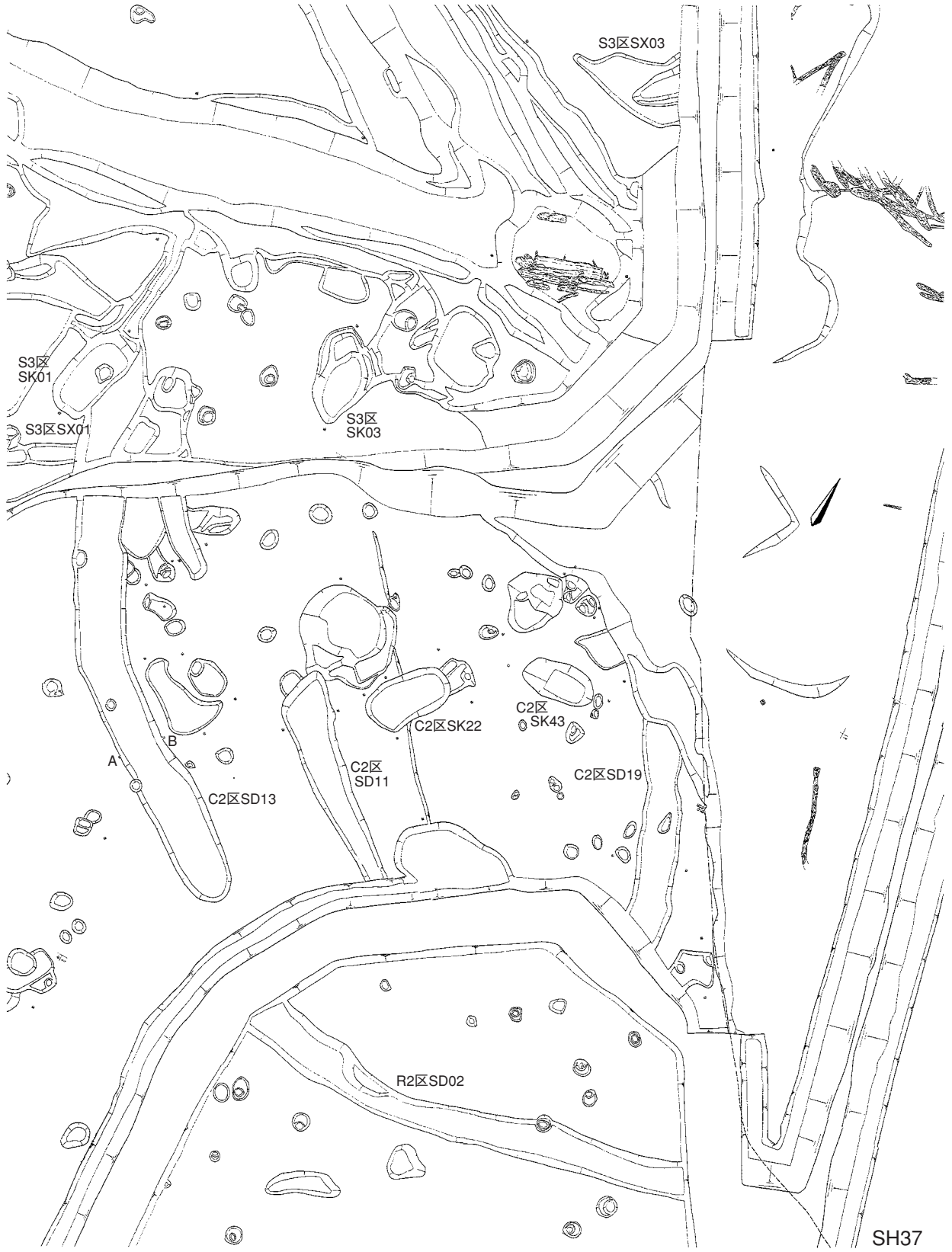
第14図 弥生遺構配置図2 (南西部) (S = 1 / 1,000)



第15図 SB105、SH23・36実測図 (S = 1/100・1/40)

第3表 弥生掘立柱建物一覧

建物番号	グリッド	長軸方位	補正方位	長辺間規模	短辺間規模	長辺長	短辺長	構造	地区	構成遺構	実測遺物
SB105	AC19	24E		2	1	320	230	側柱	S1	P 95、P 122	

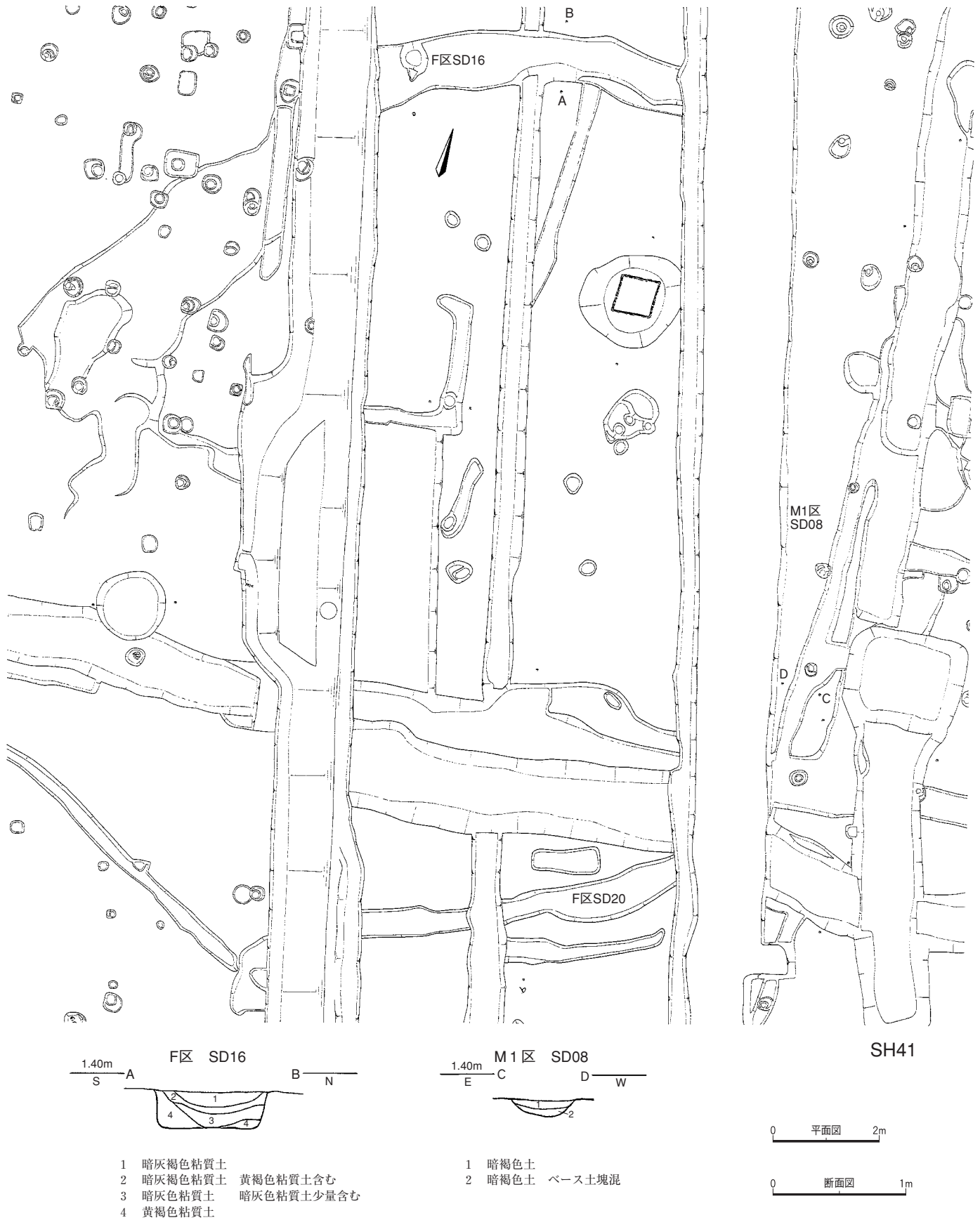


- | | |
|----------|------------------|
| 1 暗灰粘土 | 炭粒若干含 |
| 2 暗灰黄シルト | 1層と地山の間層 |
| 3 黄灰シルト | 地山に1層が若干混入したような層 |
| a 黄灰砂 | |

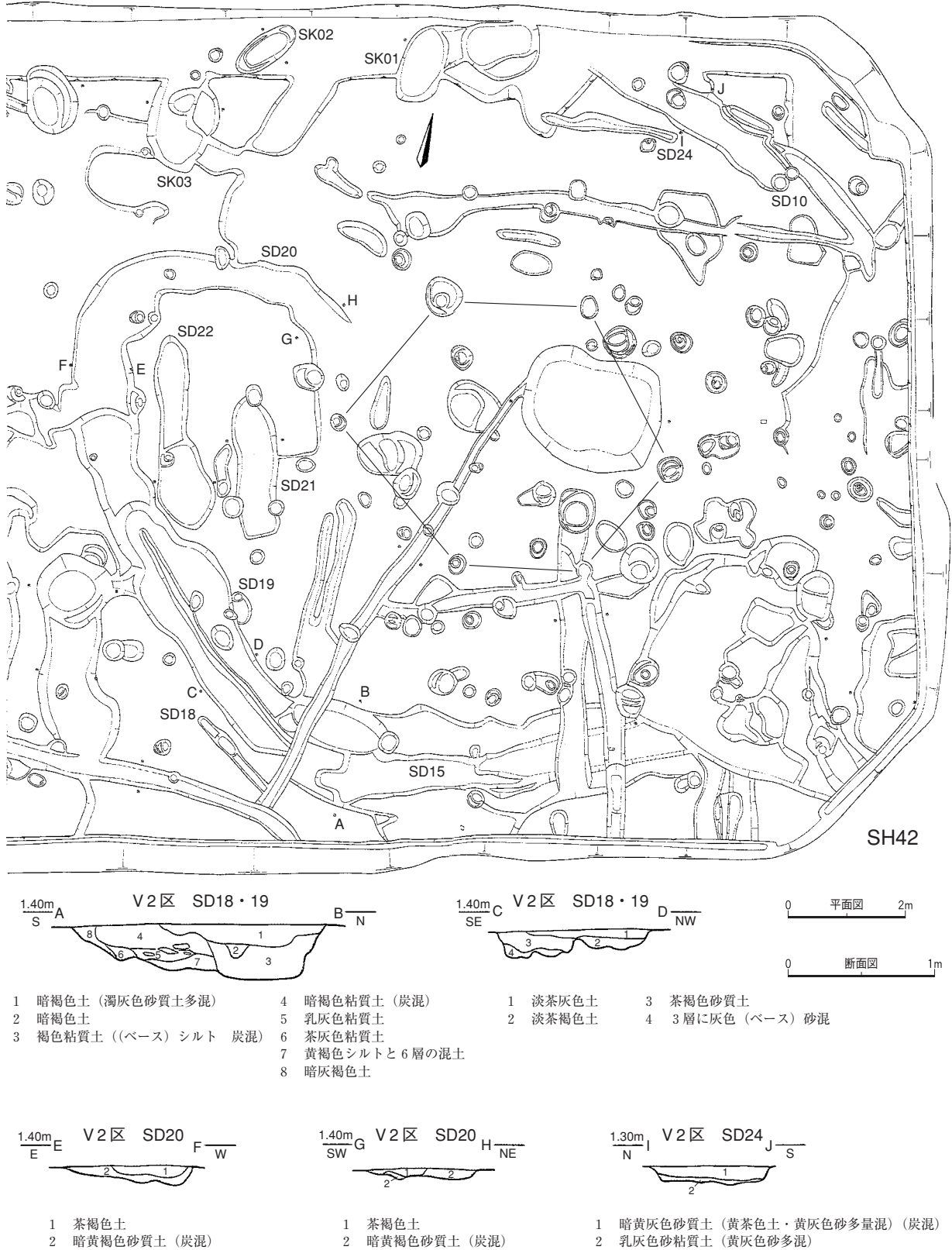
0 平面図 2m

0 断面図 1m

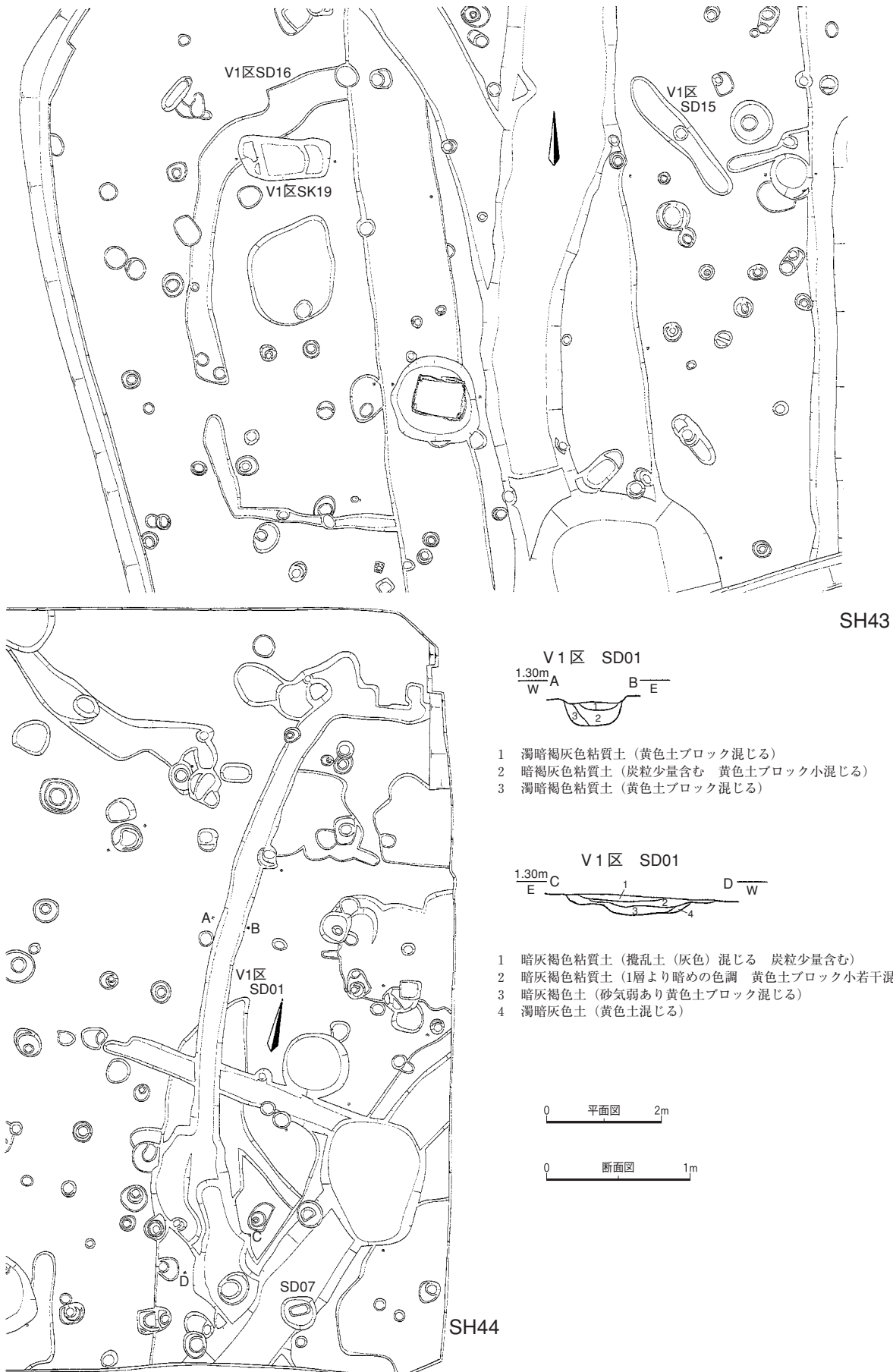
第16図 SH37実測図 (S = 1/100 · 1/40)



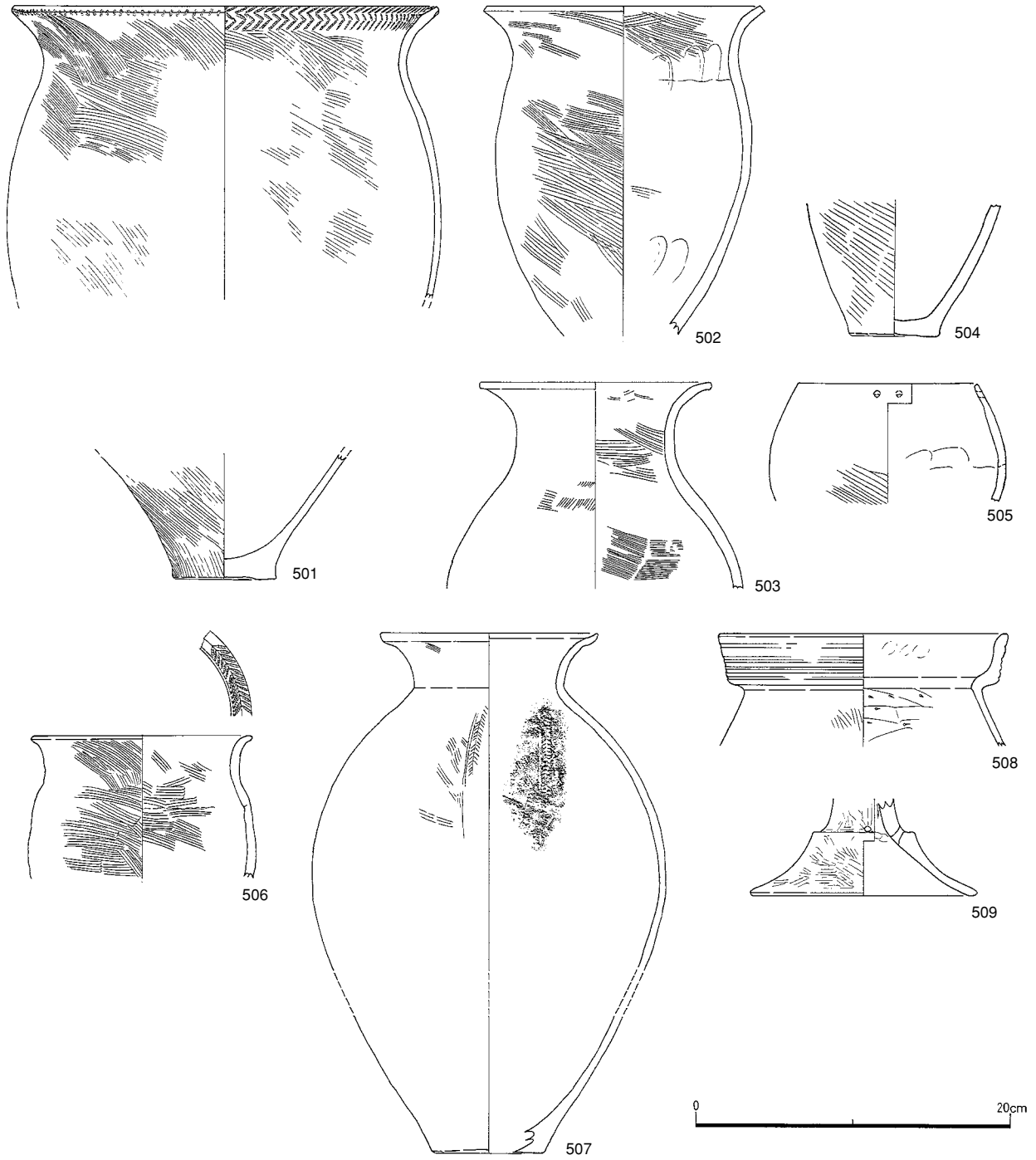
第17図 SH41実測図 (S = 1/100 · 1/40)



第18図 SH42実測図 (S = 1/100 · 1/40)



第19図 SH43・44実測図 (S = 1/100・1/40)



第20図 竪穴系建物跡出土土器実測図 (S = 1 / 4)

第4表 弥生竪穴系建物跡一覧

建物番号	グリッド	全形プラン	全形規模	柱穴配置	柱穴間距離	地区	周溝	周溝実測遺物	柱穴	柱穴実測遺物	備考
SH23	W30	円?	(18.8m)			T	SD06				
SH36	W18・X18	円?	(5m)			R2	SD03				
SH37	V17周辺	円	(18.8m)			S3	S X 01・03				
						R2	SD02				
						C2	SD13				
SH41	M24周辺	円	18m			N2	SD29				
						M1	SD08				
						F	SD16・20				
SH42	H21周辺	円	13m	六角形	2.2~3.2m	V2	S D 10・15・18・19・20・24	501~507、701~705、S 64・65			
SH43	G23周辺	円?	(10m)			V1	S D 15・16				
SH44	G26周辺	円?	(13.6m)			V1	SD01	508、509			

第3節 井戸跡

南西部（遺構：第21図、図版8 遺物：第35図、図版30）

Q1区SE01 AG20区に位置する。長軸195×短軸152cmの楕円形を呈し、深さ78cmを測る。

遺物は511を図示した。鉢か器高の低い壺と思われる。口縁部下には、焼成前に穿たれた2個1単位の紐孔があるので蓋が付くのだろう。後期頃に比定できようか。

Q2区SK79 AF21区に位置する。長軸約150×短軸115cmの楕円形を呈し、深さ90cmを測る。底の近くでは、短い板状の木材とほぼ完形の甕が横になった状態で出土した。土坑の深さから井戸跡と考えている。

遺物は510の甕を図示した。口縁端部は面取りされて中央部分が凹み、1本凹線文風になっている。胴部の最大径は中央より上位にある。時期は中期後半に比定できよう。

S1区SK07 AD19区に位置する。調査区端にあるため東側半分を調査していない。また、北東部分の一部が古墳時代の溝によって切られている。検出した平面形から径130cmほどの円形を呈するものと想定している。深さは75cmを測り、井戸跡と考えている。

遺物は512と513の壺を図示した。512は口縁端部に縦方向の刻みをいれる。513は口縁端部に刻みをいれ、内面に斜行短線文を施文する。時期は中期後半に比定できよう。

遺構実測図や図版の掲載はしなかったが、調査時の所見からS1区SK53も弥生時代の井戸跡である可能性が高い。遺物は土器514・515が出土しており、時期は中期後半に比定できよう。

北東部（遺構：第48図、図版8 遺物：第43・74図、図版36・50）

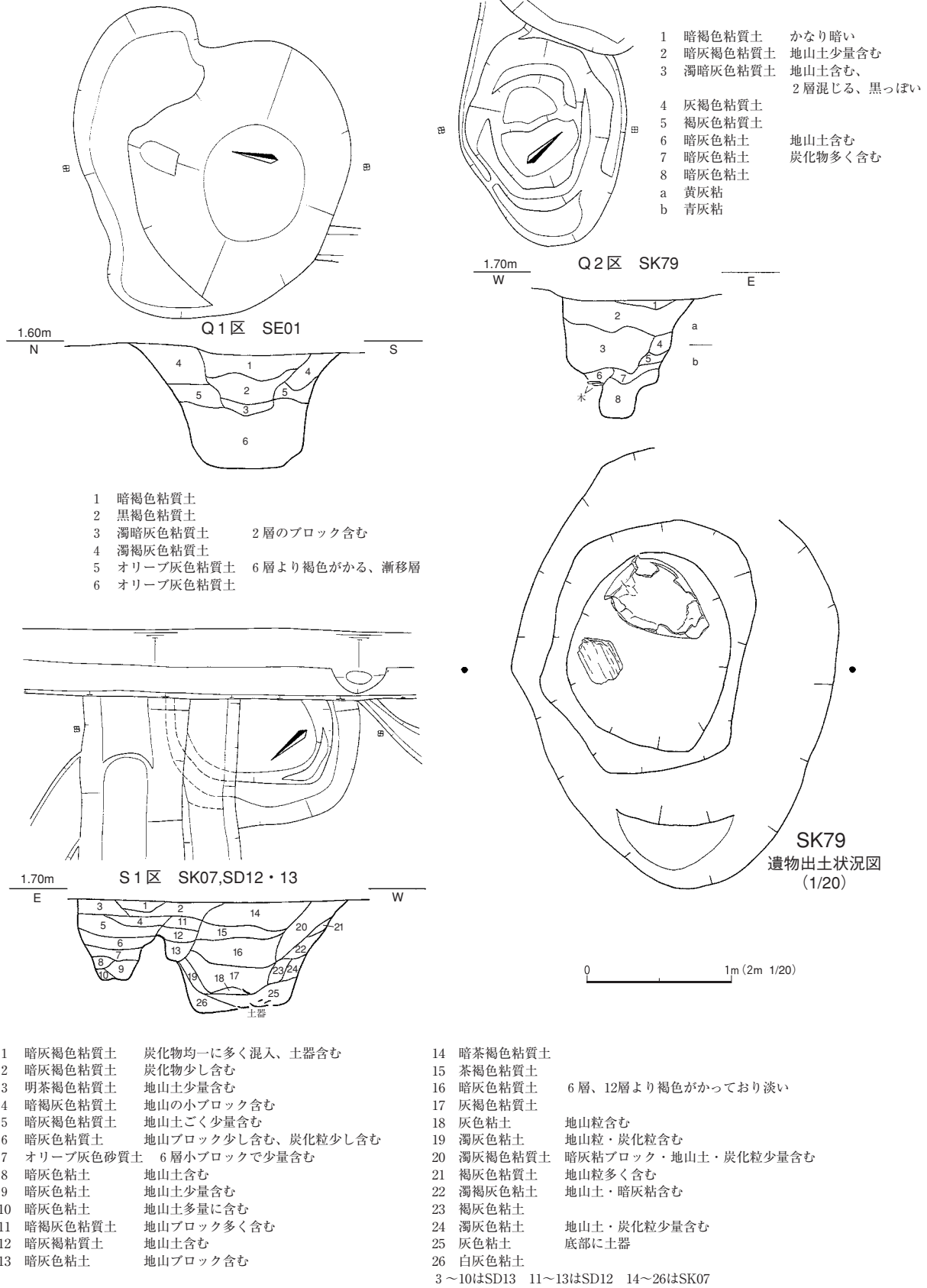
M3区SK24 I24区に位置する。同区SD46（DN9）の肩部に位置し、これを掘り下げている段階で検出した。長軸80×短軸44cmの楕円形プランを呈する。

遺物は土器623と木器W76・77を図示した。W77の刳物桶は土坑中央よりやや西に、正位の状態出土している。一木づくりの楕円筒形で、上半は腐食している。寸法は底部近くで長径52.5cm、短径28.5cm。残存高は46cmを測る。内面の下部には幅11cmほどの突帯がめぐる。

W76の木器はこの井戸枠の中で斜めになった状態（図版8の中段右）で出土している。元は楕円形の板とみられるが、腐食のため全体の3分の1ほどしか残っていない。残存している部分は短径19.5cm、厚さ1cmを測る。

当初、刳物桶は井戸枠として転用されたものであり、板は井戸枠に落ち込んだとみられる出土状況から蓋と考えていた。しかし、板の寸法は刳物桶の突帯に上から落とし込んで使う底板としても適当な大きさであることがわかり、蓋か底板かの判断が難しくなった。底板である場合は川の肩部に位置することから貯蔵穴のような性格も考えられようか。

ここでは、畝田西遺跡群ⅡのA5区SK01などの類例から井戸跡としておく。時期は623の甕から中期後半といえそうだが、DN9（M3区SD46）との切りあいを確認できなかったことや混入した可能性を否定できないことから中・後期としておきたい。



第21図 井戸跡実測図 (S = 1 / 40 · 1 / 20)

第4節 土 坑

南西部（遺構：第22～30図、図版9～18 遺物：第35～41・64・65・69図、図版30～35・46・48）

A 4区SK59 AJ21区に位置する。壁は北側が緩やかだが他の3方向は直に近く、中央付近の横断面は箱形で深さ65cmを測る。遺物は516の甕が出土している。口縁端部と胴部やや上位に櫛状具による斜行の刻みをいれる。時期は中期後半に比定できよう。

Q 1区SK34 AH21区に位置する。長軸300×短軸220cmほどの楕円形を呈する浅い落ち込みの中央部分に隅丸長方形プランの土坑が掘られている。長方形の土坑部分は推定長軸220×短軸90cm。断面は箱形で深さは検出面より80cmを測る。西側が別の遺構に切られているが、確認できた他の3方向では壁が直に立ち上がる。遺物は518の甕が出土している。胴部最大径付近に櫛状具による刻みをいれ、内面はケズリ上げられている。時期は中期後半に比定できよう。

Q 2区SK63 AE20・21区に位置する。最大長126cmの楕円形を呈する。底面には大小の凹凸があり、最も深い部分は39cmを測る。

C 3区SK73 AE20区に位置する。調査区端にあるため一部未調査だが、最大長230cm、深さは最深部で45cmを測る。中心部分が一段低くなっており、長方形を呈する。低い部分の北東部は浅くテラス状になっている。遺物は528の小型甕が出土している。口縁内面に櫛状具による山形文を施文する。胴部は張らない器形で、頸部～肩部に沈線を3本めぐらせる。時期は中期に属するが、通常の甕とは系統が異なるようであり、前半または後半かは判断できなかった。

C 3区SK84 AE20区に位置する。南東部を古墳時代の土坑に切られているため。長軸は不明だが短軸140cmを測り、楕円形プランと推定している。層5と層6が本遺構の覆土にあたり、層5から土器が出土している。底面には小さな穴が数基みられた。遺物は529の小型甕を図示した。

C 2区SK21 V17区に位置する。調査区端にあるため一部未調査だが、楕円形プランと推定している。断面形は浅い箱形で深さは20cmを測る。遺物は土器522～524、石器S85を図示した。522の壺は口縁端の内面に綾杉状文を施文している。S85は軟質の凝灰岩（泥岩質）砥石の破片である。正面は平滑で細かい研磨痕を確認できる。背面は丸みがあり、先端の尖った工具を研磨した痕跡が数条残る。時期は中期後半に比定できよう。

C 2区SK22 V17区に位置する。長軸152×短軸80cmの楕円形を呈する。壁はほぼ直に立ち上がり、断面形は箱形で深さ30cmを測る。底面は南側が少し高くなっている。

C 2区SK23 V17区に位置する。長軸175×短軸155cmの楕円形を呈する。南東側が一段浅くテラス状になっている。壁は北と西側が直に立ち上がり、深さは55cmを測る。

C 2区SK29 X17区に位置する。調査区端にあり長軸140cm以上、短軸80cmを測る。形状から楕円形の平面プランと想定できよう。層3から土器が多く出土している。壁面の傾斜は急であり深さは25cmを測る。SK41を切って構築されている。遺物は525の壺が出土している。口縁端部と内面に綾杉状文、頸部に直線文を施文する。時期は中期後半に比定できよう。

C 2区SK30 V17区に位置する。長軸120×短軸100cmの不整楕円形を呈する。中央部が他より一段低くなっており、深さは27cmを測る。遺物は526の壺が出土している。時期は中期後半に比定できよう。

C 2区SK31 W17区に位置する。長軸100×短軸56cmの隅丸菱形を呈する。深さは44cmを測り、壁面の傾斜は急である。

C 2区SK39 X16区に位置する。長軸76×短軸45cmの楕円形を呈する。断面は浅い皿状で深さは

12cmを測る。

C 2 区 S K 41 X17区に位置する。遺構のほぼ中央部分を S K 29に切り込まれるが、長軸170×短軸98cmの楕円形プランと推定できる。深さは24cmを測り横断面は箱形である。

C 2 区 S K 42 W17区に位置する。長軸114×短軸46cmの楕円形を呈する。中央から東部分が一段深く掘られている。深さは45cmを測り、壁面の傾斜は急である。

C 2 区 S K 43 V17区に位置する。長軸130×短軸66cmの楕円形を呈する。深さは37cmを測る。層2から土器が多く出土しているが、図示したものはない。調査時の所見によれば、時期は中期後半に比定できる。

C 2 区 S K 52 W17区に位置する。調査区端にあるため完掘していない。最大長80cm、深さ47cmを測る。西側の壁面は段状になっている。土器は層1・3から出土したが、図化できたものはない。

C 2 区 S K 53 X17区に位置する。北東部を別の遺構に切り込まれているが、長さ85cmほどの楕円形と推定できる。断面は浅い皿状で深さは10cmを測る。

C 2 区 S K 54 Y16区に位置する。長軸85×短軸56cmの不整形を呈する。深さは32cmを測り、壁面の傾斜は急である。

C 2 区 S K 55 Z16区に位置する。長軸94×短軸75cmの楕円形を呈する。深さは50cmを測る。一部崩落したが、壁面はほぼ直に立ち上がる。

C 2 区 S K 57 Z16区に位置する。調査区端にあるため完掘していないが、最大長80cm、深さ36cmを測る。

C 2 区 S K 58 AC19区に位置する。長軸187×短軸86cmの長楕円形を呈する。横断面は浅い皿状で深さは10cmを測る。遺物は527の甕とE29の土製円盤が出土している。時期は中期後半に比定できよう。

C 2 区 S K 59 AC19区に位置する。長軸137×短軸65cmの楕円形を呈する。横断面は逆台形を呈し、深さは30cmを測る。

R 2 区 S K 05 X18区に位置する。長軸131×短軸116cmの楕円形を呈する。横断面は浅い皿状で深さは20cmを測る。遺物は土器532～534を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

R 2 区 S K 09 Y17・18区に位置する。長軸194×短軸90cmの長方形を呈する。横断面は箱形に掘られ、深さは45cmを測る。坑底は南側が若干低くなり、北側の中央部には径約40cmの窪みがみられた。遺物はS73の磨製石斧が出土している。

R 2 区 S K 11 Y18区に位置する。長軸324×短軸140cmの楕円形を呈する大型土坑である。南側が一段深くなっている。遺物は土器535～537、S37の石鏃を図示した。536の壺は口縁端部に刻み、内面には斜行短線文を施文する。時期は中期後半に比定できよう。

R 2 区 S K 17 Y19区に位置する。長軸145×短軸115cmの不整形を呈する。深さ15cmほどの浅い土坑である。540の甕は、口縁端部に刻み、内面に綾杉状文を施文する。頸部は短め、胴部は丸みをおびており最大径は中ほどにある。時期は中期後半に比定できよう。

R 2 区 S K 27 Y19・Z19区の境に位置する。長軸94×短軸92cmの円形を呈する。深さは50cmを測り、壁面の傾斜は急である。遺物は土器541・542を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

R 2 区 S K 31 Y19区に位置する。中世の溝に北側を切り込まれているため、全容は不明だが東西長350cmほどに推定できる。深さは60cm以上を測り、壁面の傾斜は急である。300cmを越す大型土坑であることや比較的多くの土器が出土していることが特徴的である。遺物は土器543～550を図示した。546の壺は口縁上端を上方から押圧して小波状口縁としている。550の鉢は木製容器を模倣したとみられ、紐孔突起が口縁の上端についている。また、補修孔であろうか体部の上位にも孔が穿たれている。時期

は中期後半に比定できよう。549の鉢は古墳時代の可能性もある。

R 2区SK33 Z18区に位置する。長軸125×短軸67cmの楕円形を呈する。深さは30cmを測り、壁面の傾斜は直に近い立ち上がりである。遺物は土器551と552を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

R 2区SK34 Z18区に位置する。推定長軸135×短軸81cmのやや歪な楕円形を呈する。深さは52cmを測り、壁面の傾斜は急である。遺物は土器553・554を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

R 2区SK36 Z18区に位置する。長軸132×短軸81cmの崩れた隅丸長方形を呈する。深さは10cmほどしかなく、横断面は浅い皿状である。

R 2区SK37 Z18区に位置する。長軸95×短軸73cmの楕円形を呈するが、南東部の径70cmほどの円形部分が土坑の中心にあたり、深さは65cmを測る。壁面はほぼ直に立ち上がる。

S1区SK10 AD18区に位置する。長軸163×短軸74cmの楕円形を呈する。少なくとも3基のピットに切り込まれている。覆土は層12・16～19であるが、それ以外は判然としない。

S1区SK11 AD19区に位置する。南西部をSD21に切り込まれているが、平面は楕円形を呈する。長軸235×短軸195×深さ37cmほどの大型土坑と推定している。壁面の傾斜は緩やかである。遺物は土器558～562を図示した。559の甕は口縁上端に刻みをつけて小波状としている。また、胴部には短い区切りで直線文風のハケ調整を横方向にめぐらせている。560は大型壺である。受け口状口縁の外面に綾杉状文を施文する。時期は中期後半に比定できよう。

S1区SK12 AD19区に位置する。東部が別遺構に切り込まれているため、検出範囲で最大長130cmの楕円形プランと推定している。深さは15cmを測り、壁面の傾斜は緩やかである。563は受け口状口縁の甕である。斜め方向のハケ調整を器面全体に行った後、口縁外面と肩部に横位のハケ目をいれて直線文風に仕上げている。時期は中期後半に比定できよう。

S1区SK26 AC18区に位置する。長軸268×短軸70cmの隅丸長方形を呈する。深さは53cmを測り、横断面は箱形である。層8と層9の境に薄い炭層がみられる。遺物は土器565を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

S1区SK33 AC18区に位置する。本遺構はSK25、27、28と複雑に切りあっており、長軸は不明だが短軸155cmほどの楕円形プランと想定している。壁面の傾斜はほぼ直に立ち上がり、深さは47cmを測る。大型土坑と推定できる。570の壺はSK25、27に混入したとみられる破片と接合した。また、SK28からも混入したとみられる弥生土器566～569が出土している。566の甕は口縁端部の下部に刻みをめぐらせている。567の甕は口縁端部を面取りし、一本凹線風としている。最大径は胴部中央より若干上にある。568の甕は口縁端部を面取りし、内面に綾杉状文を施文する。底部の穿孔は焼成後である。時期はSK28に混入した土器を参考にすれば中期後半に比定できよう。

S1区SK34 AC18区に位置する。長軸約210cm、短軸120cmのやや歪な楕円形を呈する。深さは25cmを測り、壁面の傾斜は直に近い立ち上がりである。遺物は571の壺を図示した。

S2区SK04 X16区に位置する。長軸111×短軸88cmの略方形を呈する。深さは25cmを測り、横断面は浅いすり鉢状である。層2から土器が多量に出土(図版16)している。遺物は土器573～577を図示した。573と574の甕は口縁外端面の下部に刻みをめぐらせている。胴部はあまり張らない器形である。時期は中期後半に比定できよう。

S2区SK16 V15区に位置する。長軸205×短軸80cmの隅丸長方形を呈する。深さは62cmを測り、横断面は箱形である。層6上位から多くの土器が出土している。また、地山直上では木の葉状の植物質が残存していた。遺物は土器579～584を図示した。580の甕は口縁外端面の下部に刻みをめぐらせ、内面には綾杉状文を2段施文する。時期は中期後半に比定できよう。

S2区SK18 W15区に位置する。西側が別遺構に切り込まれているので長軸は不明だが、短軸80×深さ60cmを測る。残存状況から楕円形プランと推定できよう。遺物は土器586～592を図示した。586の甕は口縁端部を面取りする。また、斜め方向のハケ調整を器面全体に行った後、肩部に横位のハケ目をいれている。587の甕は胴から口縁にかけての屈曲が顕著で、胴部上半は丸みをおびた器形である。589と590の甕は口縁端部を面取りしている。591の大型壺は受口状口縁の外面に2段の綾杉状文をめぐらせる。頸部には突帯が貼り付けてあったが、剥がれ落ちている。時期は中期後半に比定できよう。

S3区SK01 V16区に位置する。SH37の外周溝によって北側の上部を削られているが、先後関係は不明である。長軸173×短軸80×深さ45cmの隅丸長方形を呈する。横断面は箱形である。

S3区SK02 U15区に位置する。長軸90×短軸85cmの円形を呈する。深さは15cmを測り、断面は浅い皿状である。

S3区SK03 U16区に位置する。長軸174×短軸90cmの歪な楕円形を呈する。深さは20cmを測り、壁面の傾斜は緩やかである。遺物は土器595～598を図示した。596は大型壺の口縁部である。受口状口縁であり、外面に綾杉状文とその下部に粘土紐を貼り付け刻みをめぐらせる。597甕は焼成後に底部を穿孔している。598の鉢は底部が角張っていることから、木製容器を模倣したとみられる。時期は中期後半に比定できよう。

B1区SK12 AA23区に位置する。長軸106×短軸97cmの円形を呈する。深さは37cmを測り、断面の傾斜は急である。遺物は土器599・600を図示した。599の甕は口縁端の下部に刻み、内面には3列の斜行短線文を施文する。さらに、体部の肩にも2列の斜行短線文をめぐらせる。時期は中期後半に比定できよう。

北東部（遺構：第30～34図、図版18～23 遺物：第42～44・64図、図版35・36・46）

W区SK04 K17区に位置する。長軸116×短軸66cmの不整形を呈する。深さは20cm以上を測り、壁面の傾斜は東側で緩やかだが西側は急である。

W区SK12 L17区に位置する。長軸135×短軸72cmのやや歪な楕円形を呈する。深さは17cmを測り、壁面の傾斜は緩やかである。

W区SK15 M19区に位置する。西側が河道によって削られてしまっているため長軸は不明である。幅126cmの長方形プランと推定している。調査所見によれば終末期の土坑とされている。

N2区SK03 J23区に位置する。長軸114×短軸86cmの楕円形を呈する。深さは42cmを測り、壁面の傾斜は直に近い。底面付近と壁面近くの上位で土器が出土している。601の甕は口縁外端部の下半に刻みをいれ、内面には綾杉状文を施文する。中期後半に比定できよう。

N2区SK07 J21区に位置する。周辺は遺構が複雑に重複している。長軸70cmほどの楕円形を呈する。深さは20cm以上を測る。遺物は604の壺を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

N2区SK10 K22区に位置する。南側端が別遺構に切り込まれている。東西長195cmを測る。断面観察から南北長も200cm前後と思われる、やや歪な方形と推定している。土器が底面付近で出土している。606の甕は口縁端部に斜行の刻みをいれる。時期は中期後半に比定できよう。

N2区SK12 J21区に位置する。断面観察から南北長は190cmと確認できる。検出時の状況から東西長140cm前後の長方形プランと推定している。深さは20cmを測り、壁面の傾斜は緩やかである。

N2区SK13 J21区に位置する。SK12と重複しており、上部を部分的に削られている。残存した範囲では長軸120×短軸50cmを測る。深さ35cm以上。壁面は底から中ほどまで直に立ち上がり、中ほどから検出面までは緩やかである。

N2区 S K 14 J21・K21区に位置する。長軸186×短軸120cmの楕円形を呈する。深さは30cmを測り、底はほぼ平らで壁面は直に立ち上がる。

N2区 S K 18 K21区に位置する。長軸150×短軸80cmの隅丸菱形を呈する。深さは55cmを測り、下部が袋状に広がる掘り方をしている。

N2区 S K 19 K22区に位置する。長軸170×短軸100cmの楕円形を呈する。深さは78cmを測る。壁面はほぼ直に立ち上がる。北東方向4mの地点にS K 09（図版20）があり、規模や主軸方向が似ていることから有機的な関係にあると思われる。遺物は土器607～609を図示した。607の鉢は肥厚した口縁端部を断面三角に面取りし、口縁帯としている。その上側面に縦方向の短線をめぐらせる。また、口縁帯の下部に2個1単位の穿孔がみられる。時期は中期後半に比定できよう。

N2区 S K 20 J21区に位置する。S K 07・S K 12と重複するため正確なプランをつかめなかった。これらの下位に位置することから弥生時代の遺構として間違いではなからう。

N2区 S K 21 L22区に位置する。長軸270×短軸130cmの一角が凹んだ長方形を呈する。深さ15cmを測る。

N2区 S K 22 M21・N21区に位置する。長軸125×短軸70cmの楕円形を呈する。深さ25cmを測る。坑底は平らでなく凹凸がある。

N2区 S K 25 L22区に位置する。北部を中世の溝に削られているが、長さ75～85cmほどのやや歪な楕円形を呈する。深さは45cmを測り、断面は逆台形状である。

N2区 S K 26 L21区に位置する。北東部を別遺構に切り込まれている。長さ110cmほどの不整形を呈する。中央部が小穴状に一段深くなっており、深さ23cmを測る。

N2区 S K 102 N22区に位置する。長軸95×短軸65cmのやや歪な楕円形を呈する。深さは26cmを測る。

N2区 S K 103 O21区に位置する。長軸160×短軸100cmの楕円形を呈する。深さは15cmを測る。

T区南 S K 13 Z28区に位置する。調査区端にあるため全形は不明だが最大長153cmを測る。南側中央部が小穴状に一段深くなっており、深さは25cmを測る。

F区 S K 02 H23区に位置する。長軸245×短軸72cmの楕円形を呈する。中央部が低く深さは55cmを測る。壁面の傾斜について長軸側は緩やかだが短軸側は直に近い立ち上がりである。

M1区 S K 08 M25区に位置する。一部遺構が削られているが長軸200×短軸90cmの楕円形を呈する。深さは20cmを測る。土器612は水差型土器と思われるが、把手部分を欠落している。

M1区 S K 09 L25区に位置する。土坑の両先端が別遺構に切り込まれているため長軸は不明である。短軸72×深さ17cmを測る。

M1区 S K 10 L25区に位置する。別遺構によって西側が削られているが、長軸170×短軸92cmほどの楕円形を呈する。深さは20cm以上を測る。遺物はS 39の石鏃が出土している。

M1区 S K 19 N26区に位置する。別遺構によって切り込まれているため全形は不明である。深さは10cmを測る。遺物は土器613の壺を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

M3区 S K 20 I25区に位置する。長軸155×短軸145cmの歪な楕円形を呈する。深さは26cm以上を測る。遺物は土器620を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

V2区 S K 01 G21区に位置する。長軸140×短軸73cmの楕円形を呈する。別遺構によって上部を削平されている。深さは17cm以上を測る。

V2区 S K 02 G21区に位置する。長軸120×短軸51cmの楕円形を呈する。土坑内に一回り小さい落ち込みがあり、深さは15cmを測る。土器が落ち込みの北東端で出土しているが、図化していない。

V2区SK03 G21区に位置する。北側が削られているため長軸は不明である。短軸120cmの楕円形を呈する。深さは23cmを測る。土坑としたが位置的にはSH42外周溝の残欠である可能性も考えられる。

V2区SK04 H20区に位置する。長軸115×短軸100cmの楕円形を呈する。深さは28cmを測る。

V2区SK08 H21区に位置する。長軸120×短軸90cmの楕円形を呈する。北東側がテラス状になっている。深さは40cmを測り、壁面の傾斜は急である。

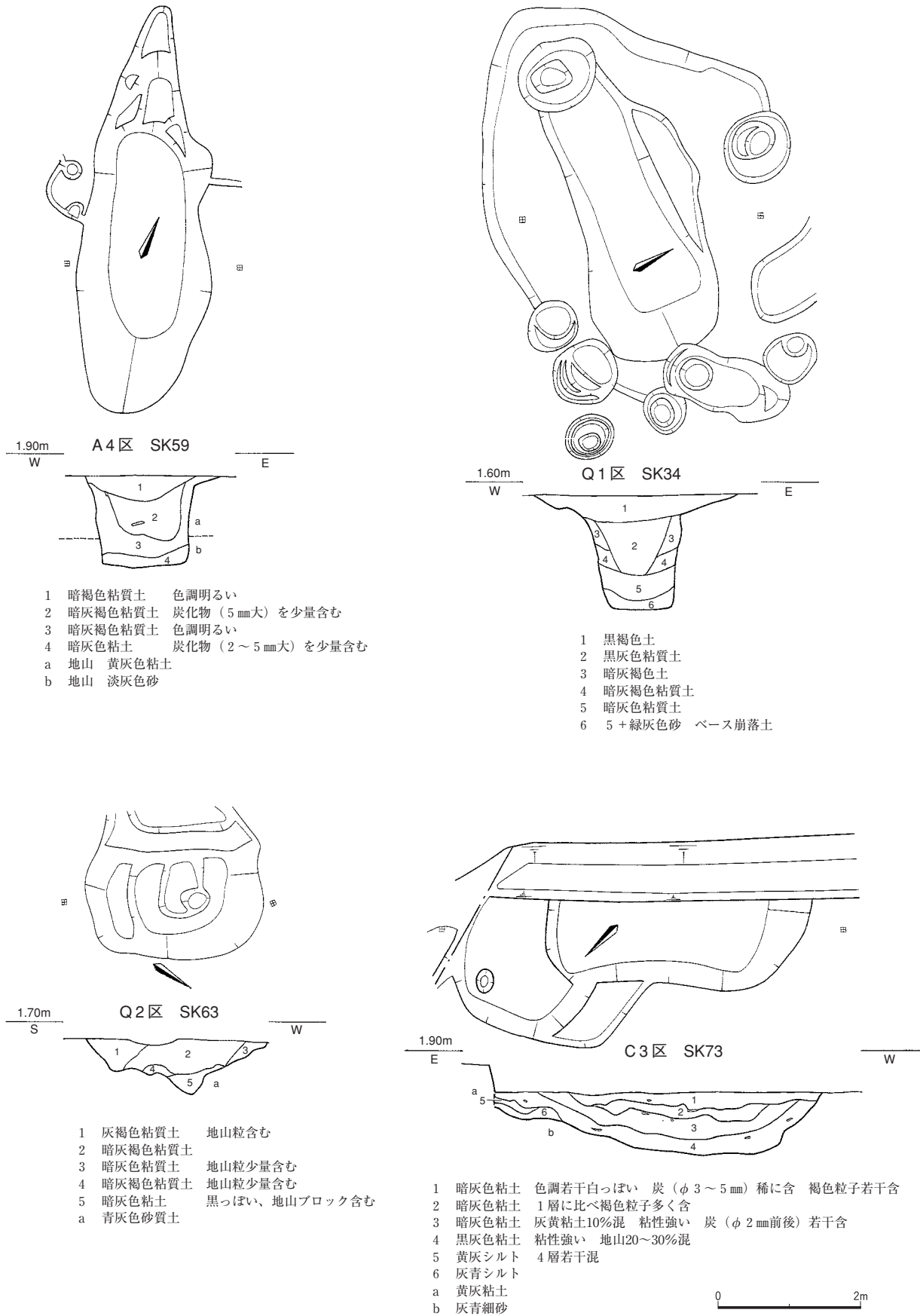
V1区SK05 G25区に位置する。長軸100cmほど短軸78cmの楕円形を呈する。深さは30cmを測る。

V1区SK07 G21区に位置する。長軸170×短軸106cmの楕円形を呈する。深さは35cmを測り、壁面の傾斜は急である。坑底は中央部が若干低くなっている。

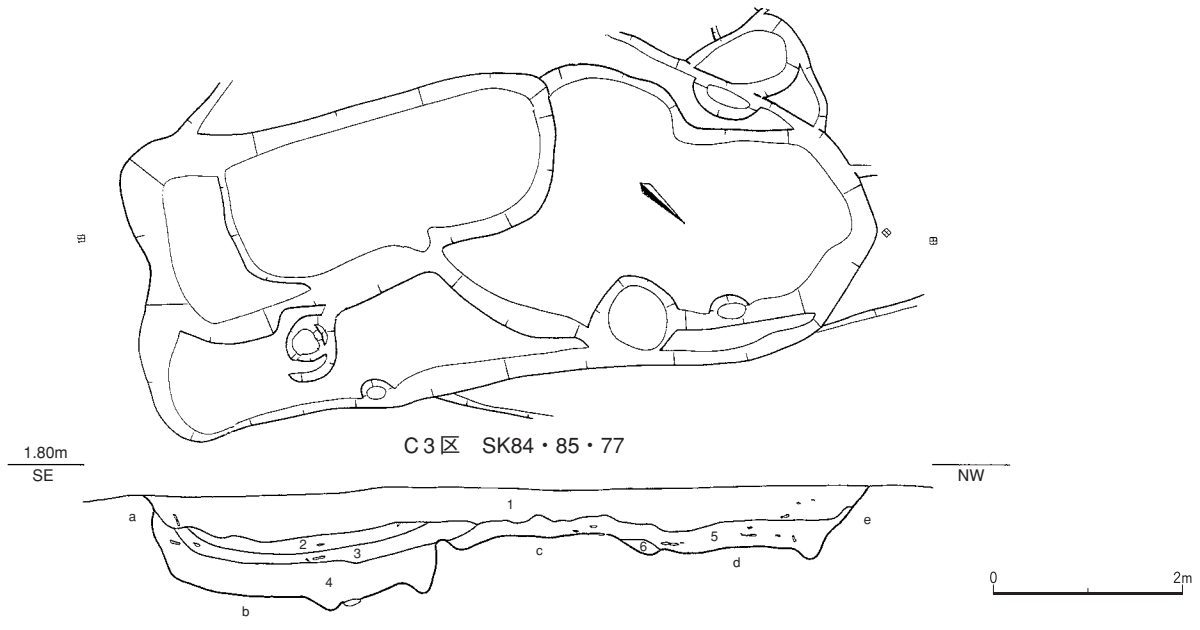
V1区SK16 G23区に位置する。長軸150×短軸72cmの長方形を呈する。深さは28cmを測り、壁面の傾斜は西側が緩やかだが他の三方向は急である。坑底の中央部では長さ90cmの範囲が一段低くなっている。土器632は頸部がしまらない器形の壺である。口縁端部を指頭で押圧し小波状とする。

第5表 弥生井戸跡・土坑一覧

地区	遺構名	グリッド	実測遺物	備考	地区	遺構名	グリッド	実測遺物	備考
Q1	S E 01	A G 20	511	井戸	S1	SK33	A C 18	570	
Q2	S K 79	A F 21	510	井戸	S1	SK34	A C 18	571	
S1	SK07	A D 19	512、513	井戸	S2	SK04	X 16	573~577	
S1	SK53	A C 16	514、515	井戸	S2	SK16	V 15	579~584	
M3	SK24	I 24	623、W76・W77	井戸	S2	SK18	W15	586~592	
A4	SK59	A J 21	516		S3	SK01	V 16		
Q1	SK34	A H 21	518		S3	SK02	U 15		
Q2	SK63	A E 20・21			S3	SK03	U 16	595~598	
C3	SK73	A F 20	528		B1	SK12	A A 23	599~600	
C3	SK84	A E 20	529		W	SK04	K 17		
C2	SK21	V 17	522~524、S85		W	SK12	L 17		
C2	SK22	V 17			W	SK15	M 19		
C2	SK23	V 17			N2	SK03	J 23	601	
C2	SK29	X 17	525		N2	SK07	J 21	604	
C2	SK30	V 17	526		N2	SK10	K 22	605、606	
C2	SK31	W17			N2	SK12	J 21		
C2	SK39	X 16			N2	SK13	J 21		
C2	SK41	X 17			N2	SK14	J 21		
C2	SK42	W17			N2	SK18	K 21		
C2	SK43	V 17			N2	SK19	K 22	607~609	
C2	SK52	W17			N2	SK21	L 22		
C2	SK53	X 17			N2	SK22	M21・N21		
C2	SK54	Y 16			N2	SK25	L 22		
C2	SK55	Z 16			N2	SK26	L 21		
C2	SK57	Z 16			N2	SK102	N 22		
C2	SK58	A C 19	527、E29		N2	SK103	O 21		
C2	SK59	A C 19			Ts	SK13	Z 28		
R2	SK05	X 18	532~534		F	SK02	H 23		
R2	SK09	Y 17・18	S73		M1	SK09	L 25		
R2	SK11	Y 17	535~537、S37		M1	SK10	L 25	S39	
R2	SK17	Y 19	540		M1	SK19	N 26	613	
R2	SK27	Y 19・Z 19	541、542		M3	SK20	J 25	620	
R2	SK31	Y 19	543~550		V2	SK01	G 21		
R2	SK33	Z 18	551、552		V2	SK02	G 21		
R2	SK34	Z 18	553、554		V2	SK03	G 21		
R2	SK36	Z 18			V2	SK04	H 20		
R2	SK37	Z 18			V2	SK08	H 21		
S1	SK10	A D 18			V1	SK05	G 25		
S1	SK11	A D 19	558~562		V1	SK07	G 25		
S1	SK12	A D 19	563		V1	SK16	G 23	632	
S1	SK26	A C 18	565						



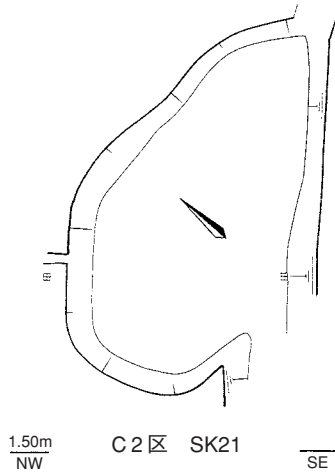
第22図 土坑実測図1 (S=1/40)



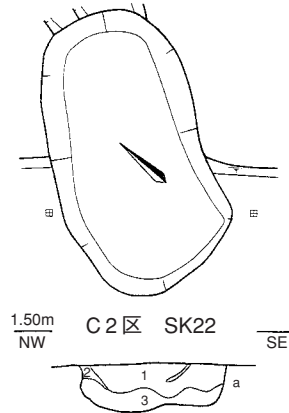
- 1 暗灰褐粘土 炭粒まばらに含 炭(φ5~10mm)稀に含 褐色粒子多く含
 - 2 暗灰褐粘土 色調1層より暗め 炭(1~3mm)若干含
 - 3 黒灰色粘土 炭(3~10mm)まばらに含 粘性、しまり共に強い 上位では炭層がやや拡散しながらも帯状に入る
 - 4 黒粘土 炭(φ3~15mm)まばらに含 粘性、しまり共に強い
 - 5 暗灰粘土 炭(φ5~10mm)まばらに含
 - 6 黄白粘土 灰粘土稀に混
 - a 黄灰粘
 - b 青灰細砂
 - c 黄灰粘
 - d 青灰細砂
 - e 黄灰粘
- 1はSK77 2~4はSK85 5と6はSK84 2~5は土器主包含層

第23図 土坑実測図2 (S=1/40)

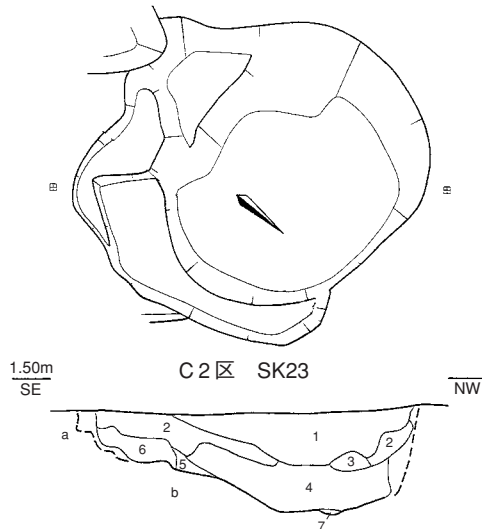
第4節 土 坑



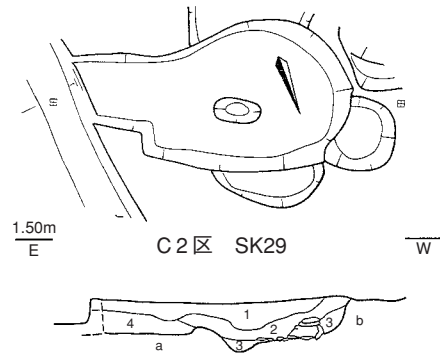
- 1 黒褐粘土 炭(φ2~5mm)褐色粒子まばらに混
 2 暗灰砂 1層若干混
 a 暗灰砂



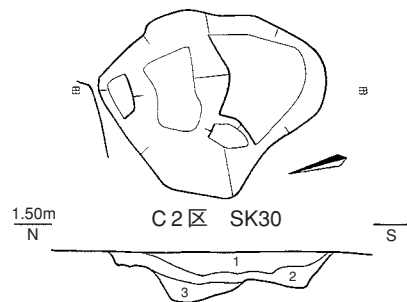
- 1 黒褐粘土 炭(φ2~5mm)褐色粒子まばらに混
 2 暗灰粘質土 灰黄砂30%混
 3 暗灰粘質土 灰黄砂50%混
 a 灰黄砂



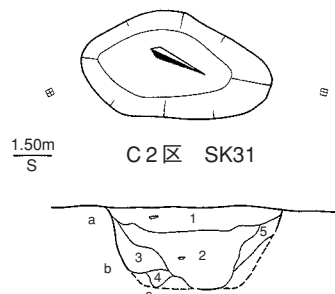
- 1 黒褐粘土 炭粒若干混 黄灰砂ブロック状に混
 2 黒灰粘質土 黄灰砂ブロック状に若干混 炭粒若干混
 3 黒灰粘質土 色調2層より暗い
 4 黒色粘土 黄灰砂ブロック状に20~30%混
 5 灰黄シルト 4層と地山の中間層
 6 黄灰シルト 2層10% 地山90%
 7 暗灰粘土 粘性強い
 a 黄灰砂
 b 灰青砂



- 1 黒灰粘土 炭(φ2~10mm)若干含
 2 暗灰粘土 炭(φ3~10mm)若干含
 3 灰粘土 2層と地山の中間層
 4 黄灰粘 地山質土に1層若干混
 a 灰白粘
 b 灰白シルト



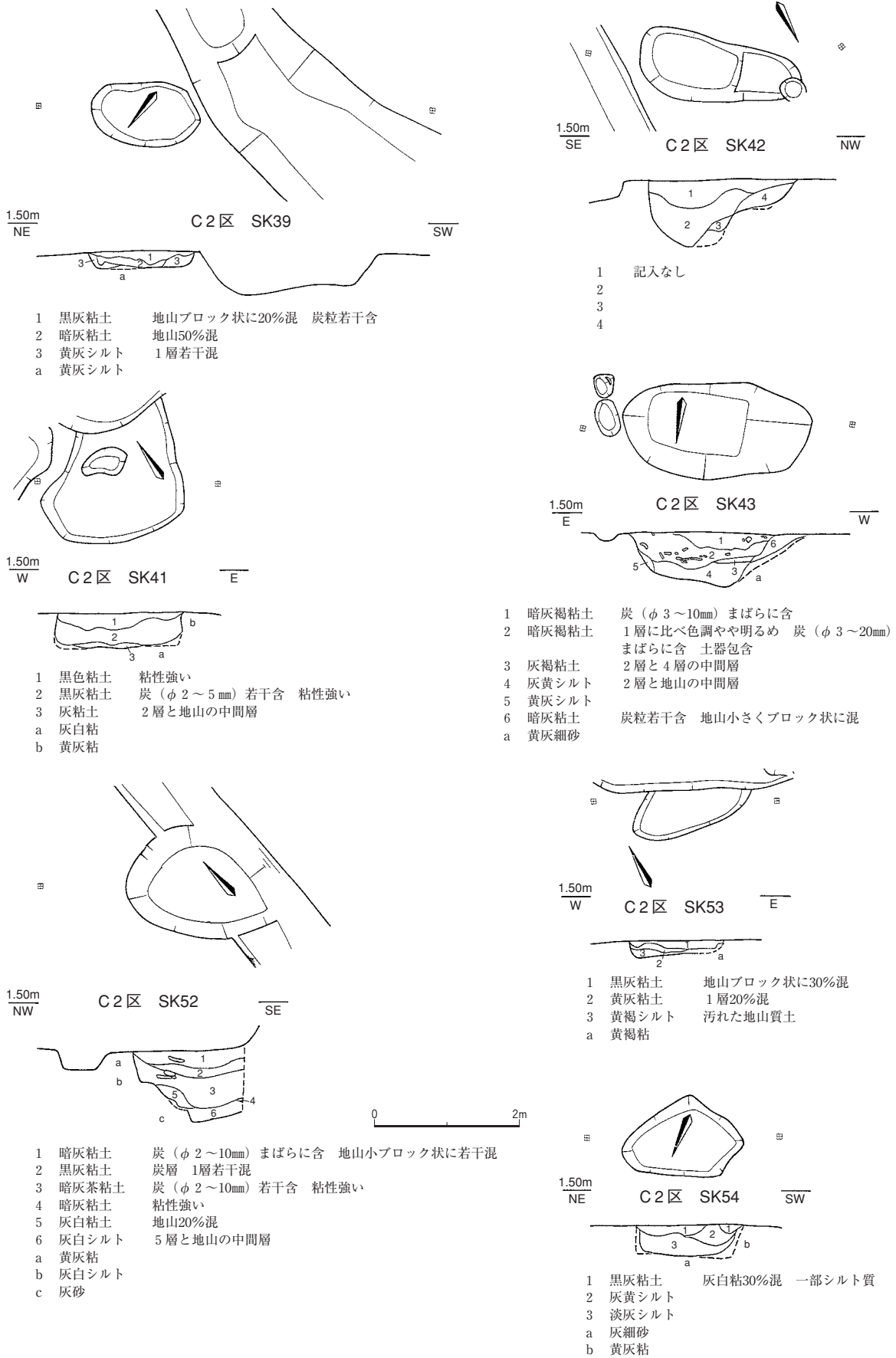
- 1 暗灰粘土 炭(φ2~5mm)若干混
 2 灰黄粘土 地山30%混
 3 黄灰シルト 2層混



- 1 黒灰粘土 灰白粘土ブロック状に30%混 炭(φ2mm程)稀に含
 2 黒色粘土 灰白粘土ブロック状に40%混 炭(φ2~4mm)若干含
 3 灰黄粘土 2層混
 4 灰砂 3層混
 5 灰黄粘 1、2層混
 a 黄灰粘
 b 灰白シルト
 c 灰砂

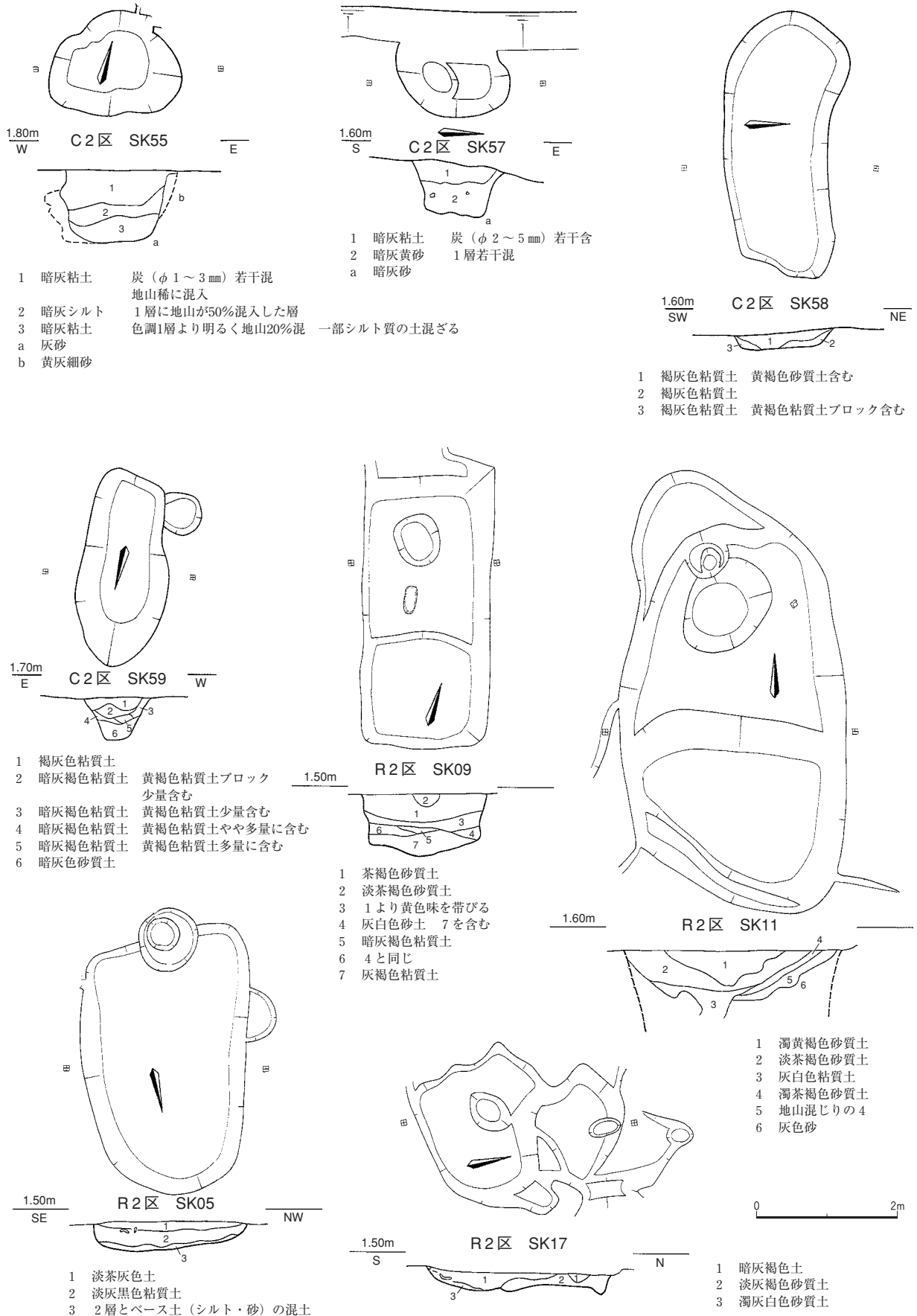


第24図 土坑実測図3 (S=1/40)

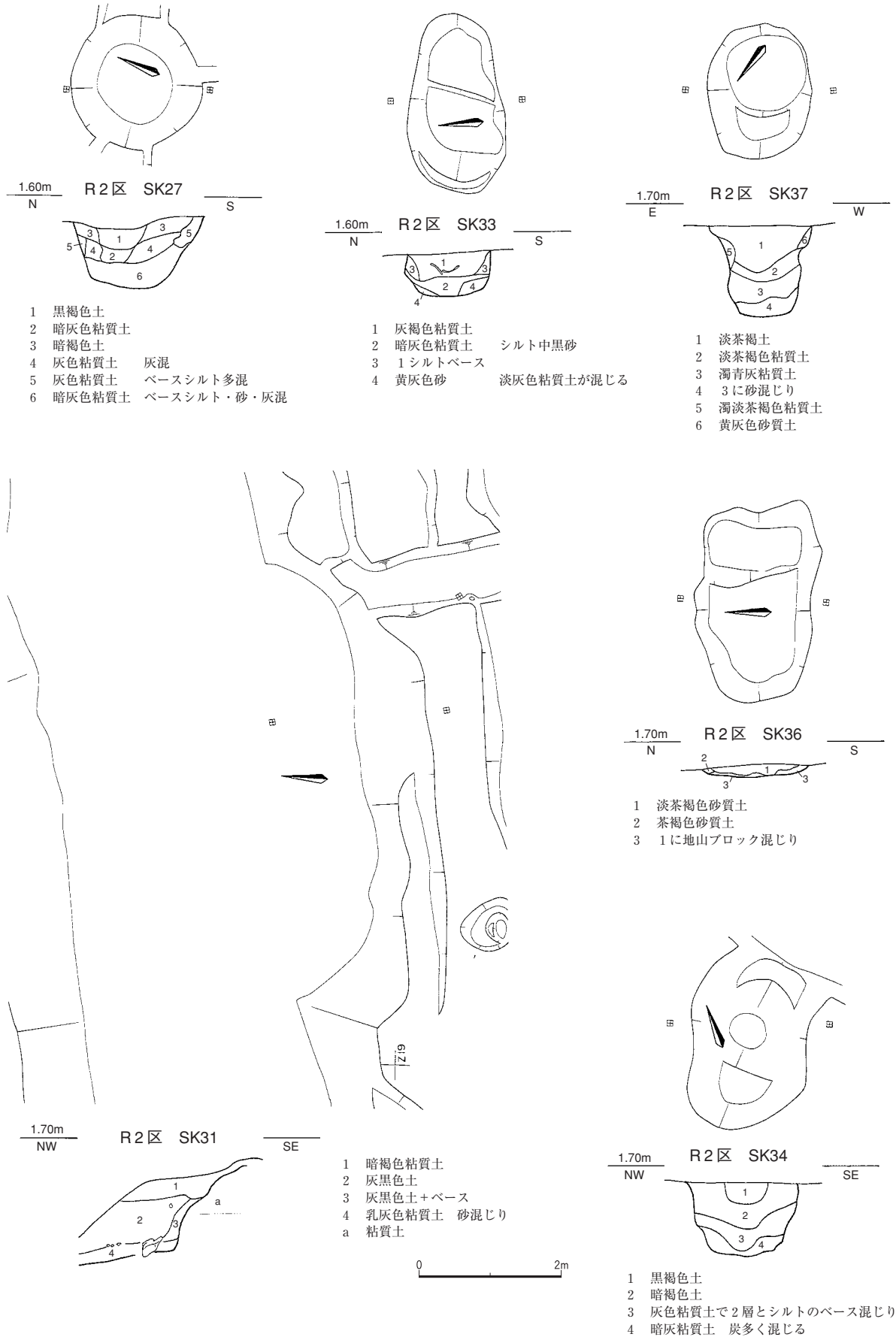


第25図 土坑実測図4 (S=1/40)

第4節 土 坑

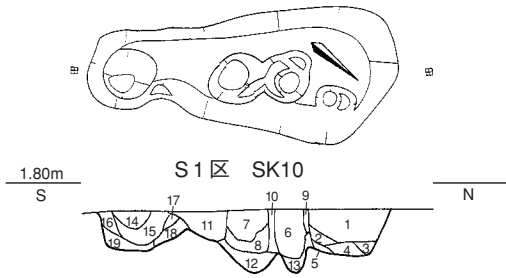


第26図 土坑実測図5 (S=1/40)

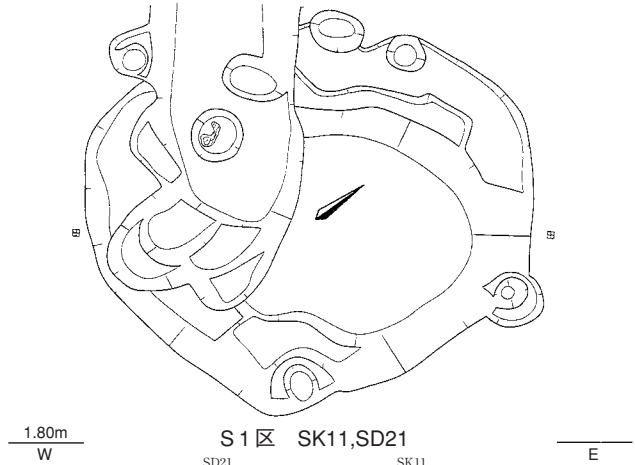


第27図 土坑実測図6 (S=1/40)

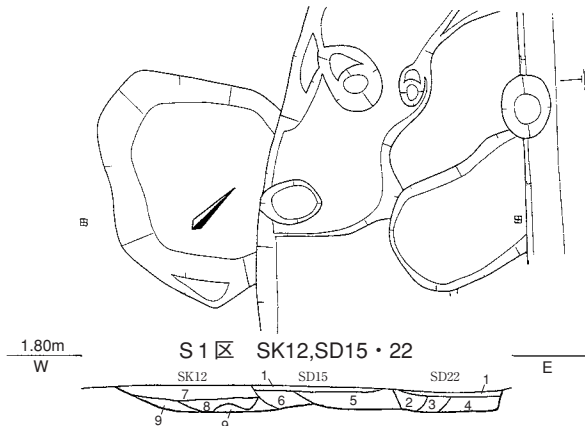
第4節 土 坑



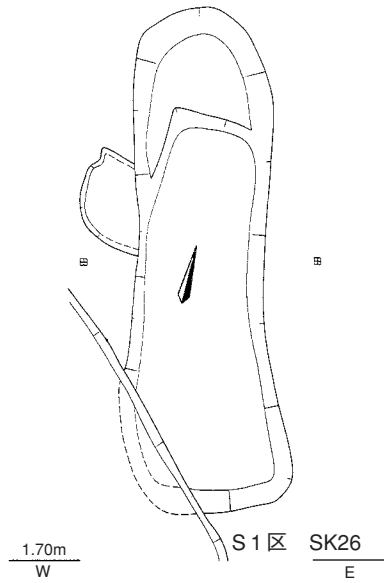
- 1 暗褐色土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 暗灰褐色粘質土 2層より粘る
- 4 濁灰黄色粘質土
- 5 灰褐色粘質土 地山ブロック少量含む
- 6 褐色粘質土 炭粒を含む
- 7 褐色粘質土
- 8 褐色粘質土 地山ブロック含む
- 9 濁暗褐色粘質土 地山ブロック多量含む
- 10 濁暗褐色粘質土 地山ブロック多量含む
- 11 褐色粘質土 炭粒・地山粒子多く含む
- 12 暗灰褐色粘質土
- 13 黒褐色粘質土
- 14 褐色土 焼土粒微量含む
- 15 褐灰色粘質土 炭粒・焼土粒少量含む
- 16 濁褐色土 地山ブロック含む
- 17 濁黄色土
- 18 濁褐色土
- 19 濁暗灰褐色土 炭粒含む



- 1 暗褐色粘質土
 - 2 暗灰色粘土
 - 3 暗灰色粘土 地山ブロック多く含む
 - 4 青灰色粘質土 4層シミ状に含む
 - 5 暗灰褐色粘質土
 - 6 濁暗灰褐色粘質土 5より暗い、黄茶色粘・8層など混入
 - 7 濁黄茶色粘質土 6より濁る、8層・6層など混入
 - 8 褐灰色粘土
- 1～4はSD21 5～8はSK11



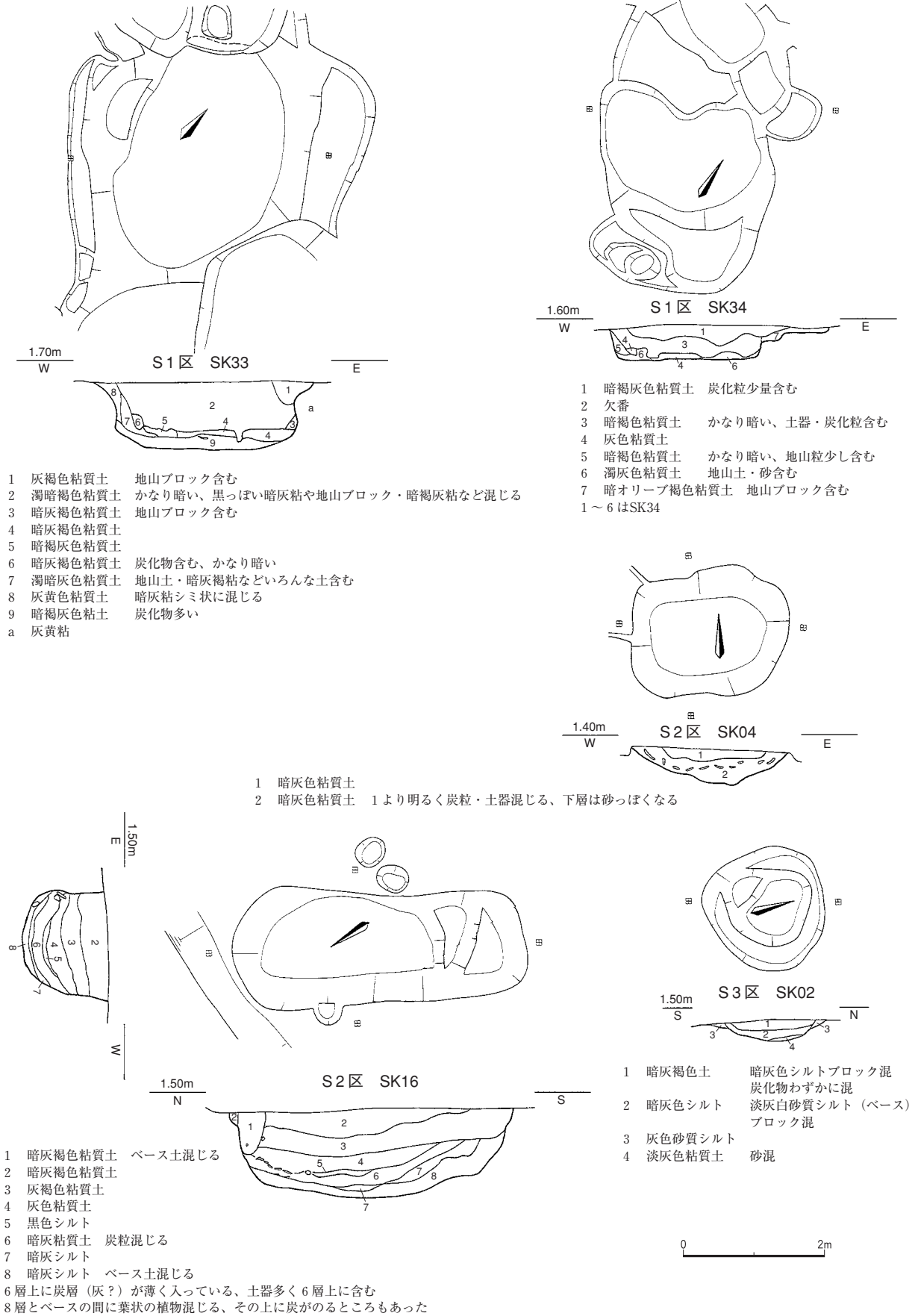
- 1 暗褐色粘質土
 - 2 暗灰色粘質土 地山粒少量含む
 - 3 褐灰色粘質土 7層より灰色強い
 - 4 褐灰色粘質土 地山ブロック多く含む
 - 5 地山ブロックに1層シミ状に含む
 - 6 灰褐色粘質土
 - 7 褐灰色粘質土
 - 8 褐灰色粘質土 地山粒混入
 - 9 褐灰色粘質土 地山土混入
- 2～4はSD22 5・6はSD15 7～9はSK12



- 1 暗灰褐色粘質土 土器含む
- 2 暗褐色粘質土 黒っぽい
- 3 灰褐色粘質土
- 4 暗茶褐色粘質土
- 5 濁淡褐色粘質土 砂・暗褐粘含む、炭化物含む
- 6 濁褐灰色粘質土 地山ブロック・暗灰粘含む
- 7 5層と同一
- 8 濁暗褐色粘質土 土器・炭化物含む
- 9 暗灰褐色粘質土
- a 灰黄粘
- b 灰色砂

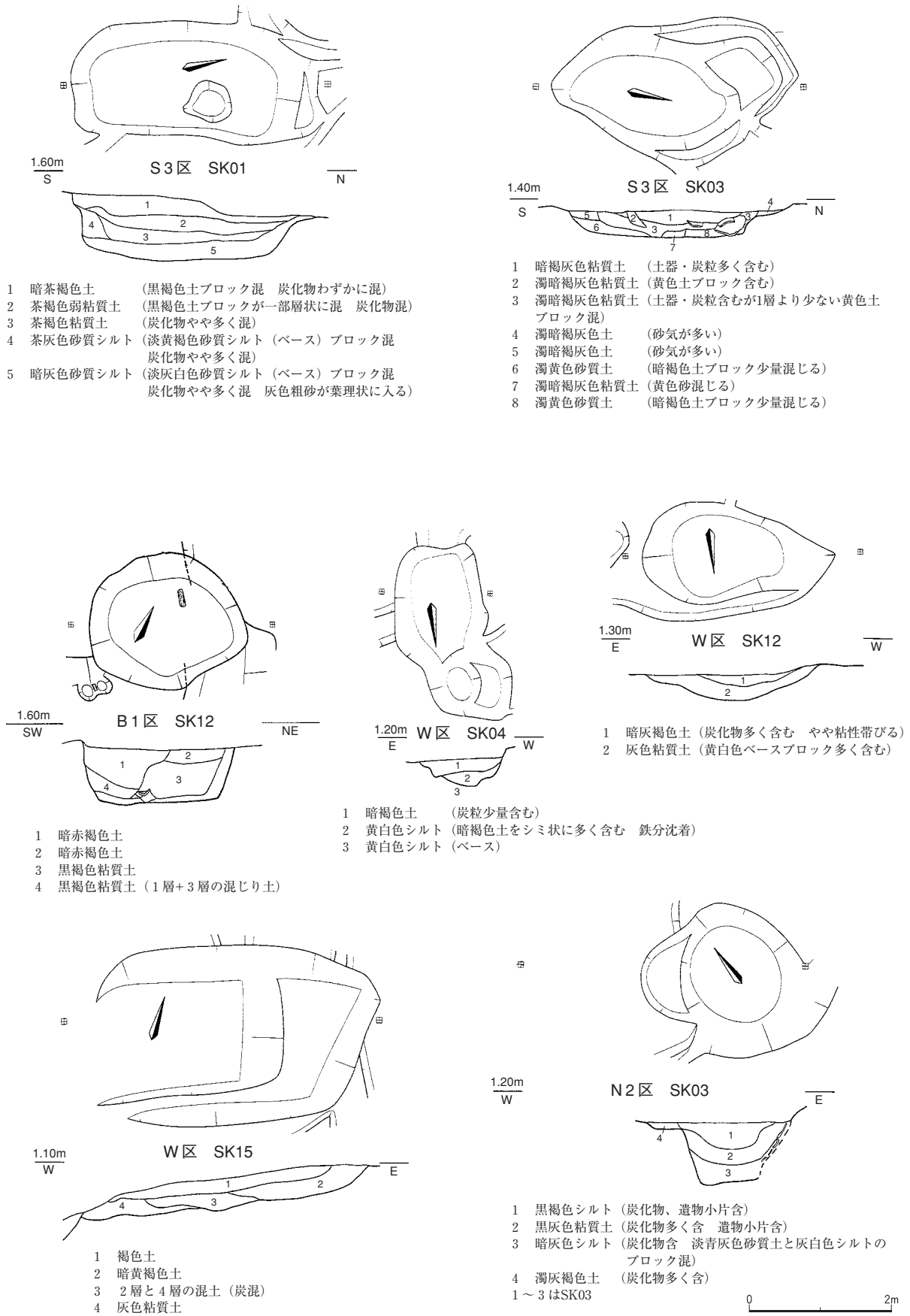


第28図 土坑実測図7 (S = 1 / 40)

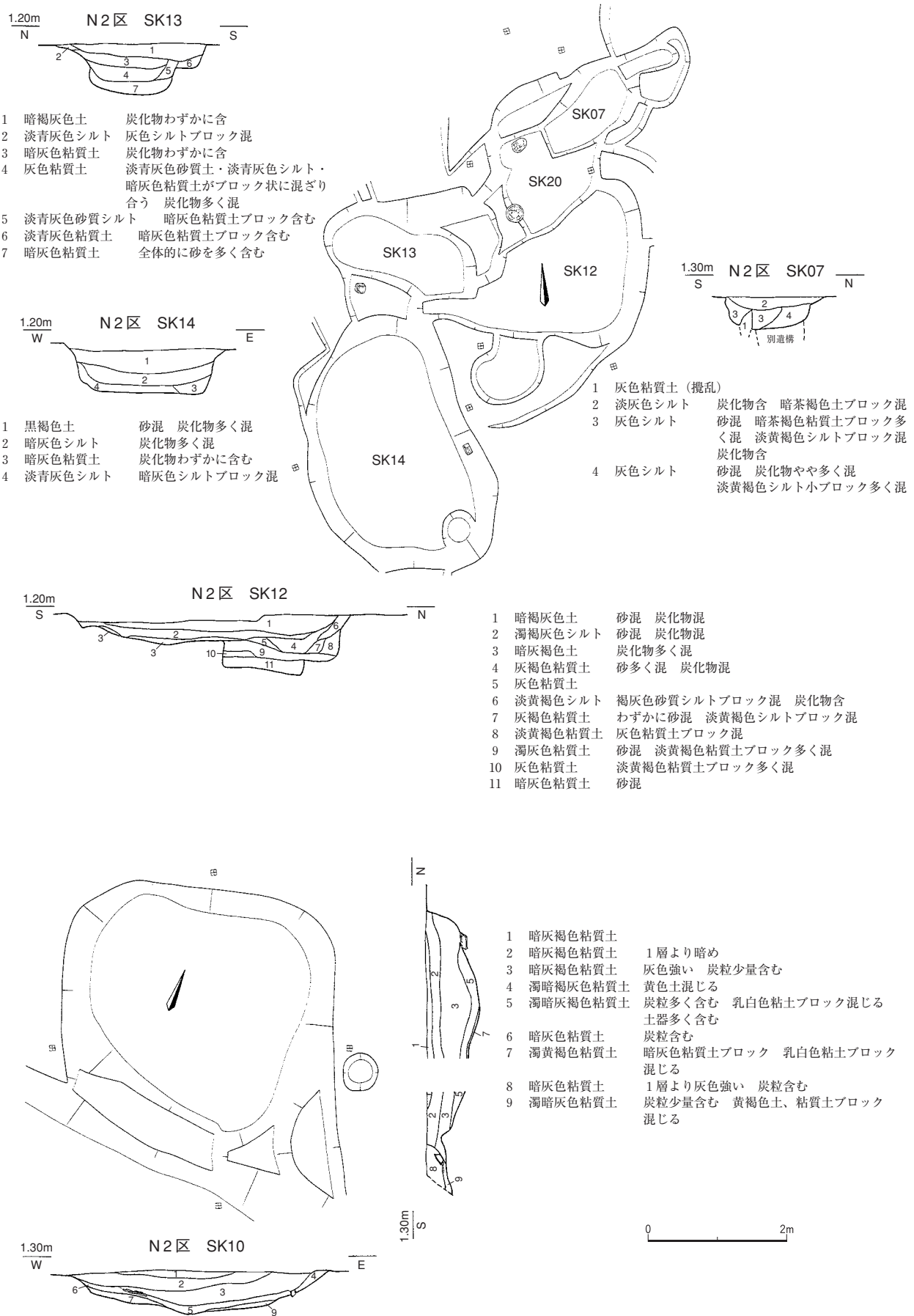


第29図 土坑実測図8 (S=1/40)

第4節 土 坑

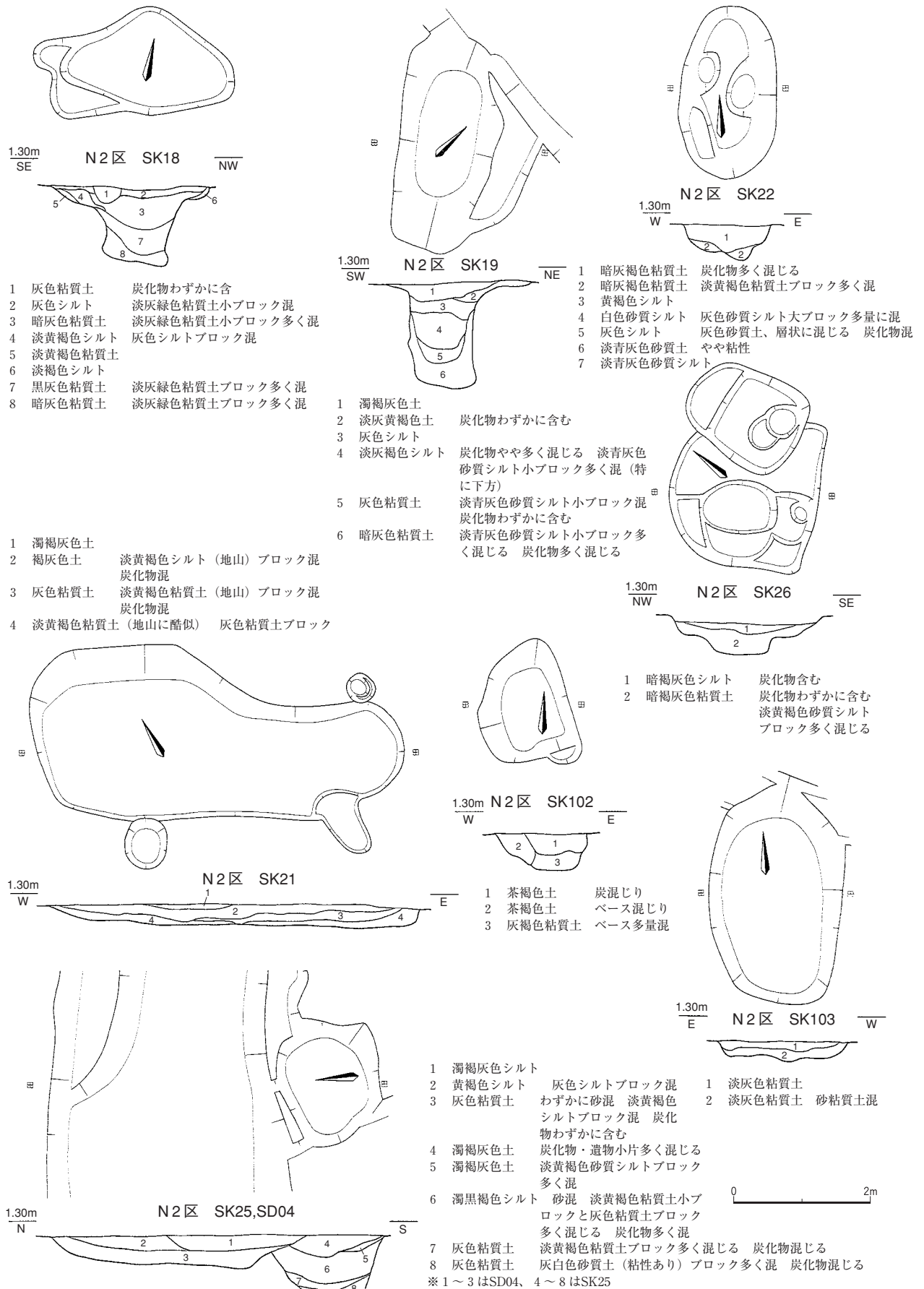


第30図 土坑実測図9 (S = 1 / 40)

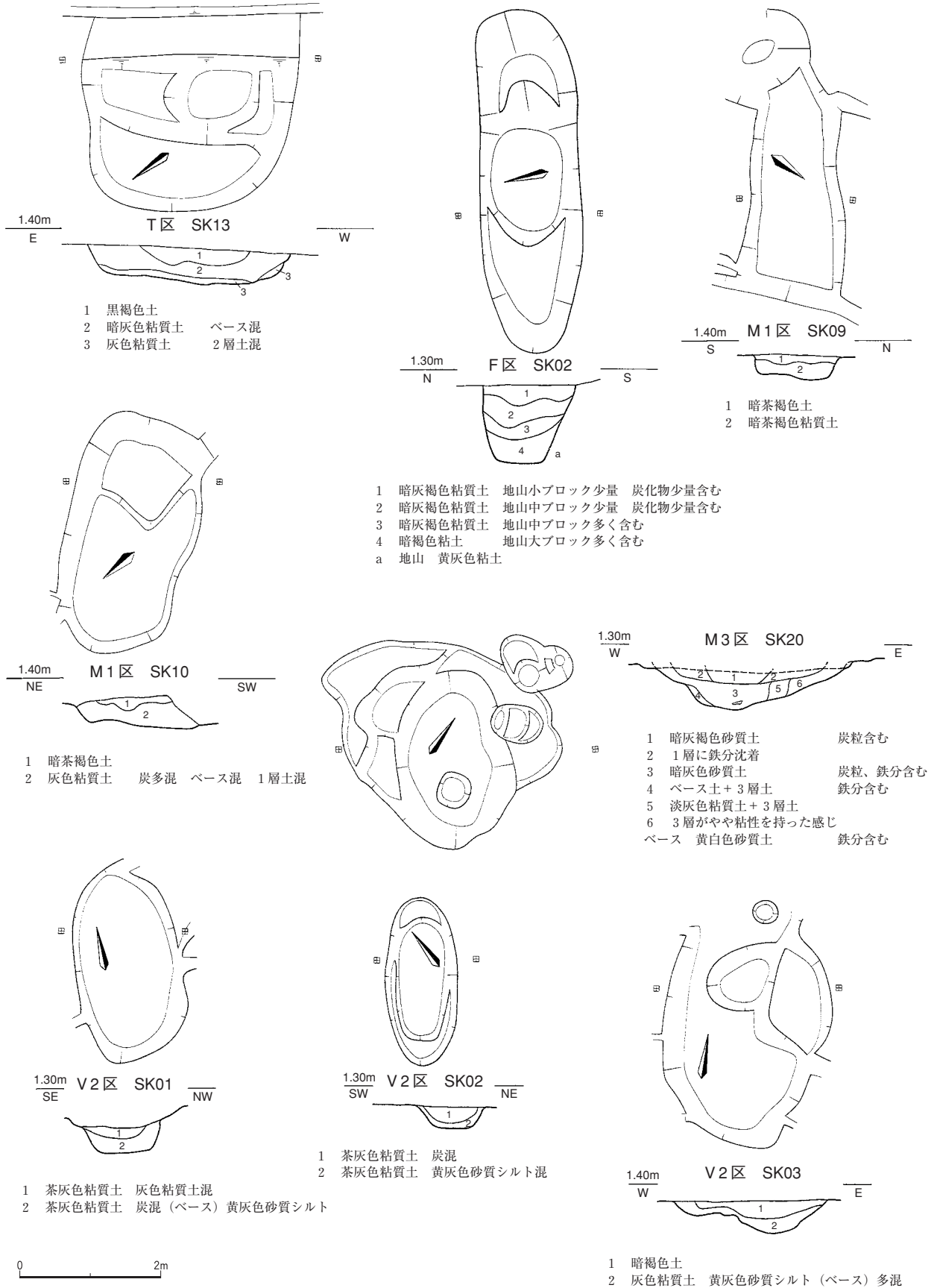


第31図 土坑実測図10 (S = 1/40)

第4節 土 坑

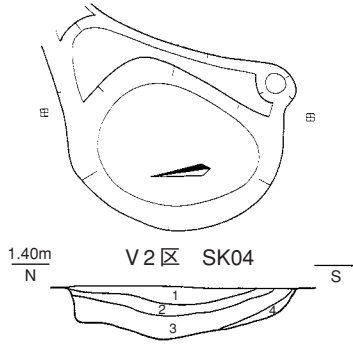


第32図 土坑実測図11 (S = 1/40)

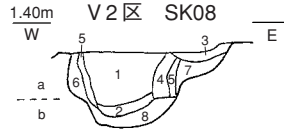
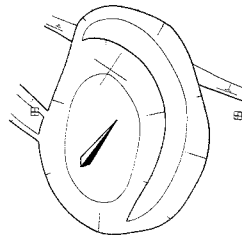


第33図 土坑実測図12 (S = 1 / 40)

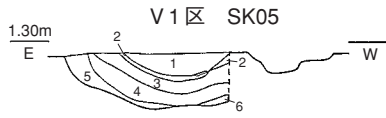
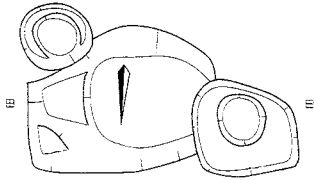
第4節 土 坑



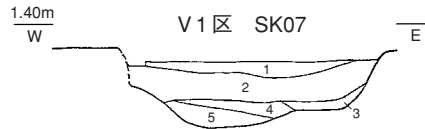
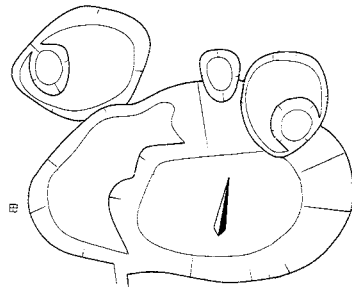
- 1 茶灰色土 炭混
- 2 茶灰色土 黄褐色シルト混
- 3 茶褐色土 炭混 黄褐色炭混
- 4 黄灰色砂質土 3層土混



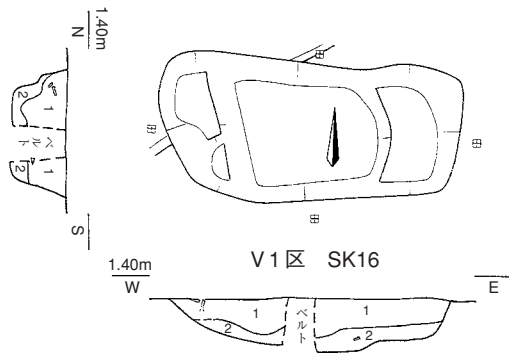
- 1 茶灰色粘質土 炭混
- 2 茶灰色粘質土 砂混
- 3 茶灰色土
- 4 暗黄灰色砂
- 5 灰褐色粘質土
- 6 黄灰色砂質シルト・灰褐色粘質土 混土
- 7 黄灰色砂 灰褐色粘質土 少混
- 8 灰褐色粘質土 砂混 シルト混
- a 砂
- b シルト



- 1 暗灰褐色土 淡黄褐色シルトブロックわずかに混炭化物多く混
- 2 淡黄褐色砂質土 灰色土ブロック多く混
- 3 暗灰褐色土 淡黄褐色シルトブロック多く混炭化物多く混
- 4 淡黄褐色砂質シルト 灰色砂質シルトブロック多く混
- 5 暗灰色シルト 淡黄褐色シルトブロック混 炭化物わずかに混
- 6 淡黄褐色シルト 灰色シルトブロックわずかに混

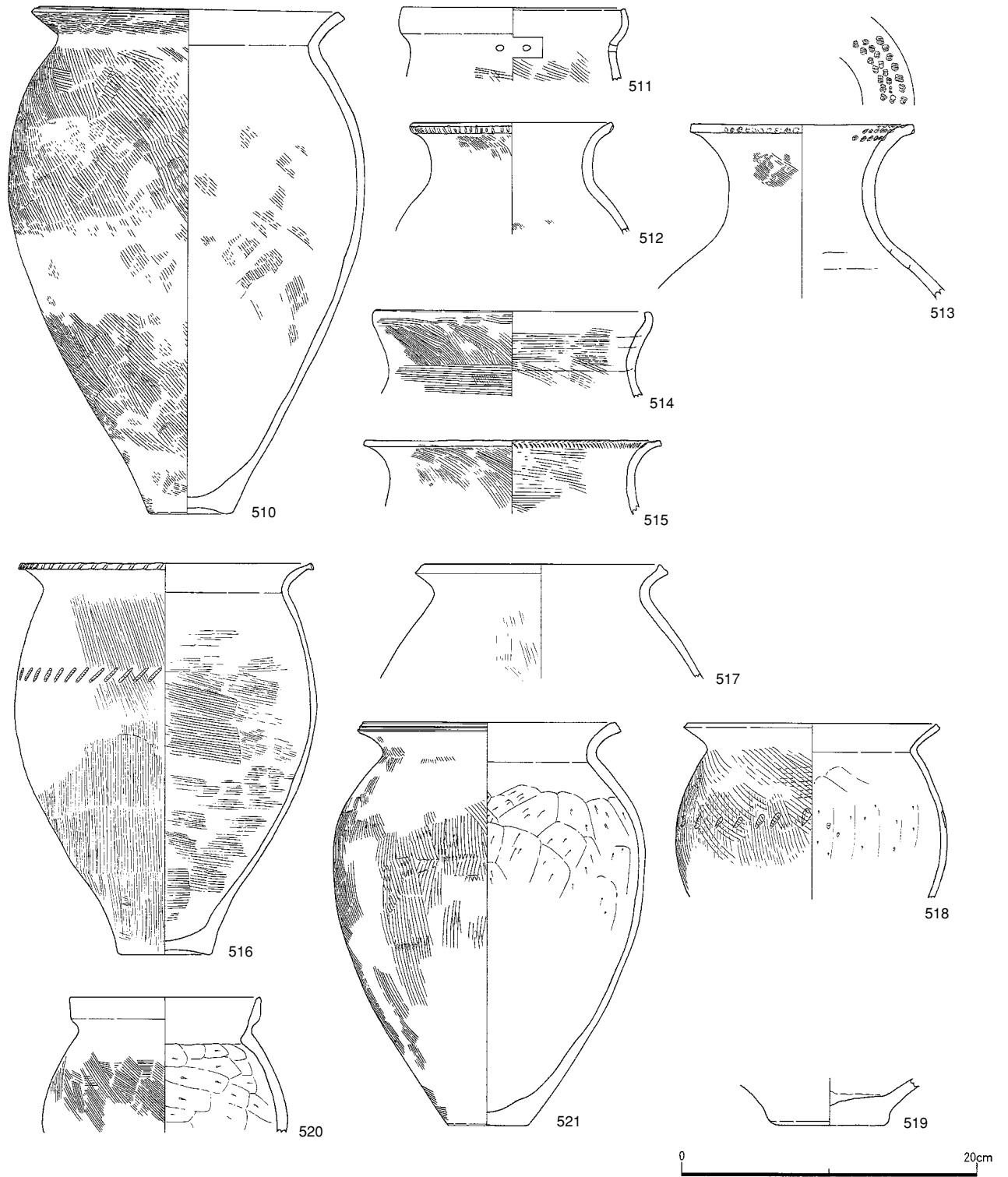


- 1 濁褐灰色土 炭化物混
- 2 褐灰色砂質シルト 炭化物多く混 淡黄褐色砂質シルトブロック(5cm程)混
- 3 濁褐灰色砂質シルト
- 4 淡褐灰色土 灰色シルトブロックわずかに混
- 5 濁褐灰色弱粘質土 砂混

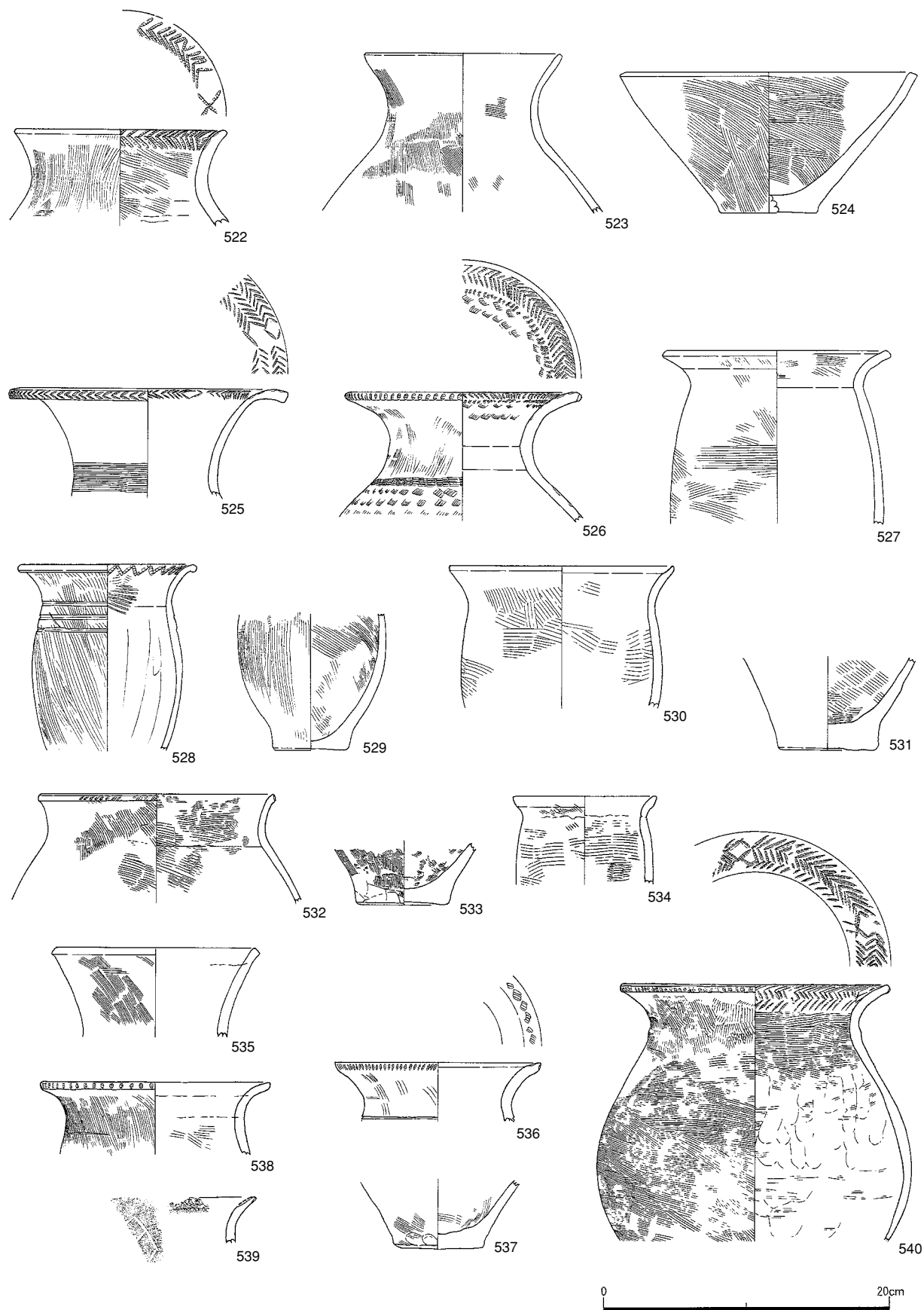


- 1 暗褐灰色土 炭化物多く混 遺物小片混
- 2 暗灰褐色土 炭化物混 淡黄褐色砂質シルトブロックわずかに混

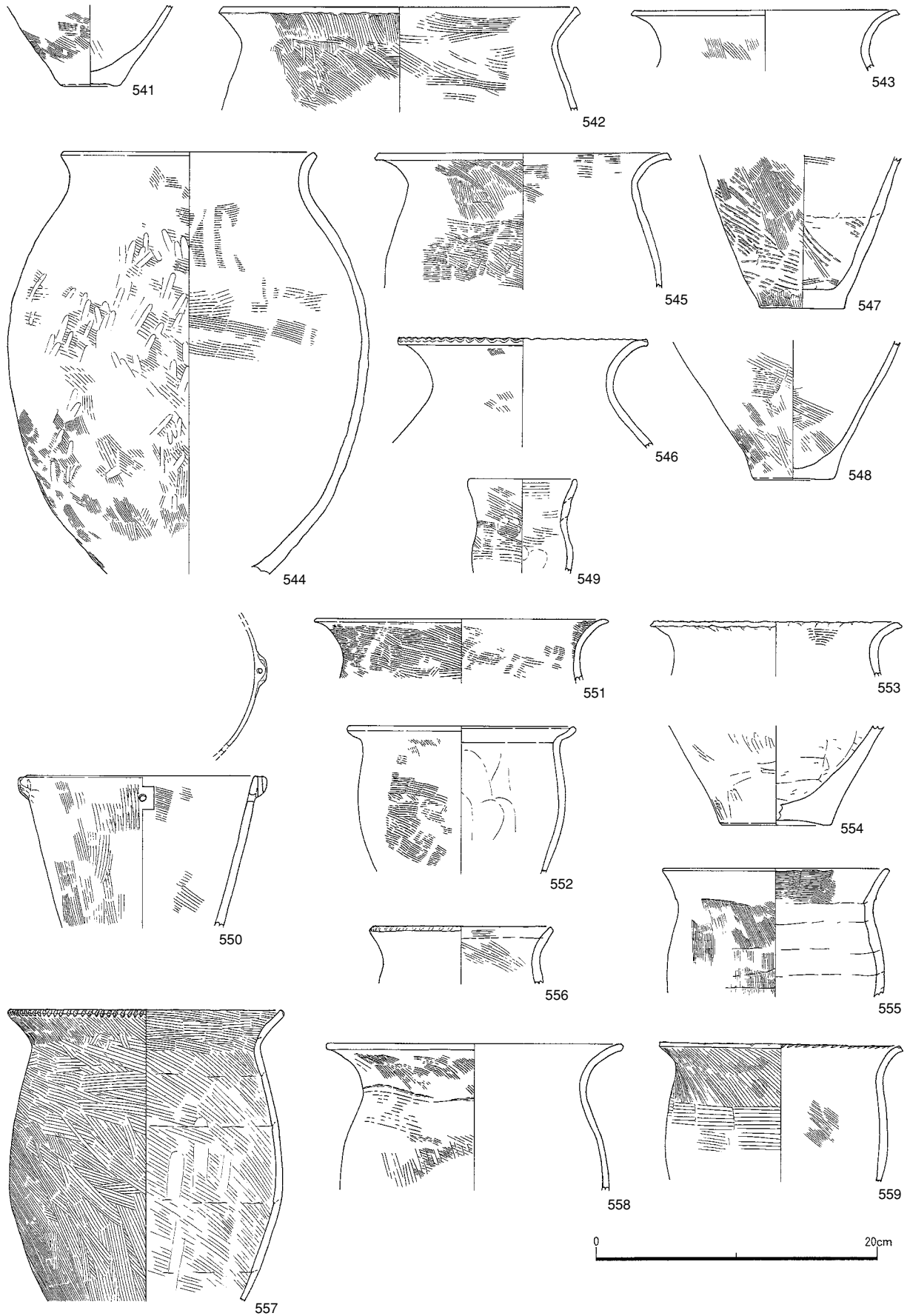
第34図 土坑実測図13 (S = 1 / 40)



第35図 井戸跡・土坑出土土器実測図 (S=1/4)



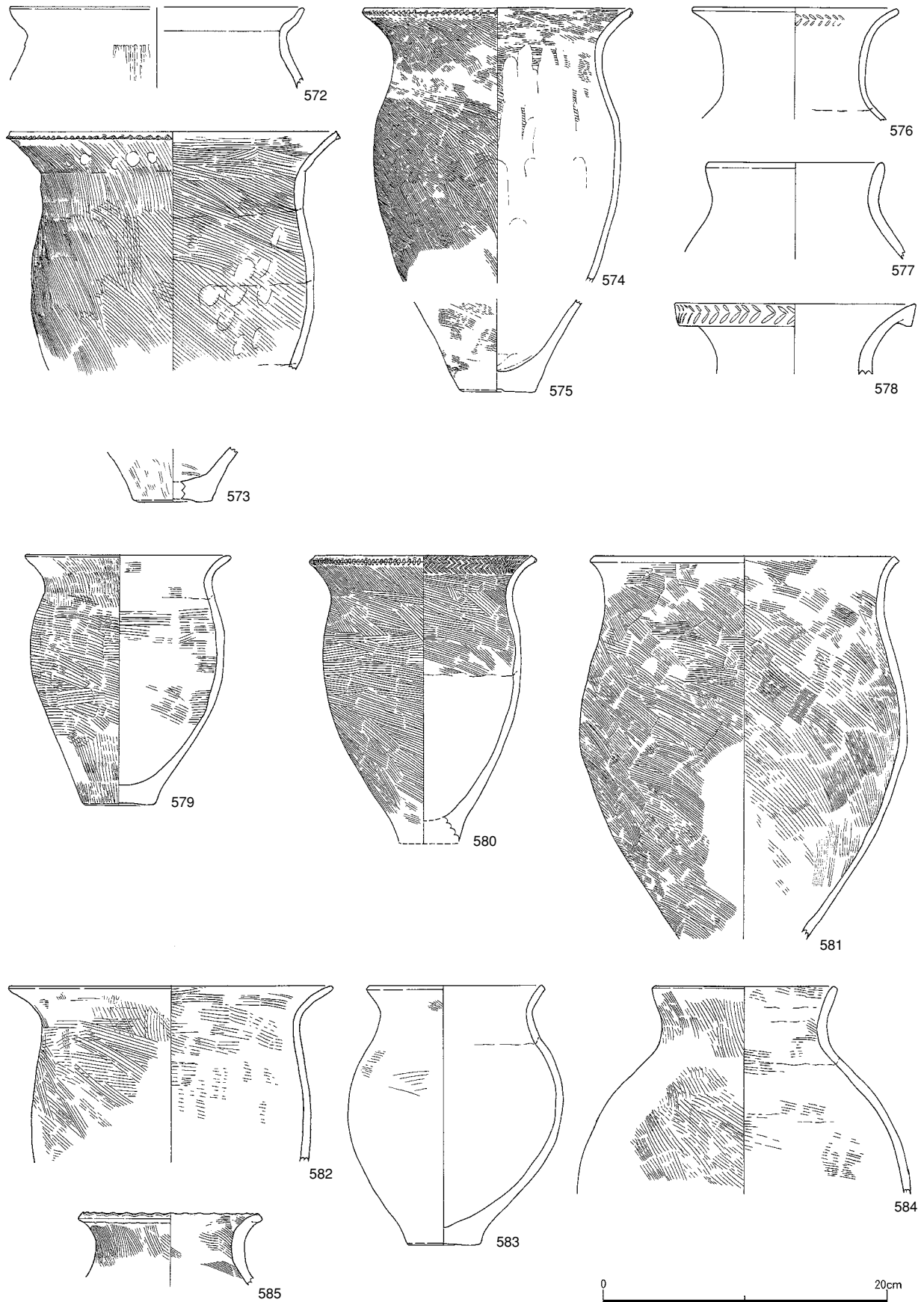
第36图 土坑出土土器实测图1 (S=1/4)



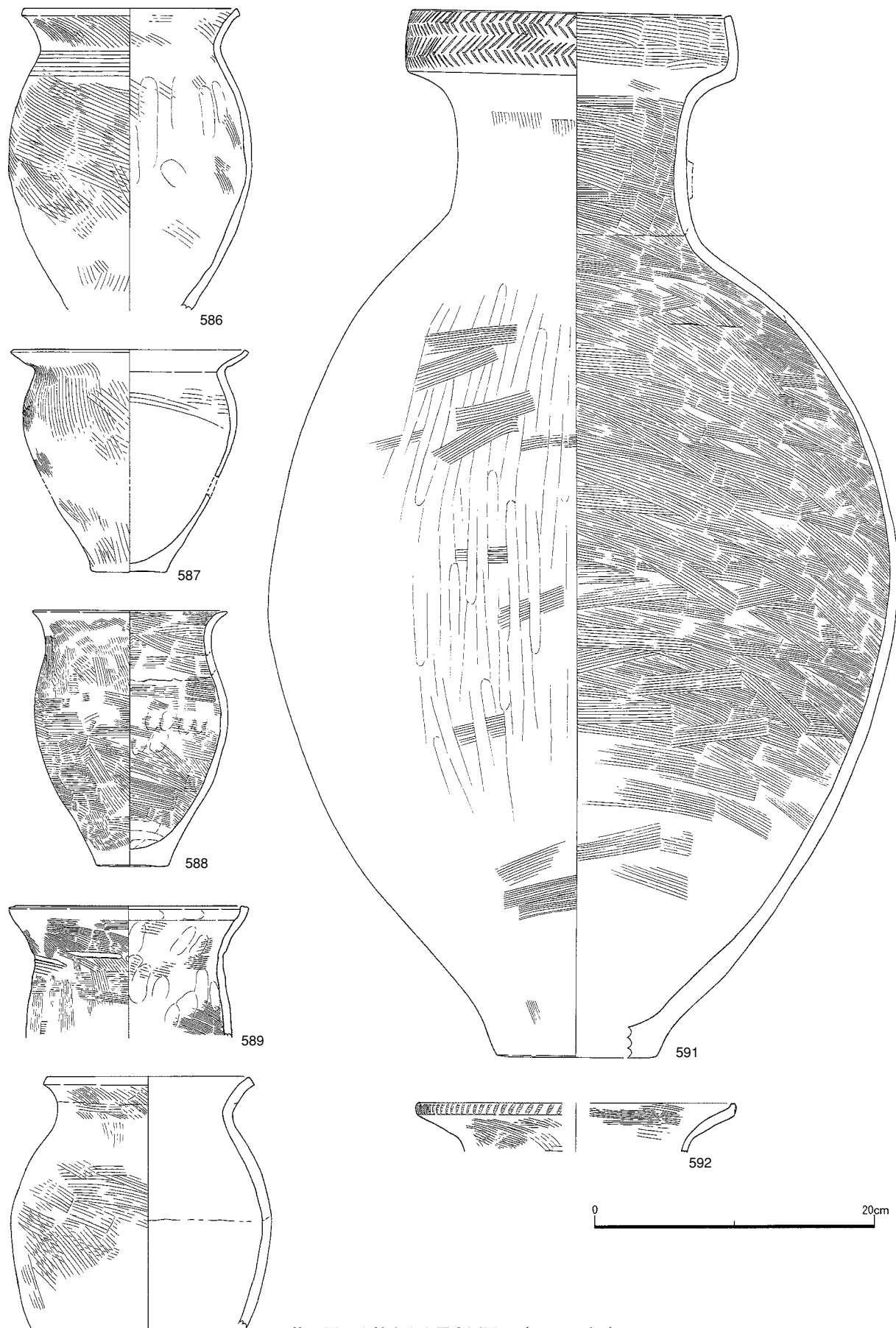
第37図 土坑出土土器実測図2 (S=1/4)



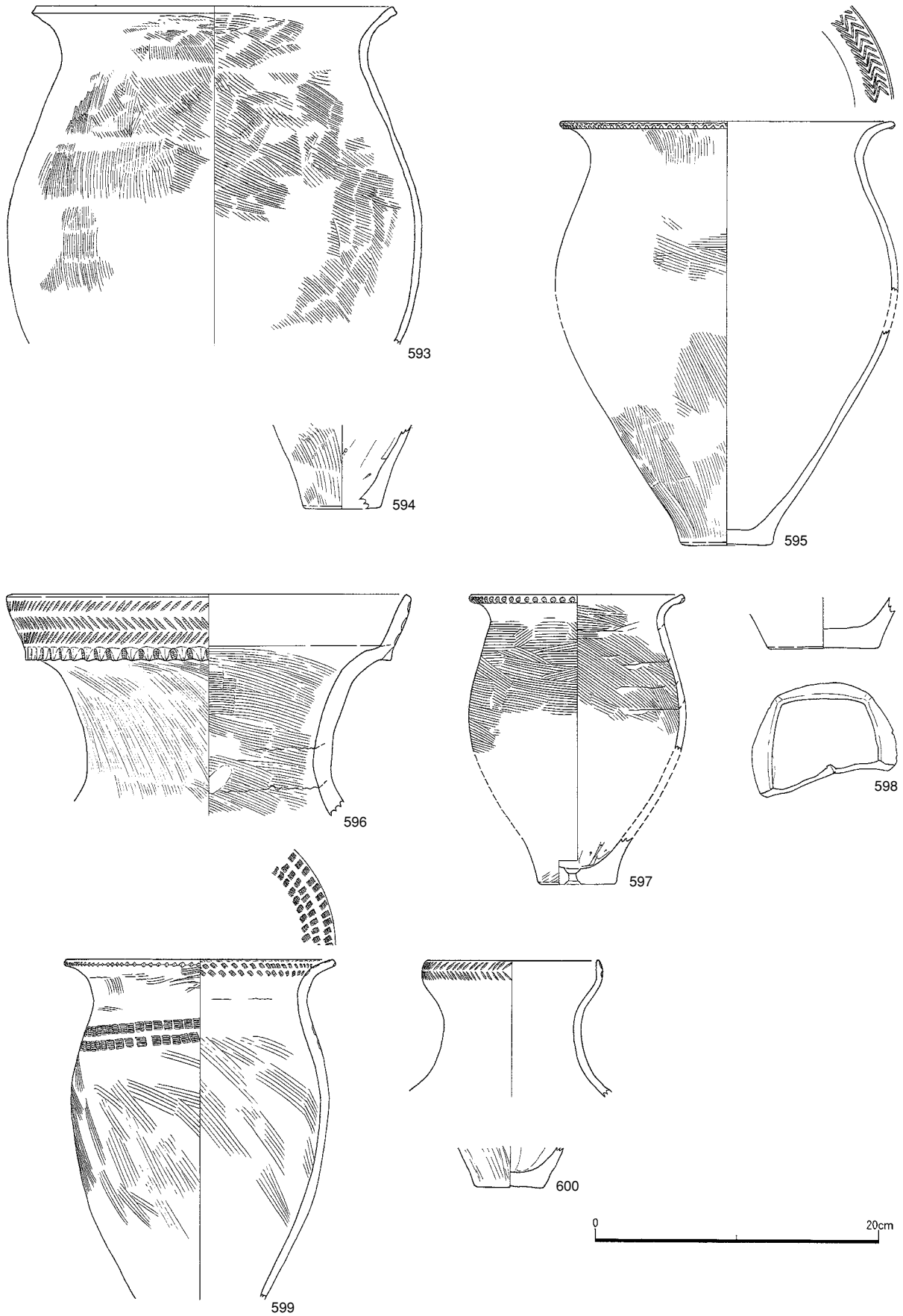
第38图 土坑出土土器实测图3 (S=1/4)



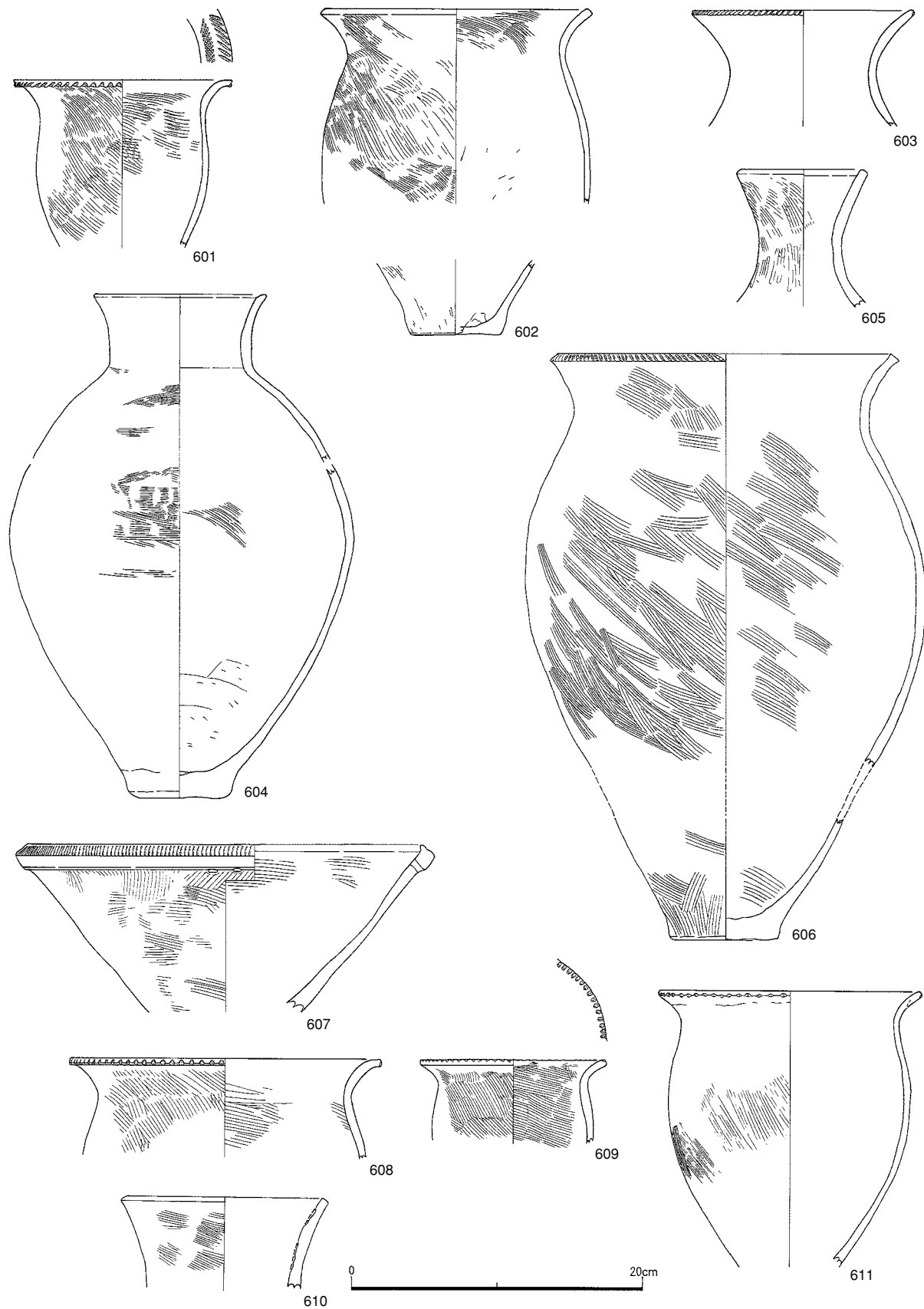
第39図 土坑出土土器実測図4 (S=1/4)



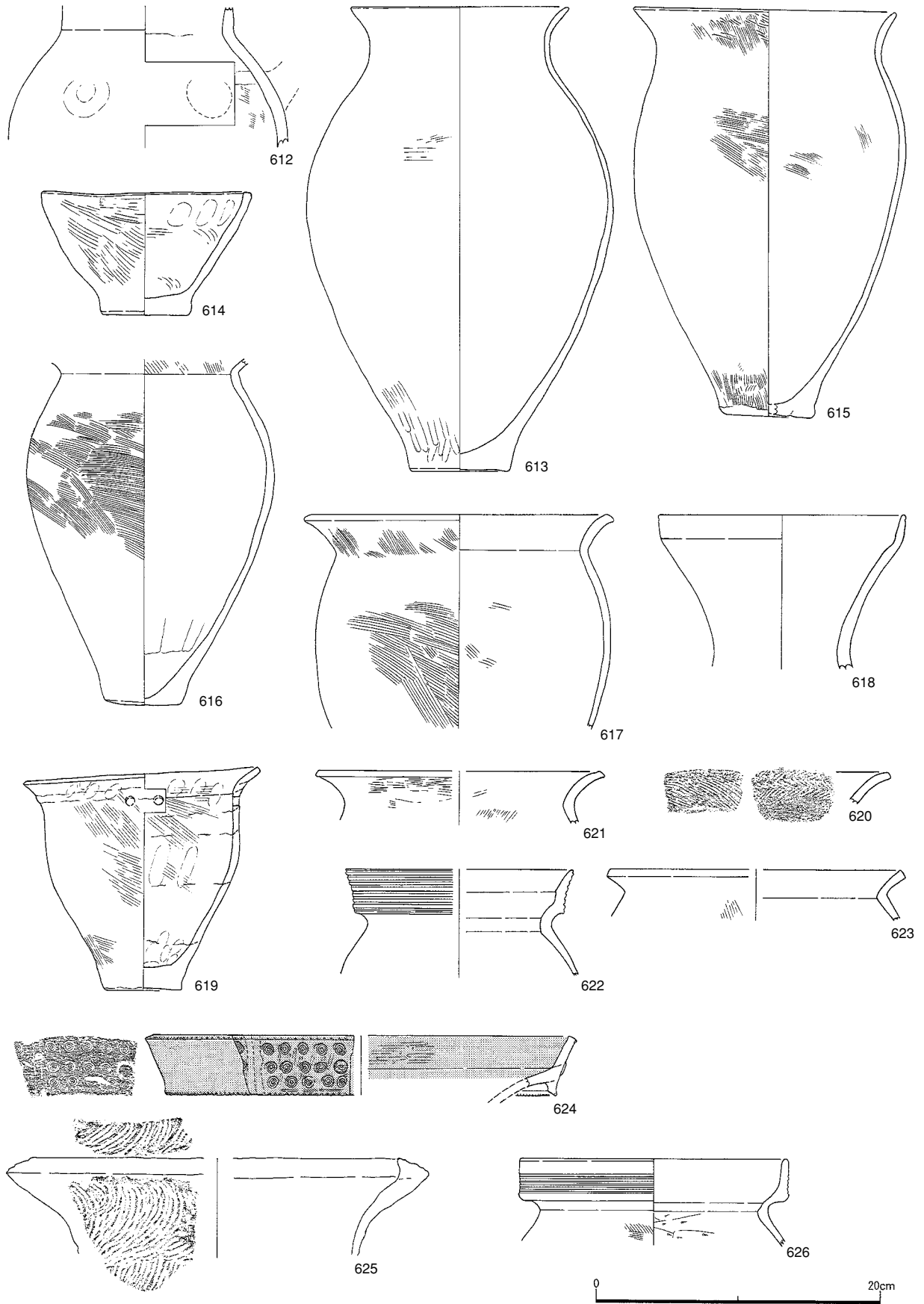
590 第40图 土坑出土土器实测图5 (S=1/4)



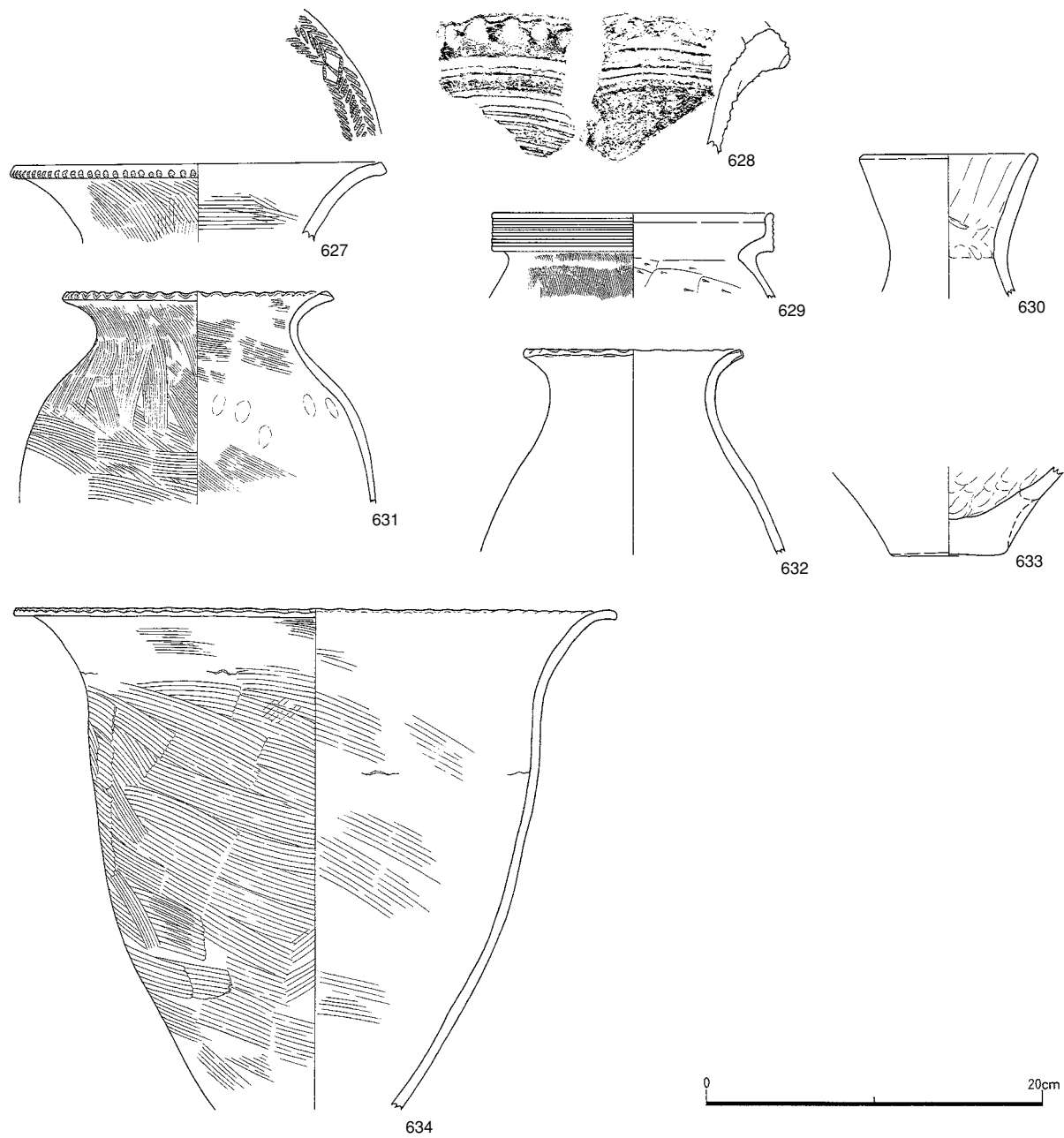
第41図 土坑出土土器実測図6 (S=1/4)



第42図 土坑出土土器実測図7 (S=1/4)



第43図 土坑出土土器実測図8 (S=1/4)



第44圖 土坑出土土器実測図9 (S=1/4)

第5節 溝

南西部（遺構：第45・46図、図版23～25 遺物：第51・52・73図、図版36・37・50）

A4区S D87 主にAM19区に位置する。ほぼ南－北方向にのびており、北方向ではQ1区のS D02とつながる。時代が降る可能性もある。

Q2区S D92 AE20区に位置する。主軸は北東－南西方向。長さ400×幅110×深さ20cmを測る。遺物はJ24の管玉が出土している。

Q2区S D93 AE20・21区に位置する。主軸は北西－南東方向。長さ350×幅50×深さ43cmを測る。底面はほぼ平らで壁面は直に立ち上がる。

遺物は土器643・644を図示した。644の甕は口縁端の下部に刻み内面に斜行短線文を施文する。胴の肩部には縦の短線文をめぐらせている。時期は中期後半に比定できよう。

U区S D22 AE30・AF30区に位置する。主軸は北－南方向で、両端は調査区外までのびる。延長部分の北側は不明だが、南側はL1区S D03につながる可能性がある。幅60×深さ25cmを測る。

C3区S D34 AE19区に位置する。主軸は北西－南東方向。長さ250cm以上、幅66cm前後、深さ45cmを測る。底面はほぼ平らで壁面は直に立ち上がる。

C3区S D58 AD16区に位置する。全形は不明である。当初は溝として認識していたが、周辺地区の調査で延長部分の検出はなかった。よって溝ではなく土坑の可能性が高いと思われる。

C2区S D11 V17区に位置する。主軸は北西－南東方向。長さ360cm以上、幅72cm前後、深さ25cmを測る。底面はほぼ平らで壁面は直に立ち上がる。

C2区S D12 V16区に位置する。主軸は北西－南東方向。長さ150cm以上、幅46cm前後、深さ15cmを測る。

C2区S D19 V17区に位置する。主軸は北－南方向。周辺調査区への延長は不明である。長さ350cm以上、幅70cm前後、深さ8cmを測る。底面には若干の凹凸がみられる。

C2区S D21 AA17区に位置する。不定形な浅い溝である。主軸はほぼ東－西方向。長さ450cmほどである。底面には多くの小穴と中央付近で土坑がみられた。土坑部分は長軸140×短軸116cmの楕円形を呈する。深さは34cmを測る。

遺物は土器645・646を図示した。645は頸部がしまらない器形である。口縁端は面取りされ、下部がやや垂れたようになっている。斜め方向のハケ調整後、胴部にはほぼ横方向のハケ調整を施している。646は壺の頸部であろう。貼り付け突帯にX字状の刻みを施文する。刻みはまず右上がりの斜行線を施文し、その後左上がりの斜行線を重ねX字状としている。時期は中期後半に比定できよう。

R2区S D16 Z18区に位置する。S D01に北側部分を切り込まれている。主軸は北西－南東方向。幅は100cm前後、深さ32cmを測る。

R2区S D19 AA18・19区に位置する。主軸は北東－南西方向。長さ150×幅34×深さ46cmを測る。溝底は狭く、中央部分が低くなっている。壁面は直に立ち上がっている

S1区S D11 AE18区に位置する。溝の形はL字状に屈曲しており全長350×幅50cm前後、底面は凹凸が著しいが最深部で38cmを測る。

土器661は台付鉢とみられる。台部の側面に管状の施文具で円形刺突文をめぐらせている。接合しない口縁付近の破片もあり、推定では破線のように復元できる。

S1区S D20 AD19区に位置する。主軸はほぼ東－西方向。S D21に東端を切り込まれているため

長さは不明。幅48cm前後、深さ21cmを測る。遺物は土器662と663を図示した。時期は中期後半に比定できよう。

北東部（遺構：第47図、図版25～27 遺物：第53～55・64・65・69・71図、図版38～40・45・46・48・49）

W区 S D 55 O18～L16区に位置する。主軸は北西－南東方向。長さ37mほど、幅160cm前後、深さ25cmを測る。北側の延長部分は調査区外にのびる。南方向ではS D 65につながる。

W区 S D 65 T20～Q19区に位置する。主軸はゆるやかに蛇行しつつ北－南方向にのびる。長さ32mほどで幅145cm前後、深さ32cm前後を測る。断面はすり鉢状である。S D 55につづく溝と考えられ、つなげると全長85mに及ぶ。延長部分にあたる南側のD2区では検出されなかった。溝底の標高はS D 65の南端で1.00m前後、S D 55の北端で0.95m前後である。

N2区 S D 09 J23区に位置する。中世溝の下位で検出した。隣接するF区では延長部分を確認できないことから土坑であった可能性が高い。調査区端にあるため全形は不明である。長さ95cm以上、深さ40cm以上を測る。

M3区 S D 21 L24区に位置する。主軸は北東－南西方向。中世の溝によって南東側が削られている。幅80cm前後、深さ10cmを測る。わずかに高低はあるが、浅い溝である。

M3区 S D 42・E区 S D 04・V1区 S D 07 I25区・H26区・G26区に位置する。検出位置と方向からみて一連の溝と判断した。延長約30m、主軸は北東－南西方向である。溝底の標高は南西側が高く北東側が低い。

遺物はM3区 S D 42から土器697～699を図示した。697の壺は口縁部が長く、外展度が大きい。698の壺は口縁端部を指でひねり小波状としている。器形は胴部下半のバランスがあまりよくない。E区 S D 04からはE25・26の土製円盤を図示した。V1区 S D 07からは土器715～717を図示した。715の甕は口縁端の上部を細かく刻んで小波状口縁としている。716は深鉢形土器の口縁部である。上部に横方向の沈線を4条いれ、条痕文帯を挟んで下部にも沈線を2条以上入れる。破片が小さいため定かでないが、一息に線を引くのではなく短線を連続させているようにもみえる。717の壺は口縁外面にX字状の刻みをめぐらせる。715は中期後半、716は晩期末～前期、717は中期前半に比定できよう。

E区 S D 03・V1区 S D 12 G25区・H25区に位置する。検出位置と方向からみて一連の溝と判断した。延長約20m、主軸は北東－南西方向である。V1区 S D 12の横断面は逆台形状にしっかりと掘り込まれており、深さ35cmを測る。覆土は地山に似ており、検出が難しかった。北側は金沢市教育委員会で延長部分が確認されている。

遺物はE区 S D 03から土器685と剥片H1を図示した。685の甕は口径と胴部最大径がさほど変わらない器形である。口縁の外展度も低い。H1の緑色凝灰岩は玉造りの荒割り工程で生じた剥片または石核と思われる。V1区 S D 12からは土器719～726を図示した。719・720の甕は胴部があまり張らず、口縁部が短くあまり外展しない器形である。口縁端部には刻みをめぐらせる。721の甕も胴部はあまり張らないが、頸部の屈曲が719・720よりも明瞭である。722は丸みを帯びた胴部からややすぼまりながら上方に長く頸部がのび、短い口縁部は軽く外側に開く深鉢型土器である。器壁は比較的薄く、内面はナデ調整されるが部分的に粘土紐痕跡が残る。胴部は条痕調整で、肩部には並行する2条の指ナデ凹線が横方向に引かれる。頸部～口縁部にかけては指ナデ凹線による文様帯となっている。文様構成は任意で引かれた斜め方向の指ナデ凹線を下地として上位に波状文、中位に波状文のカーブに沿わせた楕円形文、下位には三重の半円形文と横方向の指ナデ凹線2条が交互に施文される。723は赤彩が施された浮線文系の鉢である。口縁部の小片であるが、外面の上位には6状の沈線が横方向に引かれ、下位にはメガネ

状の突帯がみられる。724は壺か鉢と思われる。胴部の上半部に文様帯があり、肩部にはヘラ状具による横方向の沈線（波状文かは不明）を2条1単位で引き、胴部中ほどにも2条1単位の沈線で緩やかな波状文を引いている。この沈線間に大きくうねる波状文をやはり2条1単位で引いている。波状文のカーブが下向きになる箇所には肩部の横方向沈線から1条の沈線で垂下する水滴形を引いている。また、上述の施文後、沈線間に刺突文を充填している。725の壺は口縁外面に1条の沈線を引き、上下2方向から刻みを施文する。肩部には上から連弧文、直線文、波状文、直線文、三角刺突文、直線文を施文する。726は壺の肩部である。上から簾状文、波状文、円形刺突文、直線文、弧線文で構成される。時期については723は前期、他は中期前半に比定できよう。

V2区S D21 H21区に位置する。主軸はほぼ北-南方向。長さ240cmほど、幅72cm前後、深さ10cmを測る。

V2区S D22 H21区に位置する。S D21の西側に近接している。主軸はほぼ北-南方向。長さ320cmほど、幅90cm前後、深さ10cmを測る。S H42周溝の一部の可能性もある。

V2区S D28・33 主にI20区に位置する。緩やかに蛇行し、ほぼ北西-南東方向にのびる。S D28の一部とS D33は同一の遺構と思われ、調査区内では長さ20mほど、幅110~300cm、深さ30~50cm前後を測る。底面の標高は南東が高く北西が低い。北側では金沢市教育委員会が調査を行っているが、既設の農道部分にあたり確認されなかった。南側の先にはF区S D29 (DN9) がある。

遺物はS D28から土器706~708、S D33から700、709~712を図示した。700の甕は口縁端部を面取りする。ハケ調整は斜め方向の後、肩部のみ横方向に施している。709の甕は口縁下部に縦方向の短線をめぐらせる。710の壺は口縁端面にX字状の刻みをめぐらせる。711は大型壺の口縁部である。口縁外面の上位には刻みによる山形文がめぐり、中位に横方向の刻みを連続させた2本の線が並行する。下位にはX字状の刻みがめぐらされている。712は大型壺の底部である。外面下部はケズリ調整が施される。石器はS D28出土のS 77が蛇紋岩製の扁平片刃石斧である。S D33からはS 36の石鎌の他に、図示していないが分割施溝のある緑色凝灰岩の形割片も出土している。時期は中期後半に比定できよう。

第6節 河 道

DN9（遺構：第48~50図、図版27~29 遺物：第56~67、69~73図、図版40~44、46~50）

E区S D022を東端としてM1区S D022→M3区S D46→F区S D09・29→N2区S D30→F区S D04→W区河道（北西端）と連なる河道である。蛇行しつつ南東から北西へ流れる。弥生時代から古墳時代にかけて、若干流路を変えながら機能していた。本章で扱った土器の三分の一ほどが、この河道からの出土である。

また、M3区S D46では花粉分析と植物珪酸体分析を実施している。詳しくは第6分冊（畝田西遺跡群Ⅳ）をご覧ください。

遺物は土器728~775、800~853を図示した。

743・744は長竹式の鉢と思われ、2条の沈線間に押し引き状の刺突列点を施文する。本章で扱った最も古い土器である。750の甕は口縁端部に縦方向の刻み。頸部に直線文、その下に横位の綾杉状文を底部付近まで施文する。中期前半に比定できる。752の壺は口縁端部を指頭によるひねりを加え小波状とする。ハケ調整の上に赤彩痕がわずかに残り、頸部下位には沈線文か櫛描文が引かれる。754は山陰または山陽地方の影響を受けた壺で、施文具に貝殻が用いられている。中期後半に比定できる。760は赤彩の器台である。終末期に比定できる。761は鉢の紐孔突起部分である。木製容器を模倣したものとみ

られる。中期後半に比定できる。787は高杯の杯部外面と口縁端にスタンプ文が施文される。外面のスタンプには2種類が使われており、ひとつは渦文が2個1対であり、もうひとつは渦文と思われるが、はっきりしないものが単体で押される。おそらくこの2種類を交互に施文したと思われるが、口縁端部も含めて残りが悪いため定かでない。時期は後期に比定できる。789は小型鉢形土器で小さな把手が付く。813の壺は東海系壺の影響を受けた器形で、胴部中位の屈曲部より上位に文様が施文される。頸部と胴部中位に櫛状具で緩やかな波状文が引かれる。その間には土器の全周を4分割する大きな波状文を引くがバランスがとれていない。波の下がる部分には5個または6個のボタン浮文を縦に貼り付けるが、波状文のバランスが良くないため波の上がる部分にもボタン浮文を貼り付けている。そのためボタン浮文の列は6列になるようである。中期前半に比定できる。851は装飾器台で終末期に比定できよう。

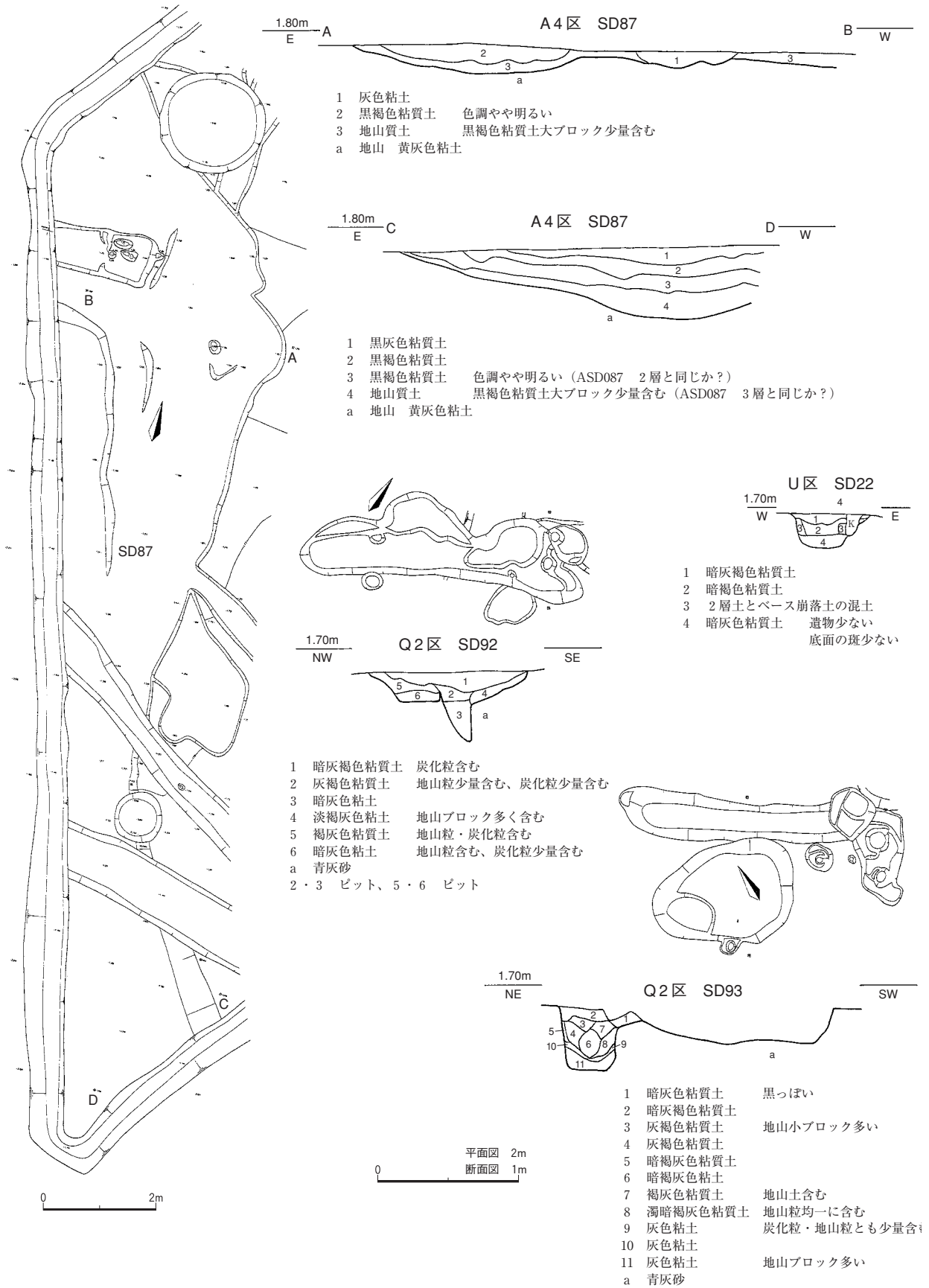
石器はS40・47～49の石鏃、S53の大型石錘、S63の敲石、S70の磨製石斧、S87の玉砥石、剥片H8・15、管玉未成品T4などが出土している。S53は左側面を欠損するが、長軸長24cmを測る大型の石錘である。正面はかまぼこ形にふくらみ、背面はほぼ平らである。正面中央に幅3cmほどの溝を短軸方向に有するが、上方で一部途切れている。また、背面その他で溝はみられずに自然面を残す。縄などを掛けるための溝と思われ、正面上側の溝内には摩られた痕跡がみられる。

土製品はE27・E28の土製円盤が出土している。

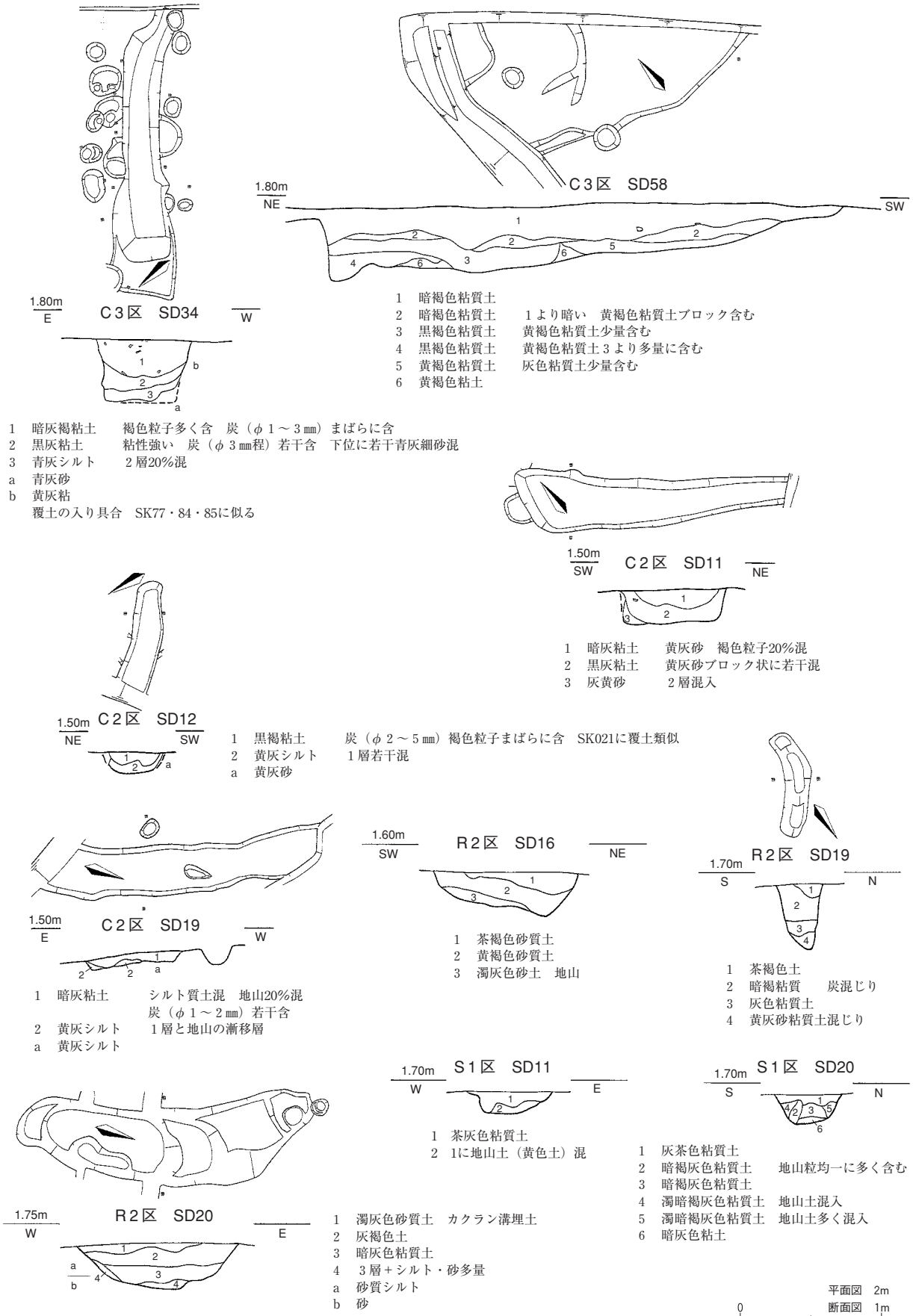
なお、文中で特に触れなかった土器776～799は、位置的に混じり込みや掘りすぎたことより別の遺構出土として取り上げた可能性が高く、本来はDN9に包含されていたものと考えられる。

第6表 弥生溝・河道一覧

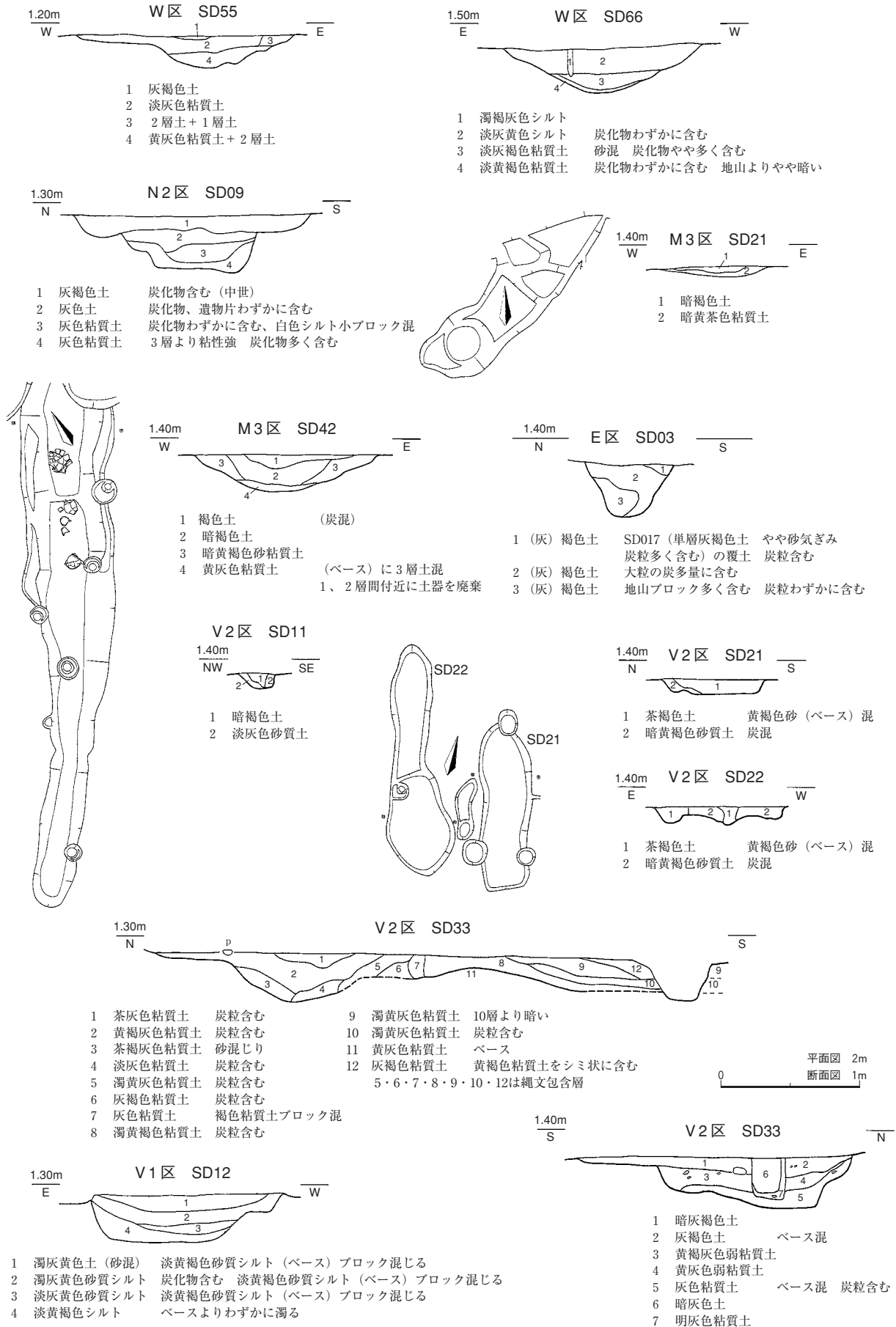
地区	遺構名	グリッド	実測遺物	備考
A4	SD87	A M19周辺		
Q2	SD92	A E 20	J24	
Q2	SD93	A E 20・21	643、644	
U	SD22	A E 30・A F 30		
C3	SD34	A E 19		
C3	SD58	A D 16		
C2	SD11	V 17		
C2	SD12	V 16		
C2	SD19	V 17		
R2	SD16	Z 18		
R2	SD19	A A 18・19		
S1	SD11	A E 18	661	
S1	SD20	A D 19	662、663	
W	SD55	O 18～L 16		
W	SD65	T 20～Q 19		
N2	SD09	J 23		
M3	SD21	L 24		
E	SD03	H 25	685、H1	
V1	SD12	G 25周辺	719～726、(727)	
M3	SD42	I 25	697～699	
E	SD04	H 26	E25・E30	
V1	SD07	H 26	715～717	
V2	SD21	H 25		
V2	SD22	H 21		
V2	SD28	I 20	706～708、S77	
V2	SD33	H 19周辺	700、709～712、S36	
E	SD22	K 27周辺	728～736	
M1	SD22	L 25周辺	737～745	
M3	SD46	K 25周辺	746～775、(777～791) S70、T4	
F	SD09	I 23周辺	800、801、816～818、828 (792～799)、S40・S47・S48	河道 (DN9)
F	SD29	I 22周辺	802～815、819～827、829 ～841、E27・E28、S49、S50 S63、S87、H8、H15	
N2	SD30	J 20周辺	842～850、S53	
W	川	J 17周辺	851～853	



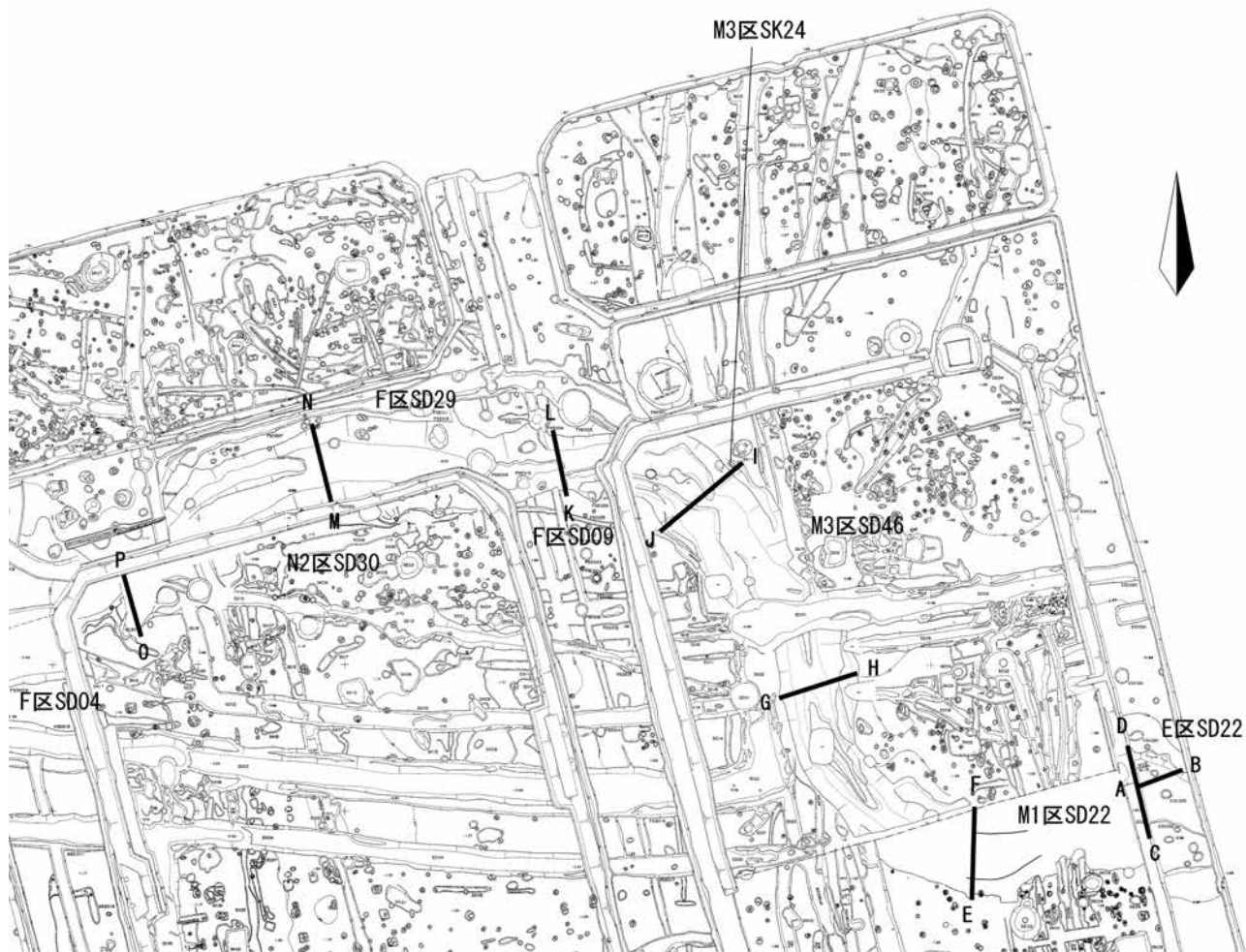
第45図 溝突測図1 (S=1/100・1/80・1/40)



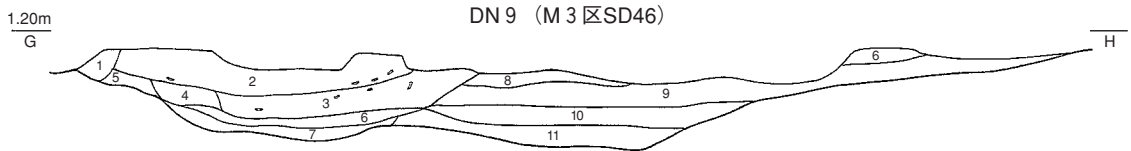
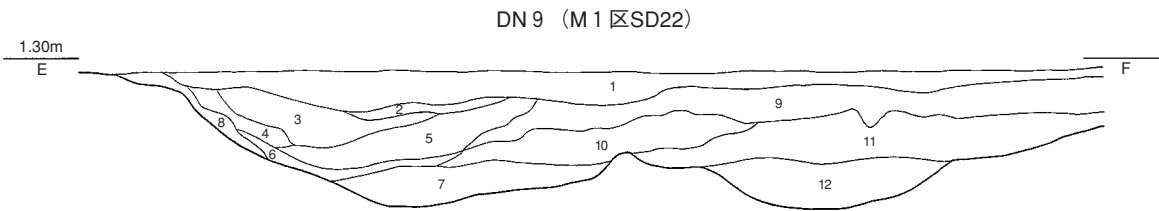
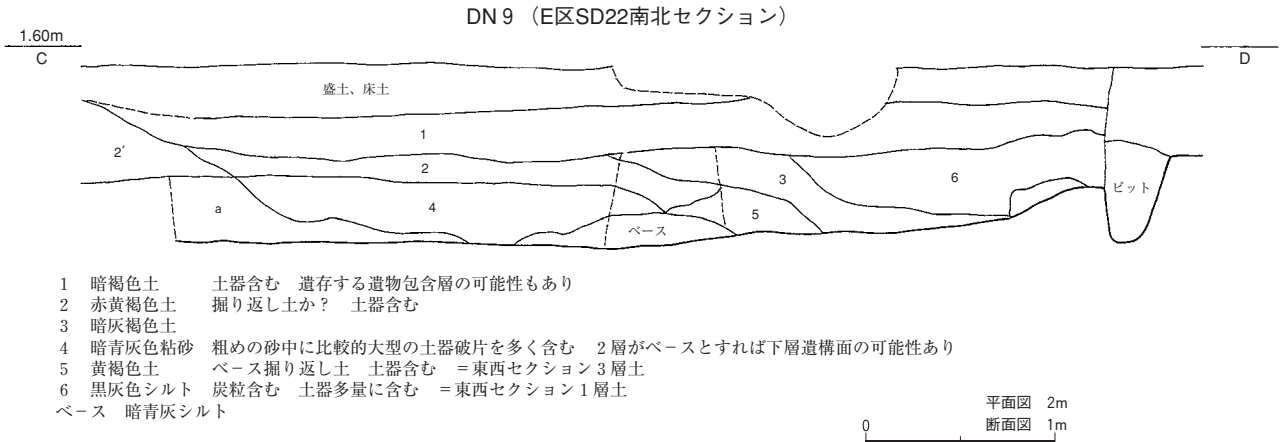
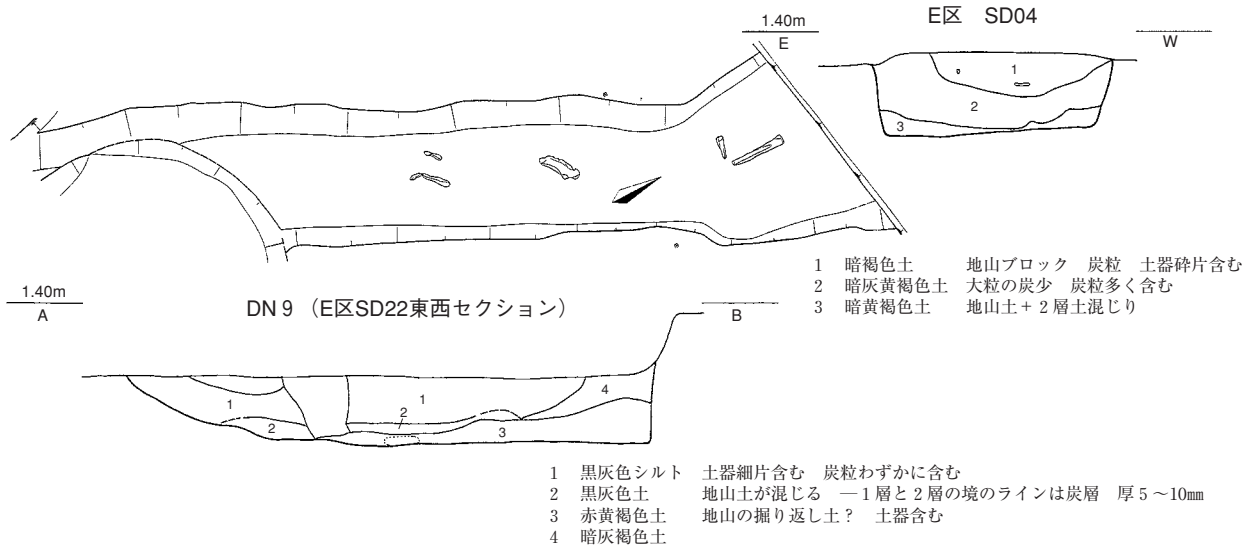
第46図 溝実測図2 (S=1/80・1/40)



第47図 溝実測図3 (S=1/80・1/40)



第48図 DN9 (弥生) 案内図 (S = 1 / 500)



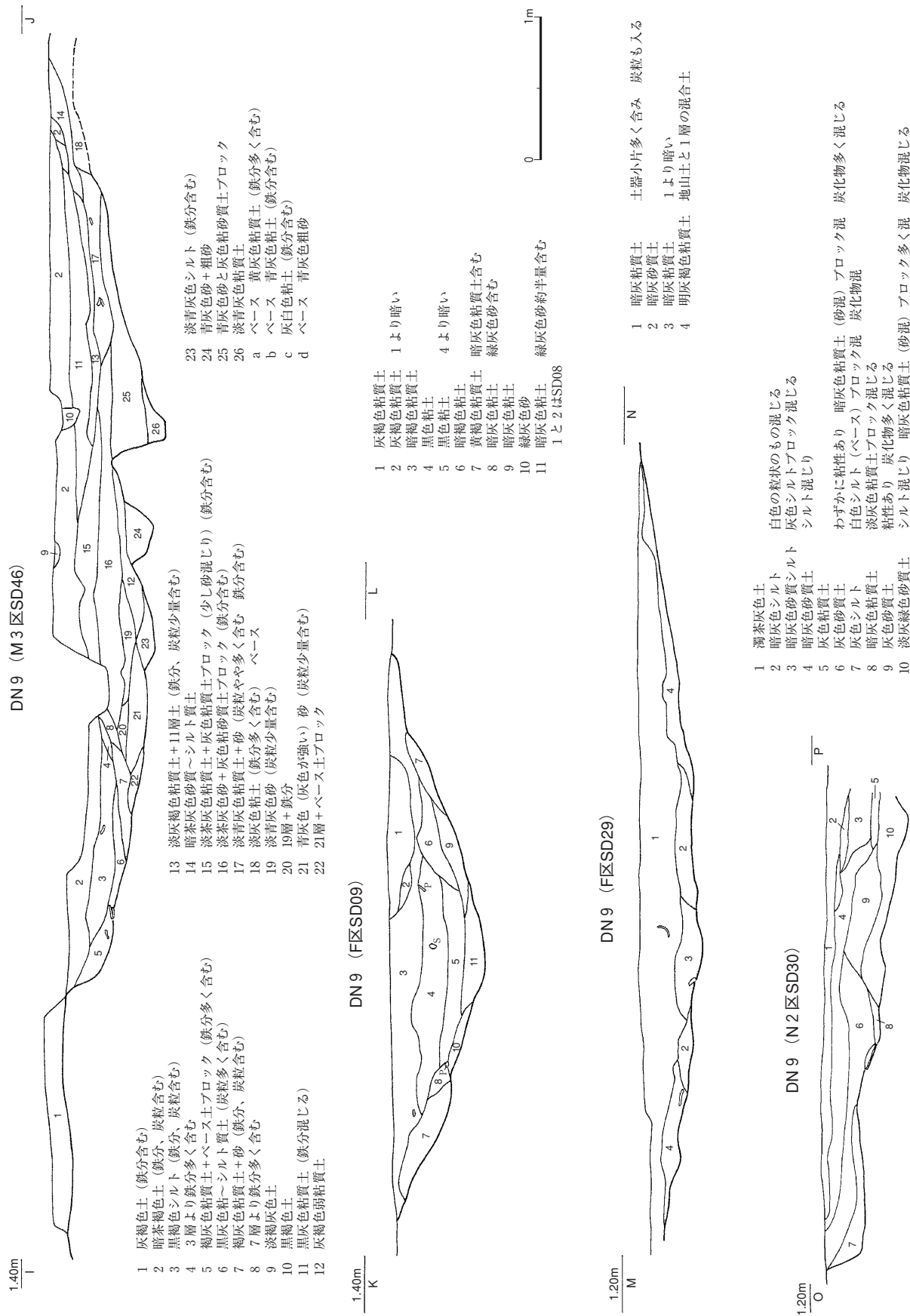
DN 9 (M1区SD22)

- | | |
|------------------|---------------|
| 1 暗灰色粘質土 | 黄灰色微細ブロック含 |
| 2 暗灰色粘質土 | 1・2層より黒っぽい |
| 3 暗灰色粘質土 | 黄灰色微細ブロック含 |
| 4 暗灰色粘質土 | 炭層含 |
| 5 黒褐色粘質土 | 炭粒含 |
| 6 黒灰色粘質土 | 炭層含 |
| 7 灰褐色粘質土・濁青灰色砂混土 | 炭粒含 下層 |
| 8 暗褐色粘質土 | 黄灰色粘質土混土 |
| 9 暗褐色粘質土 | |
| 10 黄灰褐色粘質土 | |
| 11 黄灰褐色砂粘質土 | 炭粒含 |
| 12 濁青灰色砂質土 | 灰褐色粘質土 炭粒含 下層 |

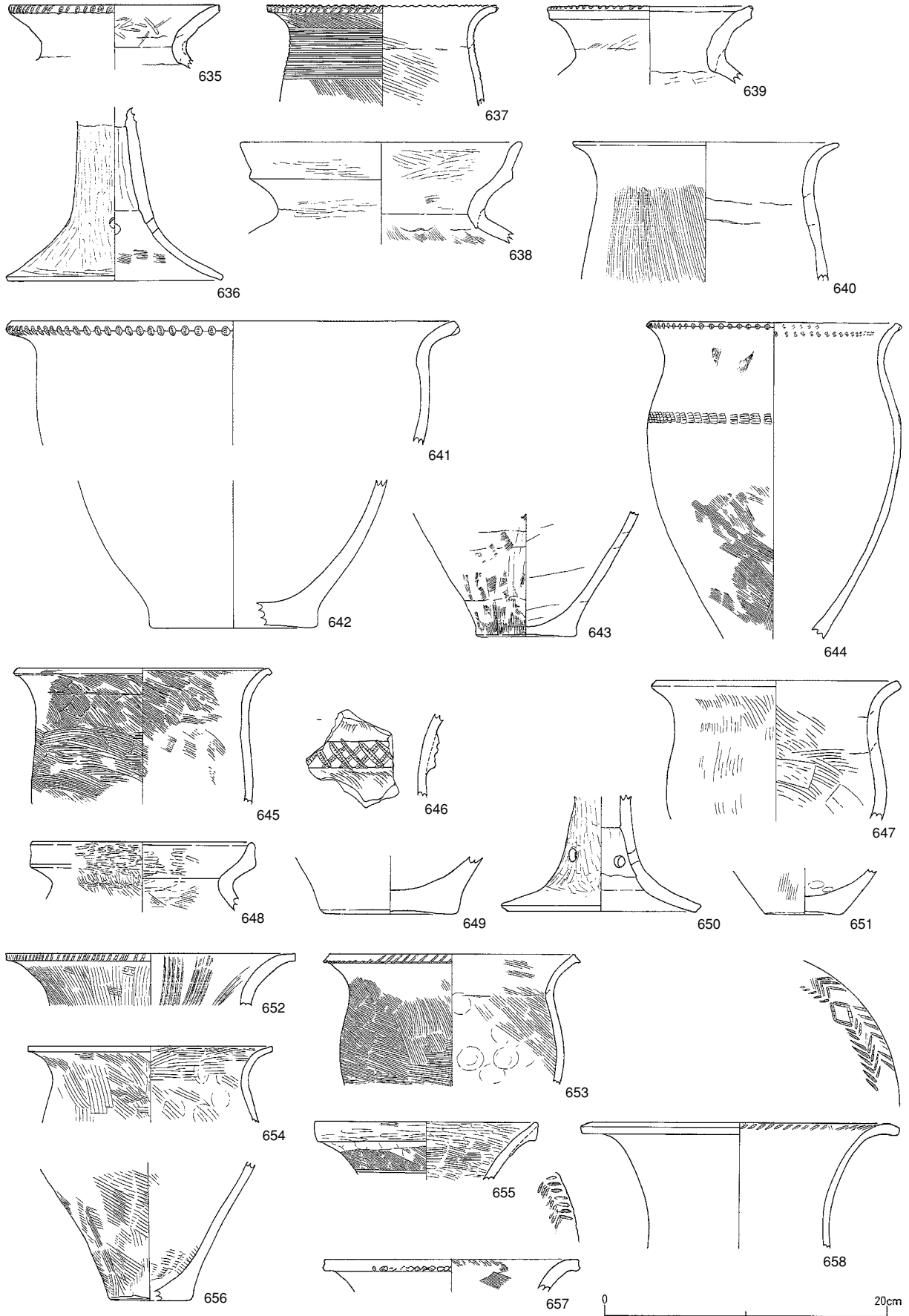
DN 9 (M3区SD46)

- | | |
|------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色土 | |
| 2 暗茶褐色土 | |
| 3 黒褐色シルト | 炭化物多く混じる |
| 4 暗茶褐色シルト | |
| 5 茶褐色土 | 灰色シルトブロック混 淡黄褐色砂質シルト(ベース) ブロック混じり |
| 6 黒灰色粘質土 | 黒色粘質土が葉理状に入る |
| 7 淡青灰色砂質土 | 灰褐色粘質土ブロック混じる |
| 8 暗茶灰色土 | |
| 9 茶灰色砂質シルト | 炭化物わずかに混、灰色シルト小ブロック多く混じる |
| 10 青灰色砂質土 | 炭化物含む |
| 11 青灰色砂質土 | 粗砂 灰色シルトブロックわずかに含む |

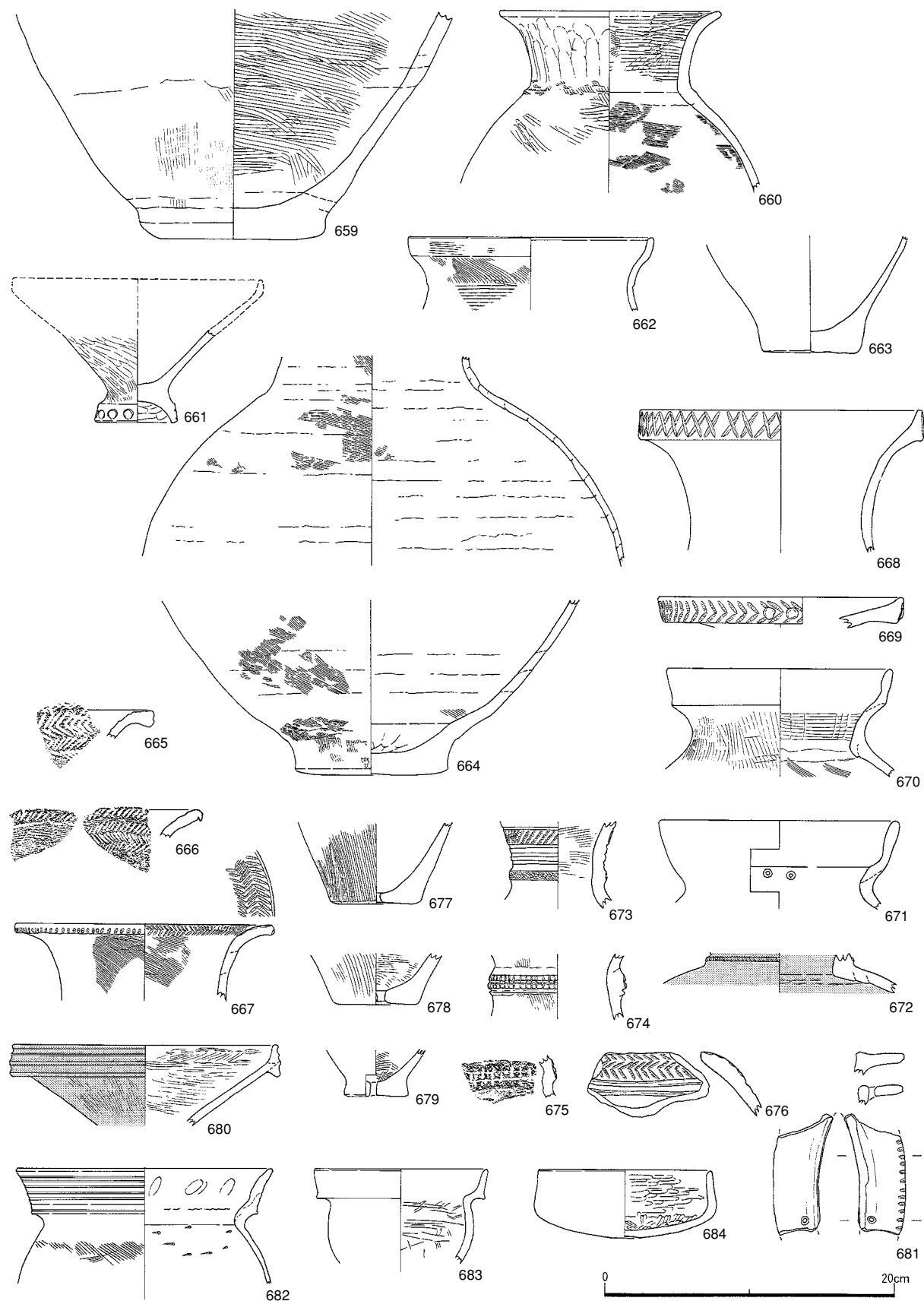
第49図 E区SD04、DN 9 (弥生) 土層図1 (S=1/80・1/40)



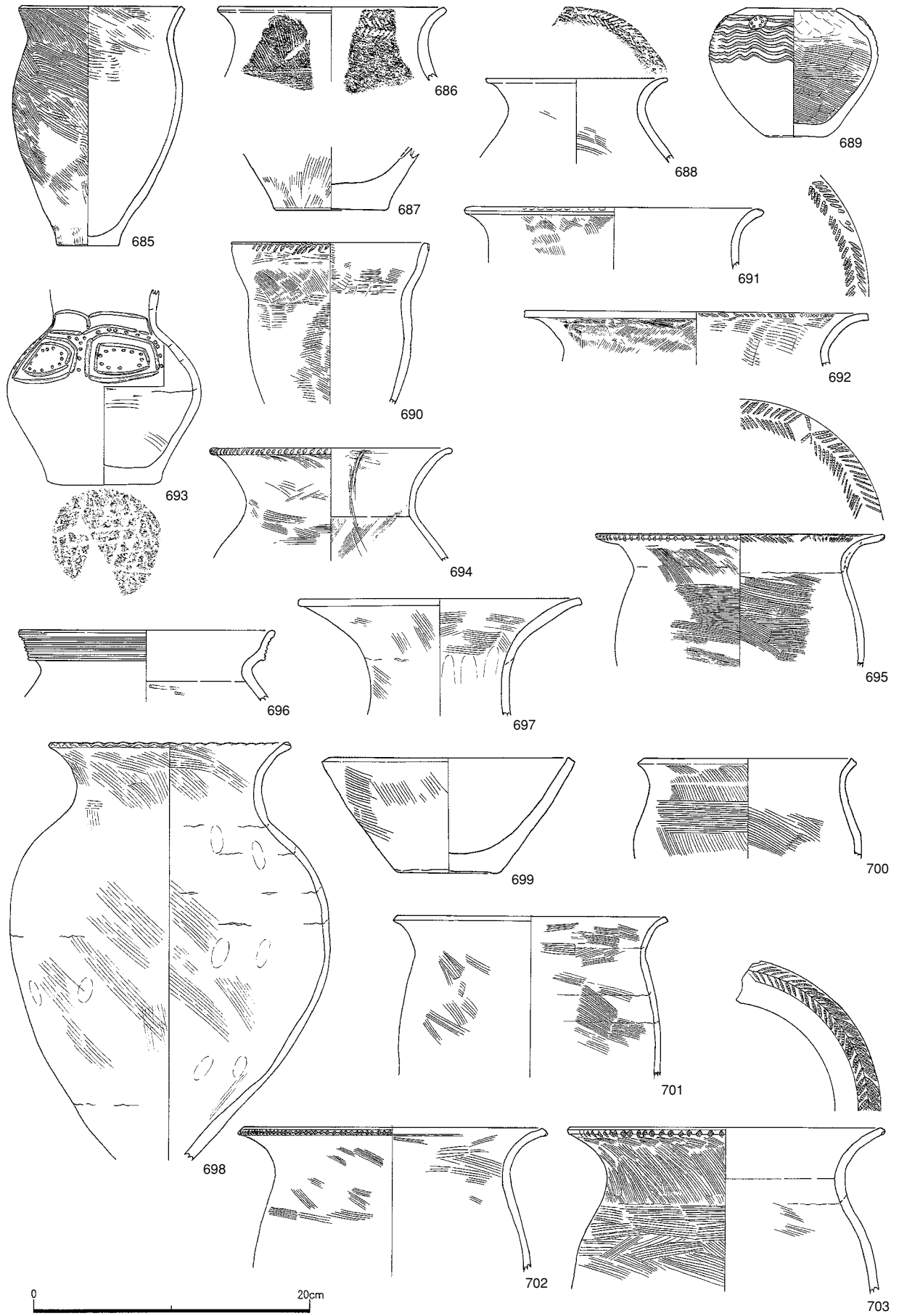
第50図 DN 9 (彌生) 土層図2 (S = 1 / 40)



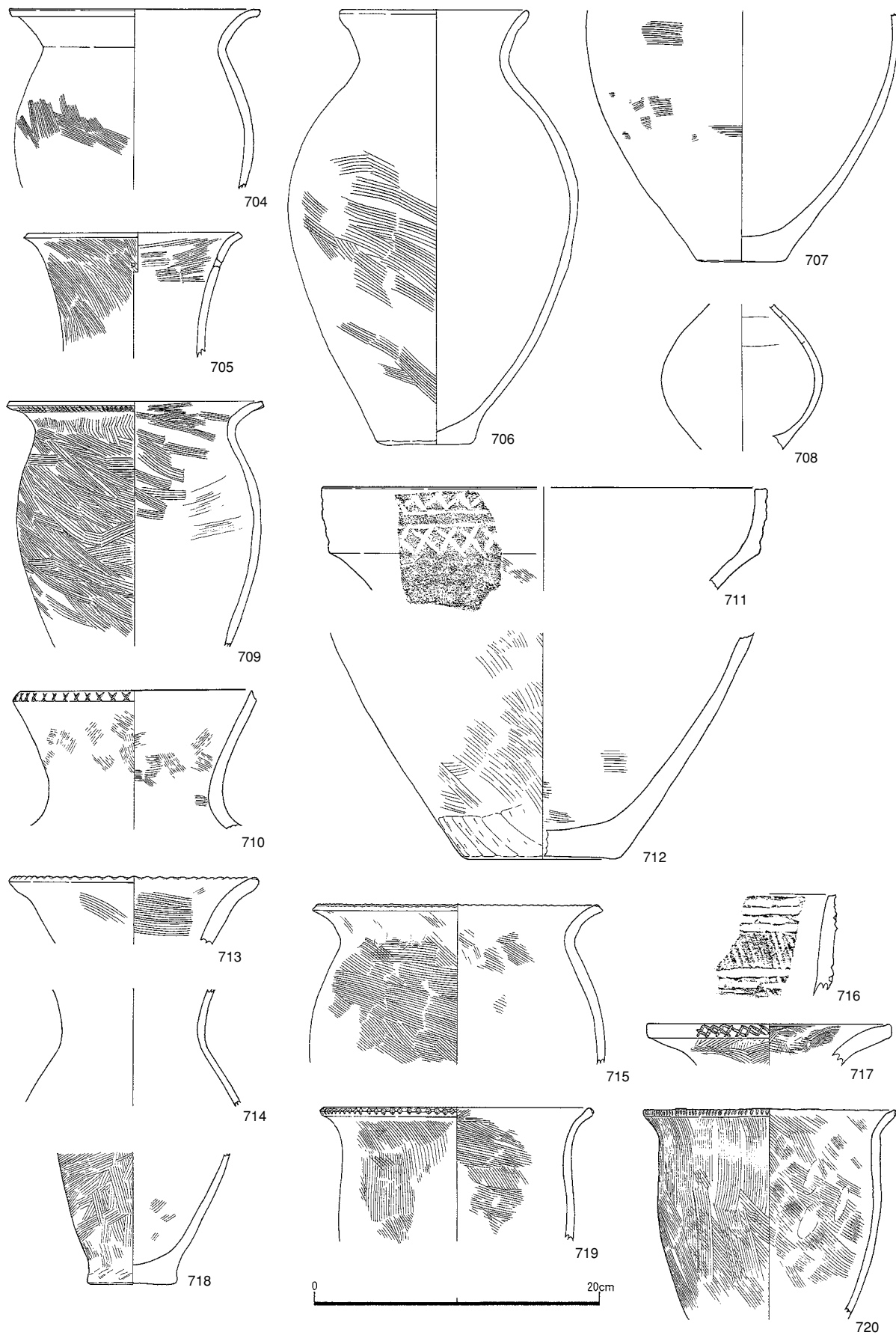
第51図 溝出土土器実測図1 (S=1/4)



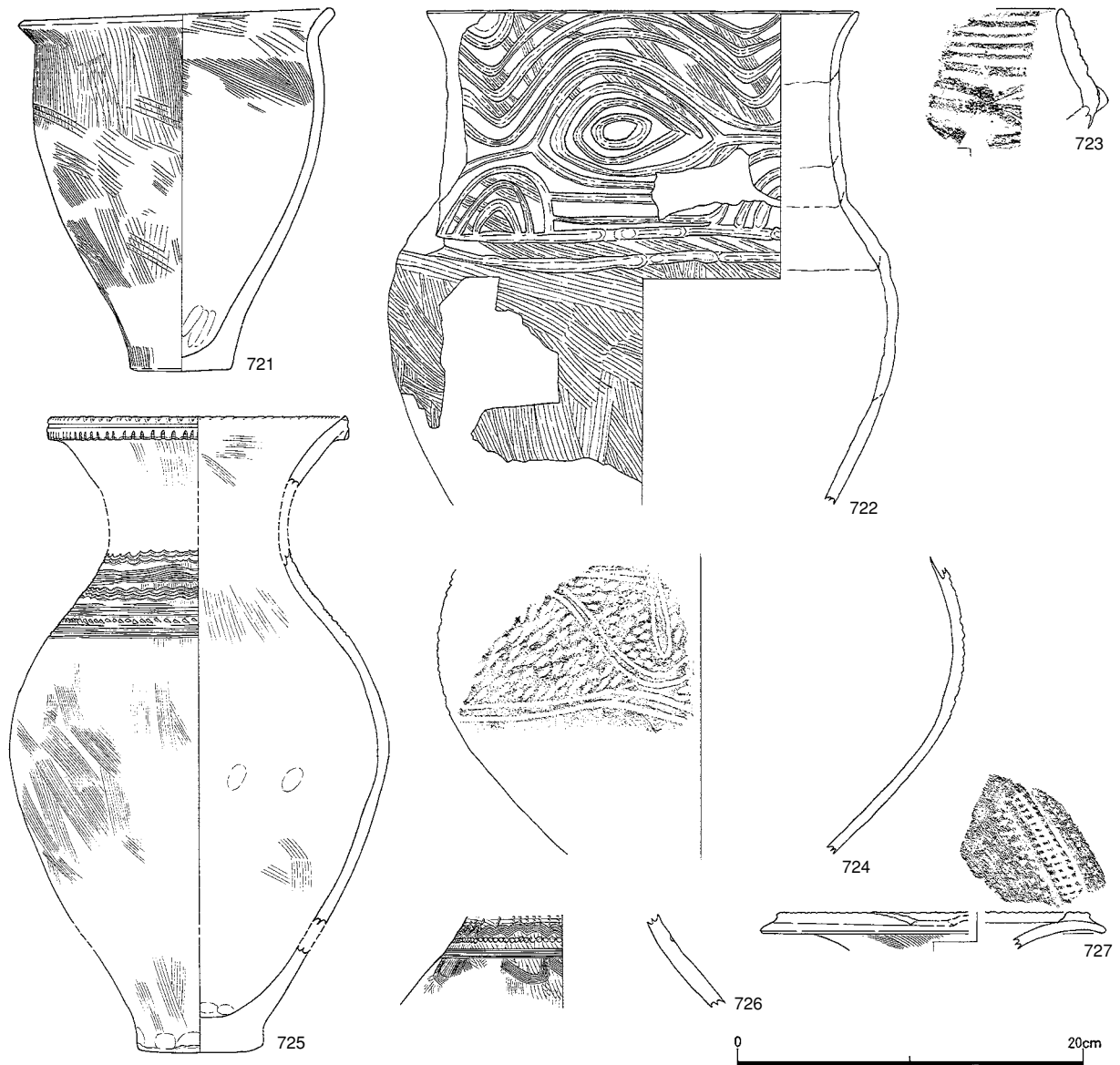
第52図 溝出土土器実測図2 (S=1/4)



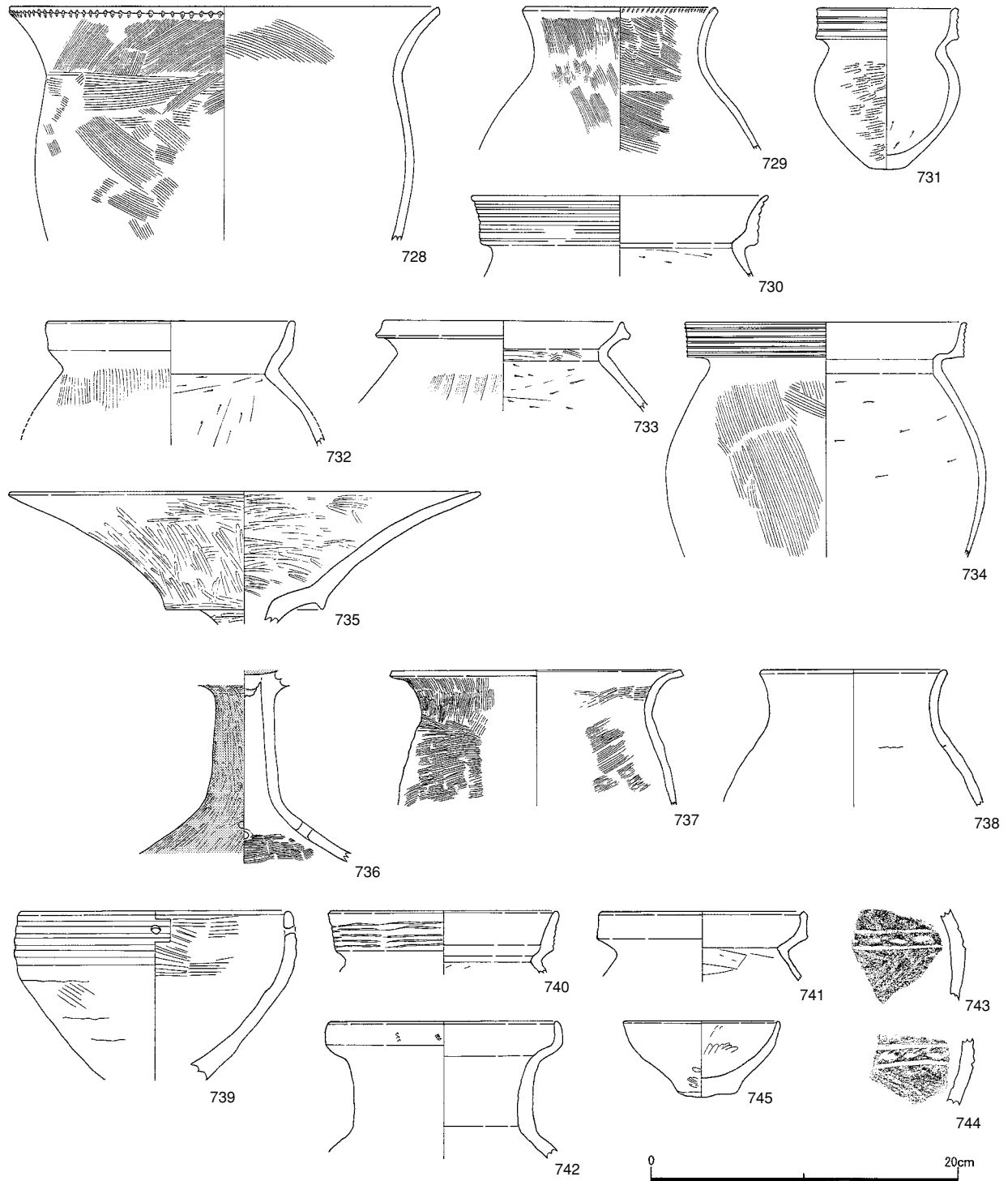
第53図 溝出土土器実測図3 (S=1/4)



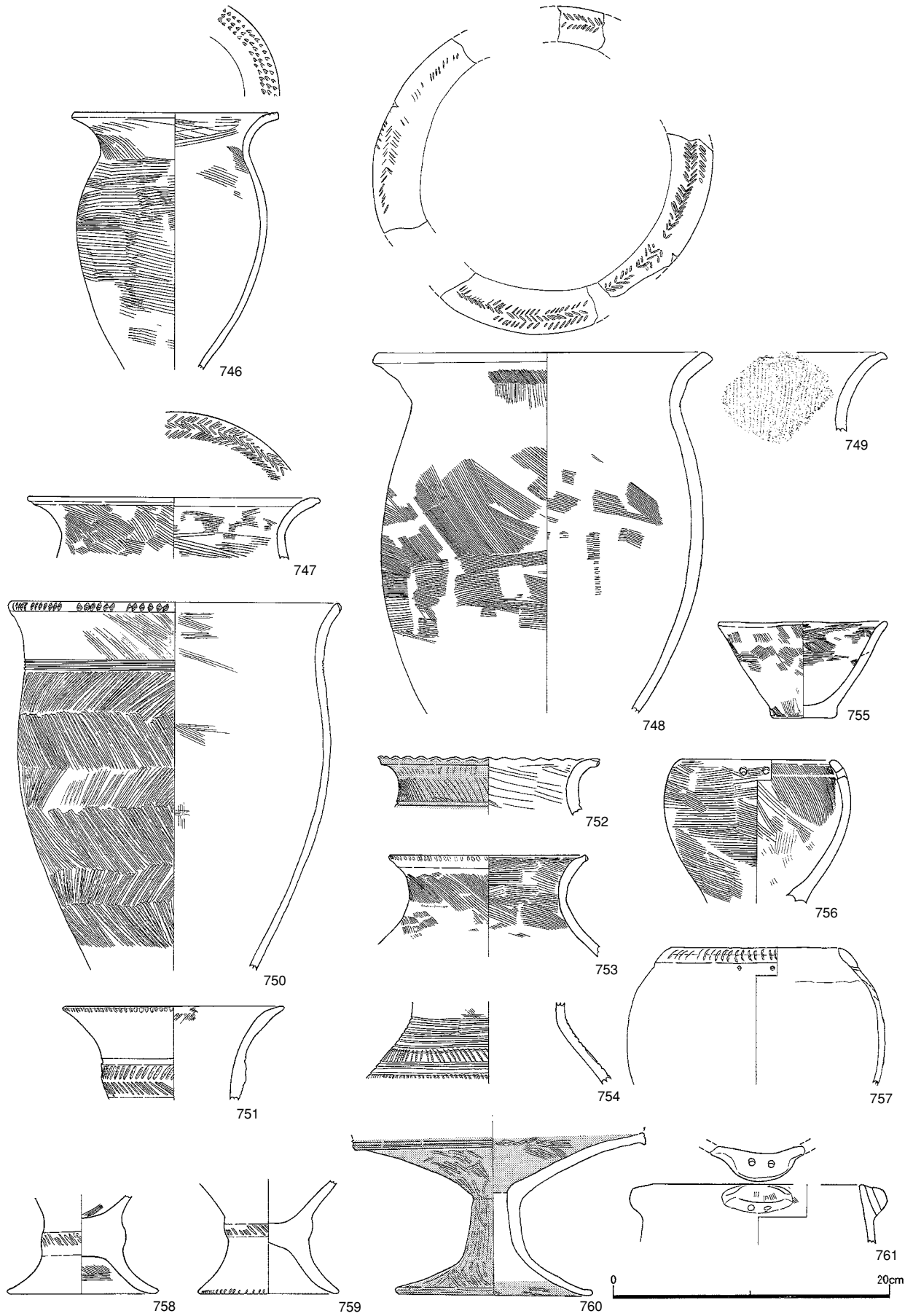
第54図 溝出土土器実測図4 (S=1/4)



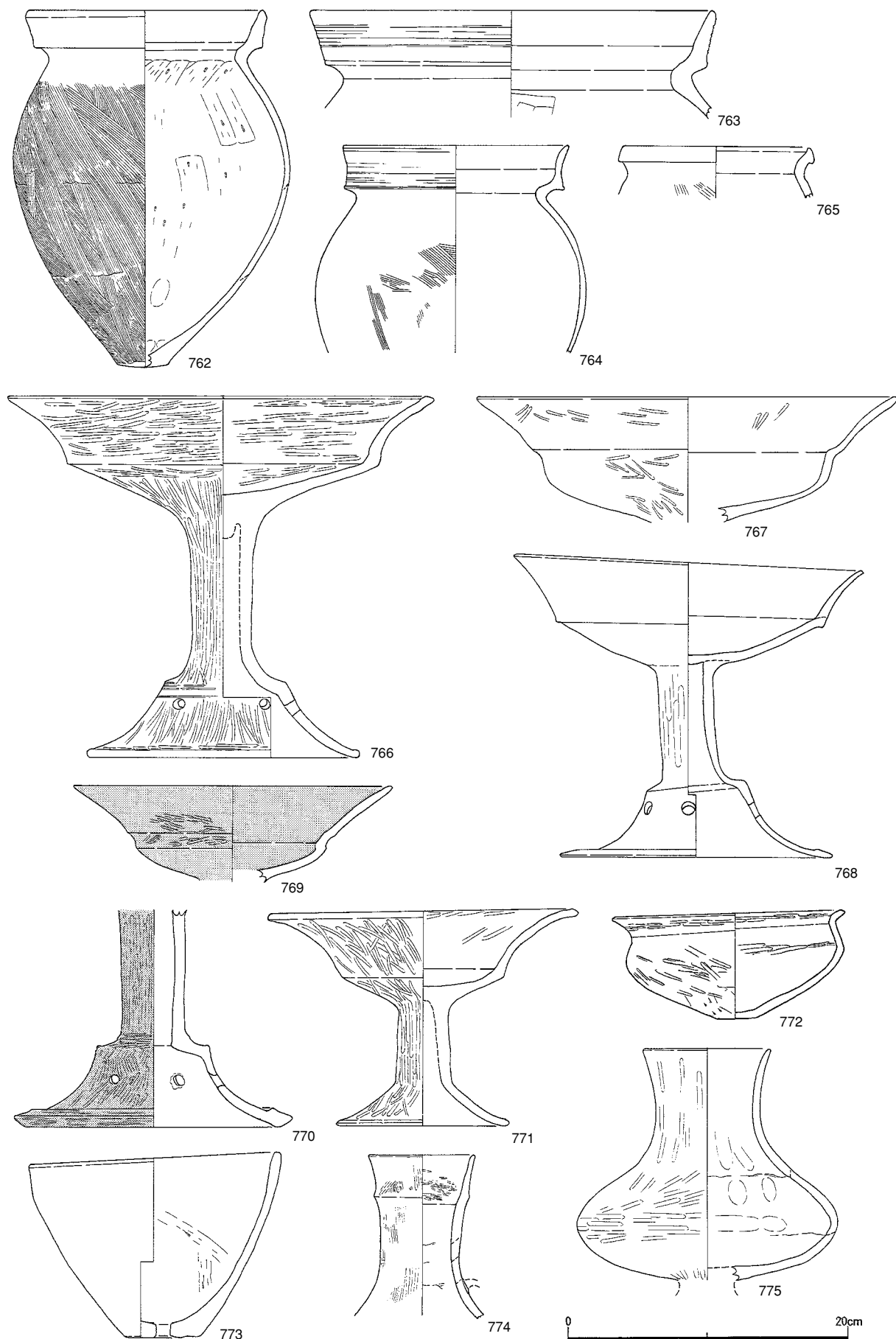
第55図 溝出土土器実測図5 (S=1/4)



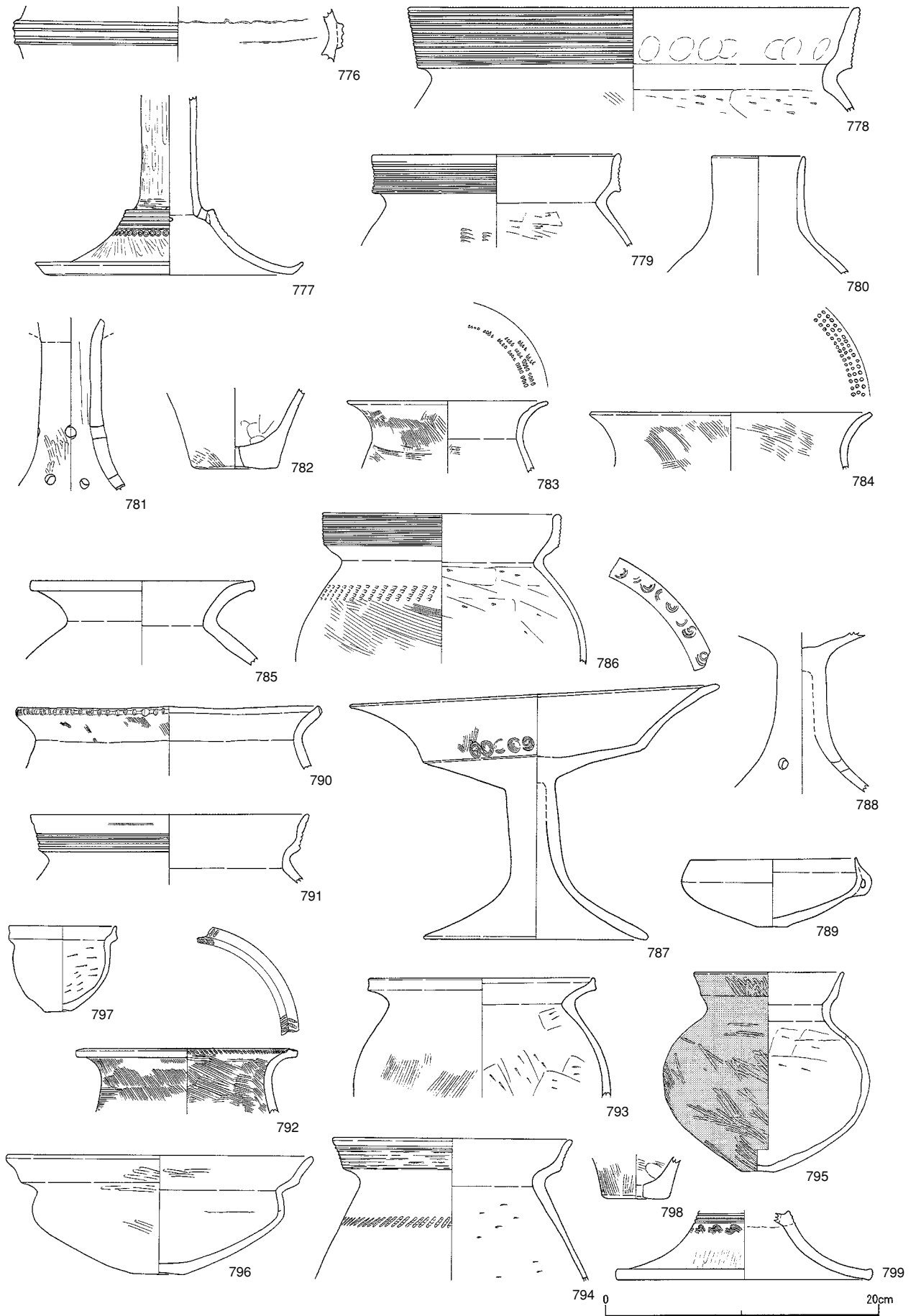
第56图 DN9 (弥生) 出土土器实测图1 (S=1/4)



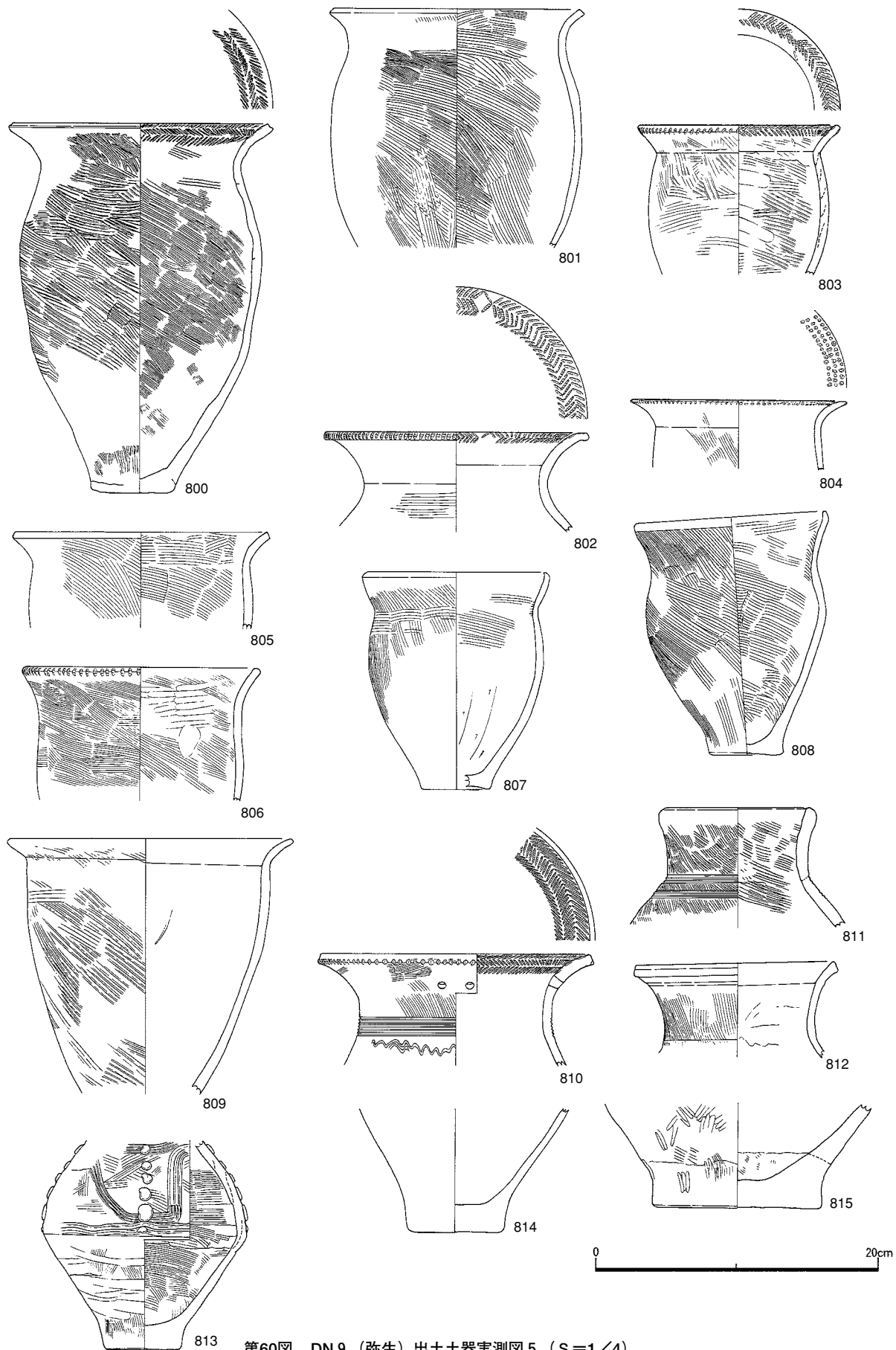
第57図 DN 9 (弥生) 出土土器実測図2 (S=1/4)

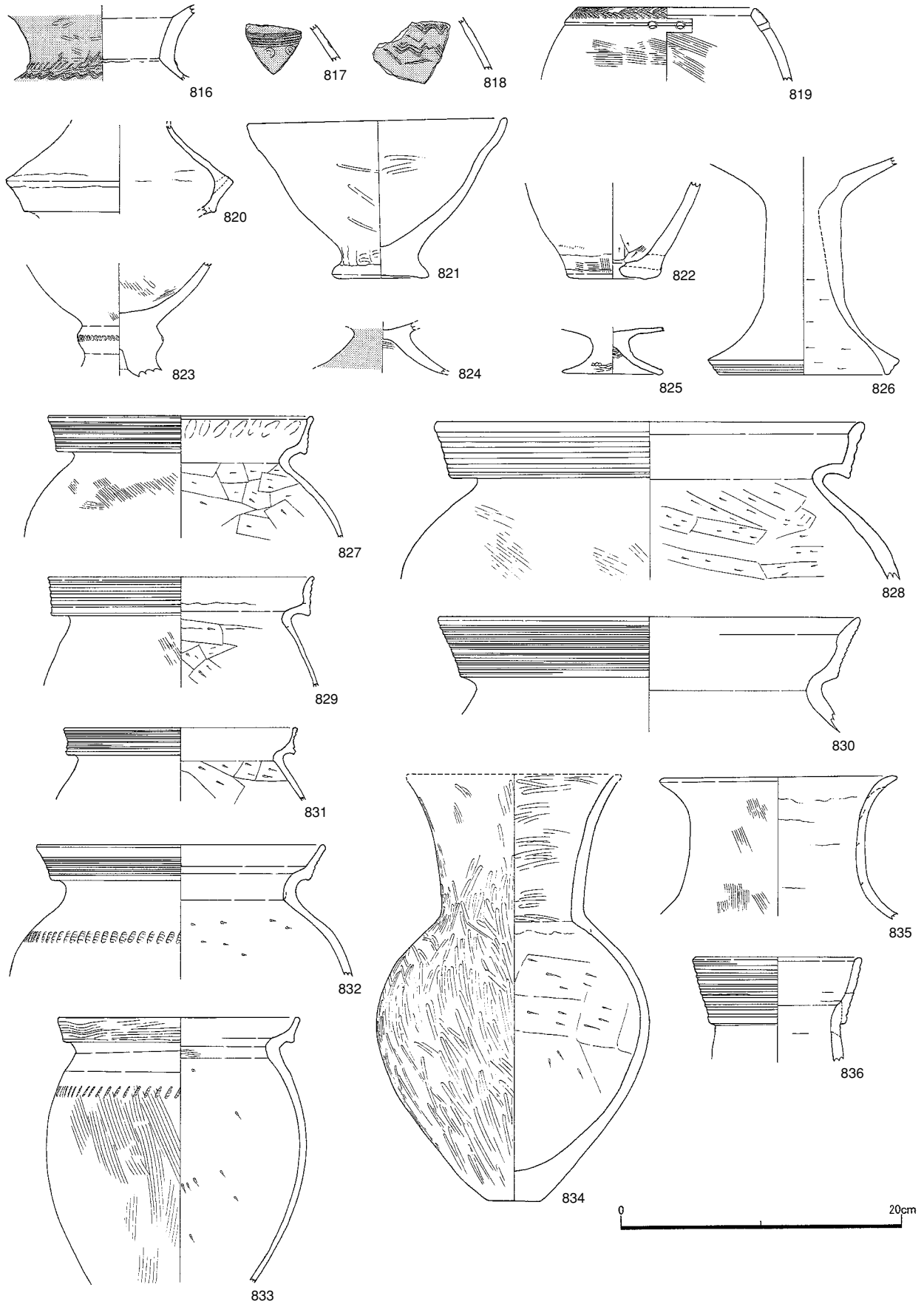


第58图 DN9 (弥生) 出土土器実測图3 (S=1/4)

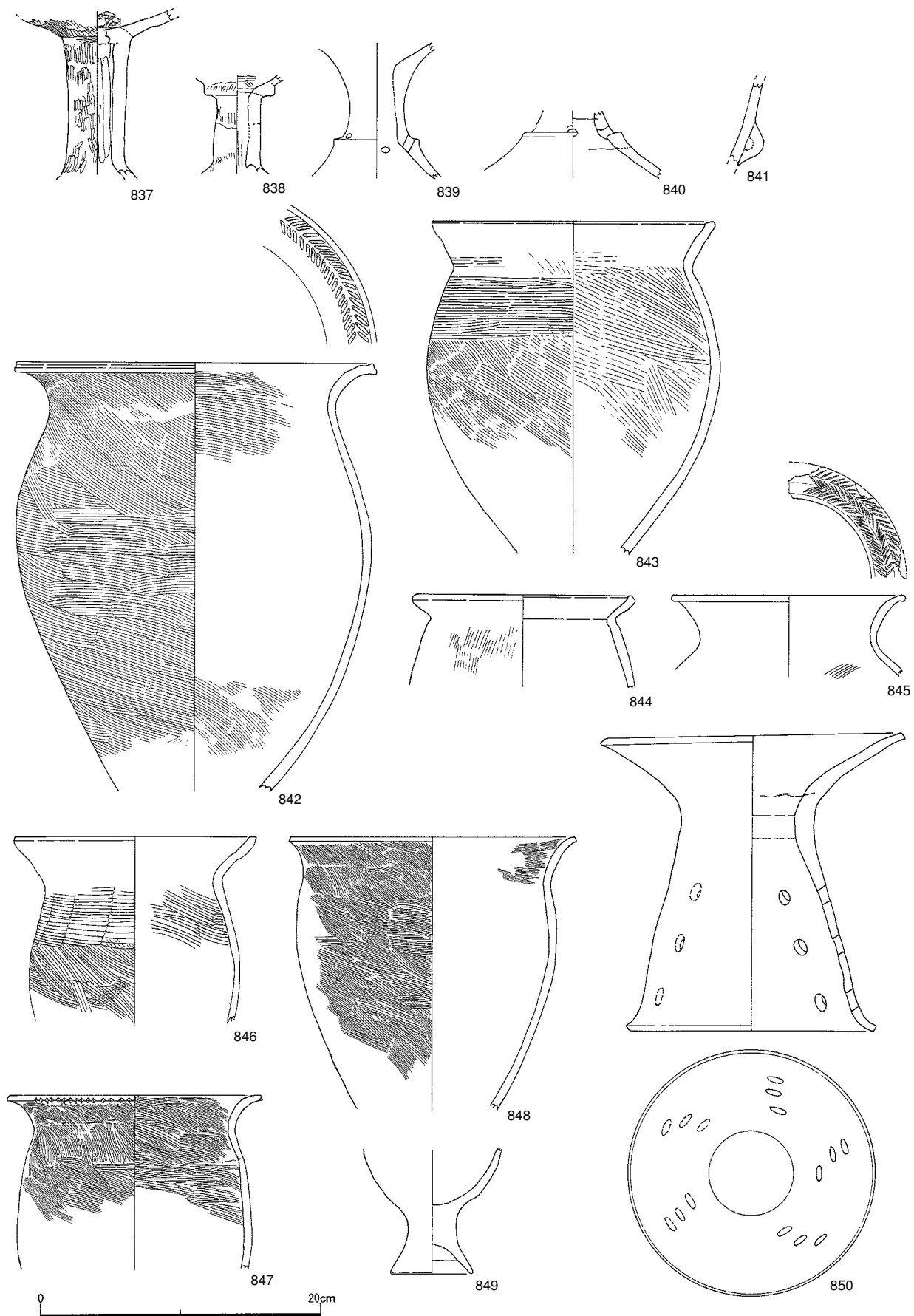


第59図 DN 9 (弥生) 出土土器実測図4 (S=1/4)

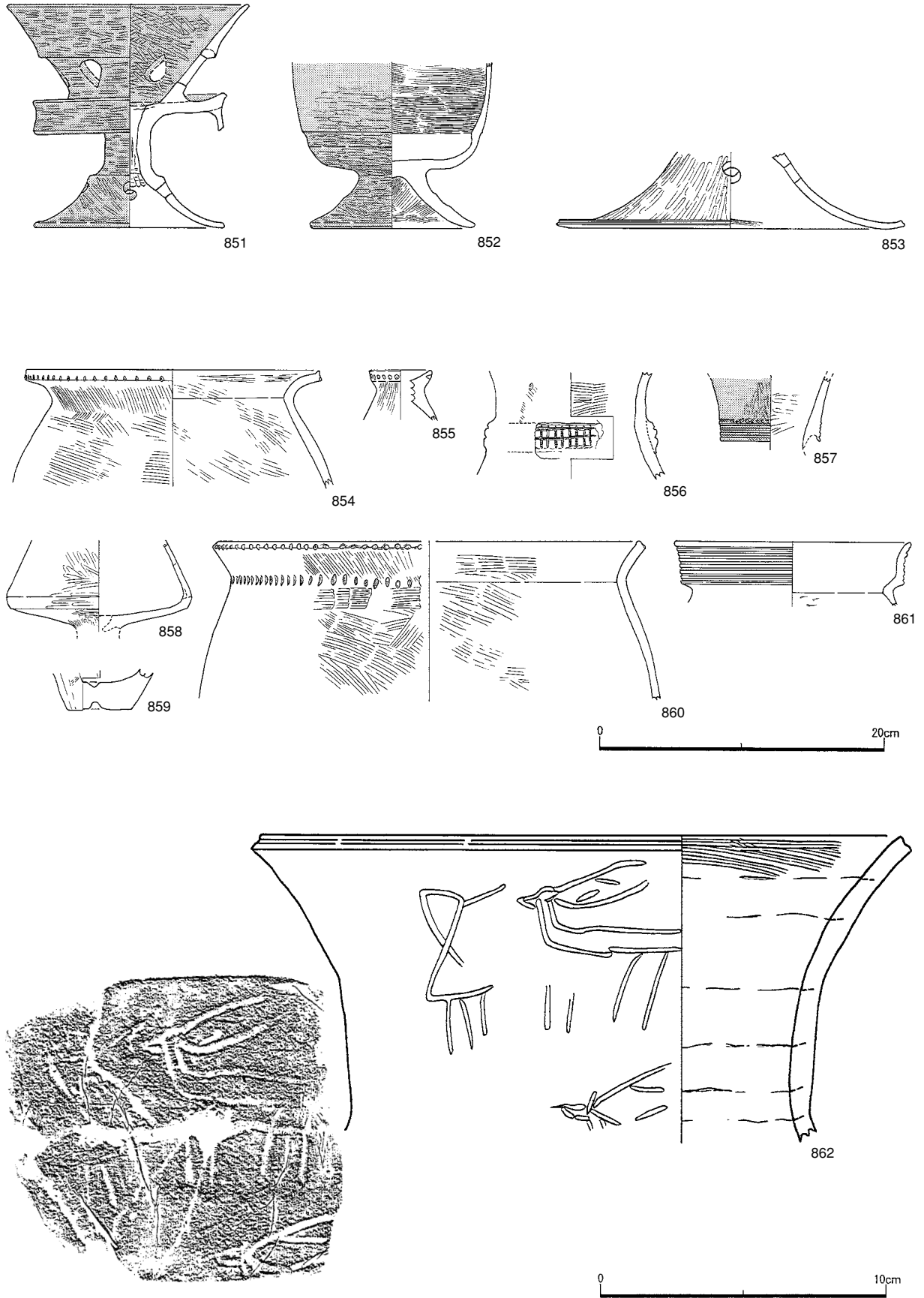




第61図 DN9 (弥生) 出土土器実測図6 (S=1/4)



第62図 DN 9 (弥生) 出土土器実測図 7 (S=1/4)



第63図 DN 9 (弥生) ・その他遺構出土土器実測図 (S=1/4・1/2)

第7節 その他の遺物

1 土 器

その他の土器（第36・43・44・55・63図、図版31・36・40・45）

ここでは、前節までで触れなかった土器について解説を加える。539は外面に線刻がみられる。欠損のため全体像は知りえないがアルファベットの「E」を斜め逆さまにしたような形の線が引かれている。絵画と思われるがモチーフは不明である。624は赤彩された器台である。小片のため文様構成が明確でないが、外面の上下には刻みを入れ2本1単位と思われる棒状浮文を縦に貼り付け区画するようである。区画内には縦3列の不整な同心円スタンプ文を充填するが、右端列中央の1点だけボタン状浮文を貼り付け、その上にスタンプを押している。時期は後期後半または終末期に比定できよう。625の壺は撥ね上げ条痕文で施文される。631の壺は調整に2種類のハケ状具を用いており、頸部に細い目、肩部以下は粗い目が残る。727は大きく外展する壺の破片である。小片のため定かではないが注ぎ口状になっているとみられる。口縁部はほぼ水平となっており、平らな部分に突帯を貼り付け上面に格子文を施文する。さらに突帯の両側には三角刺突文を施文する。

862は絵画土器である。T南区の遺構検出作業時に出土した広口壺の口縁～頸部にかけての破片である。口縁は緩く外展し、端部を面取りして一本凹線風とする。器面の残り具合は、磨滅のため内外面ともあまり良くない。口縁端部の内面に一部ハケ調整を確認できるが、他は磨滅のため不明である。また同一個体と思われる別破片の内面には数条の線刻がみられるが、絵画として意図したものか不明である。色調は浅黄橙色（Hue7.5YR8/3）を呈する。胎土は緻密で径1mm大の白色粒や径1～3mm大の石粒を含む。在地産とみてよいだろう。土器全体としては口縁～頸部全周の約半分ほどが残存し、そのまた半分である4分の1ほどの範囲の外面に絵画が描かれている。時期は中期後半に比定できよう。

モチーフは人物か建物1点とシカ2点であり、向かって左側に人物または建物と推定する絵画とその右横にはほぼ全形がわかるシカ（以下シカ1とする）がみられ、シカ1の真下には欠損のため頭部のみとなったシカ（以下シカ2とする）が確認できる。絵画は先端の幅が1mmほどの工具で描かれている。

シカ1は全体の長さ約6.5cm、角を有する雄で左を向いている。二本の短い縦線で頸を、続けて右方向に長い横線を引いて胴部を描くが、尾の様子は欠損のため不明である。格子文などの体内充填はみられない。顔は一本線の小さな弧線を頭部として、口先を左向きの三角に描く。角は頭部から一本線で右に大きく2本のびており、枝角は幹から内方に段違いの短線で2本描かれる。四肢は4本描かれる。前脚は一本線で縦に2本描かれるが、胴部に近い上部を欠損する。後脚は胴部から左方向（前）にむけて斜線で2本描かれる。前脚・後脚ともつま先の表現はみられない。

シカ2は残りが良く線が明瞭だが、頭部以外の大部分を欠損する。辛うじて縦線2本による頸の表現を確認できる。顔は左を向き上下2本からなる横方向の短線を左側で閉じ合わせ描くが、下の線は中ほどで止めて、やや角度を改めて引いている。シカ1のように頭部を弧線で描く表現はみられない。角は一本線で右に2本のびるが、欠損のため先端部分は不明である。枝角は内方に一本線の短線2本で描かれる。

人物または建物と推定する絵画は磨滅のため線が薄くなっており、本来は描かれていた線が消えてしまった可能性が多分にある。肉眼では①鼓のように三角が上下で向かい合う形の線。②鼓形の底辺から垂下する3本の縦線。③鼓形の右側上部あたりから斜め上にのびる一本の線を認識できる。これら三種

類の線形の組み合わせから人物または建物を想像したが、どちらなのかは判断できなかった。

863は壺の口縁部である。未図化であるが、絵画土器の可能性があるので写真(図版45)のみ掲載する。外面に線というよりも削ったような痕跡が弧状に4本ほど(左から2番目は調査時のキズと思われる)確認できる。モチーフは不明。864は絵画土器である。未図化のため写真のみの掲載である。モチーフは鳥または龍であろうか。

別時期遺構出土土器(第39・51図、図版33・36・37)

642は古墳時代中・後期の竪穴系建物跡の外周溝から出土した土器である。647はS H31、658はS H32、ともに古墳時代前期の竪穴系建物跡の外周溝から出土した。578は古墳時代前期の壺であろう。

2 土 製 品

(第64図、図版45)

E21はF区P33から出土した鳥型土製品である。円形の底部に粘土を貼り付け手びねりで成形している。背中部分で粘土を閉じ合わせており、正面からみると背中がやや右に傾いている。頸の部分は粘土を閉じずに開放したまま器の口としている。尾は指でつまんで軽く上を向かせている。不明瞭ながら胸のあたりは下方向、尾の近く下部は横方向のハケ調整が確認できる。

E22～30は土製円盤である。E22・28は未穿孔。E23・26・27は穿孔途中である。サイズは7 cm以上の大型、4～6 cmの中型、4 cm以下の小型という3種類がみられる。図示した以外にもみられたが、全体量は把握していない。

3 石 器

(第65～73図、図版46～50)

S31～S50は石鏃である。全て打製であり磨製の石鏃は確認されなかった。図示したものは出土した石鏃の一部であり、全体量は把握していない。また、掲載した中には縄文時代の石鏃も含むと思われるが、正確に分類することができなかったのですべて本章に収録した。

S51・S52は磨製石剣の破片である。S51は剣の身部分である。断面は扁平で、刃部先端の処理は切っ先側で鈍角になっており、基部側は面取りを施している。S52は茎のないタイプの基部の破片である。断面は平行四辺形もしくは菱形に近い形状である。身に対して大きめの小穴が一つあけられている。図上では表現していないが、背面の下側中央に穿孔途中の痕跡がみられる。石材はS51が泥岩質の凝灰岩と考えられるものに対して、S52は蛇紋岩を使用している。

S54～S57は短軸を一周する溝をもつ石錘で、瀬戸内型に分類できる。

S66・S67は凝灰岩製の磨製石包丁である。元は台形を呈していたのだろう。刃部は欠損している。S65を含めて本遺跡出土の磨製石包丁3点は、軟質で板状に剥離しやすい凝灰岩を石材として選択している。

S68・S69は剥片石器である。どちらも刃部にコーングロスを確認できる。

S77～S81は扁平片刃石斧である。S78は乳白色を呈する泥岩質の凝灰岩製である。S79は泥岩質の緑色凝灰岩製であるが、色調は灰色である。どちらも軟質である。

S88は砥石である。筋のある平らな面を正面として、裏面は緩やかな曲面である。左側面にも筋がみられる。中央の筋が一番深く4 mmに達する。玉砥石と考えるが中世でみられるやり鉋砥石の使用状態とも酷似しており、その可能性も否定できない。

S 89は用途不明の石器である。丸く扁平な石を打ち欠いて背面に平らな面をつくりだし、正面の自然面の中央に貫通しない径4 mm、深さ5 mmの穴を穿つ。なんらかの未成品であることも考えられよう。

S 90～S 93は石錐である可能性が高い石器である。S 90は先端部に磨耗が確認できる。S 92はメノウ製だが先端部の磨耗は確認できない。S 93は先端が欠損している。

S 95・S 96は石鋸である。石材には片岩が使われている。特にS 96は刃部がつるつるになるまで良く使われており、未使用部位との差は明瞭である。

H 1～H 17は剥片である。図示したものは出土した剥片の一部であり、全体量は把握していない。H 1～H 7は比較的厚みのある剥片で、玉造りでの荒割片と考えられようか。H 1の緑色凝灰岩は軟質である。H 8～17は薄く小さい剥片で、H 8・13・14・16は碧玉、H 17は緑色凝灰岩で玉造りにおける剥片とみられる。H 9～12はガラス質安山岩で石器製作時の剥片であろう。H 12はクサビの可能性もある。

T 1～T 4は玉造りににおける分割工程で生じた角柱体である。T 1・2・4は形割りされた際の分割施溝が確認できる。

J 21～J 24は石製玉である。J 21はS 2区P 05出土のヒスイ製の勾玉である。色調は深緑と半透明白色がマール状になっている。形は半球形である。J 22はS 2区P 21から出土した緑色凝灰岩製の管玉である。

第8節 小 結

晩期末～前期

長竹式期の土器が、北東部の河道（DN 9）やV 1区の溝からわずかに出土した。

中期前半

北東部で南西－北東方向にのびる溝（E区SD03・V 1区SD12）を確認した。

中期後半

調査区の広範囲にわたり遺構を確認した。南西部では井戸跡・土坑を中心とする遺構群が展開する。井戸跡（Q 2区SK79、S 1区SK07・53）はS 1区とQ 2区でまとってみられる。土坑（A 4区SK59、Q 1区SK34、S 1区SK12・26、S 2区SK04・16・18、S 3区SK03、C 2区SK43、R 2区SK05・17・27・33・34など）はS 1・2区、C 2・3区、R 2区を中心として広い範囲に分布し、長軸2 m前後の大型土坑（S 1区SK11・33、R 2区SK31など）もみられる。S 2区SK16は坑底と覆土の境に木の葉状の植物がみられたことが注目されよう。勾玉や管玉を出土したP 05・21も当期に含まれようか。

北東部では河道（DN 9）が蛇行しつつ西－東方向へ流れる。右岸では南西－北東方向にのびる溝（E区SD04・V 1区SD07・M 3区SD42）や、南東－北西方向にのびる溝（V 2区SD28・33）が確認できる。また、V 2区では竪穴系建物跡（SH42）もみられる。左岸ではN 2区で土坑（SK03・07・10・19）もみられる。SK19と主軸方位や規模が似ているSK09も当期とみてよいだろう。

後期

中期後半に比べて遺構・遺物が極端に減少する。南西部では井戸跡（Q 1区SE01）が当期に属す可能性がある。北東部では河道（DN 9）から土器が出土した。

終末期

調査区北側に遺構・遺物が偏在する。河道（DN 9）から土器が出土し、右岸のV 1区東端で竪穴系建物跡（SH44）が確認できる。W区のSK15も当期の可能性はある。

補足

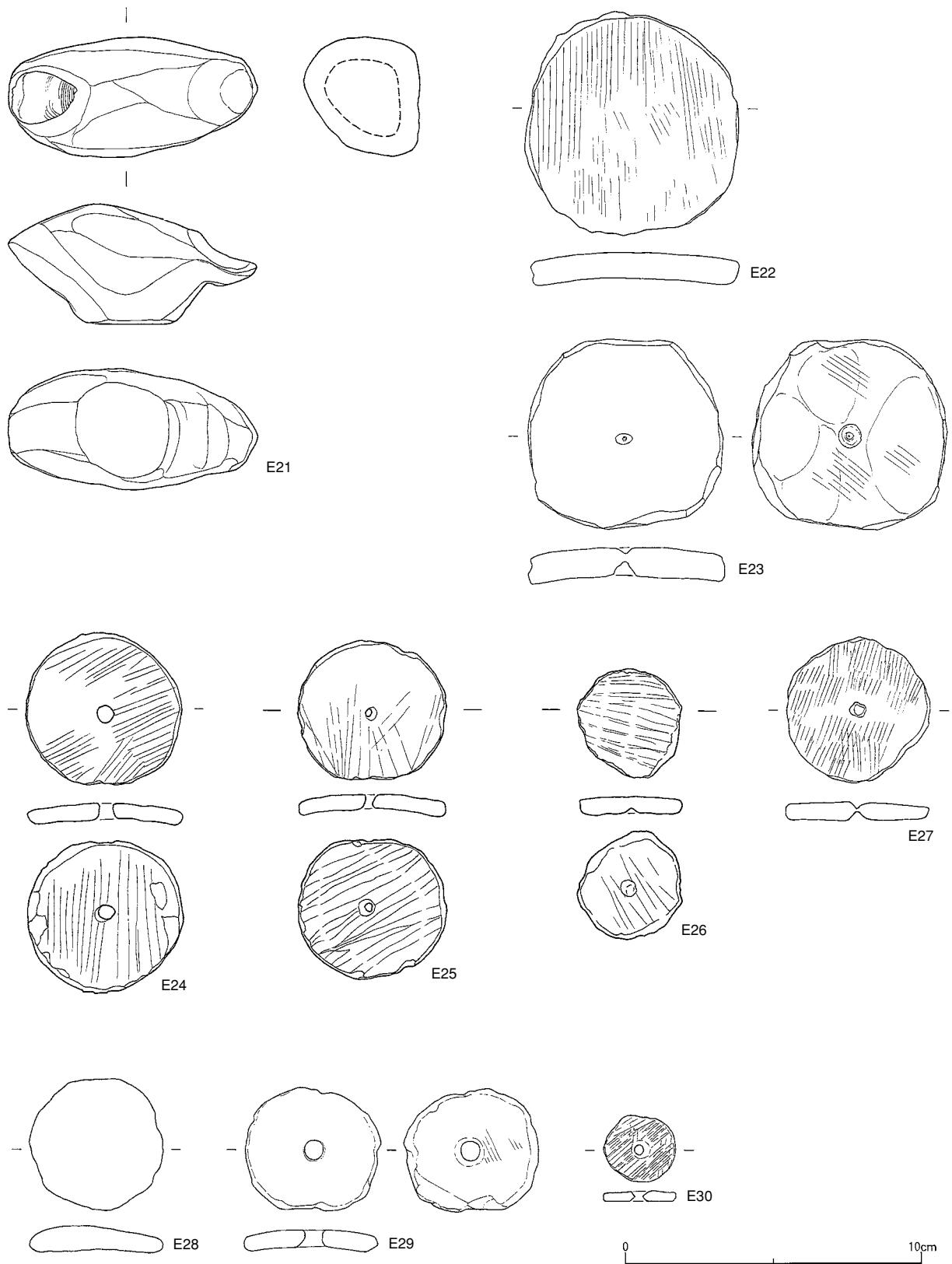
時期は確定できないが、R2区SK09は平面長方形を呈し、掘り方も箱形でしっかりしている。坑底中央には石が一個置かれており、白山市（旧松任市）野本遺跡などの事例から墓であることを想起させる土坑である。また、掘り方や断面観察から木棺の痕跡は確認できないので、土坑墓である可能性が高いと思われる。さらに野本遺跡では木棺墓や土坑墓に炭層が伴うことを報告している。S1区SK26は長方形を呈し、掘り方は箱形である。下位で炭層を検出しており、同様に墓坑と想定できようか。

B2区SD16(DS5)（遺構：第129図 遺物：第52・64～66・70～72図、図版37・38・45・46・49・50）

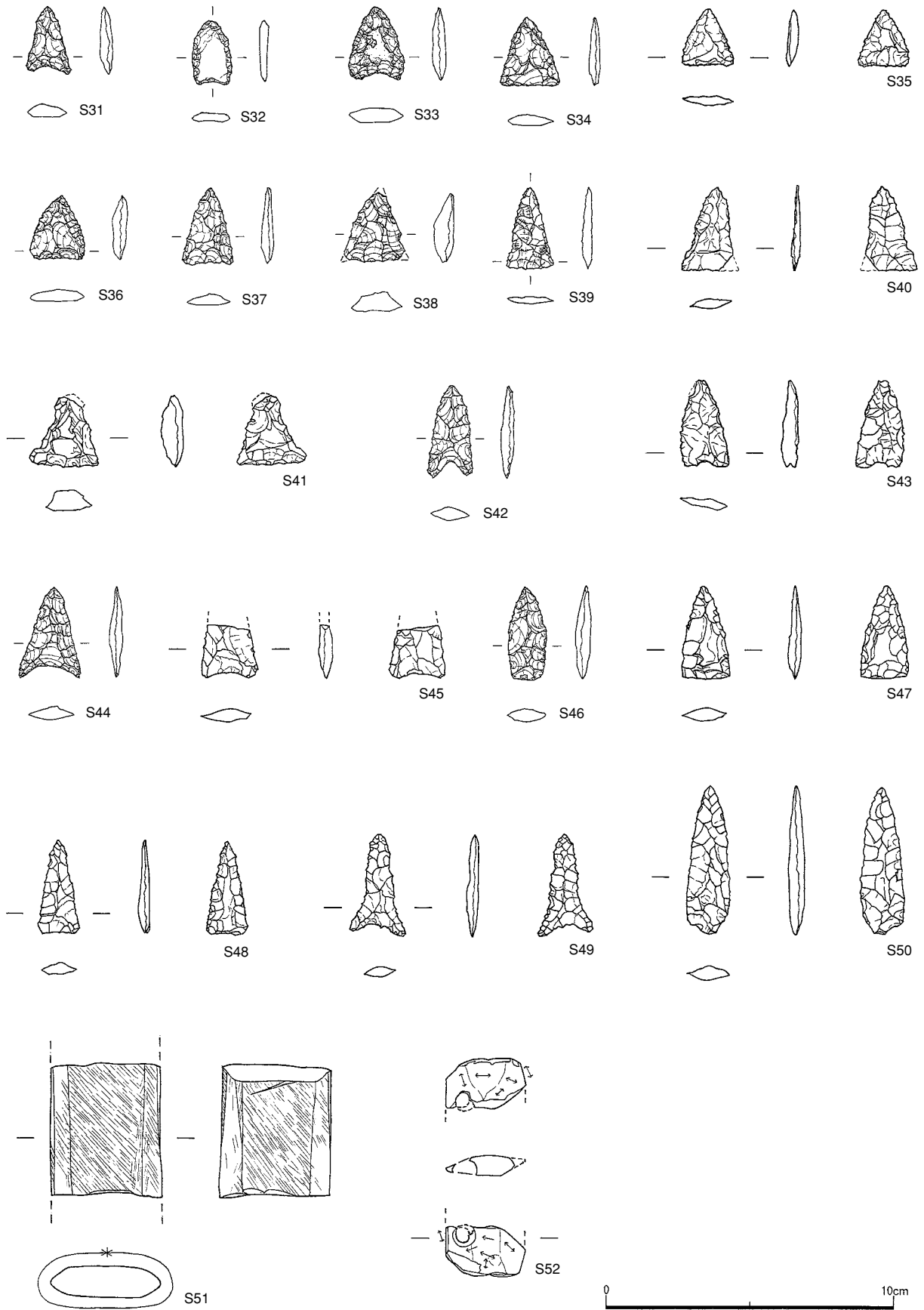
古墳時代の古代にかけての大溝であるが、図示しただけでも土器666～681、土製円盤E24・E26、石器S35・S45・S51・S56・S57・S91・S94、剥片H6・H7・H9・H10～H12・H17が出土しており、B2区SD16(DS5)に削平されてしまった溝か河があった可能性が考えられる。そして、これらより東側では極端に遺構が少ないことから、南西部の遺構を区画していたと思われる。

参 考 文 献

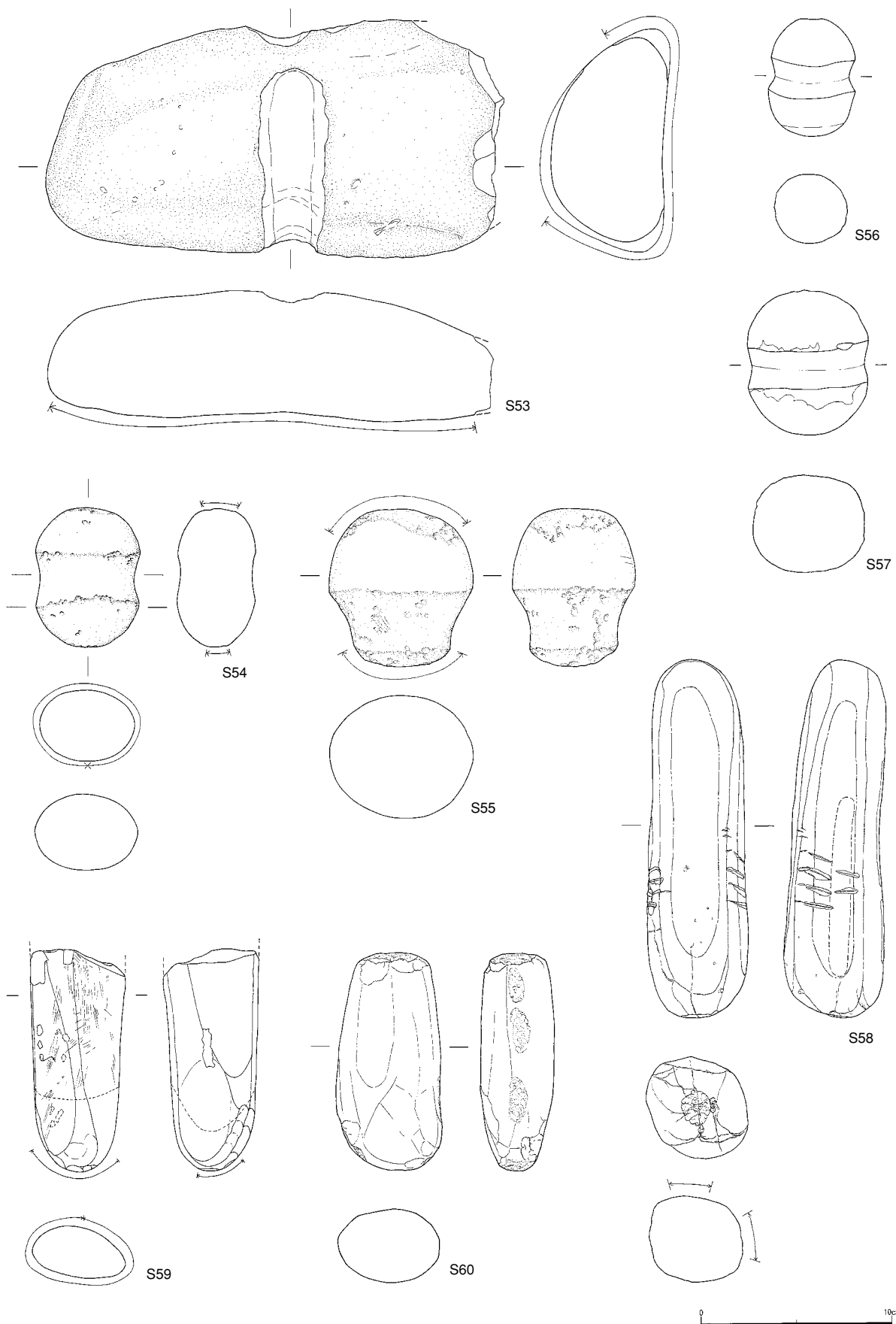
- 金関 恕・佐原 眞ほか 1986 『弥生文化の研究』雄山閣
- 楠 正勝ほか 1989 「金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ」 金沢市教育委員会
- 楠 正勝ほか 1992 「金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ」 金沢市教育委員会
- 楠 正勝ほか 1996 「金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ」 金沢市教育委員会
- 佐原 眞 1980 「弥生土器の絵画」『考古学雑誌』第66巻 第1号 日本考古学会編・学生社
- 種定淳介 1990 「北陸の磨製石剣」『福井考古学会会誌』第8号 福井考古学会
- 橋本裕行 1987 「弥生土器の絵」『季刊考古学』第19号 雄山閣
- 春成秀爾 1991 「絵画から記号へー弥生時代における農耕儀礼の盛衰ー」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』
国立歴史民俗博物館
- 久田正弘 2006 「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究』六一書房
- 福海貴子ほか 2003 『八日市地方遺跡』小松市教育委員会
- 藤田三郎 1997 「土器に描かれた弥生人物像」『考古学ジャーナル』第416号 ニューサイエンス社
- 前田清彦 1995 『松任市野本遺跡』松任市教育委員会
- 前田清彦 1999 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学Ⅲ 石川考古学研究会々誌』第42号 石川考古学研究会
- 増山 仁 1989 「小松式土器の再検討ー小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通してー」『北陸の考古学Ⅱ』
石川考古学研究会
- 安 英樹 2004 「北陸」『第53回埋蔵文化財研究集会 弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会・
第53回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 安 英樹 2004 「弥生時代中期後葉の土器編年」第3回先史加能越談話会資料
- 安 英樹 2001 「北加賀における弥生時代中期前半の土器編年と変遷過程」『考古学フォーラム』13 考古学フォーラム



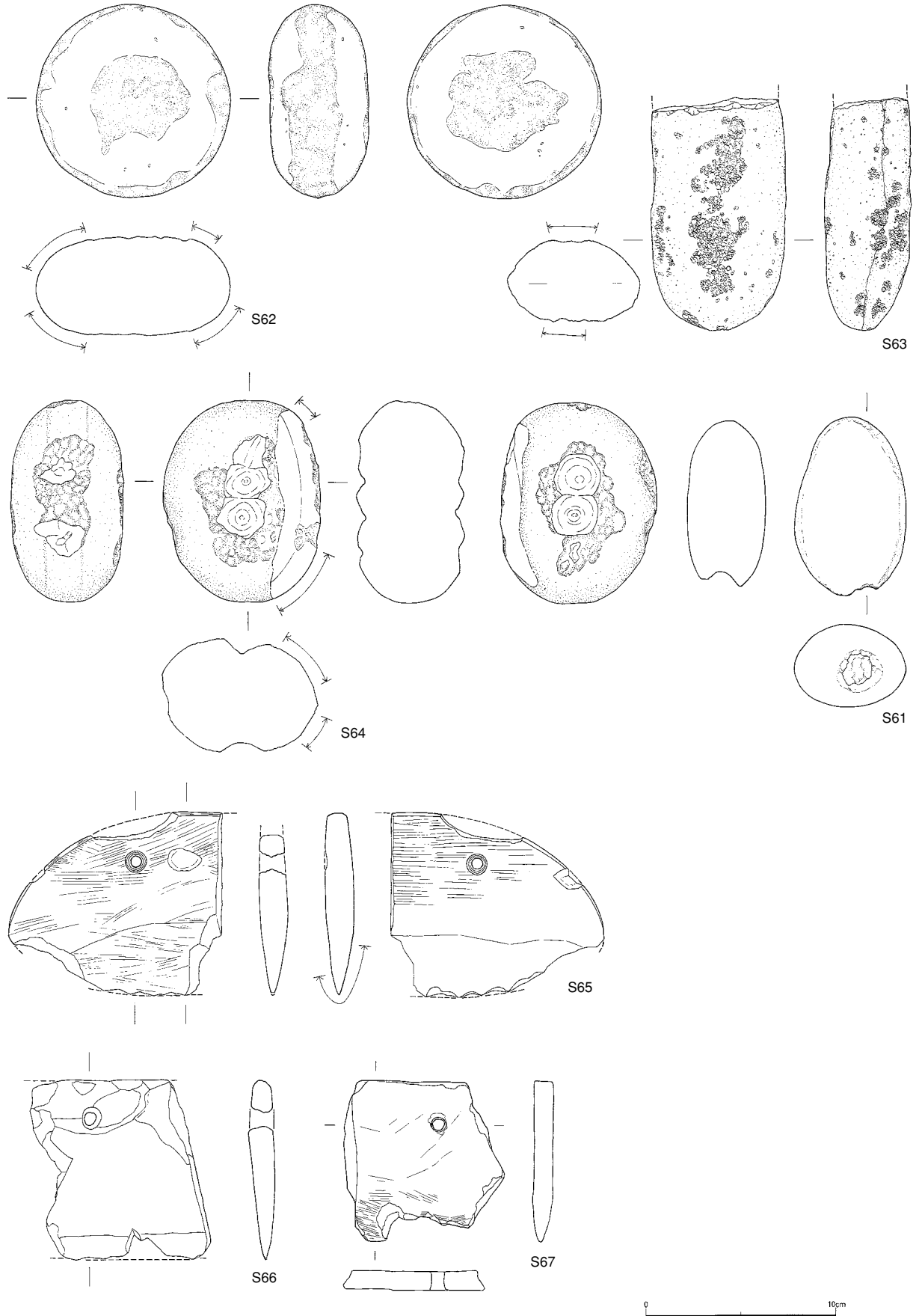
第64図 土製品実測図 (S = 1 / 2)



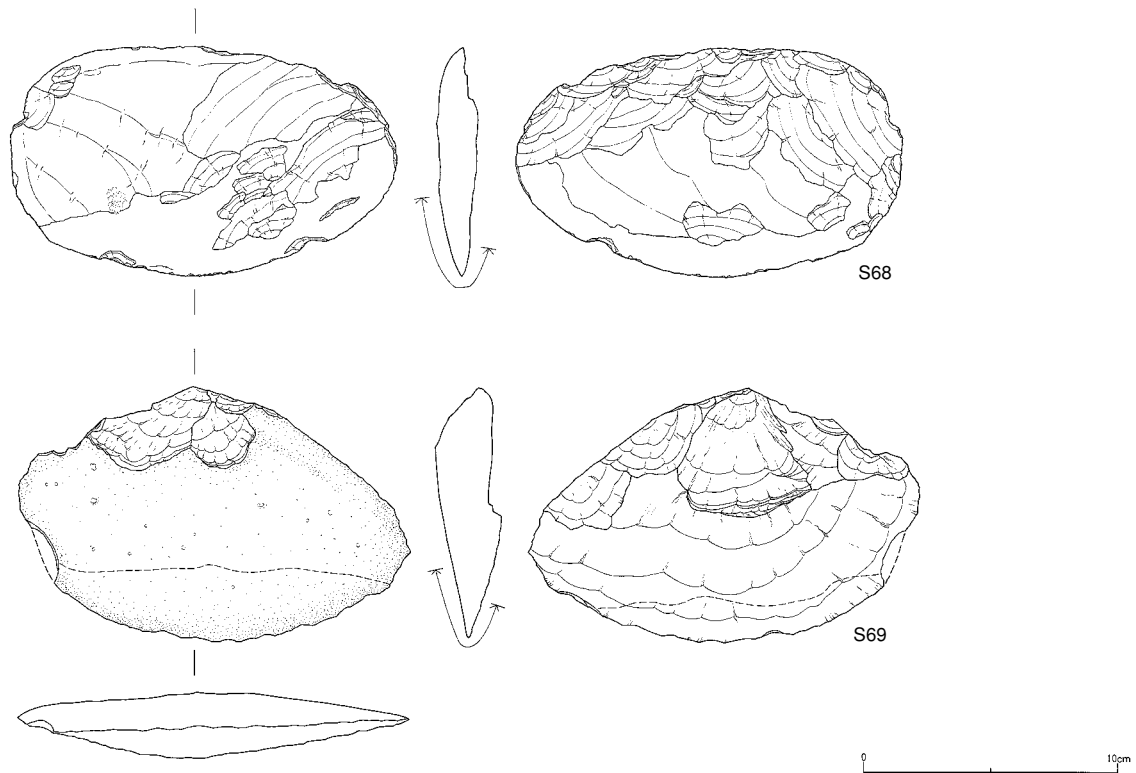
第65図 石器実測図1 (S=1/2)



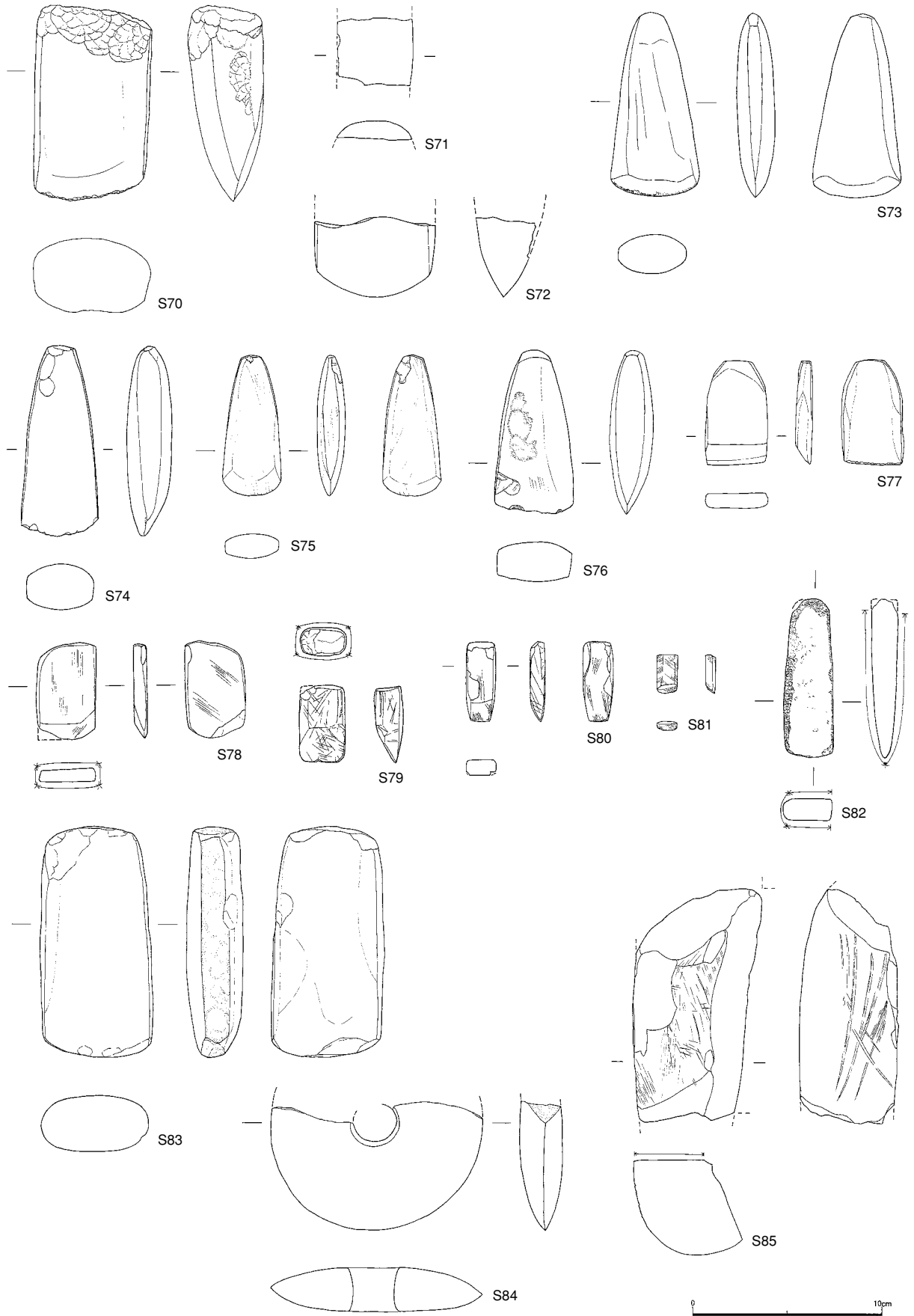
第66図 石器実測図2 (S = 1 / 3)



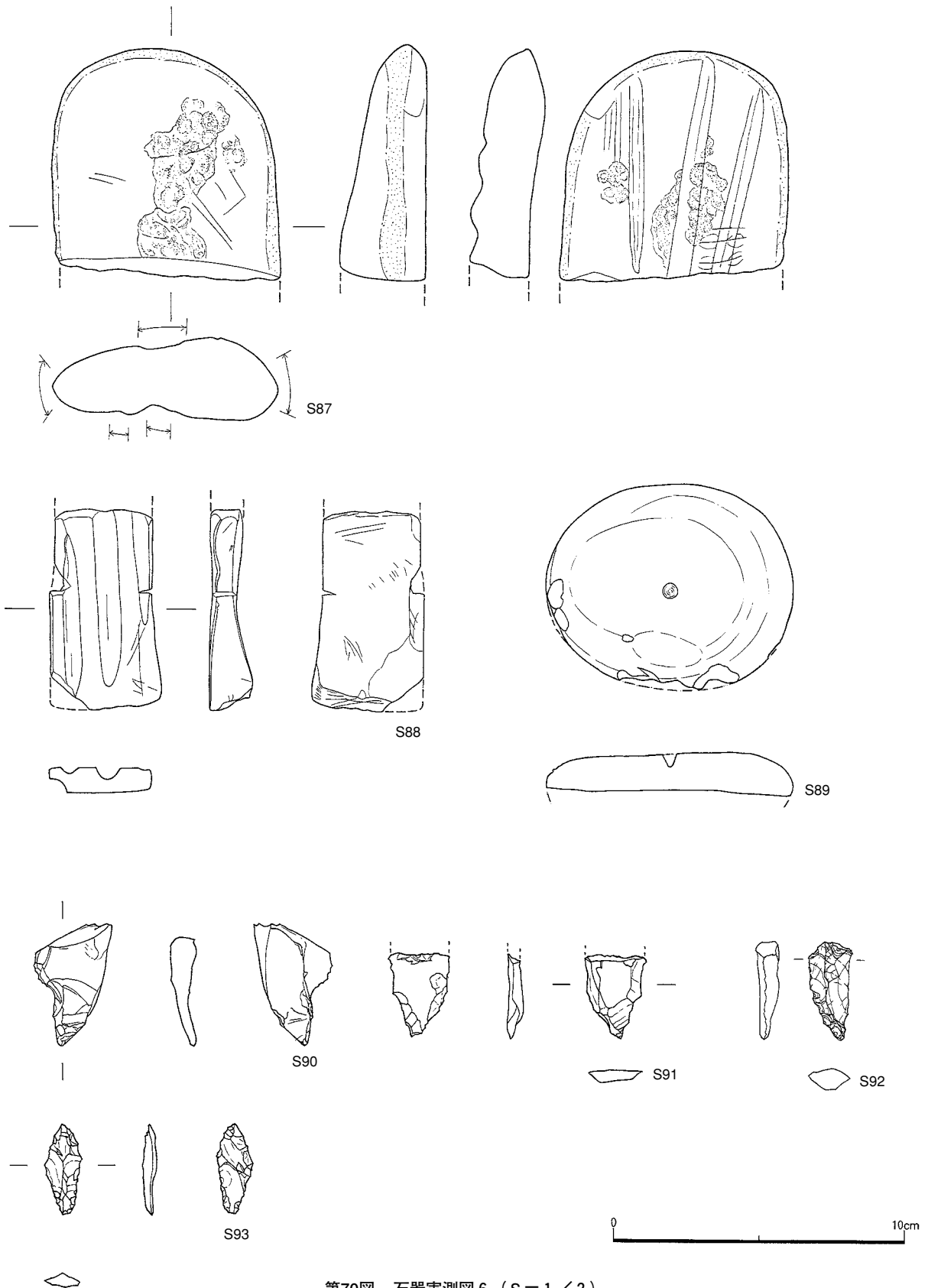
第67図 石器実測図3 (S=1/3)



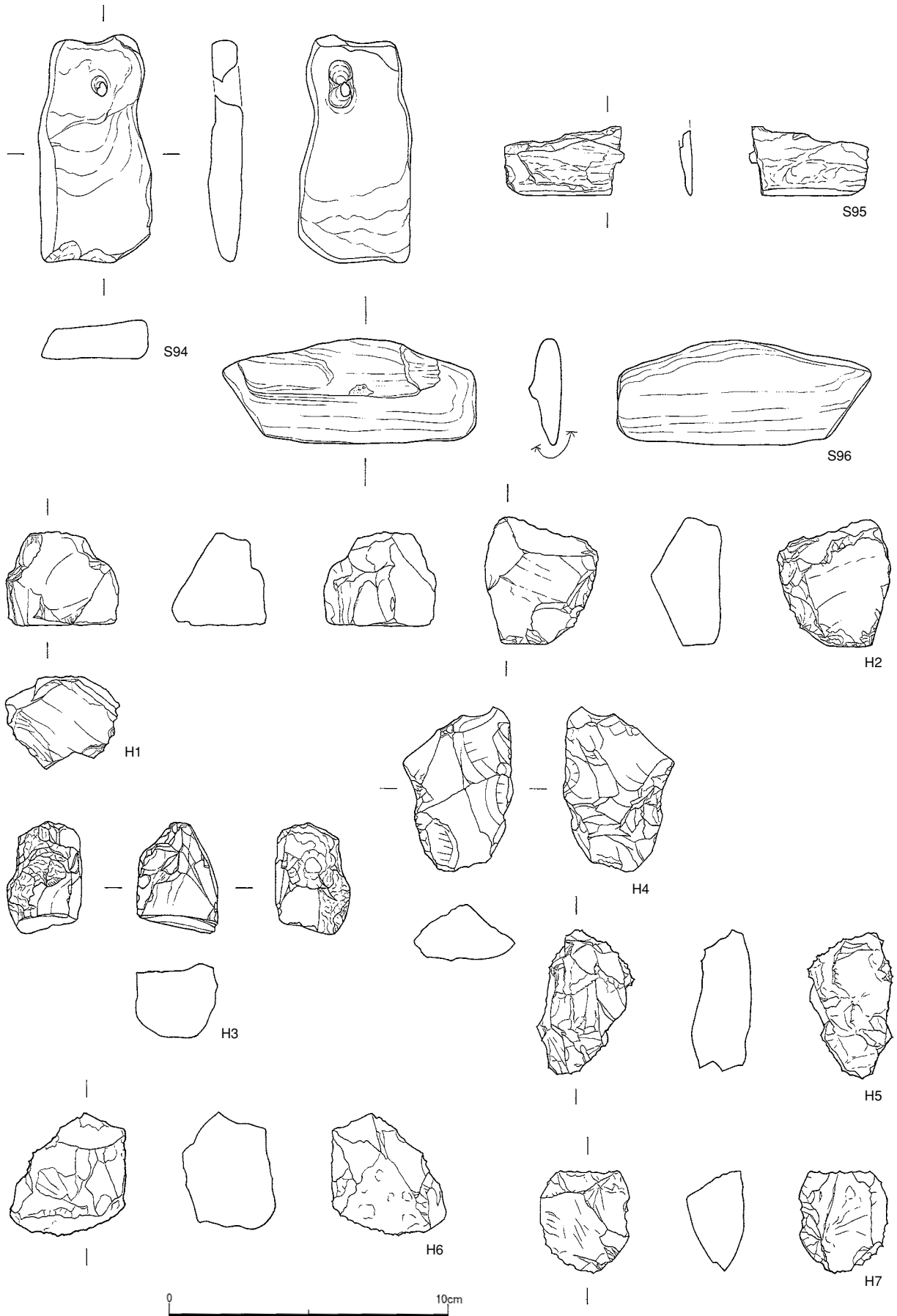
第68図 石器実測図4 (S = 1 / 3)



第69図 石器実測図5 (S = 1 / 3)



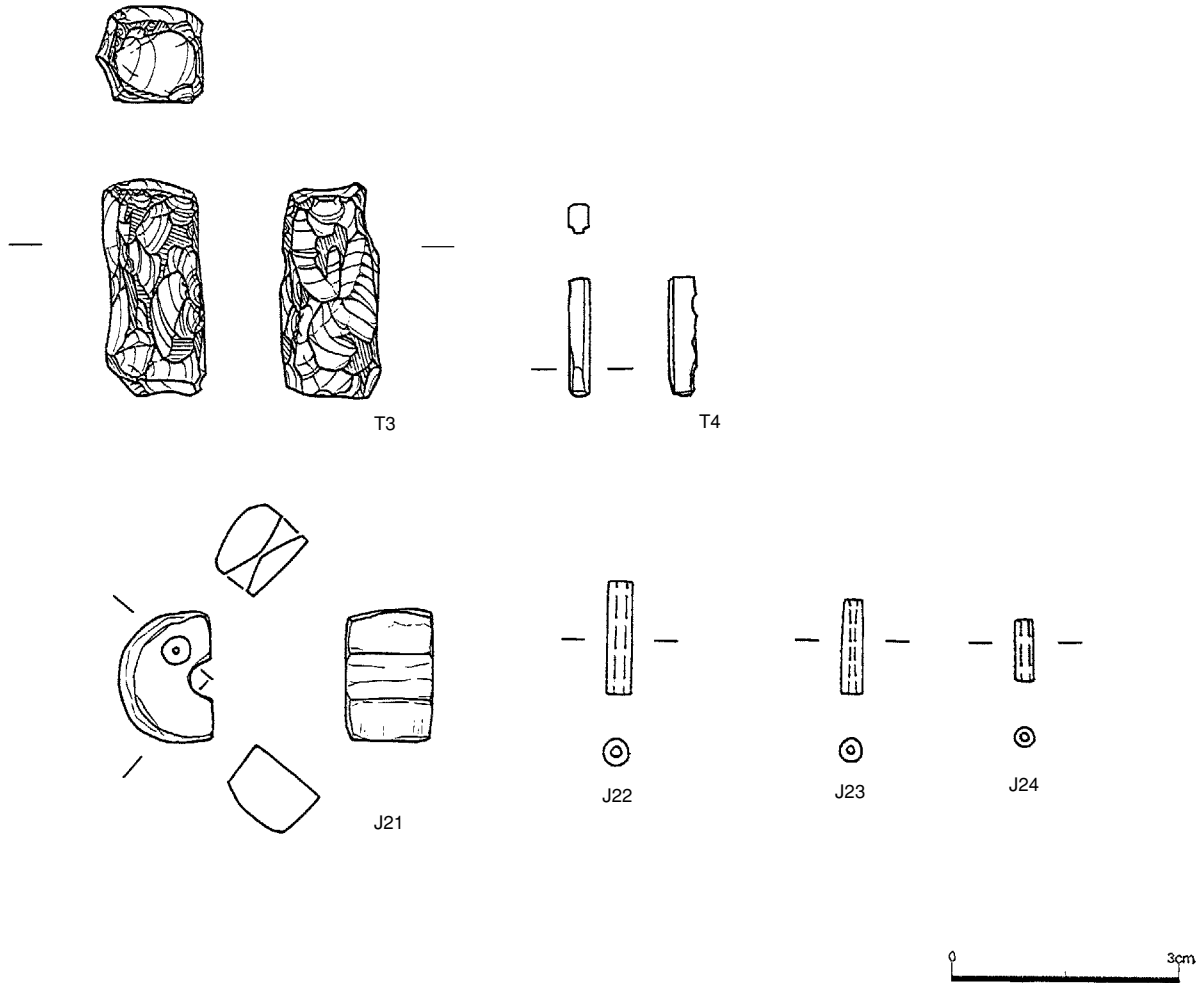
第70図 石器実測図6 (S=1/2)



第71図 石器実測図7 (S=1/2)



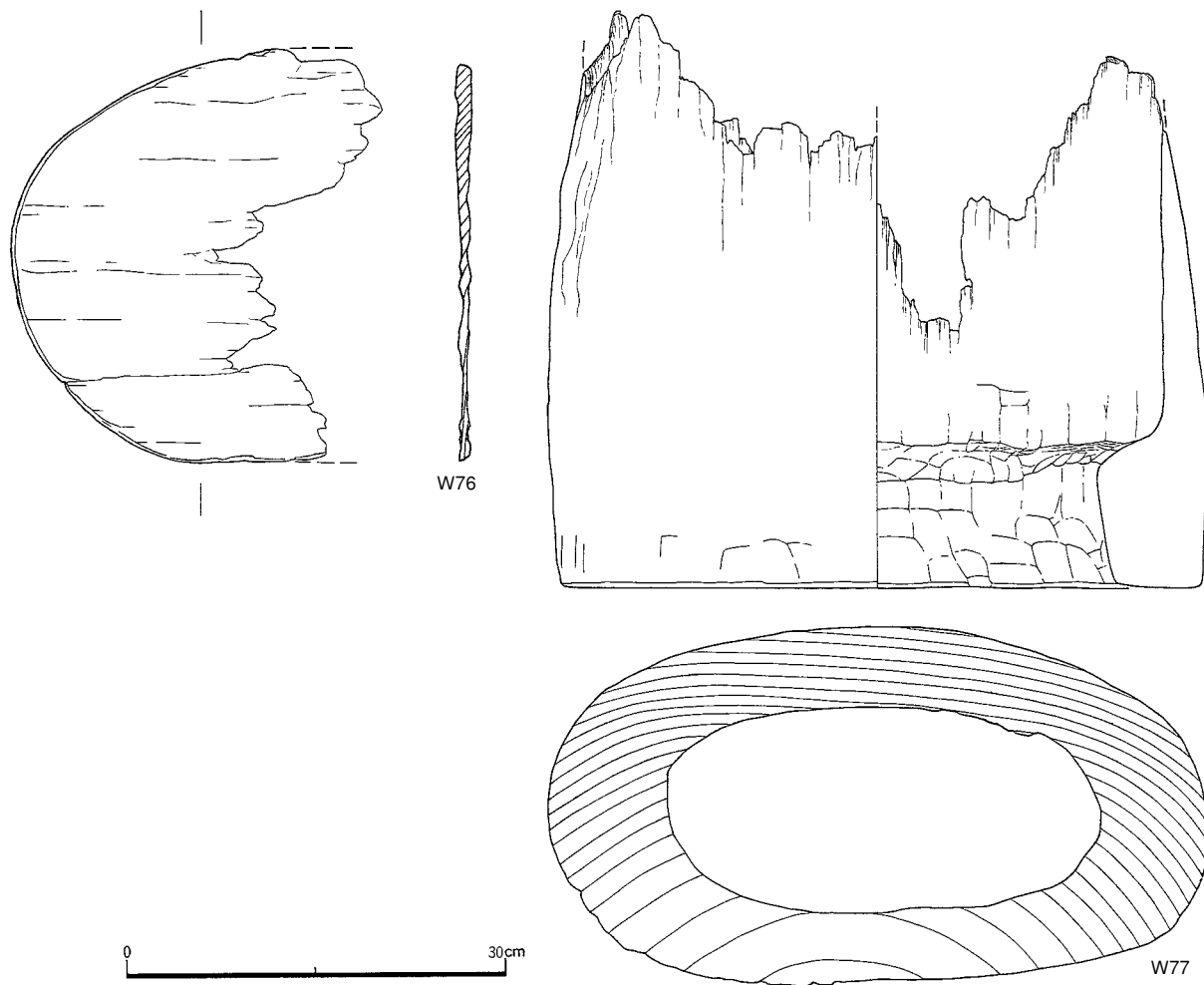
第72図 石器実測図8 (S=1/2)



第73図 玉未成品・石製玉実測図（原寸）

第7表 弥生剥片・石製玉一覧

報告番号	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	種別	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考	実測班	ランク	実測番号
H1	剥片	1999	E	SD03	H25			緑色凝灰岩	34	41	34	40.55		02 p	石	191(135)
H2	剥片	1999	B	SD16		1-1NSアゼ	暗灰粘土 34-35層	緑色凝灰岩	55	38.5	20	36.26		02 p	石	181
H3	剥片	1999	E	SK01				碧玉	38	28.5	25	36.2		02 p	石	145(182)
H4	剥片	1999	E	SD04				緑色凝灰岩	46	41	25	56.48	形割前	02 p	石	190
H5	剥片	1999	A2	SK15				碧玉	52	35	21	41.32		02 p	石	188(138)
H6	剥片	1999	B2	SD16		1-3NSアゼ	暗青灰砂	メノウ	44	42	33	69.33		02 p	石	148(131)
H7	剥片	1999	B2	SD16		1-1-b	青灰砂	碧玉	37	32	21	26.28		02 p	石	186(140)
H8	剥片	1999	F	SD29	I23			碧玉	36	28.5	12	2.2		02 p	石	166(181)
H9	剥片	1999	B2	SD16		3-南北アゼ		ガラス質安山岩	(27)	17	6	2.9		02 p	石	177(107)
H10	剥片	1999	B2	SD16		1-3-d	暗青灰砂	ガラス質安山岩	42	26	6.5	6.7		02 p	石	169(157)
H11	剥片	1999	B2	SD16		3-1	暗青灰砂	ガラス質安山岩	40	29	11.5	12.6		02 p	石	165(183)
H12	剥片	1999	B2	SD16		3-3-a	暗灰粘土層	ガラス質安山岩	(31)	34	19	21.78	クサビカ	02 p	石	183(143)
H13	剥片	1999	B3	SD36				碧玉	33	27	18	12.86		02 p	石	184(142)
H14	剥片	1999	B3	SD16	T16・17		暗褐灰粘	碧玉	24	25	15	7.5		02 p	石	192(134)
H15	剥片	1999	F	SD09	I23			ヒスイ	19	23	7	4.44		02 p	石	189(137)
H16	剥片	1999	B3	SD16	T16・17	7-1	暗褐灰粘	碧玉	21	19	7	3.23		02 p	石	187(139)
H17	剥片	1999	B2	SD16		1-2-b	青灰砂層	緑色凝灰岩	28	21	17	12.26		02 p	石	185(141)
T1	形割	1999	A2	SD08		アゼ	暗灰砂中	緑色凝灰岩	(41)	17		22.48		02 p	石	147
T2	形割	2002	M3				検出面	緑色凝灰岩	31	23	19.5	20.13		03 b 1	石金	6
T3	形割	2001	R1	河道		2		緑色凝灰岩	28.6	13.2	13.3	8.21		03 b 2	石	23
T4	管玉未成品	2002	M3	SD46	J24		黒	緑色凝灰岩	15.4	2.9	3.7	0.31		03 b 1	石金	28
J21	勾玉	2001	S2	P05	X15			ヒスイ	17.6	12.4	11.1	5.23	暗緑灰~乳白色	03 m 1	小玉	3
J22	管玉	2001	S2	P21	W16			緑色凝灰岩	15	3.5		0.24		03 m 1	小玉	10
J23	管玉	2001	V2	SD12				緑色凝灰岩	12.5	3		0.18		03 m 1	石	65
J24	管玉	2001	Q2	SD92	AE20			緑色凝灰岩	8.5	2.5		0.06		03 m 1	小玉	6



第74図 木製品実測図 (S = 1 / 6)

第8表 弥生木製品一覧

報告番号	器種	樹種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	その他の法量	実測班	試料番号	実測番号
W66	蓋か底板	スギ	2002	M3	SK24	I24				195	10		03m	60	60
W67	割物桶	スギ	2002	M3	SK24	I24			525	285		残存高: 460	03m	122	122

第4章 古墳時代前期の遺構と遺物

第1節 概要

1 遺構と遺物

本章では古墳時代前期の時期に区分された遺構と遺物について報告する。

報告する遺構は竪穴系建物跡18棟、掘立柱建物跡69棟、井戸跡8基、大溝群5群、小溝群12群、土坑46基、溝19条、落ち込み等の性格不明遺構5基、小穴1基である。遺構の種類によって粗密はあるが、概ね調査区全域に分布している。これらのうち竪穴系建物跡、掘立柱建物跡、大溝群、小溝群については、複数調査区にまたがる場合が多いことから、抽出したものに通し番号を振った。掘立柱建物跡については古墳時代中後期のものを、小溝群については古代以降の可能性があるものをそれぞれ含んでいるが、厳密な時期区分が難しいため、一括して掲載している。また、これら以外の遺構は調査区名に遺構番号を加えて「○区××」と表記する。土坑、溝、落ち込み等の区分は不明確であるが、すでに実測図や遺物の注記とも連動しており、混乱を避けるため、現地調査時の遺構名を引き継ぐものとし、基本的に改称は行わなかった。井戸跡については、現地調査時に認識のなかったB2区SD16内のものについてのみ、B2区SE01と改称している。

報告する遺物は土器454点、土製品32点、石製品7点、石製玉8点、金属製品1点である。土器には報告する遺構から出土した弥生土器、古墳中後期の土器も含まれている。土製品と石製品では時期区分が難しい器種について一括して掲載しており、土製品では有孔土玉、石製品では九州型石錘と中部型石錘が該当する。なお、木製品や他の石製品も存在するが、第4分冊に掲載している。

2 時期区分

報告にあたり、多量に出土した土器のうちで、竪穴系建物跡等の時間幅を限定できる良好な資料をもとにして、以下のように古墳前期を大別4段階とする時期区分を行う。さらに細分することも可能かもしれないが、遺構の変遷を把握するには十分な精度があるので、あえて行わない。

古墳前期1期 型式的に退化した在地系土器と、東海系を主体とする外来系土器が混在する段階である。小型器台はこの段階に出現する。特徴的な東海系土器では、パレス文高杯(1337)もこの段階に属する。基準資料はSH15、SH29、SH47、Q2区SK100等がある。

古墳前期2期 布留系・山陰系を核とする外来系土器が出現する段階である。布留系甕は定型化前の型式であり、山陰系甕についても口縁端部の肥厚はない。東海系土器は無文化や緩稜化するなど型式的に退化する。受部有透器台はこの段階に属し、一定量出土している。基準資料は多く、SH24、SH26、SH34、F区SE04、F区SE08、W区SE01等がある。

古墳前期3期 布留系・山陰系を核とする外来系土器が定着し主体となる段階である。ただし、布留系甕は定型化し、口縁端部の肥厚は面をとる。山陰系甕も口縁端部が肥厚する。高杯は屈折脚の畿内系が普及し、小型丸底壺、小型器台等の儀器的な小型器種が揃う。東海系土器はこの段階でほぼ消滅する。基準資料はSH33、SH38、O1区SE01等がある。

古墳前期4期 定着した布留系・山陰系土器が型式的に退化しはじめる段階である。布留系甕を例に

とると、器壁は厚くなり、調整はやや粗雑化し、口縁端部の肥厚は扁平化する。古墳中期への過渡的様相といえる。土器は一定量出土しているが、基準資料はS H22等と少ない。

第2節 竪穴系建物跡

要点と分布（第75・76図、第12表）

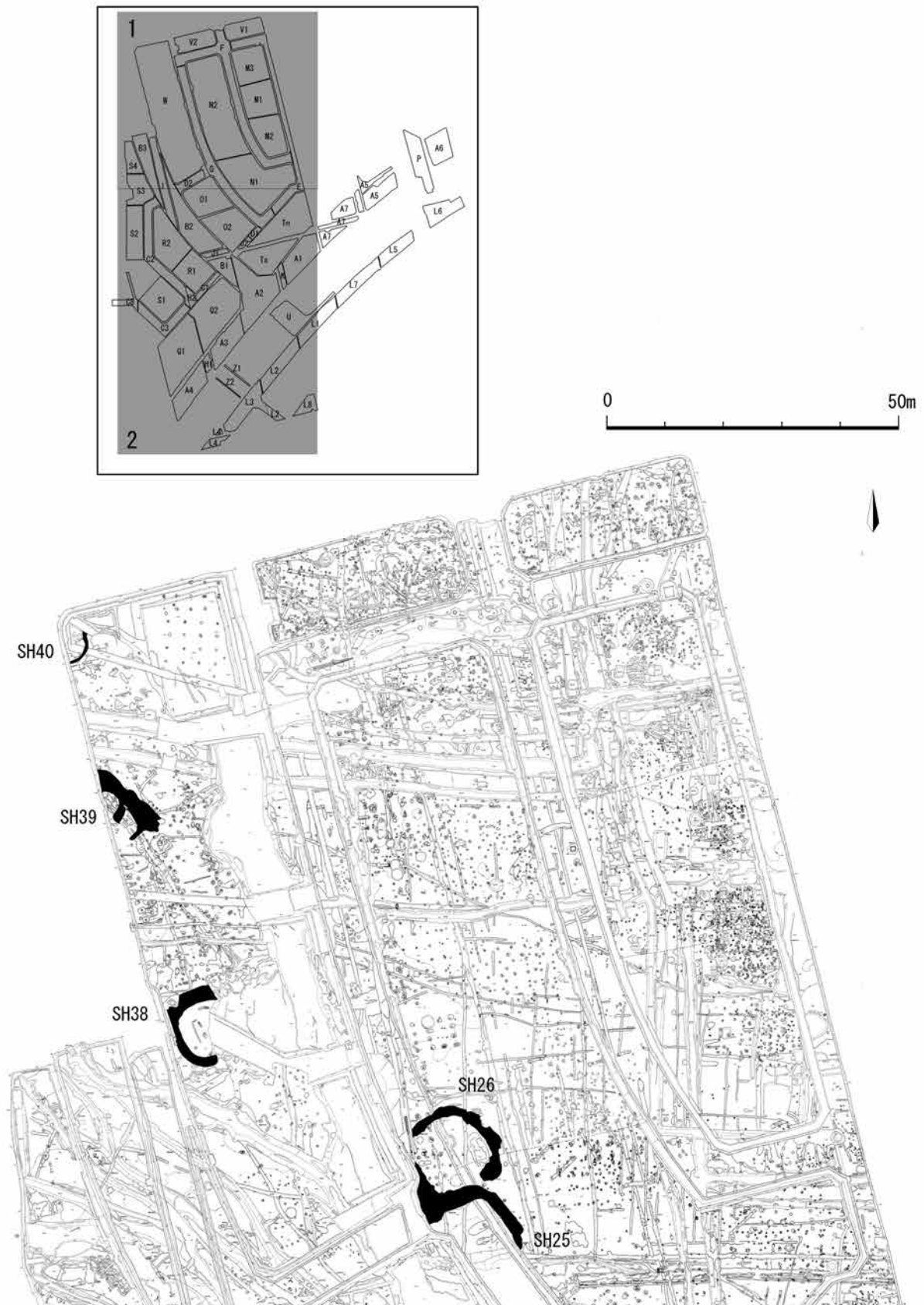
この種の遺構を記述するにあたり、まず、用語について規定する。「竪穴系建物」という概念は栃木英道が平成6（1994）年に石川県立埋蔵文化財センターで行われた村落遺跡研究会で発表した分類が初現となる。それは弥生・古墳時代の周溝をもつ（平地式）住居と、竪穴掘削を確認できる通常の（竪穴式）住居を同類別種の建物として扱ったものであった。この内容は以後の研究に大きな影響を与えているが、残念なことに文献として刊行されたものではなく、文字による説明も少なかったため、さまざまな誤解が生じたようであり、少なくとも県内の発掘調査報告書では規定も引用も不十分なものが多い。本書でも第1分冊と第2分冊では「竪穴建物跡」という曖昧な表現になっている。第3分冊では、栃木の意図を適切に理解できているかどうか心許ないが、基本的に弥生時代中期から古墳時代前期において、前述2者の建物型式は床面の設定を除けばほぼ同じ構造であり、外周溝など共有する属性を選択しているという理解の下で、この型式が成立していない縄文時代のものとは異なる、という意味あいも込めて「竪穴系建物」の用語を使用する。

通し番号を振った竪穴系建物跡は合計して46棟あり、弥生時代に含めたものは9棟、古墳前期に含めたものは20棟、古墳中後期に含めたものは17棟である。そのうち第2分冊では弥生時代で2棟（S H01・06）、古墳前期で2棟（S H02・04）、古墳中後期で2棟（S H03・05）の合計6棟を報告しており、本書第3章で7棟、第4章本節で18棟、第4分冊で残り15棟を報告する。S H07～10は欠番となる。古墳前期竪穴系建物跡の分布は調査区の南北端にまで及び散在するが、概ね西半部分に展開しており、東半では確認されない。それは大溝群の東西両岸に近接した位置と言い換えることができ、密接な関係がうかがわせるが、第4分冊で記述する中心的な大溝群D S 8・DN 8の成立時期と照合して検討する必要がある。個別で見えていくと並存しないものも含めて2棟以上が接近する場合（S H15・16・18、S H25・26、S H33～35など）が多く、単独で存在する場合（S H24、S H38、S H47など）は、未調査区が隣接するなど不確定な要素を含んでいる。前者のパターンが普遍的であるとすれば、一定の居住ブロックが形成されていたことが想定されよう。

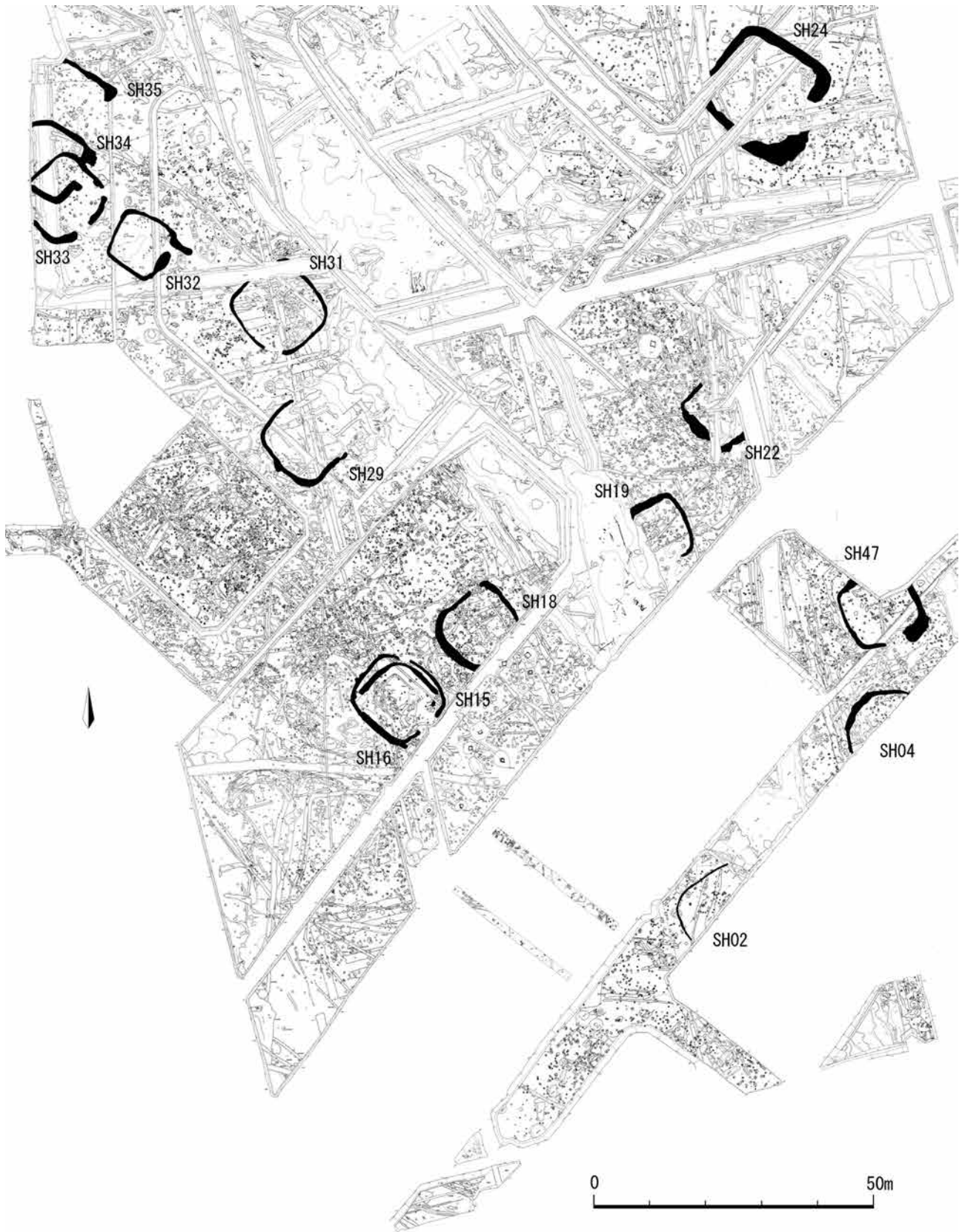
調査状況としては、周溝はほとんどの建物跡で検出されているが、その内部で支柱穴を検出できたものは意外と少ない。支柱穴が検出された例では、位置関係から周溝が外周溝であるのか壁周溝であるのかを確認することができた。また、S H15やS H38ではひとまわり小径の周溝が壁周溝と確認できている。これら遺存がよい事例をもとに外周溝の規模を類推すると、ほとんどの周溝は外周溝と判断される。こうした建物内部の遺構が検出されることが少ないのは、認識の難しさや著しい削平に起因する部分が大きく、本来は存在したものと推定しておきたい。以上の竪穴系建物跡を見る限り、周溝の平面形は四角形で、支柱穴も4本配置が主体となる。周溝の規模については遺存状況に大きく左右されており、厳密な比較は難しい状況である。遺物はほとんどの建物跡で周溝から土器が出土しており、時期比定の根拠となっている。土器以外の遺物はきわめて少ない状況である。

S H15・16（遺構：第77図、図版51 遺物：第94・95・169図、図版71・87）

調査区の南西部、大溝群の西岸に位置する。重なり合う2条の周溝とその内側にひとまわり小さい



第75図 豎穴系建物跡配置図1 (S=1/1,000)



第76図 竪穴系建物跡配置図2 (S=1/1,000)

1条の周溝を検出した。その配置から、外側の周溝は竪穴系建物の外周溝で、内側の周溝は壁周溝に比定できる。外周溝が2条あることから2棟の存在が想定され、その分の番号を付している。前後関係は明らかでないが、土層C-D間にみる深い部分が古く、浅い部分が新しいという前提では、SH15からSH16への推移を予想することができる。壁周溝は辺6～7mの四角形平面を呈し、実質的な居住空間とその形状を示す。壁周溝の外側と内側では高低差はないが、後世の削平によるものであり、竪穴や周堤の存在を否定するものではない。壁周溝は1条しか検出されておらず、前述した外周溝の推移には対応しない。外周溝と壁周溝の関係については二つの解釈を提示する。一つは、土層M-N間で見るとおり壁周溝は一定の深さを持っており、削平による完全な消失は考えにくいことから、建物がその内部を維持しつつ外周溝のみが再掘削されたとするものである。その場合、比較的短時間での推移が想定される。もう一つは、改築時に盛土による嵩上げがあり、対応する新しい壁周溝が完全に削平され失われたとするものである。その場合、現状の壁周溝は配置からもSH15に伴う蓋然性が高い。どちらの解釈を妥当とすべきか迷うところではあるが、外周溝の推移は復元される屋根の接地位置にも変更を要するものであり、後述する出土土器には一定の時間差が見られる。これらの様相は後者の解釈を支持するものといえよう。なお、支柱穴については検出できていない。

遺物は外周溝からまとまった量の土器のほか、有孔土玉(E44)が出土している。SH15ではくの字口縁台付甕(1011)や高杯(1013・1014・1018)など東海系を主とする外来系土器が多いほか、有段口縁甕(1005)など在来系土器で組成され、古墳前期1期に位置付けられる。ただし、くの字口縁甕(1009)については誤配置であり、この遺構に伴うものではない。直口壺(1001)は胴部やや上位に円孔があり、焼成後に穿孔し縁を整形している。この対面の下位にも円孔があるが、器面が剥離しており破損である可能性が高い。SH16ではほぼ外来系土器のみで組成されており、山陰系甕(1030)は布留系甕が共伴しうる型式である。近江系文様の装飾壺(1027)はやや異質で古相であり、高杯(1031)は古墳中後期の混入と判断されるが、他は古墳前期2期に位置付けられる。また、壁周溝からは土器の注口(第4分冊E89)が出土している

SH18 (遺構：第78図、図版51 遺物：第94・124図、図版71・75)

調査区の南西部、大溝群の西岸に位置し、SH15・16とは近接する。南を除く三辺に周溝を検出した。南辺は調査区境に隠れるものと推定する。西辺では重なりが見られ、土層C-D間にみるとおり、内側(SD109)から外側(SD108)への再掘削が想定されてもよい。SB111・112・222・225といった掘立柱建物跡との重なりが著しいが、前後関係が判明しているのは切り込んでいるSB222のみである。支柱穴は概して小径の4本を想定できる。深さは20～30cmで、底面レベルは南北の柱列単位でほぼ揃っており、北列が深い。周溝は支柱穴との配置や規模からみて外周溝と判断されよう。

遺物は外周溝(SD108)から少量の土器が出土している。時期判断は難しいが、くの字口縁台付甕(1022)や台付鉢(1024)が出土している他、SK99併出の東海系高杯(1144)もこちらに帰属する可能性が高い。前者は古墳前期1期、後者は古墳前期2期の位置付けとなり、近接するSH15・16とは基本的には同じ時間幅を持つことになるが、外周溝の新古には対応しない。

SH19 (遺構：第79図)

調査区の南部、大溝群の東岸に位置する。北・東2辺の周溝を検出した。コーナー部分の鋭角が特徴的である。西半部は古墳中後期の大溝群DS8が形成されることによって失われたようである。支柱穴は4本を想定できるが、確定できない。小径で、深さは20～30cmを測り、南東のものを除いては底面レ

ベルがほぼ揃う。周溝は主柱穴との配置や規模からみて外周溝と判断されよう。

遺物は図化できるものが出土していない。本遺構の時期を古墳前期とする根拠は、想定されるD S 8との前後関係であるが、外周溝の形状は中でもかなり後出することを予想させる。

S H 22 (遺構：第80図 遺物：第95図)

調査区の南部、大溝群の東岸に位置する。東を除く3辺の周溝を検出した。東半部はほとんどが調査区境に隠れる。すぐ西には古墳中後期のS H 21がほぼ同じ主軸方向で重なっている。南コーナー部分はS K 26が相当するようにも見えるが、S H 21に伴うものとして復元した。主柱穴は不整形ながら底面レベルの揃う穴2基を指摘できるが、復元には至らなかった。

遺物は周溝から少量の土器が出土している。有段口縁壺(1033)、くの字口縁甕(1032・1034)、畿内系高杯(1035)とも新しい様相であるが、全体に薄手なつくりでシャープな輪郭をもつ。古墳前期4期に位置付けられ、中期には降らないものと考えたい。

S H 24 (遺構：第81図、図版52 遺物：第96・170・171図、図版72・88)

調査区の中央部、大溝群の東岸に位置する。4つの調査区にまたがっており、本遺跡群中で最大規模の竪穴系建物跡である。所々欠ける部分もあるが4辺の周溝を検出した。幅は比較的広い。南東辺中央は一方が完結しており、開口部となる。北東辺では南東方向へ伸びていく細い溝(E区S D 06・T区S D 02)が分岐しており、土層C-D間では周溝と同時に埋没していることから、排水溝が付属する可能性がある。主柱穴は4本を想定でき、建物規模に応じて間隔も広い。北角の穴は浅いが、それ以外のものは深さ50~60cmを測り、底面レベルもほぼ揃う。北角の穴は軸線もずれることから、実際の柱穴を検出できていない可能性が残る。また、主柱穴軸線の外側に沿って平面四角形の土坑(T区S K 06)が検出されており、本遺構に付属する屋内土坑となる可能性が高い。周溝はこれら遺構との配置や規模からみて外周溝と判断されよう。

遺物は外周溝からまとまった量の土器のほか、石斧状の石製品(S101)が出土している。土器は外来系で組成され、山陰系壺(1047)、山陰系甕(1048・1061~1063)といった山陰系土器が多く、東海系土器は少ない。この他では、無文化した大型壺(1054~1056)や扁平器形の小型器台(1067)の存在からも、布留系甕が共伴しうる様相と推定する。時期は古墳前期2期に位置付けたい。また、主柱穴の一つからは鉄鏃(M5)が出土している。

S H 25 (遺構：第82図 遺物：第95図)

調査区の中央部、大溝群の東岸に位置する。北側2辺の周溝を検出しており、残る2辺は古墳中後期の大溝群D S 8が蛇行することにより失われている。北コーナーは調査区境に隠れており、形状は不明である。北西辺はS H 26の南東辺周溝と重なっており、土層K-L間でみるとおり、本遺構が後出する。北東辺では重なりが見られ、土層のとおり内側から外側への再掘削が想定される。主柱穴については検出できていない。

遺物は周溝から少量の土器が出土している。ほぼ定型化した布留系甕(1036・1037)であり、古墳前期3期に位置付けられる。

S H 26 (遺構：第83図 遺物：第95図、図版71)

調査区の中央部、大溝群の東岸に位置する。西半部コーナーは不明確になるが、4辺の周溝を検出している。南東辺は東コーナー付近で完結しており、開口部となる。また、S H 25の北西辺周溝と重なっ

ているが、第82図の土層K-L間でみるとおり、本遺構が先行する。主柱穴は深さ30cm前後の穴2基を指摘して南柱列とし4本を想定できるが、残り2基は検出されていない。1基は重なっているS B236北東角の柱穴で失われている可能性がある。周溝は主柱穴との配置や規模からみて外周溝と判断されよう。

遺物は周溝から少量の土器が出土している。そのうち、大型壺(1038)、直口壺(1039)、布留系甕(1042)は開口部近くの外周溝から出土している。布留系甕は他にもう1点あり(1041)、ともに初期の型式である。古墳前期2期に位置付けられる。

S H29 (遺構：第84図 遺物：第97図、図版72)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。東を除く3辺の周溝を検出した。南コーナー付近では古墳中後期S H50の北コーナー付近と重なりがある。また、周溝とよく似た形状の溝が外側に沿うが、周溝の再掘削であるのかどうかは不明である。主柱穴は検出されていない。

遺物は周溝から出土した土器が1点図化されているのみで、少ない。在地系の有段口縁甕(1071)であり、古墳前期1期に位置付けられる。

S H31 (遺構：第85図、図版52 遺物：第97図、図版72)

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。4辺の周溝を検出した。北コーナー周辺は中世溝の掘削により失われており、南コーナーは溝が途切れて開口部となる。全体に幅が狭く細いことが特徴である。掘立柱建物跡S B229が重なっており、S B229の柱穴(R 2区P65)が周溝に切り込んでいる。主柱穴は後出する遺構や近現代水路の攪乱を受けているが、いずれも小径で深さ25~50cmの4本を想定できる。軸線の対角となるR 2区P68とP70は底面レベルが揃うが、他はややばらつく。周溝は主柱穴との配置や規模からみて外周溝と判断されよう。

遺物は外周溝から土器が出土している。全体に遺存が良くないが、他の器種に比べて壺(1072~1074・1077~1080)が多く出土しており、形態も多様である。時期は古墳前期1期か2期にまでは絞り込めるが、指標に乏しく、決定が難しい。ただし、くの字口縁甕(1075)と高杯(1076)については時期が3~4期に降るので、周辺の遺構から混入した可能性が高い。

S H32 (遺構：第86図、図版52 遺物：第98図、図版73)

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。4辺の周溝を検出した。本遺跡群中では最も小型の竪穴系建物跡の一つである。南東辺は東コーナーに寄った位置で周溝が途切れて開口部となる。開口部の北東側は屈曲するように見えるが、新しい土坑(R 2区S K10)が重なっているためである。南西側では大きく膨らんだ形状となっているが、別の遺構が重なっている可能性も残る。西コーナー付近では調査区境を隔てて古代のS 2区S K02と中世のC 2区S E01が切り込んでいる。主柱穴は検出されていない。

遺物は周溝から土器が出土している。精製脚付鉢(1102)など注目すべき土器もあるが、全体に時期決定が難しい。大形壺(1093・1094)や小型器台(1104)の器形等から古墳前期1期とするが、2期に降る可能性も持たせておきたい。

S H33 (遺構：第87図、図版53 遺物：第97図、図版72)

調査区西端、大溝群の西岸に位置する。古墳前期の竪穴系建物跡3棟が錯綜する地点の南半を占める。中世溝に切り裂かれているが、4辺の周溝を検出した。南辺の中央と南東コーナーで周溝が途切れて開口する。北半ではS H34と重なるが、第88図の土層E-F間で見るとおり、本遺構が後出する。北東辺

では掘立柱建物跡 S B 231 が重なっており、その柱穴が周溝を切り込んでいる。南東コーナー付近では S 2 区 S K 07・S K 08 は本遺構に後出するが、S 2 区 S K 09 は前後関係が確認できないため周溝の一部となる可能性がある。支柱穴は穴 3 基を指摘し、残り 1 基は中世溝によって失われたものとして、4 本を想定可能である。ただし、全体に底面レベルは揃うものの、深さは 20cm 前後と浅いため、不安は残る。積極的に支柱穴と解釈した場合、周溝はその配置や規模からみて外周溝と判断されよう。

遺物は外周溝から少量の土器が出土している。定型化した布留系甕（1085）があり、古墳前期 3 期に位置付けられる。

S H 34（遺構：第 88 図、図版 53 遺物：第 97 図・171 図、図版 73・88）

調査区西端、大溝群の西岸に位置する。古墳前期の竪穴系建物跡 3 棟が錯綜する地点の中央を占める。北西を除く 3 辺の周溝を検出した。南東辺の中央やや東寄り周溝の端が外側へ屈曲し開口部となる。中世溝の他、古墳中後期の大溝群 D N 7 が切り込んでいる。また、S H 33 と重なるが、土層 E - F 間で見るとおり、S H 33 が後出する。支柱穴は検出されていない。いくつかの候補をあげることはできるが、確定には至らなかった。

遺物は外周溝から土器が出土している。開口部近くの周溝が屈曲する地点（S 2 区 S K 13）では複数個体（1087・1089・1091・1092）がまとまって出土した。甕は山陰系（1086・1089）、布留系（1087・1088）で組成されており、いずれも古い型式であることから、古墳前期 2 期に位置付けられる。この他では、硬質で細身短小の管玉（J36）が出土している。

S H 35（遺構：第 89 図 遺物：第 98・99・102 図、図版 73）

調査区西端、大溝群の西岸に位置する。古墳前期の竪穴系建物跡 3 棟が錯綜する地点の北半を占める。1 条の直線的な溝を検出したのみであるが、東端部が南へ屈曲し完結することから、竪穴系建物周溝の北東辺と推定したが、対応する他辺は検出されなかった。支柱穴は柱間 3 m 前後の 4 本を想定できるが、周溝の配置が不明なため、確定できなかった。周溝の北東方向には目立った遺構がないことから、区画溝のような性格のものかもしれない。

遺物は周溝からまとまった量の土器が出土している。外来系土器で組成され、東海・近江系装飾壺（1107）、定型化前の布留系甕（1109）、小型器台（1112～1115・1121）、山陰系壺（1117）等を抽出できる。古墳前期 2 期に位置付けられる。ただし定型化後の布留系甕（1110）、くの字口縁甕（1111）、口縁が外側へ肥厚する山陰系甕（1118）については 3 期以降に時期が降る型式であり、時間幅をもつ。混入かあるいは別の遺構が重なっている可能性がある。

S H 38（遺構：第 90 図、図版 53 遺物：第 102 図、図版 74）

調査区北西部、大溝群の西岸に位置する。東を除く 3 辺の周溝とその内側にひとまわり小径で同じ主軸の細く浅い周溝を検出した。その配置から、外側の周溝は竪穴系建物の外周溝で、内側の周溝は壁周溝に比定できる。東半は大溝群 D N 8 によって失われている。外周溝は幅が広いが、土層 E - F 間を見る限り再掘削されている可能性はある。壁周溝はほとんど痕跡をとどめるのみであるが、現状で辺長 4 m 程度の四角形平面を予測でき、実質的な居住空間とその形状を示す。支柱穴は穴 2 基を指摘し、4 本を想定できるが、深さは 20～30cm で、底面レベルはばらつく。

遺物は外周溝から土器が出土している。量は少ないが、布留系甕（1123）、小型器台（1124）、畿内系高杯（1125）が揃っており、古墳前期 3 期に位置付けられる。

S H39 (遺構：第91・100図、図版53 遺物：第102図、図版74)

調査区の北西部、大溝群の西岸に位置する。調査区壁際で重なりあう弧状の溝を3条検出し、竪穴系建物の周溝と認識した。土層C-D間に見るとおりW区S D08、S D09、S D12の順に推移しており、平面的には北・西へ移動することから、周溝の再掘削のみではなく、建物位置も大きく変化していることになる。支柱穴については、調査区壁際のため検出できていない。

遺物は外周溝から出土している。最も古い周溝となるS D08からは定型化前の布留系甕(1130)の他、大型壺が複数見られる。次の段階の周溝S D09からは定型化した布留系甕(1131)が出土している。最新の周溝S D12は実測された土器がない。布留系甕の型式は周溝の新古に対応しており、それぞれ古墳前期2期と3期に比定できる。ただし、古い周溝出土の山陰系大型壺(1126)は古墳前期3期以降以降るものであり、若干の混入も予想される。

なお、周溝とDN8をつなぐ位置にあるS D15については、溝底がDN8へ向かって下降していくことや、ほぼ同時期の土器が出土していることから、S H39に付属する排水溝の可能性もある。また、調査区の西側では金沢市埋蔵文化財センターが後年に発掘調査を行っており、各周溝の延長が確認されている(第100図)。本遺構の全体像についてはそちらの正式報告を待って検討したい。

S H40 (遺構：第91図・第101図)

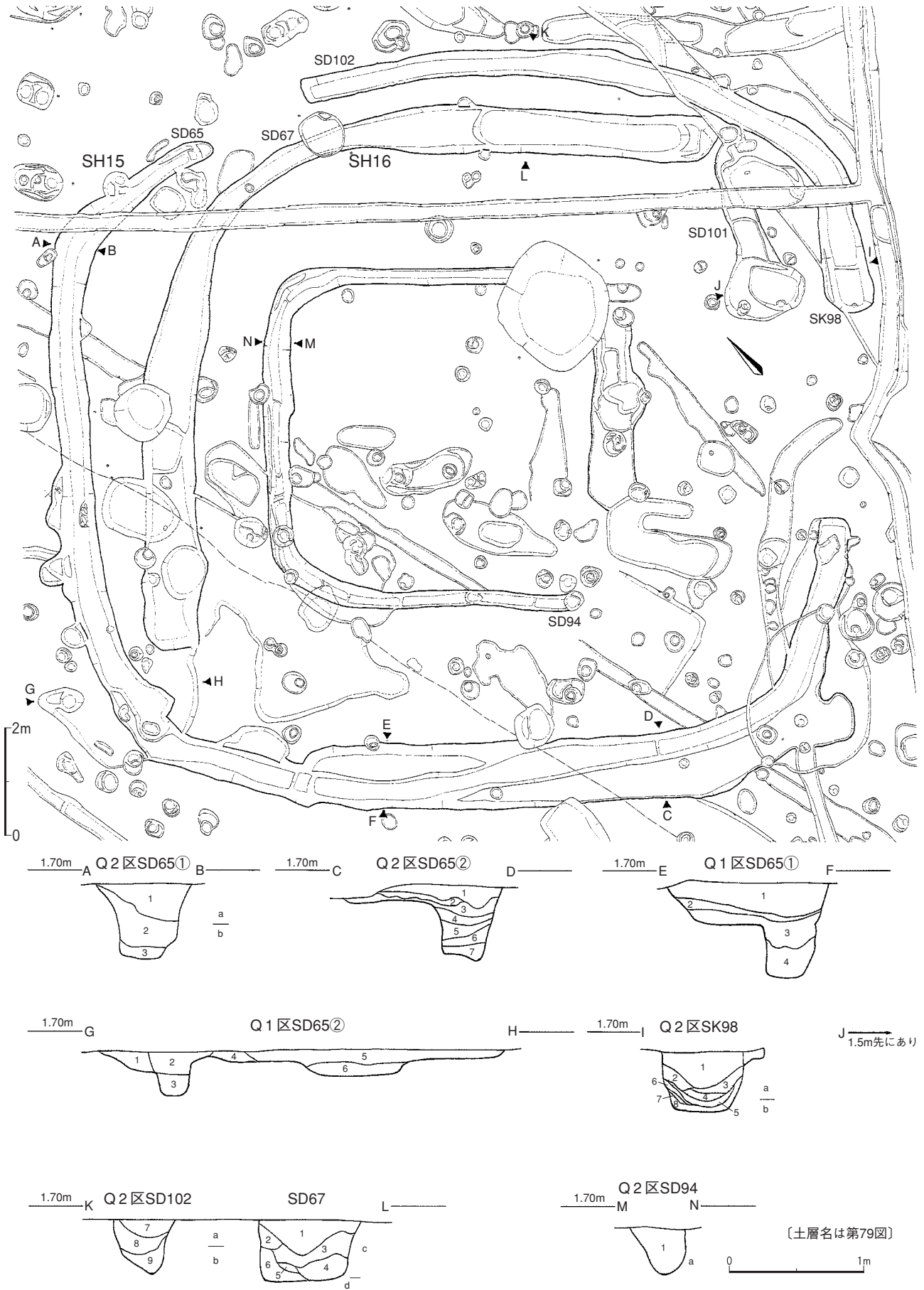
調査区の北西端、大溝群の西岸に位置する。調査区壁際で弧状の溝を検出し、竪穴系建物の周溝と認識した。北側は古墳前期の大溝群DN9と重なっている可能性があるが、調査作業用の畦に隠れてしまい、関係は不明である。土層からは一端埋没した跡に再掘削された可能性がうかがわれる。また、本遺構の南側に沿い、東端が屈曲するW区S D10については、調査時の所見では弥生時代の溝となっているが、竪穴系建物跡周溝の可能性のあることを付記しておく。遺物は実測されたものがなく、詳細な時期は不明である。

なお、調査区の西側では金沢市埋蔵文化財センターが後年に発掘調査を行っており、周溝の延長が確認されている(第101図)。平面図を見る限りはW区S D10につながる可能性もあるが、どちらかは判断できない。金沢市埋蔵文化財センターの正式報告を待って検討したい。

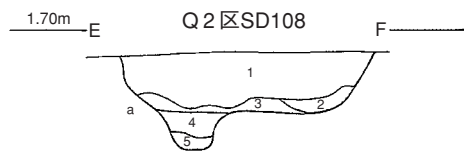
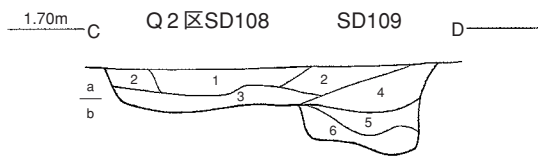
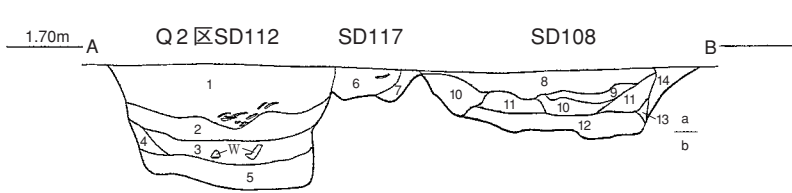
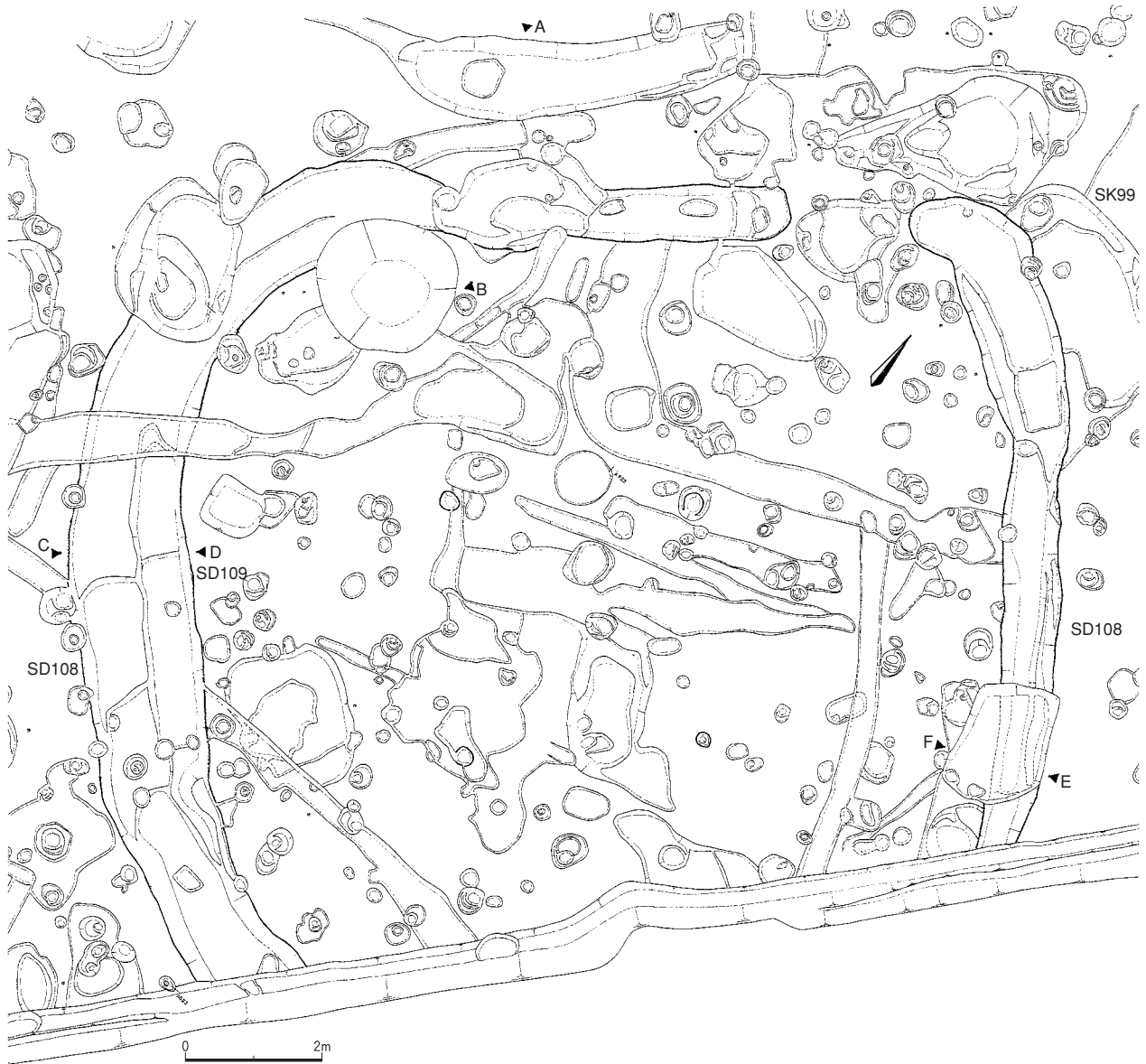
S H47 (遺構：第92・93図、図版53 遺物：第102図、図版74)

調査区の南部、大溝群の東岸に位置する。4辺の周溝を検出しており、北東コーナー周辺は調査区外へ出る。南東コーナー付近はL1区に位置し、第2分冊で一部が紹介されているが、ここであらためて報告する。南東コーナーは大きくふくらんで南辺中央で完結し、開口部となる。他の部分とは大きく形状が異なるが、原因は不明である。支柱穴は4本を想定できる。深さ10~20cmと浅めであるが、底面レベルは最大でも10cm程度の差でまとまっている。周溝はその配置や規模からみて外周溝と判断されよう。

遺物は外周溝から土器が出土している。特に西辺の最も細くなる地点に集中しており、特徴的な出土状況である。外来系土器には二重口縁壺(1132)、くの字口縁甕(1133)、小型器台(1136)、ミニチュアといってよい東海系高杯(1138)があり、在来系土器には中型器台(1135)がある。外来・在来という区分が難しくなるが、くの字口縁甕の能登系(1134など)も見られる。各器種の形態から古墳前期1期に位置付けられ、第2分冊で紹介したL1区S X02の土器よりもやや古相を示す。



第77図 SH15・SH16実測図 (S=1/100・1/40)



- 1 暗茶灰色粘質土 炭化物含む、土器多い
- 2 暗褐色粘質土 かなり暗い、炭化物若干含む
- 3 暗灰色粘土 木(自然木)・土器・炭化物含む、かなり暗い
- 4 暗灰色粘土 地山土含む
- 5 オリーブ灰色砂質土 地山+青灰粘土(4層混じる)
- 6 暗褐色粘質土 黒っぽい
- 7 暗褐色粘質土 黒っぽい、地山粒含む
- 8 暗褐色粘質土 地山粒全体に含む
- 9 暗褐色粘質土 地山ブロック多く含む
- 10 暗褐色粘質土 黒っぽい、地山土全体に含む
- 11 暗褐色粘質土 黒っぽい
- 12 黒褐色粘質土 粘質強い、地山粒・炭化粒とも少量含む
- 13 黄灰色粘土 地山 11層シミ状に含む
- 14 黄灰色粘土 地山 灰粘シミ状に含む
- a 灰黄粘
- b 青灰砂

- 1 灰褐色粘質土 地山土少量含む
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土 地山ブロック含む
- 4 灰褐色粘質土 地山小ブロック均一に含む
- 5 オリーブ灰砂質土 6層が混じる+地山ブロック
- 6 暗灰色粘土
- a 灰黄粘
- b 青灰砂

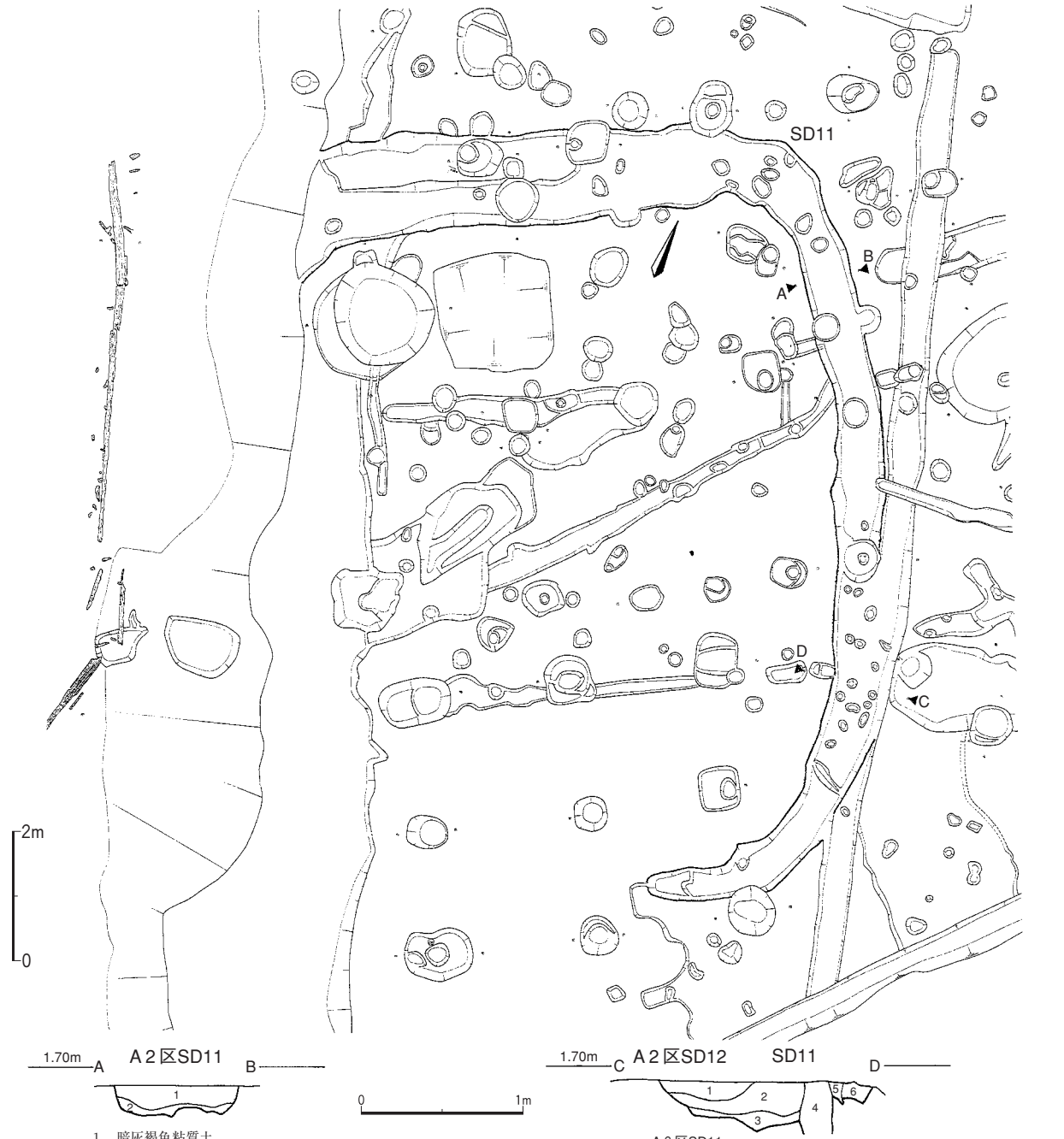
- 1 濁茶灰色粘質土 地山ブロック少量含む、炭化物少量含む
- 2 褐色粘質土 灰色強い
- 3 淡褐色粘質土 地山土多く含む
- 4 暗褐色粘質土 地山土含む
- 5 暗灰色粘土 地山土含む
- a オリーブ灰砂

1~5はSD112 6・7はSD117 8~14はSD108E

1~3はSD108W 4~6はSD109



第78図 SH18実測図 (S=1/100・1/40)



- Q1区 SD65①**
 1 淡茶褐色土
 2 1より灰色がかる
 3 地山ブロック混じりの1
 4 濁灰白色粘質土
- Q2区 SD65①**
 1 暗褐色粘質土 かなり暗い
 2 濁褐色粘質土 地山ブロック多く含む
 3 暗灰色粘土
 a 灰黄粘
 b 青灰粘
- Q2区 SK98**
 1 灰褐色粘質土 地山粒全体に少量含む
 2 暗褐色粘質土 かなり暗い
 3 暗褐色粘質土 地山ブロック含む、炭化物含む
 4 暗褐色粘質土 黒っぽい、地山土少量含む
 5 暗褐色粘質土
 6 暗褐色粘土 黒っぽい、4層と同じ
 7 暗褐色粘土 5層と同じ、地山粒含む
 8 暗褐色粘土 黒っぽい
 a 灰黄粘
 b 青灰粘

- Q1区SD65②**
 1 淡茶褐色砂質土
 2 淡黄褐色砂質土
 3 淡黄褐色粘質土
 4 1と同じ
 5 濁淡茶褐色粘質土
 6 黄灰色粘質土
- Q2区SD65②**
 1 濁褐色粘質土
 2 暗褐色粘質土 土器粒・炭化粒多く含む
 3 褐色粘質土 地山土含む
 4 暗褐色粘質土 地山粒含む
 5 暗褐色粘質土 かなり暗い
 6 濁褐色粘質土 地山粒含む
 7 濁暗褐色粘土 地山ブロック多い
- Q2区 SD94**
 1 暗褐色粘質土 地山土(上のほう粒小さく下のほう粒大きめ)含む
 a 灰黄粘

- A2区SD11**
 1 灰粘土 中世か近世
 2 灰褐色粘質土 SD11覆土
 3 2層と地山の混合土
 4 明灰色粘土 近代のはざ跡か?
 5 暗灰粘質土
 6 暗灰褐色粘質土
- Q2区SD67 SD102**
 1 褐色粘質土
 2 褐色粘質土 地山土多く含む
 3 暗褐色粘質土 地山土含む
 4 濁暗褐色粘質土 地山ブロック含む、黒っぽい暗粘混じる
 5 暗褐色粘質土
 6 濁暗褐色粘土 地山土少量含む、黒っぽい暗粘混じる
 7 灰褐色粘質土 炭化物・地山ブロック少量含む
 8 暗褐色粘質土 炭化物ごく少量含む
 9 暗褐色粘質土 かなり暗い、地山土少量含む
 a 灰黄粘
 b 青灰粘
 c オリーブ灰粘
 1~6はSD67 7~9はSD102

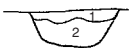
[第77図の土層名]

第79図 SH19実測図 (S=1/100・1/40)

第2節 竪穴系建物跡

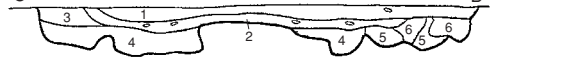


1.80m A T区SD27 B



- 1 暗灰色土
- 2 暗灰色土 ベース(砂質シルト)多混

1.70m C A2区SX04 D



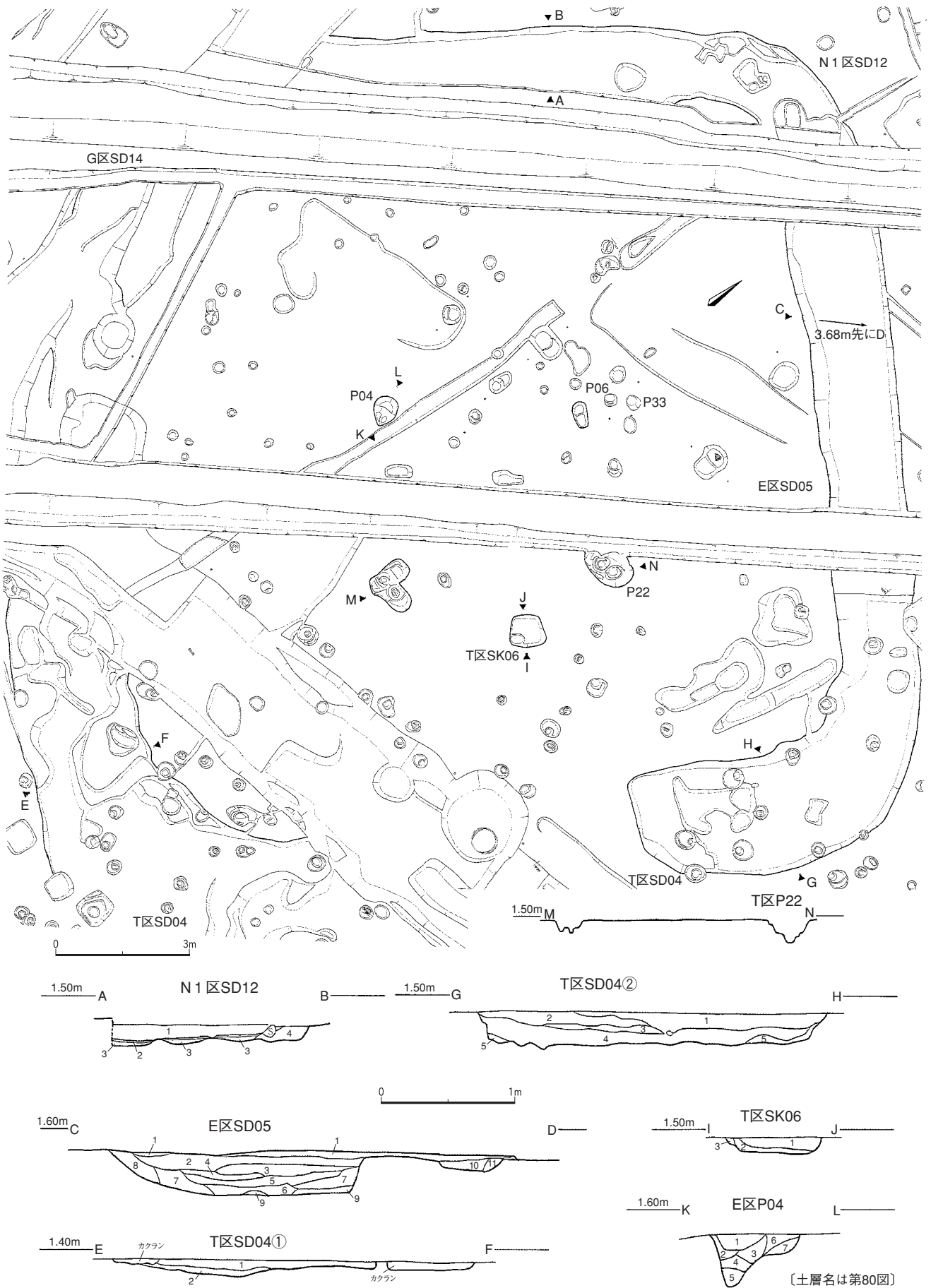
- 1 灰褐色粘質土 土器・炭粒含む
- 2 灰褐色粘質土 炭粒多い
- 3 灰褐色粘質土 1、2より多い
- 4 灰褐色粘質土と地山土の混合土
- 5 灰褐色粘質土 4より暗い
- 6 暗灰粘質土

0 1m

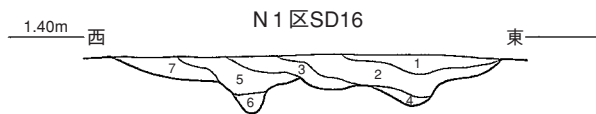
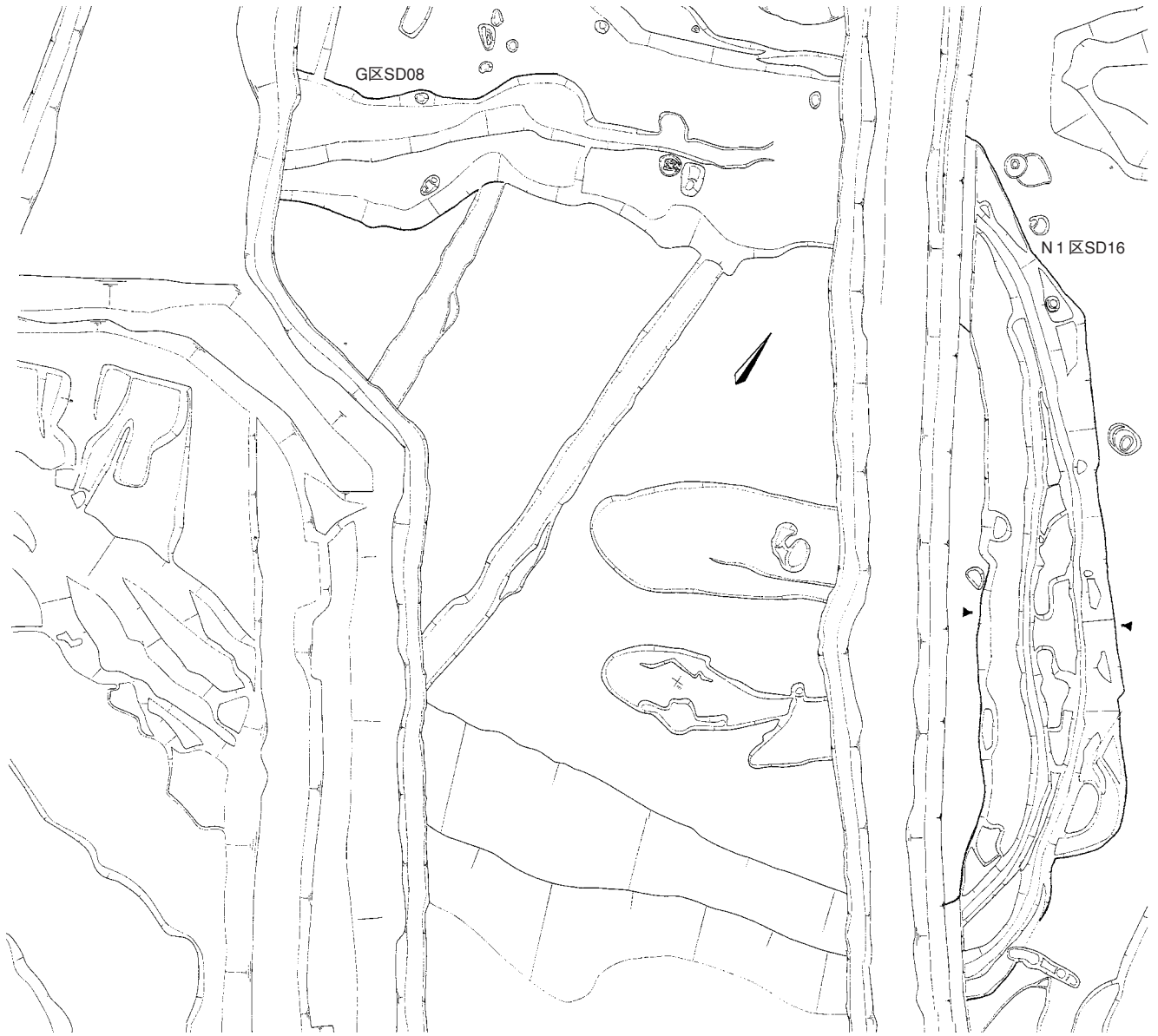
<p>N1区SD12</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 黒褐色土 ベース粒・土器細片含む 炭粒少含む 2 炭化物集中帯 3 暗褐色土 1層+ベース混じり 4 黒灰色土 	<p>T区SD04②</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 茶灰色土 2 暗褐色土 3 暗褐色土 ベース土塊多混 4 暗褐色粘質土 炭混 5 黄褐色粘質シルト ベース崩落土・4層混 	<p>E区P04</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 暗灰褐色粘質土 2 暗灰褐色粘質土 黄褐色粘質土少量含む 3 暗灰褐色粘質土 黄褐色粘質土多量に含む 4 暗灰色粘土 5 暗灰色粘土 4より暗い 6 暗灰褐色粘質土 1とほぼ同じ 7 黄褐色粘質土
<p>E区SD05</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 暗灰褐色粘質土 2 灰褐色粘質土 3 黒褐色粘質土 4 黄褐色粘質土 5 黒色粘質土 6 暗灰色粘土 7 暗灰色粘土 黄褐色粘質土少量含む 8 黒褐色粘土 黄褐色粘質土含む 9 黄褐色粘土 10 黄褐色粘質土 11 記入なし 	<p>T区SD04①</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 茶褐色土 2 茶褐色土 黒褐色土塊混 	
	<p>T区SK06</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 暗灰褐色土 ベース混じり 2 暗褐色土 3 乳灰茶色粘質土 	

[第81図の土層名]

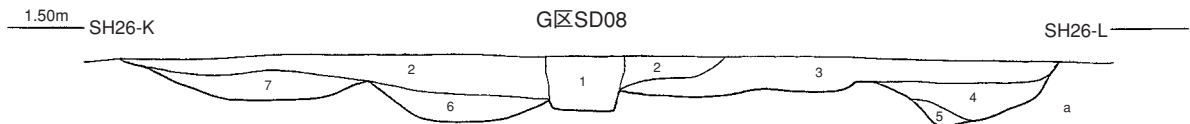
第80図 SH22実測図 (S=1/100・1/40)



第81図 SH24実測図 (S=1/120・1/40)

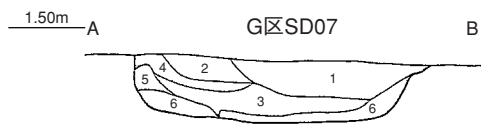


- 1 灰褐色粘質土
 - 2 暗褐色粘質土
 - 3 暗褐色粘質土
 - 4 淡灰色粘質土
 - 5 暗褐色粘質土
 - 6 黒褐色粘質土
 - 7 暗褐色粘質土
 - 地山(黄灰砂粘)小ブロック混
 - 地山混合土
 - 地山ブロック混
 - 地山ブロック混(微細)
 - 地山小ブロック混
 - 地山ブロック混(φ1cm)
- 1~4はSD16b 5~7はSD16a

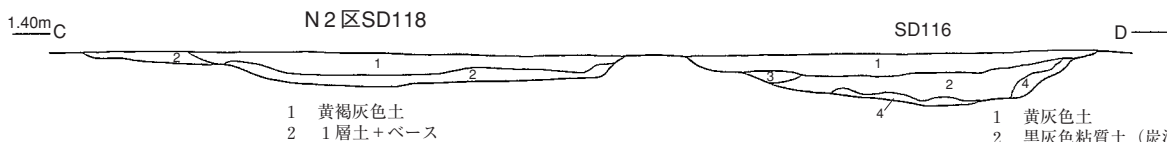
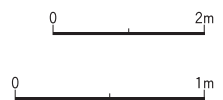


- 1 暗褐色粘土
- 2 暗灰褐色粘土
- 3 暗灰褐色粘土
- 4 暗褐色粘土
- 5 地山質土
- 6 暗褐色粘土
- 7 暗灰褐色粘土
- 地山大ブロック少量含む
- 地山大ブロック多く含む
- 暗褐色粘土大ブロック少量含む
- 地山中ブロック少量含む
- 暗褐色粘土大ブロック少量 地山大ブロック少量含む
- 地山 黄灰色粘土

第82図 SH25実測図 (S=1/100・1/40)

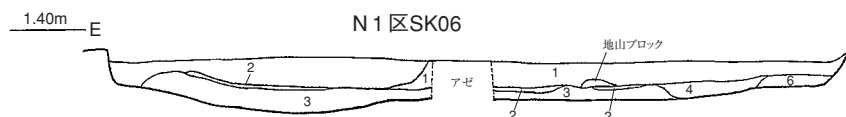


- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 明黄褐色粘質土 暗灰褐色粘質土含む
- 3 明黄褐色粘質土 暗灰褐色粘質土ブロック含む
- 4 明黄褐色粘質土
- 5 明黄褐色粘質土
- 6 黄褐色粘質土

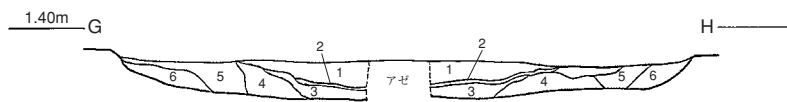


- 1 黄褐色土
- 2 1層土+ベース

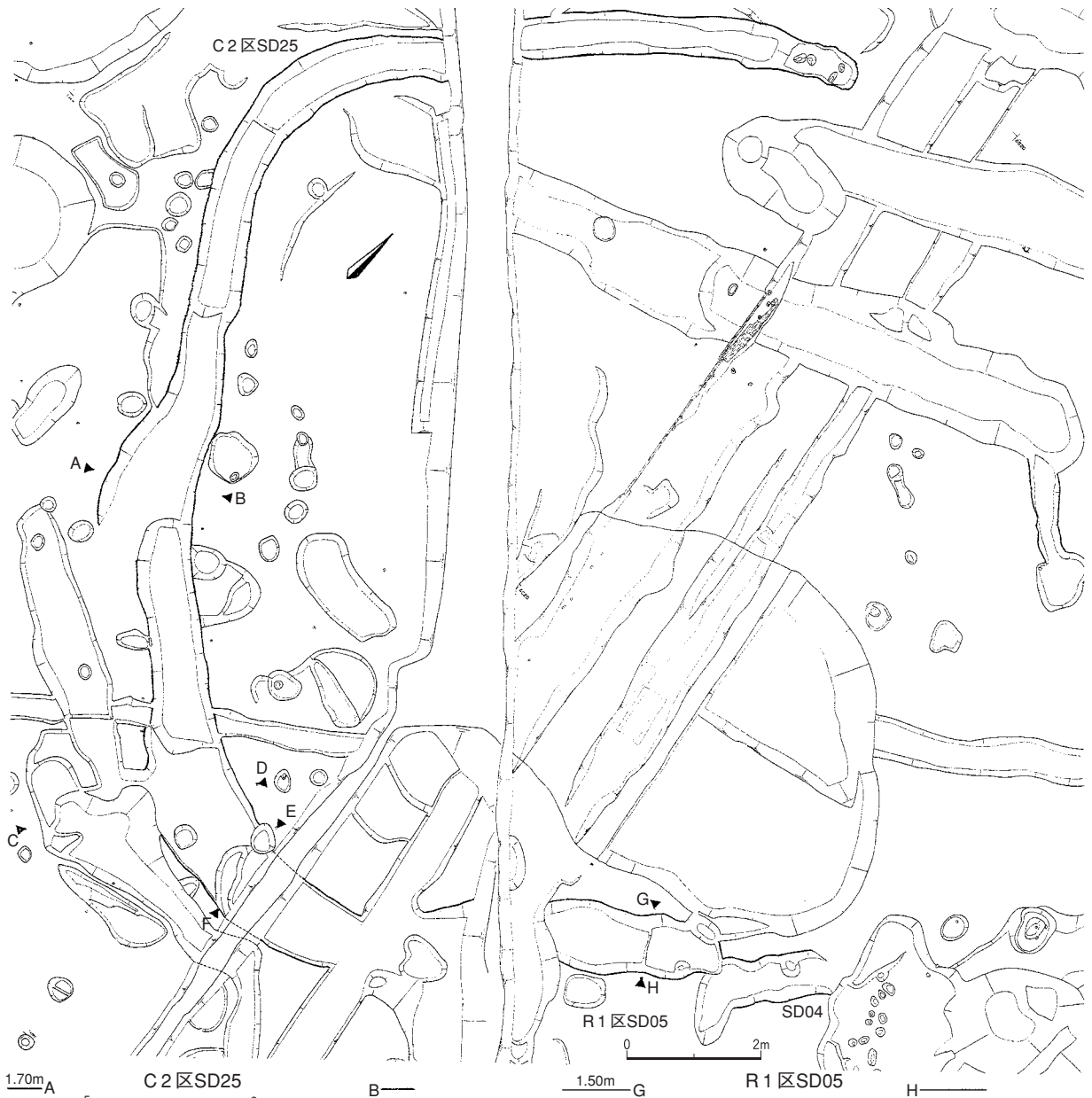
- 1 黄灰色土
- 2 黒灰色粘質土 (炭混じり)
- 3 1層土+2層土
- 4 ベース+2層土



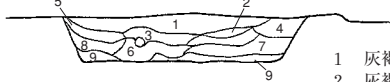
- 1 黒褐色土 炭粒・土器細片多含む
- 2 炭層
- 3 暗褐色土 地山+1層土の混じり土 1層がベース
- 4 暗黄褐色土 地山+1層土の混じり土 地山土がベース
- 5 暗褐色土 3層に比べ地山土混じりの比率が高い まだら状になる
- 6 地山崩落土
- 7 黒(灰)褐色土 1層より灰色がかかるがほぼ1層に同じか?



第83図 SH26実測図 (S=1/100・1/40)



1.70m A C 2 区SD25 B



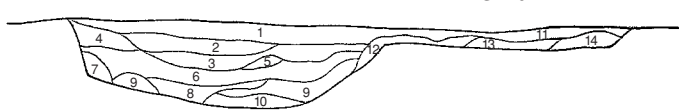
- | | |
|----------|--------------|
| 1 灰褐色粘質土 | 同色砂質土含む |
| 2 灰褐色粘質土 | |
| 3 暗褐色粘質土 | 黄褐色粘質土含む |
| 4 黒褐色粘質土 | 黄褐色粘質土ごく少量含む |
| 5 黒褐色粘質土 | 黄褐色粘質土ブロック含む |
| 6 黒褐色粘質土 | |
| 7 黒褐色粘質土 | 黒褐色粘質土少量含む |
| 8 黄褐色粘質土 | |
| 9 暗灰色砂 | |

1.50m G R 1 区SD05 SD04 H



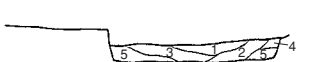
- | | |
|----------|------------|
| 1 灰褐色粘質土 | 褐灰色粘質土含む |
| 2 灰褐色粘質土 | |
| 3 暗褐色粘質土 | 黄褐色粘質土少量含む |

1.80m C C 2 区SD26 SD25 D



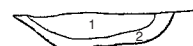
- | | |
|------------|--------------|
| 1 灰褐色粘質土 | 褐灰色粘質土含む |
| 2 灰褐色粘質土 | |
| 3 暗褐色粘質土 | 黄褐色粘質土少量含む |
| 4 灰褐色粘質土 | 明褐色粘質土含む |
| 5 黄褐色粘質土 | 黄褐色粘質土ブロック含む |
| 6 黒褐色粘質土 | 黄褐色粘質土多量に含む |
| 7 黒褐色粘質土 | |
| 8 黄褐色粘質土 | |
| 9 暗灰色砂 | |
| 10 暗緑灰色砂 | |
| 11 褐灰色粘質土 | 黄褐色粘質土多量に含む |
| 12 明黄褐色粘質土 | |
| 13 明黄褐色砂質土 | |
| 14 暗灰色砂 | |

1.80m E C 2 区SK66 F



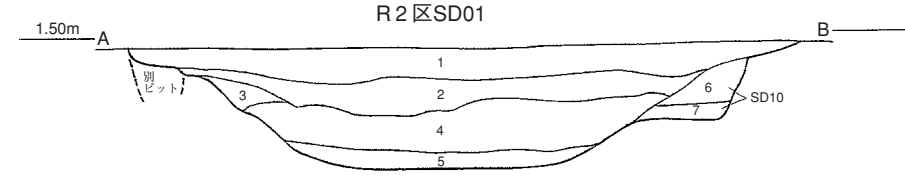
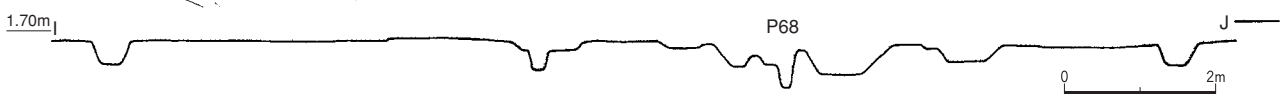
- | | |
|----------|------------|
| 1 灰褐色粘質土 | |
| 2 暗褐色粘質土 | |
| 3 褐灰色粘質土 | |
| 4 黄褐色粘質土 | |
| 5 暗褐色粘質土 | 黄褐色粘質土少量含む |

1.50m (不明) R 1 区SD04 (不明)

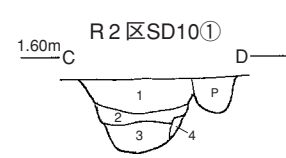


- | | |
|----------|--|
| 1 灰褐色砂土 | |
| 2 明灰褐色砂土 | |

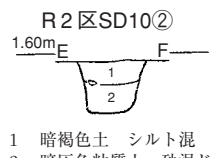
第84図 SH29実測図 (S=1/100・1/40)



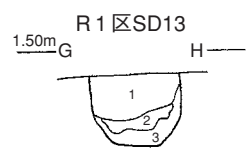
- 1 暗黄灰色土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 2層に黒灰色土のブロック混じり
- 4 灰色粘質土
- 5 暗灰色粘質土 砂混じり
- 6 暗褐色土 ブロック黄灰色シルト
- 7 灰砂にシルト黄灰色混じり
- 1~5はSD01 6・7はSD10



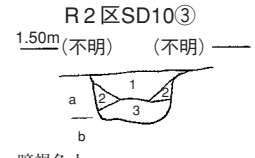
- 1 暗灰褐色土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 黄灰色シルト 2層混



- 1 暗褐色土 シルト混
- 2 暗灰色粘質土 砂混じる



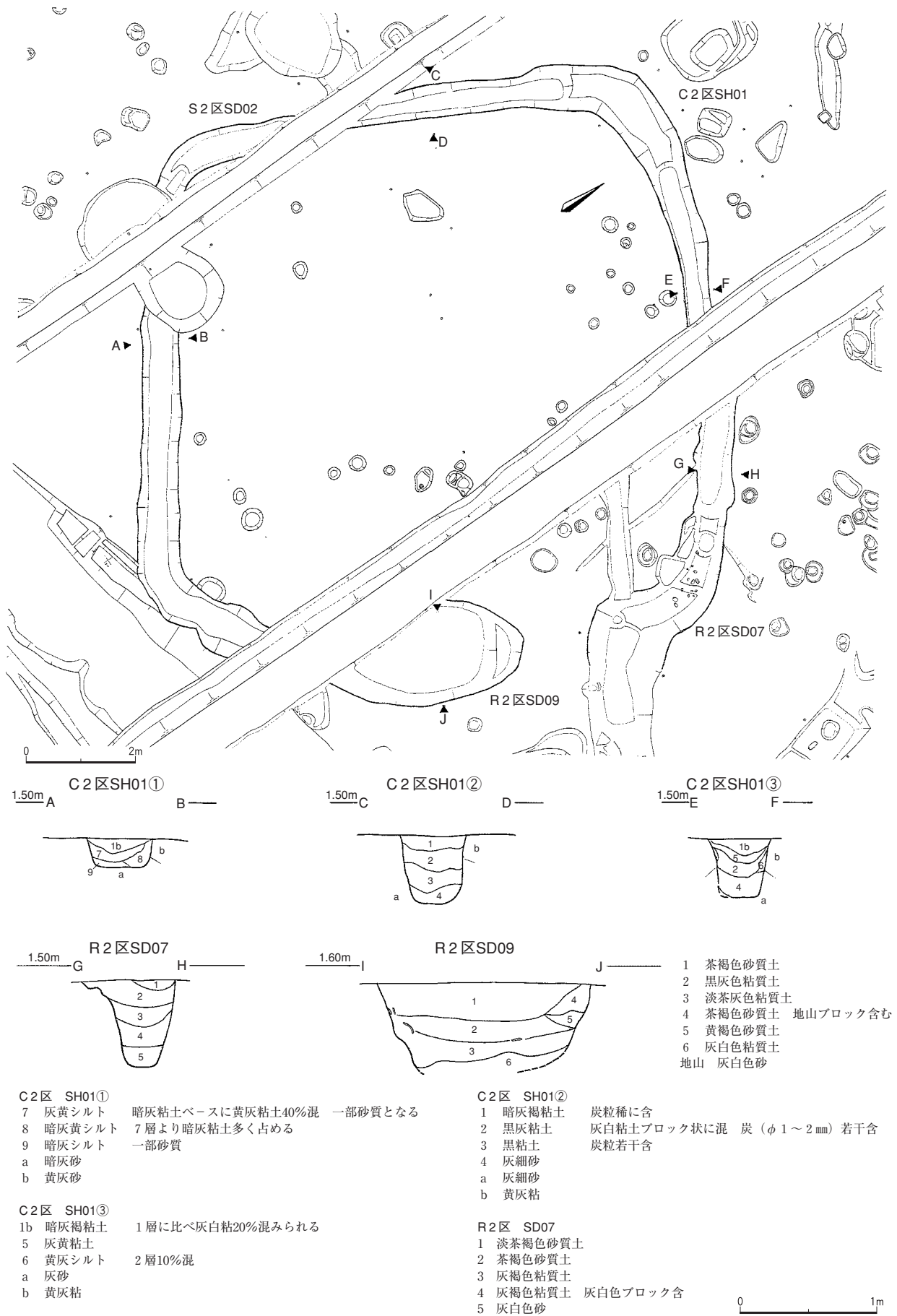
- 1 茶褐色砂質土
- 2 茶褐色粘質砂土
- 3 黄灰色砂質土



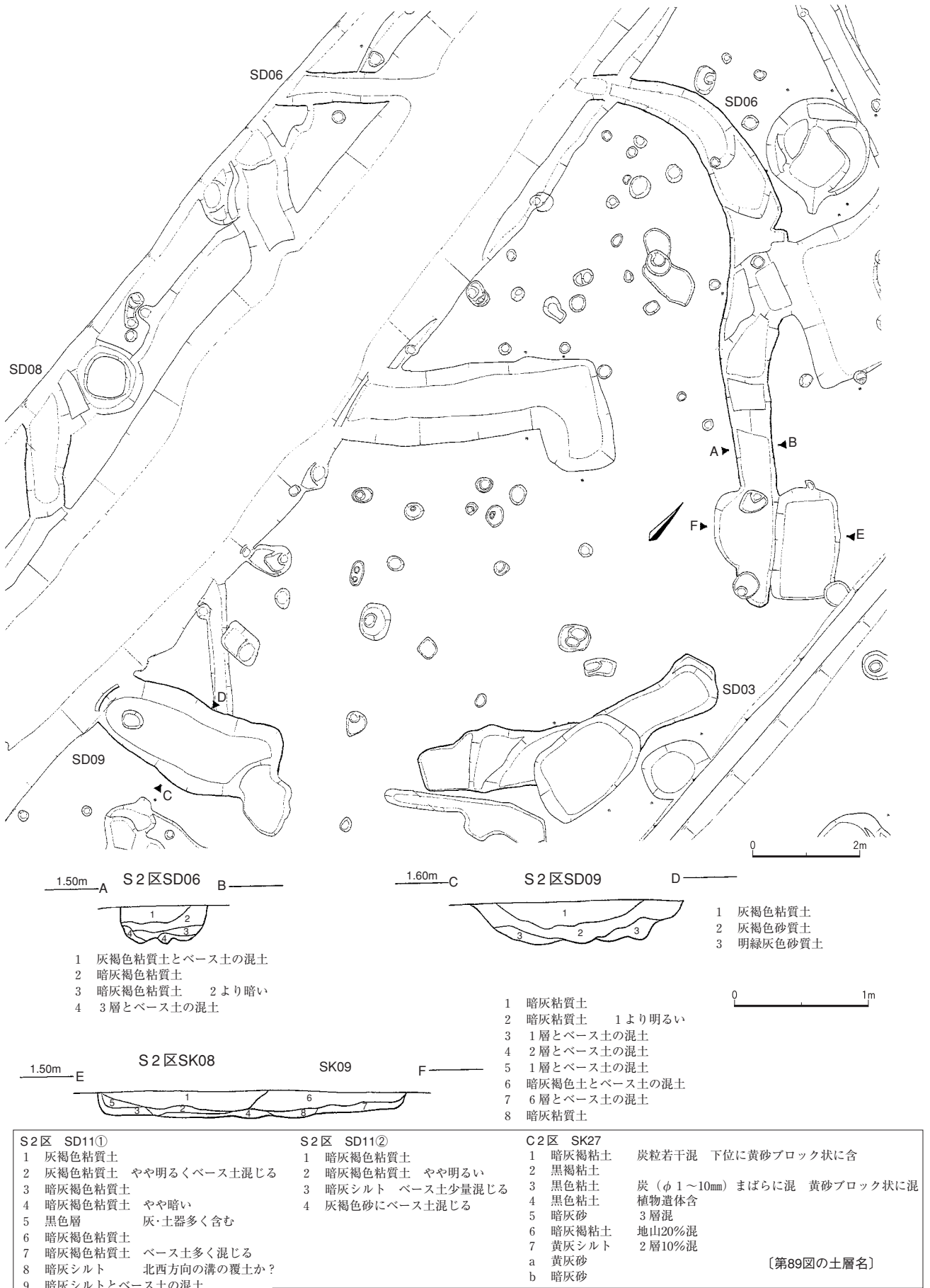
- 1 暗褐色土
- 2 1層+黄褐色シルト ベース土
- 3 黒灰色粘質土 砂・シルト・炭混
- a シルト
- b 砂

第85図 SH31実測図 (S=1/100・1/40)

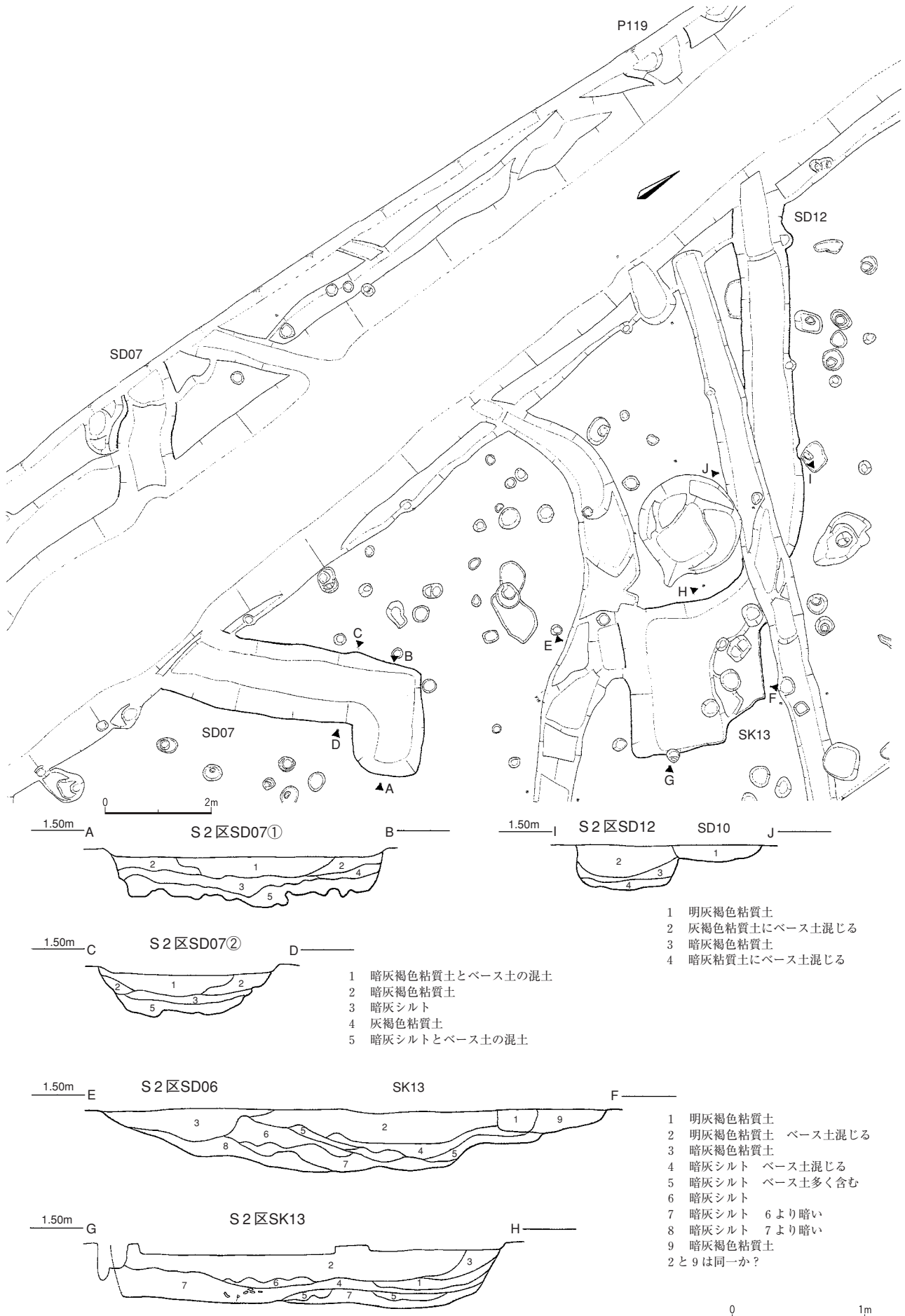
第2節 竪穴系建物跡



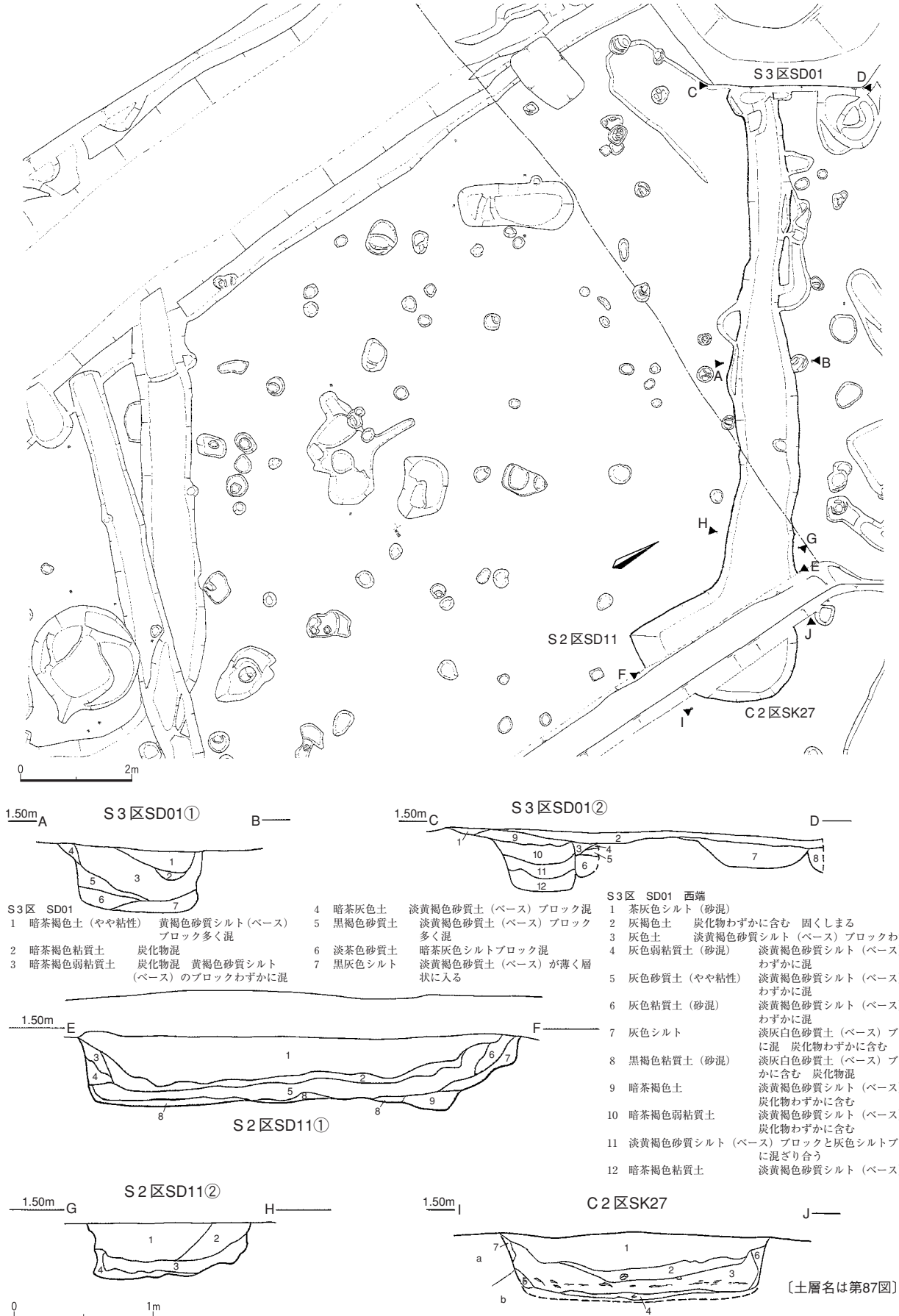
第86図 SH32実測図 (S=1/100・1/40)



第87図 SH33実測図 (S=1/100・1/40)

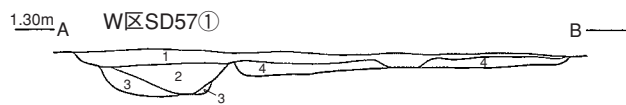


第88図 SH34実測図 (S=1/100・1/40)

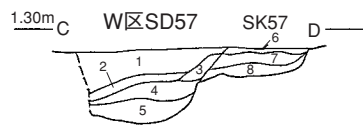


第89図 SH35実測図 (S=1/100・1/40)

第2節 竪穴系建物跡



- | | | |
|---|---------|----------------|
| 1 | 暗褐色土 | 淡黄褐色シルトブロック混 |
| 2 | 濁灰褐色シルト | 淡黄褐色粘質土ブロック混 |
| 3 | 濁灰褐色粘質土 | 淡黄褐色粘質土ブロック混 |
| 4 | 淡黄褐色粘質土 | 暗灰褐色粘質土ブロック多く混 |



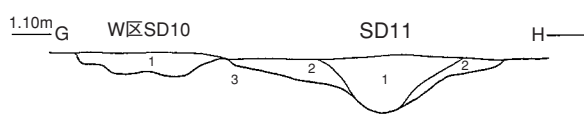
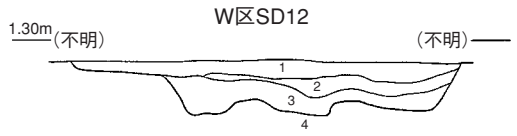
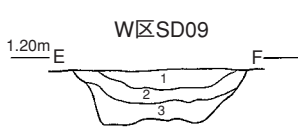
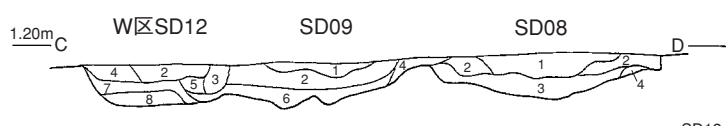
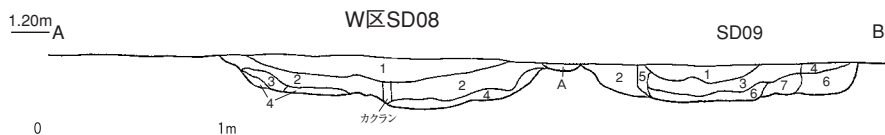
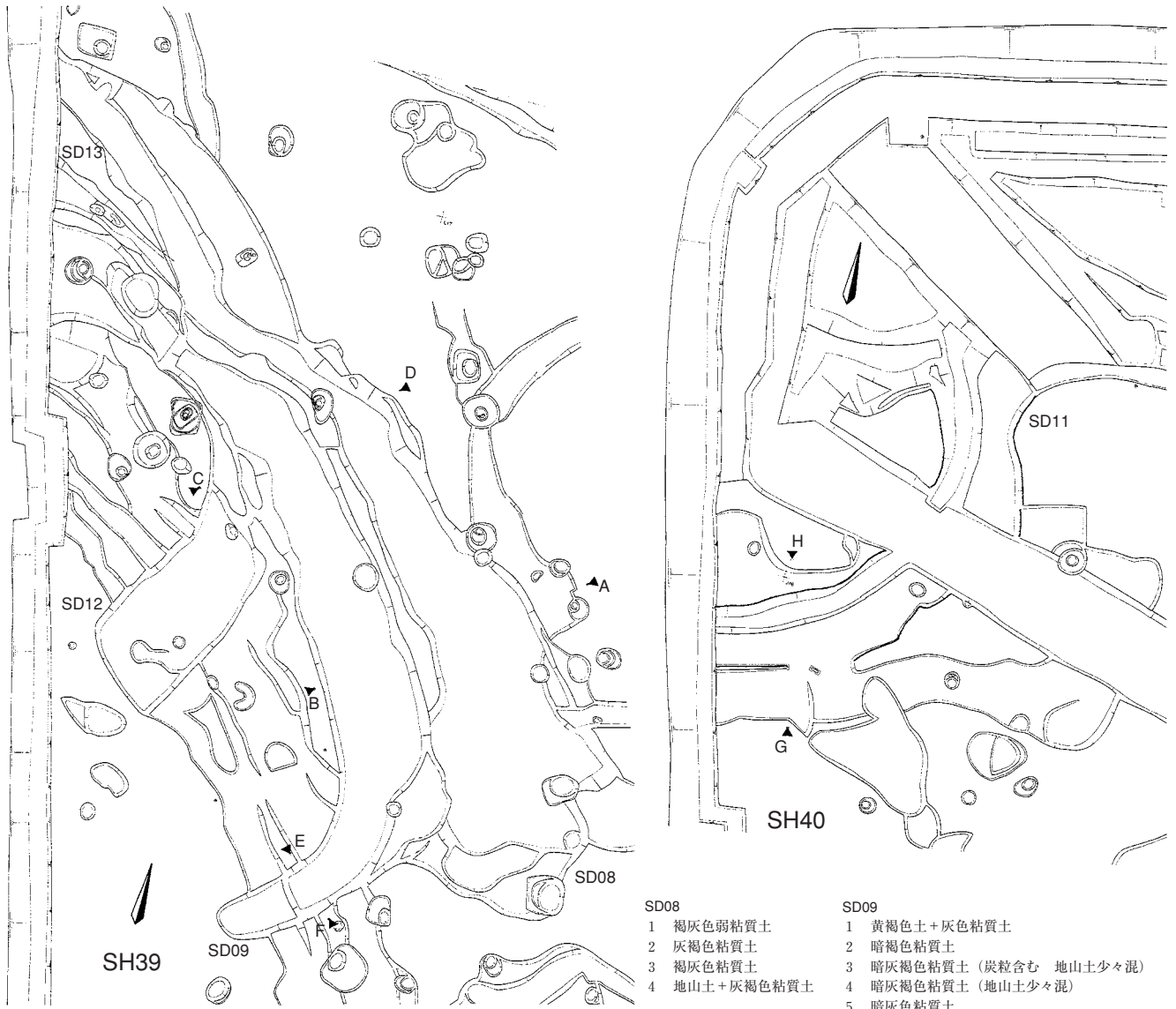
- | | | |
|---|---------|----------------|
| 1 | 茶灰色弱粘質土 | 炭化物わずかに含む |
| 2 | 濁灰褐色粘質土 | 炭化物わずかに含む |
| 3 | 淡灰色粘質土 | 淡黄褐色粘質土ブロック混 |
| 4 | 灰色粘質土 | 炭化物わずかに含む |
| 5 | 淡灰白色粘質土 | 灰色粘質土ブロック多く混 |
| 6 | 茶灰色土 | 炭化物わずかに含む |
| 7 | 濁灰褐色シルト | 淡黄褐色シルトブロック混 |
| 8 | 濁灰色シルト | 淡黄褐色粘質土ブロック多く混 |



- | | | |
|---|---------|-----------------------|
| 1 | 褐色土 | 炭化物混 |
| 2 | 暗褐色粘質土 | 淡黄褐色粘質土ブロック混 炭化物わずかに混 |
| 3 | 濁灰褐色粘質土 | 淡黄褐色粘質土ブロック多く混 |
| 4 | 淡灰褐色粘質土 | 淡黄褐色粘質土ブロックわずかに混 |
| 5 | 暗灰褐色粘質土 | |
| 6 | 暗灰色粘質土 | |
| 7 | 淡黄褐色粘質土 | (ベースよりやや暗) |
| 8 | 黄褐色粘質土 | |
| 9 | 灰色粘質土 | 淡黄褐色粘質土ブロック混 |



第90図 SH38実測図 (S=1/100・1/40)



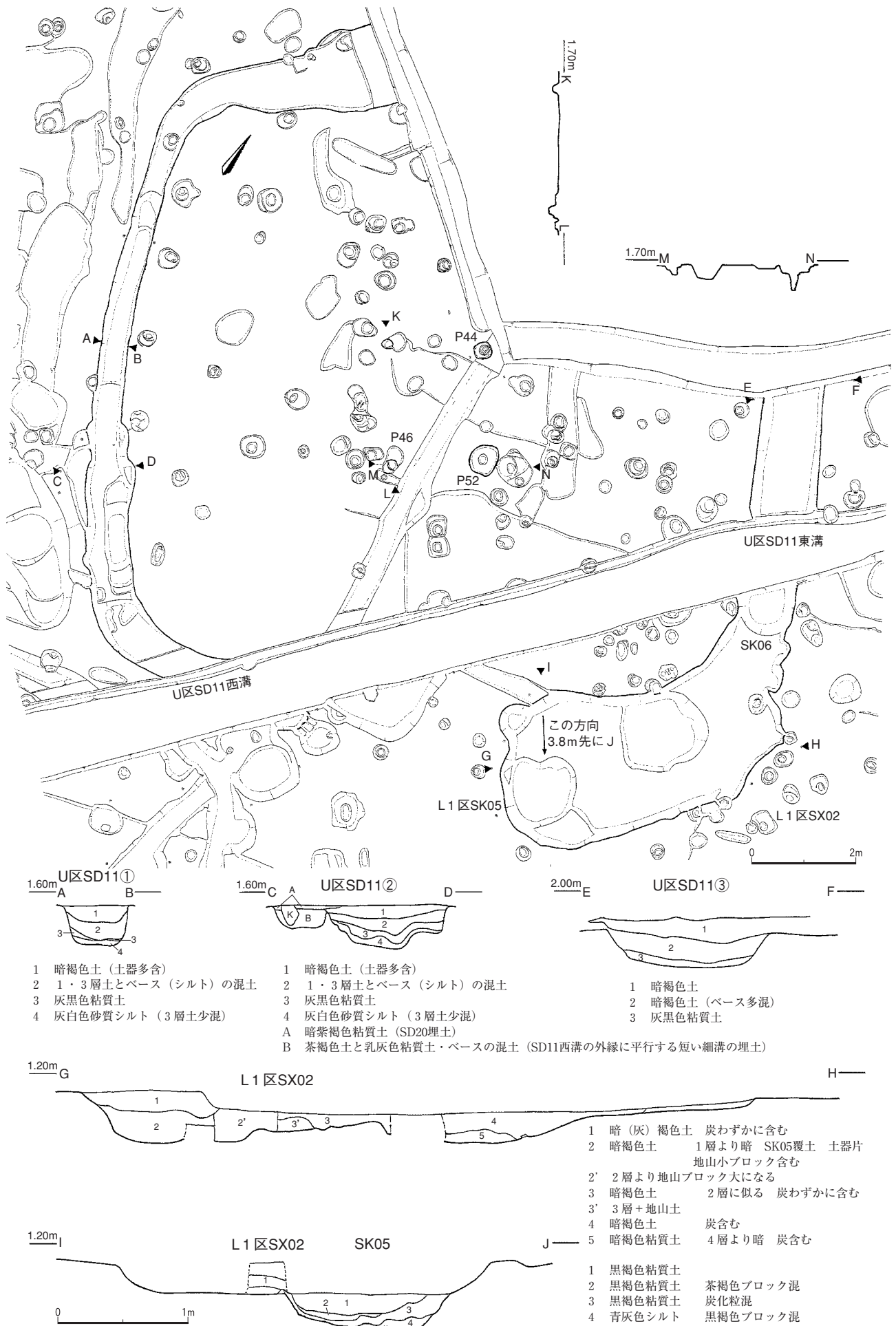
- SD08**
- 1 褐灰色弱粘質土
 - 2 灰褐色粘質土
 - 3 褐灰色粘質土
 - 4 地山土+灰褐色粘質土
- A 濁灰色粘質土+地山土
- SD09**
- 1 黄褐色土+灰色粘質土
 - 2 暗褐色粘質土
 - 3 暗灰褐色粘質土 (炭粒含む 地山土少々混)
 - 4 暗灰褐色粘質土 (地山土少々混)
 - 5 暗灰色粘質土
 - 6 暗灰褐色粘質土 (地山ブロック混)
 - 7 暗褐色粘質土

- SD09**
- 1 黄褐色土+灰色粘質土
 - 2 暗灰褐色粘質土 (地山土少量混 炭粒少量含む)
 - 3 濁灰色粘質土
 - 4 褐灰色粘質土 (地山土少量混)
 - 5 暗灰褐色粘質土 (地山土混)
 - 6 暗灰褐色粘質土 (地山ブロック混 炭含む)
- SD08**
- 1 褐灰色弱粘質土
 - 2 1層土+地山土ブロック
 - 3 暗灰褐色粘質土
 - 4 地山土+褐灰色弱粘質土 (少量)

- SD12**
- 1 暗褐色土 (黄褐色地山小ブロック少量含む)
 - 2 黄褐色土 (1層の土をシミ状に多く含む)
 - 3 暗灰色粘質土 (黄褐色地山小ブロック少量含む)
 - 4 黄褐色シルト (ベース)

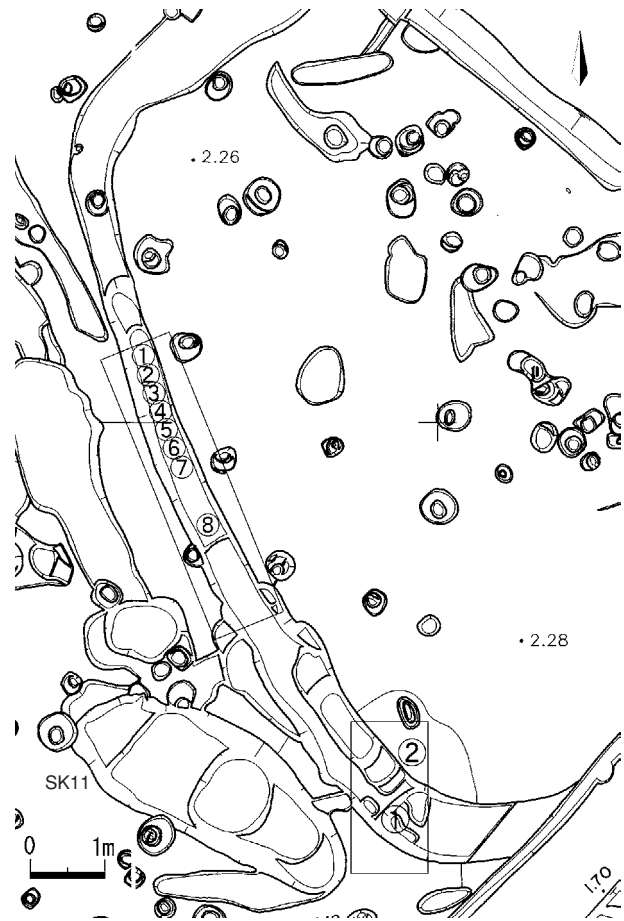
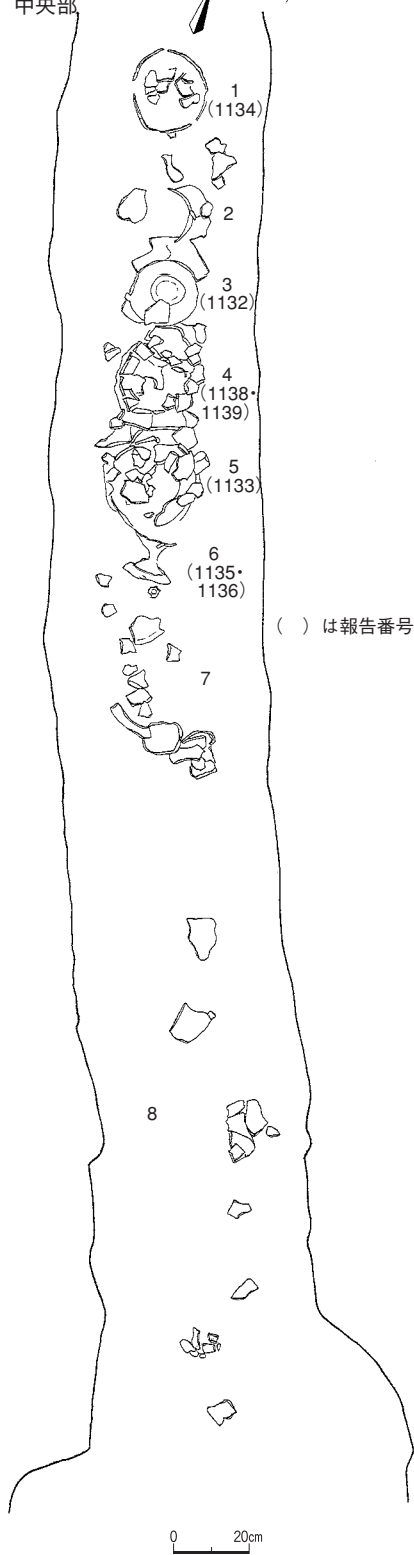
- SD10**
- 1 灰色粘質土 (青灰色ベース小ブロック少量含む)
 - 3 青灰色シルト (ベース)
- SD11**
- 1 暗灰色粘質土 (青灰色ベース小ブロック極少量含む)
 - 2 灰色粘質土 (青灰色ベース小ブロック少量含む)
 - 3 青灰色シルト (ベース)

第91図 SH39・SH40実測図 (S=1/100・1/40)

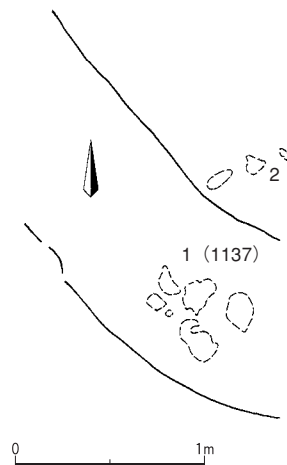


第92図 SH47実測図 (S=1/100・1/40)

U区SD11 (西溝)
中央部



U区SD11 (西溝) 南部

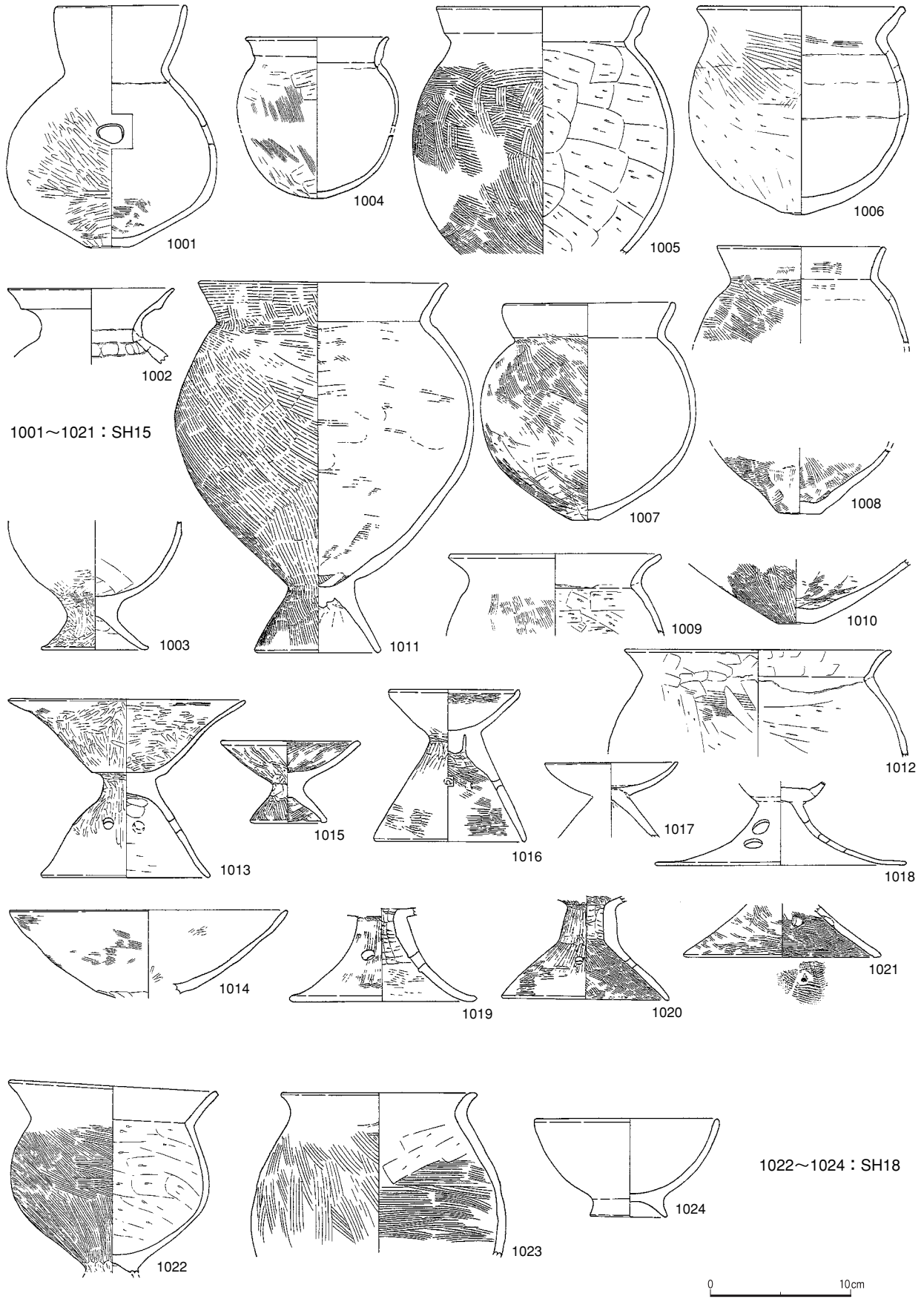


第93図 SH47遺物出土状況図 (S= 1 / 20 · 1 / 40 · 1 / 100)

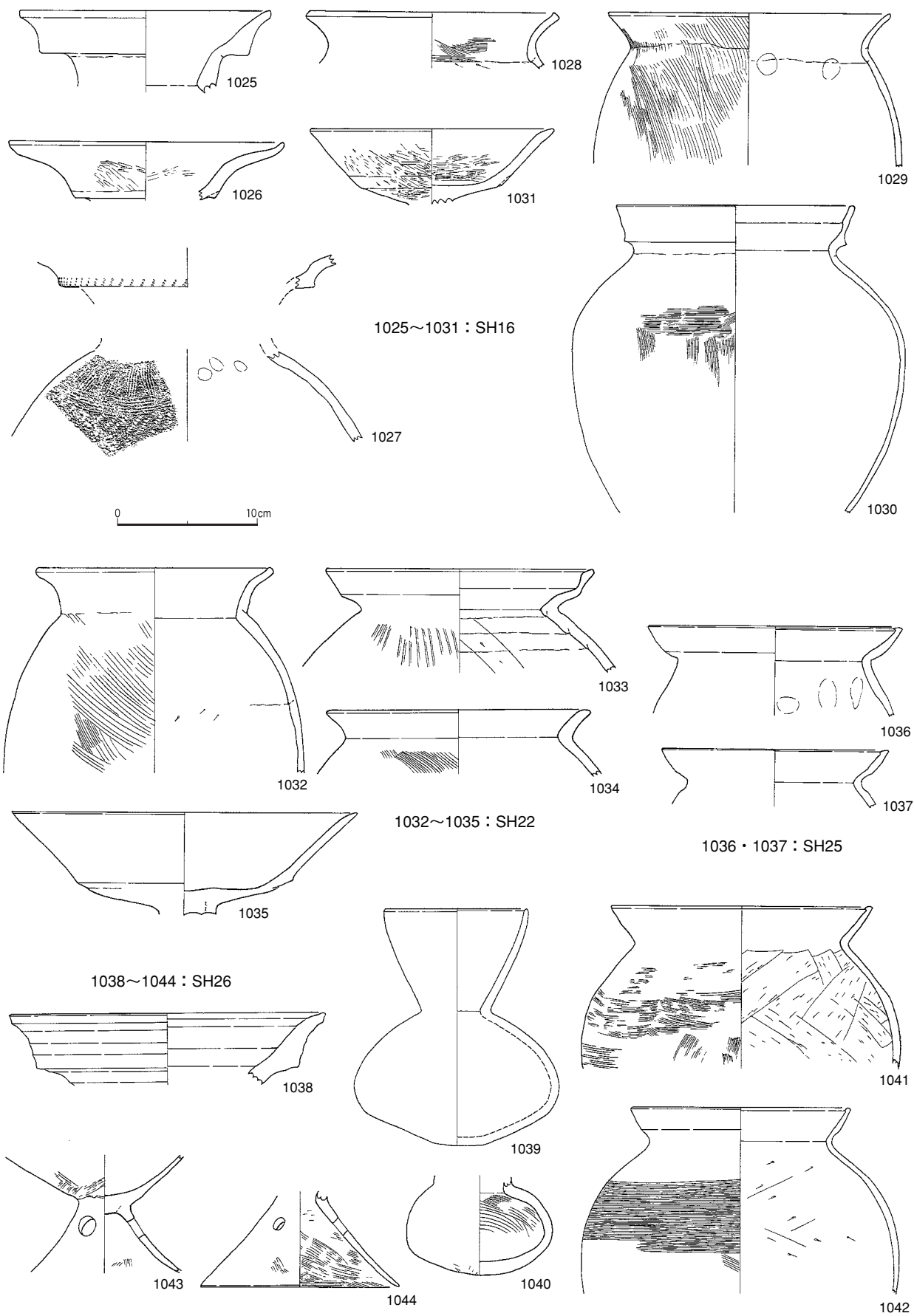
第2節 竪穴系建物跡

第12表 古墳竪穴系建物跡一覧

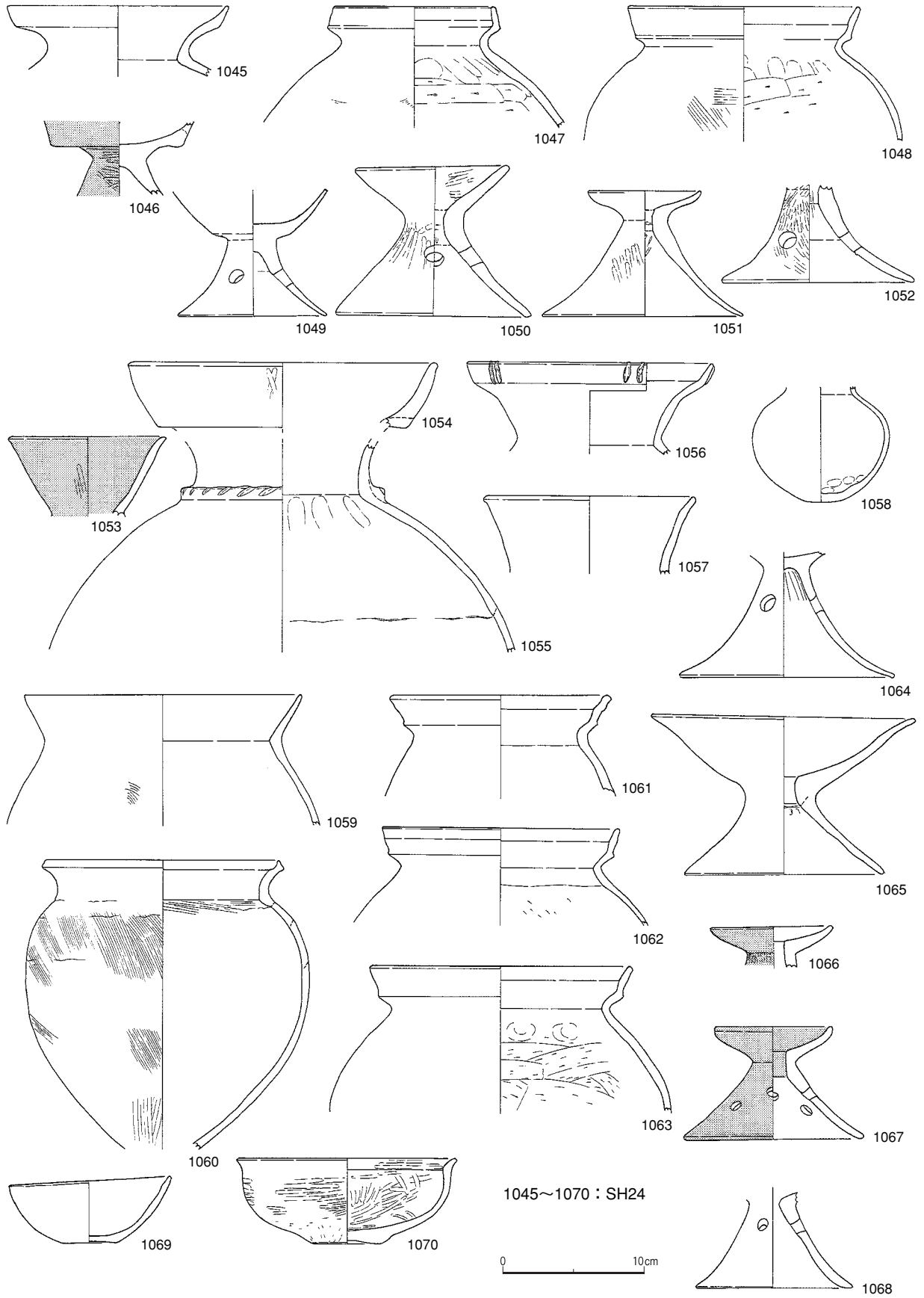
建物番号	グリッド	全形プラン	全形規模	柱穴配置	柱穴間距離	地区	周溝	周溝実測遺物	柱穴	柱穴実測遺物	備考	時期	
SH15	AF21・22 AG20・21・22 AH21・22	四角	辺14m	不明	不明	Q1	SD65	1001・1002・1004~1008・ 1010・1011・1015~1021	不明	なし		1	
							Q2	SD102					1012~1014
							Q2	SD94					E89
							Q2	SD98					1003
SH16	AF21・22 AG20・21・22 AH21・22	四角	辺12~ 13m	不明	不明	Q1	SD67	1029~1031	不明	なし		2	
							Q2	SD67					1025~1028・E44
SH18	AE22・23 AF22・23	四角	辺14.5m	4本	3.6~3.7m	Q2	SD108	1022~1024・1144	遺構名なし	なし		1	
							Q2	SD109					なし
SH19	AC25・26 AD25・26	四角	辺12m	4本	3.3~3.7m	A2	SD11	なし	P169	なし		?	
SH22	AA26・27 AB26・27	四角	辺12m	4本か	3.2m	A2	SD11	なし	遺構名なし	なし		4	
							SD11	なし					
SH24	U27・28・29 V27・28・29 W27・28・29	四角	辺20~ 21m	4本	3.5×4m	T	SD04	1053~1070	P22	M5		2	
							E	SD05					1045・1046
							G	SD14					なし
							N1	SD12					1047~1052
SH25	S21・22・23 T22・23	四角	辺13m	不明	不明	N1	SD16	1036・1037				3	
							G	SD08					なし
SH26	Q21・22・23 R21・22・23	四角	辺16.5m	4本か	3m	N1	SK06	1038・1039・1042	遺構名なし	なし		2	
							N2	SD116					1040・1041・1043・1044
							G	SD07					なし
SH29	AB19・20 AC19・20	四角	辺14.5m	不明	不明	R1	SD04・05	なし	不明	なし		1	
							R1	SD10					なし
							R1	SD10					なし
SH31	Y18・19・20 Z18・19・20 AA19・20	四角	辺14.5 ~15m	4本	3.1×3.2m	R1	SD13	1072~1076	なし	なし		?	
							R2	SD10					1077~1083
SH32	Y16・17 Z16・17	四角	辺10.5m	4本	不明	S2	SD02	なし	不明	なし		1	
							C	SH01					1104~1106
							R2	SD07					1101~1103
							R2	SD09					1093~1100
SH33	W15・16 X15・16 Y15・16	四角	辺13.5 ~14m	4本	3.6m	S2	SD03	なし	遺構名なし	なし		3	
							S2	SD08					なし
							S2	SD09					1084
							S2	SD06					1085
SH34	W15・16 X15・16	四角	辺13m	不明	不明	S2	SD07	1090	遺構名なし	なし		2	
							S2	SD12					1086・1088
							S2	SK13					1087・1089・1091・1092
SH35	V15・16 W15・16	四角か	辺11m 以上	不明	不明	S2	SD11	1108・1113~1115・1117~1122	不明	なし		2	
							S3	SD01					1107・1109・1111・1116
							C	SK27					1110
SH38	O17・18 P17・18	四角	辺13.5m	4本	2m	W	SD57	1123~1125	遺構名なし	なし		3	
							W	SD08					1126~1130
SH39	K16 L16・17 M16・17	四角	辺12~ 14m	不明	不明	W	SD09	1131	不明	なし		?	
							W	SD12・13					なし
							W	SD12・13					なし
SH40	I15・16 J15・16	円?	不明	不明	不明	W	SD11	なし	不明	なし		?	
							U	SD11					1132~1139
SH47	AE29・30・31 AF29・30・31	四角	辺14m	4本	1.9×2.2m	L1	SK05	21~23	なし	なし		1	
							L1	SK05					なし
							L1	SK05					なし
							L1	SK06					なし



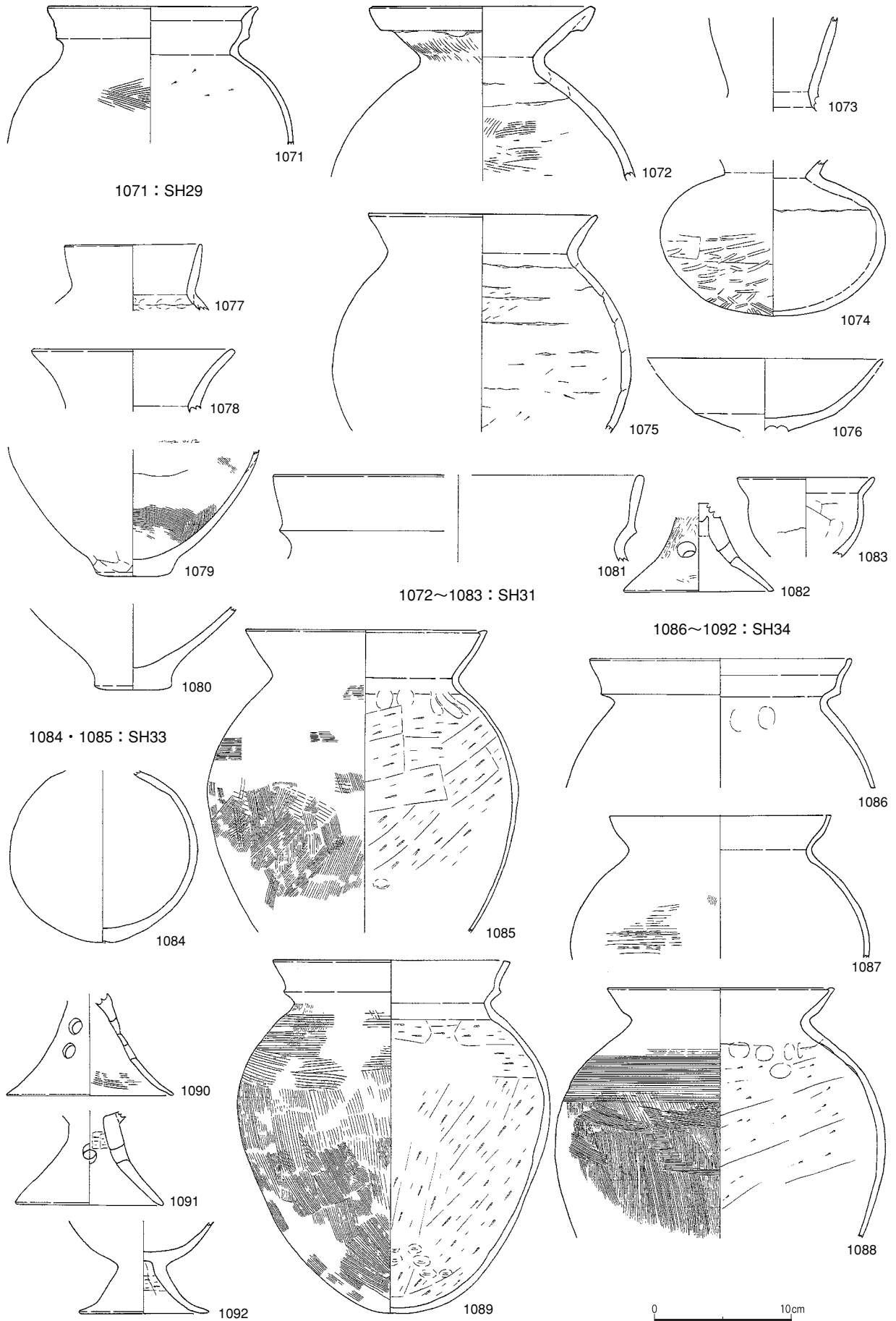
第94図 竪穴系建物跡出土土器実測図1 (S=1/4)



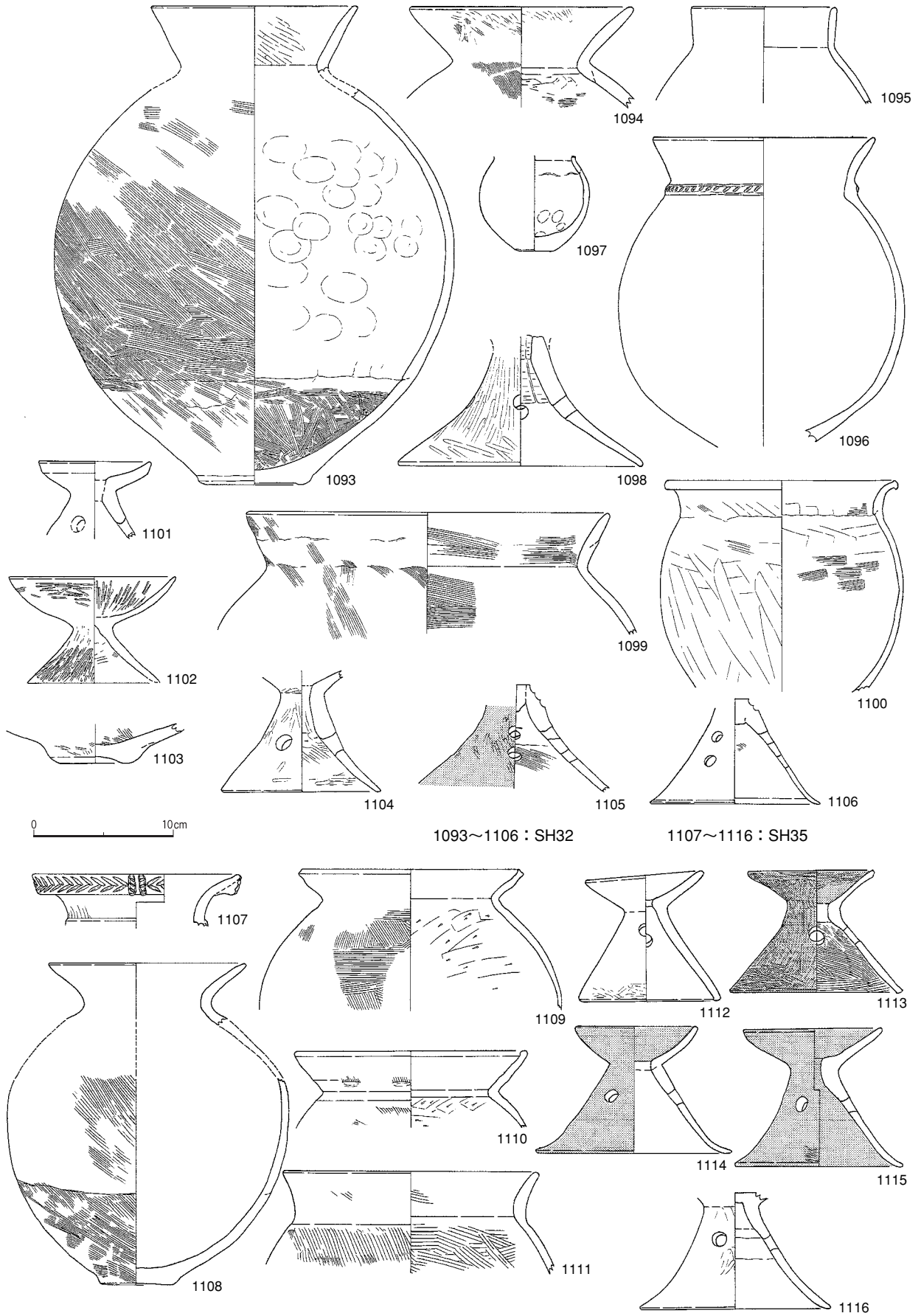
第95圖 豎穴系建物跡出土土器実測図2 (S=1/4)



第96図 竪穴系建物跡出土土器実測図3 (S=1/4)

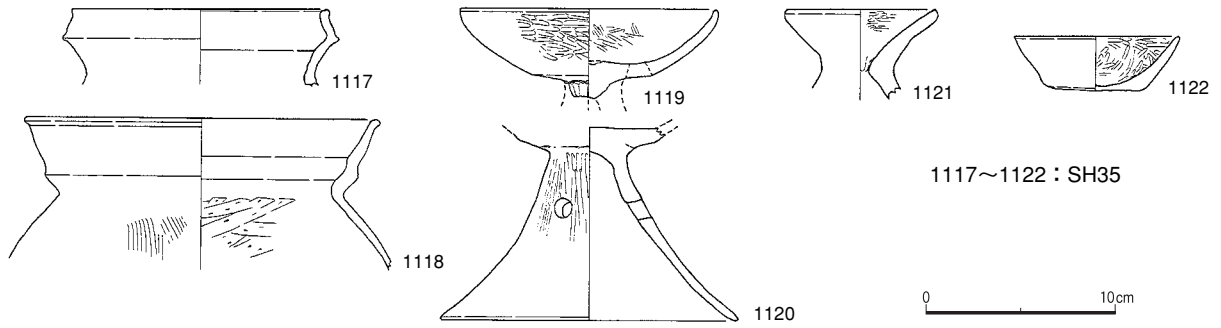


第97圖 豎穴系建物跡出土土器実測圖4 (S=1/4)

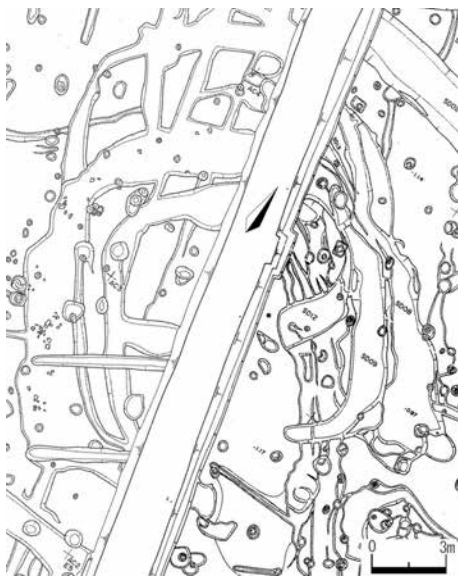


第98図 竪穴系建物跡出土土器実測図5 (S=1/4)

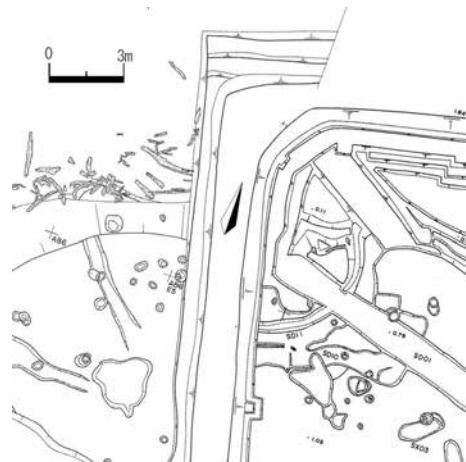
第2節 豎穴系建物跡



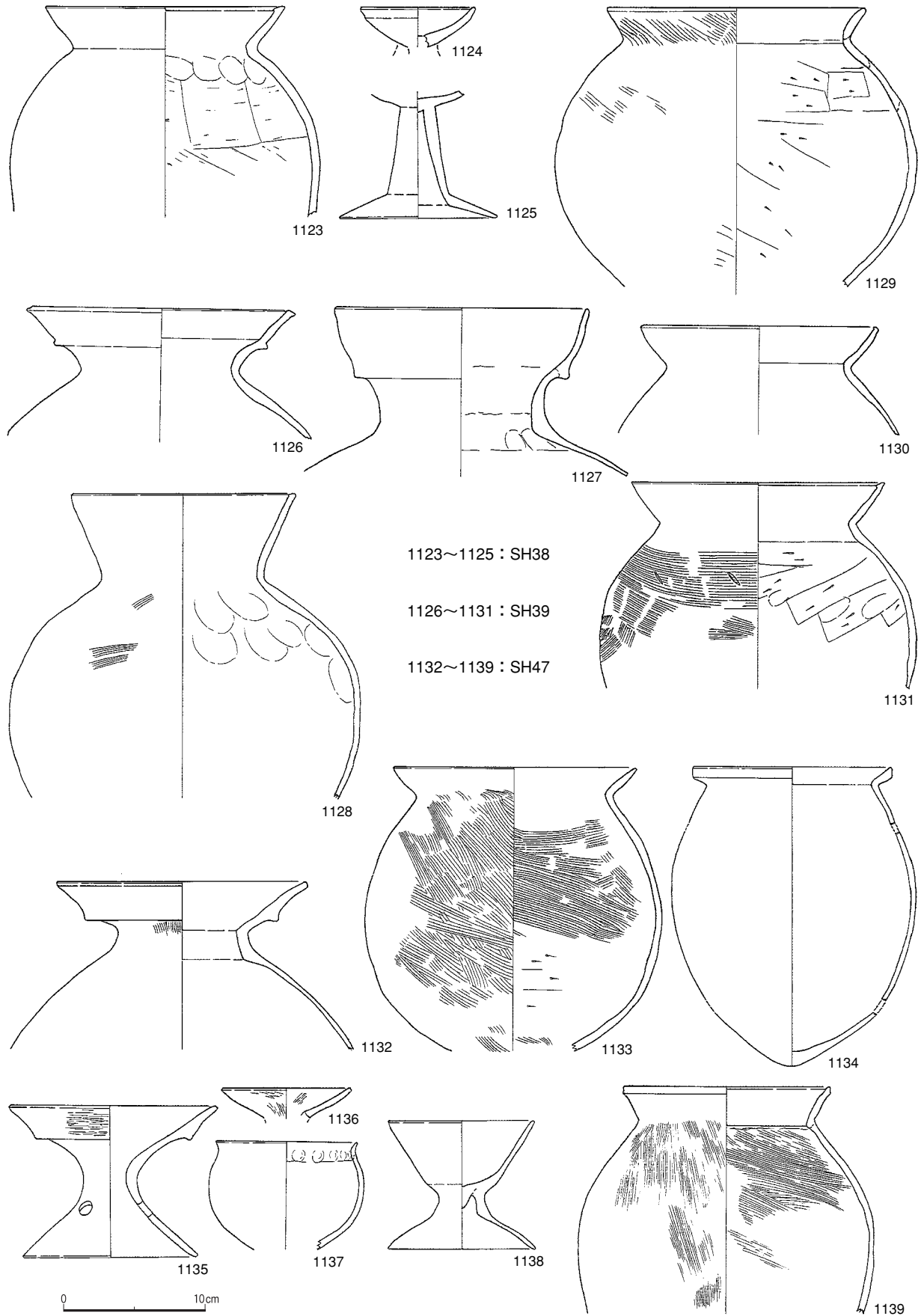
第99図 豎穴系建物跡出土土器実測図6 (S=1/4)



第100図 SH39接合図 (S=1/300)



第101図 SH40接合図 (S=1/300)



第102図 竪穴系建物跡出土土器実測図7 (S=1/4)

第3節 掘立柱建物跡

要点と分布（第103・104図、第13表）

通し番号を振った掘立柱建物跡のうちで弥生・古墳時代に区分したS B100番台は35棟、200番台は42棟で、合計77棟である。そのうち第2分冊では7棟を報告しており（S B101～103・201～204）、本書では第3章で1棟（S B105）、第4章本節で残り69棟を報告する。調査状況としては、概して柱穴が小規模なこともあって、遺構の錯綜する地点や調査区の制約が大きい地点では検出が難しく、現地調査後に検討・復元したものが多し。建物の重なりは多いが、柱穴が重なることが希なため、前後関係が明らかなものは少ない。出土遺物はきわめて少なく、図化されているのは少量の土器の他、石製品1点、白玉1点である。よって、個々の建物の前後関係や詳細な時期は不明確なものが多い。整理作業は当初、S B100番台を弥生時代と古墳前期、200番台を古墳中後期の建物跡として始めたが、前述の状況から区分が難航し、最終的には曖昧なものとなり、本節で一括して報告することとなった。

建物構造は短辺1間のものと2間以上のものに大別され、前者はS B100番台、後者は200番台がほぼ相当するが、前述のとおり時期区分には対応しない。短辺1間のものは通常の側柱構造の他、布掘構造のものが少数ある。長辺は2～4間があり、概して長短辺比は大きく、平面形は明確な長方形が多い。規模は最大がS B129で面積30m²超、最小がS B125で約10m²となる。短辺2間以上のものは側柱構造の他、総柱構造が少数ある。長辺2×短辺2間が主体で、4×3間まで存在する。概して長短辺比は小さく、平面形は正方形に近いものが多い。規模は最大がS B238で40m²超、最小はS B221等で約10m²となる。柱や礎板が遺存することは希である。

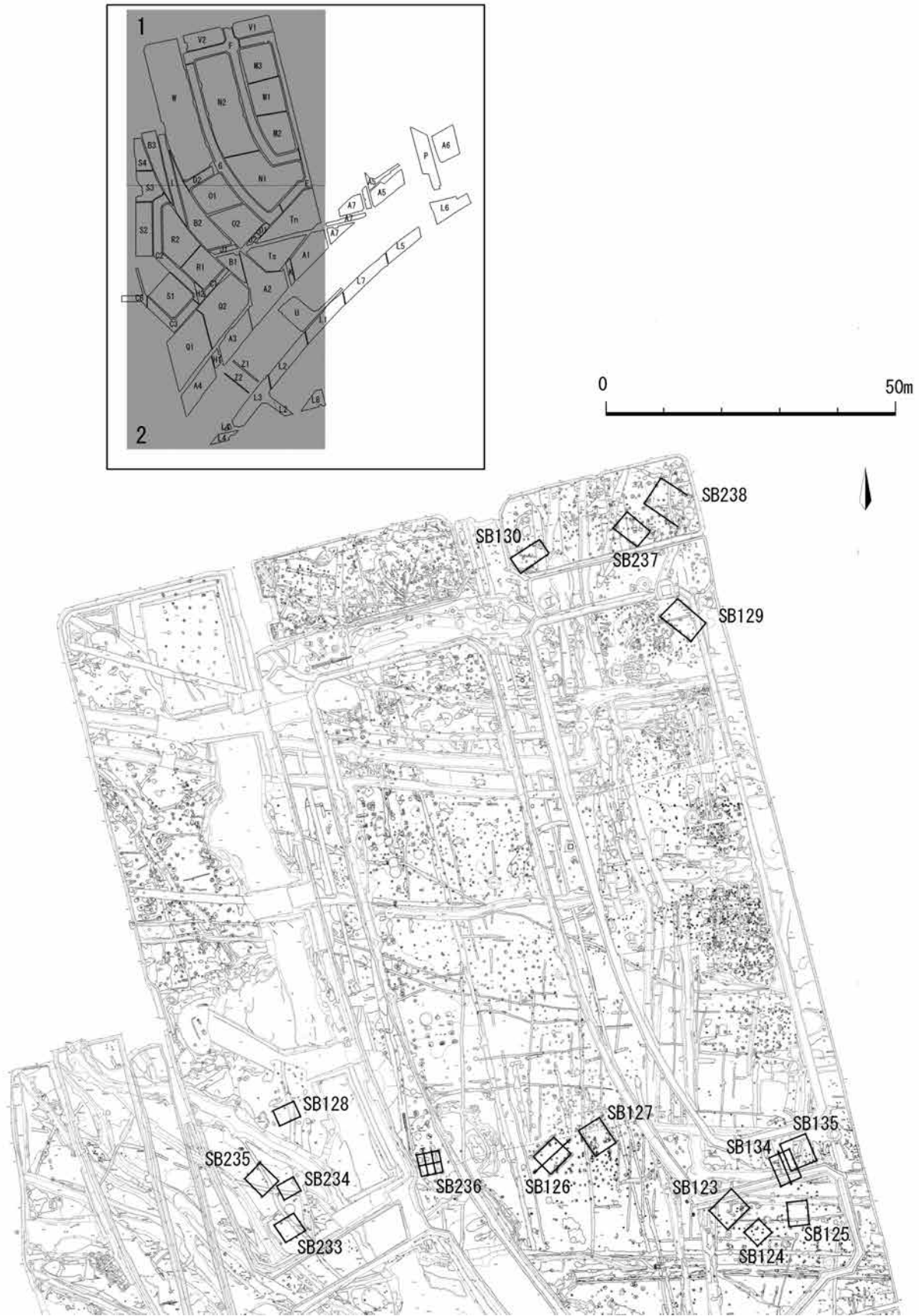
分布は調査区の南北端にまで及ぶが、大まかに調査区の北（M3・V1区）、中央（E・G・N1・N2・W区）、西（C2・R1・R2・S2区）、南西（A3・A4・C3・S1・Q1・Q2区）、南（L1～L3・U区）に群としてのまとまりを見ることができる。北群は棟数が少ないが、短辺1間・2間ともに最大規模のものが含まれ、さらに北・東へ展開する可能性がある。中央群は大溝群の東岸に短辺1間、西岸に2間のものにほぼ分かれて位置し、前者には布掘構造や独立棟持柱をもつものが目立つ。西群は南西群に次いで棟数が多いが、短辺1間が主体で、さらに北西へ展開する可能性がある。南西群は最も棟数が多く密集しており、短辺1間・2間ともに比較的大型の建物が含まれ、一部に総柱建物が集中する。南群は棟数が少ないが、布掘構造、総柱構造が目立つ傾向がある。南西群と南群については調査区の制約があり、間隙が明確ではない。

S B104（遺構：第105図、図版54）

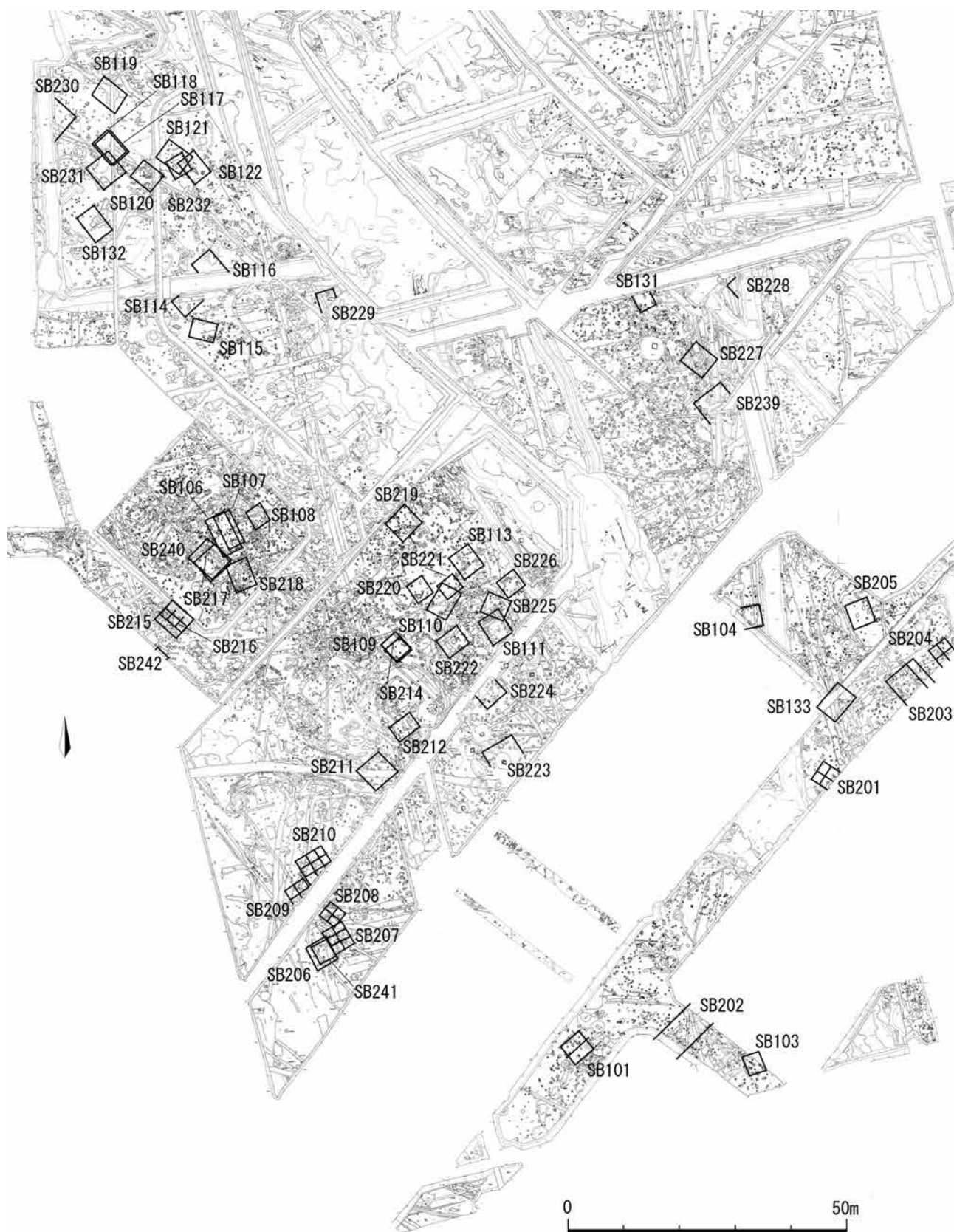
調査区南部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間の布掘構造で、柱穴は溝よりも深くなる。部分掘であったが、北溝で検出した調査区壁際の柱穴を端と認識し、長辺を3間とした。布掘溝の軸方向は東西に大きく偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B106（遺構：第105図 遺物：第124図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中、側柱4×1間を復元している。南東角の柱穴は弥生時代のS1区SK10を切り込んでいる（第27図層14・15）。古墳中期の土師器甕（I140）が柱穴から出土しており、建物の時期を示す。



第103図 掘立柱建物跡配置図1 (S=1/1,000)



第104図 掘立柱建物跡配置図2 (S=1/1,000)

S B107 (遺構：第105図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中、側柱3×1間を復元している。規模・位置的にはその大半がS B106と重なるが、全体にやや小さく、長辺は1間少ないが、逆に間隔は大きくなっている。出土遺物で図化されたものはない。

S B108 (遺構：第105図 遺物：第124図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中、側柱2×1間の小規模な建物を復元している。遺物は、構成柱穴の近接穴から出土した古墳中期の土師器高杯(1141)が図化されている。厳密には遺構に伴わないものであるが、関連する可能性はある。

S B109 (遺構：第105図、図版54 遺物：第124図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中、側柱3×1間を復元している。側柱2×2間のS B214とほぼ重なるが、第115図土層に見るとおり、S B214が後出する。いくつかの柱穴はS B214と共通するものとなるが、柱穴内に重なりが認められる。復元では柱穴の一つが弥生時代の井戸跡であるQ2区SK79と重なっており、土層ではその痕跡は確認できていないので、井戸跡に先行する可能性もあるが、後述する出土遺物の問題もあり、断定できない。遺物はS B214と共通する柱穴から出土した古墳前期の土師器甕(1142)が図化されている。構造的に古いS B109に伴うものと考えたい。

S B110 (遺構：第106図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×1間を復元しているが、南東角の柱穴は遺構の錯綜により検出することができなかった。出土遺物で図化されたものはない。

S B111 (遺構：第106図 遺物：第124図、図版75)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中、側柱2×2間を復元している。短辺の中間柱は小規模である。S B112・225や古墳前期のSH18と重なるが、前後関係は不明である。遺物は柱穴と重なり合う土坑Q2区SK92から出土した土器が図化されている。古墳中期の高杯(1143)であるが、建物に伴うかどうかは不明確である。古墳前期の東海系高杯(1144)は誤配置であり、この遺構に伴うものではない。

S B112 (遺構：第106図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中、側柱3×1間を復元している。SH18及びS B111・225と重なりがあり、西角の柱穴が古墳前期のSH18によって失われているとすれば、SH18がより後出することになる。S B111・225との前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B113 (遺構：第106図、図版58 遺物：第124図、図版75)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中、側柱3×1間を復元している。短辺の中間には軸をやや外側にずらす柱穴が一对あり、近接棟持柱と認識している。遺物は柱穴から出土した古墳前期の東海系高杯(1145)が図化されている。

S B114（遺構：第107図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×1間の柱穴を検出しているが、中世溝により北半が失われており、長辺はさらに伸びるものと想定している。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B115（遺構：第107図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×1間で復元した。隣接するS B114の長辺が伸びないとした場合はほぼ同規模となる。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B116（遺構：第107図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×1間の柱穴を検出しているが、中世溝により南角付近が失われており、長辺はさらに伸びる可能性がある。柱穴の一つが弥生時代の土坑R 2区S K14に切り込んでいる。出土遺物で図化されたものはない。

S B117（遺構：第107図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×1間で復元した。調査区を跨いでおり、境部分では柱穴がうまく検出できていない。古墳中後期の大溝群DN 7と重なりがあり、確たる所見はないがS B117が先行するようである。S B118とはほぼ同一位置・規模・軸方向で重なるが、柱穴が切り込んでいるS B118が後出する。出土遺物で図化されたものはない。

S B118（遺構：第108図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×1間で復元した。調査区を跨いでおり、境部分では柱穴がうまく検出できていない。古墳中後期の大溝群DN 7と重なりがあり、確たる所見はないがS B117が先行するようである。S B117とはほぼ同一位置・規模・軸方向で重なるが、柱穴が切り込んでいるS B118が後出する。出土遺物で図化されたものはない。

S B119（遺構：第108図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。3つの調査区を跨いでおり、側柱2×1間で復元した。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。古墳前期のS H35周溝端がすっぽりと重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B120（遺構：第108図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×1間で復元した。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。細長い平面の柱穴がいくつか見られるのが特徴である。北西辺に古墳中後期で扱ったC 2区S D18が平行しており、関連する可能性がある。出土遺物で図化されたものはない。

S B121（遺構：第108図）

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×1間で復元した。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。北西角が調査区外へ隠れる。S B122・S B232と重なるが前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B122 (遺構：第109図)

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×1間で復元した。S B121・S B232と重なるが前後関係は不明である。柱穴が古墳中後期のR 2区S K02を切り込んでいる。出土遺物で図化されたものはない。

S B123 (遺構：第109・111図、図版55)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間の布掘構造で、柱穴は溝よりも若干深い。北西の布掘溝は一端を検出したのみであるが、南東の布掘溝が全掘されており、復元できた。布掘溝の軸方向は東西に大きく偏向する。土層では柱穴が布掘溝を切り込んでいるようになるが、柱据え付け後に溝を埋め戻しても同様になり、抜き取りの問題もあることから、前後関係は明らかにできない。近接するS B124とは軸方向も揃うが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B124 (遺構：第109図、図版56)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。側柱2×2間を復元した。短辺の中間柱は小規模である。近接するS B123とは軸方向も揃うが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B125 (遺構：第109図、図版56)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間を復元した。北端を中世溝に削られるが、柱穴は遺存していた。長辺間の間隔が狭く、径が大きい柱穴が特徴である。出土遺物で図化されたものはない。

S B126 (遺構：第109・111図、図版57)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間の布掘構造で、独立棟持柱が付属する。柱穴は溝よりも深い。棟持柱は長辺方向に浅い広がりを持っており、堀方を持っていた可能性があるが、判断できない。土層では柱穴が布掘溝を切り込んでいるようになるが、S B123と同様で、前後関係は明らかにできない。出土遺物で図化されたものはない。

S B127 (遺構：第110・111図、図版55・57)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間の布掘構造で、柱穴は溝よりも若干深い。ほとんどの柱穴底に礎板が遺存しており、いずれもスギ材の細木を複数まとめて敷いた簡易な構造をとる。西側の布掘溝では北から2番目の柱穴に折れて持ち上がっている礎板が観察され、柱が沈下した可能性が高い。土層では柱穴が布掘溝を切り込んでいるようになるが、S B123・125と同様で、前後関係は明らかにできない。ただし、柱が遺存せずに礎板が遺存していたことから、柱が抜き取られていることは想定できる。出土遺物ではスギ材の礎板(W409～411)が図化されている。

S B128 (遺構：第110図)

調査区中央部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×1間で復元した。弥生時代のW区S D65を切り込んでいる。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B129 (遺構：第110・111図)

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。欠ける部分もあるが、側柱3×1間を復元した。東角は調査区を跨いで検出した。北西半の柱穴には布掘溝状の浅い落ち込みを伴う部分がある。出土遺物で図化された

ものはない。

S B130 (遺構：第112図)

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間を復元した。南角は調査区壁際となり検出されていない。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B131 (遺構：第110図)

調査区南部、大溝群の東岸に位置する。側柱1×1間分の柱穴を検出しており、北半は調査区境に隠れるものと想定した。短辺軸線上には中間柱状の穴を認めるが、位置がずれており積極的に評価できなかった。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B132 (遺構：第112図)

調査区西部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間を復元した。北東柱列は弥生時代のS2区SK04、古墳前期の同区SK07と重なることになるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B133 (遺構：第123図)

調査区南部、大溝群の東岸に位置する。布掘溝が調査区境に平行して検出されている。両端を把握できたL2区の布掘溝底は比較的平坦であり、柱穴の痕跡には乏しいが、他の掘立柱建物跡の規模を参考にして3×1間に復元した。出土遺物で図化されたものはない。

S B134 (遺構：第112図)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間を復元しているが、短辺の間には軸をやや外側にずらす柱穴が一对あり、近接棟持柱と認識している。北角付近がS B135と同じ軸方向で重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B135 (遺構：第112図)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。側柱2×1間分の柱穴を検出している。F区という制約の多い調査区で検出されており、長辺がさらに伸びる可能性は否定しないが、北側のM2区では柱穴は検出されておらず、南側のN1区でも長辺断面に含めた穴は形状が異なり、積極的に評価できなかった。南角付近がS B134と同じ軸方向で重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B205 (遺構：第113図、図版58)

調査区南部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×2間で復元したが、平面形が歪んで南半が開き気味になり、短辺の中間柱も軸線を外れる。古墳前期のSH47と重なるが前後関係は不明である。柱穴U区P50にはケヤキ材の柱が遺存していた。出土遺物で図化されたものはない。

S B206 (遺構：第113図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×2間で復元した。柱穴は1基欠ける。ひとまわり小さいS B241とほぼ同じ位置・軸方向で重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたも

のではない。

S B 207 (遺構：第113図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。総柱3×2間で復元した。S B 206とは南西辺が重なるが、前後関係は不明である。また、この復元ではS B 208とは柱穴A 4区P 249が、S B 241とは柱穴A 4区P 170・P 254が共通することになる。これら柱穴がどの建物跡に帰属するかは不明確であるが、S B 241と関係する分については、構造的に新しいS B 207に伴うものが遺存していると推定したい。出土遺物で図化されたものはない。

S B 208 (遺構：第113図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。総柱2×2間で復元した。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。長辺はさらに北西の調査区境へ伸びる可能性がある。この復元ではS B 207とは柱穴A 4区P 249が共通することになるが、どちらに帰属するかは不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 209 (遺構：第113図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。2×1間分の柱穴を検出した。調査区壁側の柱穴が小規模なため、さらに伸びるものとして2×2間かそれ以上の総柱構造を想定する。長辺の軸方向は東西に大きく偏向する。柱穴の覆土は黒褐色粘質土系と記録されており、隣接するS B 210が暗褐色粘質土系である状況とは異なる。出土遺物で図化されたものはない。

S B 210 (遺構：第114図 遺物：第124図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。3×3間分の柱穴を検出した。南側はさらに調査区境へ伸びる可能性があり、短辺・長辺は暫定とする。長軸方向は東西に大きく偏向する。総柱の柱穴は全般に小径であり、Q 1区P 20・P 26が中世溝S D 23・24を切り込んでいる。柱穴の覆土は暗褐色粘質土系と記録されている。遺物は柱穴から須恵器の杯蓋(1147)が出土している。

本遺構は古墳時代に区分されているが、柱穴の形状と覆土はむしろ中世のS B 415やS B 417と共通する。前述した中世溝との前後関係からも、本遺構の時期が中世まで降る可能性は高かろう。しかし一方で、中世の掘立柱建物跡と比べると柱間隔が狭いことや、軸方向が異なること、周囲にS B 207～S B 209といった古墳時代の総柱建物が確認されることから古墳中後期の可能性も否定できない。いずれにしても決め手に欠けるので、出土遺物も含めて過大な評価はできない。

S B 211 (遺構：第114図 遺物：第124図、図版75)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×3間を復元した。東西角を中世溝が貫いて削られているが、柱穴が遺存していた。遺物は柱穴から古墳中後期の土器が比較的多く出土した。Q 1区P 101では土師器椀(1151)、P 126でも土師器椀(1152)が出土している。P 102では柱穴部分ではなくその脇の浅い落ち込みからまとめて出土しており、須恵器はそう(1148)、土師器甕(1149)、同高杯(1150)が図化されている。P 102の遺物出土状況図(第4分冊第232図、図版27)や出土した砥石(第4分冊S 127)については、構成の関係から別分冊で掲載している。

P 102については、検証できないが土坑など別の遺構が重なっている可能性がある。遺跡群内で同様の遺物出土状況を示す掘立柱建物跡はなく、遺物が建物に伴うものとは断定できない。

S B 212 (遺構：第114図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。総柱2×2間を復元した。長軸方向は東西に大きく偏向する。南角付近で柱穴が2基欠ける。古墳前期のS H15・16と重なるが、柱穴Q 2区P 193がS H15・16の周溝を切り込んでおり、本遺構が後出する。前後関係が不明なP 204は軸線からずれており、本遺構には伴わないものと判断した。なお、浅い穴であるが、調査区壁際のP 186まで含めると3×2間となり、長短辺が逆転することになる。遺物は柱穴から白玉（第4分冊U 484）が出土している。

S B 213 (遺構：第114図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間を復元した。北東辺では外側に柱穴の広がり、あるいは別の柱穴が近接しており、建て替えを想定できる。現地調査時の所見では、外側のQ 2区P 211が内側の柱穴に切り込まれており、建物規模が縮小していることになろう。建て替えの前後で長短辺は逆転している。また、建物内部では現地調査時の排水溝内に浅い小穴があり、束柱とすれば総柱構造となる可能性があるが、建て替えには不利なことが予想されるので、本遺構には伴わないものとしておく。出土遺物で図化されたものはない。

S B 214 (遺構：第115図、図版54 遺物：第124図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間を復元した。長軸方向は東西に大きく偏向する。側柱3×1間のS B 109とほぼ重なるが、第115図土層に見るとおり、本遺構が後出する。いくつかの柱穴がS B 109と共通すること、弥生時代の井戸跡であるQ 2区S K 79と重なること、柱穴から出土した古墳前期の甕（1142）が本遺構には伴わないと予想されることについては、S B 109の項で説明したとおりである。

S B 215 (遺構：第115・116図、図版59)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱3×2間を復元した。北東辺は調査区を跨いだ壁際で検出した。S B 216とはほぼ同じ位置と軸方向で重なるが、現地調査時の所見で、C 2区S B 04P 06がS B 03 P 08を切り込んでいることを確認しており（第116図G－H間土層には反映されていない）、本遺構が後出する。出土遺物で図化されたものはない。

S B 216 (遺構：第115・116図、図版59)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。3×1間分の柱穴を検出した。北東へ伸びるが調査区を跨いでは検出されていないので、調査区境に1間が隠れているものとして総柱3×2間を想定しておく。S B 215とはほぼ同じ位置と軸方向で重なるが、本遺構が先行することはS B 215の項で説明したとおりである。出土遺物で図化されたものはない。

S B 217 (遺構：第117図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中で、一部欠ける柱穴もあるが、側柱2×3間を復元した。間数の少ない辺が長辺となる。長軸方向は大きく東西に偏向する。ひとまわり小さいS B 240とはほぼ同じ位置・軸方向で重なり、S 1区P 109等いくつかの柱穴が共通するが、前後関係は不明である。柱穴P 109については、古墳中後期のS D 25・26を切り込んでおり、最も新しい。また、古墳中後期のS H 28周溝や古墳前期のS K 05とも重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 218（遺構：第123図 遺物：第124図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中で、側柱3×1間を復元した。古墳中後期のS H 27・28と重なるが、柱穴S 1区P 64が切り込んでいる地点は周溝ではないので、直接の前後関係は不明である。構造的には本遺構が古い。遺物は柱穴から手捏土器（1153）が出土しているが、古墳中後期通有の形状ではなく、時期比定は難しい。

S B 219（遺構：第117図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間を復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。柱穴Q 2区P 345が古墳中後期のS K 11を切り込んでいるが、現地調査の所見は逆であり、原因は不明である。よって前後関係を確定するものではない。出土遺物で図化されたものはない。

S B 220（遺構：第117図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間を復元した。小規模で柱間隔も狭い特徴がある。柱穴が古墳中後期に区分したQ 2区S K 93を切り込み、古代の掘立柱建物跡S B 306柱穴に切り込まれている。出土遺物で図化されたものはない。

S B 221（遺構：第117図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間を復元した。S B 220と同様に小規模で柱間隔も狭いが、建物内部にはやや軸線からずれるが一定の深さをもつ小穴があり、総柱構造の可能性もある。北西辺の柱列はやや軸線からずれる。南東辺は古墳中後期のQ 2区S D 112が重なっており、柱穴を欠いている。東角の柱穴はS D 112を切り込むが、その他の柱穴痕跡は確認できておらず、前後関係は確定しない。出土遺物で図化されたものはない。

S B 222（遺構：第118図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間を復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。建物内部は攪乱を受けており、柱痕跡は見られないが、より浅い柱穴なら存在していた可能性はあり、総柱構造は否定しない。古墳前期のS H 18と重なっており、柱穴がS H 18周溝を切り込んでいることから、本遺構が後出する。出土遺物で図化されたものはない。

S B 223（遺構：第118図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱4×3間を復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。柱穴の平面形が円形で、間隔が狭い特徴がある。中世の井戸跡A 3区S E 12や弥生時代のS D 65など遺構が錯綜していることもあり、長辺は遺存が悪く、北西辺の3間分しか検出されておらず、西角が1間空くことから4間としたものである。出土遺物で図化されたものはない。

S B 224（遺構：第118図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱1×2間分の柱穴を検出した。長軸方向は大きく東西に偏向する。このままでは柱間隔や平面形のバランスが悪いことから、北西の調査区境へ伸びるものと予想されるが、1×3間としても1間側が長辺となる。出土遺物で図化されたものはない。

S B 225 (遺構：第118図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中で、側柱2×2間を復元した。個々の柱穴に重なりが見られ、建て替えの可能性がある。S B 111・112や古墳前期のS H 18と重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 226 (遺構：第119図)

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間を復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。西角の柱穴が欠け、一方の短辺中間では柱穴が軸線を外れる。古墳中後期で扱うQ 2区S K 99内には西角柱穴が位置するはずであるが検出されておらず、一方で別の柱穴には切り込まれているので、前後関係は確定し得ない。また、古墳前期の大溝群D S 2外縁と重なっているが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 227 (遺構：第119図)

調査区南部、大溝群の東岸に位置する。遺構が錯綜する中で、側柱3×4間を復元した。3間側が長辺となる。北角の柱穴T区P 120は軸線をやや外れる。出土遺物で図化されたものはない。

S B 228 (遺構：第119図)

調査区南部、大溝群の東岸に位置する。1×1間分の柱穴を検出し、さらに伸びるものと予想されるが、中世溝によって失われている。長軸方向は大きく東西に偏向する。T区P 246ではスギ材の柱が遺存しており、希少例である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 229 (遺構：第119図)

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×1間を復元した。南東角の柱穴は調査区が異なるR 1区に存在するはずであるが、検出されていない。古墳前期のS H 31と重なるが、柱穴が切り込んでおり、本遺構が後出する。古墳中後期の大溝群D N 7等とも重なるが、前後関係は不明である。遺物は柱穴から古代の須恵器無台杯(第5分冊4419)が出土しており、遺構の区分と矛盾するが、事情は不明である。よって、古墳時代の遺構としては積極的に評価できない。

S B 230 (遺構：第120図 遺物：第124図、図版75)

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。中世溝により西半が失われているが、側柱1×3間分の柱穴を検出した。短辺・長辺とも伸びる可能性があるが、長辺の柱間隔は均等ではない。短辺の中央には近接棟持柱の可能性があるS 2区P 28があり、その場合の短辺は1間になるであろうが、対面では中世溝が走るため確認できない。遺物は柱穴から古墳前期の土師器直口壺(1154)が出土している。また、別の柱穴が切り込んでいる穴から古墳前期の赤彩壺底部(1146)が出土しており、建物に伴うものではないがその上限となる時期を示している。

S B 231 (遺構：第120図)

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。欠ける柱穴が多いが、判明している柱間隔から側柱3×3間に復元した。短辺外側にあるC 2区P 65が伴うとすれば独立棟持柱の可能性があるが、対面では不明確である。周辺遺構との重なりでは、柱穴がS 2区S K 08・09や古墳中後期の大溝群D N 7を切り込んでいる。

S K09は古墳前期のS H33周溝の可能性があり、その場合は本遺構が後出することになる。出土遺物で図化されたものはない。

S B 232 (遺構：第120図、図版59)

調査区西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×1間に復元した。S B121・122と重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 233 (遺構：第120図)

調査区中央部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間に復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。長辺中間柱は小規模で、うち一つは軸線の外側にずれる。出土遺物で図化されたものはない。

S B 234 (遺構：第121図)

調査区中央部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間に復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B 235 (遺構：第121図)

調査区中央部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間に復元した。小溝群S C 8および古代のW区S D60と重なっている。短辺中間柱の一つは両溝の交点にあたり、検出されていない。小溝群S C 8との前後関係は不明である。北角の柱穴はS D60を切り込んでいるが、この柱穴のみ径が大きくなっているため、内側の小穴部分のみが相当するのかもしれない。出土遺物で図化されたものはない。

S B 236 (遺構：第121図)

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。総柱3×2間で復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。古墳前期のS H26と重なるが、前後関係は不明である。構造的には本遺構が新しいものと推定する。南東角の柱穴に木材が遺存するようであるが、詳細は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 237 (遺構：第121図)

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。側柱3×1間で復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。出土遺物で図化されたものはない。

S B 238 (遺構：第122図)

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。南西辺の柱列がやや乱れるが、側柱4×3間を復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。弥生時代のV 1区S D01・07と重なり、柱穴がS D07を切り込んでいる。出土遺物で図化されたものはない。

S B 239 (遺構：第122図)

調査区南部、大溝群の東岸に位置する。古墳時代の竪穴系建物跡や、古代の掘立柱建物跡が錯綜する中で検出した。中世溝により失われた柱穴もあるが、側柱4×3間を復元した。長軸方向は大きく東西に偏向する。S H21やS H22と重なるが、前後関係は不明である。構造的にはこれらより新しいものと推定する。出土遺物で図化されたものはない。

S B 240（遺構：第115図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。遺構が錯綜する中で、側柱3×2間を復元した。柱穴がいくつか欠け、東角もやや軸からずれる。ひとまわり大きいS B 217とほぼ同じ位置・軸方向で重なり、S 1区P 109等いくつかの柱穴が共通するが、前後関係は不明である。柱穴P 109については、古墳中後期のS D 25・26を切り込んでおり、最も新しい。また、古墳中後期のS H 28周溝や古墳前期のS K 05とも重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

S B 241（遺構：第113図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。側柱2×2間で復元した。北角は中世の井戸跡A 4区S E 18で失われたようである。ひとまわり大きいS B 206とほぼ同じ位置・軸方向で重なるが、前後関係は不明である。出土遺物で図化されたものはない。

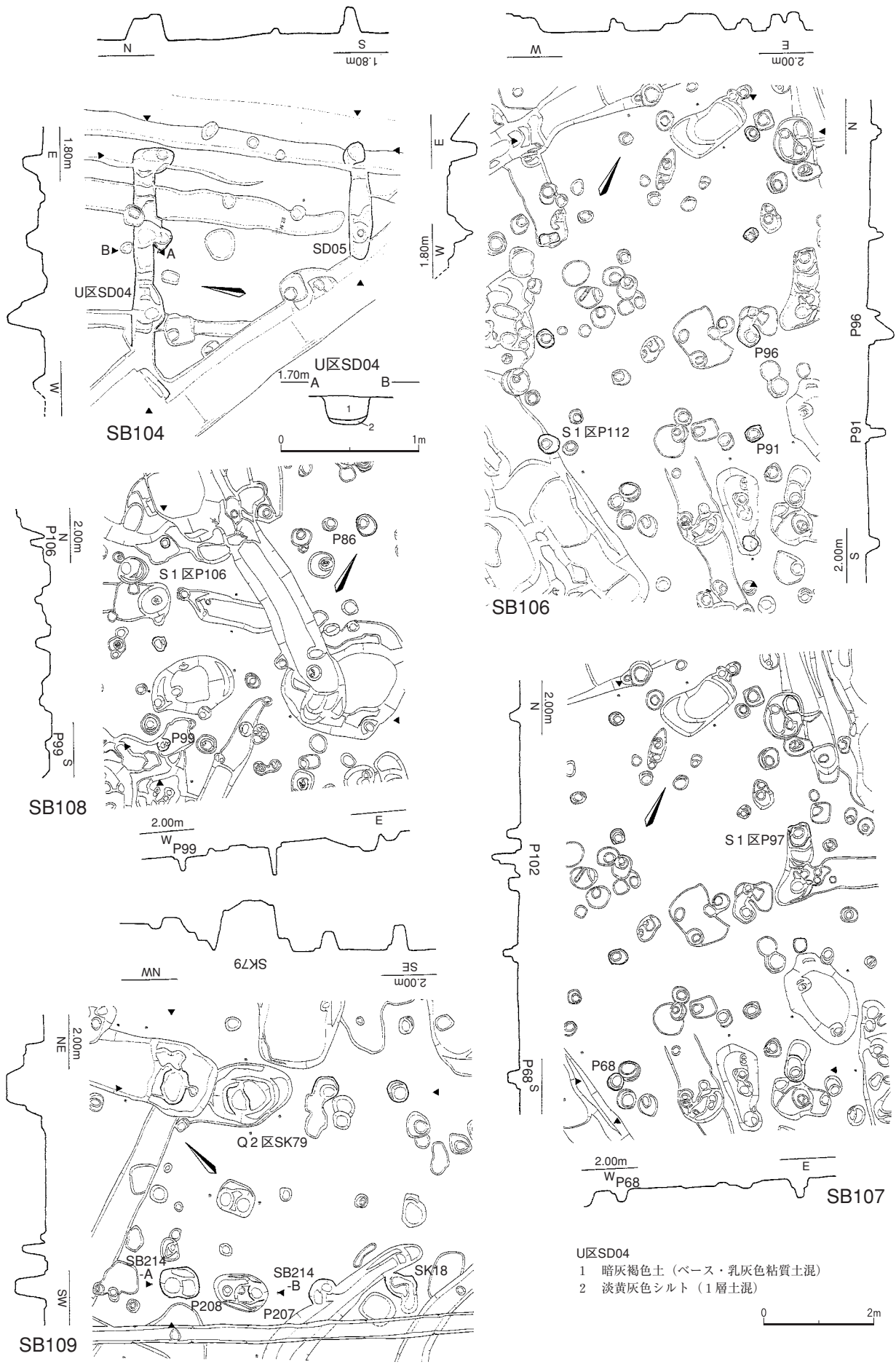
S B 242（遺構：第123図）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。調査区壁際で2間分の柱列を検出し、未調査の西側へ伸びるものと認識した。柱穴は比較的深くて整った形状である。東側には平行溝C 3区S D 45が検出されており、関連する可能性がある。出土遺物で図化されたものはない。

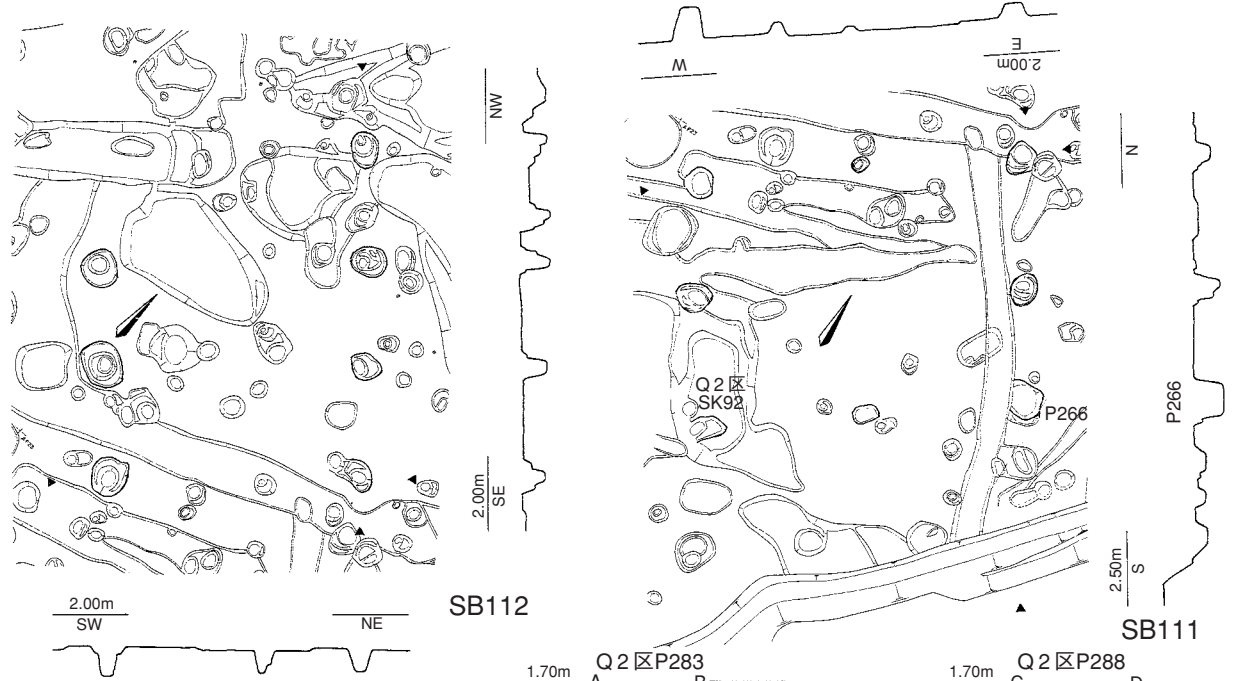
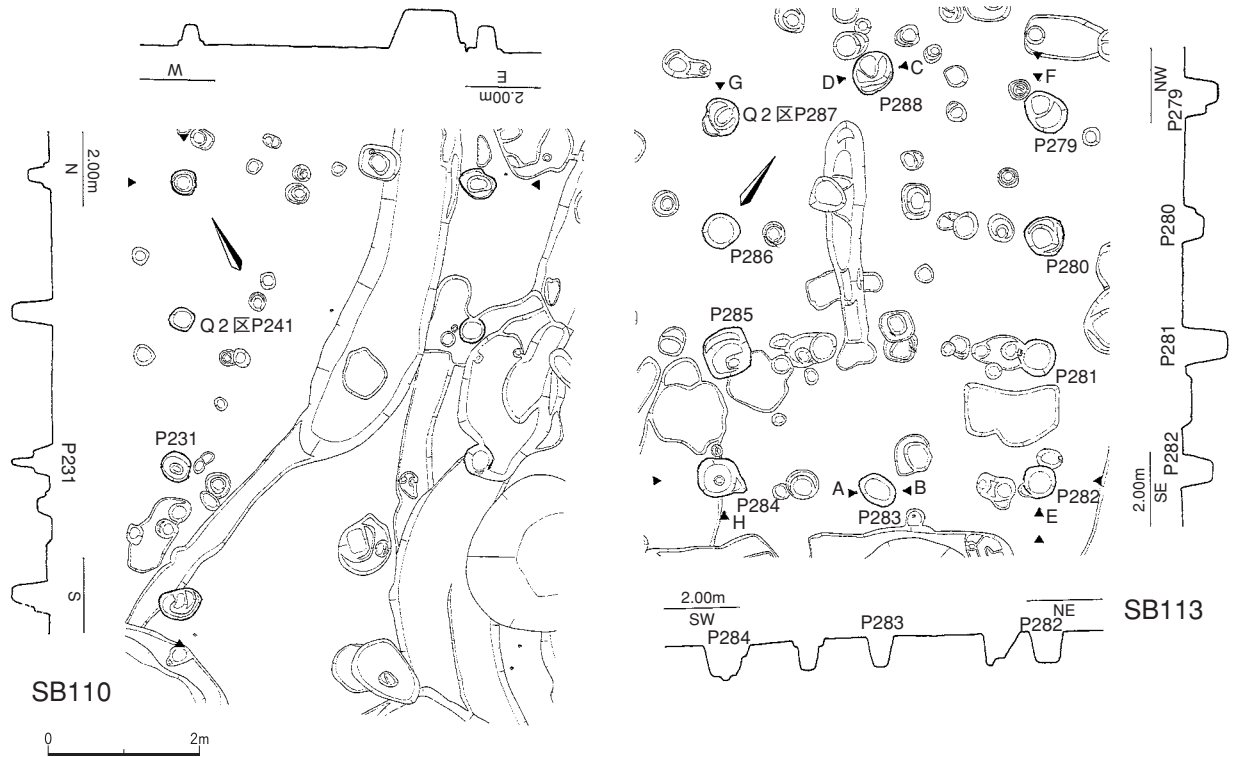
柱列と平行溝の類例は、金沢市埋蔵文化財センターによる平成15年度の発掘調査で検出されており、L地区の延長上に位置する調査区のA区S D 23とP 43・48・54である。時期は古墳中後期であるが、調査の結果、掘立柱建物跡とはならないことが確認されている。本例とは類似するが、柱列と溝の間隔や位置関係、溝の深さなど異なる点もある。

別時期掘立柱建物跡出土土器（第124図、図版75）

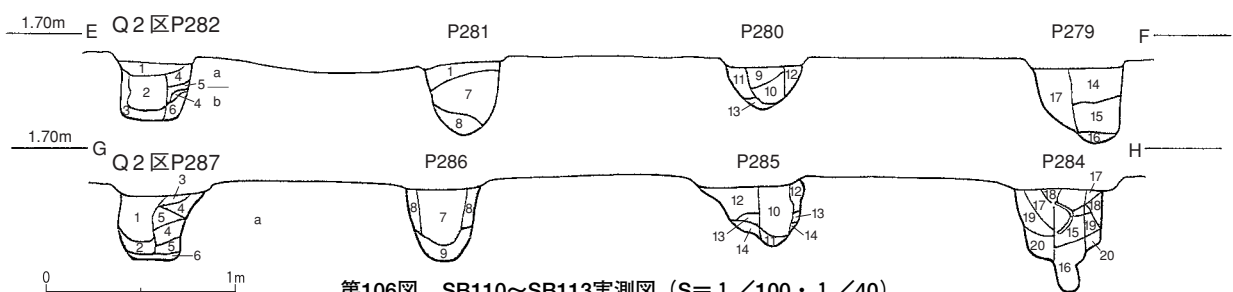
古代の掘立柱建物跡柱穴からも古墳時代の土器が出土しており、混入と判断される。本来は第7節で後述する別時期遺構の混入遺物（第168図1450～1454）と一括すべき存在であったが、挿図の構成上、ここで紹介する。S B 330では古墳後期の土師器内黒椀（1155）と須恵器杯（1156）、S B 333では古墳後期の須恵器はそう（1157）と杯（1158）、S B 337では古墳後期の須恵器杯蓋（1159）、S B 358では古墳前期の甕（1160）、S B 368では古墳前期のくの字口縁甕（1161）、畿内系高杯（1162）、小型器台（1163）が出土している。



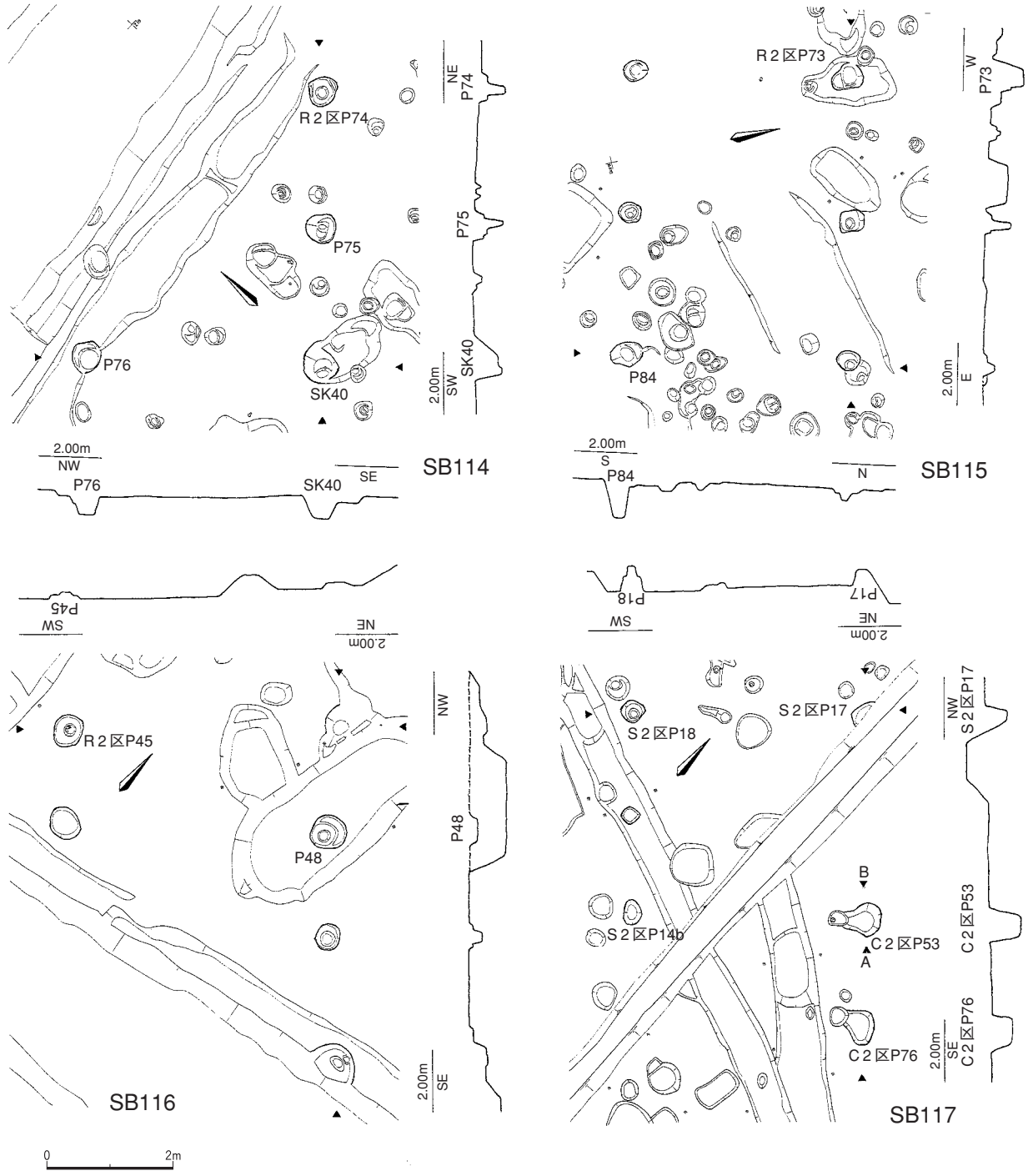
第105図 SB104・SB106～SB109実測図 (S=1/100・1/40)



〔土層名は第121図〕

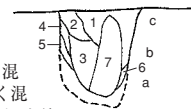


第106図 SB110~SB113実測図 (S=1/100・1/40)



0 2m

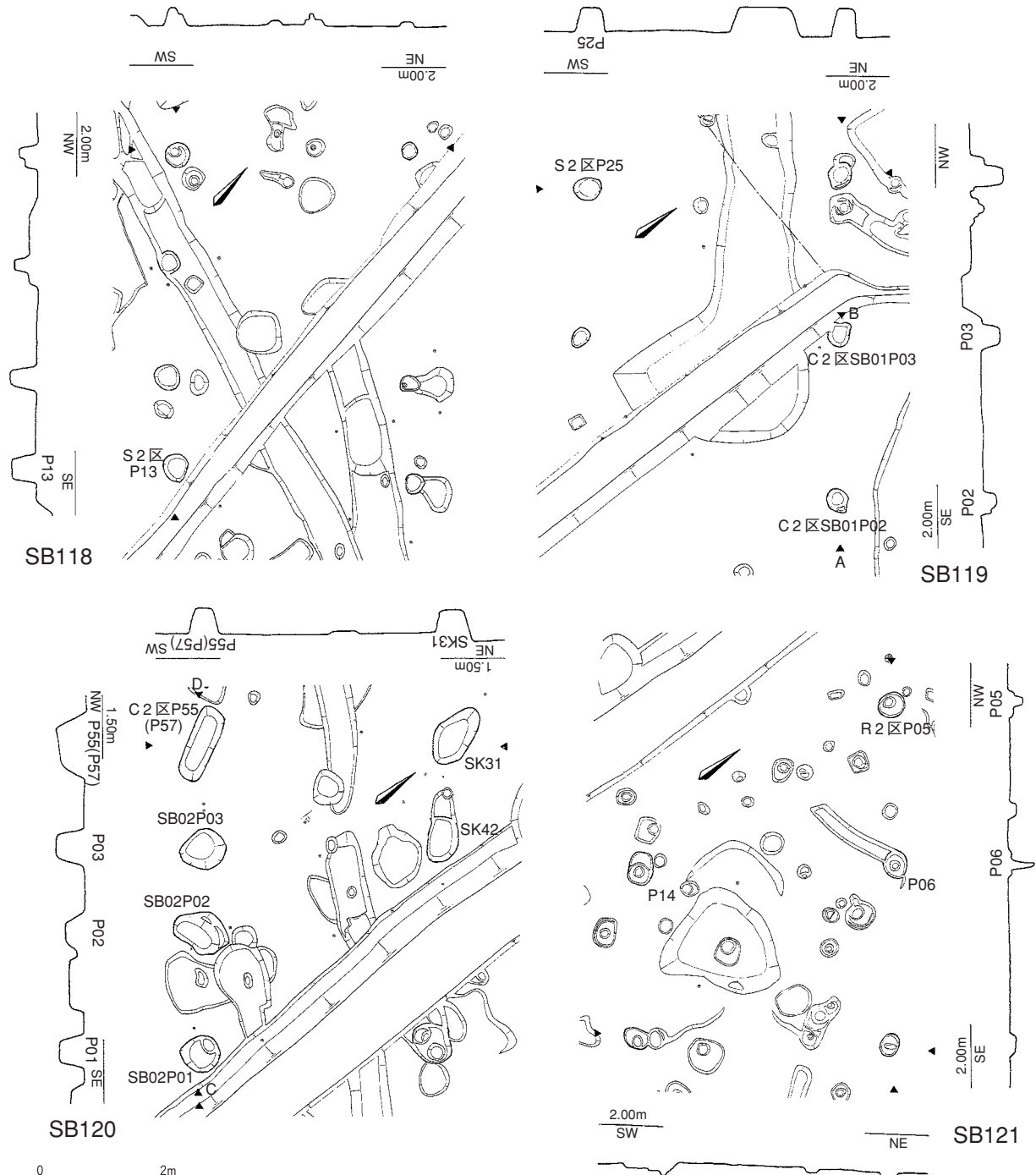
1.50m A C2区P53 B



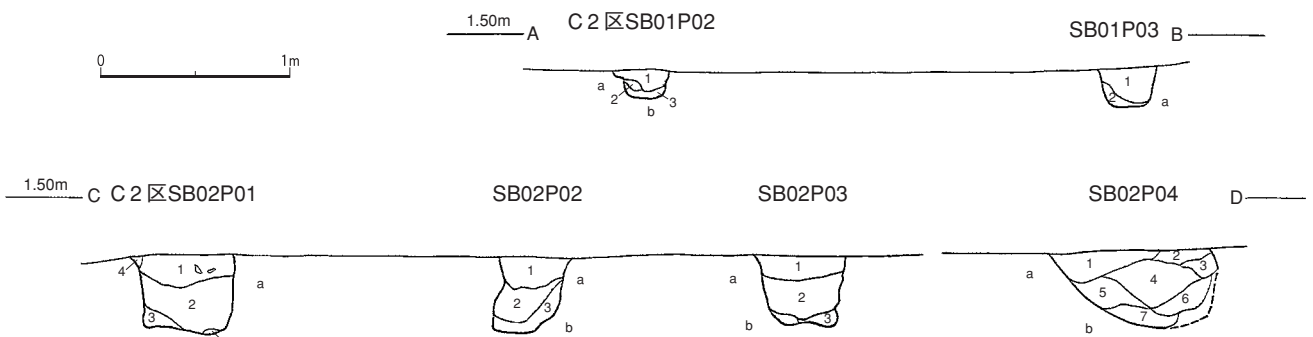
- | | |
|----------|-------------------|
| 1 暗灰粘土 | 地山まだら状に混 |
| 2 暗灰粘土 | 地山1層より多く混 |
| 3 灰シルト | 2層若干混 一部砂質 |
| 4 灰黄粘土 | 2層若干混 |
| 5 暗灰黄シルト | 3層と地山の混層 |
| 6 灰砂 | 1層若干混 |
| 7 暗灰粘土 | 炭(φ1~2mm)稀に含 柱痕か? |
| a 灰砂 | |
| b 灰白シルト | |
| c 黄灰粘土 | |

第107図 SB114~SB117実測図 (S=1/100・1/40)

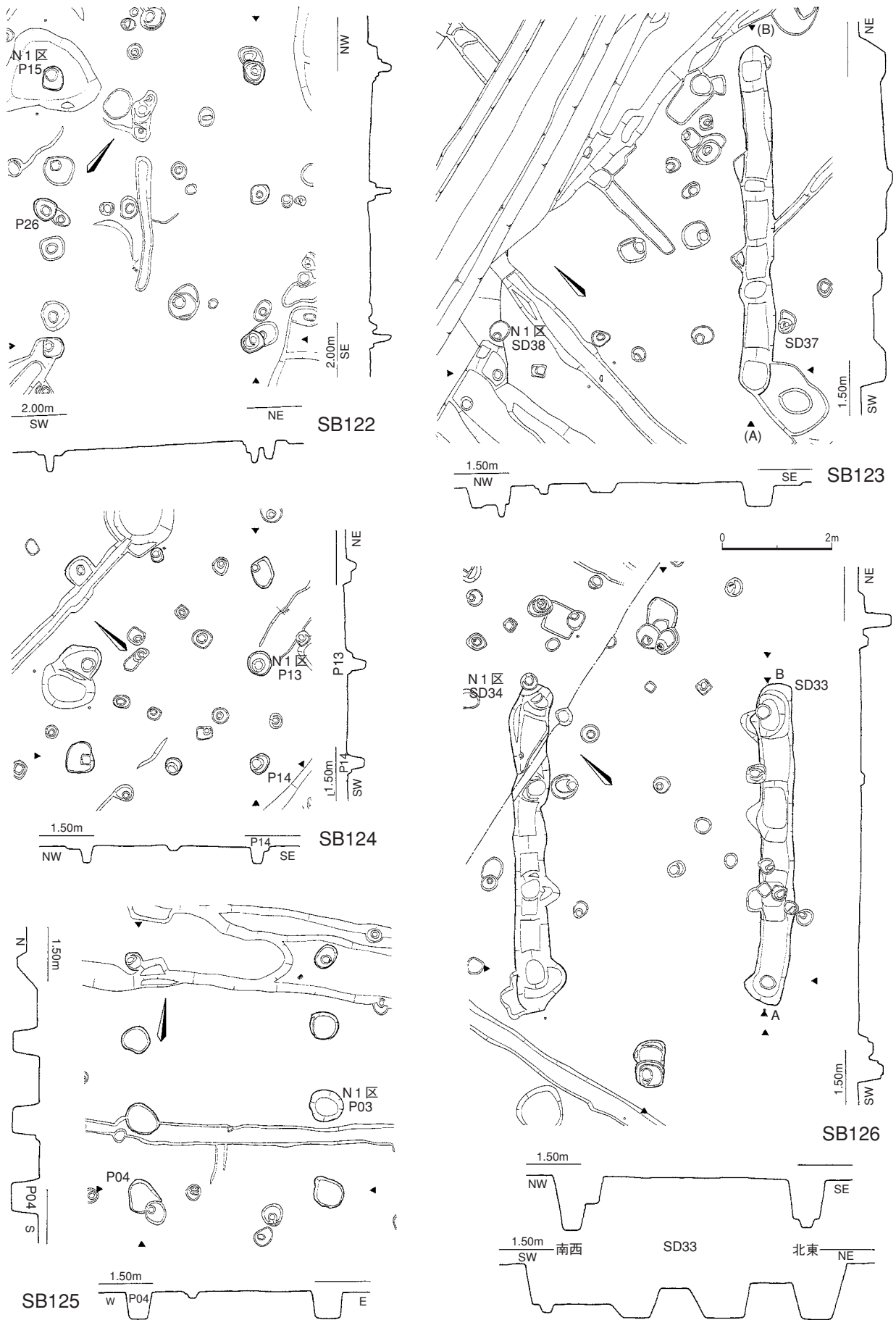
0 1m



〔土層名は第119図〕

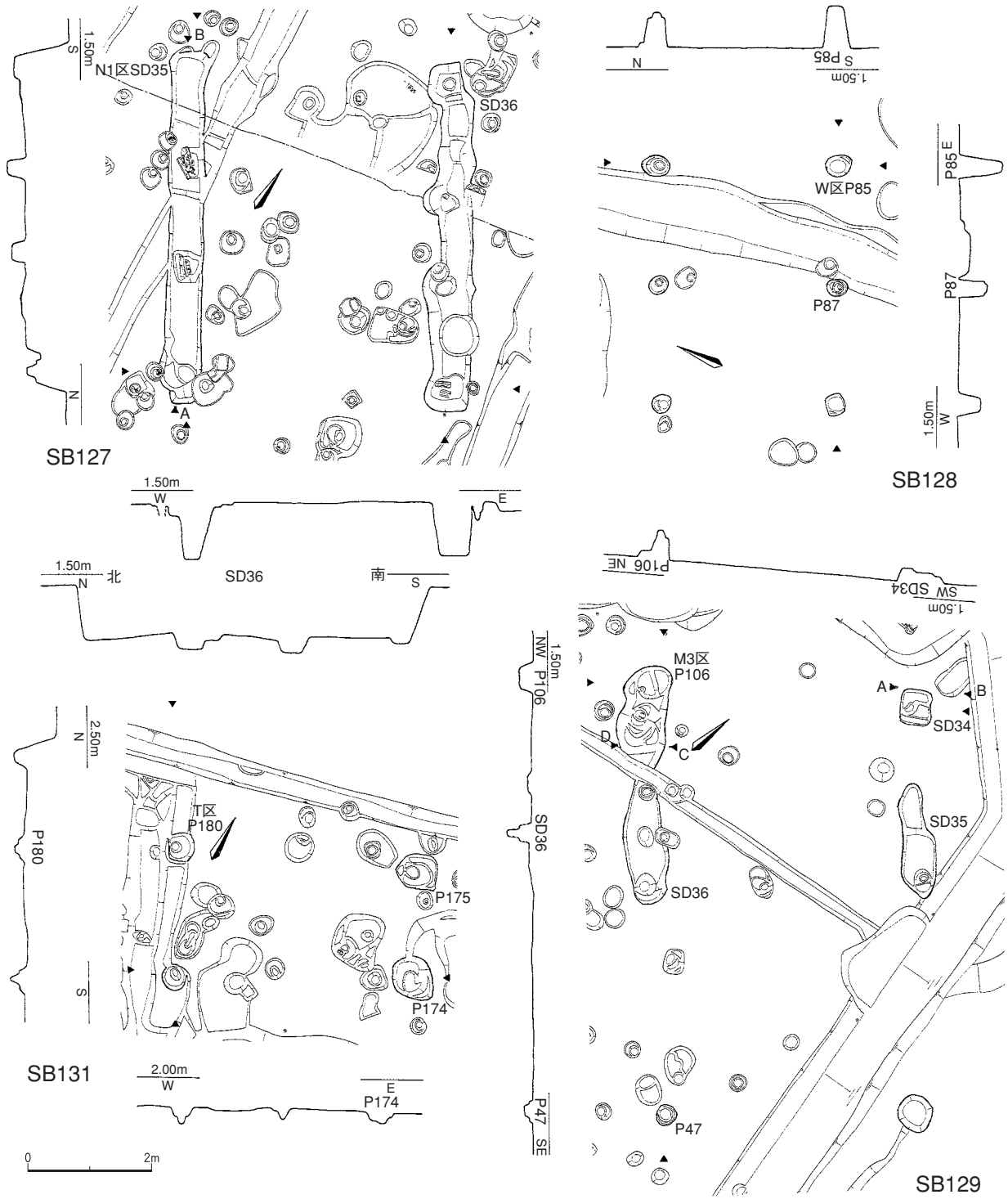


第108図 SB118~SB121実測図 (S=1/100・1/40)

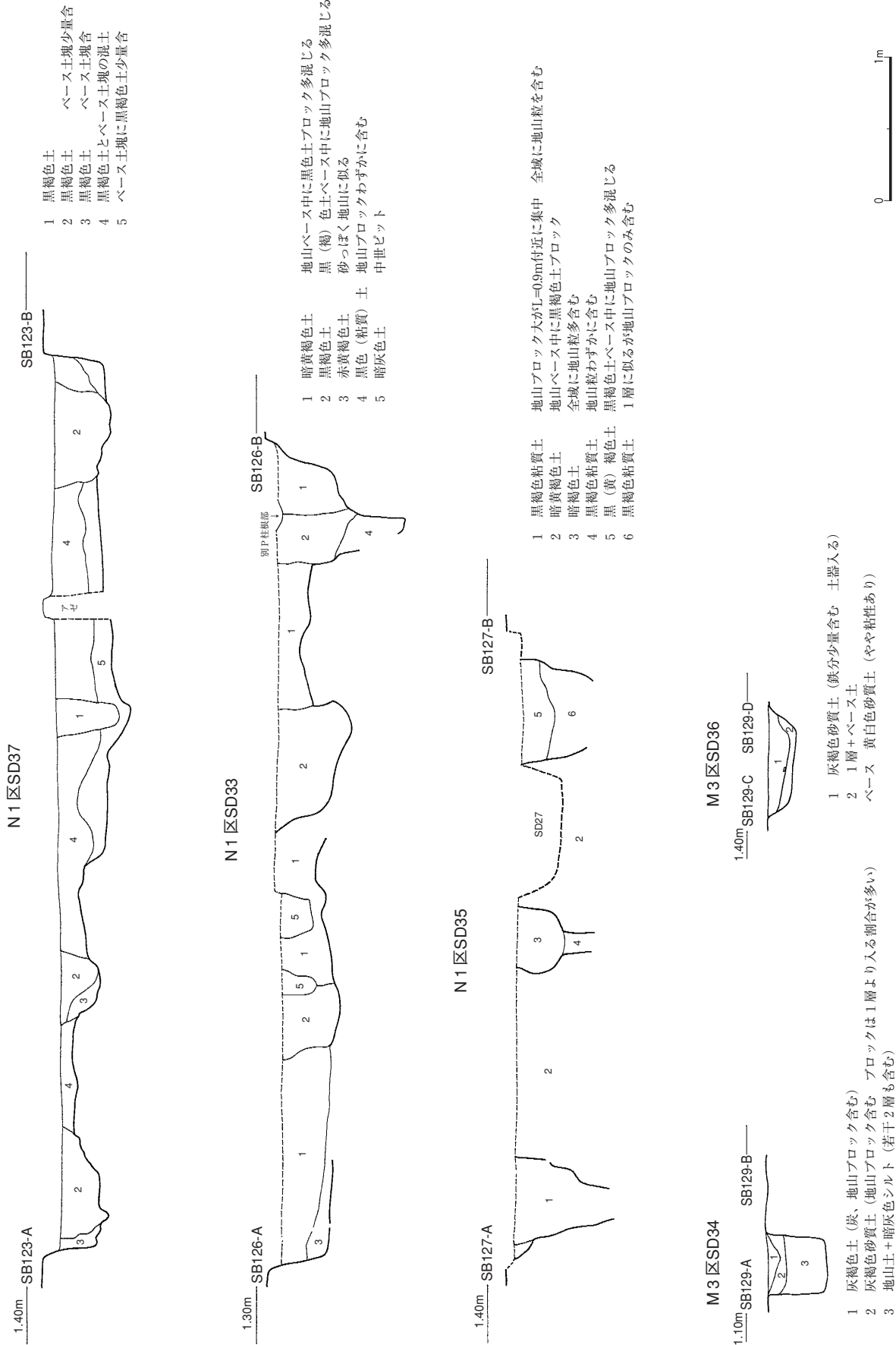


第109図 SB122~SB126実測図 (S=1/100)

第3節 掘立柱建物跡

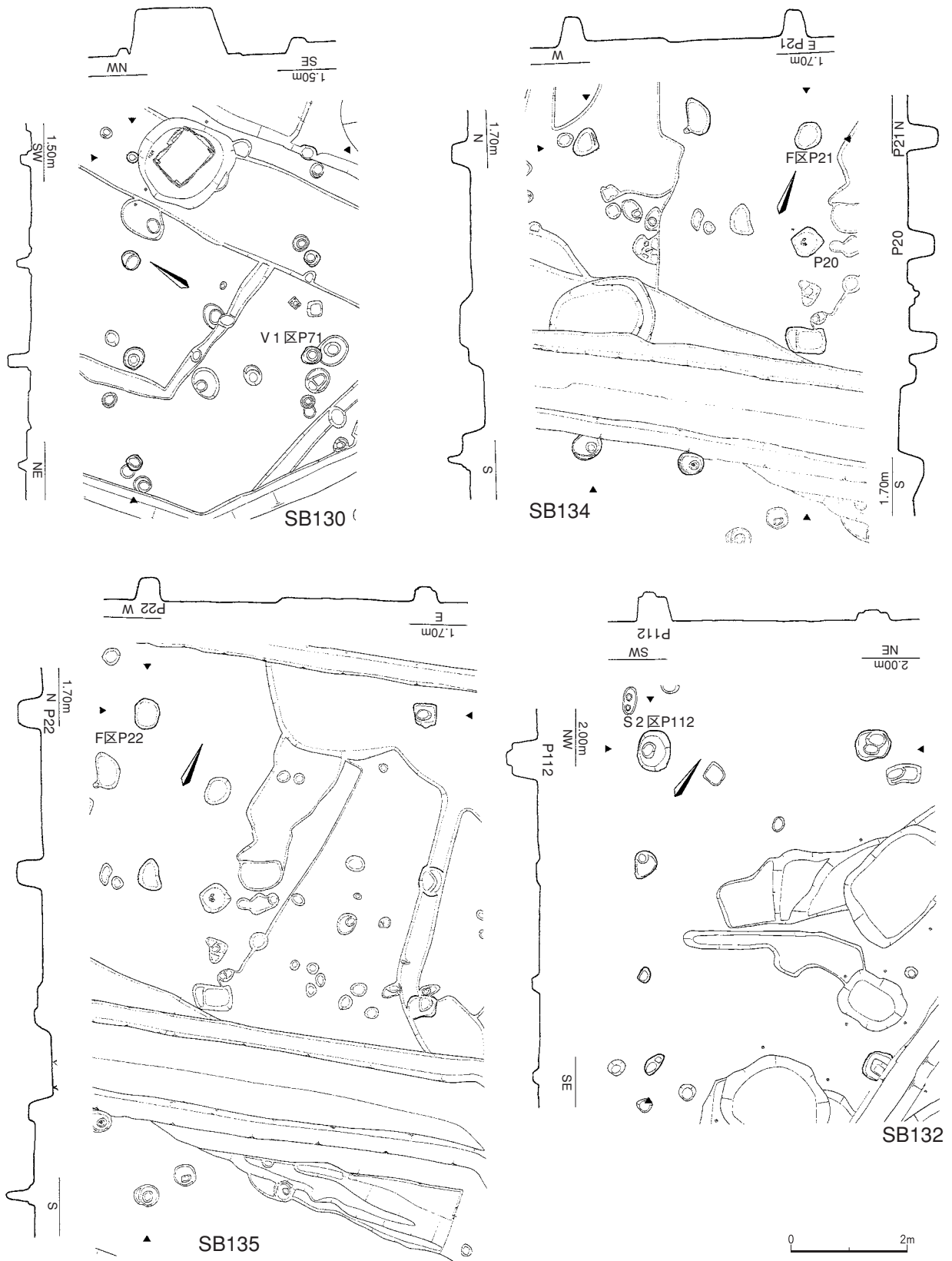


第110図 SB127~SB129・SB131実測図 (S=1/100)

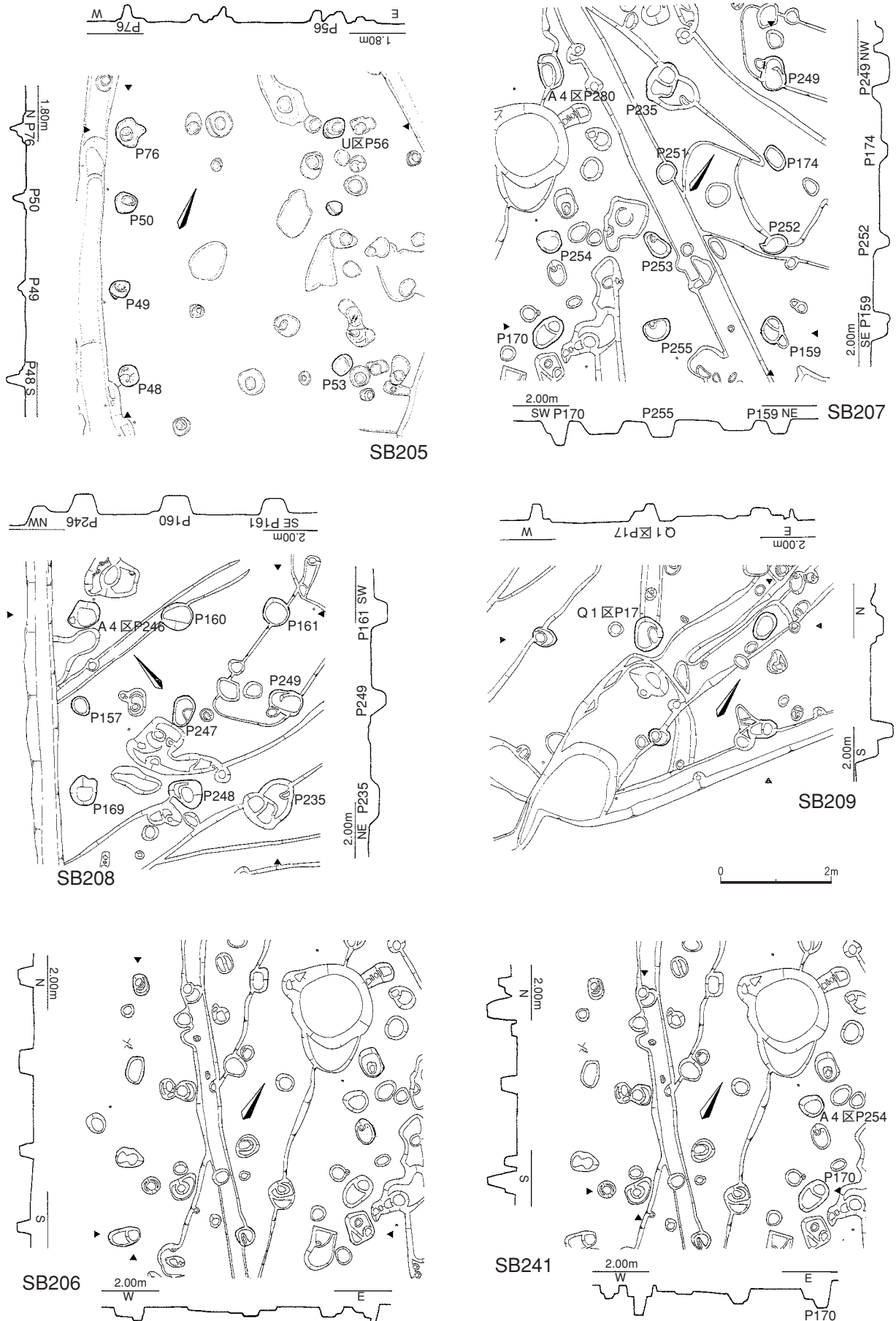


第111図 SB123・SB126・SB127・SB129実測図 (S=1/40)

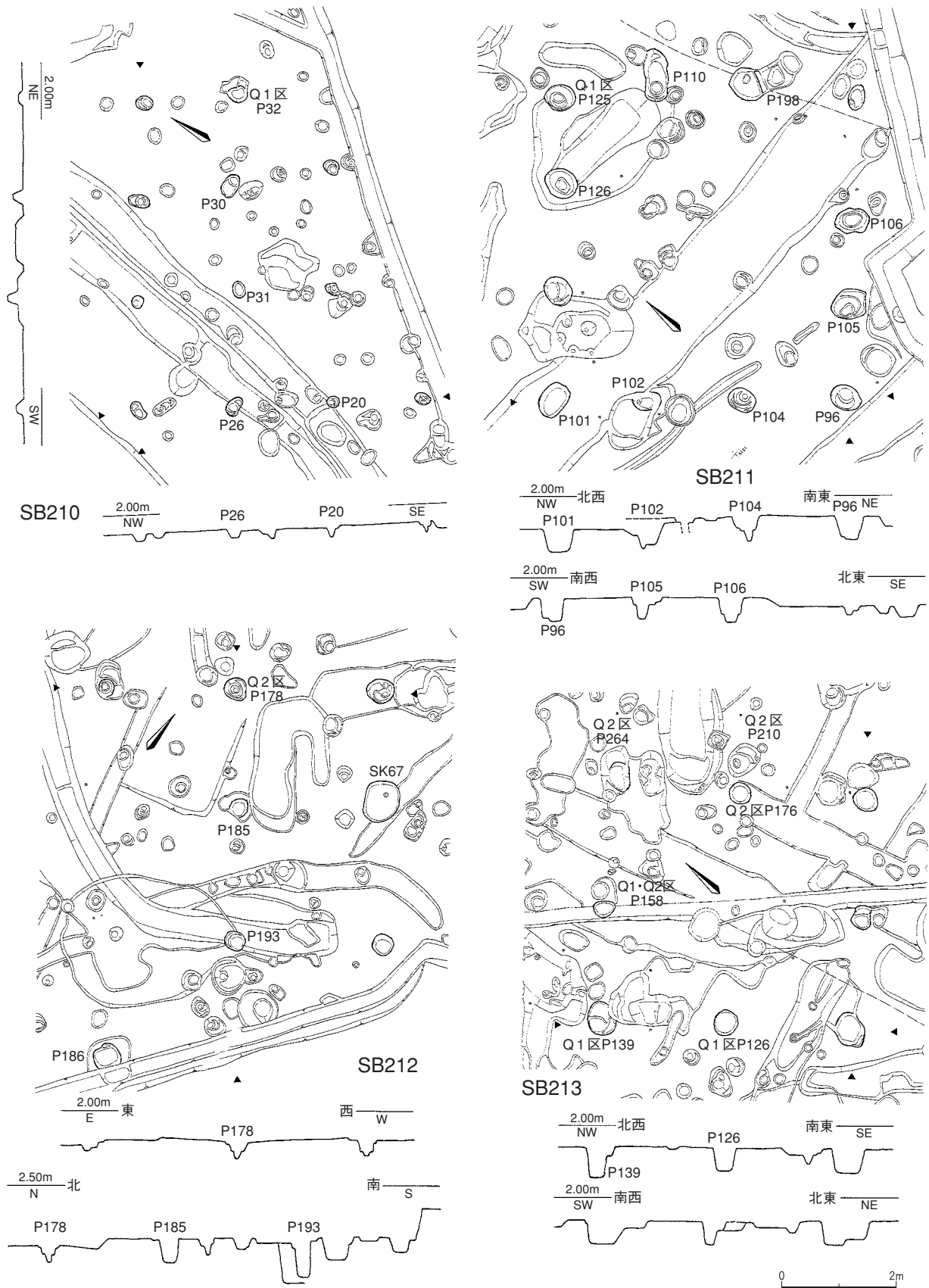
第3節 掘立柱建物跡



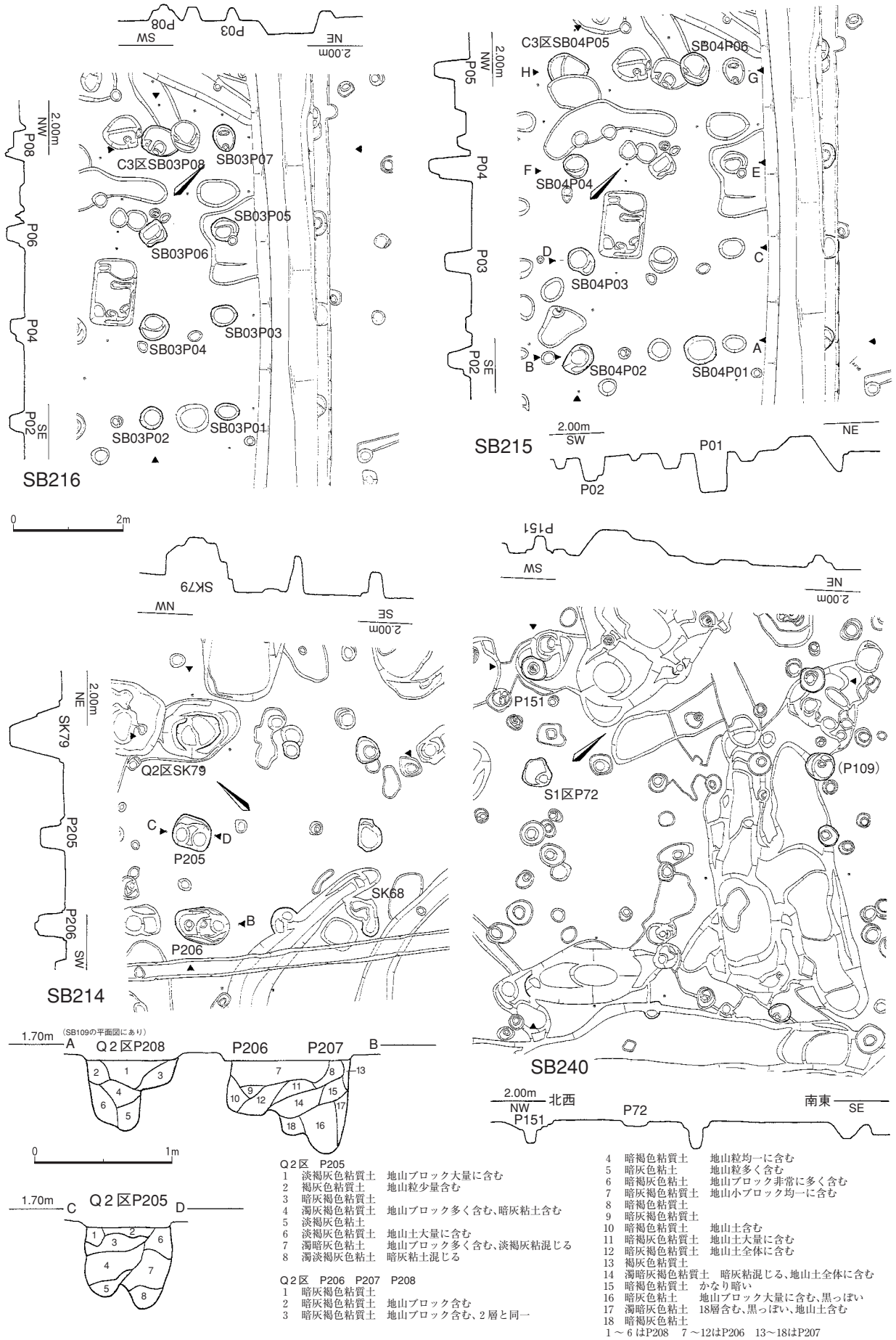
第112図 SB130・SB132・SB134・SB135 (S=1/100)



第113図 SB205~SB209・SB241実測図 (S=1/100)

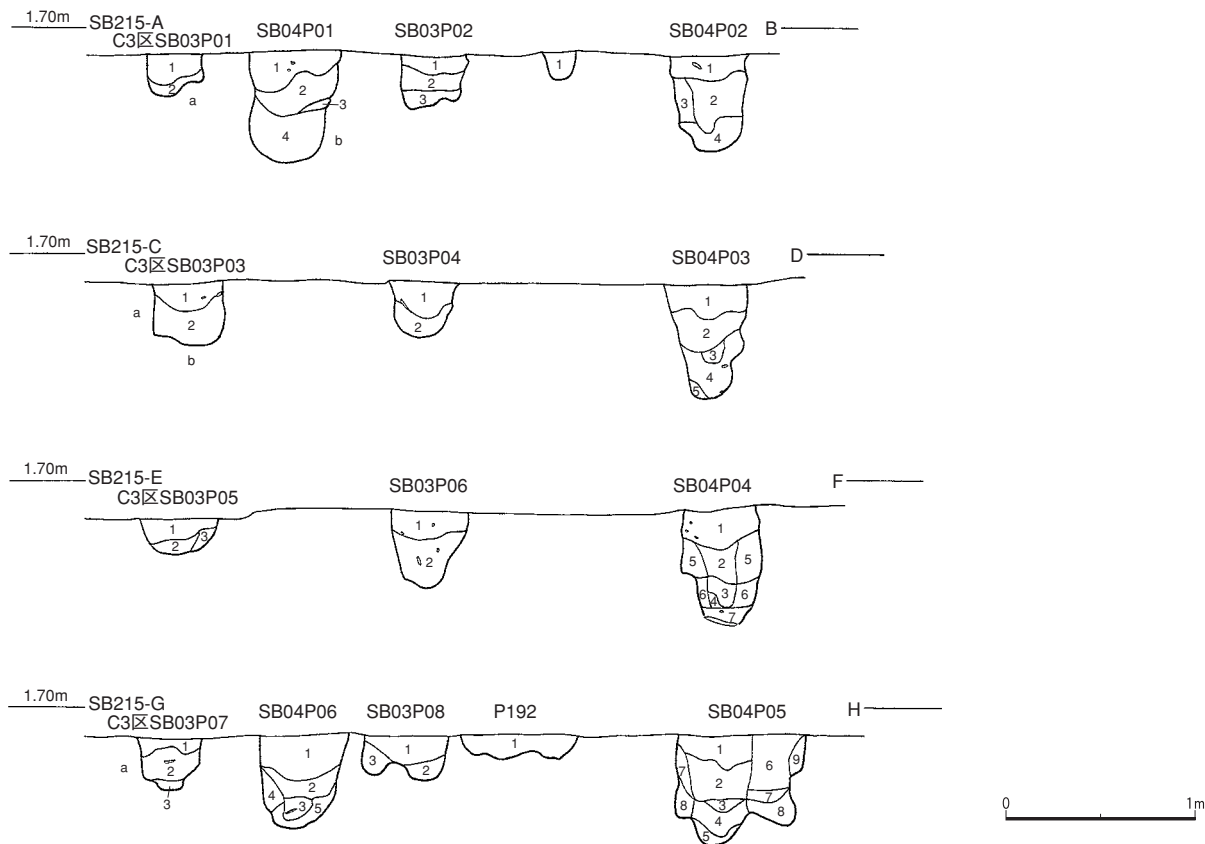


第114図 SB210~SB213実測図 (S=1/100)



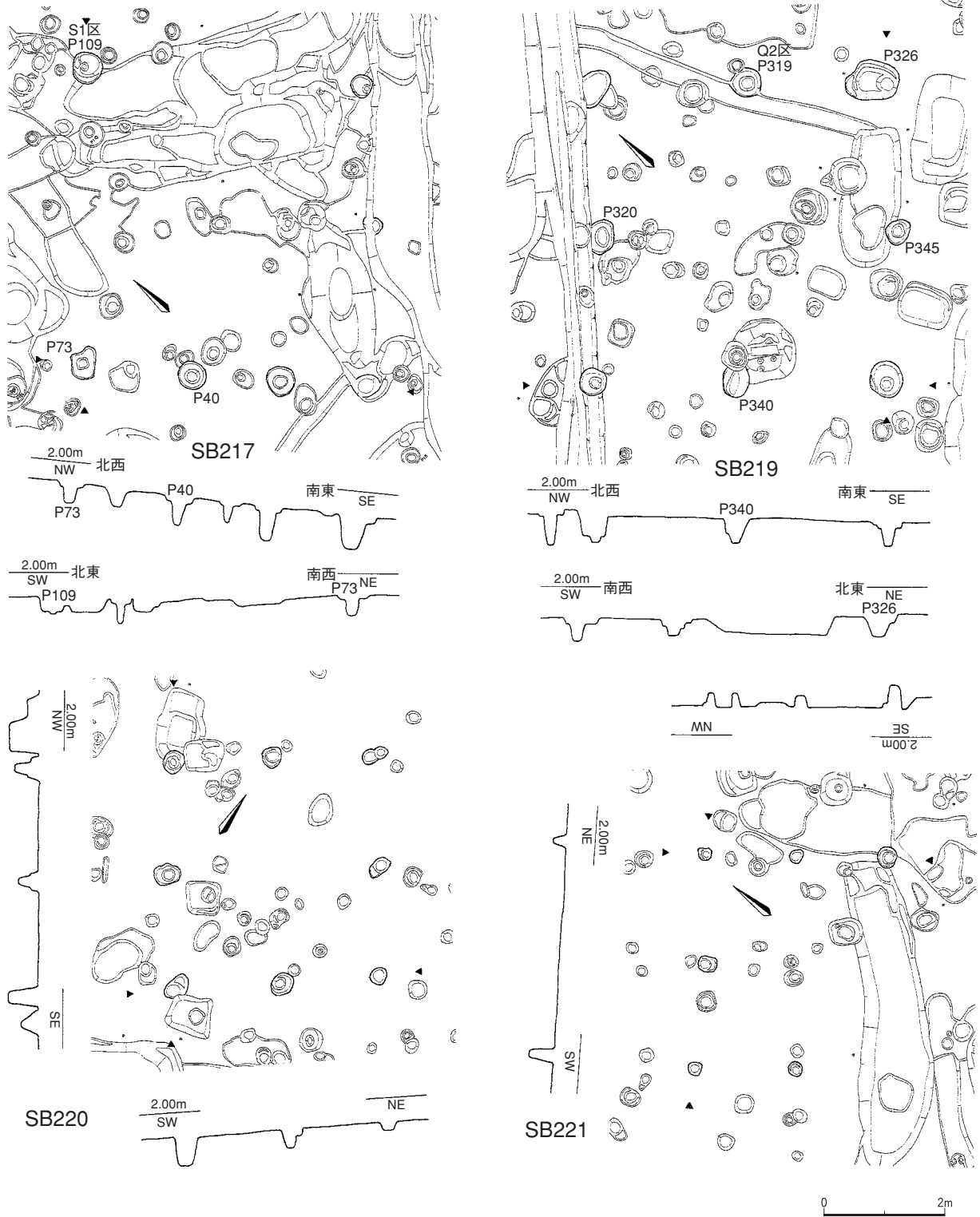
第115図 SB214~SB216・SB240実測図 (S=1/100・1/40)

第3節 掘立柱建物跡

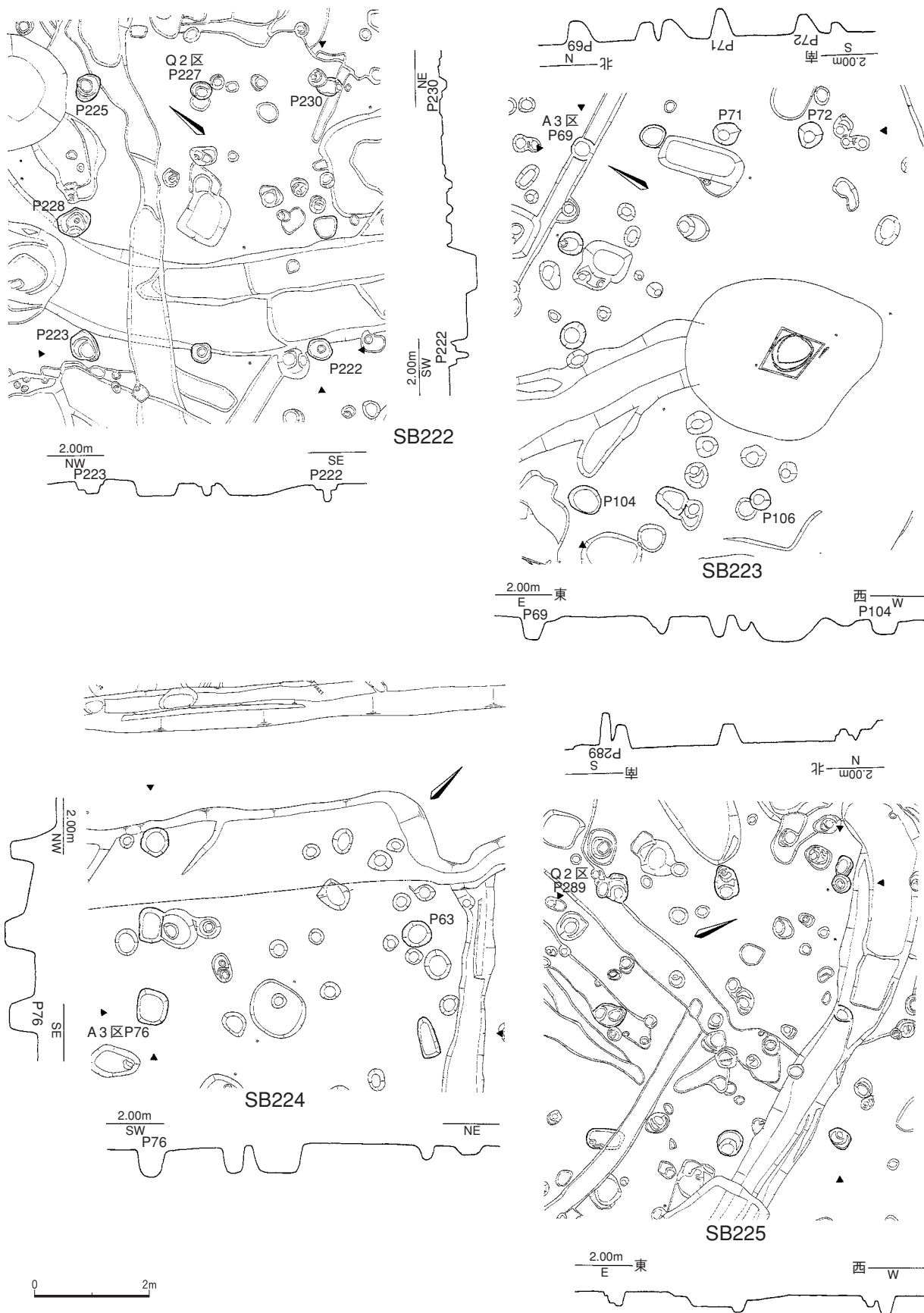


- | | |
|---|---|
| <p>SB03-P01</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐粒まばら 炭 (φ 2mmほど) 若干含</p> <p>2 暗灰粘土</p> <p>a 地山 黄灰粘</p> <p>SB04-P01</p> <p>1 暗灰褐粘土 炭 (φ 2mmほど) 褐粒まばらに含</p> <p>2 暗灰粘土 炭 (φ 2mmほど) まばらに 褐粒若干含 色調やや褐色 気味 地山小ブロック状に10%混</p> <p>3 暗灰粘土 特徴2層に似るが褐色気味はとれ暗めの色調となる</p> <p>4 黒灰粘土 粘性強い 地山 (小ブロック状) と暗灰粘土がまだら状に混 自然木 (礎板か?) 検出している</p> <p>b 灰白シルト</p> <p>SB03-P02</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐粒若干 炭粒まれに含</p> <p>2 暗灰粘土 炭 (φ 2mmほど) 若干含</p> <p>3 淡灰黄シルト 2層と地山の漸移層</p> <p>ビットナンバーなし</p> <p>1 暗灰粘土 炭粒 褐粒まばらに含</p> <p>SB04-P02</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐粒 炭粒まばらに含</p> <p>2 暗灰粘土 炭 (φ 1~3mm) 若干含 地山ブロック状に10~20%混</p> <p>3 暗灰粘土 炭粒稀に含 地山小ブロック状に20%混</p> <p>4 黒灰粘土 粘性強い 地山小ブロック状に30%混</p> <p>SB03-P03</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐粒多く 炭 (φ 1~3mm) まれに含</p> <p>2 黒灰粘土 地山ブロック状に10~20%混 炭 (φ 2mmほど) まばらに含</p> <p>a 黄灰粘</p> <p>b 灰白シルト</p> <p>SB03-P04</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐粒多く 炭 (φ 1~3mm) 若干含</p> <p>2 暗灰粘土 褐粒若干 炭 (φ 1~5mm) 若干含 地山ブロック状に稀に混</p> <p>SB04-P03</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐粒多く 炭粒若干含</p> <p>2 暗灰粘土 褐粒若干 炭粒まばらに含 地山下位を中心にブロック状に 10~20%混</p> <p>3 暗灰粘土 地山 2層に比べ50%と多く混</p> <p>4 黒灰粘土 炭 (φ 1~7mm) 若干含</p> <p>5 暗灰青シルト 地山質土が粘性を帯びる 2~5は粘性強い</p> | <p>SB03-P05</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐粒多く 炭 (φ 1~2mm) まばらに含</p> <p>2 暗灰粘土 炭 (φ 1~3mm) 若干含 地山粒子状に若干混</p> <p>SB03-P06</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐色粒子 炭 (φ 2mmほど) 若干含む</p> <p>2 暗灰粘土 炭 (φ 2mmほど) 若干含 地山ブロック状に10%混</p> <p>SB04-P04</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐色粒子まばらに 炭若干含 地山粒子状にまばらに混 炭粒子状に若干混 柱根に炭化したものと思われる炭化物がみられた</p> <p>2 暗灰粘土 地山30%混 粘性強い 柱根に炭化したものと思われる炭化物がみられた</p> <p>3 黒灰粘土 6層の流れ込みか? 3層混じる 2層より若干明るく 地山30%混入</p> <p>4 淡灰粘土</p> <p>5 暗灰粘土</p> <p>6 淡灰シルト 暗灰粘土と地山混入</p> <p>7 灰粘土 粘性強い 礎板痕跡か?</p> <p>SB03-P07</p> <p>1 暗灰褐粘土 SB03-P03よりやや明るめ 褐色粒子 炭粒まばらに含</p> <p>2 暗灰粘土 炭 (φ 1~2mm) まばらに含</p> <p>3 灰黄粘土 2層と地山の漸移層</p> <p>a 黄灰粘土</p> <p>SB04-P06</p> <p>1 灰褐粘土 褐色粒子 炭 (φ 1~3mm) まばらに含</p> <p>2 暗灰粘土 炭 (1~10mm) 若干含 地山小ブロック状に10%混入</p> <p>3 暗灰粘土 炭まれに含 2層より明るめ 地山の混入なし</p> <p>4 灰黄粘土 2層20%混</p> <p>5 灰シルト 暗灰粘土と地山混入</p> <p>SB03-P08</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐色粒子まばらに 炭 (φ 1~2mm) 若干含 地山粒子状に 若干混</p> <p>2 暗灰粘土 炭粒若干含 地山小ブロック状に若干混</p> <p>3 灰黄粘土 1層と地山の漸移層</p> <p>P192</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐色粒子まばらに 炭粒若干含む 下位は漸移の様相示す</p> <p>SB04-P05</p> <p>1 暗灰褐粘土 褐色粒子 炭粒まばらに含 地山粒子状に若干混</p> <p>2 暗灰粘土 上位1層混じる 地山ブロック状に混</p> <p>3 黒灰粘土 2層混 2層と4層の中間層 粘性強い</p> <p>4 黒灰粘土 地山ブロック状に若干混 粘性強い</p> <p>5 暗灰粘土 4層と地山の漸移層</p> <p>6 暗灰粘土 2層より色調暗め 地山若干混 褐色粒子・炭粒若干含</p> <p>7 暗灰粘土 6層より色調暗め 地山粒子状に若干混</p> <p>8 黒灰粘土 4層より地山の混入多い</p> <p>9 黄灰粘土 6層混 1~5は柱痕か?</p> |
|---|---|

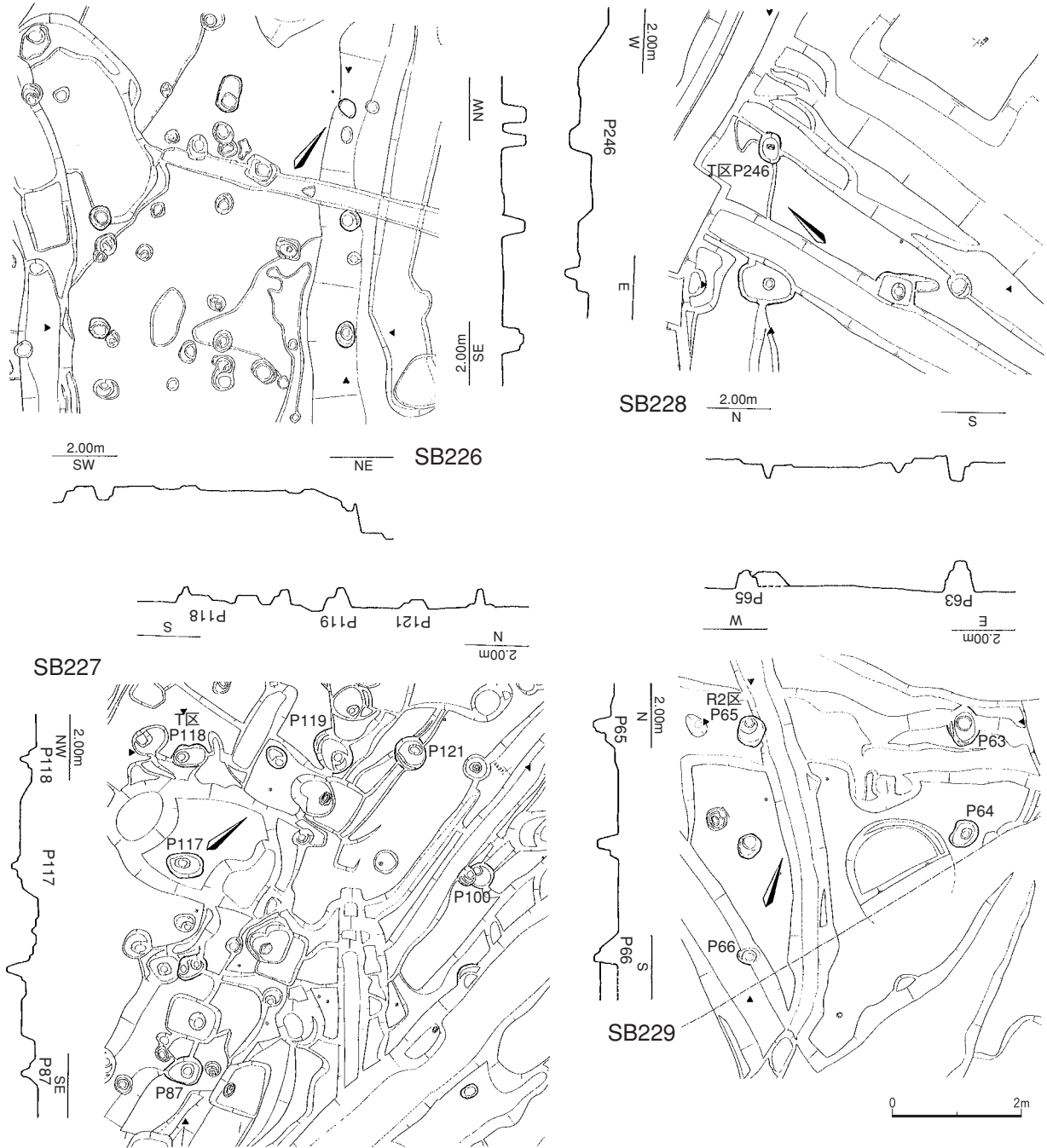
第116図 SB215・SB216土層図 (S=1/40)



第117図 SB217・SB219~SB221実測図 (S=1/100)



第118図 SB222~SB225実測図 (S=1/100)



〔第108図の土層名〕

SB01-P02

- 1 暗灰粘土
- 2 暗灰粘質土 地山30%混
- 3 灰黄シルト 1層10%混
- a 灰黄砂
- b 暗灰砂

SB01-P03

- 1 暗灰粘土
- 2 灰黄シルト 1層10%混
- a 灰黄砂

SB02-P01

- 1 黒粘土 灰白粘10%混 炭(φ1~3mm)若干含
- 2 黒灰粘土 灰白粘 灰黄粘土50%混
- 3 灰白シルト
- 4 灰黄粘土
- a 黄灰粘
- b 灰白細砂

SB02-P02

- 1 黒粘土
- 2 黒灰粘土 灰白粘20%混
- 3 灰白粘土 一部シルト質
- a 黄灰粘
- b 灰砂

SB02-P03

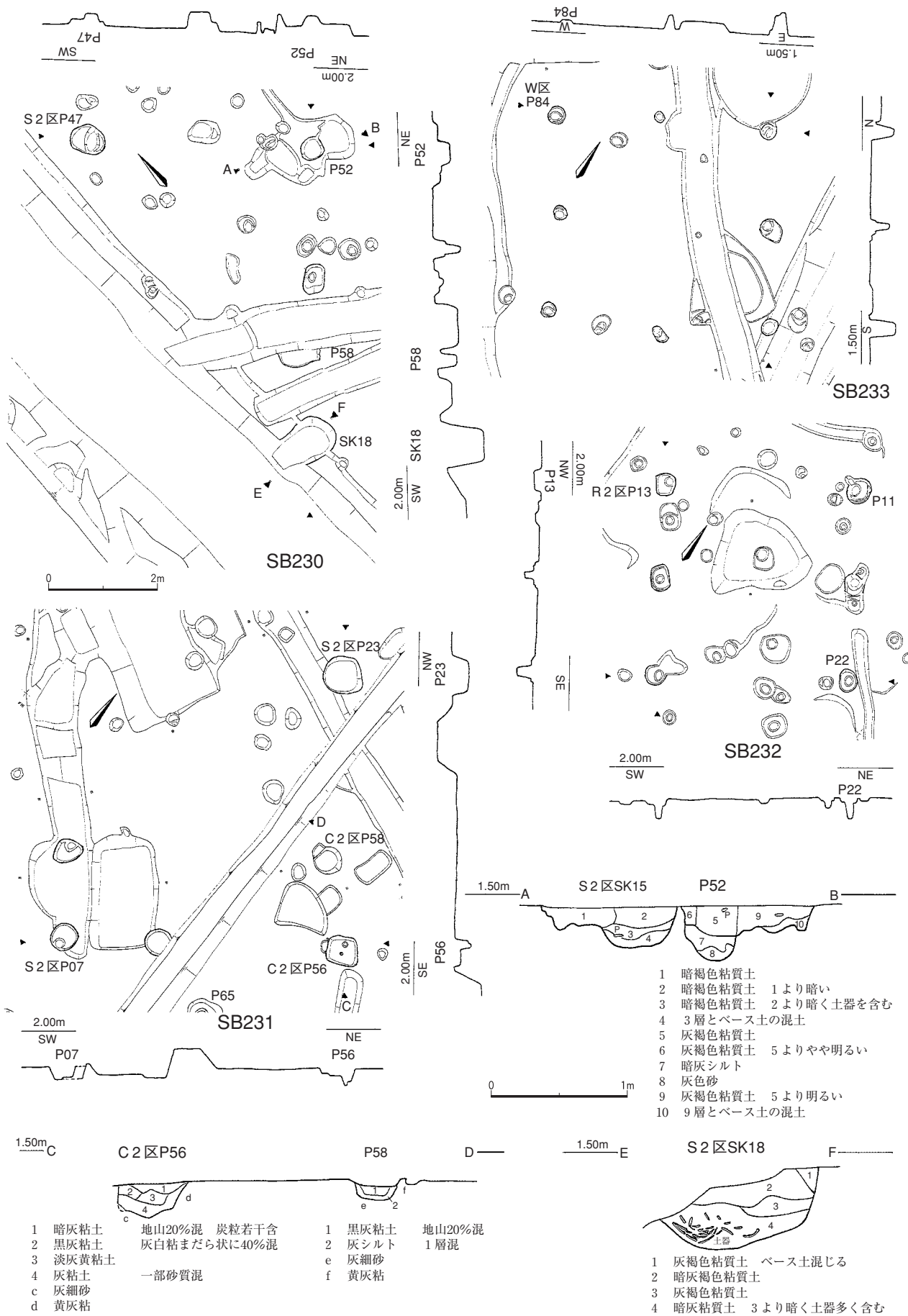
- 1 黒粘土
- 2 黒粘土 1層より色調若干明るめ
- 3 灰粘土 一部砂質
- a 黄灰粘
- b 灰砂

P55

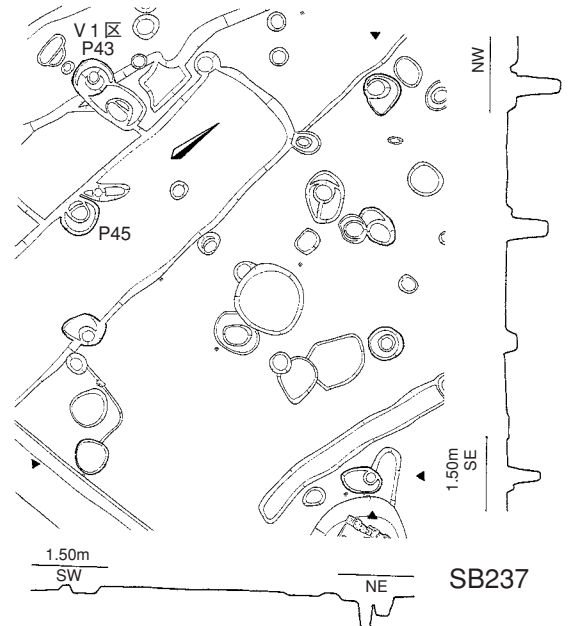
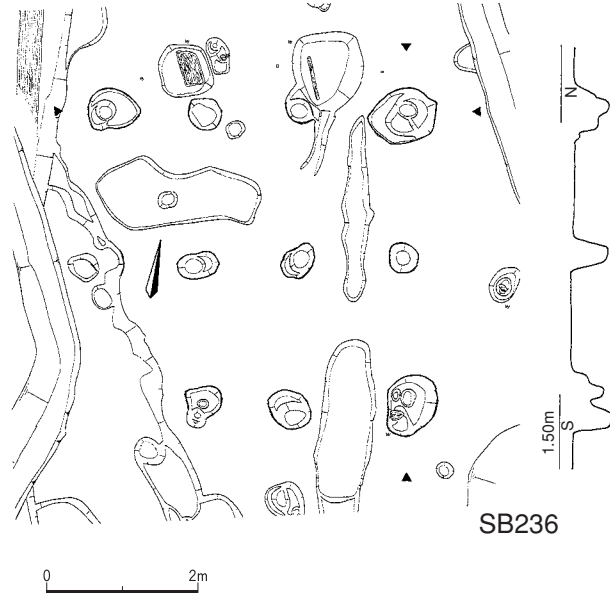
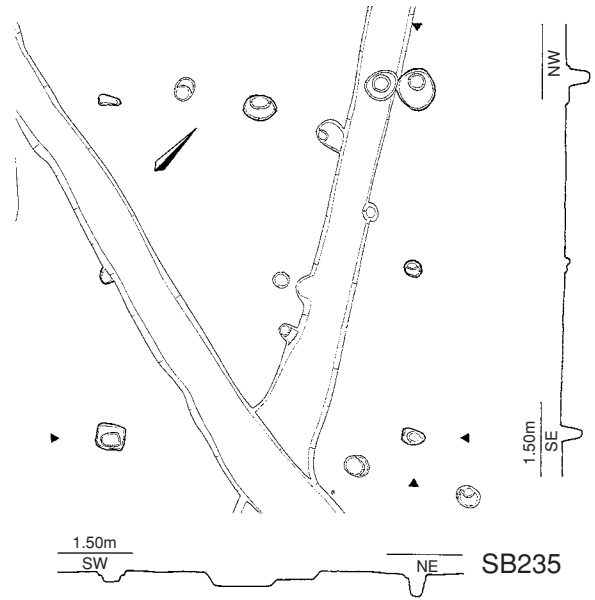
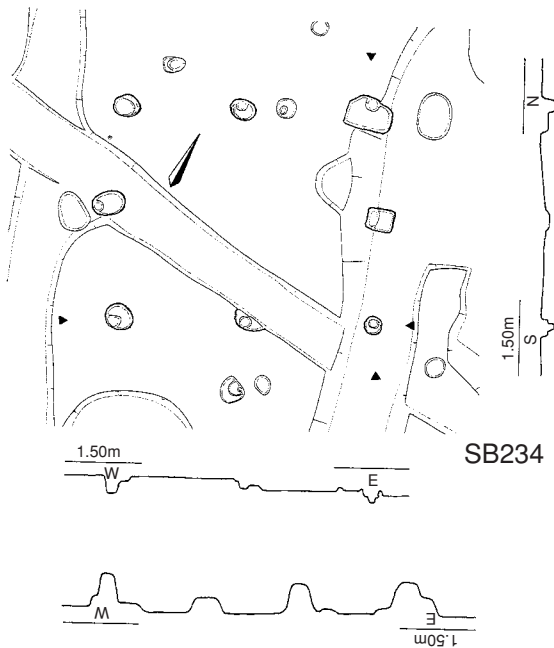
- 1 黒粘土 灰白粘土若干混 炭粒若干含
- 2 黒灰粘土
- 3 暗灰粘土 灰白粘土40%混
- 4 黒灰粘土 まだら状に灰白粘40%混
- 5 暗灰粘土 灰白粘20%混
- 6 灰黄シルト
- 7 淡灰黄粘土
- a 黄灰粘
- b 灰白細砂

第119図 SB226~SB229実測図 (S=1/100)

第3節 掘立柱建物跡



第120図 SB230~SB233実測図 (S=1/100・1/40)



〔第106図の土層名〕

P283

- 1 暗褐色粘質土 地山土少量含む
- 2 暗褐色粘土
- 3 暗褐色粘質土 地山土少量含む
- 4 淡褐色粘質土 地山土少量含む
- 5 地山に4層少量含む
- a 暗オリーブ灰粘

P288

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- a 暗オリーブ灰砂

P282

- 1 暗褐色粘質土 地山粒全体に多く含む
- 2 濁褐色粘質土 地山粒・地山ブロック含む
- 3 暗褐色粘土 かなり暗い、地山土少し含む
- 4 灰黄色粘質土 灰褐粘シミ状に少し混じる
- 5 暗褐色粘質土 かなり暗い、地山粒含む
- 6 オリーブ灰色砂質土 暗灰粘ブロック含む

P281

- 7 暗褐色粘質土 地山ブロック含む、粘質強い
- 8 濁褐色粘土 オリーブ灰砂含む

P280

- 9 暗褐色粘質土 地山土少量含む
- 10 暗褐色粘質土 粘性強くなり暗い、地山粒少量含む
- 11 褐色粘質土 地山土含む
- 12 暗褐色粘質土
- 13 灰黄粘土 褐粘シミ状に含む

P279

- 14 濁暗褐色粘質土
- 15 オリーブ灰色砂質土 暗灰粘ブロック含む
- 16 暗褐色粘土
- 17 淡褐色粘土 地山土多量に含む
- a 灰黄粘
- b オリーブ灰砂

P287

- 1 暗褐色粘質土 炭化物多く含む、砂混じる
- 2 暗褐色粘質土 砂混じる
- 3 暗オリーブ灰色砂質土 4層混じる
- 4 暗褐色粘質土 砂混じる
- 5 暗オリーブ灰色砂質土
- 6 暗褐色砂質土

P286

- 7 暗褐色粘質土 地山小ブロック少し含む
- 8 暗褐色粘質土 かなり暗い
- 9 暗褐色粘土 黒っぽい

P285

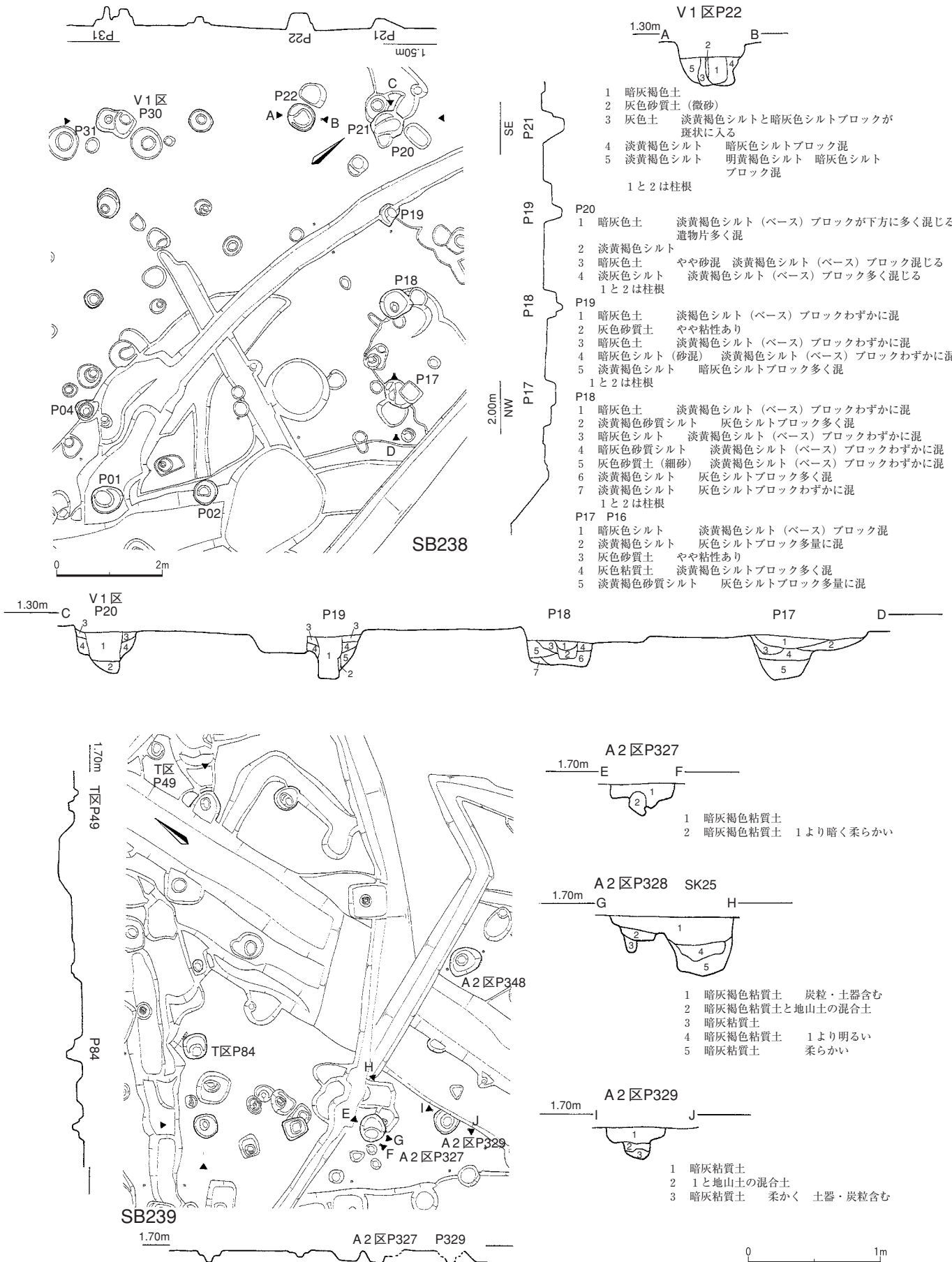
- 10 暗褐色粘質土 地山粒少量含む
- 11 暗褐色粘土
- 12 濁暗褐色粘質土 地山土含む
- 13 暗褐色粘質土
- 14 暗褐色粘土 地山土非常に多く含む

P284

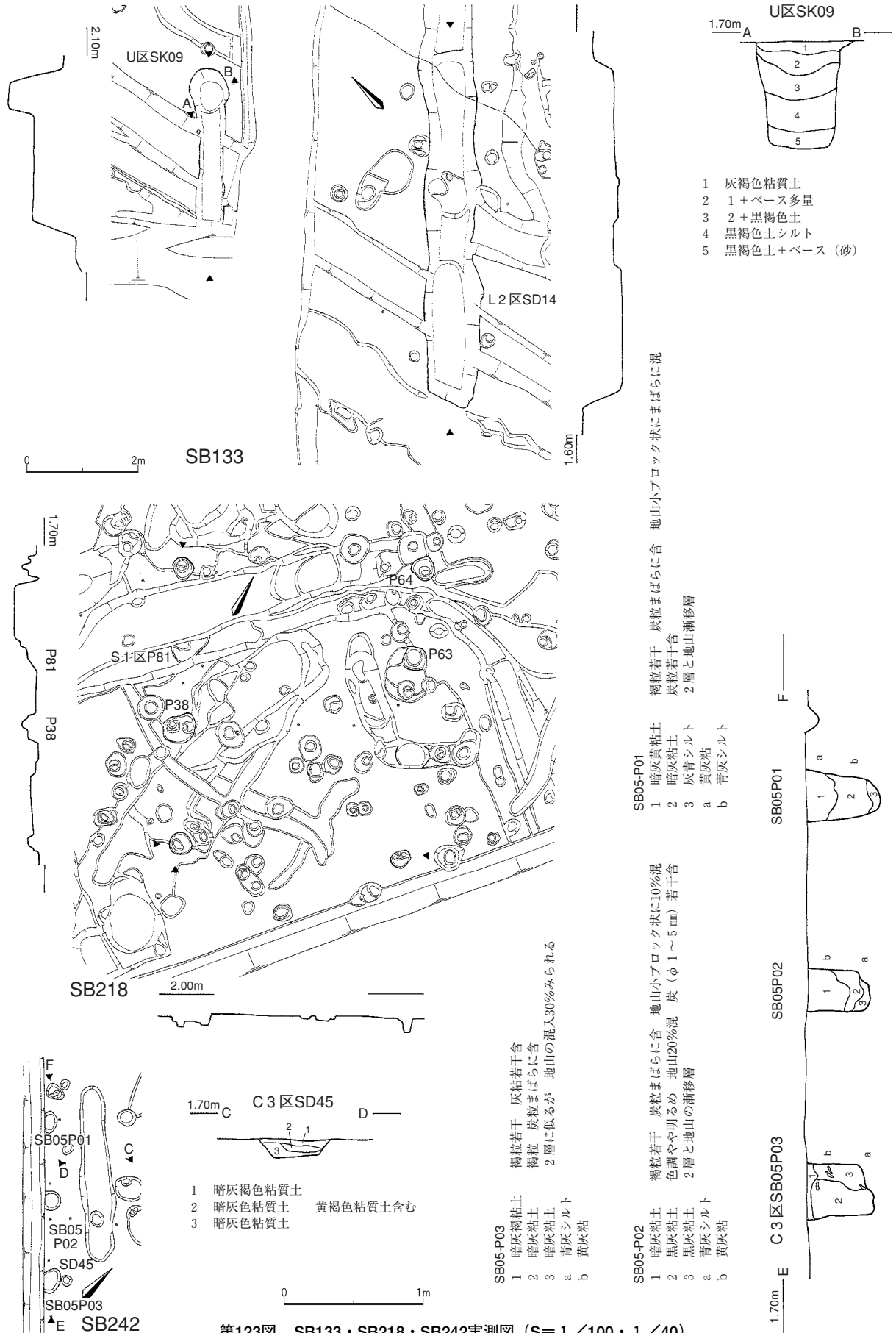
- 15 暗褐色粘質土 地山土少量含む
- 16 暗褐色粘土 地山ブロック含む
- 17 暗褐色粘質土 かなり暗く灰色強い、地山土少量含む
- 18 オリーブ灰色砂質土 褐色粘をシミ状に含む
- 19 暗褐色粘質土 地山土均一に含む
- 20 暗褐色粘土 地山ブロック多く含む
- a 暗オリーブ灰砂

第121図 SB234～SB237実測図 (S=1/100)

第3節 掘立柱建物跡



第122図 SB238・SB239実測図 (S=1/100・1/40)



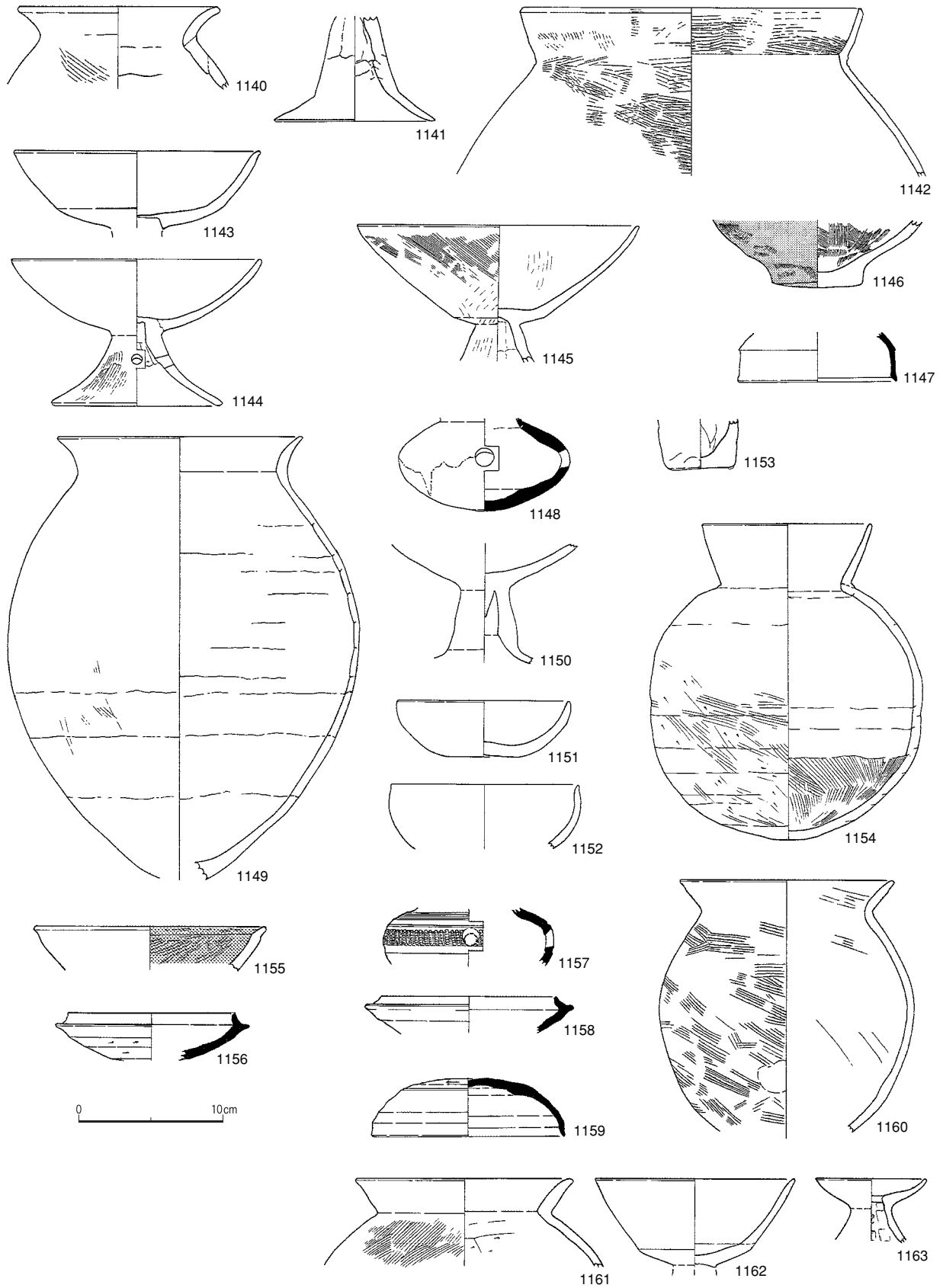
第123図 SB133・SB218・SB242実測図 (S=1/100・1/40)

第3節 掘立柱建物跡

第13表 古墳掘立柱建物跡一覧

報告番号	グリッド	長軸方位	補正方位	長辺 (間)	短辺 (間)	長辺 (cm)	短辺 (cm)	構造	地区	構成遺構	実測遺物
SB104	AE27・28 AF27・28	78E	12W	3	1	420	376	布掘	U	SD04 SD05	なし
SB106	AD18	26W		4	1	735	369	側柱	S1	91 96 112	1140
SB107	AD18	25W		3	1	640	318	側柱	S1	68 97	なし
SB108	AC18・19 AD18・19	21W		2	1	468	335	側柱	S1	99 106 (86)	1141
SB109	AF21	39W		3	1	415	332	側柱	Q2	207 208 SK68	1142
SB110	AE22・AF22	30E		3	1	550	382	側柱	Q2	231 241	なし
SB111	AE23・AF23	31W		2	2	500	421	側柱	Q2	266 (SK92)	1143
SB112	AE22・23	45W		3	1	434	331	側柱	Q2	遺構名なし	なし
SB113	AD22・23 AE22・23	37W		3	1	482	415	側柱十棟持	Q2	279 280 281 282 (283) 284 285 286 287 (288)	1145
SB114	Z17・18	47E	43W	2+	1	440	366	側柱	R2	74 75 76 (SK40)	なし
SB115	Z17・18 AA18	76W	14E	2	1	449	344	側柱	R2	73 84	なし
SB116	Y17・18	41W		3+	1	528	416	側柱	R2	45 48	なし
SB117	W16	41W		3	1	494	361	側柱	S2 C2	18 14b 17 76 53	なし なし
SB118	W16	41W		3	1	482	366	側柱	S2 C2	13 遺構名なし	なし なし
SB119	V16	52W	38E	2	1	508	399	側柱	S2 S3 C2	25 01 SB01P2 SB01P3	なし なし なし
SB120	W16・17 X16・17	53W	37E	3	1	491	374	側柱	C2 R2	SK31 55 (57) SB02P1~P3 SK42 遺構名なし	なし なし
SB121	W・X17	54W	36E	2	1	533	386	側柱	R2	05 06 14	なし
SB122	W17・18 X17・18	38W		2	1	490	371	側柱	R2	15 26	なし
SB123	S26・27	46E	44W	3	1	552	468	布掘	N1	SD37 SD38	なし
SB124	S27・28 T27	46E	44W	2	2	352	308	側柱	N1	13 14	なし
SB125	S28	8W		3	1	420	220	側柱	N1	03 04	なし
SB126	R23・24	47E	43W	3	1	500	428	布掘十棟持	N1 N2	SD33 SD34 遺構名なし	なし なし
SB127	Q24・25 R24・25	33W		3	1	492	436	布掘	N1 N2	SD35 SD36 遺構名なし	W409~411 なし
SB128	Q・R19	65E	25W	2	1	386	289	側柱	W	85 87	なし
SB129	H・I26	50W	30E	3	1	706	441	布掘?	M3 E	47 106 SD34~36 遺構名なし	なし なし
SB130	H23・24	57E	33W	3	1	510	306	側柱	V1	71	なし
SB131	Z25・26	60E	30W	1	1+	316	209	側柱	T	174 175 180	なし
SB132	X15・16 Y15・16	37W		3	1	548	380	側柱	S2	112	なし
SB133	AG29	44E		3	1	550	400	布掘	U L2	SK09 SD14	なし なし
SB134	R27・28 S28	20W		3	1	524	388	側柱十棟持	F N1	20 21 遺構名なし	なし なし
SB135	R28	20W		2	1	500	480	側柱	F	22	なし
SB205	AE29・30 AF29・30	22W		3	2	456	422	側柱	U	(47) 48 49 50 53 56 (58) 76	なし
SB206	AK19・20 AL19・20	31W		3	2	460	430	側柱	A4	遺構名なし	なし
SB207	AK・AL20	34W		3	2	459	408	総柱	A4	159 170 174 (235) 249 250 252 254 255	なし
SB208	AK20	51W	39E	2+	2	346	328	総柱	A4	157 160 161 169 (235) 246 247 248 249	なし
SB209	AJ19・20 AK19	55E	35W	2	1+	400	172	総柱	Q1	17	なし
SB210	AJ19・20	57E	33W	3	3+	540	452	総柱	Q1	20 26 30 31 32	1147
SB211	AH20・21 AI20・21	40E		3	3	508	500	側柱	Q1	96 101 102 104 105 106 110 125 126 198	1149~1152・S127
SB212	AG21・22 AH21・22	53E	37W	2	2	486	431	側柱	Q2	178 186 193 SK67 (186)	U484
SB213	AE20・21 AF20・21	39W		2	2	427	405	側柱	Q2	126 139 158 176 (210) 211 264	なし
SB214	AF21	54E	36W	2	2	332	326	側柱	Q2	205 206 SK68 SK79	1142
SB215	AE・AF17	48W	42E	3	2	592	457	側柱	C3 S1	SB04P1~P6 遺構名なし	なし
SB216	AE・AF17	46W	44E	3	1+	514	127	総柱	C3	SB03P1~P8	なし
SB217	AD17・18 AE17・18	52E	38W	3	2	490	468	側柱	S1	40 73 109	なし
SB218	AD18 AE18・19	27W		3	1	496	428	側柱	S1	38 63 64 81	1153
SB219	AC・AD21・22	47E	43W	2	2	497	471	側柱	Q2	319 320 326 340 345	なし
SB220	AE21・22	34W		2	2	371	326	側柱	Q2	遺構名なし	なし
SB221	AE22	54E	36W	2	2	352	299	総柱?	Q2	遺構名なし	なし
SB222	AF22	51E	39W	2	2	458	400	側柱	Q2	222 223 225 227 228 230	なし
SB223	AH23	60E	30W	4	3+	613	393	側柱	A3	104 (106) 72 71 69 (79)	なし
SB224	AG23	49E	41W	1	2+	482	296	側柱	A3	76 63	なし
SB225	AE22・23	67W	23E	2	2	434	389	側柱	Q2	289	なし
SB226	AE23	54E	36W	2	2	376	346	側柱	Q2	遺構名なし	なし
SB227	AA26・27	49W	41E	3	4	484	449	側柱	T	87 100 117 118 119 (120) 121	なし
SB228	Y・Z27	49E	41W	1+	1+	208	200	不明	T	246	なし
SB229	Z20	18W		2	1	354	334	側柱	R2	63 64 65 66	4419
SB230	V・W15	44E		3	1+	565	393	側柱十棟持?	S2	(28) 47 SK18 58 52 (53)	1146・1154
SB231	W15・16 X15・16	38W		3	3	499	490	側柱十棟持?	S2 C2	17 23 56 (58)	なし
SB232	W・X17	32W		2	1	348	344	側柱	R2	11 13 22	なし
SB233	S・T19	60E	30W	2	2	394	369	側柱	W	84	なし
SB234	R・S19	63E	27W	2	2	327	268	側柱	W	遺構名なし	なし
SB235	R18・19 S18・19	45W		2	2	435	393	側柱	W	遺構名なし	なし
SB236	R21・22	82E	8W	3	2	389	377	総柱	G	遺構名なし	なし
SB237	G・H25	52W	38E	3	1	521	379	側柱	V1	43 45	なし
SB238	F26 G25・26	54W	36E	4	3	728	541	側柱	V1	01 02 04 16 (17) 18 19 21 (20) 22 31 (30)	なし
SB239	AA27 AB26・27	52E	38W	4	3	610	460	側柱	T A2	49 84 327 329 348	なし
SB240	AD17・18 AE17・18	45W		3	2	570	510	側柱	S1	151 72	なし
SB241	AK・AL20	29W		2	2	360	320	側柱	A4	170 254	なし
SB242	AF17	47W	43E	2	—	285	—	柱列	C3	SB05P01~P03	なし

※1 方位の単位は°である。長軸方位が45E/45Wを超えるものは、90°転回した補正方位を算出した。
 ※2 長辺(間)・短辺(間)ではさらに伸びて大きくなる可能性があるものは「+」を付けた。
 ※3 構成遺構で特に記号がないものはP、太字は実測遺物あり 斜体は柱あり 下線は礎板あり、()は関連。



第124図 掘立柱建物跡出土土器実測図 (S=1/4)

第4節 大 溝 群

大溝群の概念（第129図全体図、第14表）

畝田西遺跡群では溝状遺構が多数検出されているが、その中でも弥生・古墳時代において複数の調査区にまたがるような特に延長が大きいものに対して「溝群」という名称を使用する。規模が大きくて水路的なものが大溝群（D）、規模が小さくて区画的なものが小溝群（SC）である。大溝群については、調査区中央部のB2区付近で南北のつながりが不明確になるので、それを境界として以南のものをDS、以北のものをDNと表記している。調査区全域で16群を抽出しており、第3章では弥生時代のものとして1群、第4章本節では古墳前期のものとして5群を報告する。遺構の性質として、存続が比較的長期間に及ぶため、複数時期にまたがるものも少なくない。本節の溝群でも弥生時代に遡る遺物や、古墳中後期に降る遺物が少量出土しており、あわせて掲載している。

DS1（遺構：第125・126図、図版62 遺物：第132・133・169図、図版76・77・87）

調査区南部で、南東－北西方向に走り、南西側は河川跡A1区SD01（土層A 層12～14）を切り込み、北西側は小刻みに蛇行して古墳中後期のDS7・8と重なる。A1区SD01の時期は不明、DS7・8との前後関係も不明確である。また、古墳中後期のDS6とは遺構自体が共通しているが、A1区SD04（土層A 層8～10）やT区SD14（土層B 層4～8）で見られる古い段階の溝が機能しているものと解釈した。ただし、遺物の出土状況では検証できていない。北西端のO2区SD07では（第4分冊第30図）では新古が区分できなくなっている。各溝では溝底のレベル差は顕著ではない。基本的に下位は砂層ないしシルト層の堆積が観察される。

遺物は各溝から土器が出土している。弥生後期の甕（1165～1167・1188）も少量含むが、その他の土器は概ね古墳前期1～2期に位置付けられる。A1区SD04では底面から少し浮いた出土状況が記録されており、古墳前期2期が中心となる。T区SD14ではそれよりやや古いものを中心とする。O2区SD07では図化された土器が3点のみと少なくなっており、第4分冊（1737・1739・1742）に掲載している。その他の遺物では有孔土玉（E47）が出土している。

DS2（遺構：第125図、図版62 遺物：第133図、図版77）

調査区南西部で、南東－北西方向に走る。直線的な溝が検出されており、両端が古墳中後期のDS8と重なる。土層（第4分冊第42図）をみる限り、南端はDS8により失われている。また、古墳中後期のDS3とは遺構自体が共通しているが、古い段階の規模が大きい溝（土層C 層9～13・23～29）が本遺構に相当し、なかば埋まった時点で掘削されたひとまわり小さい溝（層22）がDS3に相当する。下位は砂層ないしシルト層の堆積が観察される。

遺物は各溝から土器が出土しており、概ね古墳前期1～2期に位置付けられる。

DN2（遺構：第127図、図版62 遺物：第134図、図版78）

調査区西部で、南東－北西方向に走る。北西延長方向では金沢市埋蔵文化財センターの平成10年度調査区で検出されているSD02につながるものと推定できる。北西半では古墳中後期のDN1と重なるが、土層C－D間とE－F間では前後関係が逆になっており、原因は不明である。一部では古墳中後期のDN6と重なり、土層A－B間のおり本遺構が削られている。南東半では時期不明のB2区SD18を切

り込み、古代のS D15、中世のS D17に切り込まれる。南東端は古墳中後期のD S 8と重なると予想されるが、不明確である。各溝では溝底のレベル差は顕著ではない。B 2区の土層I - J間を除いては、下位に砂層の堆積が観察される。

遺物は各溝から土器が出土しているが、少ない。概ね古墳前期3～4期に位置付けられる。

D N 3 (遺構：第128図、図版63 遺物：第134図、図版78)

調査区西部で、南東-北西方向に走る。北西端は古代のB 3区S D31に削られて失われている。南東半では古墳中後期D N 4と重なり、土層G - H間のとおり、本遺構が先行する。土層E - F間では時期不明であるがD 2区S D09が本遺構に先行することが確認できる。南東端は古墳中後期D S 8と重なり、不明確となる。各溝では溝底のレベル差は顕著ではない。基本的に粘土ないし粘質土が堆積しており、確実な砂層は見られない。

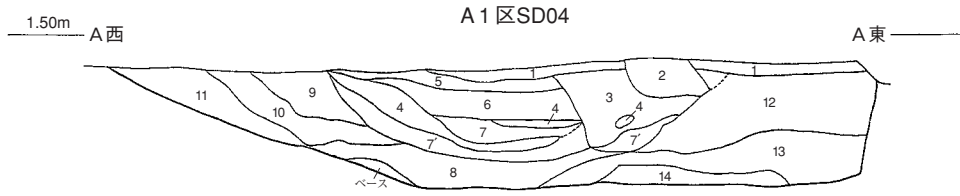
遺物は各溝から土器が出土している。概ね古墳前期2～3期に位置付けられる。

D N 9 (遺構：第130・131図、図版63 遺物：第135～140・169図、図版79～83・87)

調査区北部で、蛇行しながら東西方向に走り、少しずつ北西・南東に偏向していく。東半のM 1・M 3・N 2区では後出する遺構との重なりが大きく、現地調査では写真測量後に掘削して手実測で図化記録するという、実質的に遺構面2面の調査と同等の行程を要した。よって、この部分は基本的には写真測量平面図には反映されていない。西半のW区はこの逆行程であり、後出する遺構を手実測で図化記録した後で掘削し、写真測量を行っている。西端は古墳中後期の溝群D N 8と重なっているが、W区川跡4区からまとまった量の古墳前期土器が出土しており、土層では確認できないが、D N 8成立前はそのまま北西へ伸びていたものと推定した。ただし、D N 8の別地点でも古墳前期土器が定量出土しており、より古い時期から南北方向の流路が存在した可能性は否定しない。D N 9自体も弥生時代と古墳前期にまたがる遺構であり、前章でも弥生時代に関係する内容を報告している。各溝は最低でも新古2条の重なりを土層で確認することができ、東から順に述べると、E区では北、M 1区では南、M 3区では南半が西、北半が東、F区では不明確だが、N 2区では南、W区では北側へ遷移することが判断できる。ただし、弥生時代・古墳前期の区分と対応するかは検証できない。堆積は新古の溝ともに下位に砂ないしシルト層を観察できる。各溝では溝底のレベル差は顕著ではない。

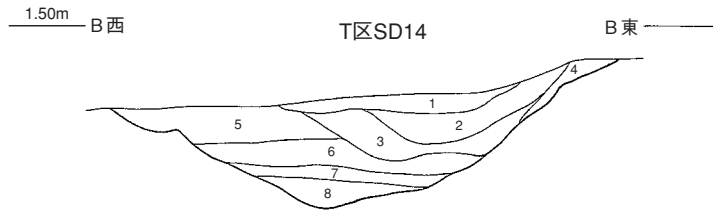
遺物は、各溝から土器が多く出土している。古墳前期全般に及ぶかなりの時間幅を持つことが特徴である。M 3区とF区では周辺からの出土土器も関連するものとしてまとめて掲載している。M 3区の遺物取り上げ層名と第38図土層G - H間との対応は、黒：層2～6、灰1：層7、茶：層8・9、灰2：層9・10、となる。M 3区では弥生時代の土器(1229～1232)、古墳中後期の土器(1244～1246)が混在するが、黒と茶に古墳前期土器のまとまりがある。前章に掲載した遺物と対照すると灰2はほぼ弥生中期に限定できるが、その他は古墳前期まで混在している。F区は弥生時代の土器(1268)、古墳中期の土器(1269)が混在するが、古墳前期の土器が比較的まとまって得られている。N 2区では古墳中後期の土器が多く図化されている。W区では上層を重機掘削した関係上、取り上げは基本的に全て「下層」で行われており、平面的な位置は任意の1～4区に大区分し、4区は任意で左岸・中岸・右岸の東西軸と、北部・中部・南部の南北軸を掛け合わせた9地区に小区分している。全域で古墳中後期土器(1288～1290・1293～1296・1298～1303・1320・1321・1329・1333～1335・1339・1340など)の混在が著しく、D N 8の影響が大きい。この他、有孔土玉(E35～37・56・58・60・61)、第4分冊掲載の木製品(W105・151・159・181・201・205・241・268・322・373・394・408)、土製品(E81・90・94)、土製玉(D22)、石製品(S124)、滑石製品(K26)が出土している。

第4節 大溝群



A1区SD04

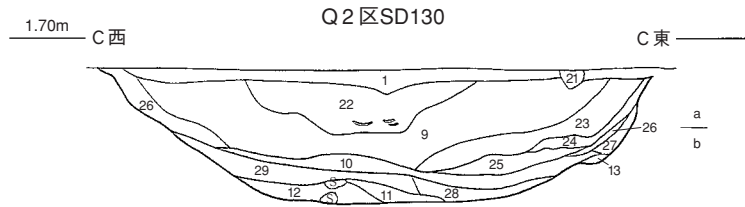
- 1 暗赤褐色土 再堆積土
 - 2 暗赤褐色土 灰色がかった第1層 砂が混入したか
 - 3 暗褐色粘質土 SD04B主覆土 遺物多量 大粒の炭含む
 - 4 ベース・ブロック
 - 5 暗褐色粘質土 第3層に似るが黒味を帯びる
 - 6 暗(灰)褐色粘質土 1~3mmの炭粒を全域に含む
 - 7 暗褐色粘質土 ベース粒を全域に含む 第3層に近似する層
 - 8 暗灰褐色弱シルト 鉄分の沈着が見られる
 - 9 暗赤褐色土
 - 10 暗赤褐色土 やや灰がかかる シルト気味
 - 11 灰(黄)褐色土 左岸部肩に広がる土 再堆積(ASD001覆土?)か?
 - 12 赤褐色土 SD01覆土
 - 13 赤褐色土 鉄分粒が集中 SD01覆土
 - 14 赤褐色土 鉄分が沈着するガリガリしない ASD001覆土
- 12~14はSD01の上層付近土
SD04Aを再度掘り直してSD04Bが形成されたか?



T区SD14

T区SD14

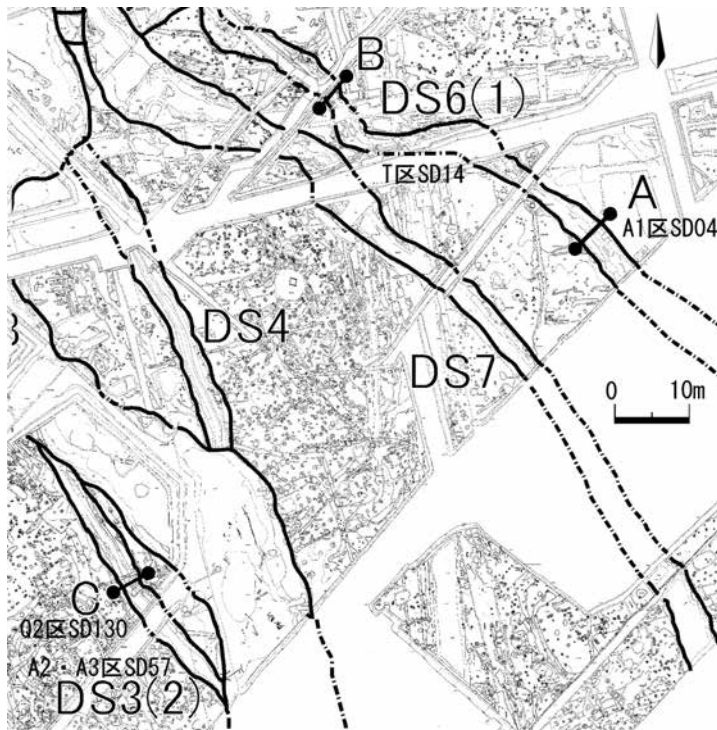
- 1 暗褐色土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗黄灰色砂質土
- 5 灰褐色土
- 6 灰色粘質土
- 7 灰色粘質土 シルト混
- 8 灰色中砂 シルト・灰粘混 遺物含む



Q2区SD130

Q2区SD130

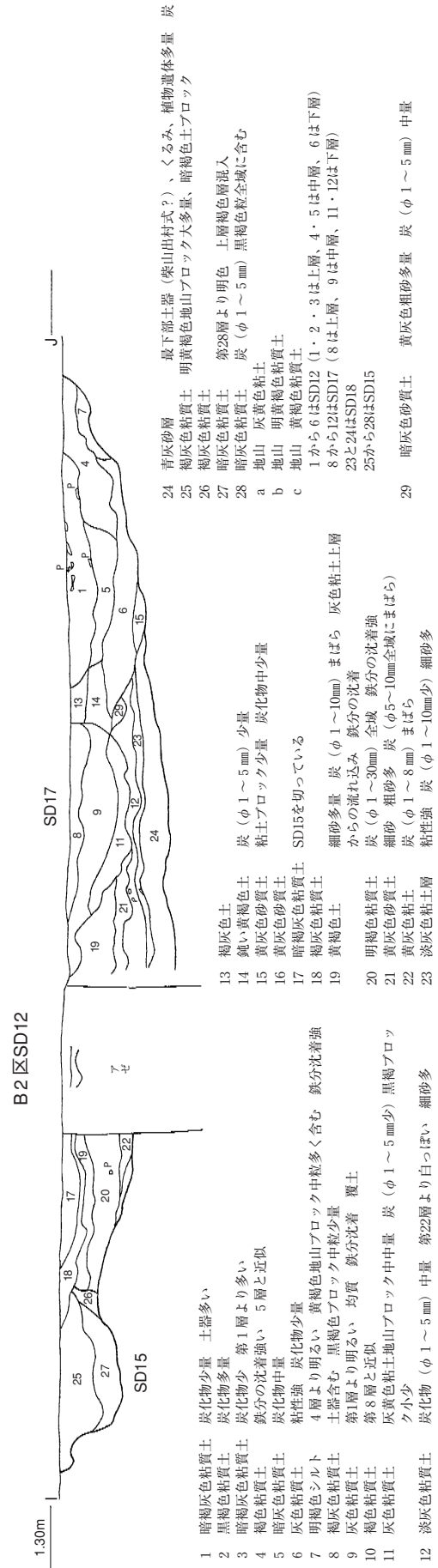
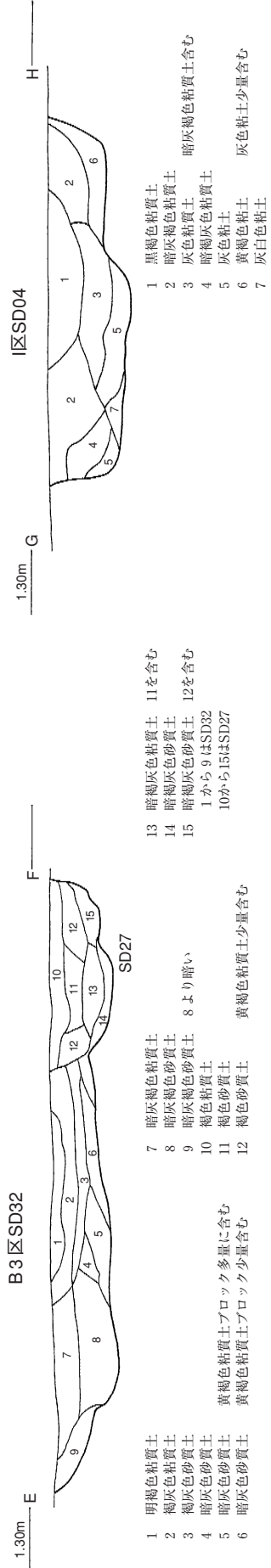
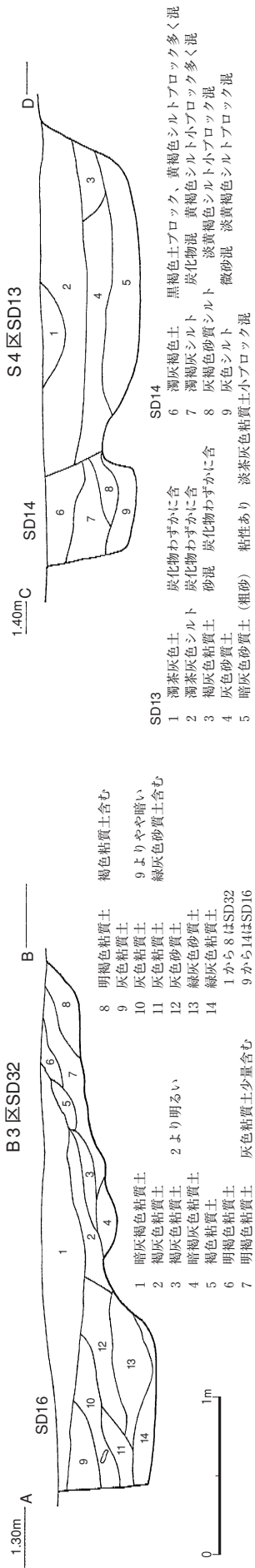
- 1 暗灰褐色粘質土
- 9 暗灰褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土 南壁6層より灰色強い
- 11 褐色粘質土 荒砂混じる
- 12 褐色粘質土 荒砂非常に多く混じる、石混じる
- 13 褐色粘質土 細砂非常に多く混じる
- 21 褐色粘質土
- 22 暗褐色粘質土 かなり暗い、土器多く含む、炭化物含む
- 23 明褐色粘質土
- 24 暗褐色粘質土 黒っぽい
- 25 明褐色粘質土 23と類似
- 26 褐色粘質土 灰黄粘地山ブロック多く含む
- 27 灰色粘土 細砂含む
- 28 暗褐色粘土 オリーブ灰粘混じる
- 29 褐色粘質土 砂混じる、地山粒(灰黄粘)混じる
- a 灰黄粘
- b オリーブ灰砂
- 22はSD130b



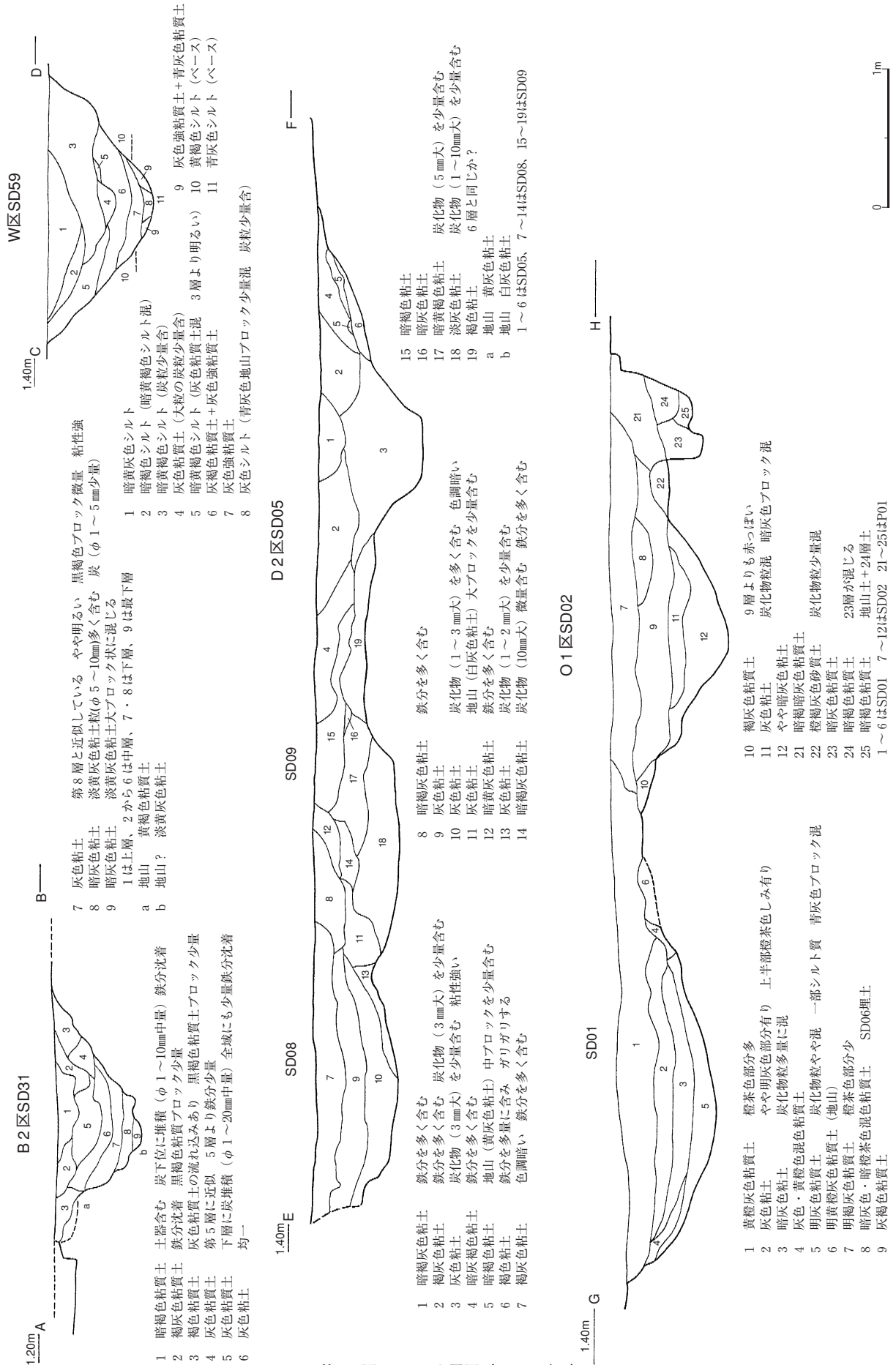
第125図 DS1・DS2土層図 (S=1/40・1/1,000)



第126図 DS1 (A1区SD04) 遺物散布図 (S=1/100)



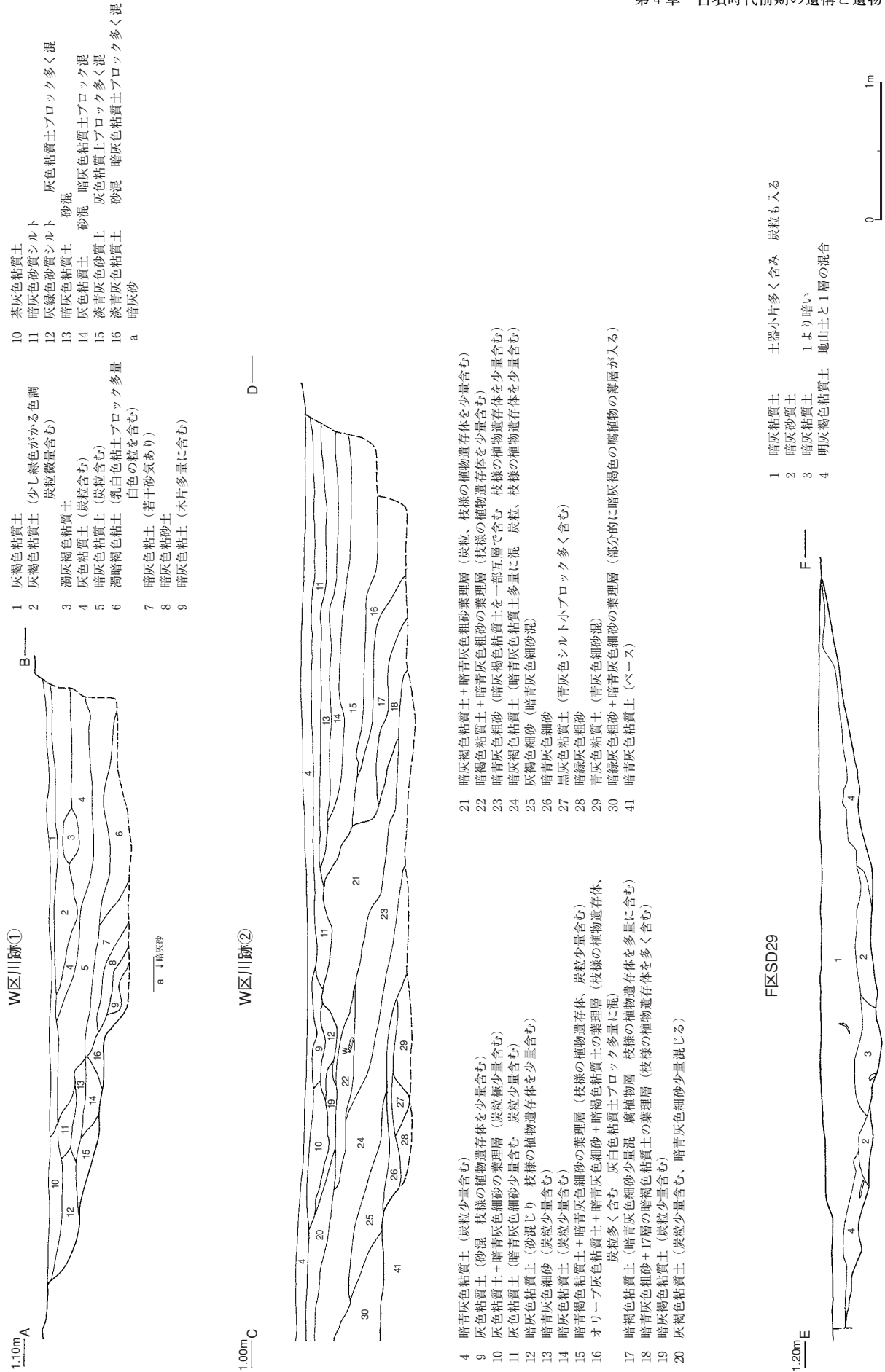
第127図 DN 2 土層図 (S=1/40)



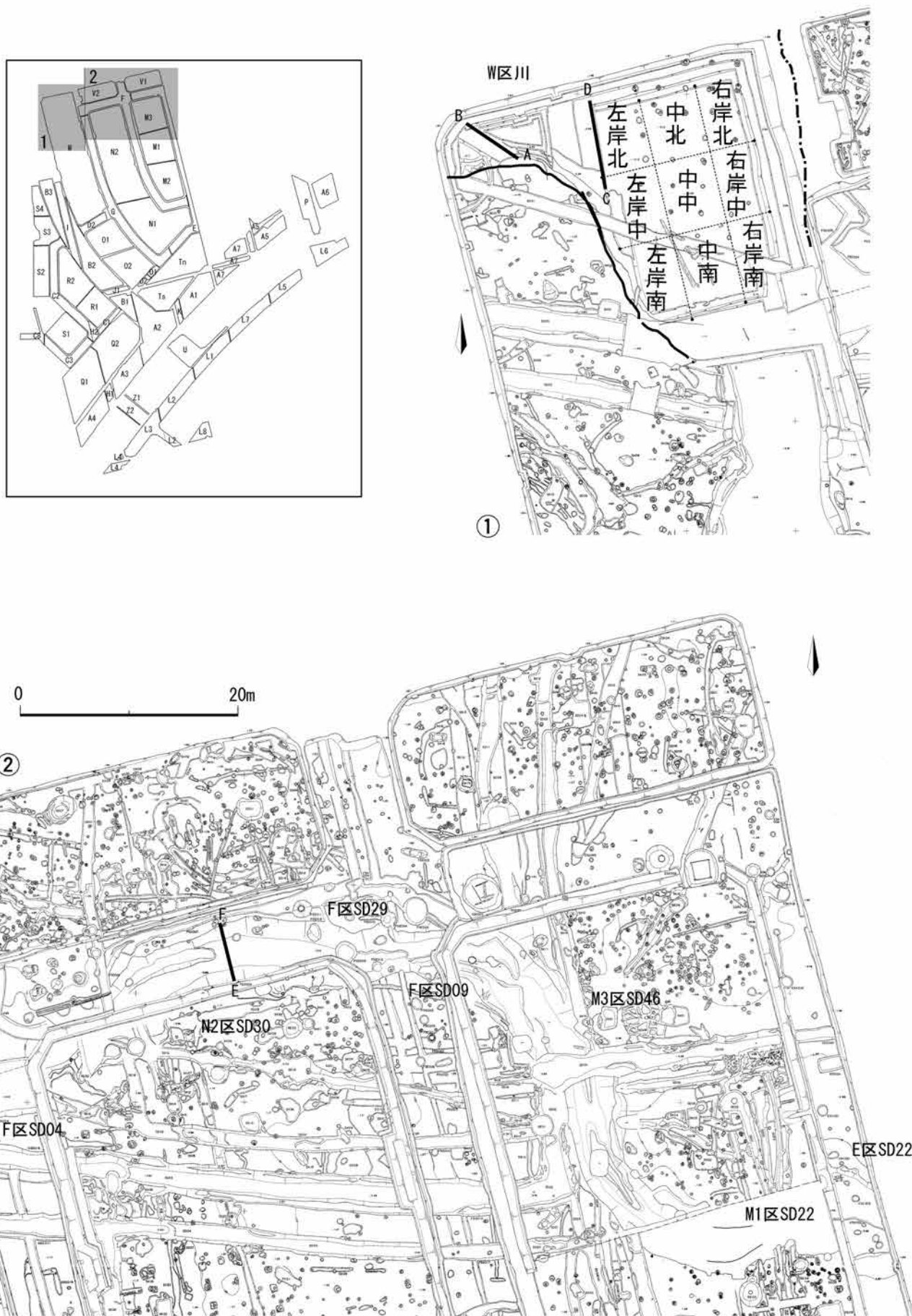
第128図 DN 3 土層図 (S=1/40)



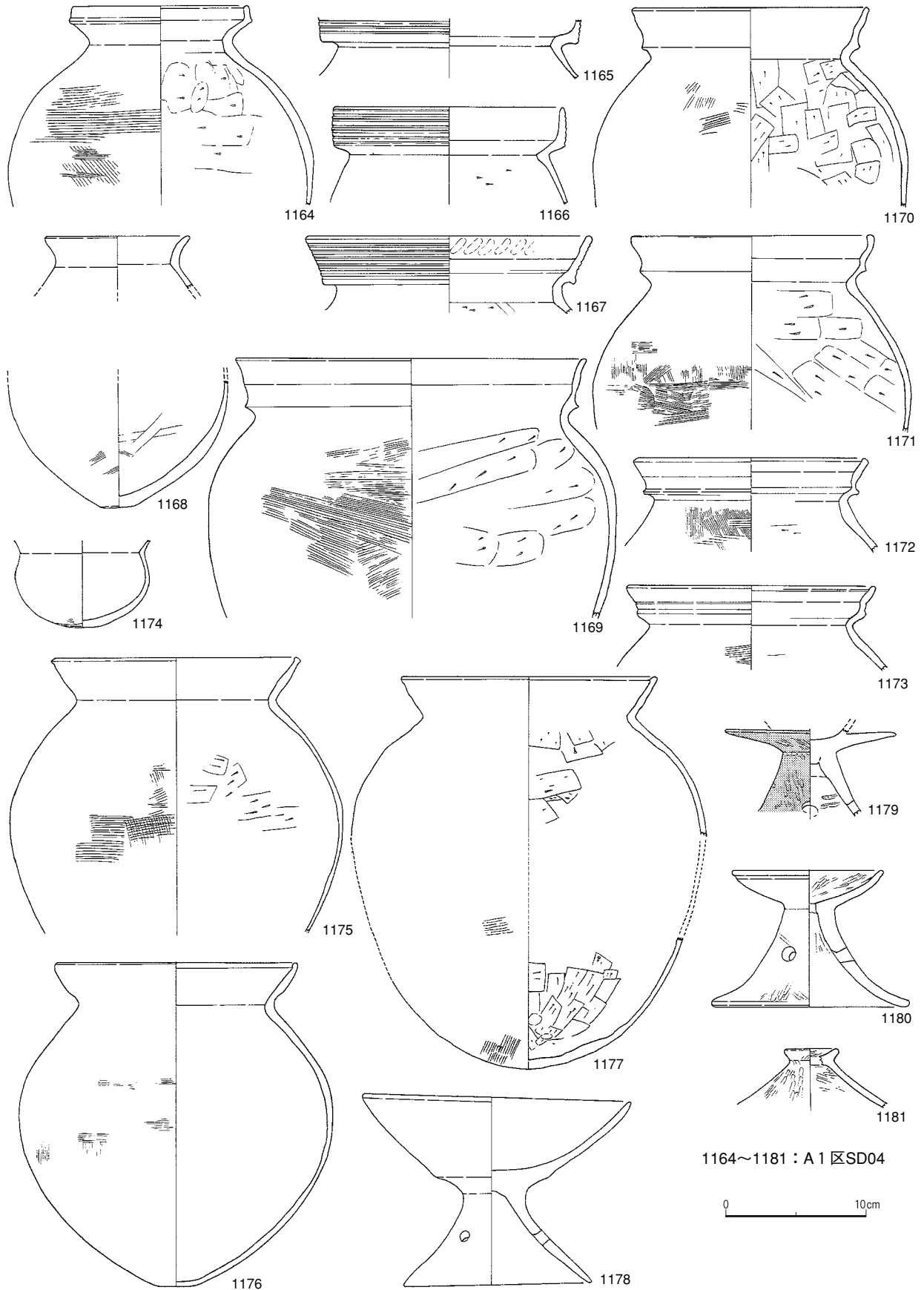
第129図 DN 2・DN 3 案内図 (S= 1 / 500・1 / 2,500)



第130図 DN 9土層図 (S II 1 / 40)

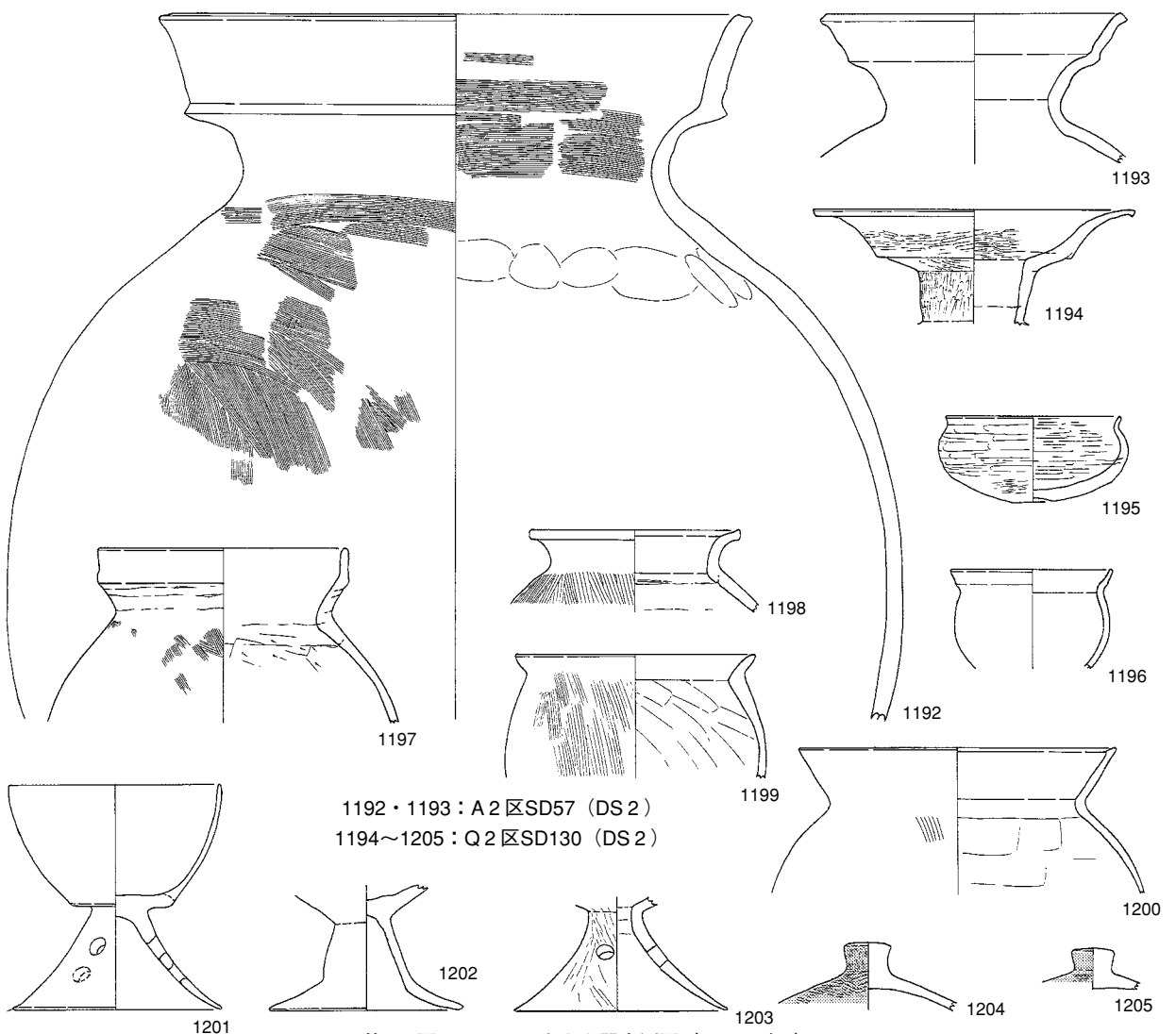
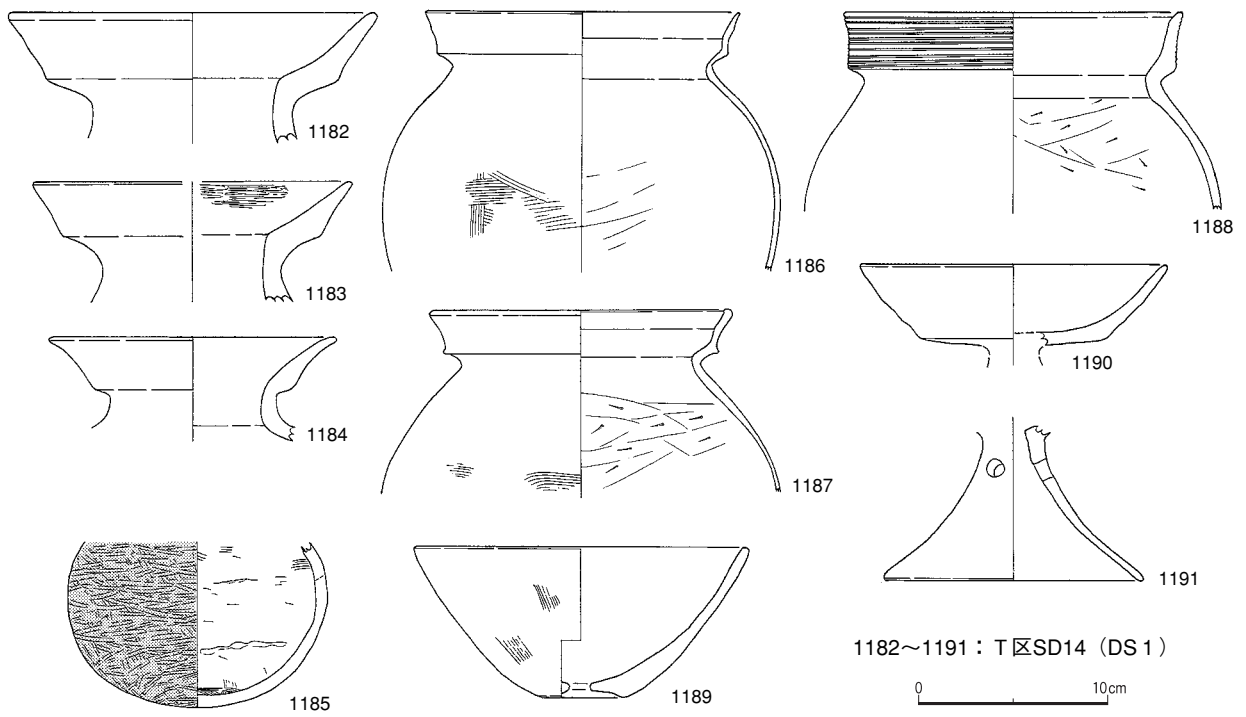


第131図 DN9案内図 (S=1/500)

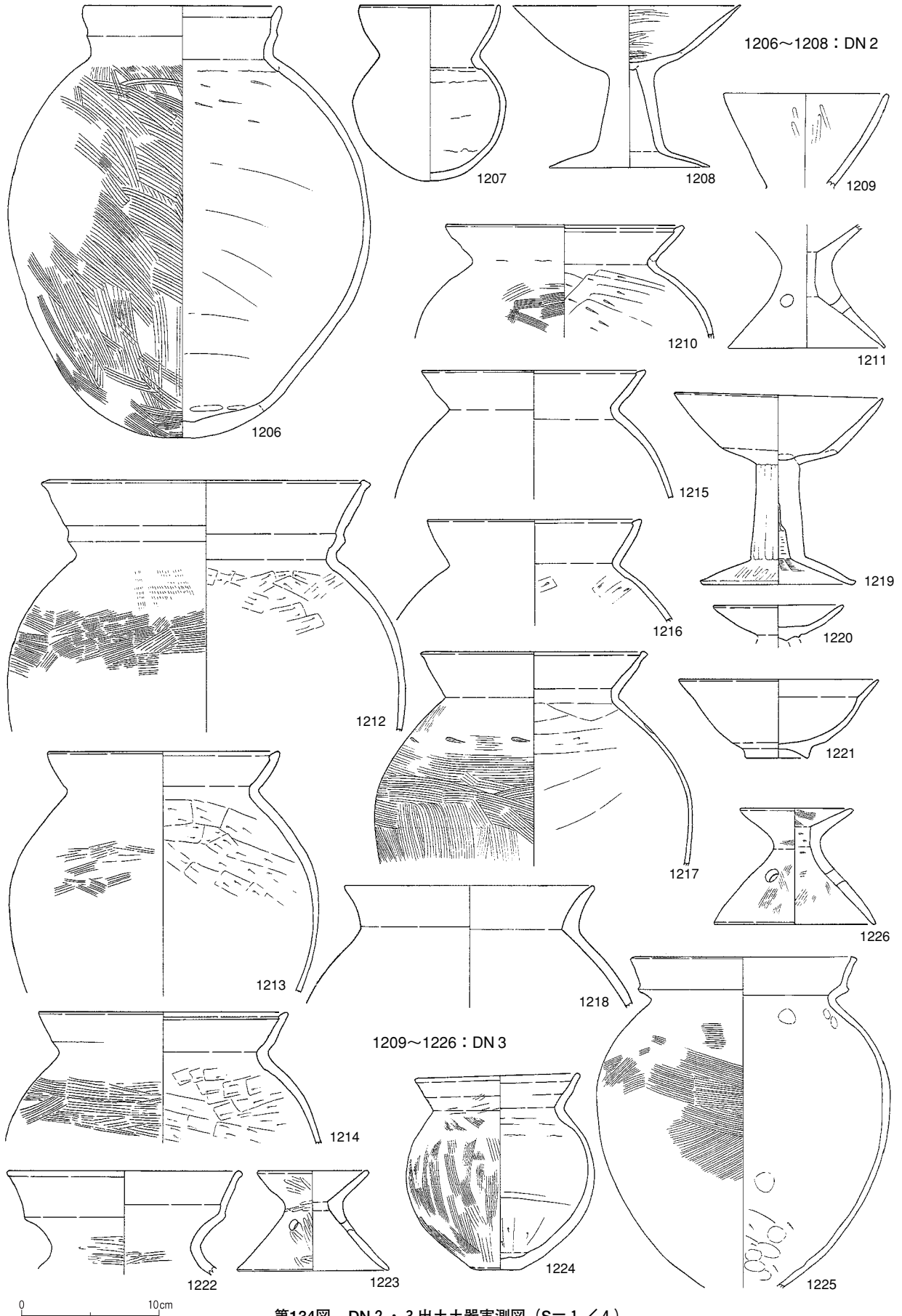


第132図 DS1出土土器実測図1 (S=1/4)

第4節 大溝群

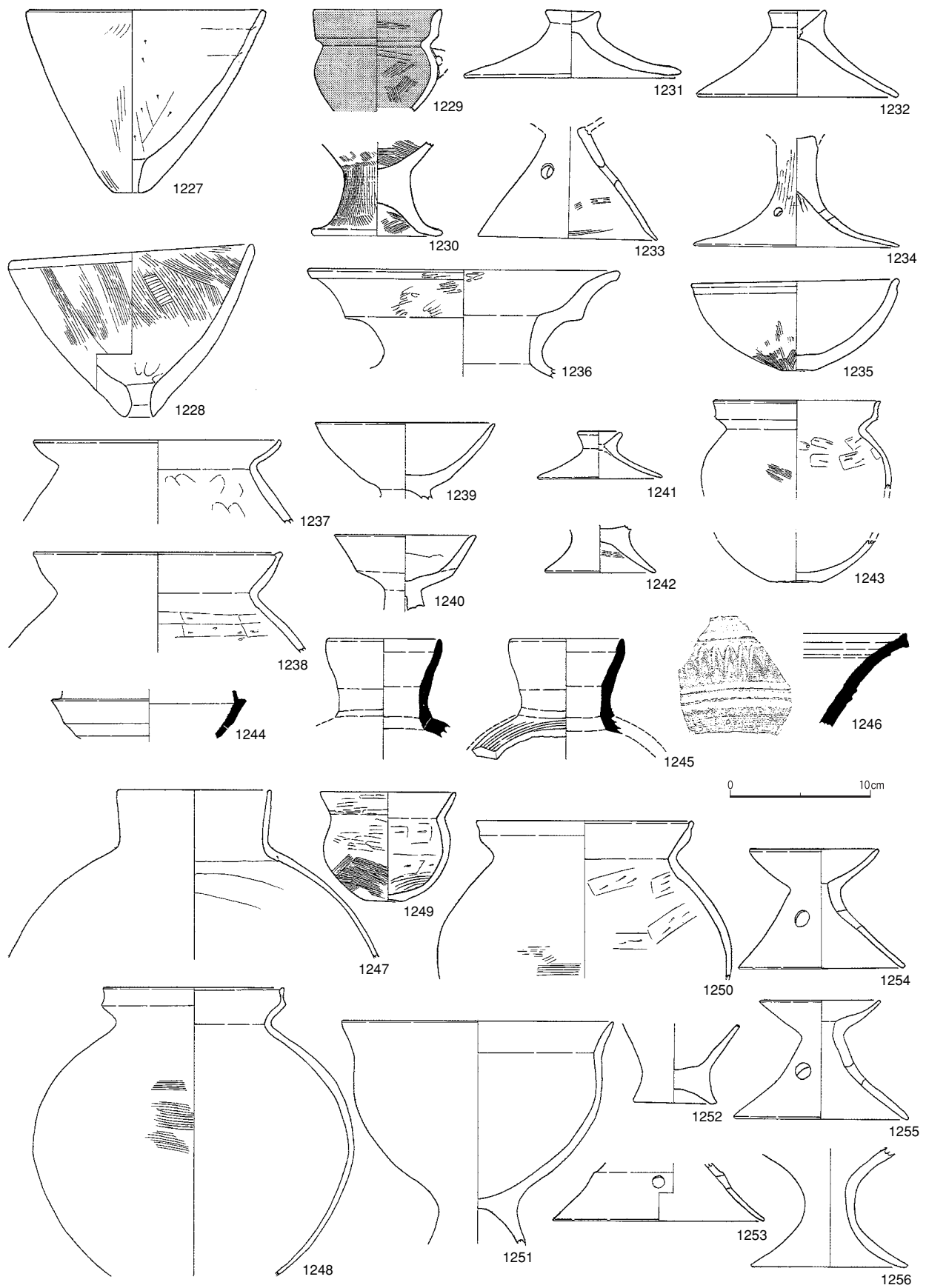


第133図 DS1・2出土土器実測図 (S=1/4)



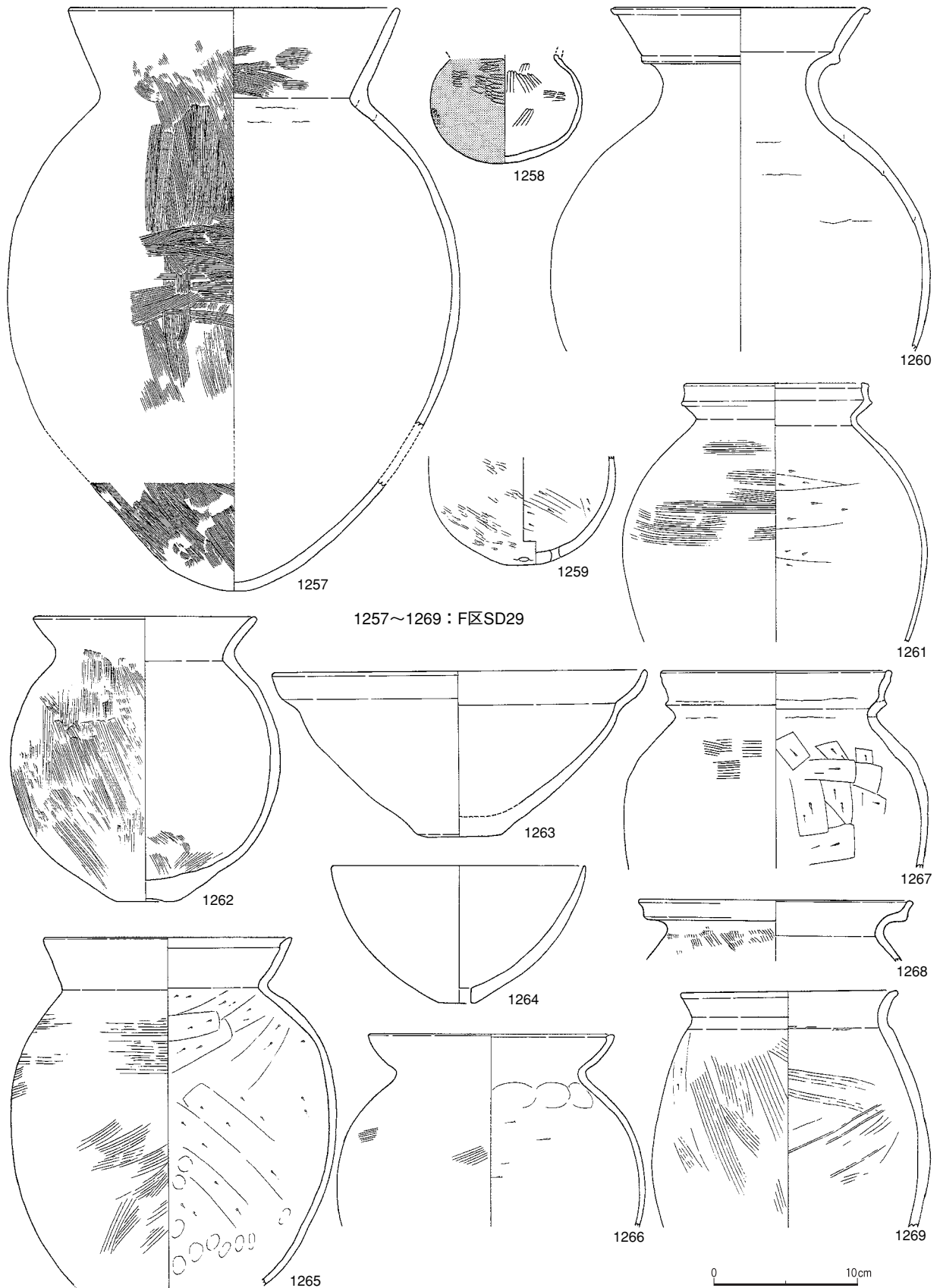
第134図 DN 2・3出土土器実測図 (S=1/4)

第4節 大溝群

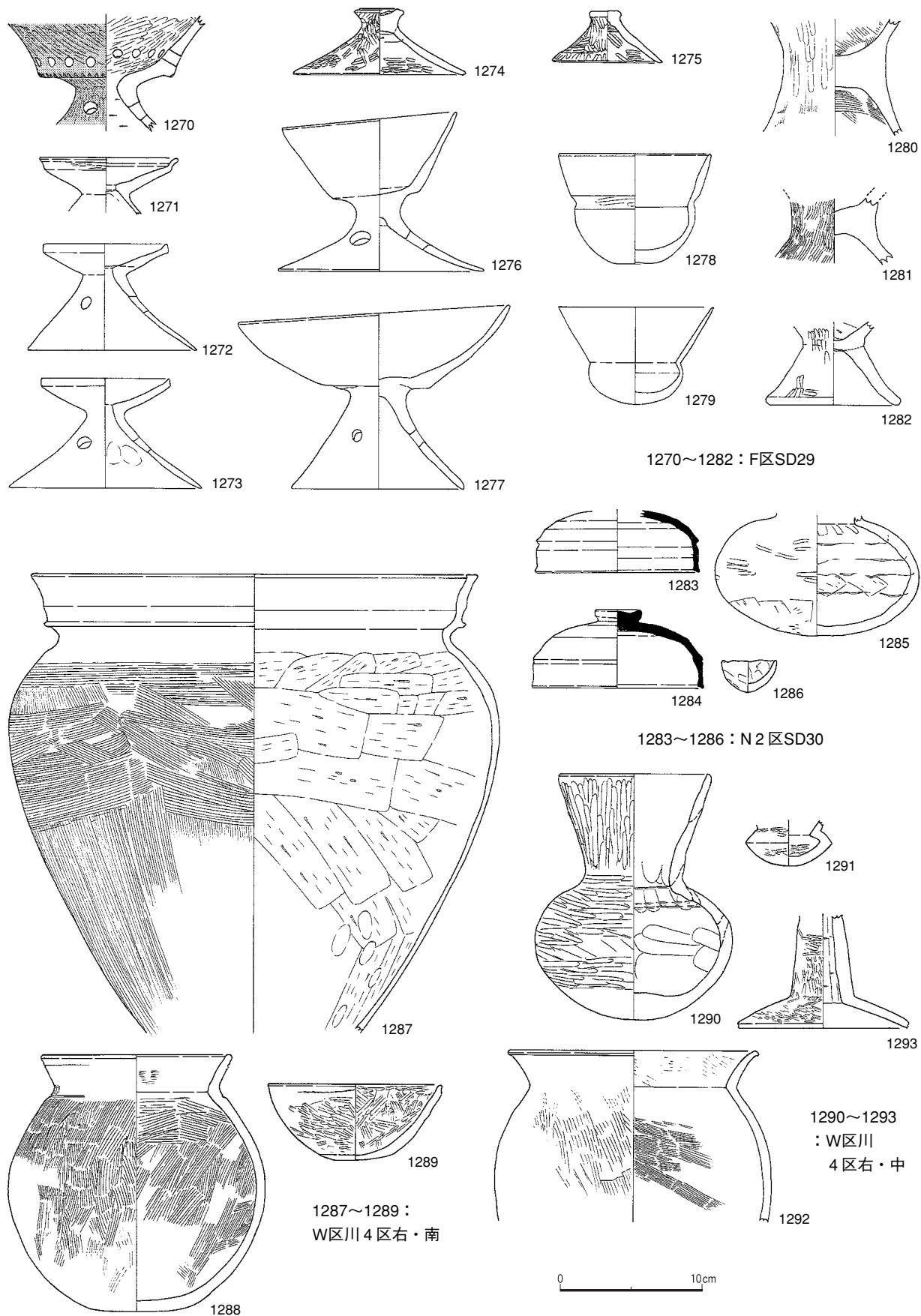


1227~1256 : E区、M3区、F区のSD29以外

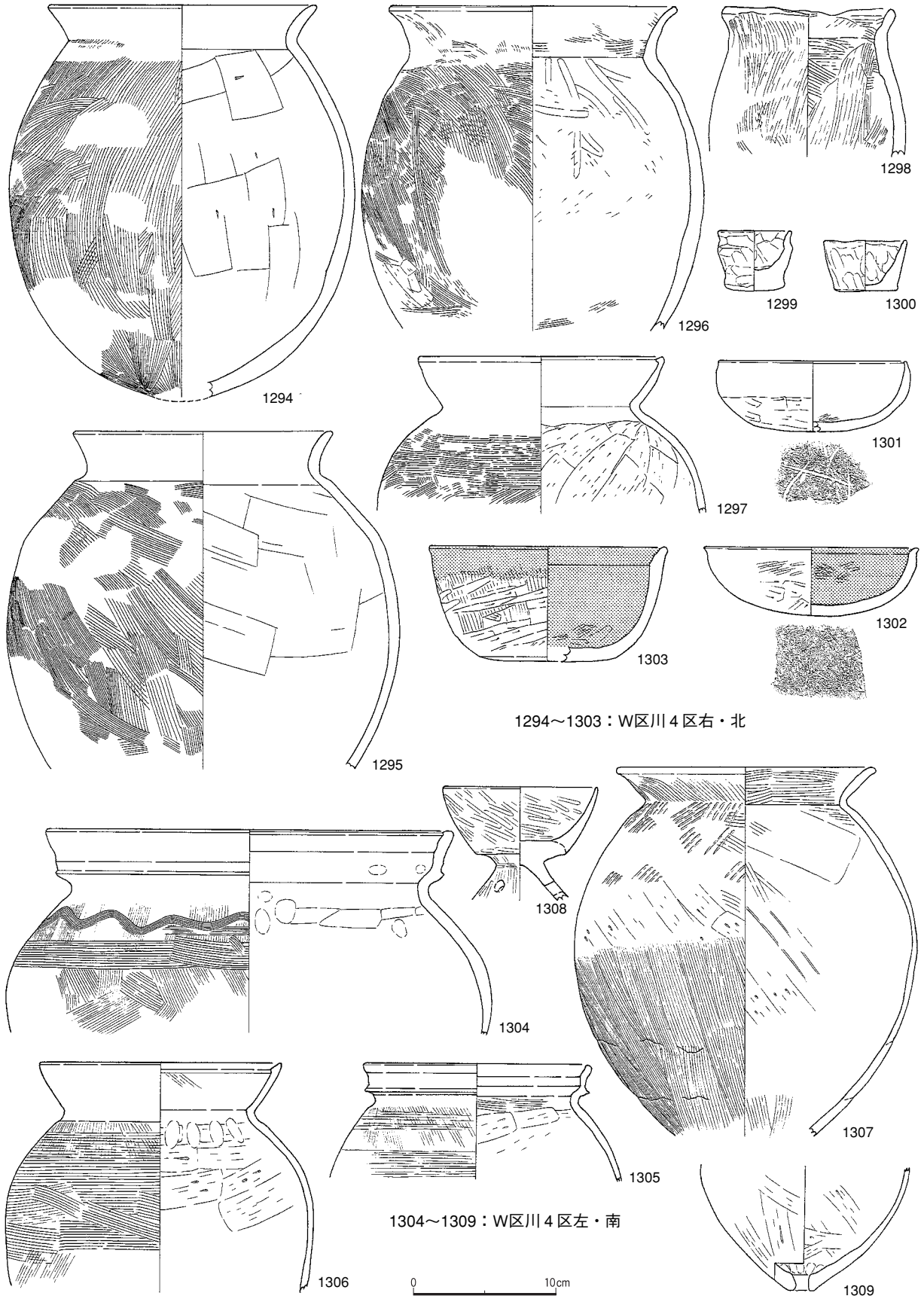
第135図 DN9出土土器実測図1 (S=1/4)



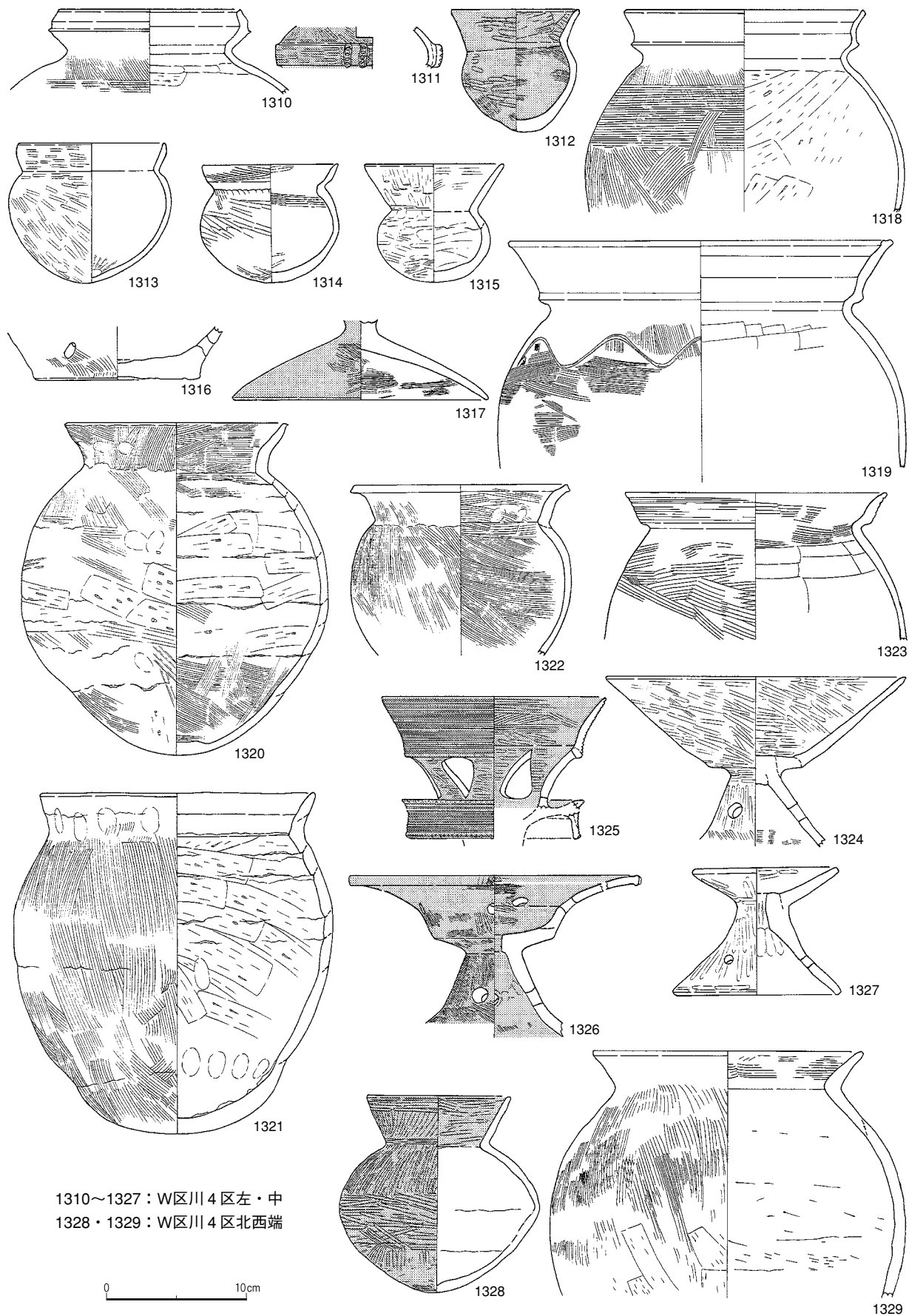
第136図 DN 9 出土土器実測図 2 (S=1/4)



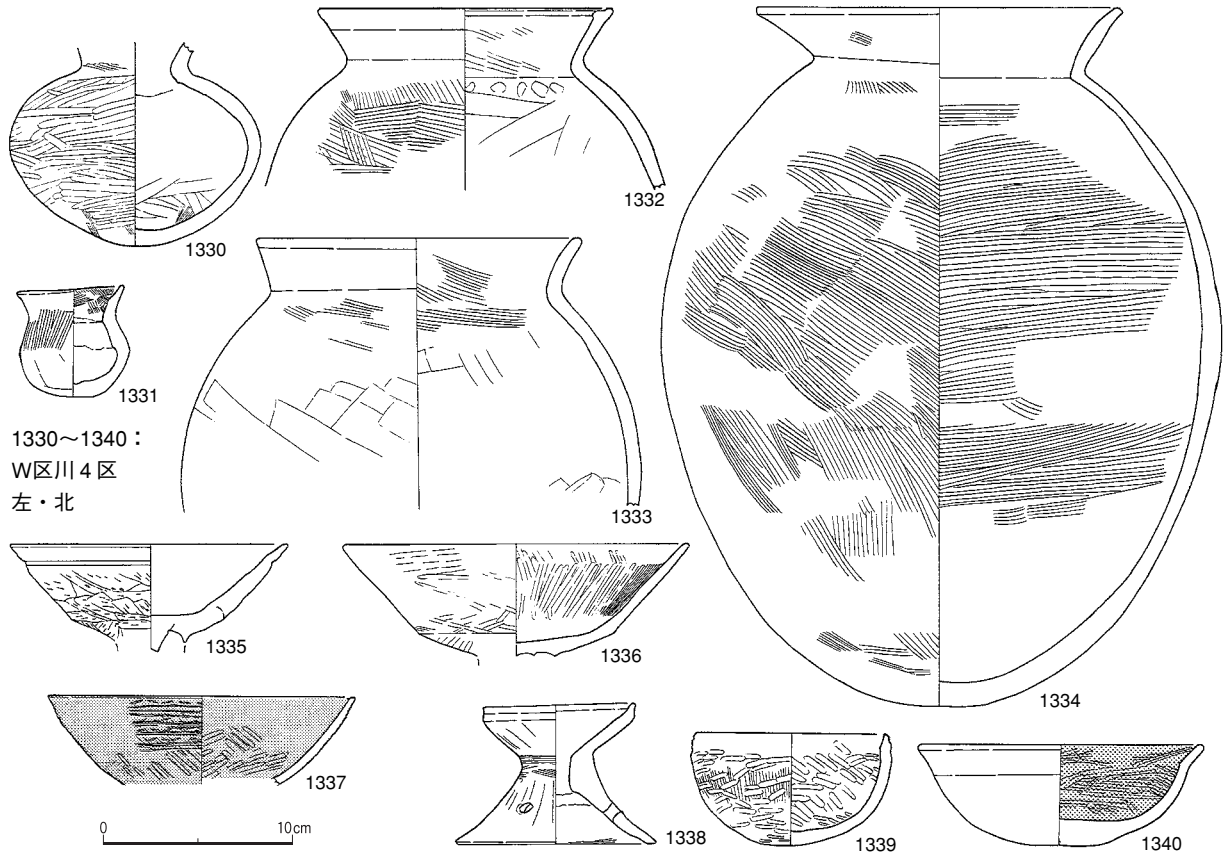
第137図 DN 9 出土土器実測図 3 (S= 1 / 4)



第138図 DN 9 出土土器実測図 4 (S=1/4)



第139図 DN9 出土土器実測図5 (S=1/4)



第140図 DN9出土土器実測図6 (S=1/4)

第14表 古墳大溝群一覧

群名	地区	遺構名	遺構小割	実測遺物
DS1	A1	SD04	古	1164・1181
	T	SD14	古	1182~1191
DS2	A2	SD57	古	1192・1193
	A3	SD57	古	なし
	Q2	SD130	なし	1194~1205
DN2	S4	SD13	なし	1207
	B3	SD32	なし	なし
	I	SD04	なし	1208
	B2	SD12	なし	1206
DN3	I	SD02	なし	1210・1211
	W	SD59	なし	1212~1221 S105
	D2	SD05	なし	1224~1226
	O1	SD02	なし	1209
	B2	SD14	なし	1222・1223
DN9	W	川跡	4区	1287~1340 E35~37・56・58
	F	SD04	なし	2942・2943
	F	(SD09)	なし	1247~1256・2953~2961
	F	SD29	なし	1257~1282 E60・61
	M3	SD46	なし	1228~1235 (1236~1246)
	M1	SD22	なし	なし
	E	SD22	なし	1227
N2	SD30	なし	1283~1286	

第15表 古墳井戸跡一覧

地区	遺構名	グリッド	実測遺物
A3	SE06	AF24	なし
B2	SE01	U19	なし
F	SE04	I23	1348~1351
F	SE08	R28・29	1342
F	SE13	I22	1352
O1	SE01	U21	1341
W	SE01	M17	1343~1347
F	P15	I22・23	1377・1378

第5節 井戸跡

要点と分布（第141・142図、第15表）

古墳前期の井戸跡については、調査区北東部に3基、北西部に1基、中央部に2基、東部に1基、南西部に1基の合計8基である。この数は時期別では中世、古代に次ぐものであり、さらには弥生時代、古墳中後期の順に少なくなっていく。北東部と南西部については中世の井戸跡集中地点とほぼ重なっている。北東部の3基は井戸跡でない可能性があるF区SE13とP15を含み、中央部の2基はO1区SE01出土土器とB2区SE01井戸側の比較から時間差が感じられる。よって、分布の特徴としては、基本的には少数で分散傾向にあるものと推定している。規模・形状はB2区SE01が不明である、F区P15やO1区SE01がやや小型である、F区SE13が不整形であることを除けば比較的よく似ている。井戸側はB2区SE01のみ遺存しており、その他では確認されていないが、湧水や崩れやすい砂性の土質を考慮すれば、何らかの井戸側が存在したと考えたほうが自然であろう。

A3区SE06（遺構：第143図、図版60）

調査区南西部、大溝群の西岸に位置する。径1.3×1.5m、深さ1mの規模で、井戸側は遺存していない。覆土下位から土器が出土しているが、図化できておらず、詳細な時期は不明である。

B2区SE01（遺構：第143図、図版60）

調査区中央部、古墳中後期の大溝群DN6内に位置する。大溝群の掘削時に肩部から木製刳物桶（第4分冊W260）が立った状態で出土し、DN6成立前に設置されていた井戸の井戸側と判断した。B2区SD16内井戸跡と仮称していたが、今回新たに命名する。井戸跡自体の規模や伴う遺物は不明であり、詳細な時期も不明である。

F区SE04（遺構：第144図、図版60、遺物：第145図）

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。DN9との関係ではその北岸に接する。径1.4～1.5m、深さ1.1mの規模で、井戸側は遺存していない。掘削中に崩壊したため完掘できておらず、土層も中途までであるが、底面に近い状況と思われる。遺物は土器が出土している。くの字口縁系統不明甕（1348）、くの字口縁能登系甕（1349）、受部有透器台（1350）等があるが、山陰系甕（1351）の調整から布留系の存在を予想できるので、古墳前期2期に位置付けたい。

F区SE08（遺構：第144図、図版61、遺物：第145図、図版84）

調査区東部、大溝群の東岸に位置する。径1.3×1.5m、深さ1.1mの規模で、井戸側は遺存していない。遺物は底近くから布留系甕（1342）が完形で出土しており、水汲みに使用されたものが遺棄された可能性が高い。口縁は写真の反対側で半月形に欠けているが、O1区SE01の例と同様であり、意図的に打ち欠かれている可能性がある。初期の型式であり、古墳前期2期に位置付けられる。

F区SE13（遺構：第144図、図版61、遺物：第145図）

調査区北部、大溝群の東岸に位置し、DN9の肩部に重なる。径1×1.3m、深さ1.5mの規模で、やや不整形で深い。井戸側は遺存していない。遺物は土器が上位（層1・2）に、木片が中位（層

4・層5上位)に含まれる。上位層はDN9の埋土と理解され、出土した土器(1352)も本遺構に伴う可能性は低い。中位層の木片には製品はなく、焦げたものが含まれる。本遺構は形状や遺物の出土状況が他と異なっており、貯蔵穴や廃棄穴の可能性があり、井戸跡からの転用も想定されよう。DN9以前の時期に比定できるが、湿式貯蔵穴の類であれば並存もありうる。

F区P15 (遺構：第144図、図版61、遺物：第164図、図版85)

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。径0.8~0.9m、深さ1mの規模で、井戸側は遺存していない。他の遺構と比べるとひとまわり小さいが、形状や遺物の出土状況は類似しており、井戸跡の可能性のあるものとして扱う。底近くで山陰系甕(1377・1378)が出土しており、古墳前期2期に位置付けられる。

O1区SE01 (遺構：第143図、図版61、遺物：第145図、図版84)

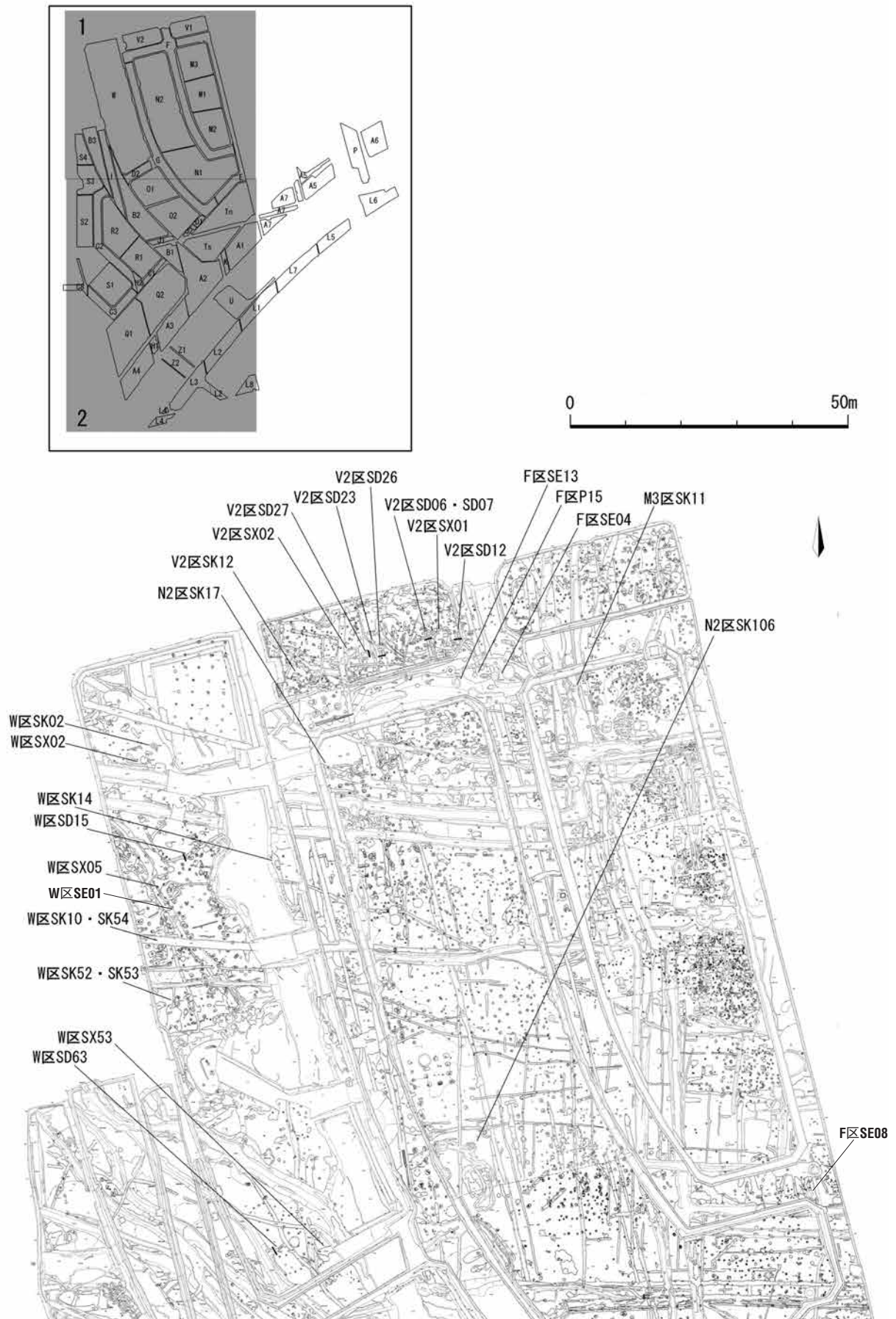
調査区中央部、大溝群DN3とDS8間で検出した。径0.9~1m、深さ1.1mの規模で、井戸側は遺存していない。遺物は底から布留系甕(1341)が完形で出土しており、水汲みに使用されたものが遺棄された可能性が高い。口縁は写真のとおり半月形に欠けているが、F区SE08の例と同様であり、意図的に打ち欠かされている可能性がある。古墳前期3期でも降る時期に位置付けられる

W区SE01 (遺構：第143図、図版61、遺物：第145図、図版84)

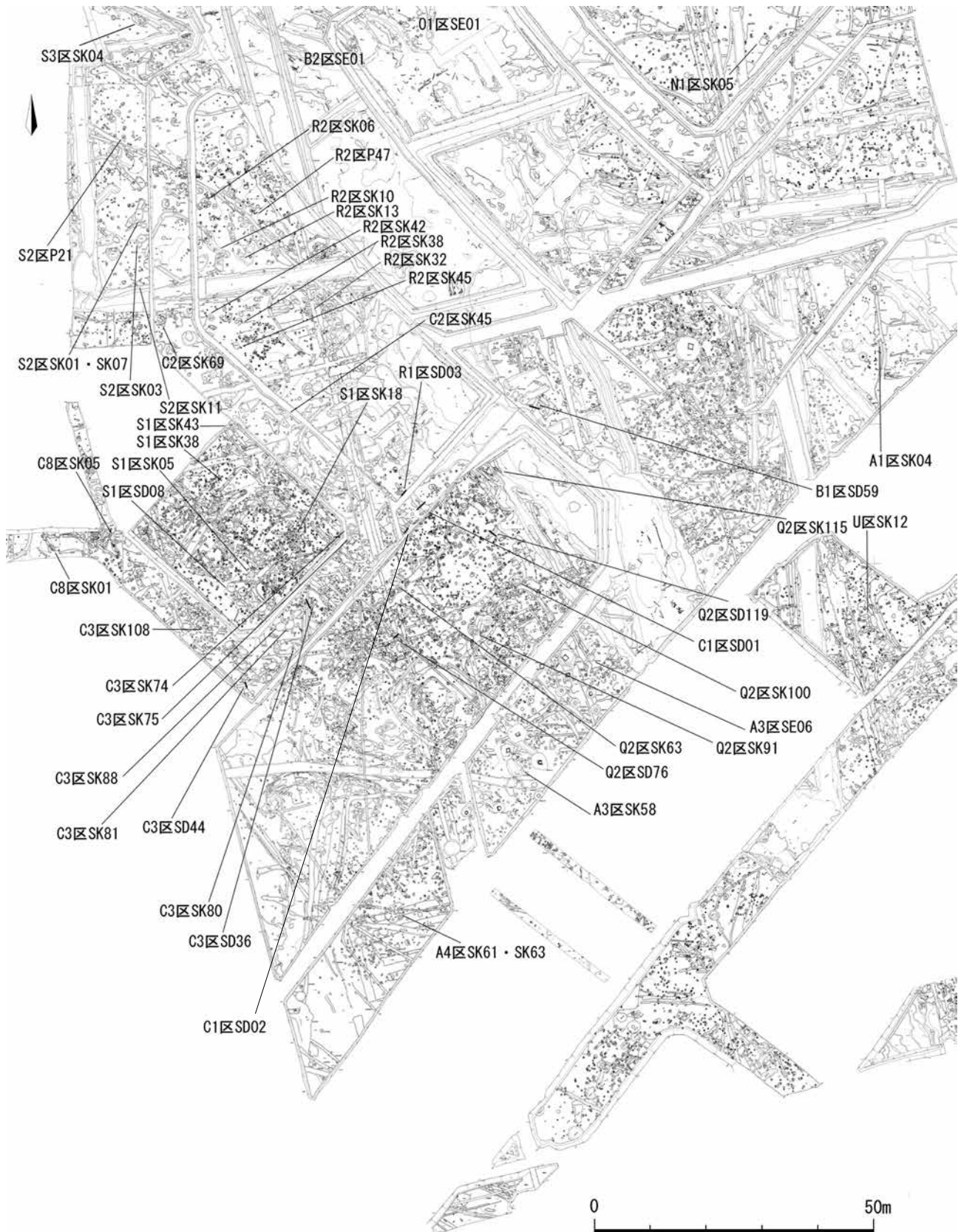
調査区北西部、大溝群の西岸に位置する。弥生時代のW区SD55を切り込んでいる。径1.1m、深さ0.9mの規模で、井戸側は遺存していない。遺物は土器が出土している。布留系甕(1346)や小型器台(1345)等から古墳前期2期に位置付けられる。

第16表 古墳小溝群一覧

群名	地区	遺構名	実測遺物
SC1	F	SD23	なし
	M3	SD47	なし
SC2	F	SD06	1353・5028
	N2	SD12	なし
	F	SD13	1354・1355
	M3	SD18	なし
SC3	M3	SD08	4265
	W	SD16	なし
	W	SD21	なし
	G	SD10	なし
	N2	SD28	なし
	F	SD25	なし
SC4	M2	SD01	なし
	W	SD54	1356
	G	なし	なし
	N2	SD104	なし
SC5	F	なし	なし
	M2	なし	なし
	W	SD53	1357~1361
	G	SD16	なし
	N2	SD105	なし
SC6	F	なし	なし
	M2	なし	なし
	G	なし	なし
	N2	SD111	なし
	S4	なし	なし
	B3	SD25	なし
	I	なし	なし
	W	SD58	なし
	B2	なし	なし
	W	61	なし
	N1	SD30	なし
	N1	なし	なし
SC7	E	SD06	なし
	T	SD02	5105
	Q1	SD40	なし
SC8	Q2	SD40	なし
	C3	SD39	なし
	Q1	SD74	なし
	Q2	SD110	4344
SC9	Q2	SD129	なし

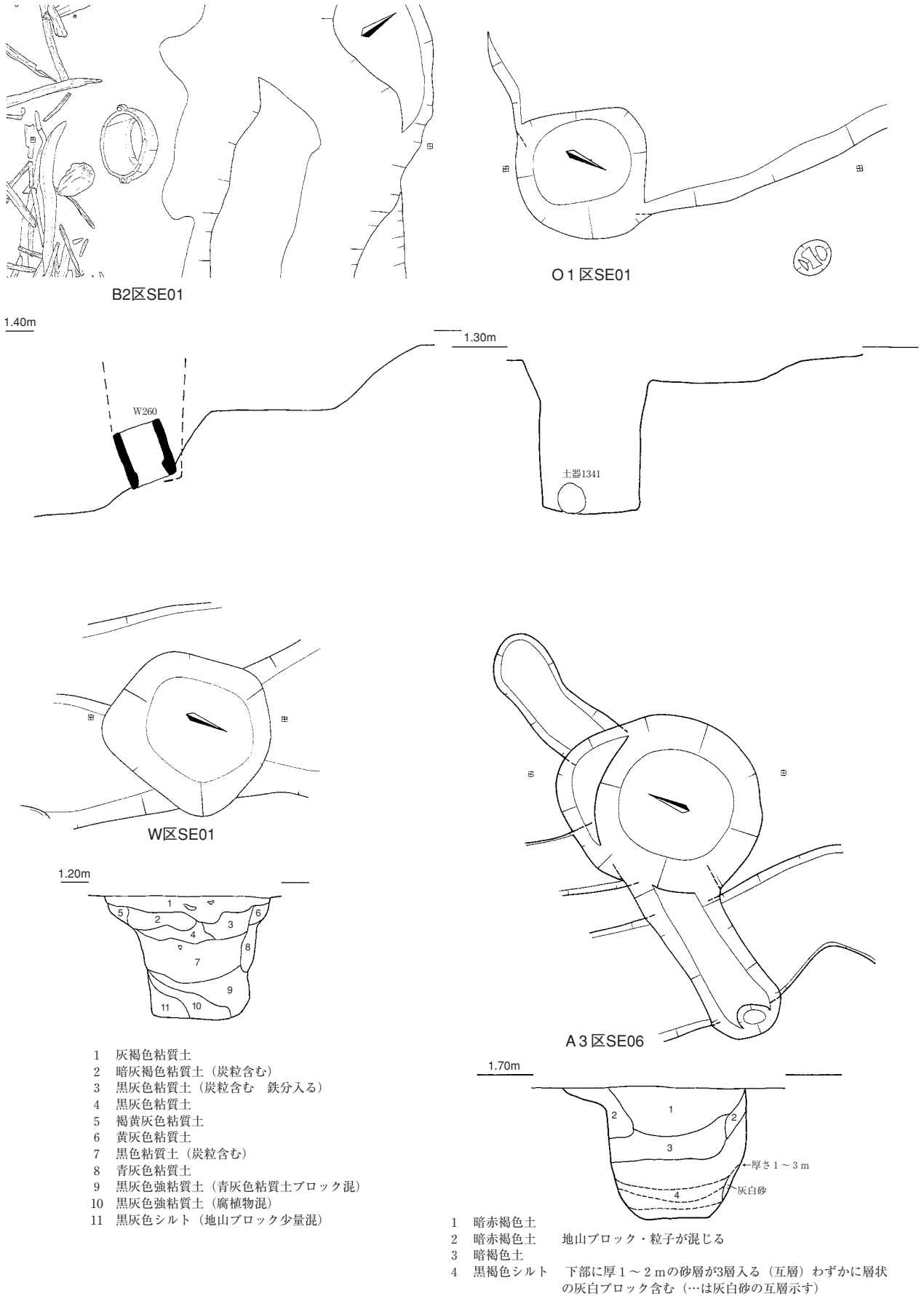


第141図 井戸跡・土坑・溝・落ち込み配置図1 (S=1/1,000)

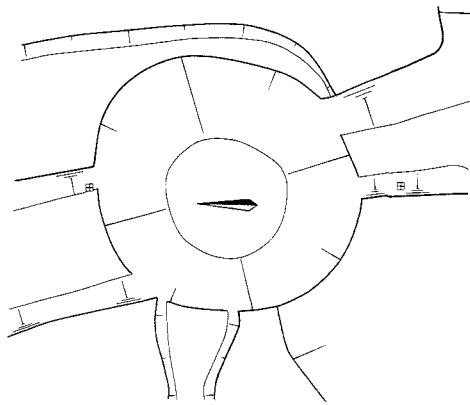


第142図 井戸跡・土坑・溝・落ち込み配置図2 (S=1/1,000)

第5節 井戸跡

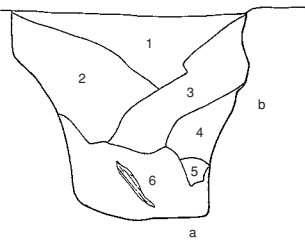


第143図 井戸跡実測図1 (S=1/40)

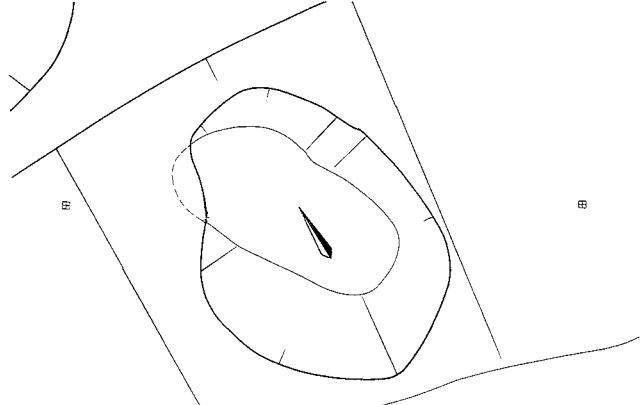


1.30m

F区SE04

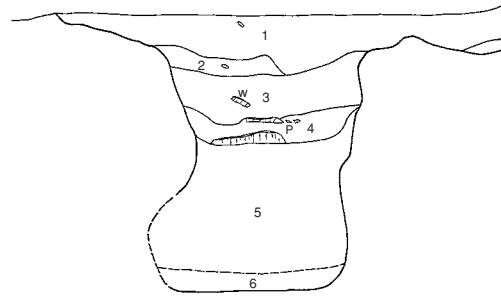


- 1 暗灰褐色粘質土 地山（黄灰色粘土）大ブロック多く含む
- 2 地山質土（黄灰色粘土） 暗灰褐色粘質土大ブロック多く含む
- 3 暗褐色粘土
- 4 地山質土（黄灰色粘土） 灰色粘質土大ブロック少量含む
- 5 暗褐色粘土
- 6 暗褐色粘土 地山（淡灰色粘土）大ブロック多量含む
- a 淡灰色粘土
- b 黄灰色粘土

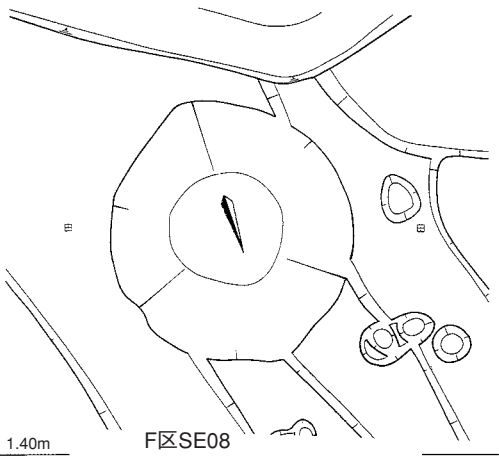


1.20m

F区SE13

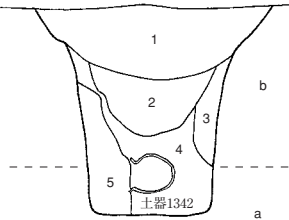


- 1 灰褐色粘質土 古墳土器多く含む
- 2 暗灰粘質土 古墳土器含む
- 3 暗灰粘質土 2より暗く 柔らかい
- 4 暗灰粘質土 3より暗い 木多い
- 5 暗灰粘質土 4より暗い 木多い
- 6 暗灰粘質土 5より明い
- 3層～5層へ下るほど泥炭質になる

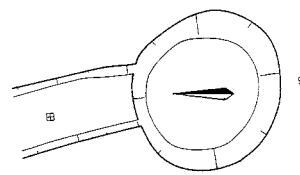


1.40m

F区SE08

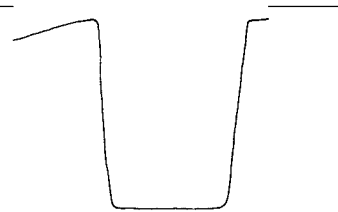


- 1 暗灰褐色粘土 色調暗い
- 2 黒灰色粘土 炭化物粒（3mm大）を少量含む
- 3 黒灰色粘土 地山（白灰色粘土）中ブロック少量含む
- 4 暗灰色粘土
- 5 黒灰色粘土 地山（白灰色粘土）中ブロック多く含む
- a 白灰色粘土
- b 地山 黄灰色粘土



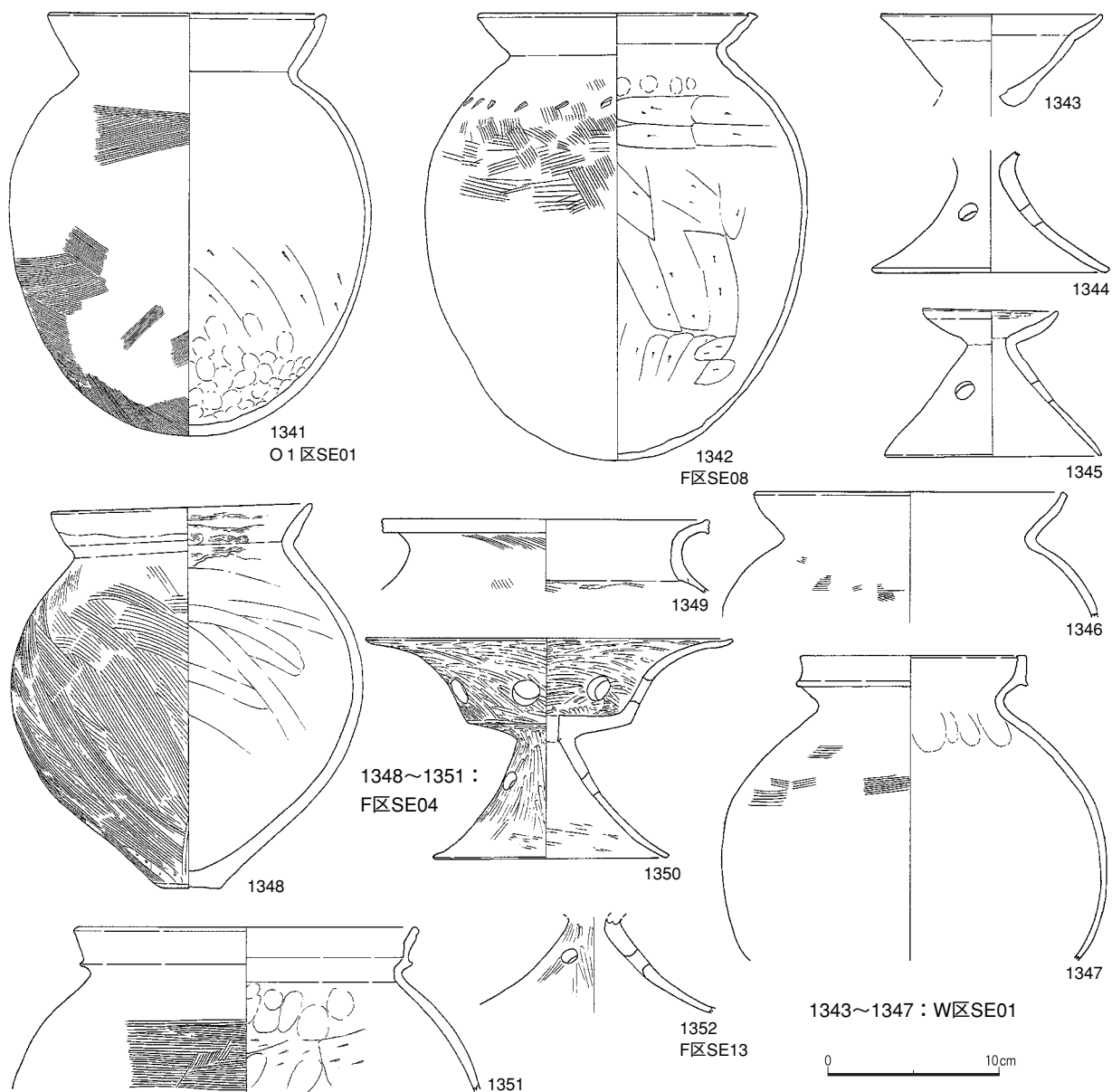
F区P15

1.30m

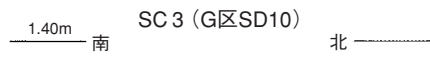


0 1m

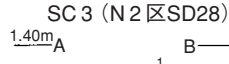
第144図 井戸跡実測図2 (S=1/40)



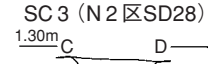
第145図 井戸跡出土土器実測図 (S=1/4)



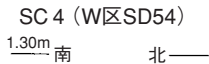
- 1 暗灰褐色粘質土 黄白灰色粘質土ブロック小わずか
- 2 暗灰褐色粘質土 黄白灰色粘質土ブロック中~大中量
灰白色粘土少量含む
- 3 灰褐色粘質土 黄白灰色粘質土ブロック中~大大量



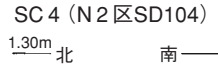
- 1 暗灰褐色シルト
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 灰褐色粘質土
- 4 灰色粘質土 淡黄褐色粘質土ブロック混
- 5 淡茶灰色粘質土



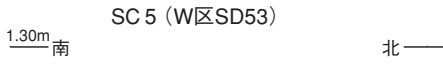
- 1 暗灰褐色シルト
- 2 暗灰褐色粘質土



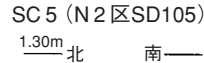
- 1 灰褐色土 炭化物含む
- 2 濁褐色粘質土 炭化物含む 淡黄褐色粘質土ブロック含む
- 3 褐色粘質土 灰色粘質土ブロック混
- 4 濁黄褐色粘質土



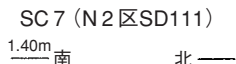
- 1 暗茶褐色土 (ベース混じり)



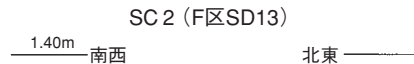
- 1 濁褐色粘質土 炭化物・遺物片多く含む
- 2 濁茶灰色粘質土 淡黄褐色粘質土ブロック含む
- 3 茶灰色粘質土
- 4 濁茶灰色粘質土 黄褐色粘質土
- 5 濁灰褐色粘質土 淡黄褐色粘質土ブロック多く含む
- 6 暗灰色粘質土 炭化物含む
- 7 暗灰色粘質土 淡黄褐色粘質土ブロック混
- 8 暗灰色粘質土 (6層より粘性弱)



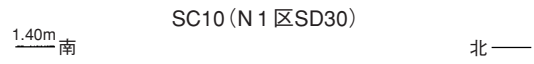
- 1 暗茶褐色土
- 2 暗茶褐色土 (ベース混じり)



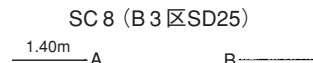
- 1 茶灰色土



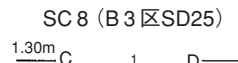
- 1 暗褐色粘質土
- 2 灰色粘土 黄褐色粘質土ブロック含む



- 1 灰褐色土
- 2 灰(褐)色土
- 3 黄褐色土 地山がベルト状に入る
- 4 (暗)灰褐色粘質土
- 5 (暗)灰褐色粘質土 地山ベースに灰色土
- 6 黒灰色粘 炭粒・地山ブロック含む
- 7 黄白色土 ベース崩落土



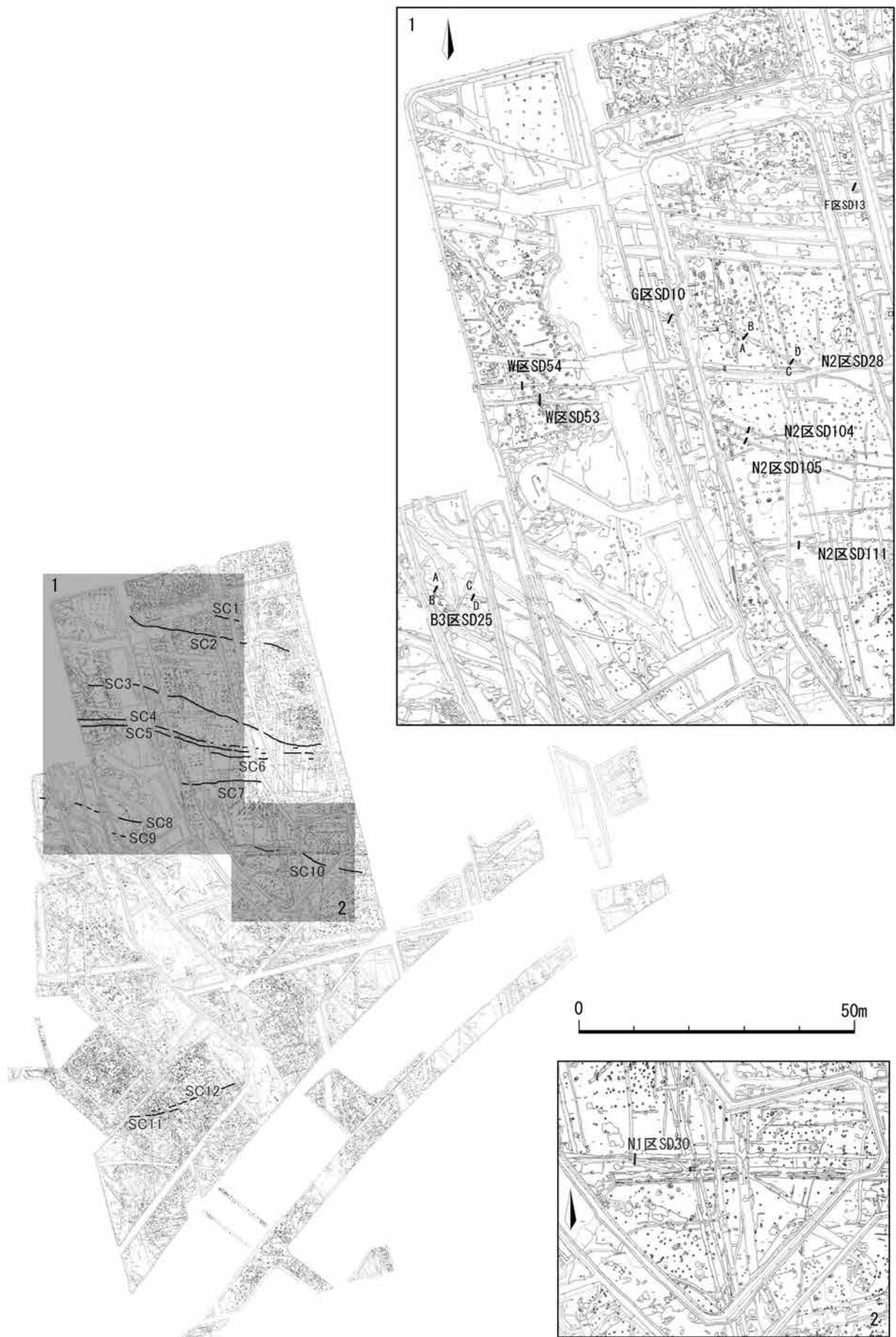
- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 暗灰褐色粘質土 1よりやや暗い
- 3 黄褐色粘質土 1を少量含む



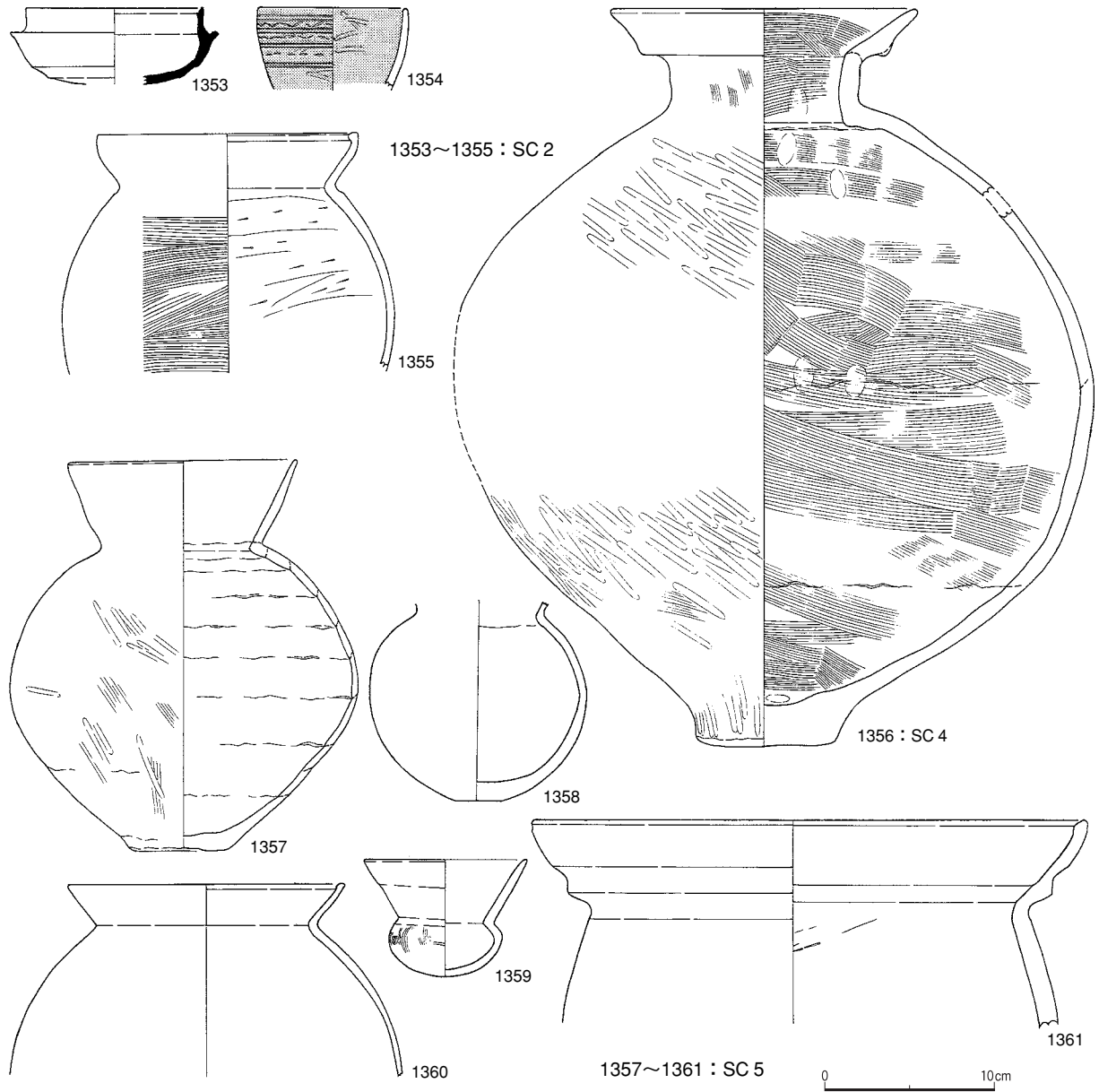
- 1 暗褐色粘質土 地山中ブロック微量含む
- 2 地山質土 灰色粘質土大ブロック少量含む
- a 地山 淡黄灰色粘土

第146図 小溝群土層図 (S= 1 / 40)





第147図 小溝群案内図 (S=1/1,000・1/2,500)



第148図 小溝群出土土器実測図 (S=1/4)

第6節 小 溝 群

要点と分布（第147図、第16表）

畝田西遺跡群では溝状遺構が多数検出されているが、その中でも弥生・古墳時代において複数の調査区にまたがるような特に延長が大きいものに対して「溝群」という名称を使用する。規模が大きくて水路的なものが大溝群（D）、規模が小さくて区画的なものが小溝群（SC）である。

小溝群については、調査区全域で12群を抽出した。若干の遺漏もあるが、大まかな分布状況は調査区の北半に10群、南半に2群である。東西基調の同じような方向に走り、粘土性の埋土をもつ。また、出土遺物が少ないため、詳細な時期がわかるものは少ないが、古代・中世の遺構に切り込まれる例が多く、全般に比較的古い時期が予想される。ただし、一部で古代・中世の遺物が出土しており、時期が降る例も存在するようである。本節ではこれらを一括して紹介する。

SC1

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。延長を確認できたのは11m程度である。深さは20cm以下で、溝底は東西端の比高で東側へ10cm程度下降する。出土遺物で図化されたものはない。

SC2（遺構：第146図、図版64 遺物：第148図、図版84）

調査区北部、大溝群の東岸に位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。延長約80mを確認した。西端はF区とN2区の間で不連続感が残り、東端はM3区の中世溝に切り込まれている。幅は一定せず、深さも一定しないが、溝底は西側へ緩やかに下降しており、東西両端の比高差は約50cmである。出土遺物は数点が図化されているが、時期は古墳前期（1354・1355）、古墳中後期（1353）、古代（第5分冊4265）、中世（第5分冊5028）とまとまらない。古代以降の遺構と推定したい。

SC3（遺構：第146図、図版64）

調査区北部～中央部、大溝群を跨いで位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。幅は比較的細いままで一定しており、延長約190mを確認した。溝の間隔は大溝群の東西でやや変化するが、内側が2m前後で終始する。N2区およびM2区では中世溝に切り込まれており、東端では方向をほぼ東西に変え、途切れている。深さは東ほど深くなる傾向があり、最大で20cmを越えるが、溝底はほとんど高さが変わらない。出土遺物で図化されたものはない。

SC4・5（遺構：第146図、図版64 遺物：第148図、図版84）

ほぼ等間隔で並走することから、関係が深いものとして項をまとめた。調査区北部～中央部、大溝群を跨いで位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。延長約110mを確認した。西半では弥生時代のW区SD55を切り込み、東半では古代のN2区SD102や中世のM2区SD05等が切り込む。幅は大溝群の西岸側が東岸側よりもやや広いが、比較的細いままで一定している。深さは一定しないが、溝底は西側へ緩やかに下降しており、東西両端の比高差はSC4で約30cm、SC5で約50cmである。両溝を比較すると、大溝群の西岸側ではSC5の方が深く幅も広いが、東岸側では遺存が悪いこともあって差が少なくなり、東端ではほとんど変わらなくなっている。遺物はSC4から二重口縁壺（1356）、

SC 5から直口壺(1357)、小型丸底壺(1359)、布留系甕(1360)、図に修正を要するが山陰系甕(1361)等が出土している。古墳前期3期を定点として、SC 4はやや古くなり、SC 5は逆にやや新くなる可能性を考えたい。SC 4・5の性格は区画溝かあるいは道路側溝と推定したいが、出土土器の時間差には留意する必要がある。

SC 6

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。延長75m程度を確認した。SC 5の東半部に2m前後の間隔で並行する。SC 4・5と規模・形状がほぼ共通であり、並走していた可能性はあるが、遺存が悪くかつ蛇行気味であり判断できない。深さは10cm以下で、溝底は東西端の比高で西側へ10cm程度下降する。出土遺物で図化されたものはない。

SC 7

調査区中央部、大溝群の東岸に位置する。ほぼ東西方向に走り、延長約40mを確認した。幅は遺存にもよるのであろうが、東側ほど細くなる。西端はG区中世溝で失われ、東半は古代のN 2区SD112・115等に切り込まれる。深さは20cm以下で一定せず、溝底は東西端の比高で西側へ10cm程度下降する。出土遺物で図化されたものはない。

SC 8 (遺構：第146図、図版64)

調査区西～中央部、大溝群の西岸に位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。延長約50mを確認した。多くの大溝群・溝と重なりながら断続して伸びているが、遺存が悪いため前後関係は不明である。深さ、溝底ともに数字がばらつき、一定しない。出土遺物で図化されたものはない。

SC 9

調査区中央部、大溝群の西岸に位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。延長を確認できたのは6m程度である。西端は古代のSB346柱穴に切り込まれている。深さは10cm以下で、溝底は東西端の比高で西側へ15cm程度下降する。出土遺物で図化されたものはない。

SC 10 (遺構：第146図)

調査区中央～東部、大溝群の東岸に位置する。東西方向に走り、北西・南東に偏向する。55m程度の延長を確認した。N 1区の中世溝で分断され、南北溝を境界として東側は偏向が強くなり、E区では途切れているなど、各所に不連続感が伴う。深さは35cm以下で一定せず、溝底は東西端の比高で西側へ30cm程度下降する。出土遺物は中世土師器(第5分冊5105)が図化されている。

SC 11・12

ほぼ等間隔で並走することから、関係が深いものとして項をまとめた。調査区南部、大溝群の西岸に位置する。北東・南西方向に偏向しており、他とは方向が異なる。両溝あわせて55m程度の延長を確認した。SC 11の東半部分とSC 12の西半部分が2m前後の間隔で並走しているが、他の部分は遺存が悪い。幅はSC 11の方が太いが、両溝とも比較的一定している。深さはほぼ10cm以下で、溝底はSC 11では顕著な比高差が見られないが、SC 12では西側へ10cm程度下降する。遺物は古代の須恵器(第5分冊4344)が出土している。古代の遺構と推定したい。

第7節 そ の 他

1 その他の遺構（第141・142図、第17表）

A1・A3・A4・B1区

（遺構：第150・151・160図、図版65・69 遺物：第164図、図版85）

A1区SK04 浅く不整形な土坑で、東部を古代溝SD05により削り取られ、全形は不明である。出土した畿内系高杯（1362）は古墳前期4期か中期まで降る。

A3区SK58 長方形箱形の土坑で、規模は長辺3.6×短辺2.2m×深さ0.7mである。底面南東端では木片が検出されている。出土した布留系甕（1363）は古墳前期3期の時期である。

A4区SK61・63 不整形で、複数の遺構が重なったものと推定され、北半をSK61、南半をSK63と捉えた。SK63南西部では土器がまとまって出土したが遺存が悪く、図化されたものはない。

B1区SD59 北東－南西方向の溝で、南西端は大溝群DS8への下降に重なるようであるが、詳細は不明である。幅0.7×深さ0.3mの規模である。図化遺物はない。

C1・C2・C3・C8区

（遺構：第152・153・160図、図版65・69 遺物：第164図、図版85）

C1区SD01 断片的に検出された北西－南東方向の溝である。不整形で、複数遺構が重なっているのかもしれない。出土した高杯か器台の脚部（1364）は古墳前期1～2期の時期である。

C1区SD02 断片的に検出された北西－南東方向の溝である。断面台形で、深さは0.25m程度、H・Q2区に若干延長する。図化遺物はない。

C2区SK45 不整形な土坑で、一端は調査区外へ出る。土層名は不明である。図化遺物はない。

C2区SK69 平面楕円形の土坑で、長径2×短径1.6mの規模である。底面は凸凹して南側が深い。高杯脚部（1365）が出土しており、古墳前期1～2期の時期である。

C3区SD36 SK81に切り込まれる断片的な溝である。直線的で、深さは0.4mと比較的深い。出土している在り系甕（1366）は古墳前期1期の時期である。

C3区SD44 調査区コーナーで検出された弧状の溝である。全体に浅く、北西側は調査区外へ伸びる。古墳中後期のSK91・101が切り込んでいる。図化遺物はない。

C3区SK74 平面楕円形の土坑で、長径1.8×短径1.4×深さ0.8mの規模である。山陰系壺（1367）、台付鉢（1368）が出土しており、古墳前期4期の時期か。

C3区SK75 調査区壁際で部分掘した。すり鉢状の土坑のようであり、南東に重なる落ち込みとの関係は不明である。出土した畿内系高杯（1369）は古墳前期4期か中期まで降る。

C3区SK80 調査区壁際で部分掘した不整形な穴である。直口壺（1370）が出土している。時期は古墳前期4期か中期まで降る。

C3区SK81 隅丸長方形箱形の土坑であり、長辺2.1×短辺1.2×深さ0.3mの規模である。土層名は不明である。図化遺物はない。

C3区SK88 平面楕円形の土坑で、長径1.9×短径1.6×深さ0.3mの規模である。高杯の脚部（1371・1372）が出土しており、古墳前期1期の時期である。

C3区SK108 平面長方形の土坑で、長辺1.2×短辺0.8×深さ0.2mの規模である。よく整った輪郭をも

ち、底面は両短辺側が溝状になる。木棺墓のようにも見えるが性格は不明である。高杯脚部（1373）が出土しており、古墳前期1～2期の時期である。

C 8区SK01 浅く不整形な溝内が一段深くなっており、土器がまとまって出土した。出土した壺（1374）・畿内系高杯（1375）は古墳前期4期か中期まで降る。

C 8区SK05 遺構が錯綜する地点の一角で検出された。平面長方形の土坑のようである。出土した在地系壺（1376）は古墳前期1期に位置付けられるが、須恵器（第4分冊3248）も出土している。

M 3・N 1・N 2区（遺構：第154・157・158図、図版68）

M 3区SK11 平面楕円形の土坑であり、規模は長径1.5×短径1.1×深さ0.3mである。図化遺物はない。

N 1区SK05 平面が不整形な浅い土坑であり、規模は長径2.2×短径1.4×深さ0.2mである。図化遺物はない。

N 2区SK17 部分掘であり、全形は不明である。深くなりそうであるが、掘削中に崩れており、土層も途中までの記録である。棒状の木製品（第4分冊W314）が出土している。

N 2区SK106 細長く浅い土坑であり、規模は長径1.7×短径0.8×深さ0.2mである。図化遺物はない。

Q 2・R 1・R 2区

（遺構：第154・155・160図、図版66・67・69 遺物：第165・169・171図、図版85・87・88）

Q 2区SD76 Q 1・Q 2区境で検出した。両端が完結する北西－南東方向の短溝で、長2.2×幅0.8×深さ0.3mの規模である。複数の遺構が重なっているようだが判然としない。出土した鉢（1380）・高杯（1381）は時期比定が難しいが、古墳前期3期以降か。他には石釧（J37）が出土している。

Q 2区SD119 両端が完結する北東－南西方向の短溝で、長3.0×幅0.8×深さ0.4mの規模である。断面形はV字に近く、下位は砂層が堆積する。出土した鉢（1382）は口縁が内湾するほど大きく歪んでおり、底部との境には亀裂が広がっている。成形時に歪みと亀裂が生じ、焼成時に亀裂が広がったことが予想されよう。詳細な時期比定は難しい。

Q 2区SK63 浅い溝と重なるが、平面長方形の土坑のようである。辺1.2m程度×深さ0.2mの規模で、底面は凹凸がある。出土した高杯（1383）は古墳前期1～2期の時期である。

Q 2区SK91 検出時はいびつな平面形であったが、深くなった部分は長辺2.1×短辺1.4×深さ0.6mの整った長方形箱形となった土坑である。SH18の周溝を切り込んでいる。底面の一部から土器が敷かれたように出土し、その上を有機質層（層6）が被覆し、その上を比較的均質な粘質土（層1～5）が堆積する。層6については第149図のように細分され、下位から植物質、焼土、灰、焼土、炭の順に堆積して形成されている。まず植物質のものが置かれ、その後で被熱した有機物が置かれて埋められたものと推定され、具体的には板か繊維と生物遺存体が想定しうる。簡易な木棺墓の類であろうか。出土した布留系甕（1384）から古墳前期3期に位置付けられるが、他の土器はやや前後する。

Q 2区SK100 平面は三角形状、断面はすり鉢状の土坑であり、SH18の周溝が切り込んでいる。長辺3.8×短辺2.1×深さ0.5mの規模である。底面中央から広口壺（1388・1389）、在地系甕



- 1 暗茶褐色粘質土 腐植土の様な感じ
- 2 炭層
- 3 焼土層
- 4 灰層 青白と暗青灰が互層状になる、焼土粒混じる、焼骨（魚骨か？）混じる
- 5 淡灰茶色粘土 植物質層にうすくのる、焼土
- 6 植物質層 厚さ1mm程度、炭化している
一番下に土器が一部敷いてある（布留系甕他）

第149図 Q 2区SK91層6詳細図

(1390) が出土しており、古墳前期1期に位置付けられる。

Q 2区SK115 川跡肩部の小規模な窪みから鉢(1391)が出土している。時期は古墳前期1期かそれ以前と推定する。

R 1区SD03 断片的な溝で、南はC 1区SD03につながるかもしれないが、方向は大きく傾く。遺物はくの字口縁甕(1392)が出土しているが、時期はよくわからない。

R 2区SK06 細長く浅い土坑で、規模は長径2.7×短径1.2×深さ0.15mである。古墳中後期の土器(第4分冊3420)が図化されており、掲載区分を誤っている。

R 2区SK10 SH32周溝の延長上にあるが、別の遺構で細長い土坑と認識した。規模は長径4.5×短径1.2×深さ0.5mである。出土した高杯(第4分冊3421)は古墳前期4期と考えたが、中期に降る可能性もある。誤って遺構と遺物を別分冊に掲載してしまった。

R 2区SK13 古墳中後期のSK14と重なる不整形な土坑で、全形は不明である。出土した器台脚部(1393)は古墳前期1～2期に位置付けられる。

R 2区SK32 SH31内に位置する不整形な土坑で、有段口縁壺(1394)やくの字口縁甕(1395)が出土している。土器の詳細な時期比定は難しいが、SH31かあるいは隣接する古墳中後期の土坑群と関連するのかもしれない。

R 2区SK38 長方形箱形の土坑で、規模は長辺1.3×短辺0.7×深さ0.3mである。出土遺物で図化されたものはない。

R 2区SK42 調査区壁際で部分掘した不整形な穴である。在地系有段口縁壺(1396)が出土しており、古墳前期1～2期に位置付けられる。

R 2区SK45 長方形箱形の土坑で、規模は長辺1.3×短辺1×深さ0.6mである。上位は炭化物層と粘質土層がレンズ状の互層に堆積している。井戸跡や貯蔵穴によく見られる堆積であるが、上面はかなり削平されているようであり、判断できない。出土土器は有段口縁の壺(1397・1398)、くの字口縁甕(1399)、ミニチュア土器(1400)、台脚(1401・1402)など種類は多いが、指標が乏しく時期決定は難しい。古墳前期2期頃としておく。

R 2区P47 DN7北東岸に近接する小穴である。有孔土玉(E51)が出土している。

S 1・S 2・S 3区

(遺構：第156～158図、図版67・68 遺物：第166・167・171図、図版86・88)

S 1区SD08 調査区南コーナー付近の断片的な溝である。低脚の鉢(1403)が出土しており、古墳前期1～2期に位置付けられる。

S 1区SK05 平面紡錘形の細長い土坑で、規模は長径3×短径1.2×深さ0.5mである。土器(1404、第4分冊3463・3464)が出土しており、時期は古墳前期3期頃と推定する。

S 1区SK18 古墳中後期のSK17と隣り合うなど遺構が錯綜しており、輪郭が不明確であるが、平面長方形の土坑である。規模は長辺1.6×短辺0.9×深さ0.35mである。小型器台(1405)が出土しており、古墳前期1～2期に位置付けられる。他には摩耗著しい甕(第4分冊3474)がある。

S 1区SK38 長方形箱形の土坑であり、規模は長辺2.7×短辺1.7×深さ0.5mである。古墳中後期のSD38(層1～8)が切り込んでいる。直口壺(1406)、山陰・布留系胴部と他系口縁部の折衷甕(1409)、布留系甕(1410)といった古墳前期2～3期の土器と、椀(1408)、くの字口縁甕(1411)、高杯(1412)といった古墳中後期の土器(この他、第4分冊3479～3482)が混在しており、SD38からの混入が予想される。

S 1区SK43 調査区北コーナーで部分掘しており、全形は不明である。全般に炭化物が多く含まれる

埋土で、底面に堆積していた炭化物を除去したところ小穴となった。古墳中後期のS D43が切り込んでいる。遺物は広口壺(1413)、布留系甕(1415・1416)、小型器台(1418・1419)等が出土しており、古墳前期2～3期に位置付けられる。

S 2区SK01 平面楕円形の浅い土坑であり、一端は調査区外へ隠れる。受部有透器台(1424)等が出土しており、古墳前期2期に位置付けられる。

S 2区SK03 平面楕円形で、断面は筒形に近い土坑である。規模は長径1.9×短径1.6×深さ0.6mである。下位は砂・シルト層(層4・5)がレンズ状に堆積し、上位は粘質土層(層1～5)で土器が多く含まれている。出土している土器は無頸壺(1425)、甕(1426・1428)があるが、いずれも古墳前期1期を遡りそうであり、掲載区分を誤っているかもしれない。

S 2区SK07 平面長方形の土坑であり、規模は長辺2.2×短辺1.4×深さ0.3mである。重なっているS D03とは前後関係が確認できず、同時存在の可能性もある。遺物は古墳前期3期の布留系甕(1429)の他、太身の管玉(J31)が出土している。

S 2区SK11 中世溝に切り込まれる断片的な穴である。畿内系高杯の脚部(1430)が出土しており、古墳前期4期以降に位置付けられる。

S 3区SK04 古墳中後期の大溝群DN5で削られており、平面形はやや不整だが長方形に近く、断面はすり鉢状の土坑である。規模は長辺2.7×短辺1.5×深さ0.4mである。堆積はレンズ状に近い。誤って別分冊に掲載したが、小型鉢(第4分冊3533)が出土している。

U・V2・W区

(遺構：第158～163図、図版68・70 遺物：第167・168図、図版86)

U区SK12 平面長方形の浅い土坑である。甕と思われる土器底部(1431)が出土している。平底面を持っており、古墳前期1期を遡ってもよい。

V 2区SD06・07 S X01のすぐ西を南北方向に走る細く浅い溝であり、S D06は幅0.3～0.4m、深さ0.1mを測る。北端は途切れ、南端は調査区外へ伸びているが、F区では検出されていない。S D07は幅0.5m、深さ5cmを測り、両端とも途切れている。どちらも弥生時代のSH42周溝を切り込んでいる。また、両溝には重なりがあり、写真図版の土層にみるとおりS D07がS D06を切り込んでいるが、この逆のように表現されている平面図と土層図は誤りである。図化遺物はない。

V 2区SD12 調査区南東コーナー壁際で部分掘された浅い落ち込みである。図化遺物はない。

V 2区SD23 南北方向の浅い溝であり、幅0.5～0.7mを測る。東側にS D26が並走し、ともに古代のS D17に切り込まれている。北端は浅い落ち込みと重なって途切れ、南端は調査区外へ伸びるが、F区では検出されていない。主に北端部分から土器が出土しており、東海系高杯(1440)、小型器台(1441)、受部有透器台(1442)、山陰系甕(1443)がある。時期はS X01と同じ評価である。

V 2区SD26 南北方向の浅い溝であり、幅1m前後を測る。西側にS D23が位置して並走する。北端は中世のSE02が切り込み、南端は古代のS D17に切り込まれており、ともに途切れている。小型鉢(1444)が出土しているが、時期比定が難しい。

V 2区SD27 S D23とS X02間にある不整形な遺構である。図化遺物はない。

V 2区SK12 浅いすり鉢状の土坑であり、規模は長径1.4×短径1.1×深さ0.2mである。図化遺物はない。

V 2区SX01 浅く不整形な落ち込みであるが、西半は辺3.4mの平面長方形に整っており堅穴状となる。底面は凹凸があり、柱穴などは確認できていない。遺物は土器が比較的多く出土しており、精製鉢(1433)、布留系甕(1434・1435)、山陰系甕(1436・1437)、小型器台(1438・1439)等がある。布留系甕と山陰系甕

は口縁の肥厚状況から古墳前期2期と3期が混在しているが、その差異は小さい。積極的に時間幅を限定するならば、2期から3期への過渡期とも評価できよう。

V2区SX02 不整形な落ち込みであるが、北半は辺2.4mの平面四角形に整う。深さは30cm前後で、底面は凹凸がある。小型器台(1445)が出土しており、古墳前期1～2期に位置付けられる。

W区SD15 DN8とSH39間に位置する北東-南西方向の溝で、両端は各遺構を結ぶように重なるが、前後関係は確認できない。幅は0.4～1.3mでDN8へ向かって広がり、深さは一定でないが溝底両端の比高で北東のDN8側へ30cm程度下降する。南西端とSH39周溝底との比高差はほとんどない。布留系甕(1446)が出土しており、古墳前期3期に位置付けられる。本遺構はSH39の新相と同時期の土器が出土しており、物理的にも湛水を外周溝から基幹水路へ流下させることが可能であることから、SH39に付属する排水溝の可能性はある。

W区SD63 北東-南西方向の溝で、幅0.5m、深さ0.3mを測り、断面は箱形である。大溝群DN3と古代溝SD60の間に位置し、南はSB233が近接する。いずれの遺構とも前後関係は不明であるが、南西のSD60側は浅く不明確になってしまう。SB233の北西辺に沿うことから、建物に伴う可能性はあるが、部分的なので何ともいえない。むしろ、接続しているように見えるDN3との関係に注意しておきたい。図化遺物はない。

W区SK02 平面楕円形の浅い土坑である。規模は長径1.4×短径1×深さ0.2mである。図化遺物はない。

W区SK14 細長い平面形で、断面は箱形の土坑である。DN8東岸肩部に位置しているが、関係は不明である。規模は長径1.7×短径0.9×深さ0.2mである。図化遺物はない。

W区SK10・54 中世溝の南北両岸で検出した浅く不整形な落ち込みであり、一連の遺構が分断されているものと判断した。古代のSB355柱穴が切り込んでいる。図化遺物はない。

W区SK52・53 不整形な落ち込みであり、複数の遺構が重なっていると思われるが判然としない。南半をSK52、北半をSK53と認識しており、SK53からSK52へ推移して浅くなっている。図化遺物はない。

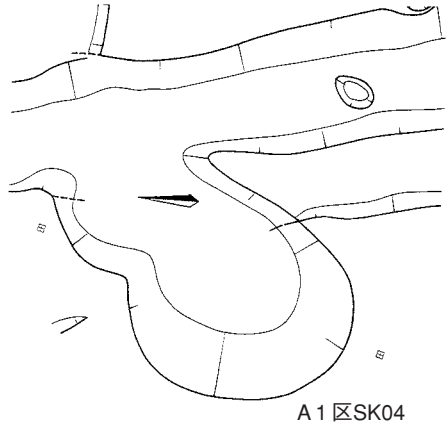
W区SX02 不整形な浅い落ち込みである。くの字口縁甕1個体(1449)が出土しているが、詳細な時期比定は難しい。古墳前期1～2期か。

W区SX05 径3m前後の不整形な浅い落ち込みであるが、内部が若干立ち上がるため、平面馬蹄形の周溝のような形状となる。古代のSB357柱穴が切り込んでいる。重なっているSD16・17との関係は不明である。図化遺物はない。

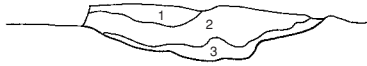
W区SX53 不整形な浅い落ち込みである。布留系甕(1447)、無孔の小型器台(1448)が出土しており、古墳前期3期に位置付けられる。

遺構外・別時期遺構出土土器(第164・168図、図版85)

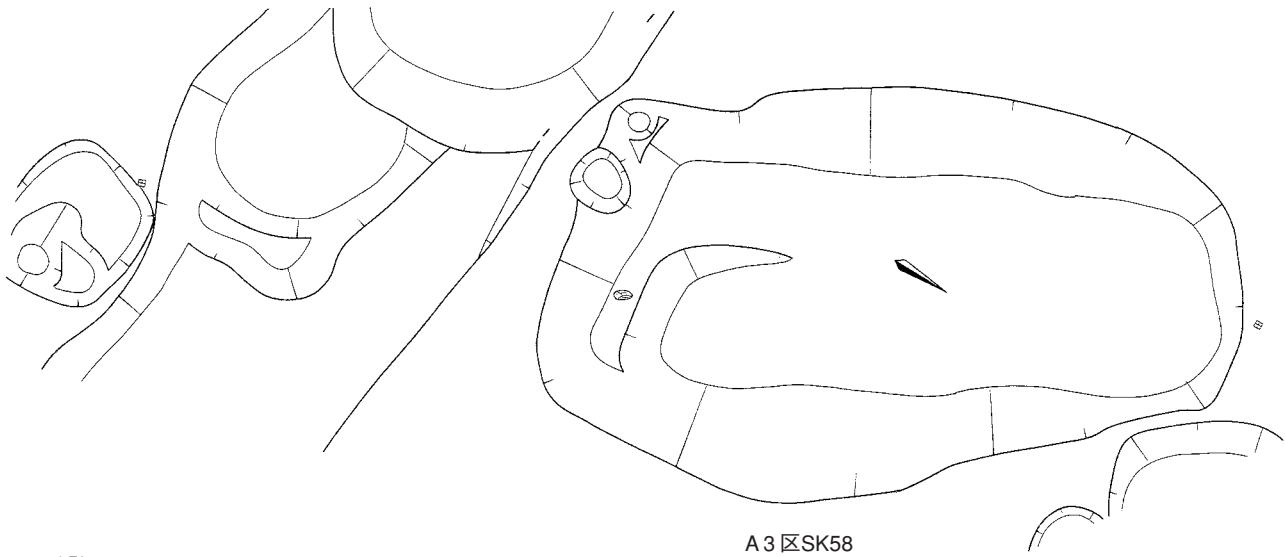
遺構外出土土器はN1区の直口壺(1379)が図化されている。時期は位置付けが難しいが、古墳前期2～3期か。別時期遺構出土土器としては古代・中世の遺構(ただし掘立柱建物跡を除く)に混入したものを掲載しており、すべてE区から得られている。小型の二重口縁壺(1450)、在地系甕(1451)、山陰系甕(1452)、小型器台(1453)、大型の二重口縁壺(1454)が図化されている。概ね古墳前期1～2期の時期に位置付けられる。



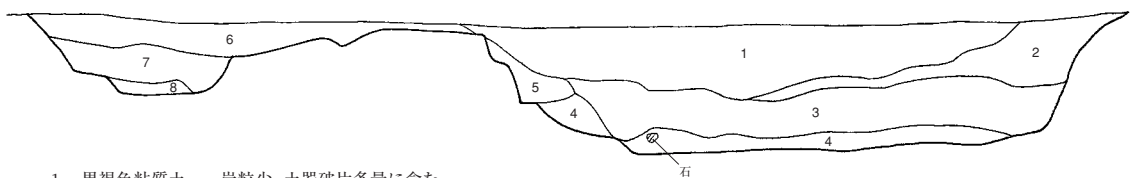
1.50m



- 1 暗赤褐色土
- 2 黒褐色土 大粒の炭粒わずかに含む
- 3 暗黄褐色土 ベース+2層土の混じり



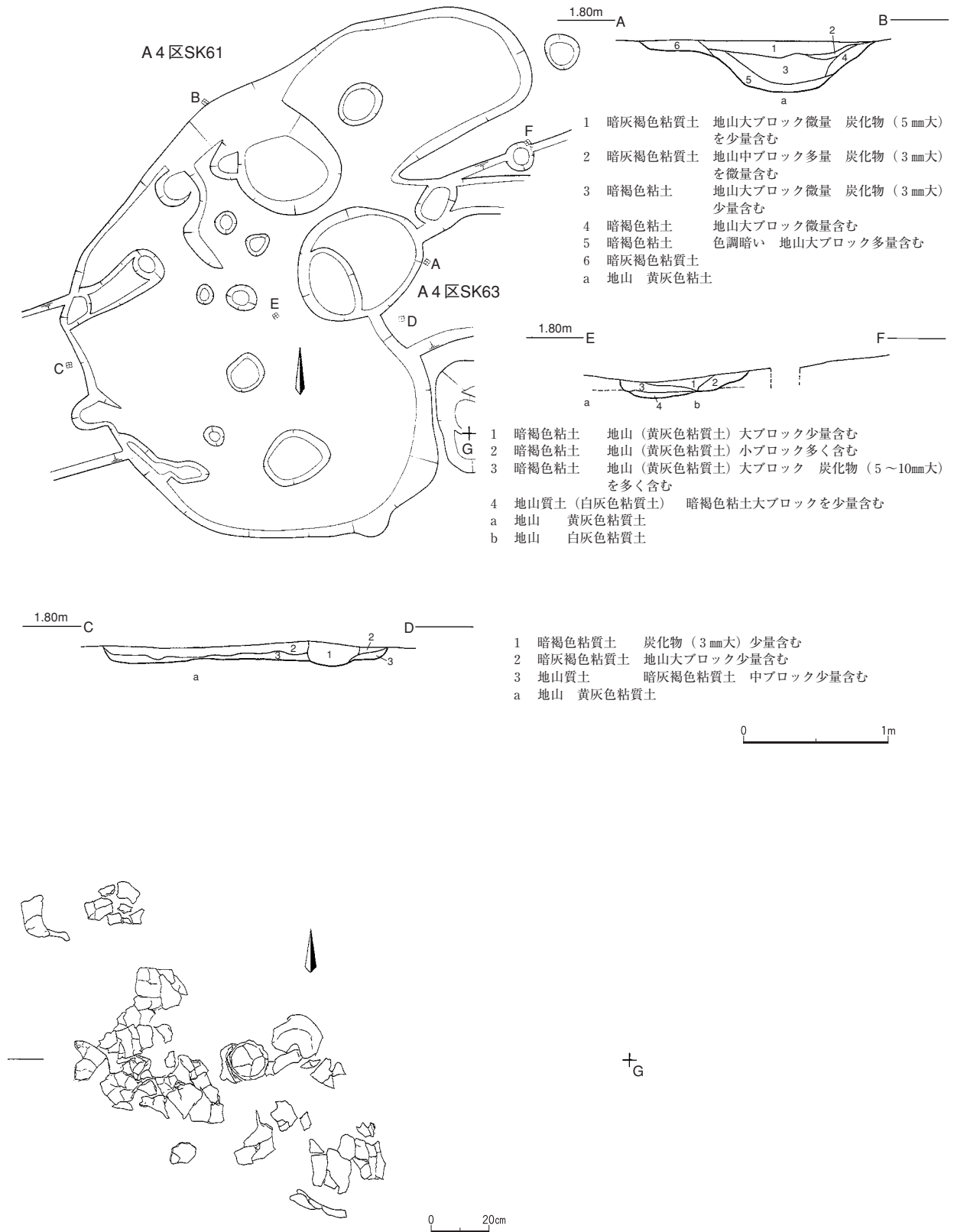
1.70m



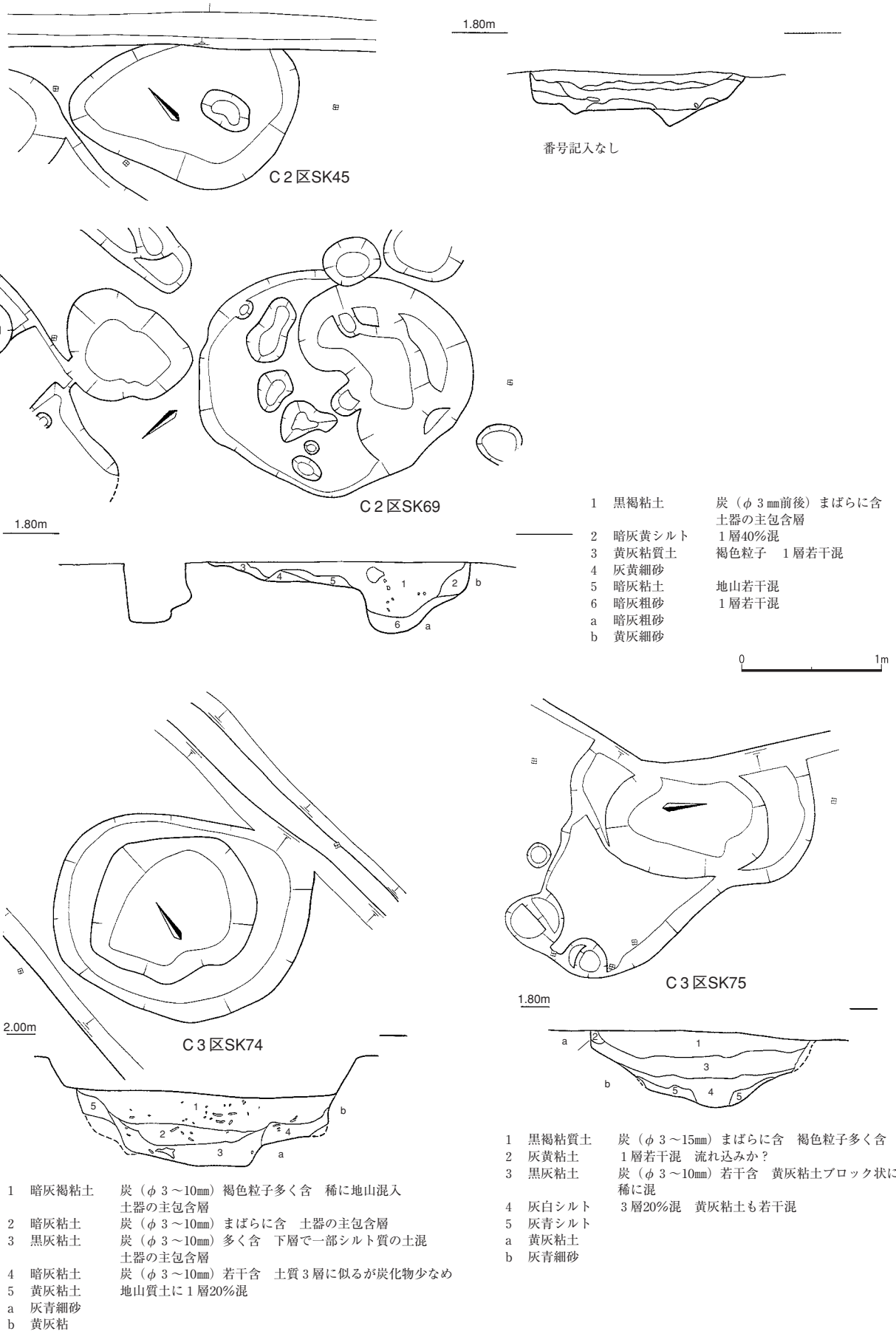
- 1 黒褐色粘質土 炭粒少 土器破片多量に含む
- 2 暗灰色粘質土 1・3層の漸移層
- 3 黒(灰)色粘質土
- 4 黒(灰)色粘質土 地山粒多く含む
- 5 黒(灰)色粘質土 3層中に地山粒 地山ブロックを多量に含んだもの
- 6 暗(灰)赤褐色土
- 7 暗灰色粘質土 地山粒 ブロック含む
- 8 灰白砂 7層土ブロックわずかに含む

0 1m

第150図 土坑実測図1 (S=1/40)



第151図 土坑実測図2 (S=1/40・1/20)

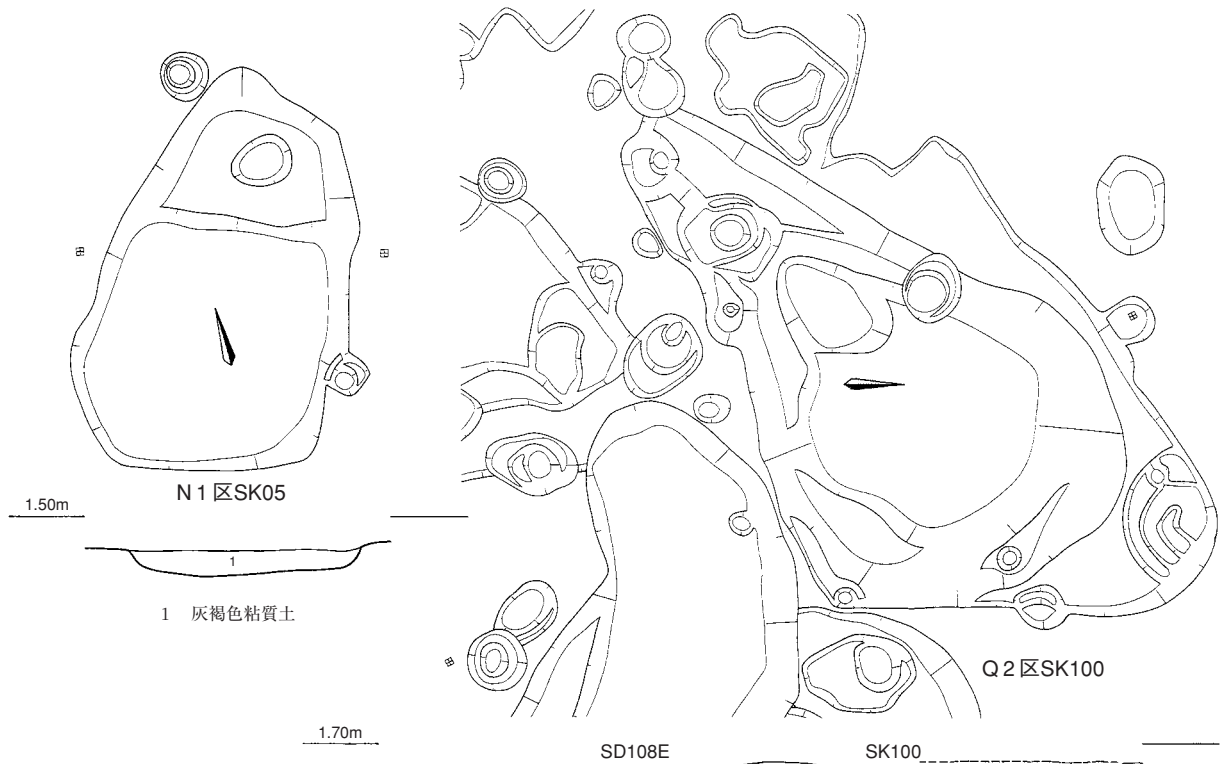


第152図 土坑実測図3 (S=1/40)

第7節 そ の 他

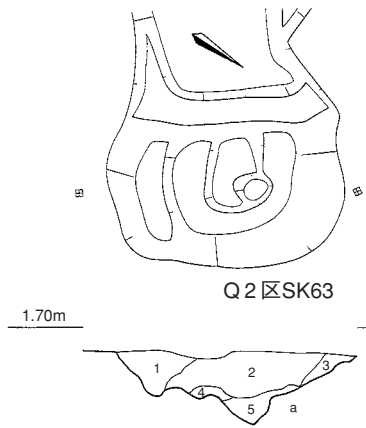


第153図 土坑実測図4 (S=1/40・1/20)

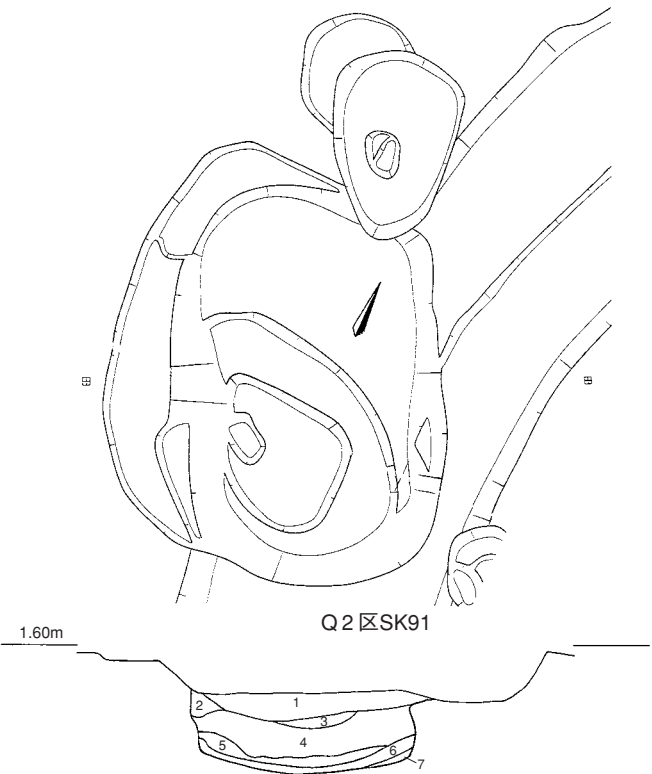


- 1 暗灰褐色粘質土
 - 2 濁灰褐色粘質土 地山土全体に含む
 - 3 暗褐色粘質土 黒っぽい、地山粒少量含む
 - 4 濁暗灰色粘質土 黒っぽい、地山土含む
 - 5 暗褐色粘質土 地山土含む
 - 6 暗灰色粘土 炭化物・地山ブロック含む、黒っぽい
 - a オリブ灰砂
- SK100の上面に古代の浅い落ち込み状の遺構あり

0 1m

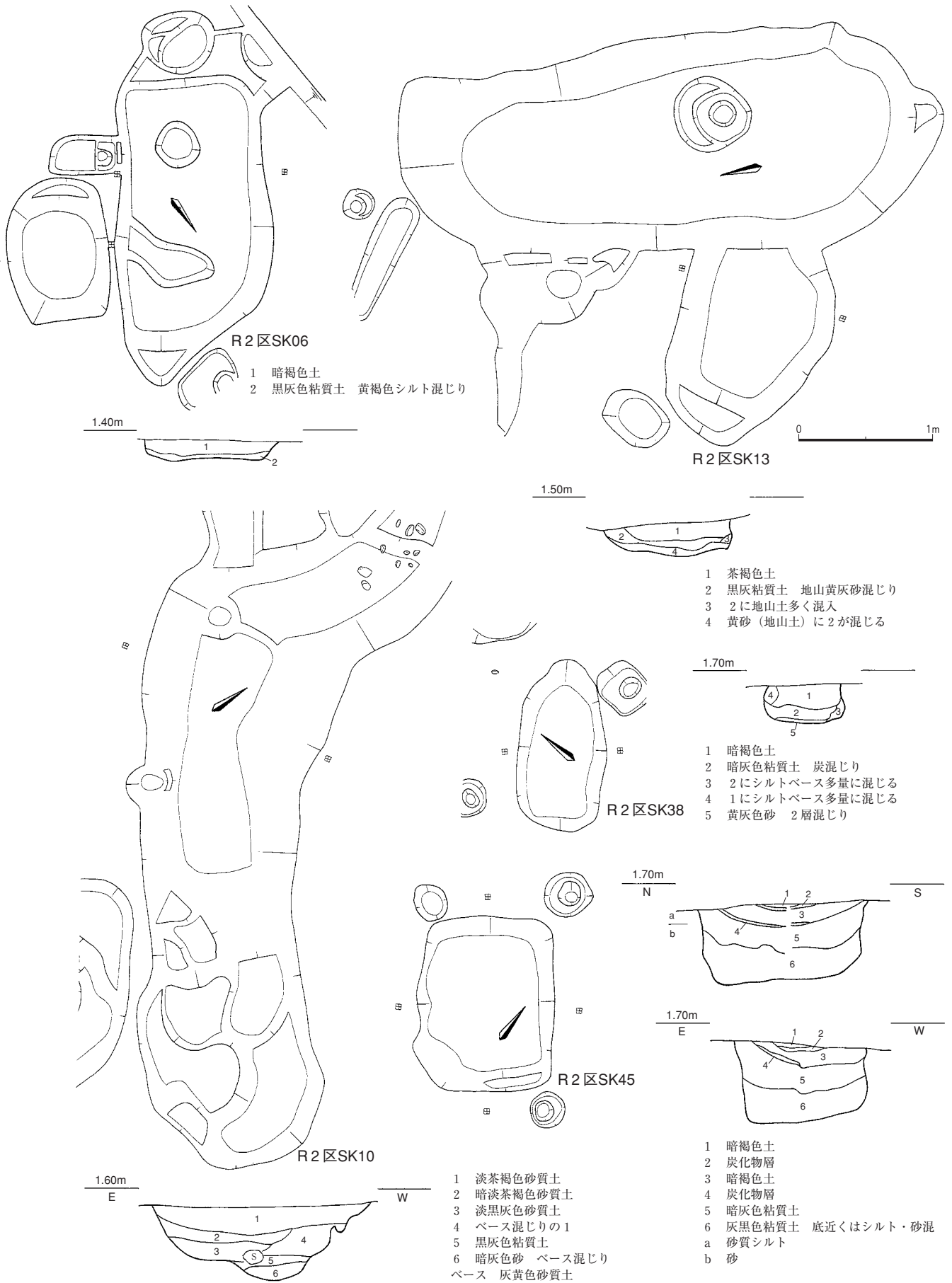


- 1 灰褐色粘質土 地山粒含む
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 暗灰色粘質土 地山粒少量含む
- 4 暗灰褐色粘質土 地山粒少量含む
- 5 暗灰色粘土 黒っぽい、地山ブロック含む
- a 青灰色砂質土

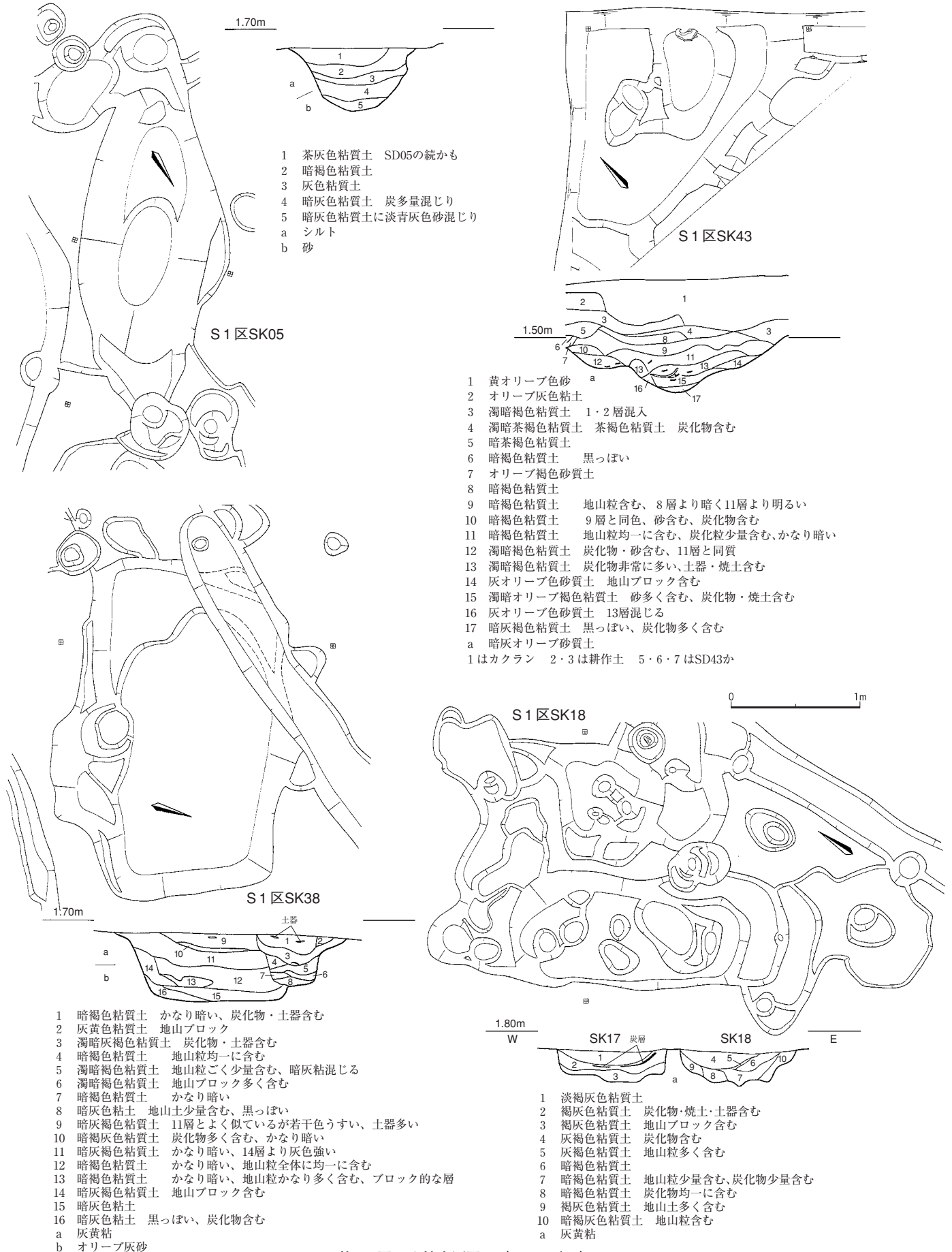


- 1 暗灰色粘質土
- 2 暗灰色粘質土 地山土均一に含む
- 3 灰色粘質土 地山細粒均一に含む
- 4 暗灰色粘土 地山粒・炭化粒均一に含む
- 5 暗灰色粘土 黒っぽい、炭化物含む
- 6 第149図に別記
- 7 暗褐色粘土

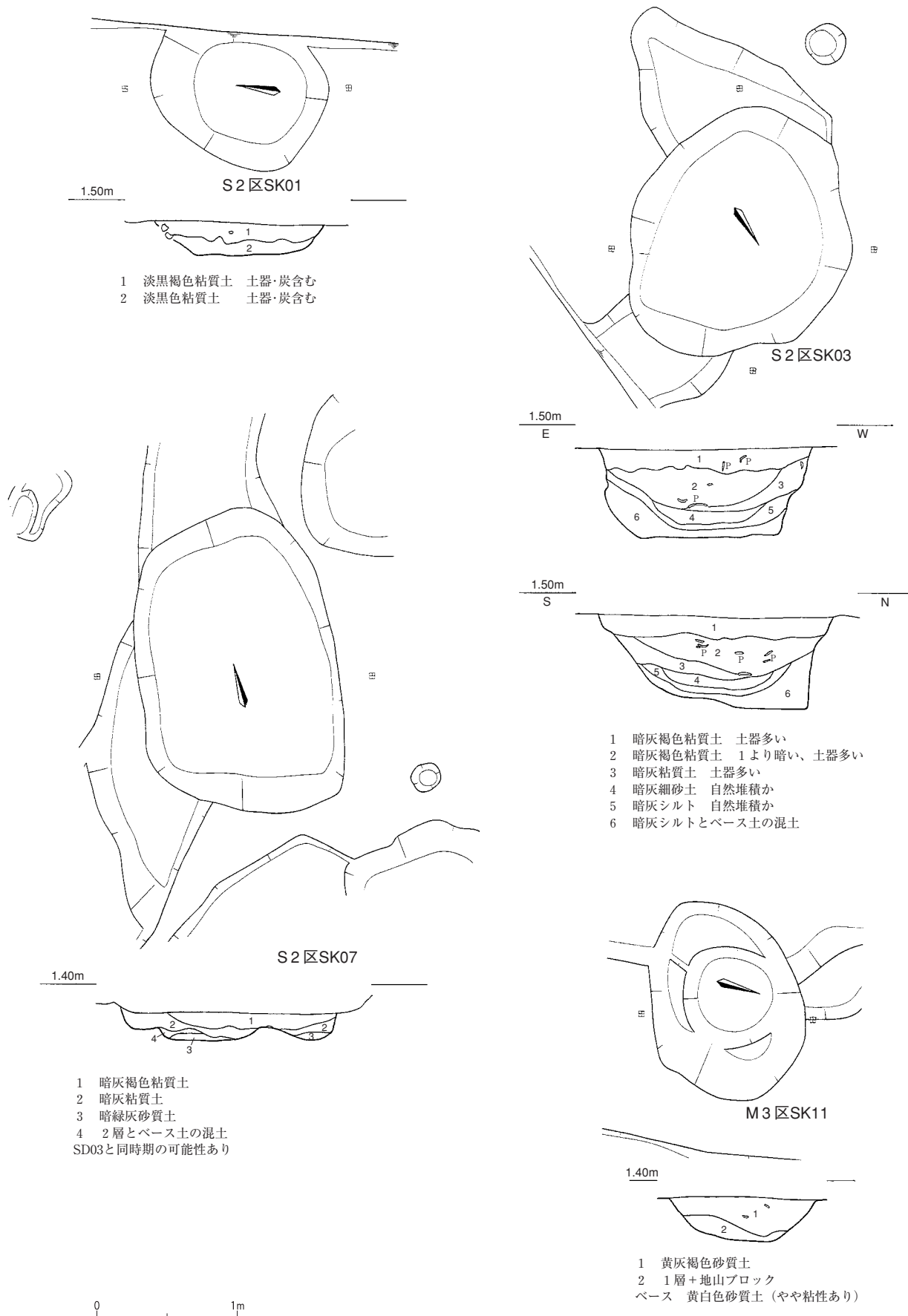
第154図 土坑実測図5 (S=1/40)



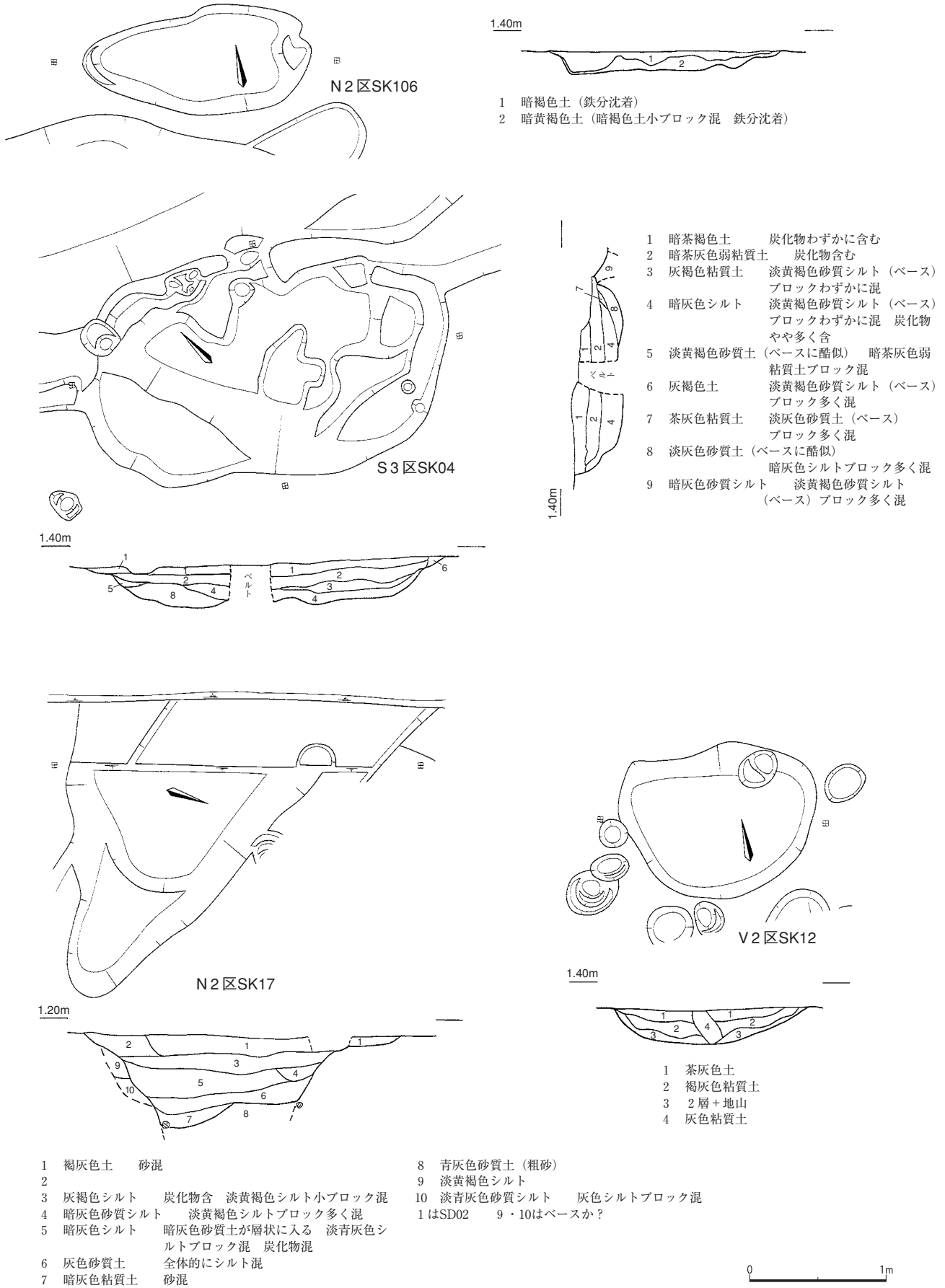
第155図 土坑実測図6 (S=1/40)



第156図 土坑実測図7 (S=1/40)

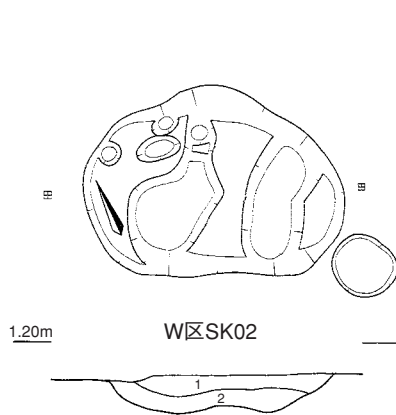


第157図 土坑実測図8 (S=1/40)

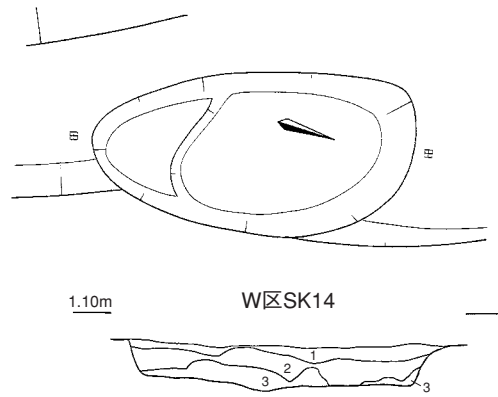


第158図 土坑実測図9 (S=1/40)

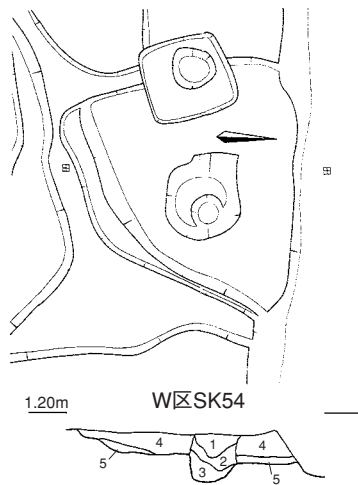
第7節 そ の 他



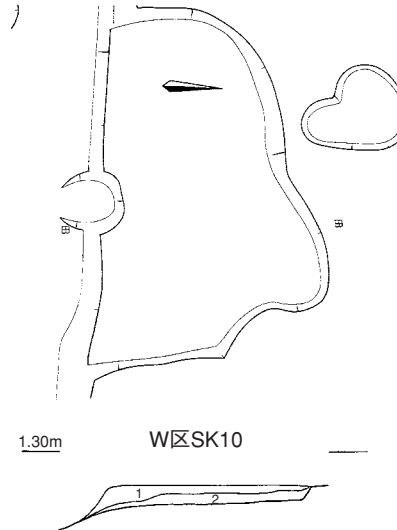
- 1 暗灰茶色土
2 黒灰色粘質土 (地山ブロック混)



- 1 暗褐色土
2 暗灰色粘質土 (1層土)
3 ベース 黄灰色粘質シルト+崩落土2層混

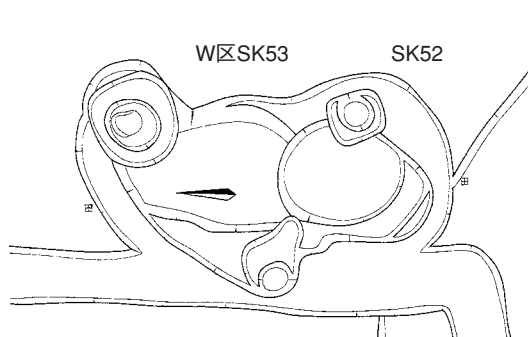


- 1 灰色粘質土 炭化物含む
2 灰色粘質土 1層より粘性強 淡黄褐色粘質土ブロック混
3 濁黄褐色粘質土 砂混 灰色粘質土ブロックわずかに混
4 灰色粘質土 1層より粘性弱 淡黄褐色粘質土ブロック混
5 淡黄褐色粘質土 灰色粘質土ブロック混
1~3はビット 4と5はSK54



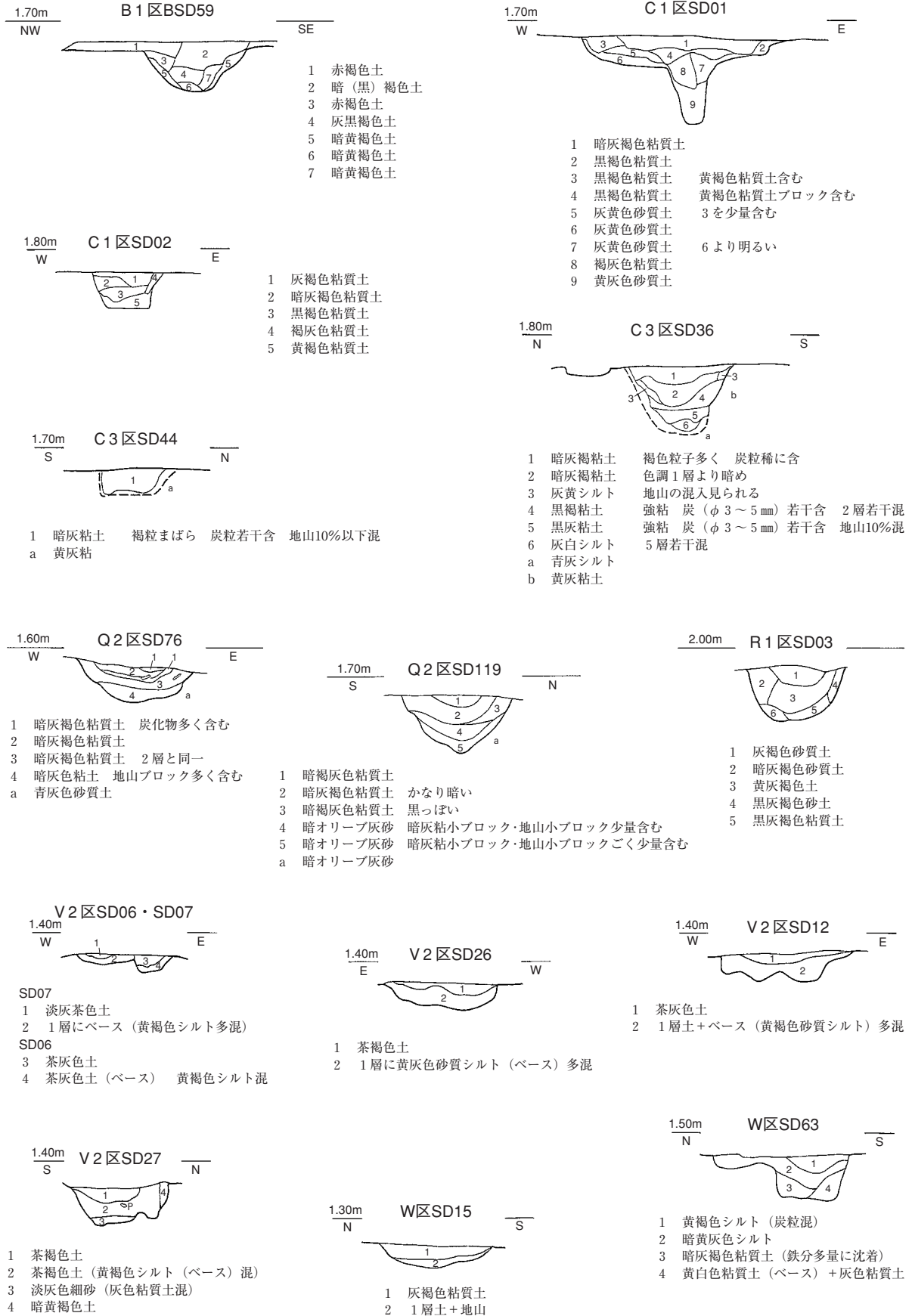
- 1 灰褐色粘質土
2 1層土+地山土

0 1m

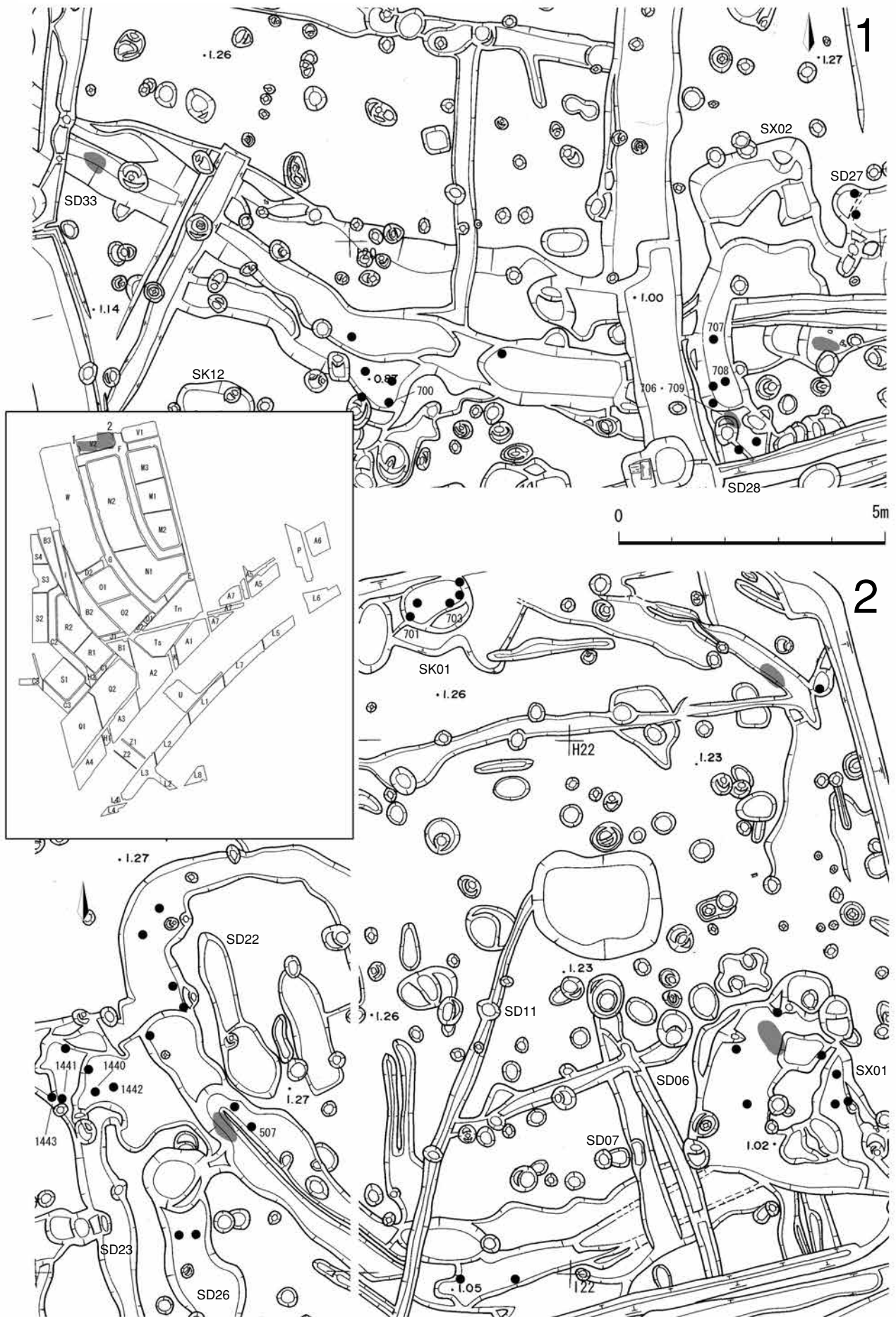


- 1 暗灰色粘質土 炭化物・遺物片多く含む
2 灰色粘質土 黄褐色粘質土ブロック多く含む 炭化物含む
3 濁灰色粘質土 黄褐色粘質土小ブロック含む 炭化物含む
4 濁灰色粘質土 黄褐色粘質土小ブロック含む
5 濁灰色粘質土 黄褐色粘質土ブロック少し含む 炭化物含む
6 淡黄褐色粘質土 砂混 濁灰色粘質土ブロック多く混 炭化物混
7 暗灰色粘質土 淡黄褐色粘質土小ブロック多く混

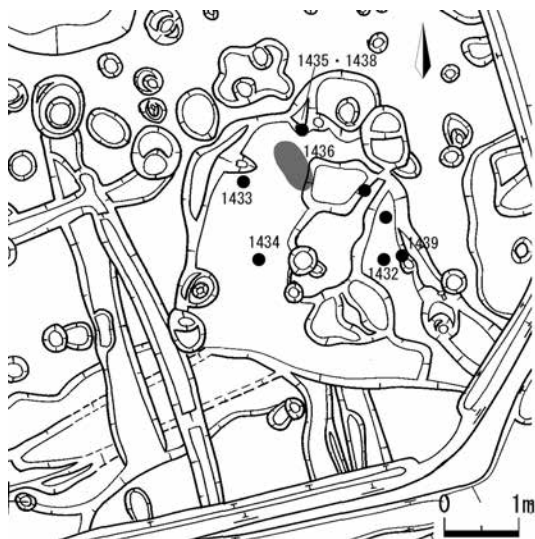
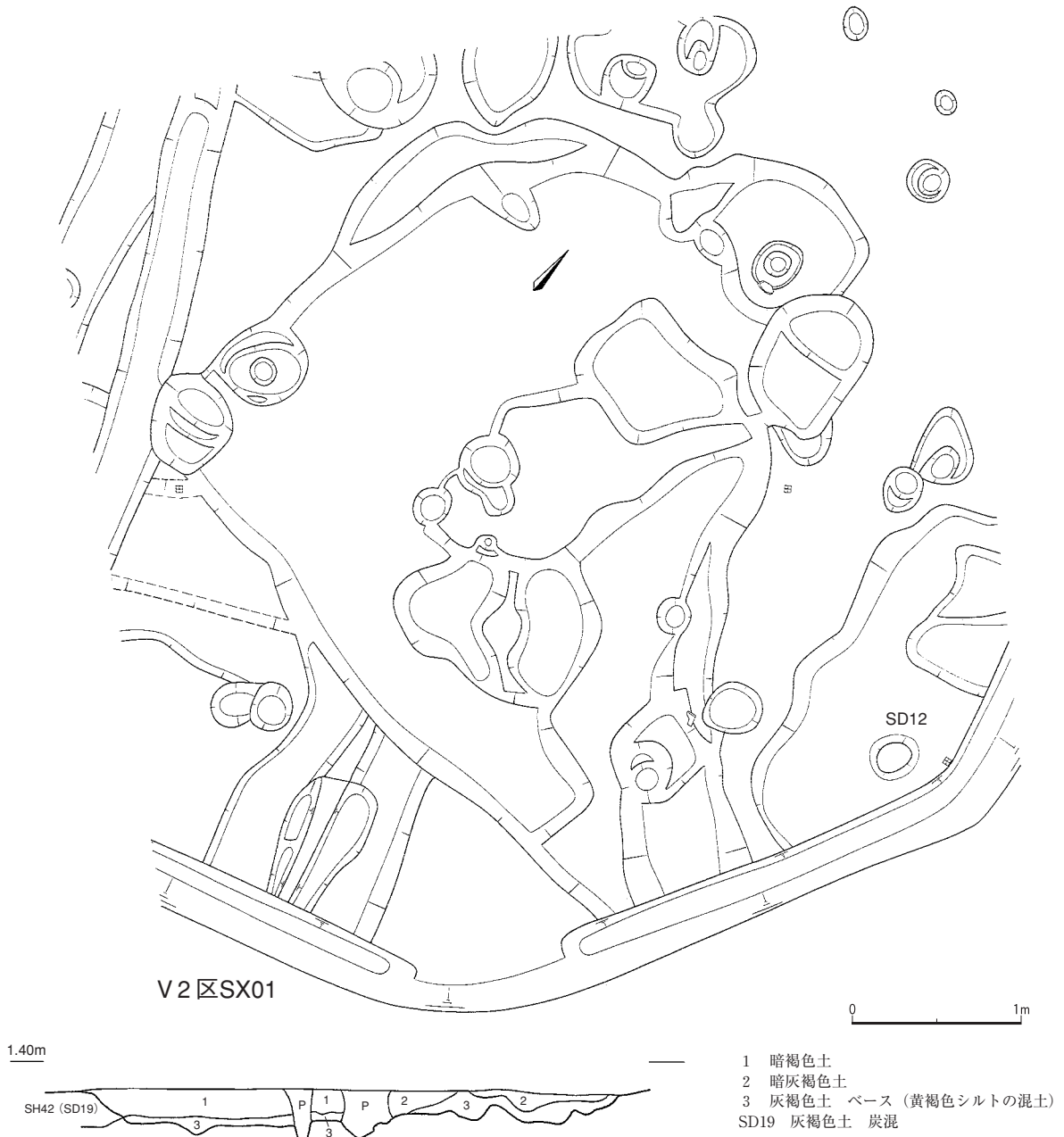
第159図 土坑実測図10 (S=1/40)



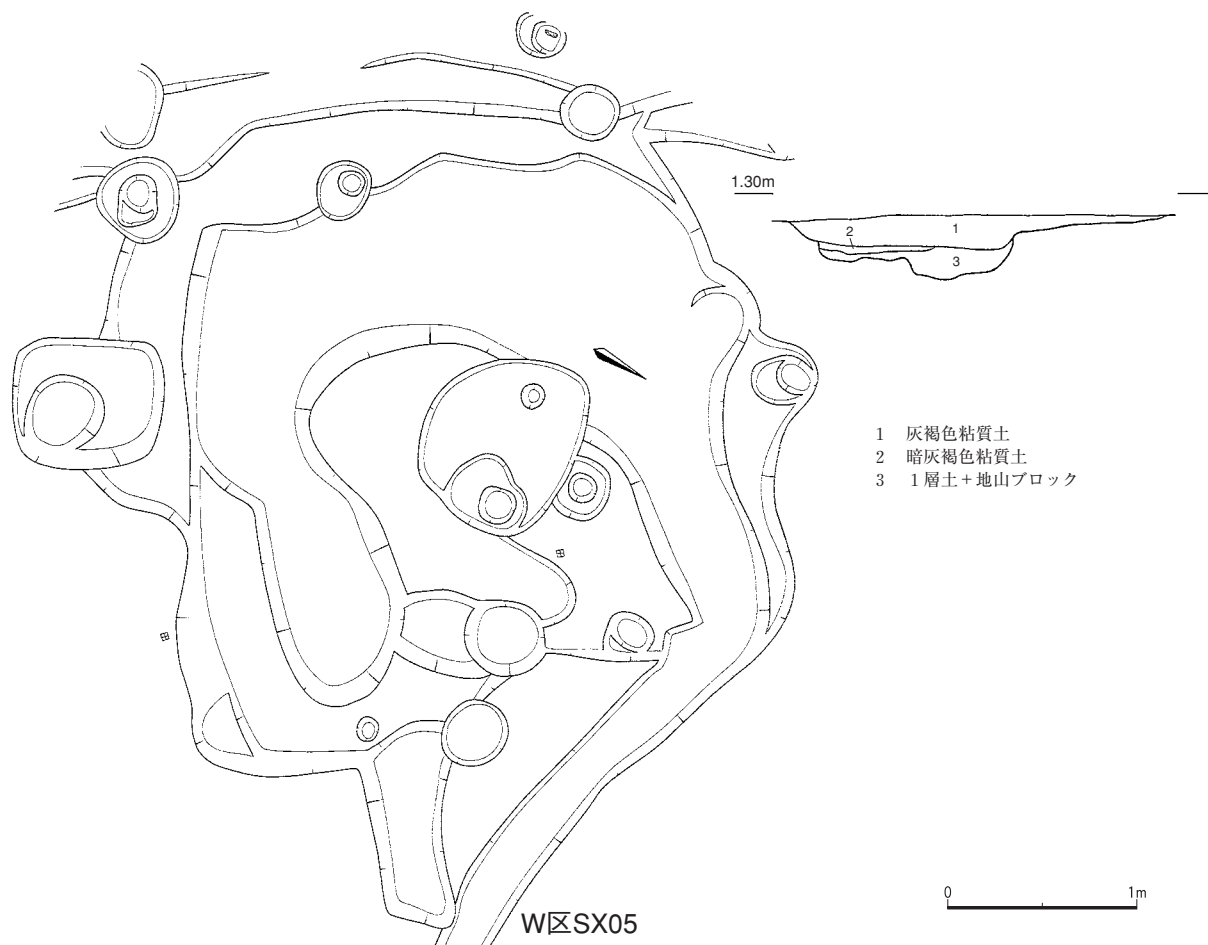
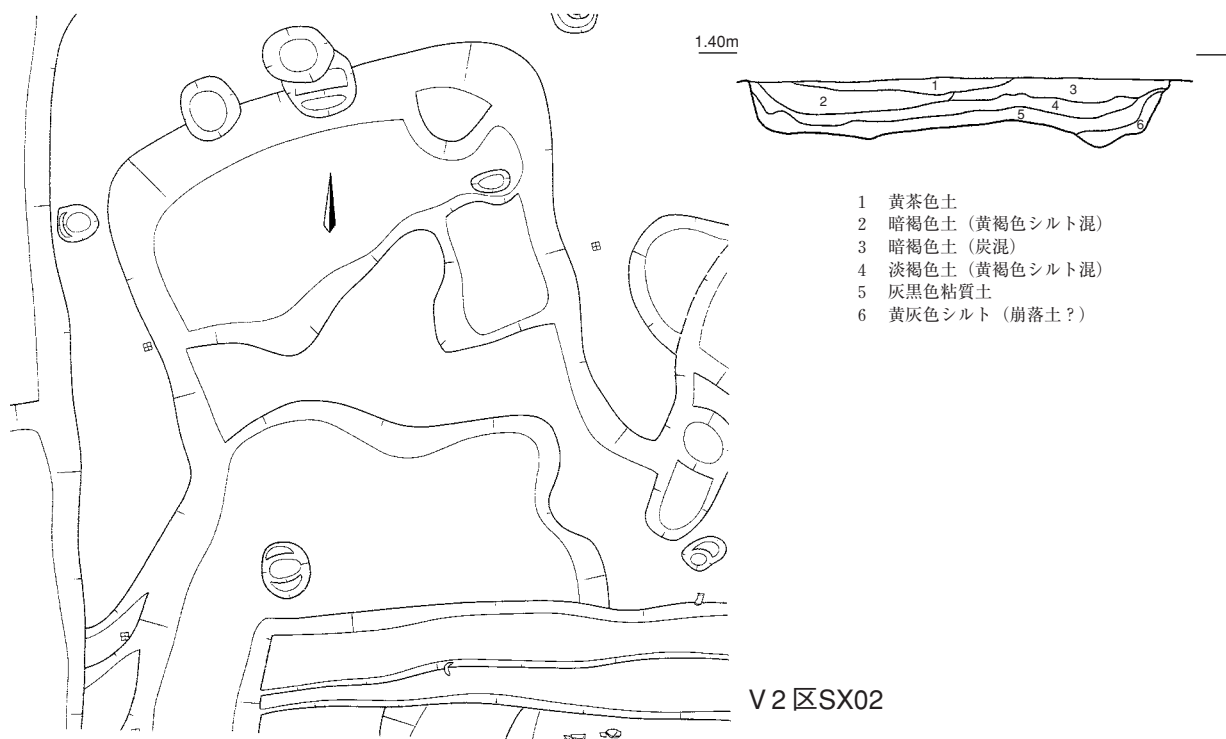
第160図 溝土層図 (S=1/40)



第161図 V2区溝群遺物散布図 (S=1/100)



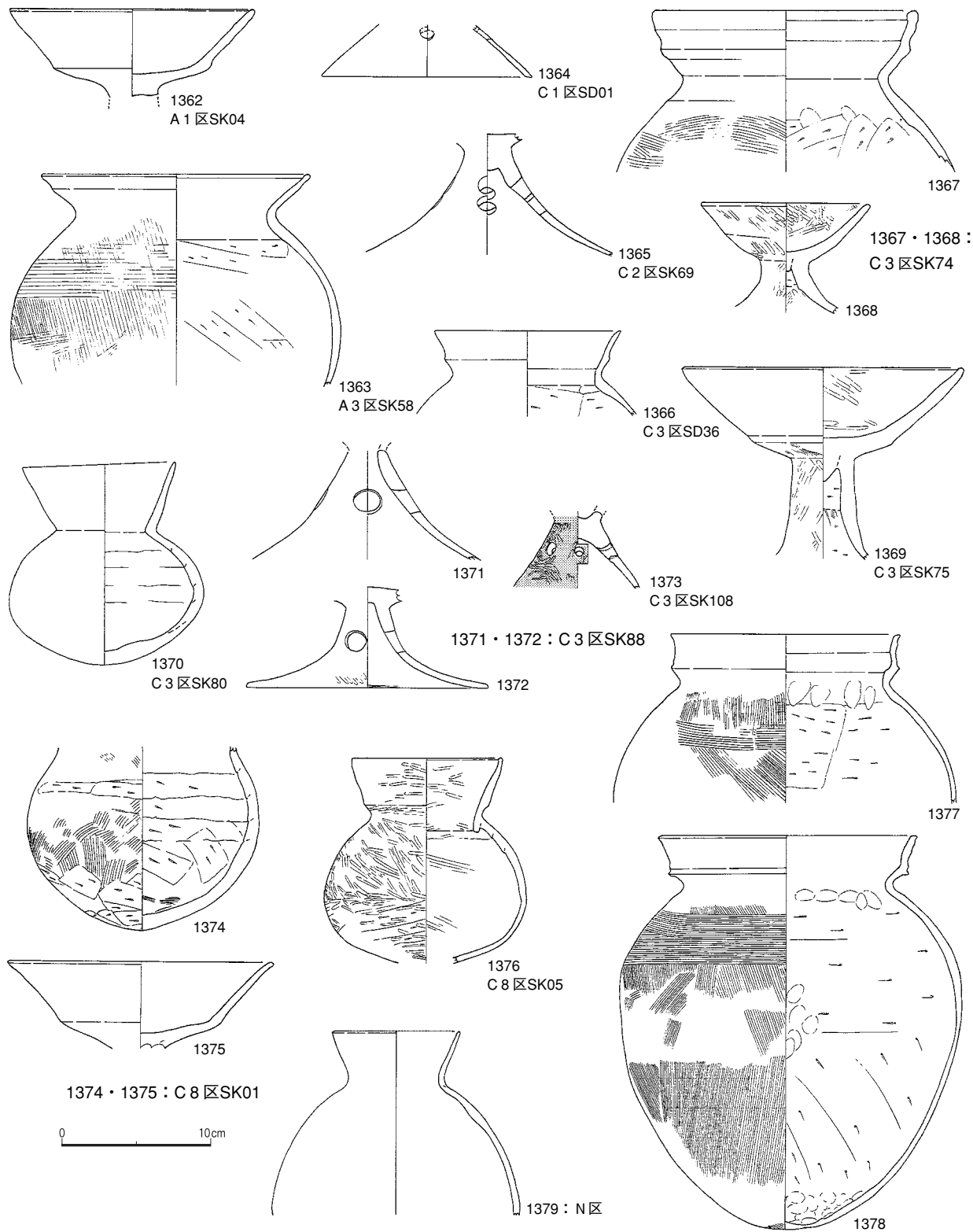
第162図 落ち込み実測図1 (S=1/40・1/100)



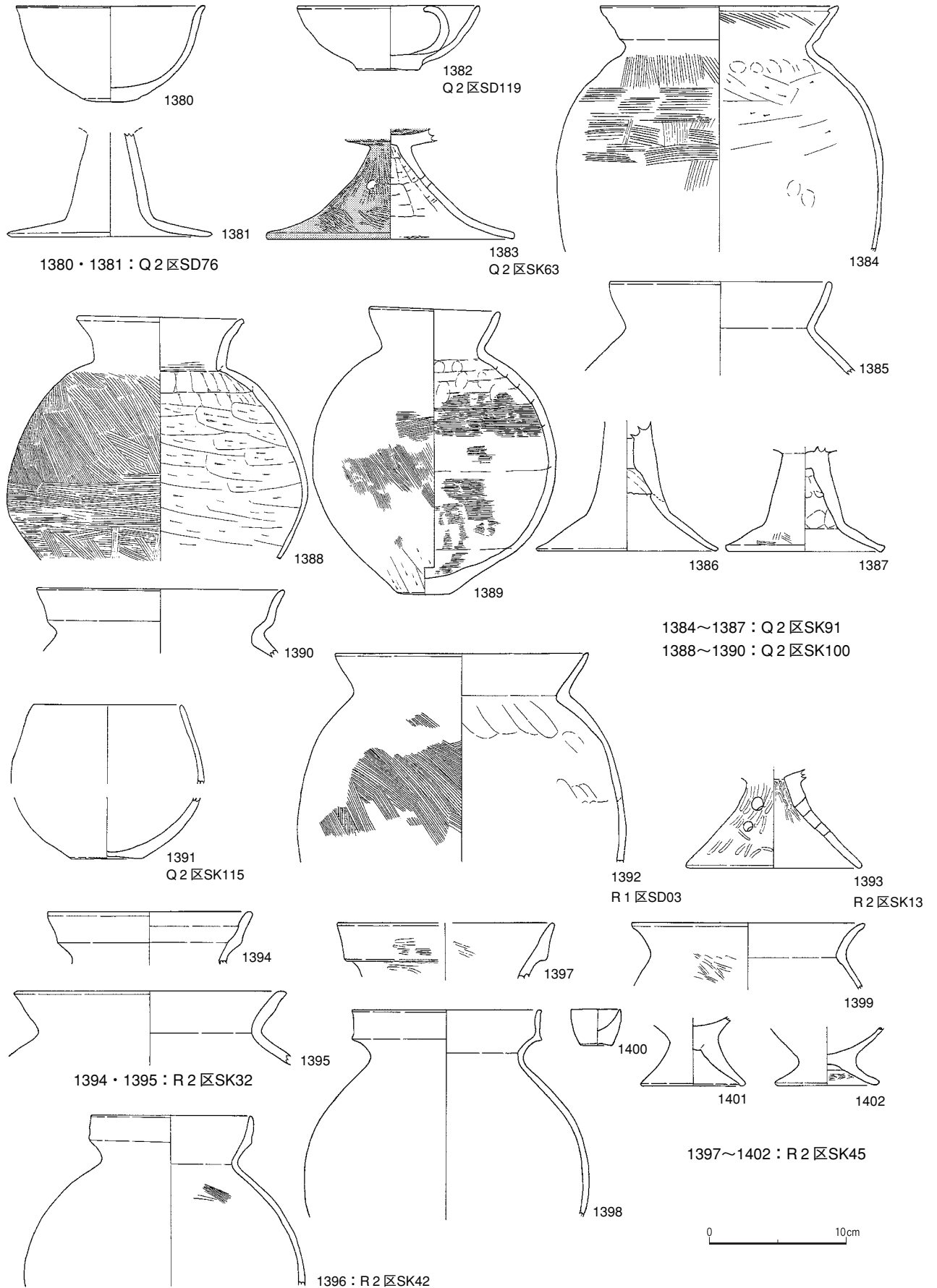
第163図 落ち込み実測図2 (S=1/40)

第17表 古墳その他遺構一覧

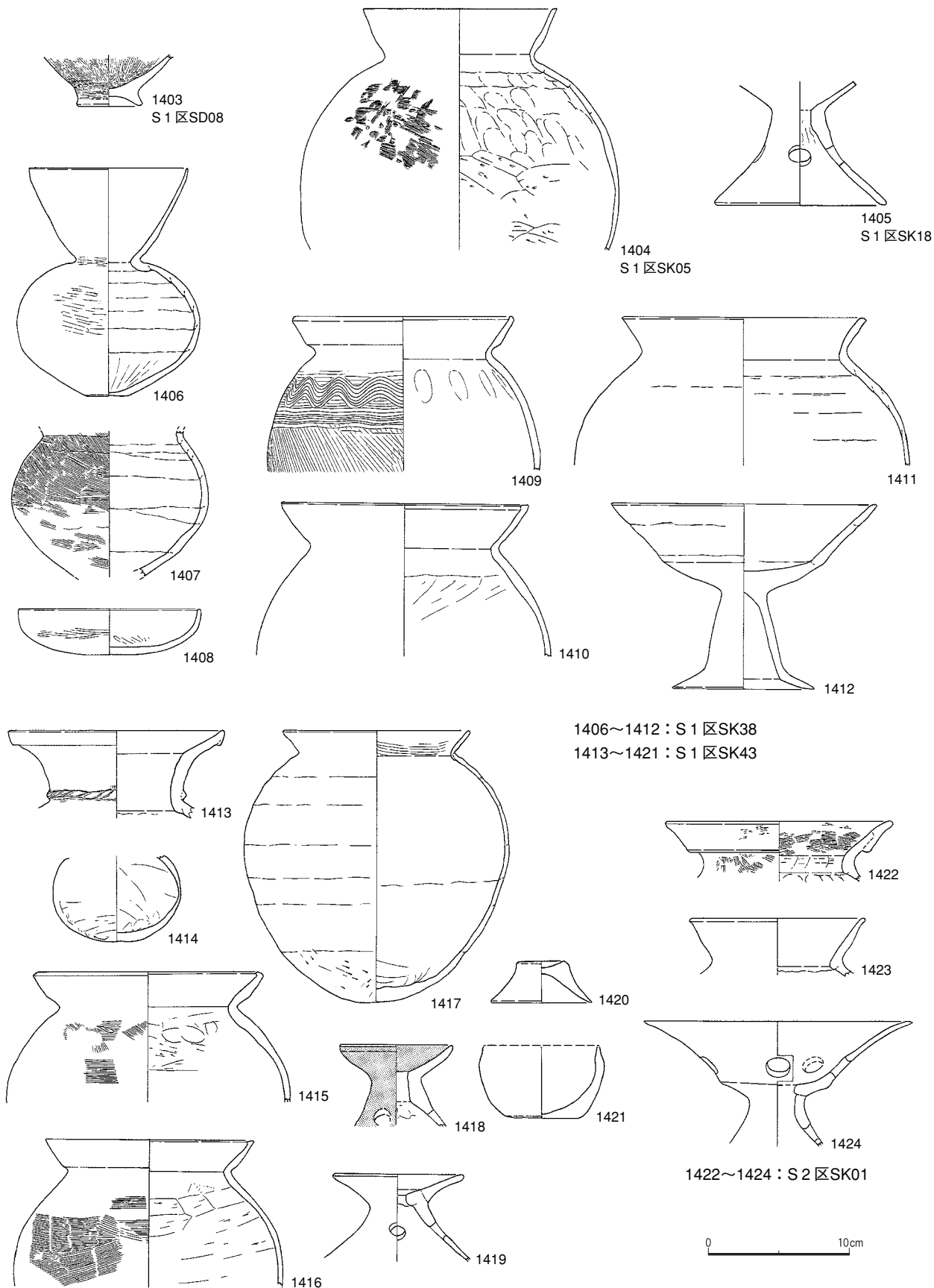
地区	遺構名	グリッド	実測遺物	備考
A1	SK04	Z・AA29	1362	
A3	SK58	AH22・23	1363	
A4	SK61	AK20	なし	
A4	SK63	AK20	なし	
B1	SD59	AB23	なし	
C1	SD01	AC・AD21	1364	R1区SD02・03に続く?
C1	SD02	AD21	なし	H区SD09・Q2区SD125に続く
C2	SK45	AA17	なし	
C2	SK69	Z16	1365	
C3	SD36	AE19	1366	
C3	SD44	AF17・18 AG17・18	なし	
C3	SK74	AD20	1367・1368	
C3	SK75	AD20	1369	
C3	SK80	AF19	1370	
C3	SK81	AE19	なし	
C3	SK88	AF18	1371・1372	
C3	SK108	AF17	1373	
C8	SK01	AD14	1374・1375	
C8	SK05	AD15	1376	
M3	SK11	I24	なし	
N1	SK05	U27	なし	
N2	SK17	J・K20	W314	
N2	SK106	Q22	なし	
Q2	SD76	AF20	1380・1381 J37	
Q2	SD119	AD22	1382	
Q2	SK63	AE20・21	1383	
Q2	SK91	AF22	1384~1387	
Q2	SK100	AE23	1388~1390	
Q2	SK115	AC22	1391	
R1	SD03	AC20・21	1392	
R2	SK06	X17	なし	
R2	SK10	Y17	3421	遺物は中後期、時期も中後期か
R2	SK13	Y18	1393	
R2	SK32	Z19	1394・1395	
R2	SK38	Z18	なし	
R2	SK42	Z17	1396	
R2	SK45	AA18	1397~1402	
R2	P47	X18	E51	
S1	SD08	AE18	1403	
S1	SK05	AE18	1404	
S1	SK18	AD19	1405	
S1	SK38	AC17・18	1406~1412	
S1	SK43	AB17・18	1413~1421	
S2	SK01	X16	1422~1424	
S2	SK03	Y16	1425~1428	
S2	SK07	X16	1429 J31	
S2	SK11	Y・Z16	1430	
S3	SK04	U16	なし	
U	SK12	AE29	1431	
V2	SD06・07	H22	なし	弥生SH42を切り込む遺構
V2	SD12	H22	なし	
V2	SD23	H・I21	1440~1443 E59	
V2	SD24	G21・22	なし	
V2	SD26	H・I21	1444	
V2	SD27	H20・21	なし	
V2	SD28	I20	なし	
V2	SK12	I19	なし	
V2	SX01	H22	1432~1439	弥生SH42を切り込む遺構
V2	SX02	H20	1445	
W	SD15	L17	1446	
W	SD63	S19	なし	SB233に伴う?
W	SK02	J17	なし	
W	SK10	M17	なし	SK54と一連か
W	SK14	L19	なし	
W	SK52・53	O17	なし	
W	SK54	N17	なし	SK10と一連か
W	SX02	J16・17	1449	
W	SX05	M17	なし	
W	SX53	S20	1447・1448	



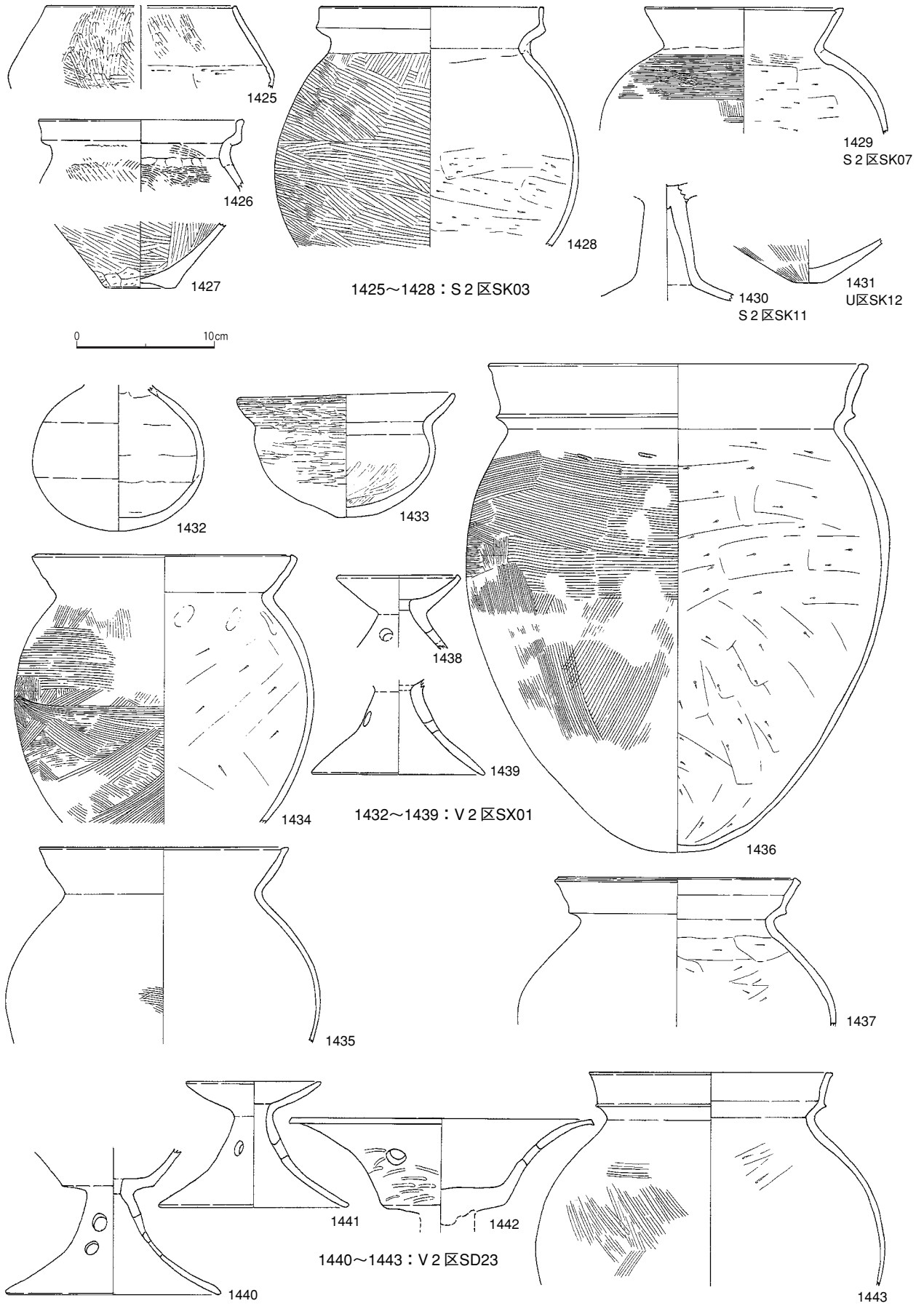
第164図 その他遺構出土土器実測図1 (S=1/4)



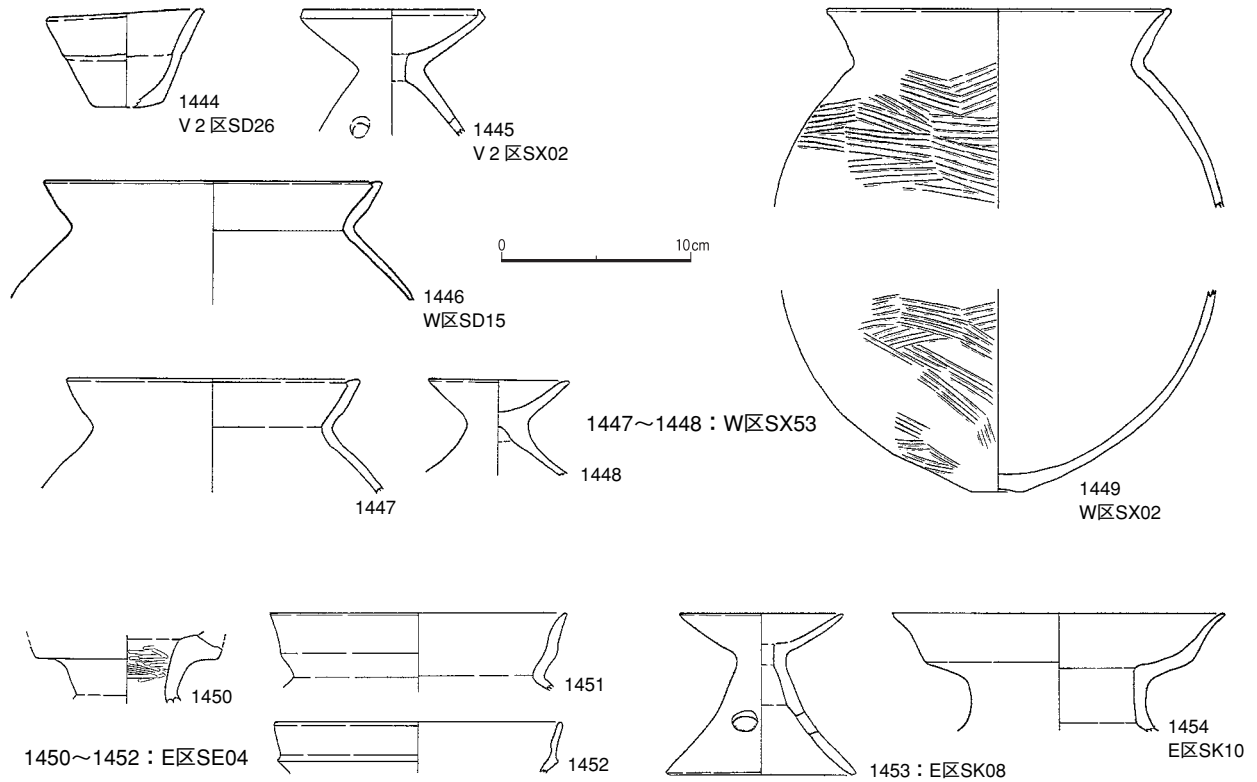
第165図 その他遺構出土土器実測図2 (S=1/4)



第166図 その他遺構出土土器実測図3 (S=1/4)



第167図 その他遺構出土土器実測図4 (S=1/4)



第168図 その他遺構出土土器実測図5 (S=1/4)

2 土製品 (第169図、第19表、図版87)

本項で扱う土製品は、成形された粘土塊に貫通孔をもつものであり、弥生・古墳時代に区分されたものを一括して掲載する。図化点数は合計32点であり、出土状況の内訳は大溝群から出土したものが22点、古代・中世の遺構に混入したと判断したものが4点 (E32・41・42・55)、竪穴系建物や土坑等の遺構から出土したものが6点である。出土頻度は比較的散漫であり、狭い範囲に集中した事例はない。形態は球形のもの (E31～42)、算盤玉形のもの (E43～46)、円筒形のもの (E47～58)、紡錘形のもの (E59・60)、小型で特異なもの (E61・62) に分類した。以下、この順で解説を加える。なお、DN5・6 (B3区SD16) では図化していないが、筒形が1点、円筒形でE57と似た形態が2点、手捻り状で成形時の崩れが大きいものが1点出土している。この他にも抽出されていないものが存在するかもしれないが、ある程度は様相を把握できたものと考えておきたい。

球形のものは12点あり、主体的な形態となる。孔縁は摩耗や欠損で確認できないものもあるが、調整されているものが多く、雑な仕上げのものは見られない。重量分布は36～40gのものが多く、わずかに欠損するE31も含まれよう。最小 (E41・42) は13g、次小 (E37・40) は20～22g、最大 (E35) は66gとなる。E39はやや細長い形態であり、重量分布も他のものから外れている。

算盤玉形のもの4点ある。孔縁が両端とも遺存しているものについては、一方に粘土が若干盛り上がって残る。重量はわずかに欠損するE43が30g台、完存するE45が52gであり、欠損が大きいE44・46は後者に近くなるものと予想する。E46は胴張りが弱く、球形のものに近い。

円筒形のもの12点あり、球形と同数であるが、形態は多様である。長さ・幅がほぼ等しいもの (E47・48)、やや細長くなるもの (E49・50・52～54)、明確に細長くなるもの (E55・56)、細長くて両端が緩やかに面をとるもの (E57・58) に区分できる。重量は最小18g以下 (E52)、続いて30～33g以上 (E49～51)、41～46g (E47・48)、最大68～75g (E53・54) の分布をなし、細長い形態のものはこれらからやや外れてくる。端面は調整されているものが多いが、両端とも窪んで未調整 (E53)、一方がやや雑な仕上げ (E54)、両端とも雑な仕上げ (E56・58) のものがある。孔径はよく似るが、小径 (E52・55)、大径 (E49) がごく少数ある。E48は長辺方向に弱い亀裂が見られる。E51については端縁が欠損しており、形態や数値は正確なものではない。

紡錘形のもの2点ある。細長くて両端に明瞭な面を持たないものを区別した。重量にはかなりの差がある。E60は掲載例中で最大規模のものであり、胴膨れで側縁は調整されている。重厚で孔径は小さく、長辺方向には弱い亀裂が見られる。

小型で特異なものは2点ある。E61は図・写真でみる下半が球形、上半が円錐形で、境を細い沈線と連続刺突で飾る。E62は釣鐘形で、逆転させると土器のような外見となる。掲載例中で最小規模のものであるが、器面には黒斑が付く。どちらもほとんど類例を見ない土製品であるが、E62については小松市八日市地方遺跡の市調査区に同巧品がある。

以上の土製品は、小型特異品を除けば、弥生・古墳時代の有孔土玉あるいは土錘等の名称で報告されている類のものである。概して時期を限定できる遺構からの出土例が少なく、この時代の中での詳しい変化は明らかでないが、その出現については近年の発掘調査成果から窺い知ることができる。羽咋市吉崎・次場遺跡V-5号溝や小松市八日市地方遺跡 (市調査区) 埋積浅谷ix層以下の状況を見ると、弥生時代の中期前半には本項でいう円筒形で端が緩やかに面をとるもの、紡錘形のもの存在しており、出現期と推定できよう。中期後半には円筒形で水平面をとるものに移行するようであり、和田晴吾のいう西日本地域での管状土錘a類からc類への移行とほぼ一致する様相である。また、この段階には八日市地方遺跡埋積浅

谷Ⅷ層以上の状況（県調査区でも同じ様相）から、球形のものが出現しており、以降は主体となる。算盤玉形のものも金沢市戸水B遺跡等の事例からほぼ同時期かわずかに遅れて出現するものとみたい。この時点で紡錘形のものはやや不明確であるが、ほぼ全ての形態が揃う。後期から古墳前期2期までは各形態を見ることができ、様相はそう変わらないようである。ただし、古墳前期3期以降は良好な事例がほとんどなく、様相は不明となる。古墳中後期には球形のものが志賀町中村畑遺跡B地区大溝等で散見はできるが、同時期の多くの遺跡では出土しておらず、積極的にはその存在を評価できない。古代以降は本遺跡群でも紡錘形のもの、円筒形のものも多く出土しているが、古墳中後期から推移を辿ることは難しい状況である。

土製品の用途については土錘と評価されているが、現在までのところ具体的に復元できる事例はない。ただし、球形のものについては鳥取県青谷上寺地遺跡での樹枝環装着例から、一般に想定される土錘としての使用方法は否定されており、八日市地方遺跡でも類似した事例が1例報告されている。球形のものにそれに近い算盤玉形のものについては後の時代に同形品がほとんど見られないことから、この時代に通有の土製品であり、他とは異なる機能や使用方法が求められそうである。

本項で掲載した土製品のうち、遺構の時期が大まかにでも特定できそうなものは、古い順に弥生中期後半（E62）、古墳前期1～2期（E44）、古墳前期2～3期（E59）、古墳前期（E47）、古墳中期（E45）、古墳中後期（E34・39）となる。このうち、古墳中期としたE45と古墳中後期としたE34・39については、前述した類例の乏しさと、本遺跡群では混入が十分に考えられるので保留しておきたい。また、前述した出現期の様相に対照すれば、円筒形で端が緩やかに面をとるもの（E57・58）、紡錘形のもの（E59・60）については弥生中期まで遡る可能性があるろう。

3 石製品・石製玉・金属製品

石製品（第170図、第20表、図版88）

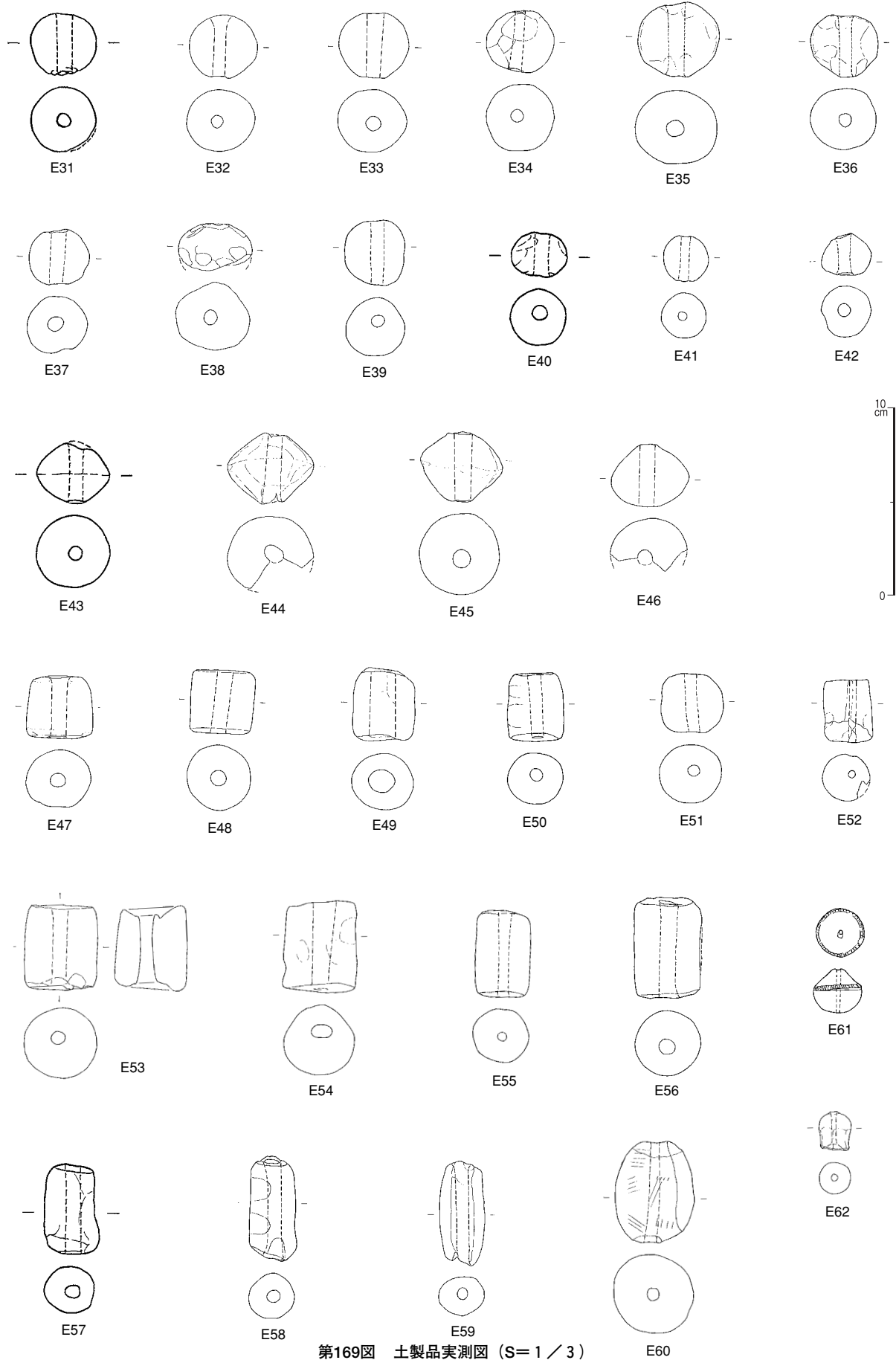
石斧状の石製品（S101）、九州型石錘（S102・103）、中部型石錘（S104～107）の合計7点を掲載した。S101は長辺側の一方に刃部を形成しており、押切具のような機能を想定した。S102は孔部分で欠損しているが、大きさから見て一方のみ施溝されるタイプであろう。S103は両端に穿孔・施溝されるもので、石材は蛇紋岩と鑑定されるが、同じ鋳床で採取される滑石に質感に近い。これは九州型石錘の石材の特徴とも一致するものであり、搬入された可能性を指摘したい。S104～107は形態差があるが、基本的に石類や砥石と共通する使用痕跡が観察され、兼用されている。転用かもしれないが前後関係はわからない。石製品の時期はS101がS H24周溝から出土しており古墳前期2期、S105が古墳前期に位置付けられる他は、遺構の時間幅が広いいため特定は難しい状況である。

石製玉（第171図、第21表、図版88）

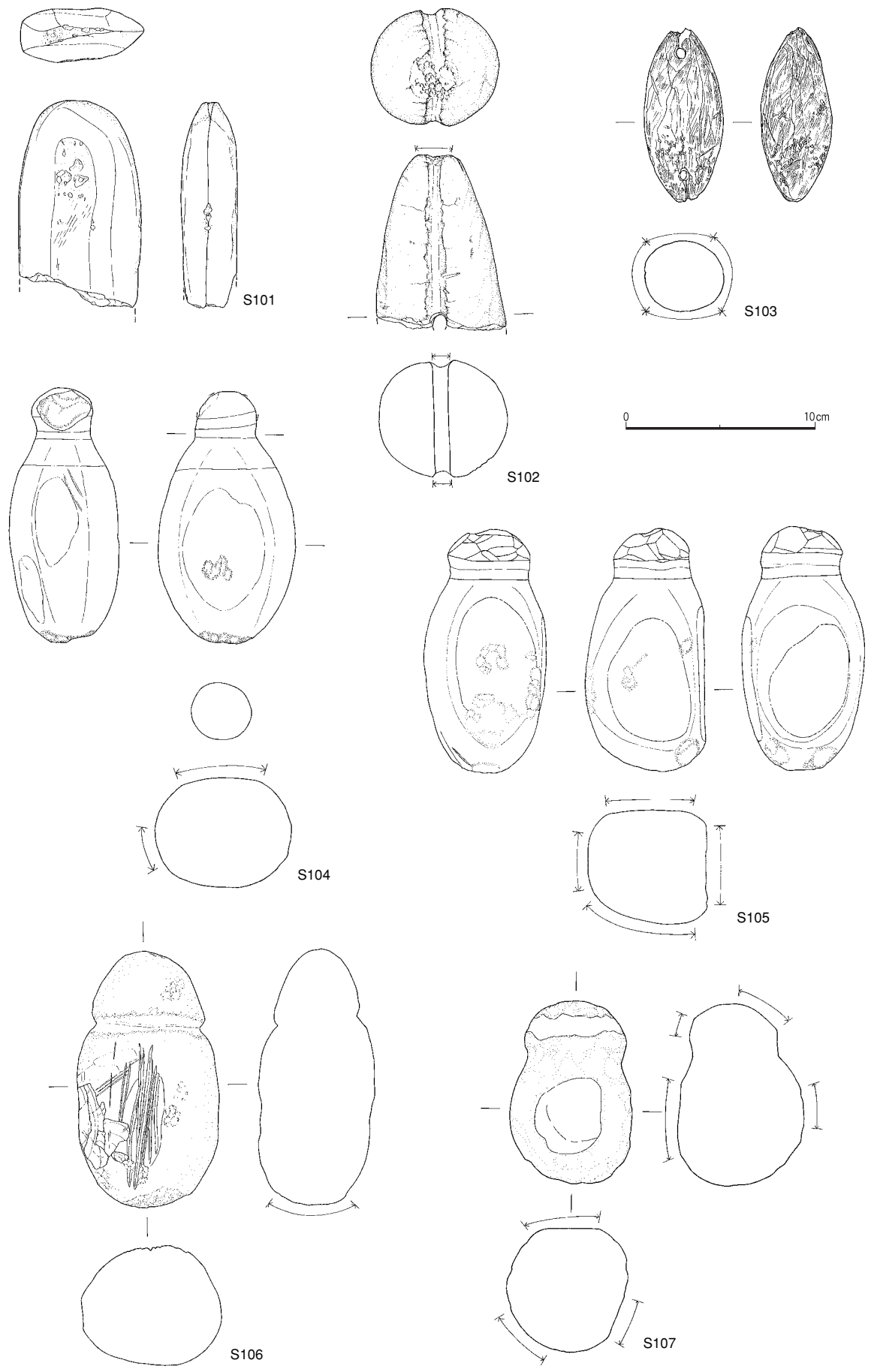
いわゆる碧玉製品で、古墳前期の時期と推定したものを掲載した。管玉（J31～36）、未成品（J37）、石核（J38）がある。石材の質感は濃緑色硬質（J31）、淡緑色軟質（J32～35）、濃緑色硬質（J36）、灰白色軟質（J37）、淡緑色やや軟質（J38）である。J32は中世の遺構に混入して出土した。J36は細短身で弥生時代の可能性があるが、出土した遺構からここに含めた。J37は腕飾類の未成品で、穿孔前研磨段階で破損したものであろう。時期はJ31が古墳前期3期、J33が同1期以前、J36が2期、J37が3期以降、J38が古墳前期に位置付けられるが、他は特定が難しい状況である。

金属製品（第171図、第22表、図版88）

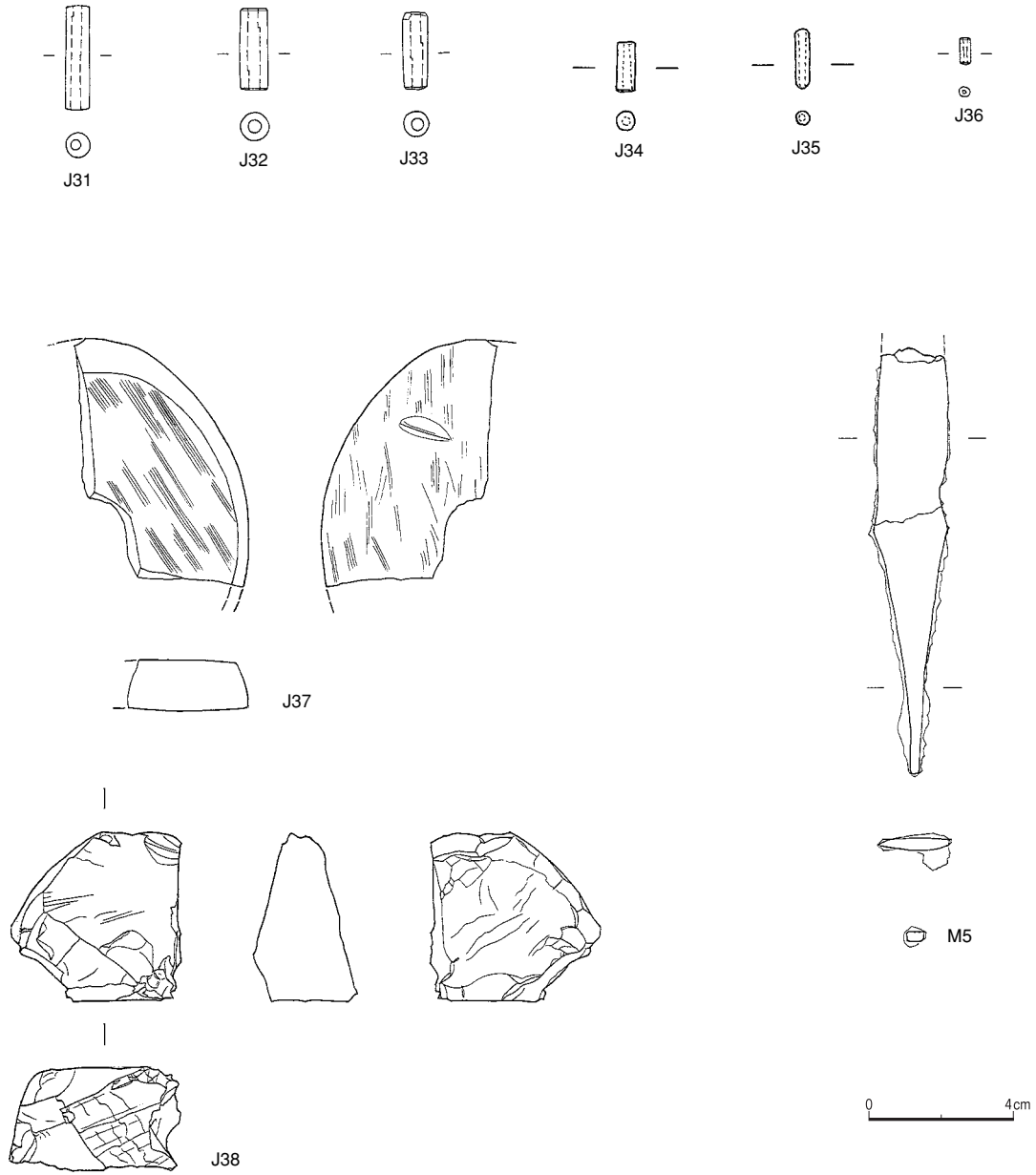
S H24出土の鉄鎌（M5）がある。長茎で刃部先端を欠損する。時期は古墳前期2期である。



第169図 土製品実測図 (S=1/3)



第170図 石製品実測図 (S= 1 / 3)



第171図 石製玉・金属製品実測図 (S=1/2)

第19表 古墳土製品一覧

報告番号	種別	特徴	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	報告遺構	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	実測班	ランク	実測番号
E31	土製品	有孔	1999	A2	SD06				DS4	32	34.5	(33)	(33.05)	01t	C	130
E32	土製品	有孔	1999	E	SK05	I26				33.5	36	33	38	02s2	C	520
E33	土製品	有孔	2001	Q2	川跡		NW		DS8	35	37.2	34	39.41	03m1	D	734
E34	土製品	有孔	2001	R2	SD05	X17			DN7	33	36	35	36.4	03b2	石	471
E35	土製品	有孔	2002	W	川	J18	4 右岸中	下層	DN9	40	43	39	65.84	03b1	D	274
E36	土製品	有孔	2002	W	川	J17	4 左岸中	下層	DN9	33	36	32	37.85	03b1	D	273
E37	土製品	有孔	2002	W		H17	(2)	検出面	DN9	30	32	30	21.93	03b1	D	298
E38	土製品	有孔	2000	O1	SD07	U22	bc	下層	DS8	(25)	(38.5)	(37.5)	(26.5)	02s1	石金	5-3
E39	土製品	有孔	2001	R2	SD05	X17			DN7	35	31	31	29.41	03b2	土	42
E40	土製品	有孔	1999	B2	SD16				DS8	24	30	31	20.57	01t	C	133
E41	土製品	有孔	2001	T	SD01	X29	E			24	24	24	13.06	03b2	土	44
E42	土製品	有孔	1999	C2	SD17	Z17		上層		22	27	27	13	02s2	C	229
E43	土製品	有孔	1999	B2	SD16		1-1b	4層	DS8	(32)	39	39	(32.13)	01t	C	134
E44	土製品	有孔	2001	Q2	SD67	AF21	N		SH16	37.5	46	(38.5)	(42.9)	03m1	D	428
E45	土製品	有孔	2001	Q2	SD104	AF22			SH17	37.5	44	43.5	51.43	03m1	D	438
E46	土製品	有孔	2001	Q2	SK102	AE22				33.5	41	(28)	(28.32)	03m1	D	493
E47	土製品	有孔	1999	A1	SD04		Aブロック		DS1	33	35	30	41	02s2	C	70
E48	土製品	有孔	1999	D2	SD07			下層	DN8	34	34	35	46	02s2	C	370
E49	土製品	有孔	2001	Q2	川跡	AD24	SW		DS8	39	33	30	30.93	03m1	D	726
E50	土製品	有孔	2001	R1	河遺		2		DS8	37	30	28	31.28	03b2	土	40
E51	土製品	有孔	2001	R2	P47	X18				(31)	33	31	(32.46)	03b2	土	43
E52	土製品	有孔	2001	Q2	川跡	AE24	NW		DS8	33.5	25.8	25	(17.56)	03m1	D	738
E53	土製品	有孔	2000	O1	SD07	T20	c	中～下層	DS8	47	39	37.5	75	02s1	石金	5-2
E54	土製品	有孔	2001	Q2	川跡	AC23	SE		DS8	49	39.5	40	68.83	03m1	D	715
E55	土製品	有孔	2001	T	SD22					46	30	29	39.37	03b2	土	39
E56	土製品	有孔	2002	W	川	I18	4 左岸北	下層	DN9	54	36	35	62.94	03b1	D	270
E57	土製品	有孔	1999	B3	SD16		6-2	2層	DN5	48.5	29	24.5	29.84	01t	C	589
E58	土製品	有孔	2002	W	川		4	下層	DN9	51	25	24	28.19	03b1	D	268
E59	土製品	有孔	2002	V2	SD23	H・I21				56	24	21	24.82	03b1	D	151
E60	土製品	有孔	1999	F	SD29	J23			DN9	54	43	42.5	92	02s2	C	419
E61	土製品	有孔	1999	F	SD29	J22			DN9	23.4	23.8	24.4	11.66	02p		127
E62	土製品	有孔	2002	S3	SK03	U16				21	17	17	5.4	03b1	C	113

*1 広範囲で特定できないグリッドは省略した。
*2 欠損しているものは長、幅、厚、重量の現存値を () 書きした。

第20表 古墳石製品一覧

報告番号	種別	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	報告遺構	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石材	実測班	ランク	実測番号
S101	石製品	押切具か	2001	T	SD04		東溝1群		SH24	(107)	65	29	(277.81)	凝灰岩	03b2	石	2
S102	石製品	石鍾	1999	A3	SD58	AF24				(93)	(68)	(52)	(432)	細粒安山岩	02s2	石金	3
S103	石製品	石鍾	1999	C1	SD16	AB22	b	暗灰砂	DS8	92	42	38	203	蛇紋岩	02s2	石金	16
S104	石製品	石鍾	2001	R1	河遺		12		DS8	134	73	58	615.42	凝灰岩(砂岩質)	03b2	石	9
S105	石製品	石鍾	2002	W	SD59		アゼより北		DN3	129	65	63	734.66	砂岩	03b1	石金	20
S106	石製品	石鍾	1999	B3	SD16	T16・17	7-1	暗褐色粘	DN6	135	75	65	709.8	凝灰岩	02s2	石金	7
S107	石製品	石鍾	1999	A2	SD08	AC24	アゼ北		DS8	97	65	67	512	凝灰岩	02s2	石金	5

*1 広範囲で特定できないグリッドは省略した。
*2 欠損しているものは長、幅、厚、重量の現存値を () 書きした。

第21表 古墳石製玉一覧

報告番号	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	報告遺構	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石材	実測班	ランク	実測番号	
J31	管玉	2001	S2	SK07	X16				29	6.5	6.5	2.19	未鑑定	03m1	小玉	8	
J32	管玉	2002	W	SD02	K18				22.5	7.7	7.7	1.46	未鑑定	03m1	石	63	
J33	管玉	2002	M3	SX01	I24				21.5	7.1	7.1	1.11	未鑑定	03m1	石	64	
J34	管玉	1999	B3	SD16	T16・17	6-2	暗褐色粘	DN5	13	5	5	0.4	未鑑定	02p	石	130	
J35	管玉	1999	A3	SD58	AF24				(16)	4	4	0.22	未鑑定	02p	石	131	
J36	管玉	2001	S2	SK13orSD12	W15・16				SH34	7.5	3	3	0.09	未鑑定	03m1	小玉	9
J37	腕飾未成品	2001	Q2	SD76	AF20				68	48	14.5	52.52	凝灰岩(泥岩質)	03b2	石	19	
J38	剥片	1999	A1	SD04		中央アゼ	黒褐色土付近	DS1/6	47	47	26	59.31	緑色凝灰岩(泥岩質)	02p	石	133	

*1 広範囲で特定できないグリッドは省略した。
*2 欠損しているものは長、幅、厚、重量の現存値を () 書きした。

第22表 古墳金属製品一覧

報告番号	種別	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	報告遺構	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	実測班	ランク	実測番号
M5	金属製品	鉄鏃	2001	T	P22	V28			SH24	(119)	23	10.5	(18.44)	03b2	金	26

* 欠損しているものは長、幅、厚、重量の現存値を () 書きした。

第5章 ま と め

第1節 縄文時代

縄文時代の遺構としては、調査区北西端のV2区及びW区でベース土の下層に埋没した遺構面を確認し、数基の土坑を検出した。遺構面の時期は出土した土器から後期後葉～晩期前葉に比定でき、土坑は貯蔵穴の可能性が高いものを含んでいる。この地点は昭和44（1969）年に縄文土器が採集された地点と近接しており（第172図）、遺構・遺物の中心的な分布域であることが証明されたことになろう。この他、調査区全域から縄文土器が散発的に出土しているが、主体となるのは後期後葉以降の時期であり、それ以前の土器は基本的に乏しい。土器以外の遺物では第3章で報告した石器の一部が伴うものと推定できるが、下層遺構面では出土しておらず、石冠（S16、第2分冊S10）やV2区出土の石鏃等を除けば特定は難しい状況である。

縄文時代後期後葉～晩期前葉の景観としては、低湿地に土坑と少量の遺物が散在する状況であり、居住域としての要素には乏しく、むしろその周縁で食料獲得を行っていた領域を想定できよう。ただし、調査区の北西端で確認されていることから、未調査区に居住域が存在する可能性があり、遺跡の構造までは言及できない。本遺跡群が立地する犀川・浅野川間の平野部においては、後期後葉～晩期初頭の遺構は検出例に乏しいが、近接する藤江C遺跡ではやはりベース土の下層から同時期の居住域が確認されている。両事例をあわせて考えれば、付近一帯でこの時期の遺構面が埋没している可能性が高い。晩期中葉以降は出土土器を見る限りでは弥生時代へ継続していくようであるが、遺構がさらに不明確で遺物も少量であることから、低調な活動が予想される。以上のように、本遺跡群で得られた縄文時代の遺構・遺物は基本的に少量であるが、その意義は決して小さくないものといえよう。



1：V2区下層確認範囲 2：W区下層確認範囲 3：縄文土器採集地点（荒木・吉岡1970）

第172図 縄文時代の畝田西遺跡群（S=1/5,000）

第2節 弥生時代の集落

遺構配置 弥生時代の遺構は、調査区の北東部と南西部に距離をおいて分布している他、やや希薄であるが南東部にも若干確認することができる（以下、北東群、南西群、南東群と称する）。遺構が確実に形成され広域に展開し、本格的な居住域としての集落がはじめて成立する（第173図）。本遺跡群の縄文時代にはなかったことであり、弥生時代の大きな特徴といえよう。しかし、こうした分布状況は弥生時代開始期から存在したのではなく、また弥生時代の中で常に安定していたわけでもない。以降は弥生時代各段階の内容について述べ、その推移を辿ってみたい。なお、調査区を南北に貫く古墳時代の大溝群D S 8・DN 5・6・8は各遺構群の間に位置し、弥生時代の遺物が一定量出土していることから、その前身に相当する河川が存在した可能性があることをお断りしておく。

中期前半まで 縄文晩期末～弥生前期の状況は前節で述べた縄文晩期と基本的に同様である。遺跡としての継続は認められるものの、確実な遺構は検出できず、遺物も土器が散発的に出土する状況を示す。中期前半は依然として遺構・遺物は希薄であるが、北東群では溝が掘削されたようであり、遺物も増加傾向を示すことから、次の中期後半につながっていく変化の予兆をみることができよう。

中期後半 検出された遺構の大半がこの段階に属し、遺物も多い。土器量から勘案すれば石器の多くもこの段階に伴う可能性が高い。弥生時代の中心時期である。北東群、南西群の遺構配置はこの段階に成立する。北東群は河川DN 9の両岸に遺構が分布し、北岸は竪穴系建物と溝、南岸は土坑群で構成されている。北岸はさらに調査区外へ広がることが予想される。南西群は多数の土坑と複数の井戸を中心に構成されている。掘立柱建物も周辺の遺構の時期を見るとこの段階に属する可能性が高い。北西側は調査区外へ広がることが予想される。以上のように、北東群と南西群では遺構の構成が大きく異なっており、対照的である。北東群は居住域として問題なからうが、南西群は解釈が難しい。土坑の中には墓の可能性が高いものも含まれており、墓域と考えることもできるが、井戸や掘立柱建物の存在は居住域の近接を予想させる。この段階の集落に居住域・墓域の複合が一般的であることから、性格の限定は避けておくべきであろう。南東群については遺構が極端に希薄なため、同列に扱うことはできないが、絵画土器や磨製石剣といったやや特殊な遺物が出土しており、注意が必要である。

後期 後期には再び遺構が確認できなくなり、遺物も少なくなる。前段階と比較すれば急減であり、遺構配置も解消している。後期を前半と後半に区分して遺物量をみてみると、前半の方が少なく断片的であり、後半は増加するようである。後期前半の遺跡・遺構・遺物全般の資料が乏しくなることは、ほぼ全県的な様相であり、本遺跡群も例外ではない。後半の状況は次の終末期につながっていく動向と評価したい。大半の土器が出土しているDN 9の流向は南東から北西が推定されており、上流側の延長方向は第2分冊で報告されたA 5・L 5・L 6・P区及び平成12年度金沢市調査区にまたがる大規模な河川と交差する。金沢市調査区ではこの段階の土器が出土しており、DN 9と接続する可能性もある。また、交差が予測される地点には南東群の遺構が接している。居住域等は認識できなかったが、南東群については未調査部分が多いため、存在する可能性は否定しないでおきたい。

終末期 やはり遺構は少ないが、北東群には竪穴系建物を見ることができ、若干の遺構も確認できる。遺物も大半の土器はやはりDN 9から出土しているが、前段階より増加している。DN 9が本遺跡群南東部の河川と接続する可能性については前述したが、出土している土器はむしろこの段階以降の時期が主体であり、DN 9や南東群との一体性についてはより現実味を帯びるものといえよう。終末期の状況は次の古墳前期と関連しそうであるが、古墳前期1期の遺構分布は調査区南半を主としているため、終末期からの連続性は低い。

第3節 古墳時代前期の集落

1 遺構配置

古墳時代前期の遺構は調査区の北部、北西部、中央部、南西部、南部にそれぞれまとまって分布しており（以下、北群、北西群、中央群、南西群、南群と称する）、ほぼ全域に展開している。また、この時期は大溝群と小溝群が形成され、各群の間で水路及び区画として機能するようである（第174図）。ここではまず、各遺構群の内容、次に溝群の内容について述べる。なお、掘立柱建物については時期比定が困難なものが大半であるが、短辺1間のものについては竪穴系建物と重なることが少なく、各遺構群中でもよくまとまっていることから、古墳中後期の土器を出土したS B106を除けば基本的に古墳前期に属するという前提の下で論を進めていきたい。

北群 大溝群DN9の北東岸に位置する一群である。竪穴系建物は検出されていないが、本遺跡群最大規模の掘立柱建物S B129や井戸を含んでいる。さらに調査区外の北東へ展開することが予想され、昭和60～平成元年度石川県調査区に連続する可能性がある。中心となる時期は古墳前期2期前後である。

北西群 大溝群DN9の南西岸に位置する一群である。中央群とは小溝群SC4・5で区分される。竪穴系建物と井戸を含み、さらに調査区外の北西へ展開することが平成14～16年度金沢市調査区で確認されている。中心となる時期は古墳前期2～3期である。

中央群 小溝群SC4・5と大溝群DS1・DN3の間に位置する一群である。竪穴系建物と掘立柱建物が位置を別にしておき、井戸も伴う。竪穴系建物には本遺跡群最大規模のSH24が、掘立柱建物には概して大型の布掘や棟持柱構造のものが含まれている。遺構密度は南西群に及ばないが、本遺跡群の中核をなす重要な遺構群である。中心となる時期は古墳前期2～3期である。

南西群 大溝群DS2・DN2の南西岸に位置する一群である。竪穴系建物、掘立柱建物、井戸、その他多数の遺構で構成され、量・密度とも本遺跡群中で最大の遺構群である。掘立柱建物が竪穴系建物個々に近接する配置は中央群とは異なる。さらに調査区外の北西へ展開することが平成10・16年度金沢市調査区で確認されており、昭和57年度調査区に連続する可能性が高い。範囲が広くなれば、群中でさらに細分できる可能性もある。古墳前期を通して遺構が存在し、比較的安定している。

南群 大溝群DS1とDS2の間に位置する一群である。未調査部分が多いため、第2分冊で報告したL2・L3区まで含めるかどうか迷うが、ここでは含めておく。構成は近接する南西群と似るが、掘立柱建物は布掘構造のものが多く、中心となる時期は古墳前期1期と4期である。

大溝群と小溝群 古墳前期の大溝群と小溝群については、基本的に各遺構群と重なることはなく、相互の占有する領域を区画しているものと推定する。大溝群では、最北のDN9は弥生時代以来の河川であるが、古墳前期全般の土器が出土する。南西岸側には遺構の希薄な部分が見られ、空閑地的な領域かもしれない。その他の大溝群は中央群と南西群・南群の間を通り抜けているが、中心となる時期は少しずつずれているようであり、DS1は古墳前期2期前後、DS2は同1～2期、DN2は古墳前期3～4期、DN3は同2～3期を想定している。この他、古墳中後期とした大溝群でも前期1～4期の土器が一定量出土していることから、先行する溝群の存在が予想できる。DS7はそれが顕著であるため、ここでも扱うことにした。また、中後期のDS8・DN8部分に先行する溝群が存在したとすれば、各遺構群の区分も見直す必要があるが、現状では判断できない。小溝群については出土土器から古墳前期に特定できたものはSC4・5のみであったが、中央群と北西群、前述の空閑地的領域を区画する位置にあり、重要な存在である。

第23表 古墳前期遺構の推移

2 古墳前期の動態

ここでは各遺構群と溝群の推移について、古墳前期1～4期の段階別に述べる（第23表）。

古墳前期1期 遺構群のうち南西群及び南群が構成され、主として調査区の南半に遺構が展開する。北半を主とした弥生終末期の分布状況とは逆転しており、連続性は低い。この段階はDN9を除けば大溝群・小溝群の成立前であり、本格的な区画は存在しない状況を想定したい。

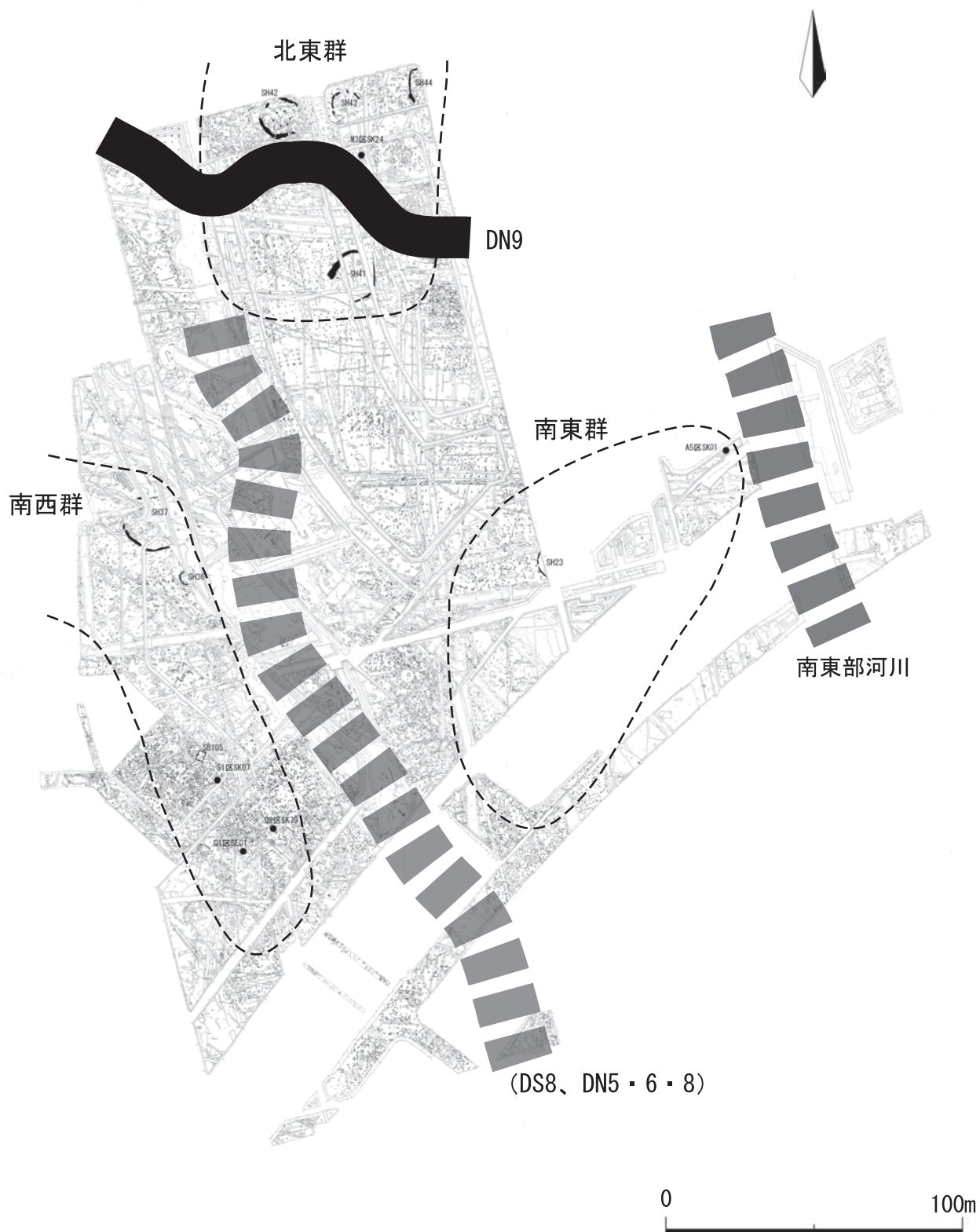
古墳前期2期 古墳前期の中心時期である。北群から南群まで全ての遺構群が成立し、調査区のほぼ全域に遺構が展開する。遺構・遺物量は最大となり、竪穴系建物跡が多く検出された昭和57年度金沢市調査区の中心時期とも一致する。同時に、各遺構群が大溝群によって区画されて機能し始める段階である。ただし、中央群と北西群の間には小溝群による区画が存在しなかった可能性がある。呼応するように中央群と南西群に見るような遺構群間の様相差も大きくなっている。

古墳前期3期 基本的には前段階の配置を継承しており、大きな変化はない。ただし、北群と南群では遺構が希薄になっている。また、中央群と北西群の間には小溝群が配置されているが、南西群と南群の間には大溝群による区画がなくなっている可能性がある。

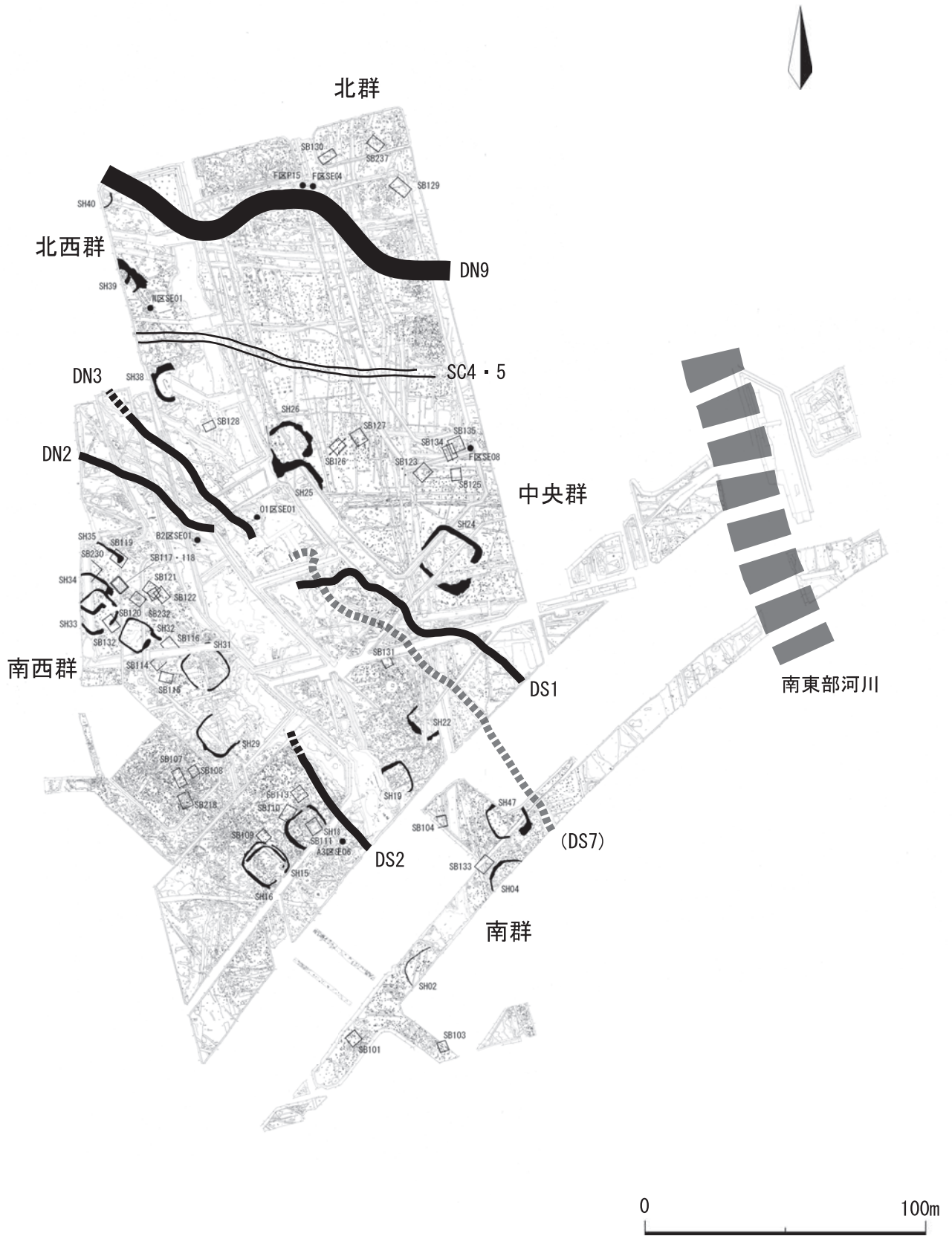
古墳前期4期 遺構・遺物とも減少し、分布は南西群及び南群に集中していく。特に竪穴系建物は南群にしか確実なものを見いだせない。この傾向は後続する古墳中後期と共通しており、連続する動向と評価しておきたい。大溝群は存続しているのであろうが、中央群以東・以北では遺構・遺物がほぼ存在しないことから、目的が遺構群と空白地の区画に変化している可能性が高い。

結 言 溝で区画された複数の遺構群で構成される古墳前期の集落を確認した。遺構群は遺跡を構成する集団単位として捉えられ、具体的な集落構造を提示できる良好な事例となる。面積40,000m²を超える希有な広域の発掘調査による成果であり、他と比

群	遺構	時期	1期	2期	3期	4期
北	F区SE04					
	F区P15					
	V2区SD23			-----		
	V2区SX01			-----		
	V2区SX02	-----				
北西	SH39					
	SH40	-----				
	W区SE01					
	W区SD15					
	W区SX02	-----				
中央	SH24					
	SH25					
	SH26					
	SH38					
	F区SE08					
	O1区SE01					
	W区SX53					
南西	SH15					
	SH16					
	SH18					
	SH29					
	SH31					
	SH32					
	SH33					
	SH34					
	SH35					
	A3区SK58					
	C1区SD01	-----				
	C2区SK69	-----				
	C3区SK74					-----
	C3区SK75					-----
	C3区SK80					-----
	C3区SK88					-----
	C3区SK108	-----				
	C3区SD36					
	C8区SK01					
	C8区SK05					
南	Q2区SK63	-----				
	Q2区SK91					-----
	Q2区SK100					
	Q2区SK115					
	Q2区SD76					-----
	R2区SK10					
	R2区SK13	-----				
	R2区SK42	-----				
	R2区SK45		-----			
	S1区SK05			-----		
	S1区SK18	-----				
	S1区SK38			-----		
	S1区SK43			-----		
S1区SD08	-----					
S2区SK01						
S2区SK03	-----					
S2区SK07						
S2区SK11						
南	SH19					-----
	SH22					-----
	SH47					-----
	A1区SK04					-----
U区SK12	-----					



第173図 弥生時代の畝田西遺跡群 (S=1/2,000)



第174図 古墳時代前期の畝田西遺跡群 (S=1/2,000)

較することは難しいが、近接して別水系に位置する藤江C遺跡は規模・構造・時期が比較的近似することが予想される。水系毎にこの種の集落が普遍的に存在するかも含めて、今後は研究の深化に期待したい。

参 考 文 献

(第1・4・5章関係分)

- 荒木繁行・吉岡康暢 1970 「金沢市畝田弥生遺跡調査予報」『石川考古学研究会々誌』第13号 石川考古学研究会
- 伊藤雅文ほか 1991 『畝田遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 伊藤雅文ほか 2003 『金沢市畝田・無量寺遺跡 畝田B遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 伊藤雅文ほか 2004 『金沢市畝田B遺跡 畝田C遺跡 無量寺C遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 岡本恭一 2005 『金沢市畝田西遺跡群Ⅰ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 北浦弘人ほか 2001 『鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団・国土交通省鳥取工事事務所
- 楠 正勝・南 久和ほか 1984 『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・
名鉄北陸開発株式会社
- 久保有希子 2000 「畝田・寺中遺跡」『金沢市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)
- 小西昌志ほか 1994 『金沢市藤江B遺跡(第2次)』金沢市教育委員会・石川県金沢西部開発事務所
- 下濱 聡・藤井秀明 2004 『石川県金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)
- 庄田知充 2003 『金沢市畝田大徳川遺跡』金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)
- 布尾和史ほか 2002 『金沢市藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 浜崎悟司・林 大智ほか 2004 『小松市八日市地方遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 浜崎悟司・伊藤雅文 2005 『金沢市畝田西遺跡群Ⅱ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 福島正実・伊藤雅文ほか 1988 『吉崎・次場遺跡(資料編②)』石川県立埋蔵文化財センター
- 福田弘光ほか 1970 『大徳郷土史』大徳公民館
- 福海貴子・橋本正博・宮田 明ほか 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
- 本田秀生ほか 2002 『金沢市藤江C遺跡Ⅶ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 前田清彦 1993 『松任市浜竹松B(竹松北)遺跡』松任市教育委員会
- 松山和彦ほか 2002 『金沢市藤江B遺跡Ⅳ』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代住居建築』中央公論美術出版
- 安 英樹 2002 「北陸の弥生集落概観」『フォーラム北陸における弥生都市ー小松市八日市地方遺跡を検証するー』
小松市教育委員会・第14回全国生涯学習フェスティバル実行委員会
- 安 英樹 2005 「金沢市戸水B遺跡」『石川考古学研究会々誌』第48号 石川考古学研究会
- 谷内尾晋司ほか 1982 『能登海浜道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ(志賀町中村畑遺跡 志賀町女郎塚遺跡)』
石川県立埋蔵文化財センター
- 湯村 功ほか 2002 『鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡4』(財)鳥取県教育文化財団・国土交通省鳥取工事事務所
- 和田晴吾 1985 「7 漁猟具 1. 土錘・石錘」『弥生文化の研究』5 道具と技術Ⅰ 雄山閣

[著者が明記されていないもの]

- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002 『大野郷を掘る』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003 『平成14年度金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004 『平成15年度金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005 『平成16年度金沢市埋蔵文化財調査年報』

写真図版



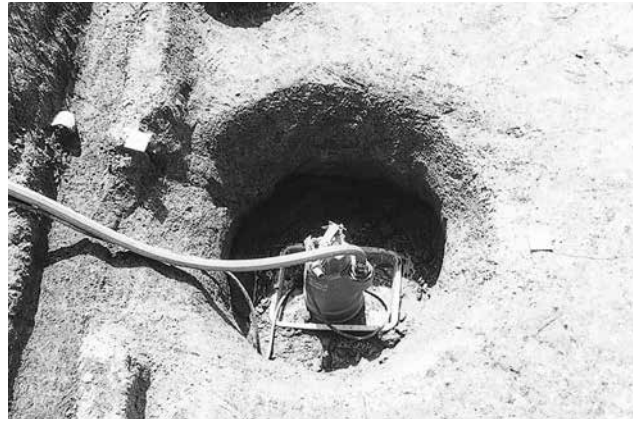
V2区下層完掘状況（東から）



V2区下層完掘状況（南東から）



V2区SK18土層断面（東から）



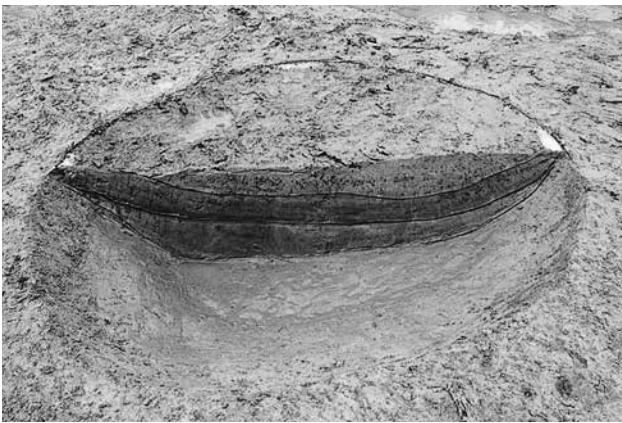
V2区SK18全景（東から）



V2区SK19土層断面（南東から）



V2区SK19全景（南東から）



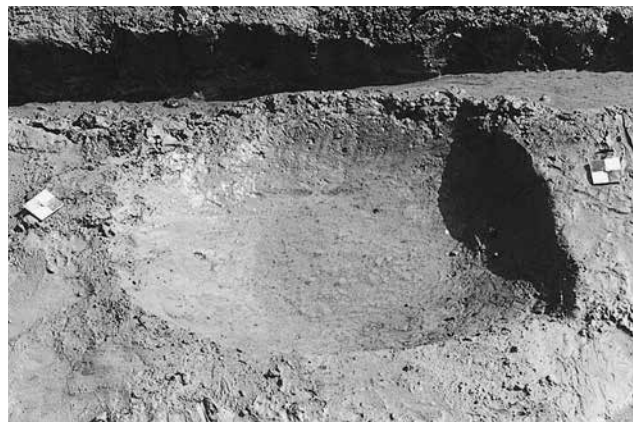
V2区SK20土層断面（北から）



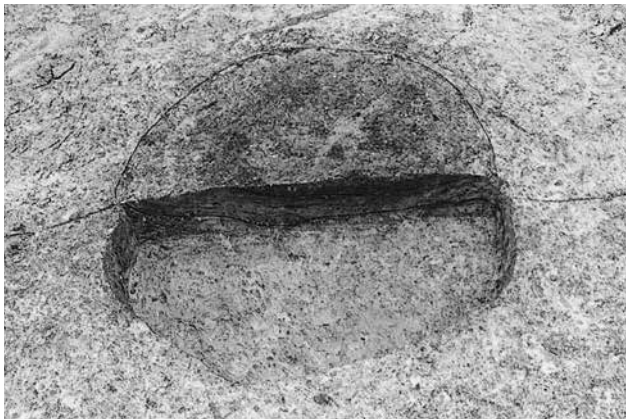
V2区SK20全景（北から）



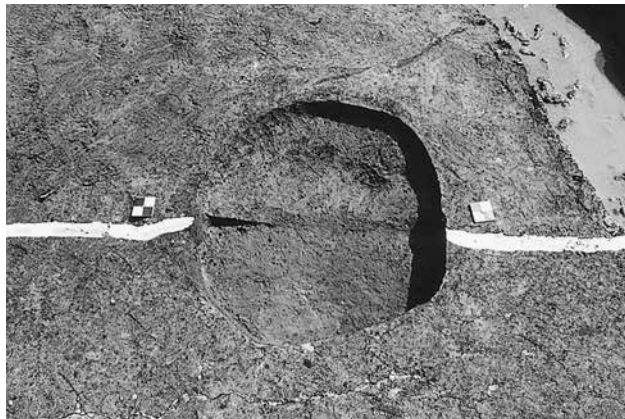
V2区SK21土層断面（北から）



V2区SK21全景（北から）



V2区SK22土層断面（北から）



V2区SK22全景（北から）



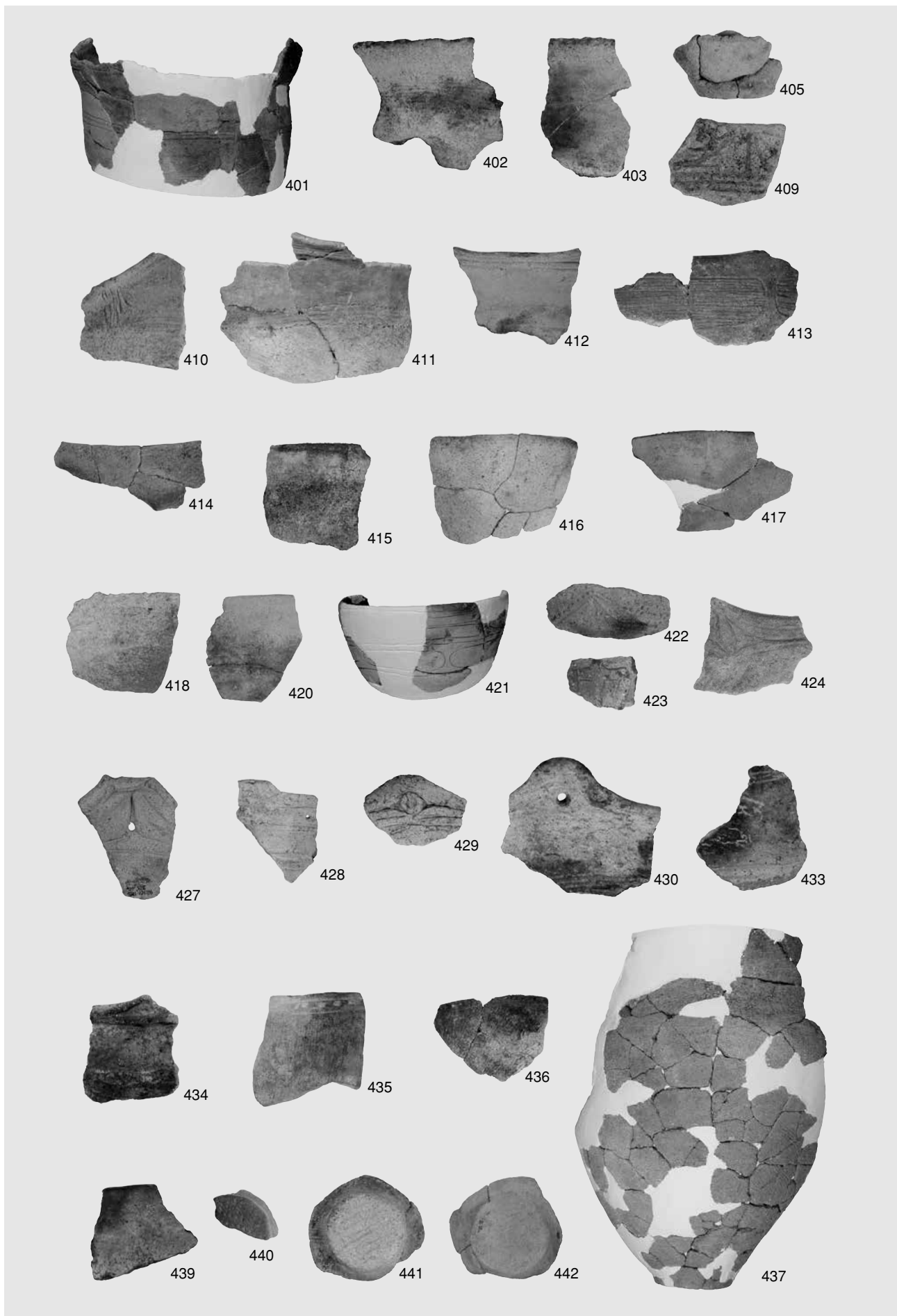
W区貯蔵穴検出状況（東から）

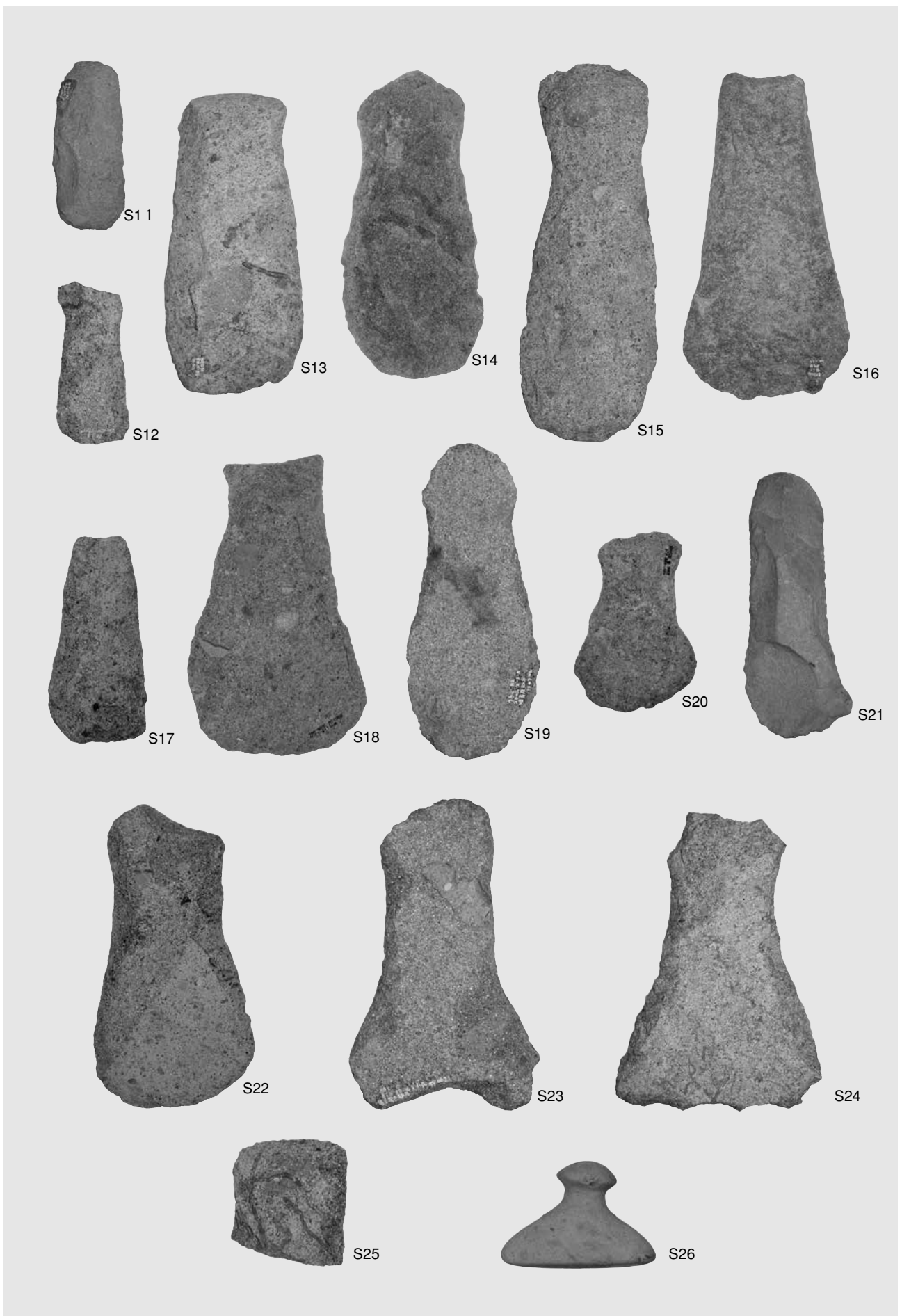


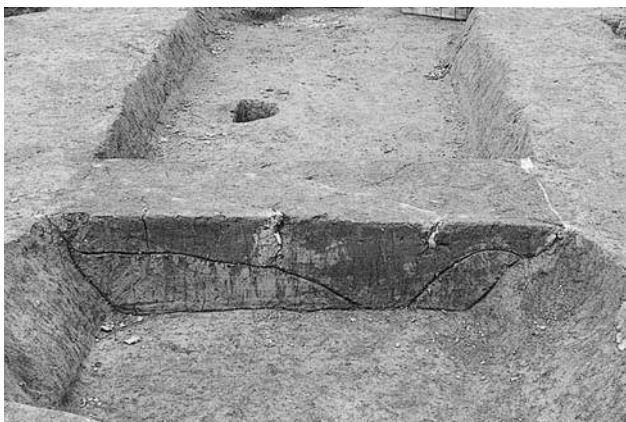
W区貯蔵穴全景（東から）



W区下層完掘状況（北から）







SH37 C2区SD13土層断面（南東から）



SH37 C2区SD13（北西から）



SH36 R2区SD03（北東から）



SH41 F区SD16土層断面（東から）



SH42 V2区SD15遺物出土状況



SH42 V2区SD18・19土層断面（東から）



SH42 V2区SD20・22（南から）



SH42 V2区SD20遺物出土状況



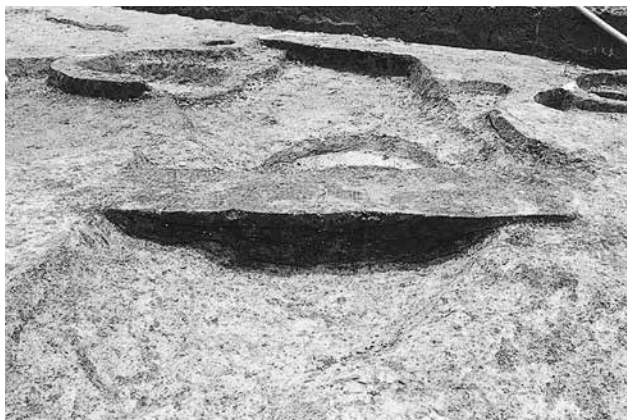
SH42 V2区SD24土層断面（北西から）



SH42 V2区SD24遺物出土状況



V2区 SH42全景（南から）



SH44 V1区SD01土層断面（北西から）



SH44 V1区SD01（南から）



Q1区SE01土層断面（西から）



Q1区SE01全景（北から）



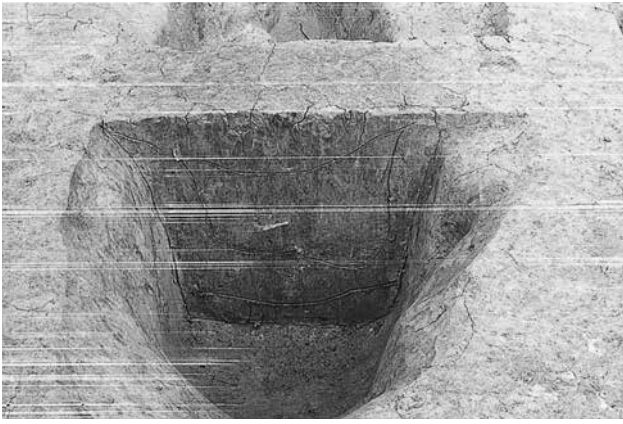
Q2区SK79土層断面（南東から）



M3区SK24全景（西から）



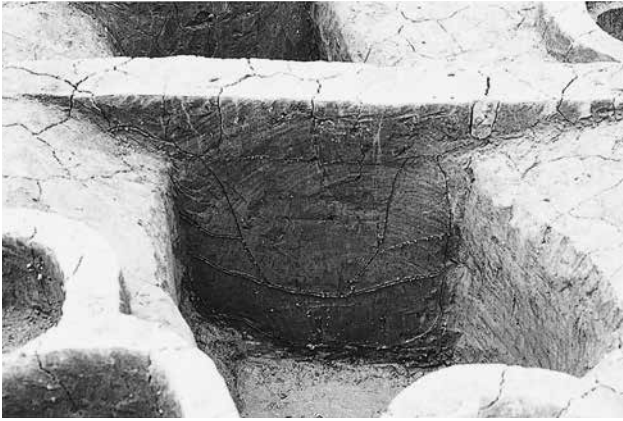
Q2区SK79遺物出土状況（北東から）



A 4 区SK59土層断面 (南から)



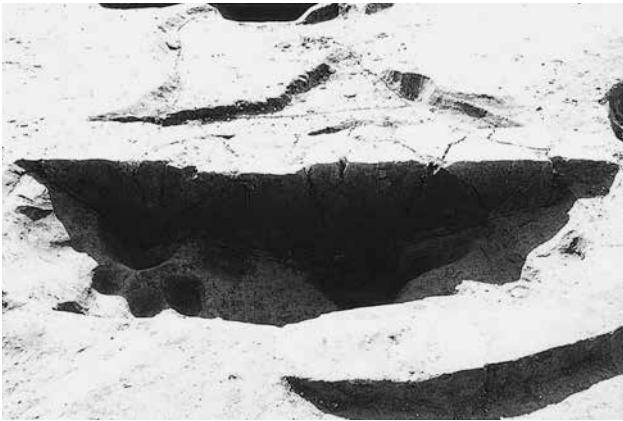
A 4 区SK59全景 (東から)



Q 1 区SK34土層断面 (東から)



Q 1 区SK34全景 (南から)



Q 2 区SK63土層断面 (北東から)



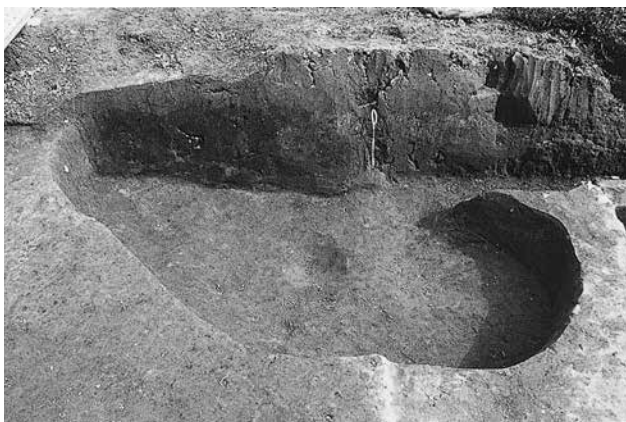
C 3 区SK73土層断面 (北から)



C 3 区SK84 (左) SK85 (右) 土層断面



C 3 区SK84 (手前) SK85 (奥) 全景 (北西から)



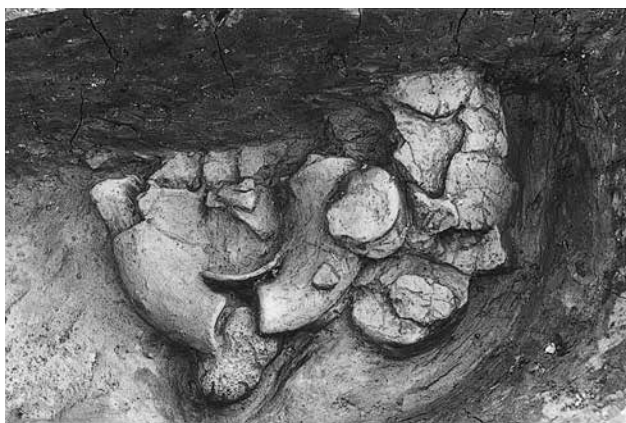
C 2 区SK21全景 (北から)



C 2 区SK22全景 (北から)



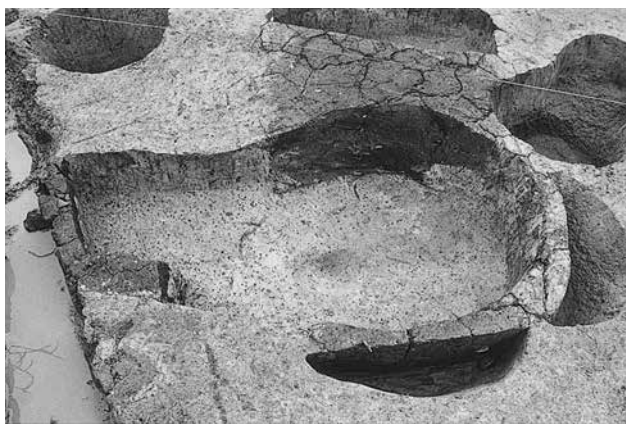
C 2 区SK23全景 (北から)



C 2 区SK29遺物出土状況



C 2 区SK29土層断面 (北から)



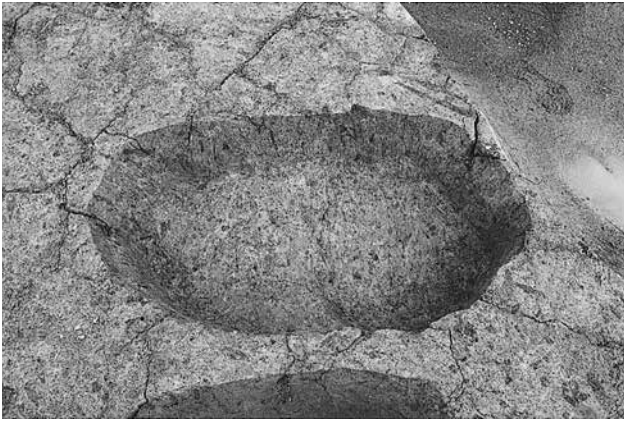
C 2 区SK29全景 (北から)



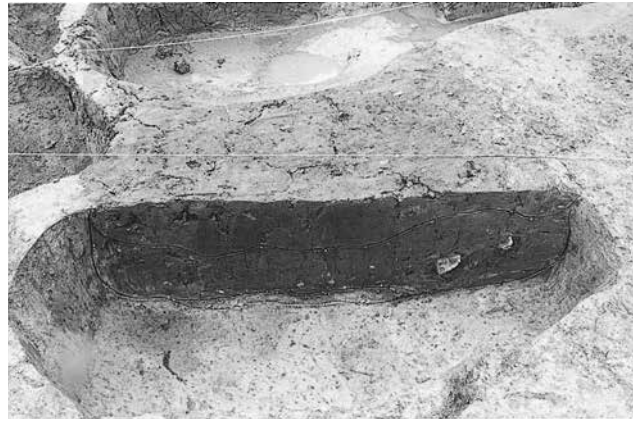
C 2 区SK31土層断面 (東から)



C 2 区SK39土層断面 (北西から)



C 2 区SK39全景 (北西から)



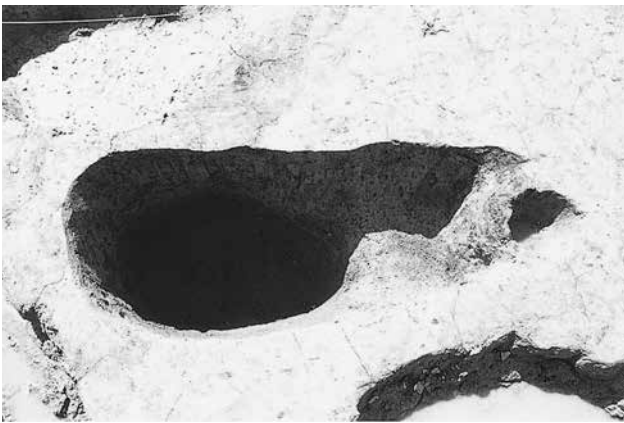
C 2 区SK41土層断面 (南西から)



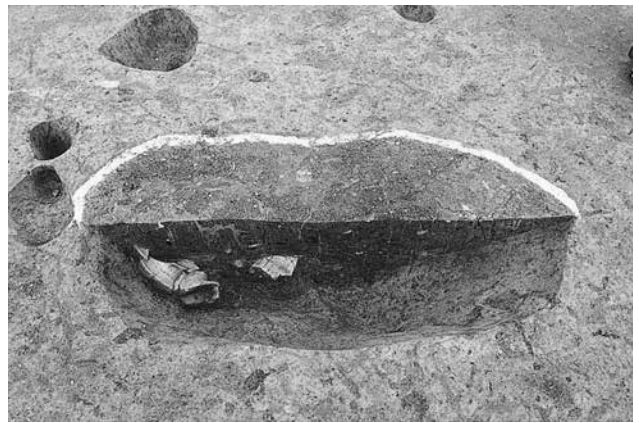
C 2 区SK41 (南西から)



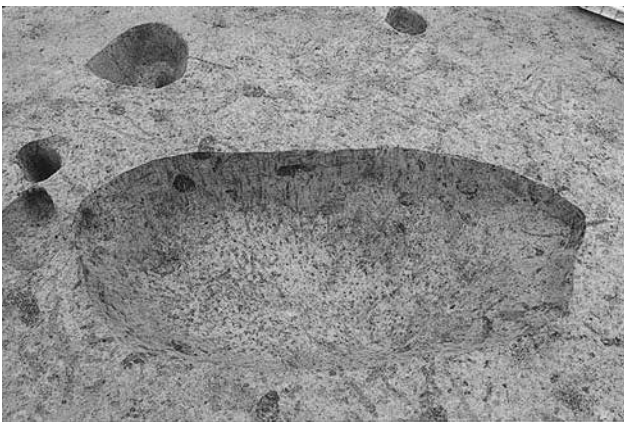
C 2 区SK42土層断面 (北から)



C 2 区SK42土層断面 (北から)



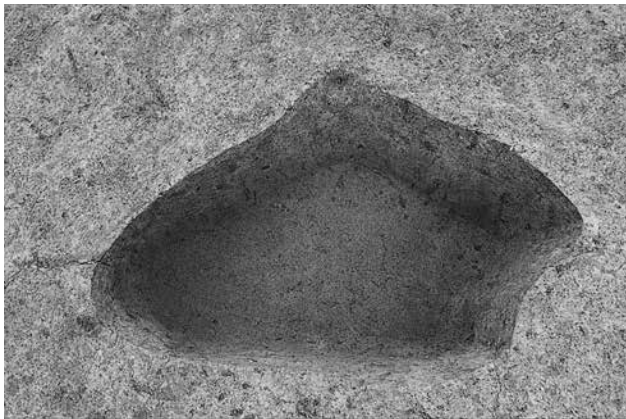
C 2 区SK43土層断面 (北から)



C 2 区SK43全景 (北から)



C 2 区SK52土層断面 (南西から)



C 2 区SK54全景 (北から)



C 2 区SK55全景 (南から)



C 2 区SK57全景 (東から)



C 2 区SK58全景 (東から)



C 2 区SK59土層断面 (北から)



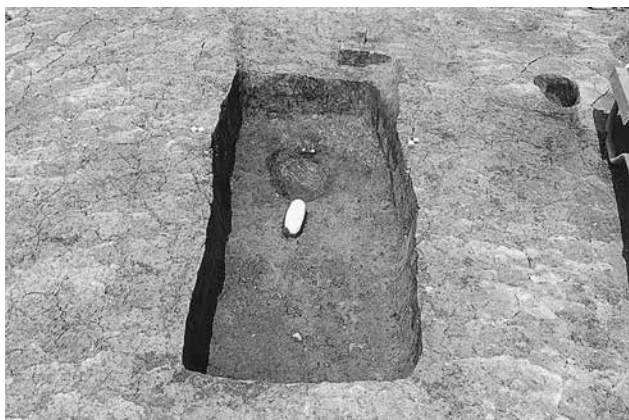
C 2 区SK59全景 (南から)



R 2 区SK05遺物出土状況



R 2 区SK09土層断面 (南から)



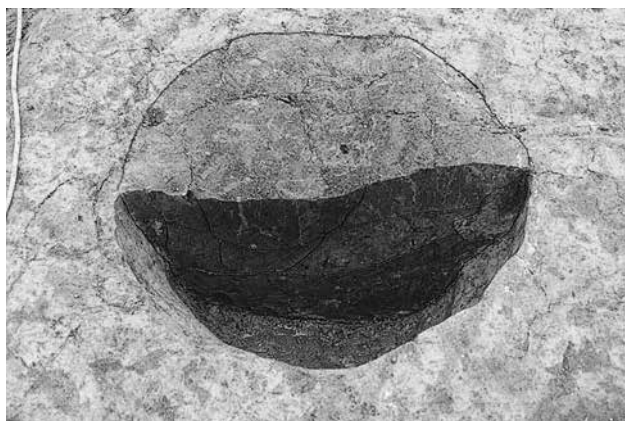
R 2 区SK09全景 (南から)



R 2 区SK11土層断面 (南から)



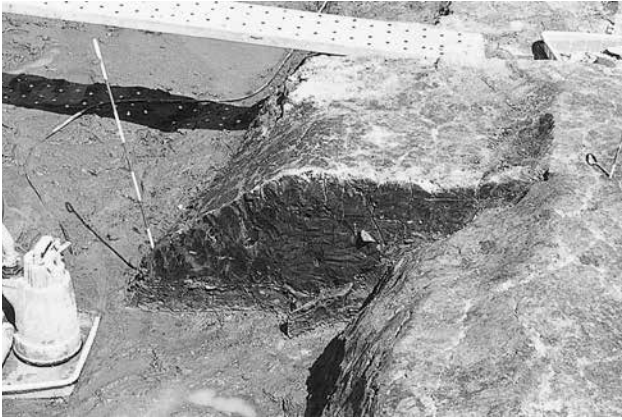
R 2 区SK17土層断面 (東から)



R 2 区SK27土層断面 (西から)



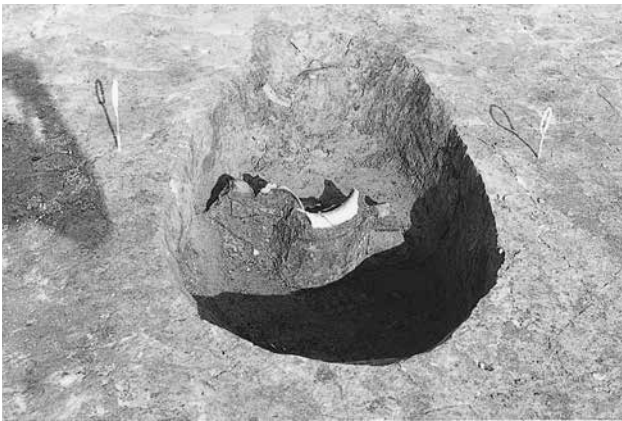
R 2 区SK31遺物出土状況 (北から)



R 2 区SK31土層断面（西から）



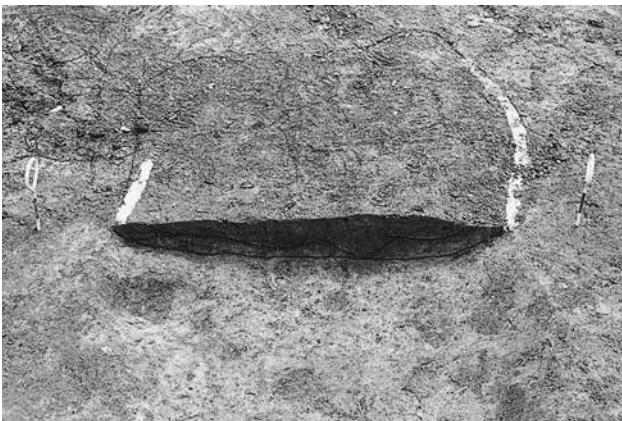
R 2 区SK33土層断面（西から）



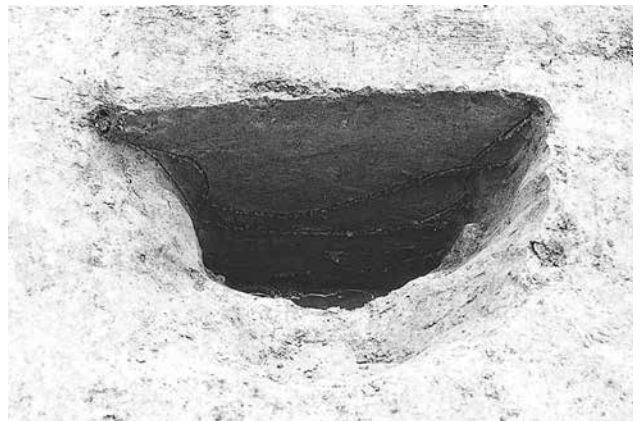
R 2 区SK33遺物出土状況（西から）



R 2 区SK34土層断面（南から）



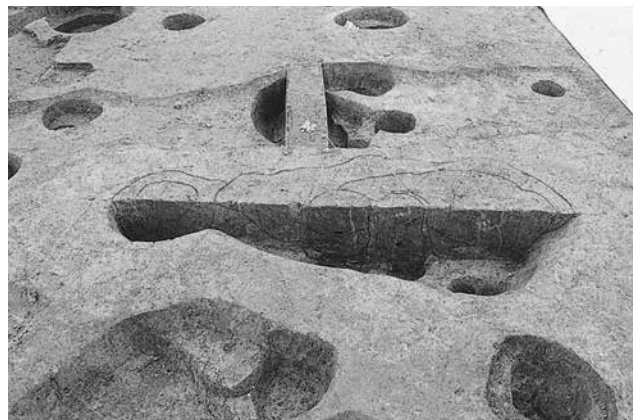
R 2 区SK36土層断面（西から）



R 2 区SK37土層断面（北西から）



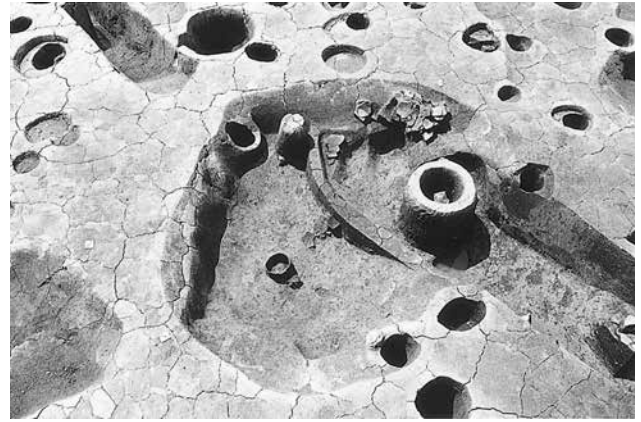
R 2 区SK37全景（北西から）



S 1 区SK10土層断面（北東から）



S1区SK11土層断面（南東から）



S1区SK11（北から）



S1区SK12遺物出土状況（北東から）



S1区SK26土層断面（南から）



S1区SK28遺物出土状況（北から）



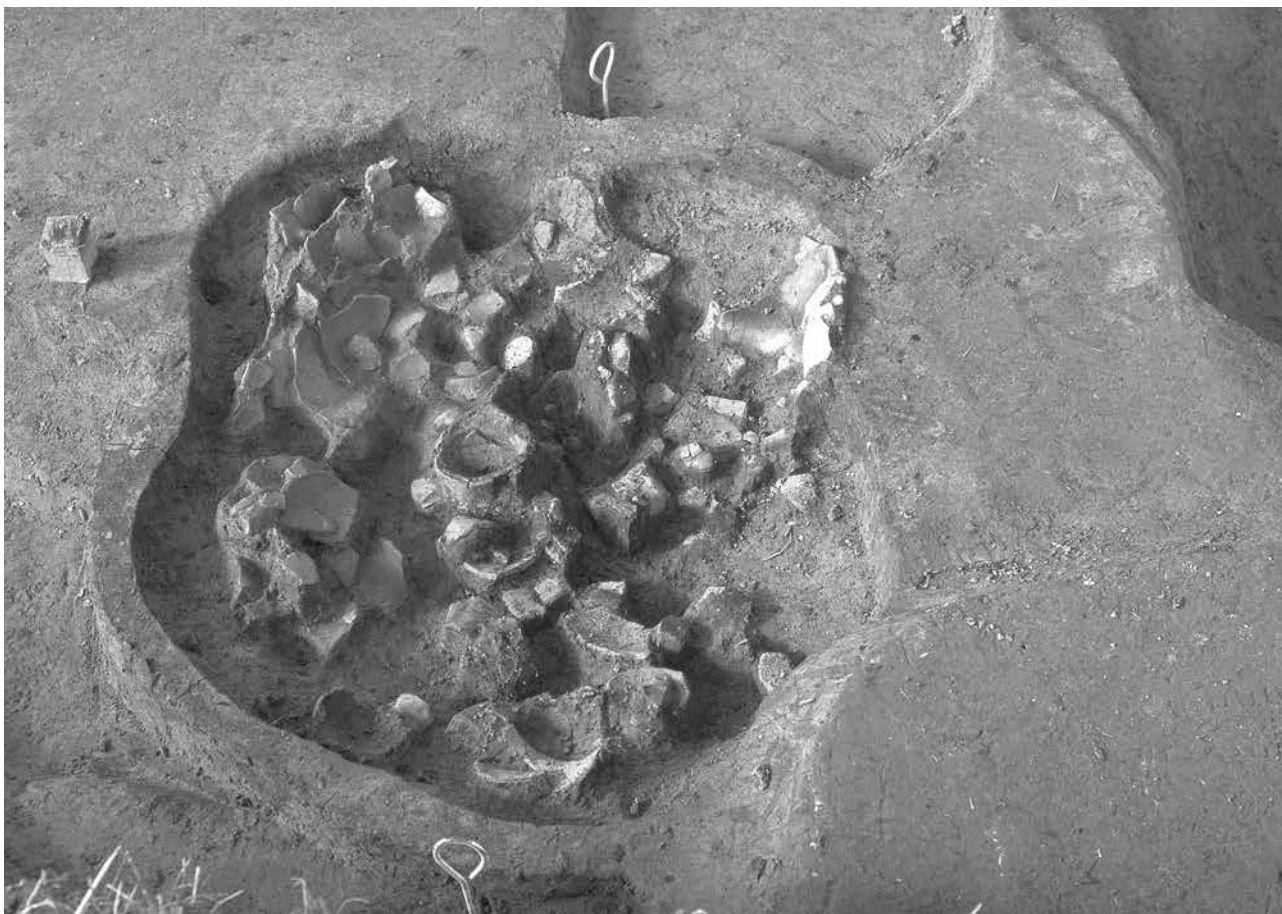
S1区SK33土層断面（南東から）



S1区SK34土層断面（南から）



S2区SK04土層断面（南西から）



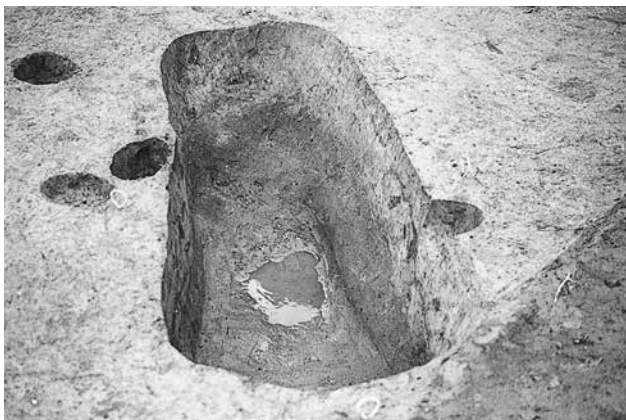
S2区SK04遺物出土状況（東から）



S2区SK16遺物出土状況



S2区SK16遺物出土状況（南西から）



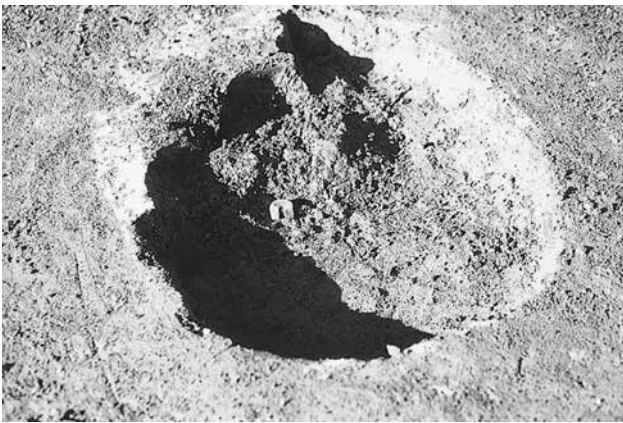
S2区SK16全景（北東から）



S2区SK18土層断面（南から）



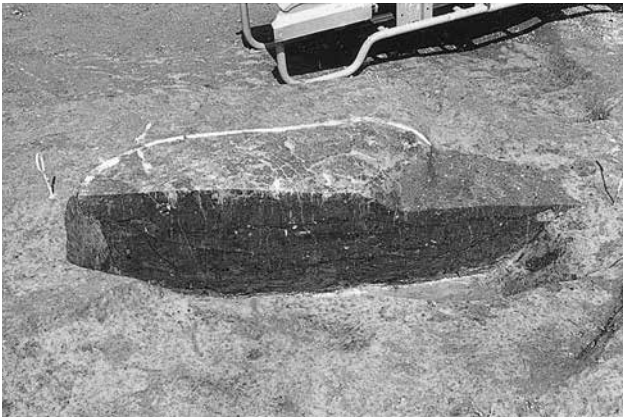
S2区SK18遺物出土状況（東から）



S2区P5遺物出土状況



S2区P21遺物出土状況



S3区SK01土層断面（東から）



S3区SK01全景（東から）



S 3 区SK03遺物出土状況（東から）



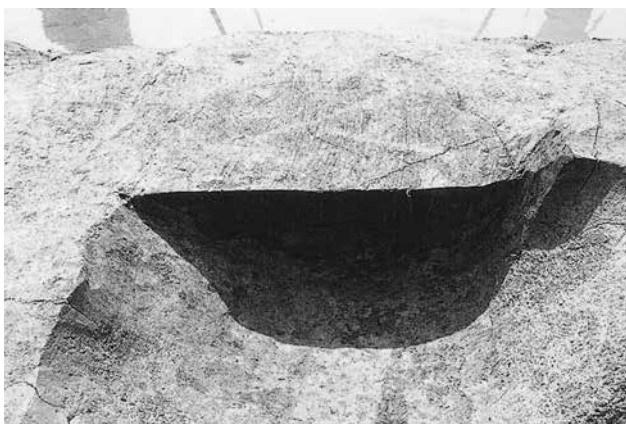
S 3 区SK03土層断面（東から）



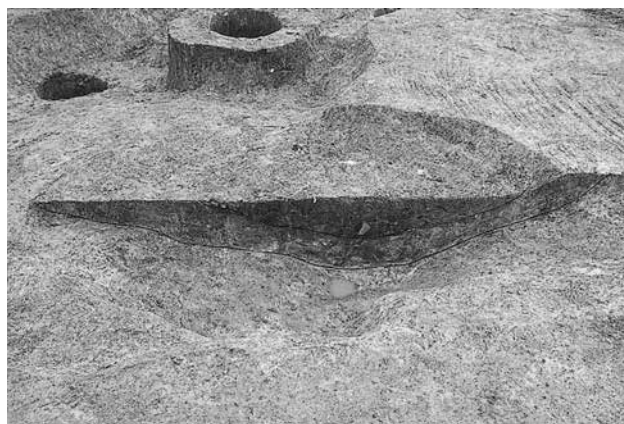
B 1 区SK12土層断面（南東から）



B 1 区SK12遺物出土状況（東から）



W区SK04土層断面（北から）



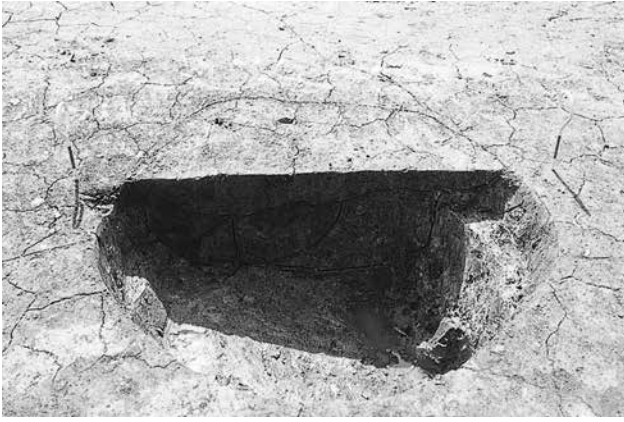
W区SK12土層断面（北から）



N 2 区SK03土層断面（南西から）



N 2 区SK03（南西から）



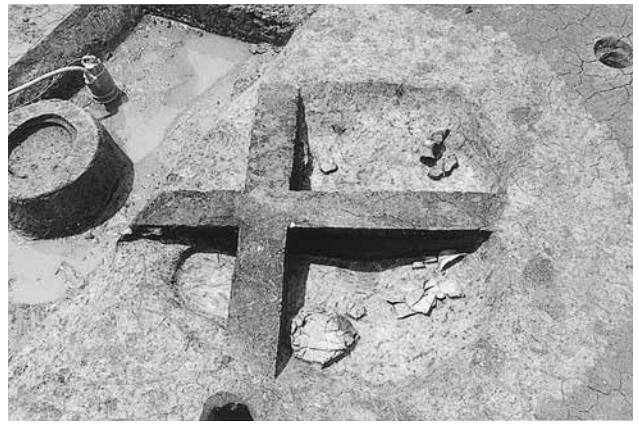
N 2 区SK07土層断面 (東から)



N 2 区SK10土層断面 (東から)



N 2 区SK10土層断面 (北から)



N 2 区SK10遺物出土状況



N 2 区SK12・20土層断面 (東から)



N 2 区SK13土層断面 (西から)



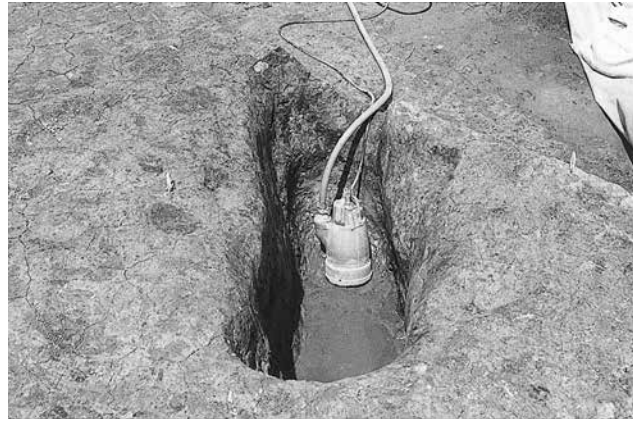
N 2 区SK12・13・20全景 (南から)



N 2 区SK14土層断面 (南から)



N 2 区SK19土層断面 (南東から)



N 2 区SK19全景 (南東から)



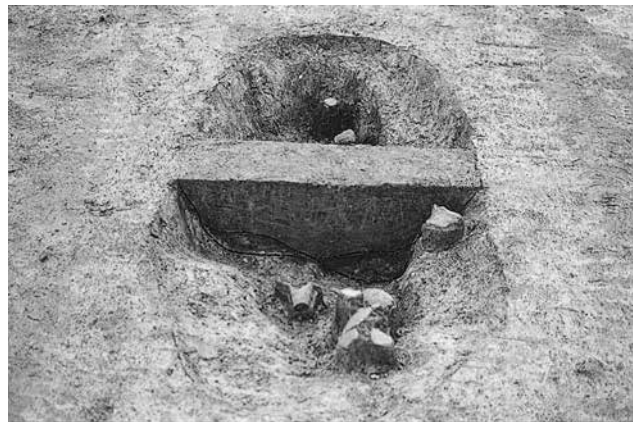
N 2 区SK19全景



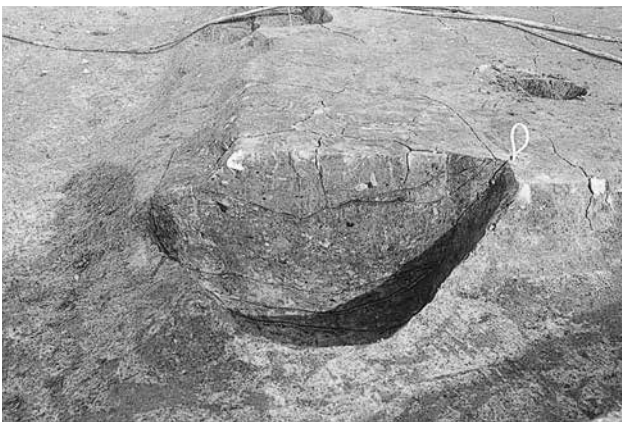
N 2 区SK09 (手前) とSK19 (奥) (北東から)



N 2 区SK21土層断面 (南西から)



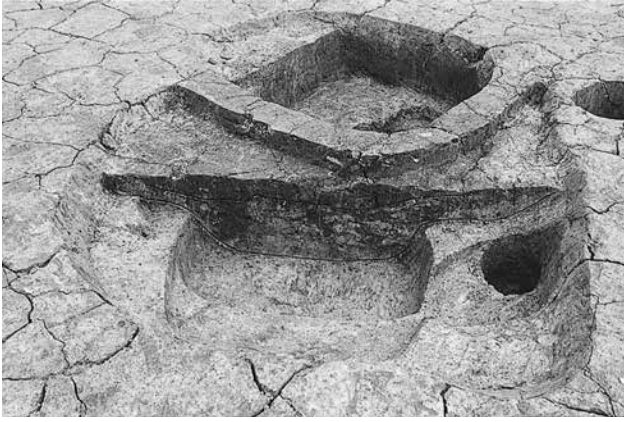
N 2 区SK22土層断面 (南から)



N 2 区SK25土層断面 (西から)



N 2 区SK25全景 (西から)



N 2 区SK26土層断面 (南西から)



F区SK02土層断面 (西から)



M 1 区SK08遺物出土状況 (南から)



M 1 区SK08・09 (南東から)



M 1 区SK19遺物出土状況



M 1 区SK19遺物出土状況



M 1 区SK31遺物出土状況



M 3 区SK07遺物出土状況



M3区SK20



V2区SK01土層断面(南から)



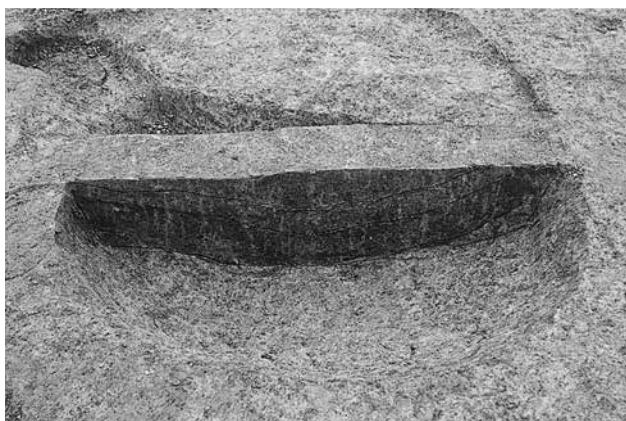
V2区SK02遺物出土状況(南東から)



V2区SK02(北西から)



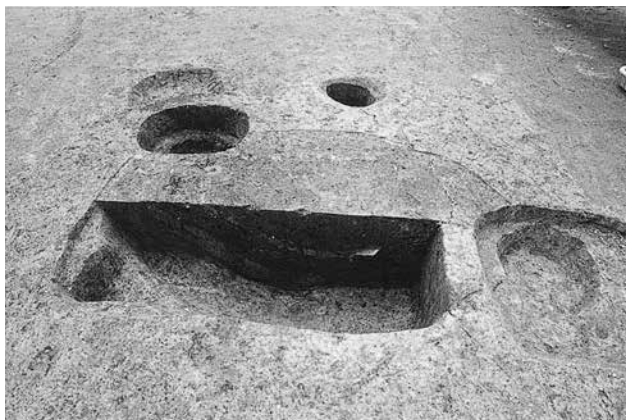
V2区SK03土層断面(南から)



V2区SK04土層断面(西から)



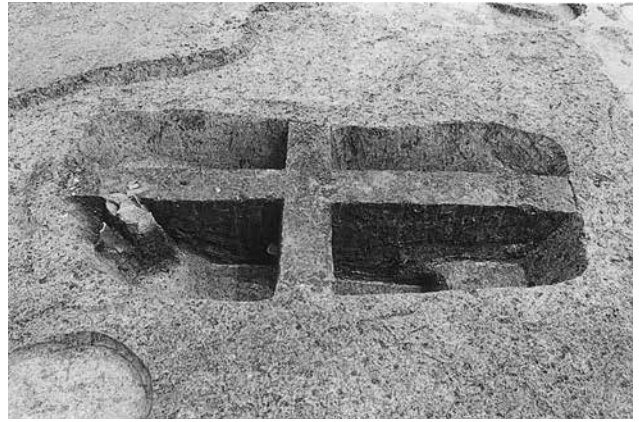
V2区SK08土層断面(南東から)



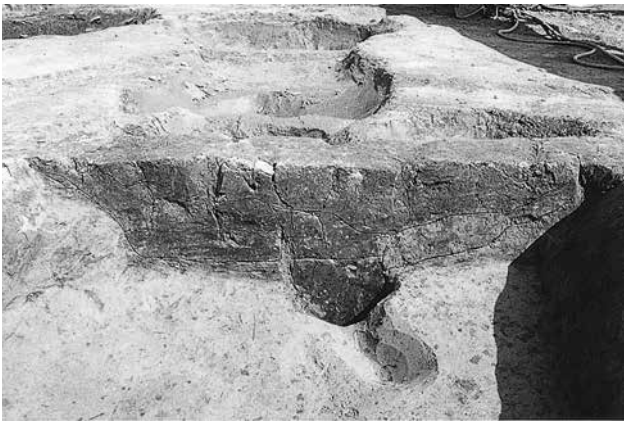
V1区SK05土層断面(北から)



V1区SK07土層断面（南から）



V1区SK16土層断面（南から）



Q2区SD92土層断面



Q2区SD93土層断面（北西から）



C3区SD34土層断面（北西から）



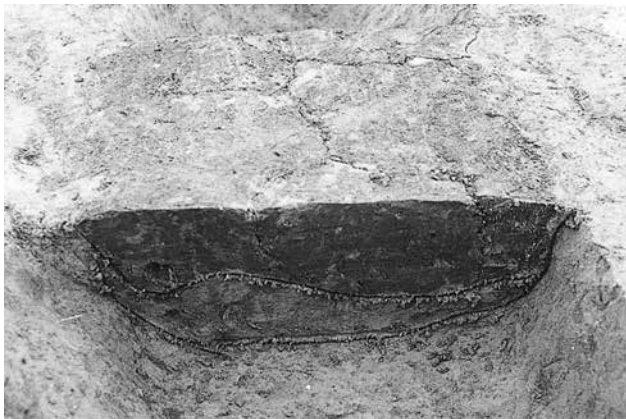
C3区SD34土層断面（南西から）



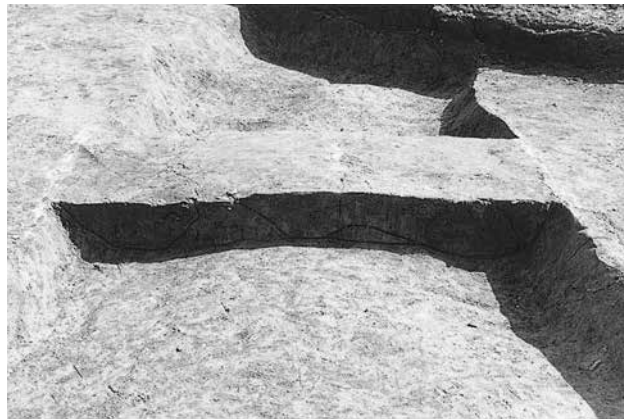
C2区SD11土層断面（南東から）



C2区SD11全景（南東から）



C 2 区SD12土層断面 (北西から)



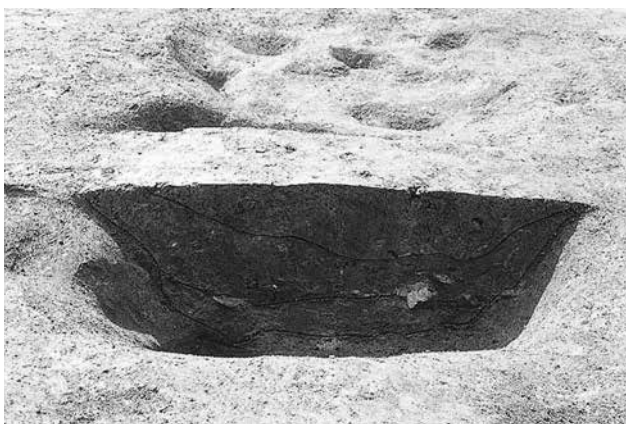
C 2 区SD19土層断面 (北から)



C 2 区SD19全景 (北から)



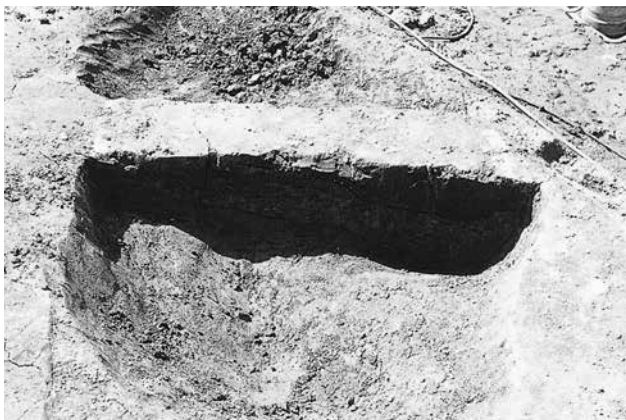
C 2 区SD21遺物出土状況



C 2 区SD21土層断面 (東から)



C 2 区SD21土層断面 (東から)



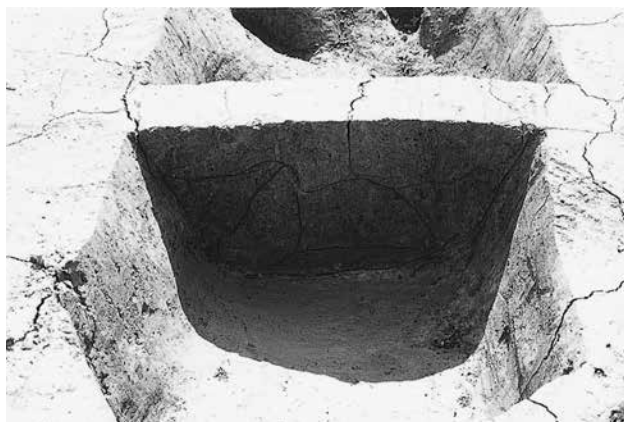
R 2 区SD16土層断面 (東から)



R 2 区SD19土層断面



R 2 区SD20遺物出土状況



S 1 区SD20土層断面 (東から)



S 1 区SD20 (南から)



S 1 区SD21・27 (東から)



U区SD22土層断面 (南から)



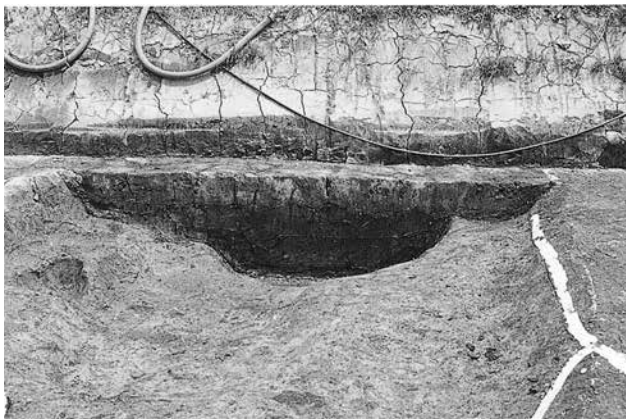
W区SD55土層断面 (南から)



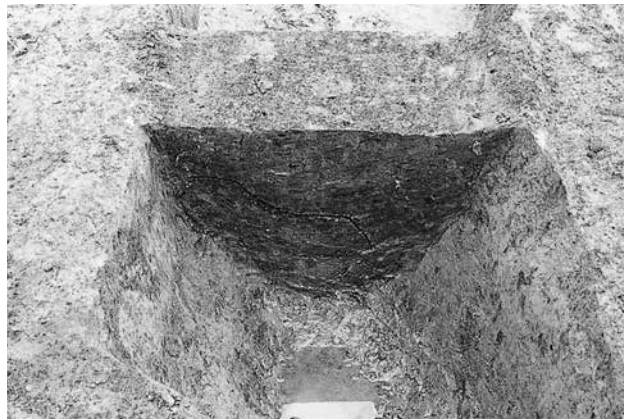
W区SD65土層断面 (北から)



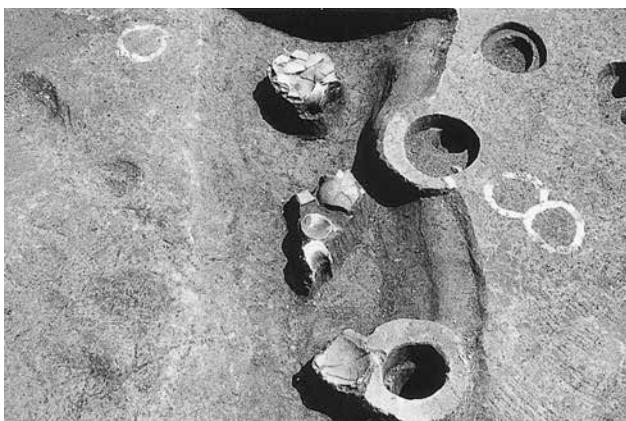
W区SD65 (南から)



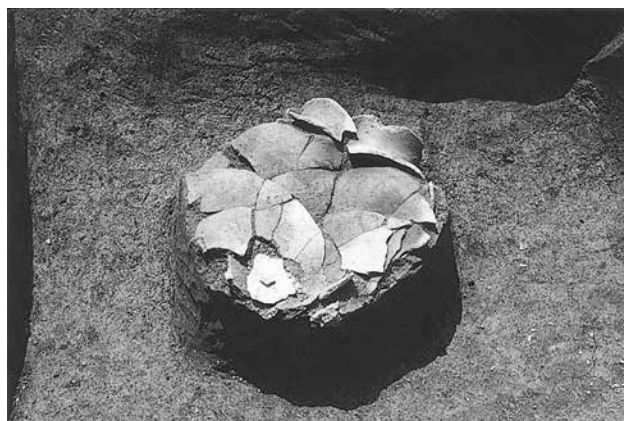
N 2 区SD09土層断面（西から）



E区SD03土層断面（南西から）



M 3 区SD42遺物出土状況（南西から）



M 3 区SD42遺物出土状況



V 2 区SD03遺物出土状況



V 2 区SD28遺物出土状況



V 2 区SD28遺物出土状況



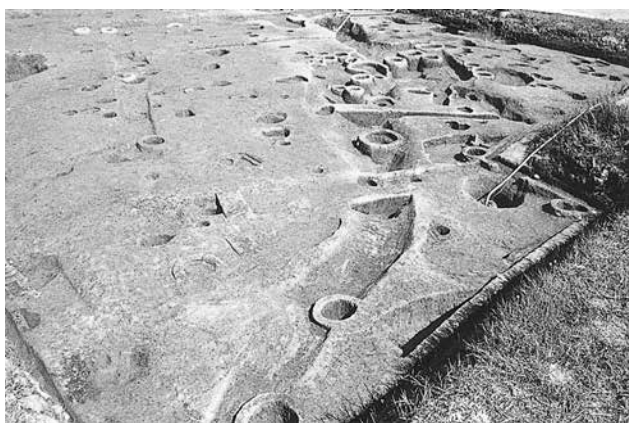
V 2 区SD33土層断面（東から）



V2区SD33土層断面（北西から）



V2区SD33（南東から）



V2区SD33（北西から）



V1区SD12（南西から）



A4区SD87



DN9（E区SD22）土層断面（北から）



DN9（M1区SD22）土層断面（東から）



DN9（M3区SD46）作業風景（北から）



DN 9 (M3区SD46) (北から)



DN 9 (M3区SD46) 遺物出土状況



DN 9 (M3区SD46) 遺物出土状況



DN 9 (M3区SD46) 土層断面 (北から)



DN 9 (M3区SD46) 土層断面 (南から)



DN 9 (F区SD09) 土層断面 (東から)



DN 9 (F区SD29)



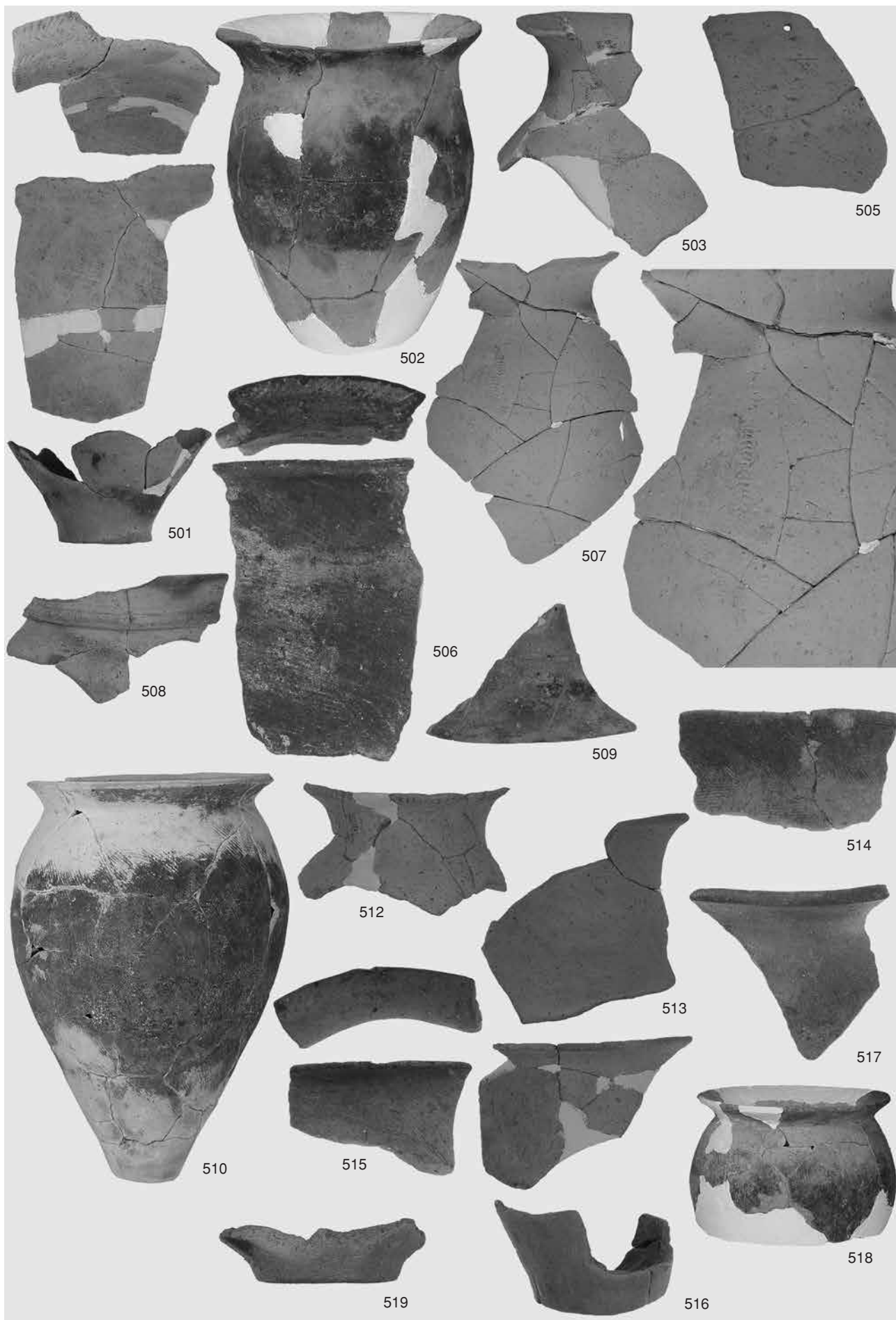
DN 9 (N2区SD30) 遺物出土状況

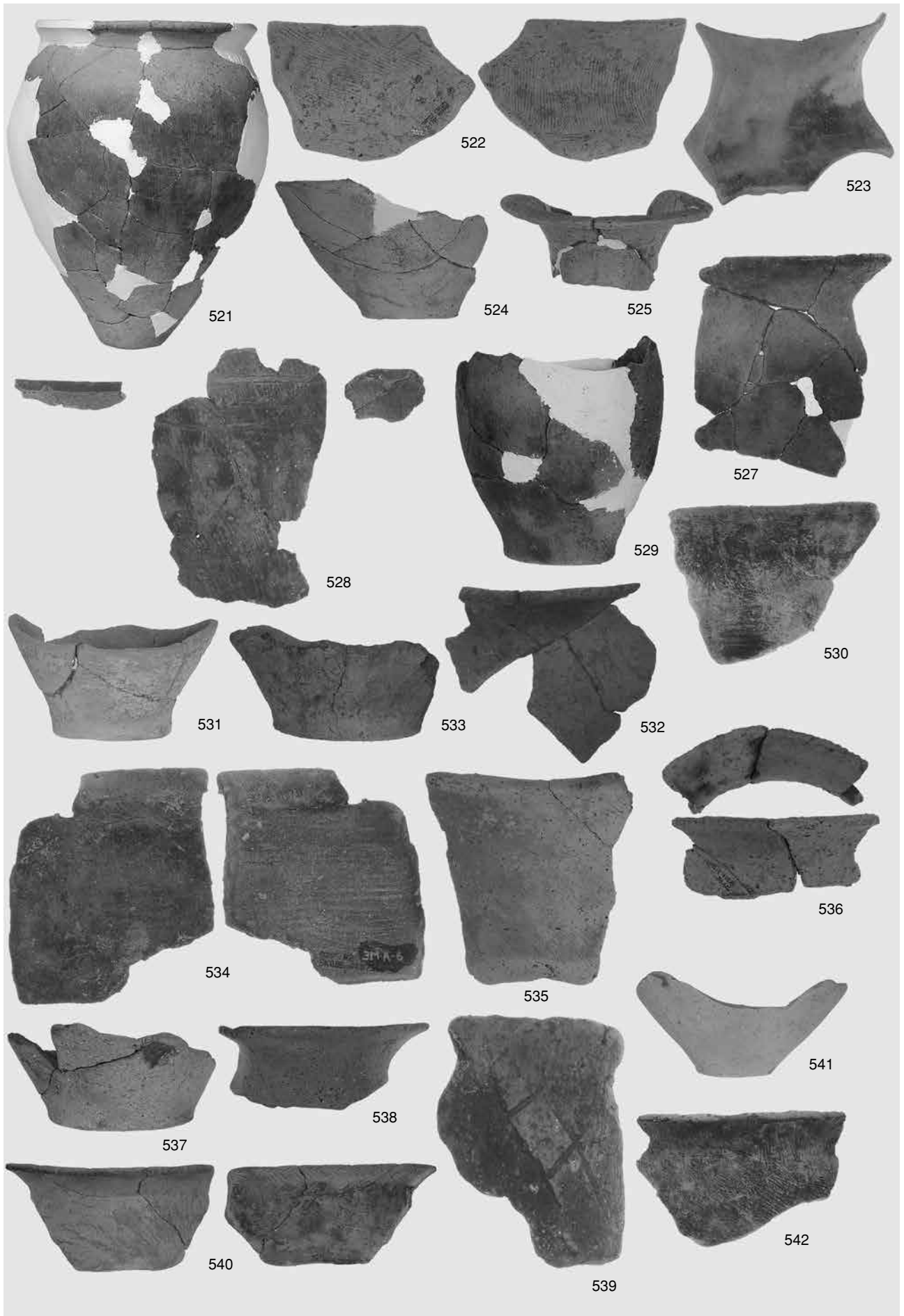


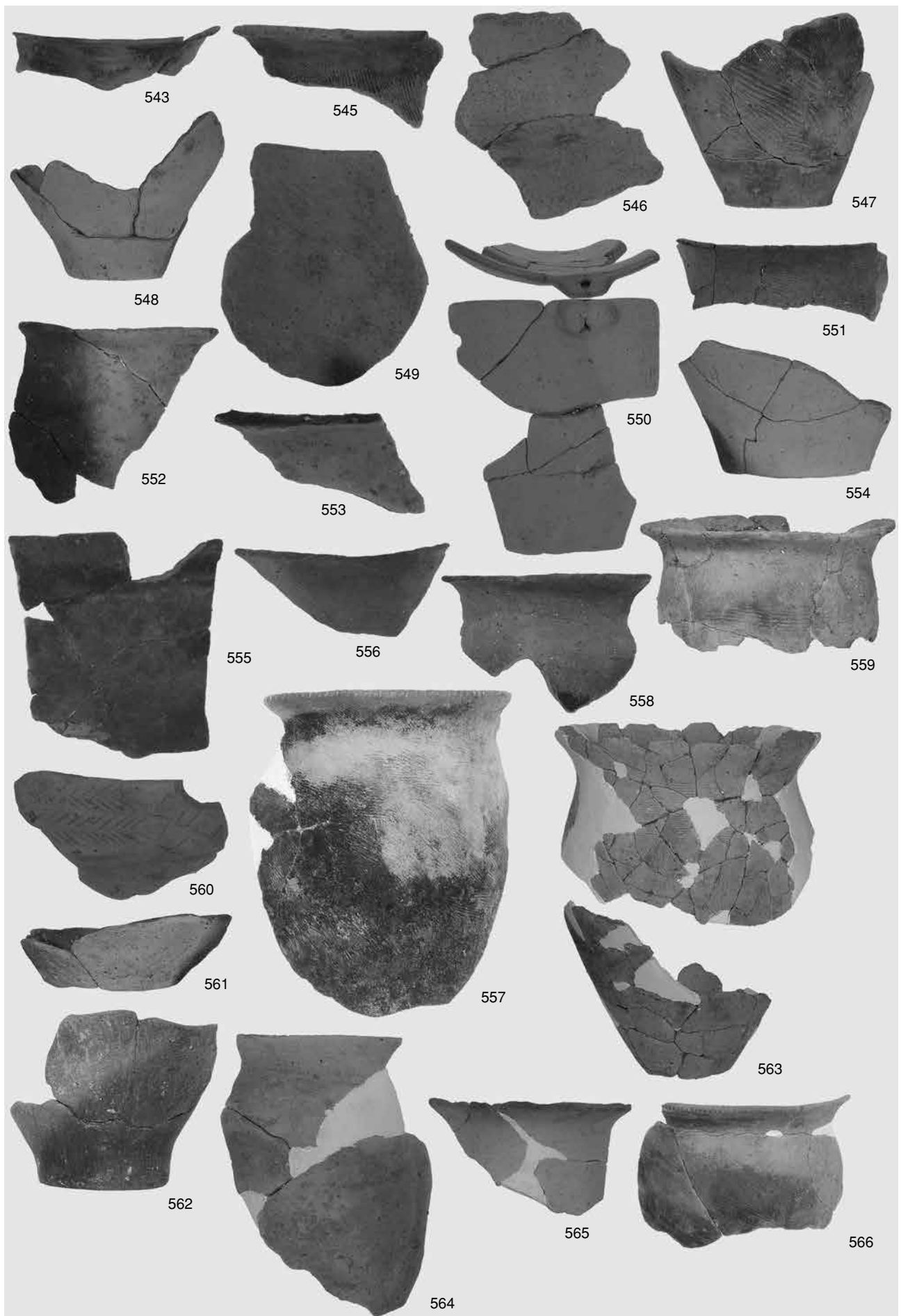
DN 9 (N2区SD30) 土層断面 (東から)

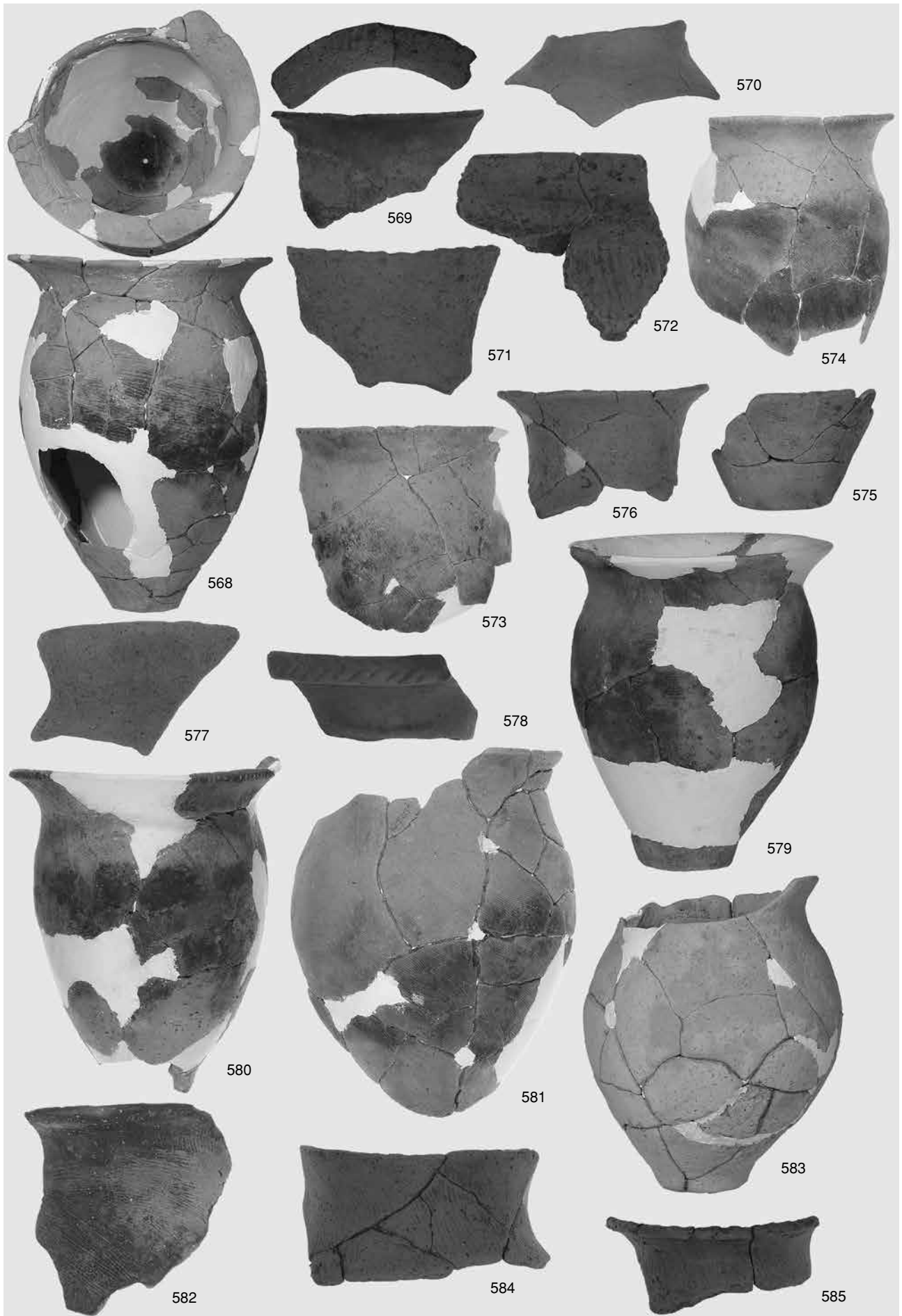


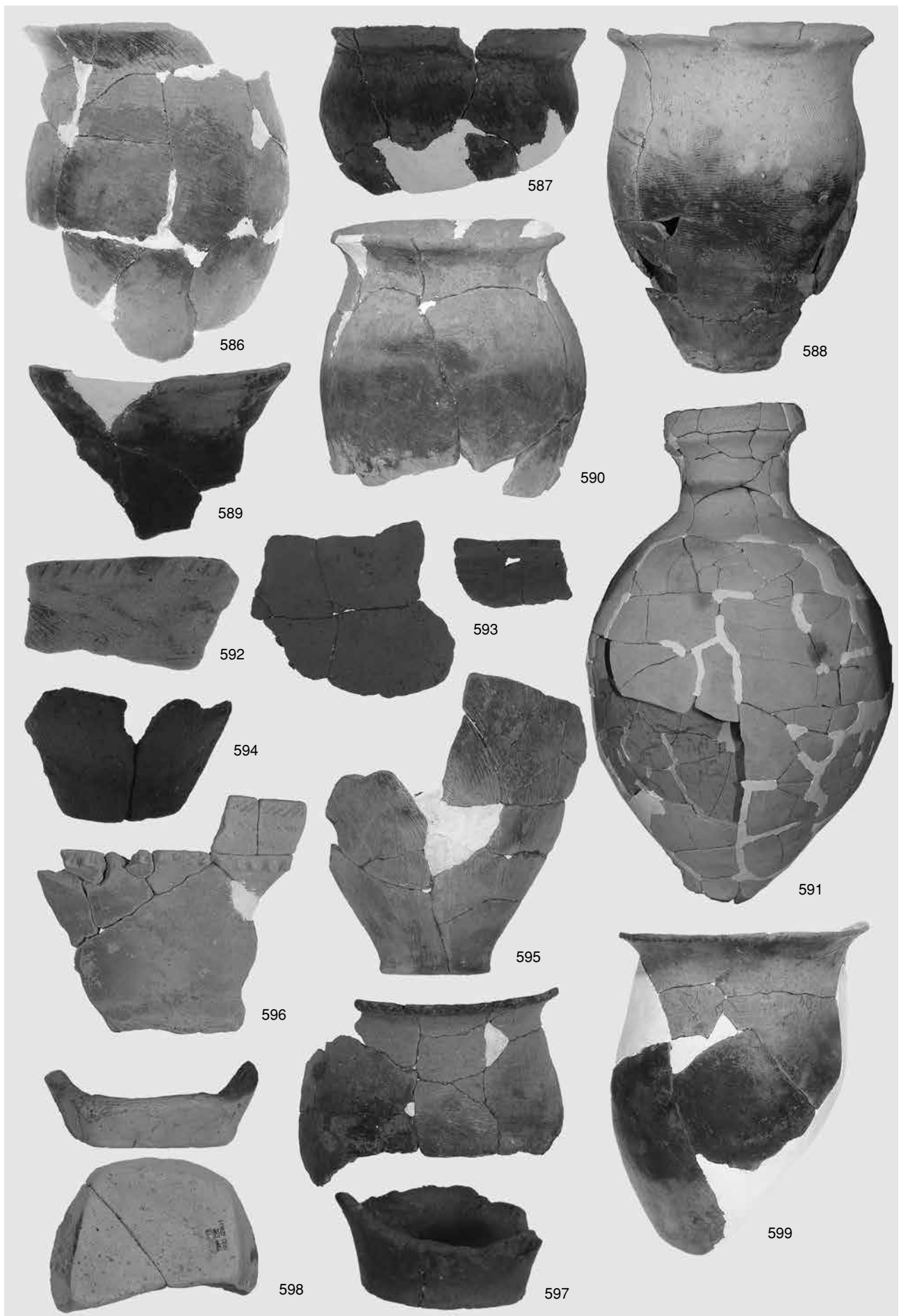
DN 9 (N2区SD30) (西から)

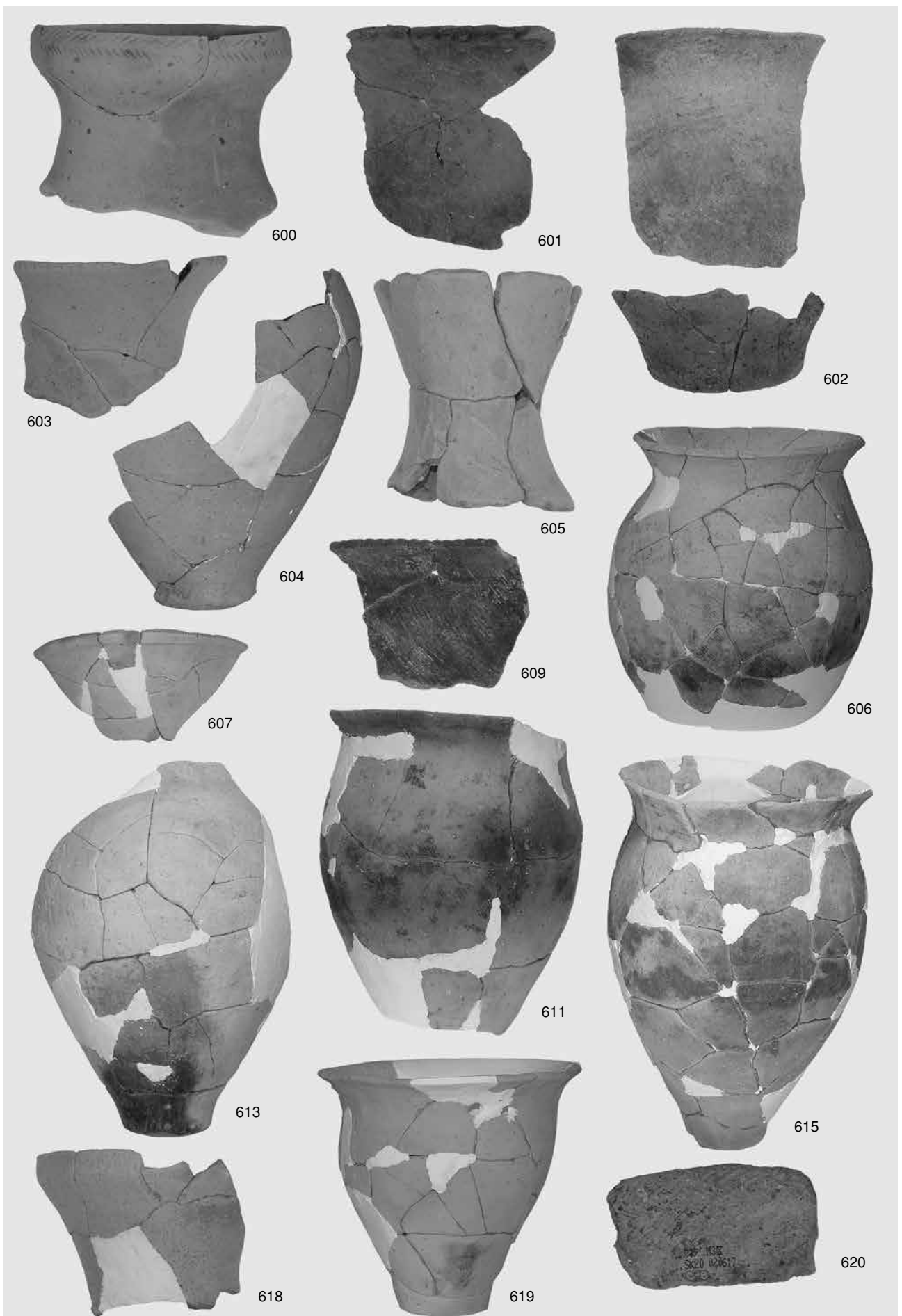


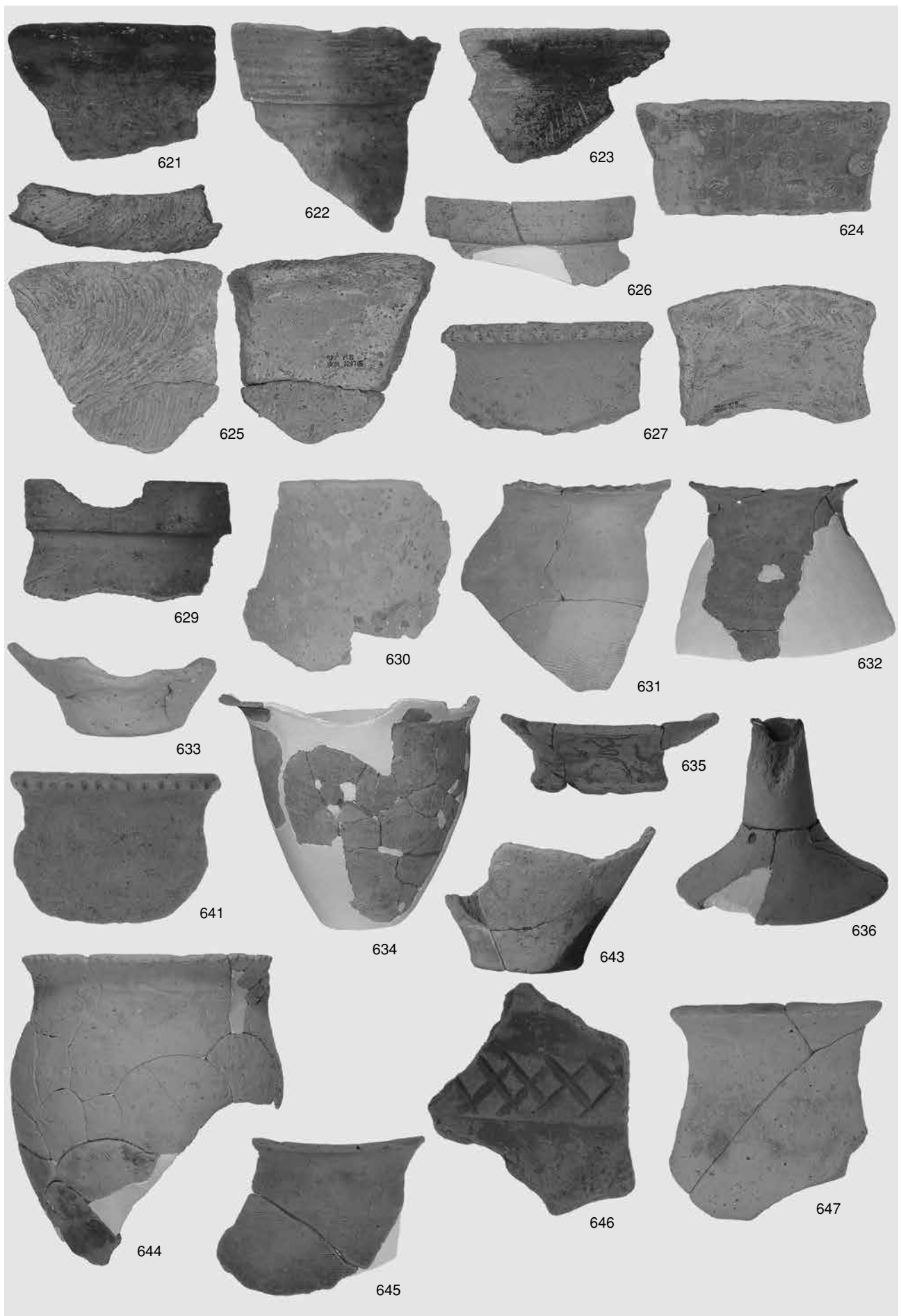


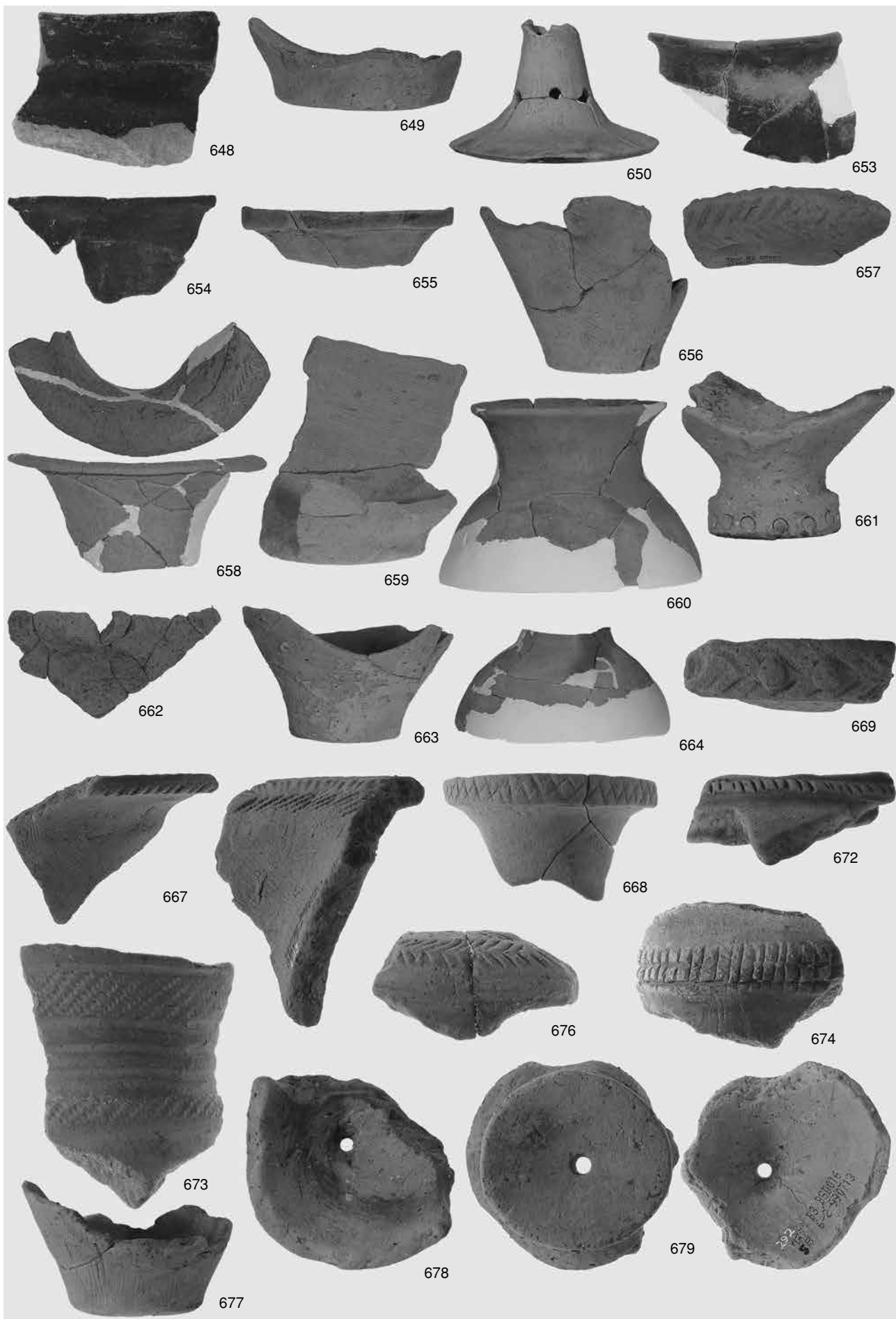


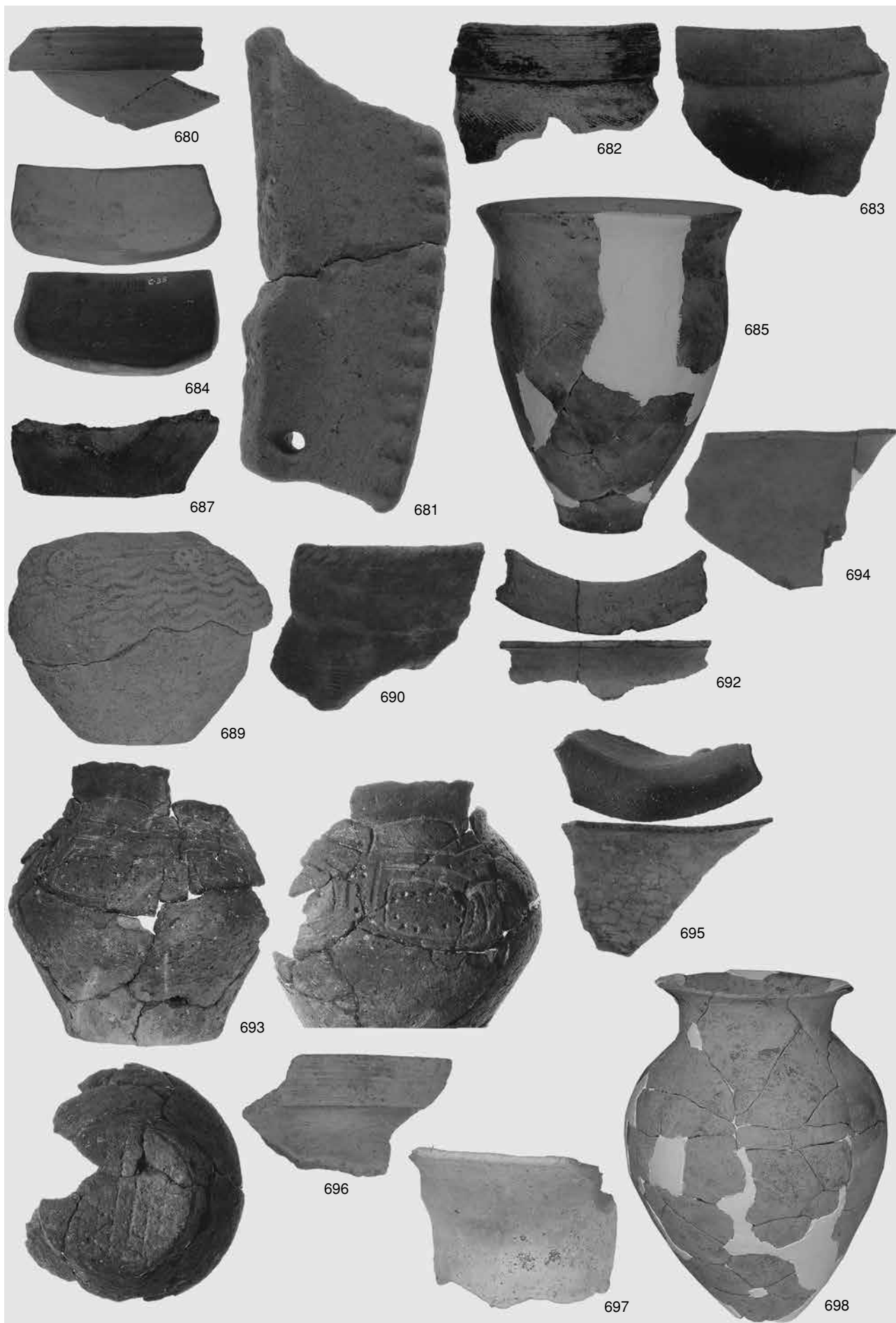


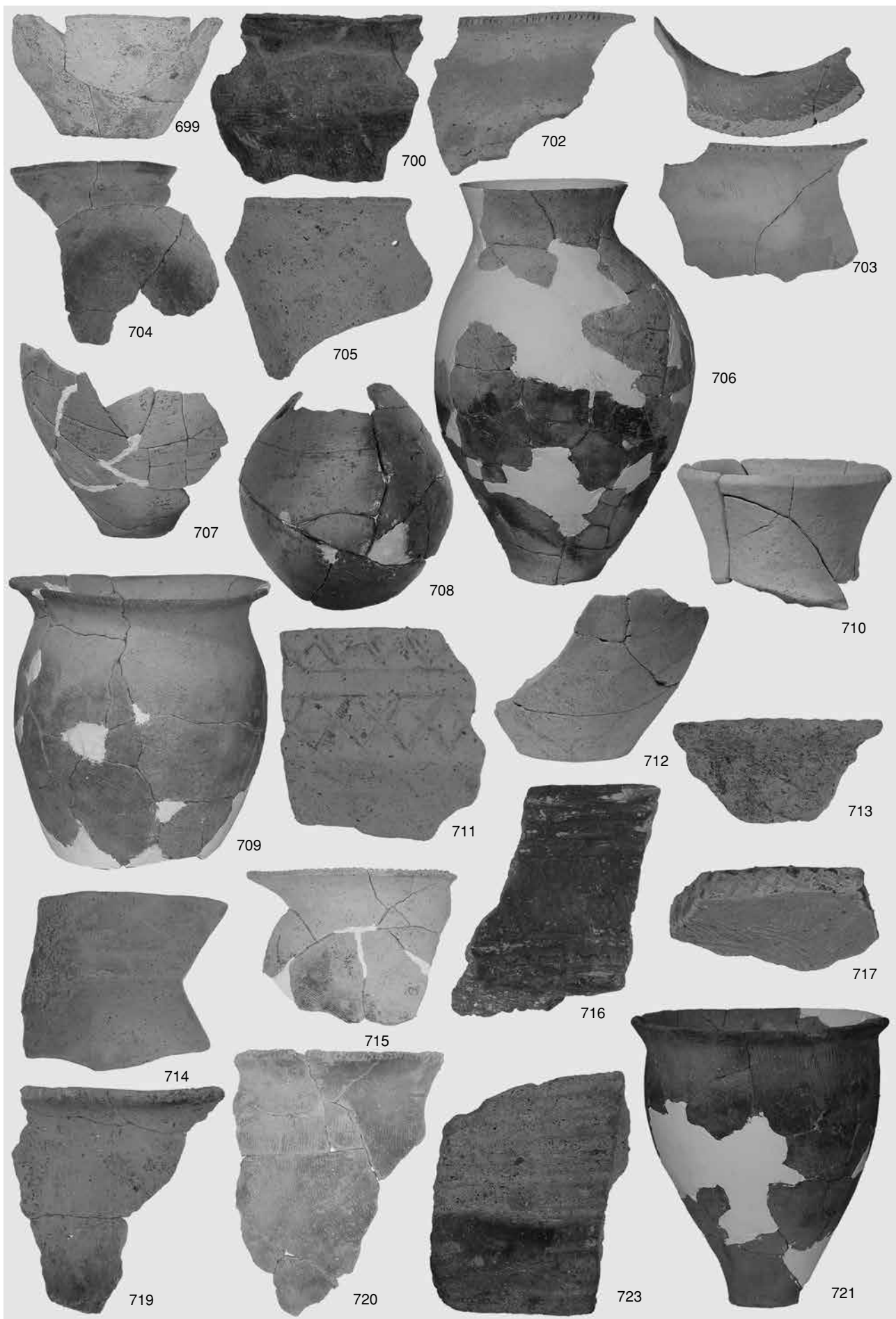


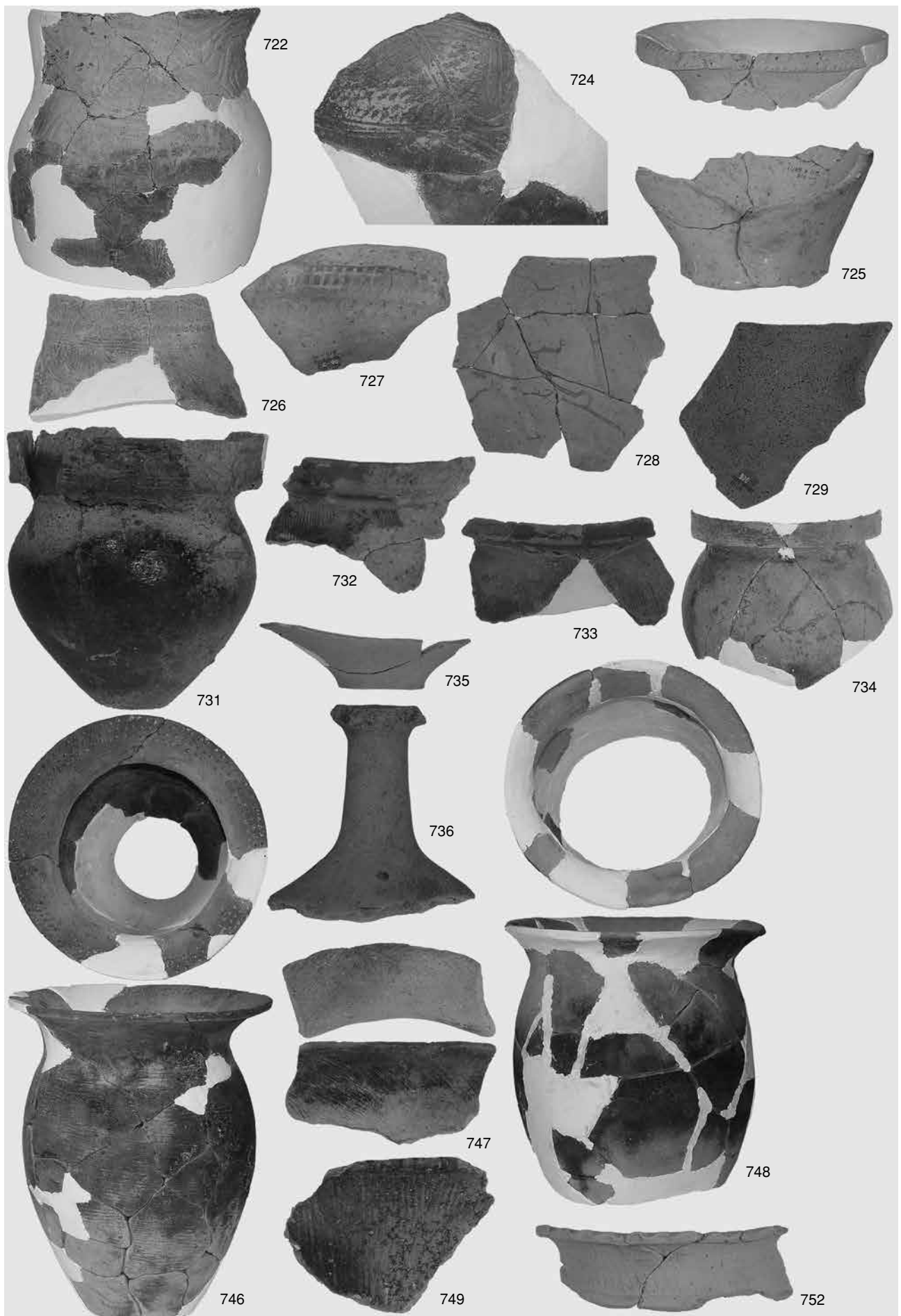


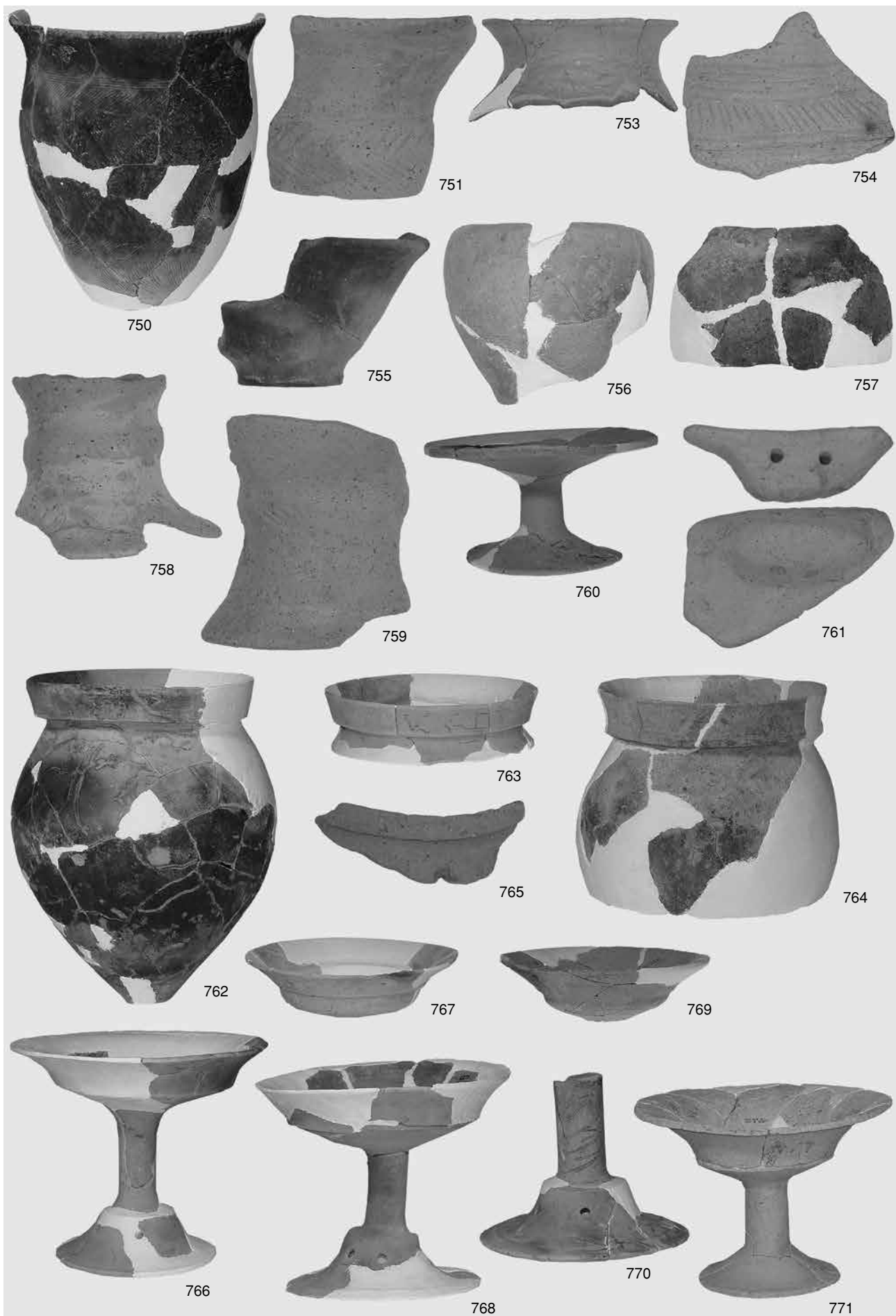


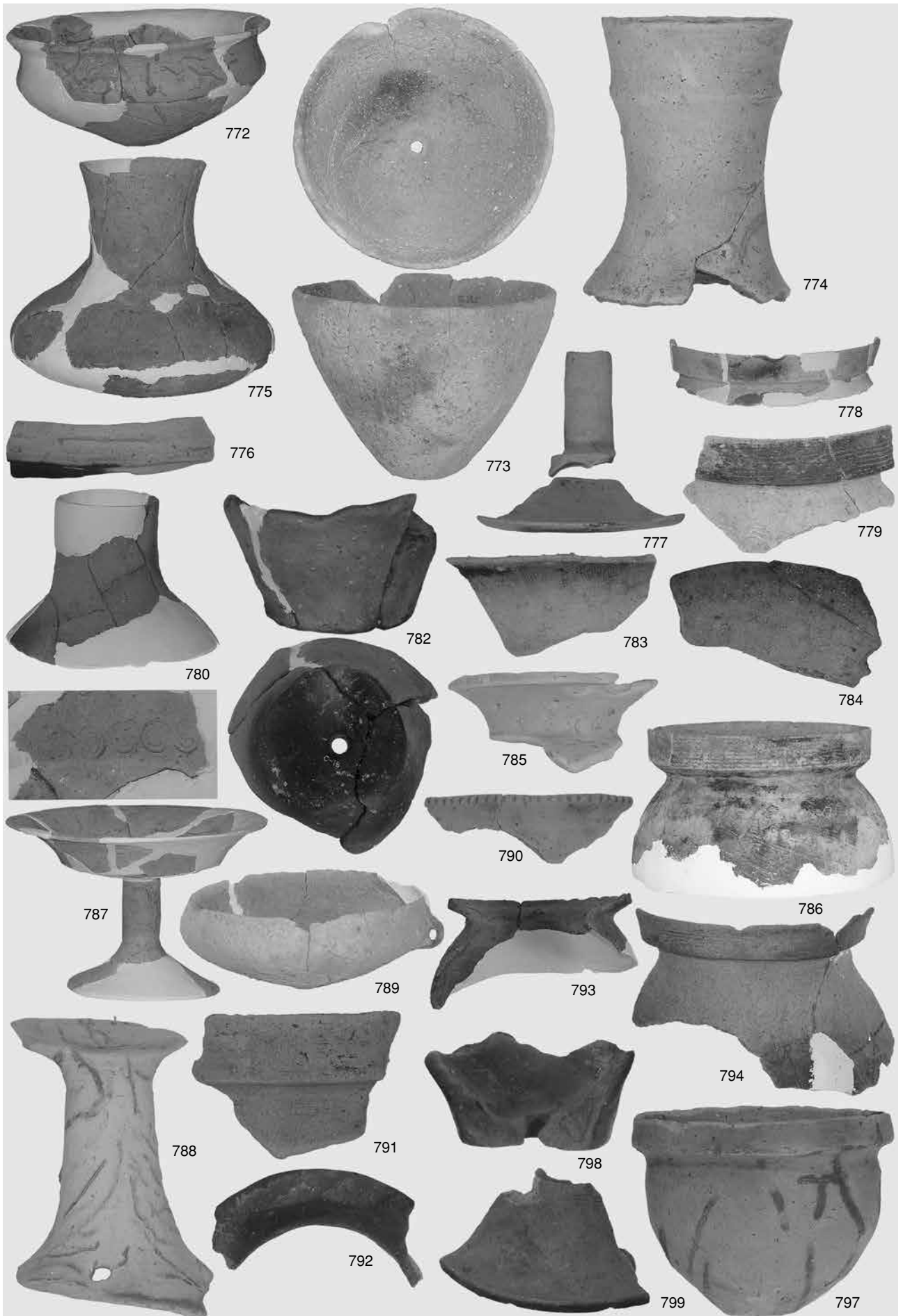


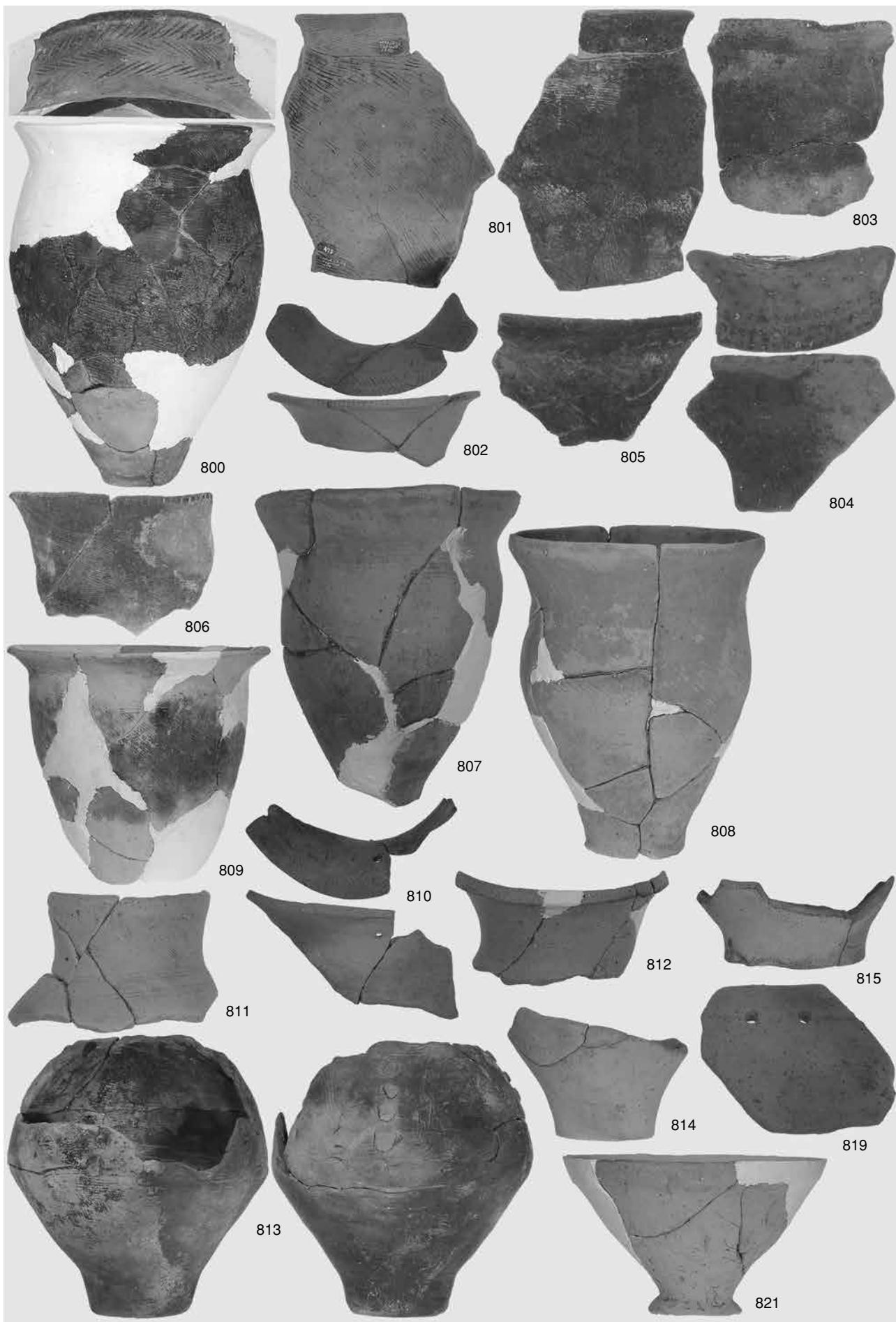


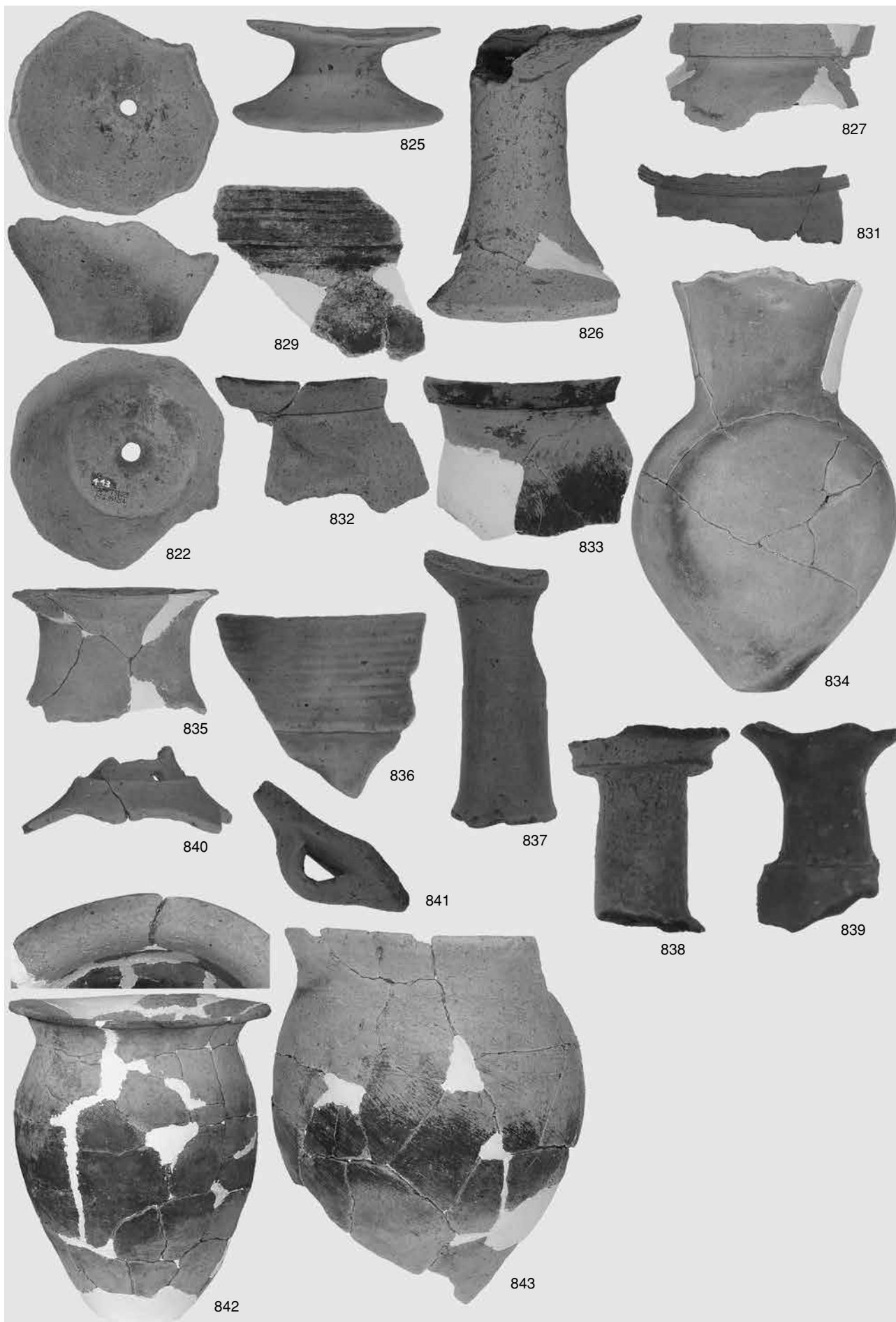


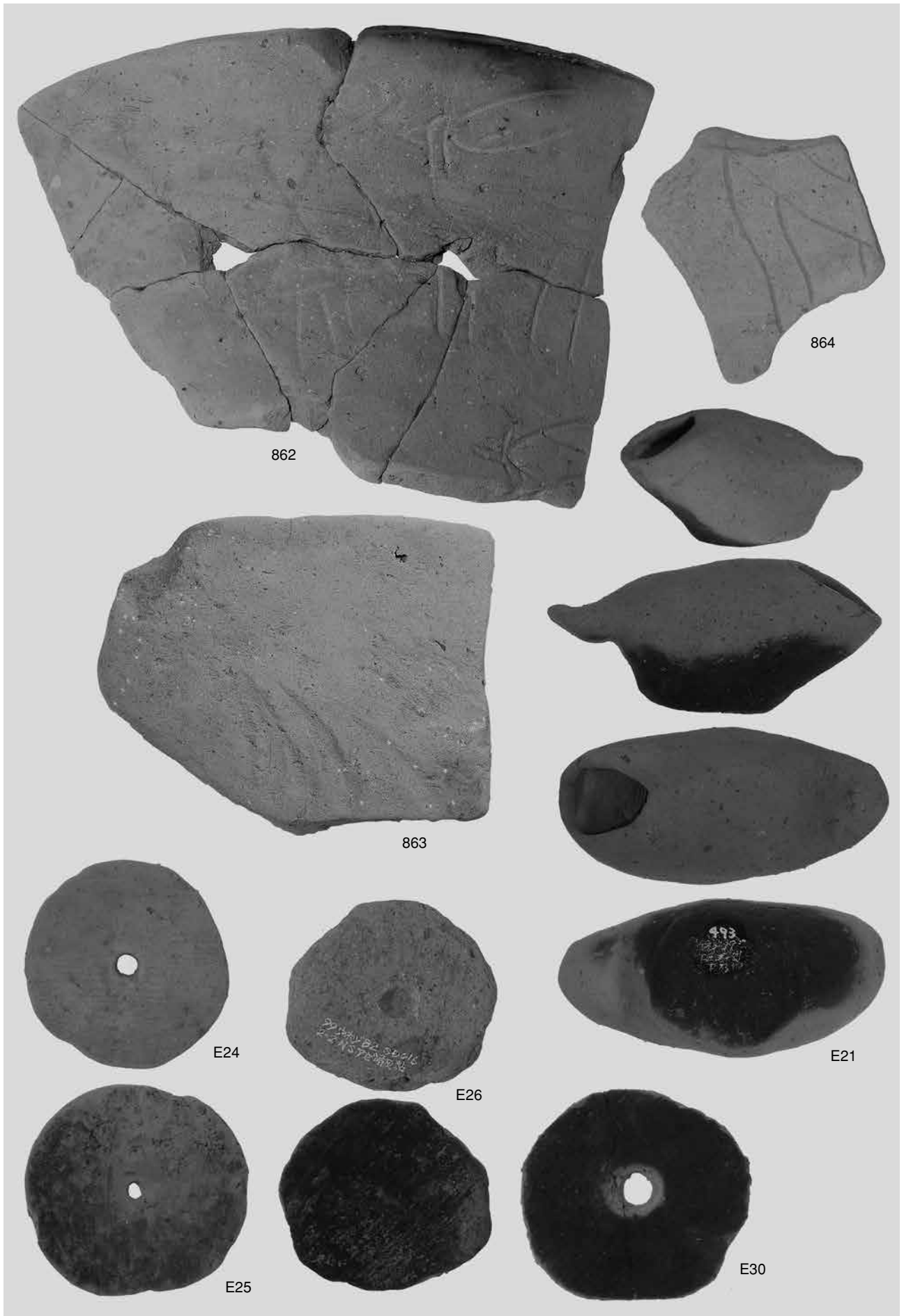


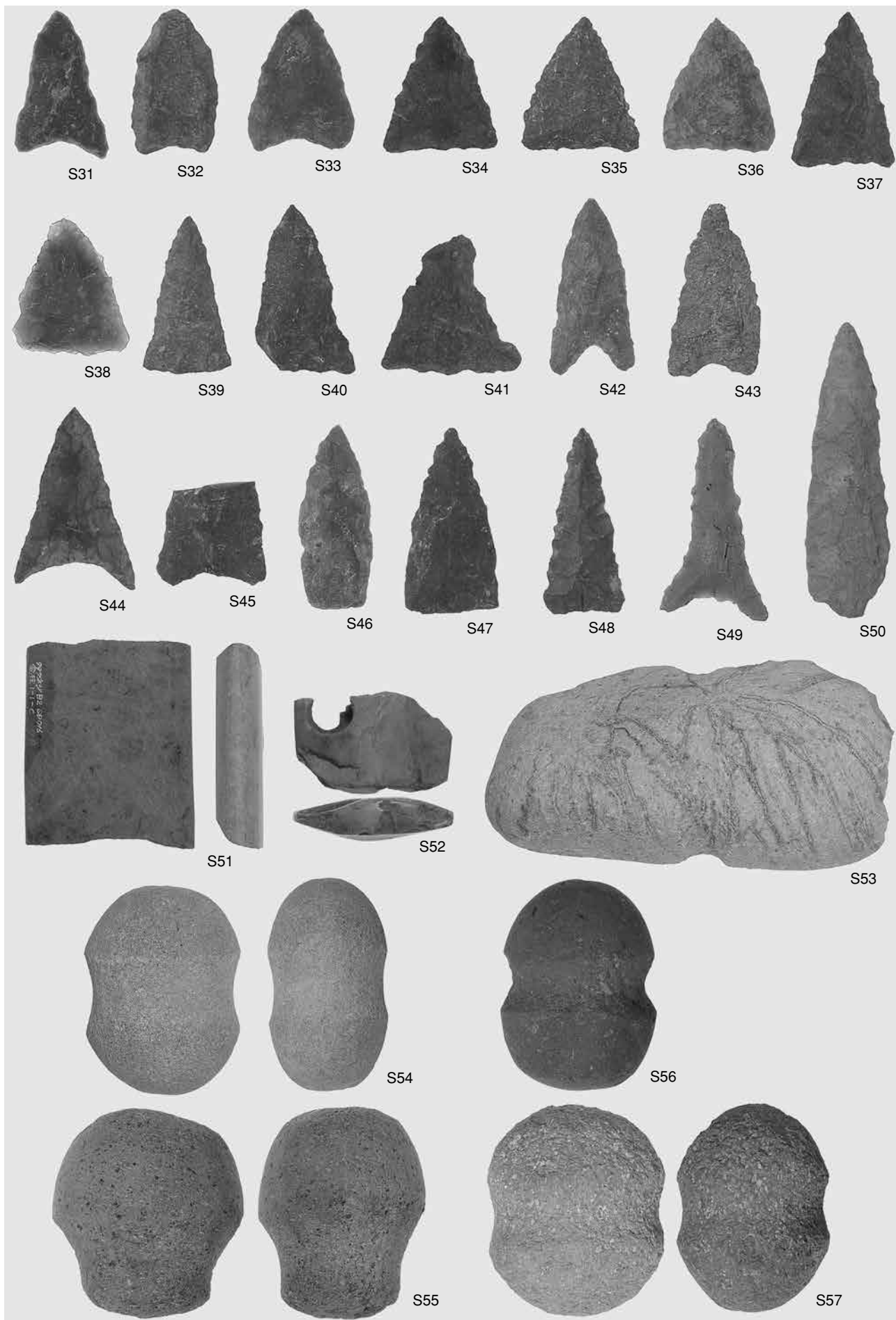


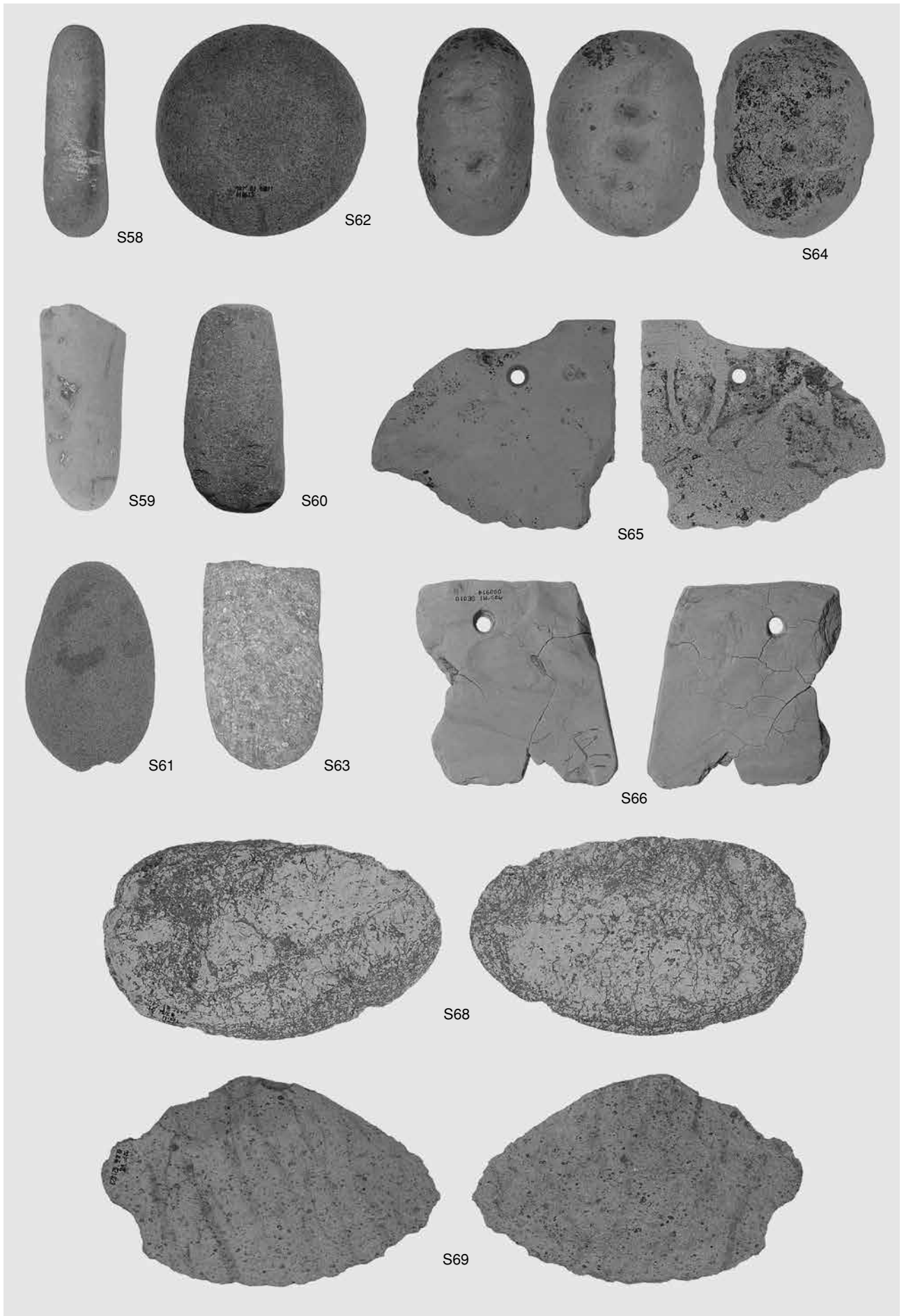


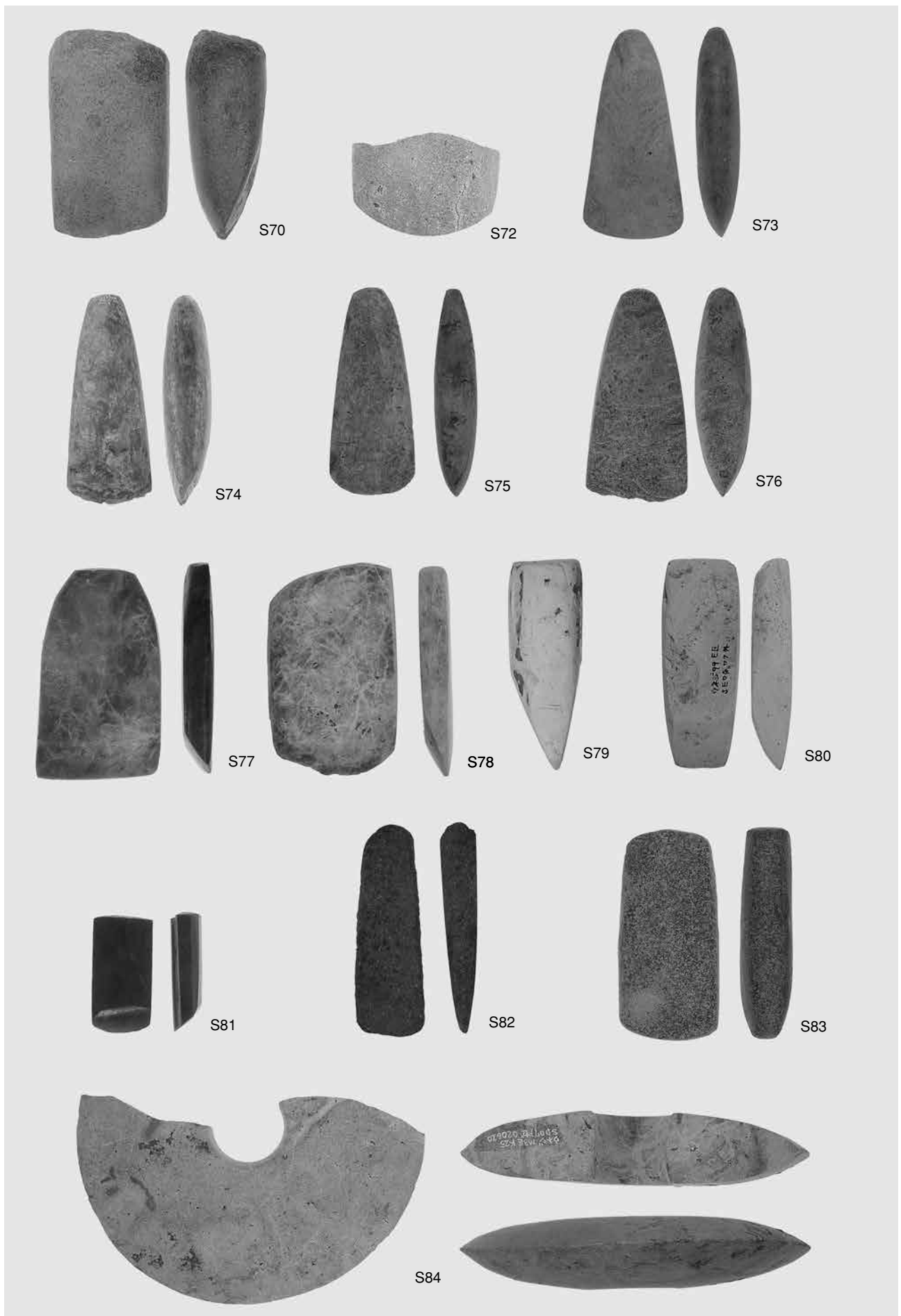


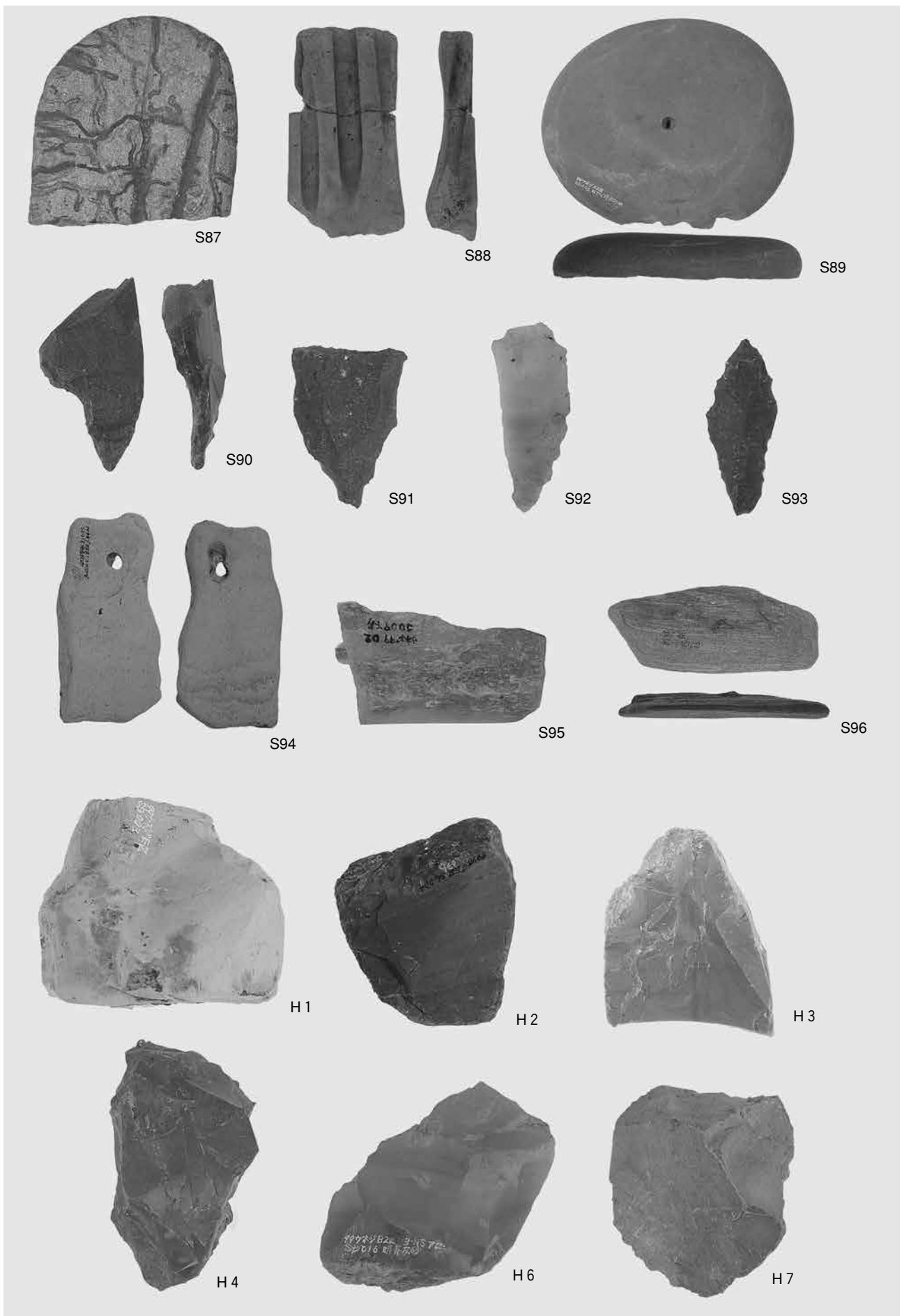


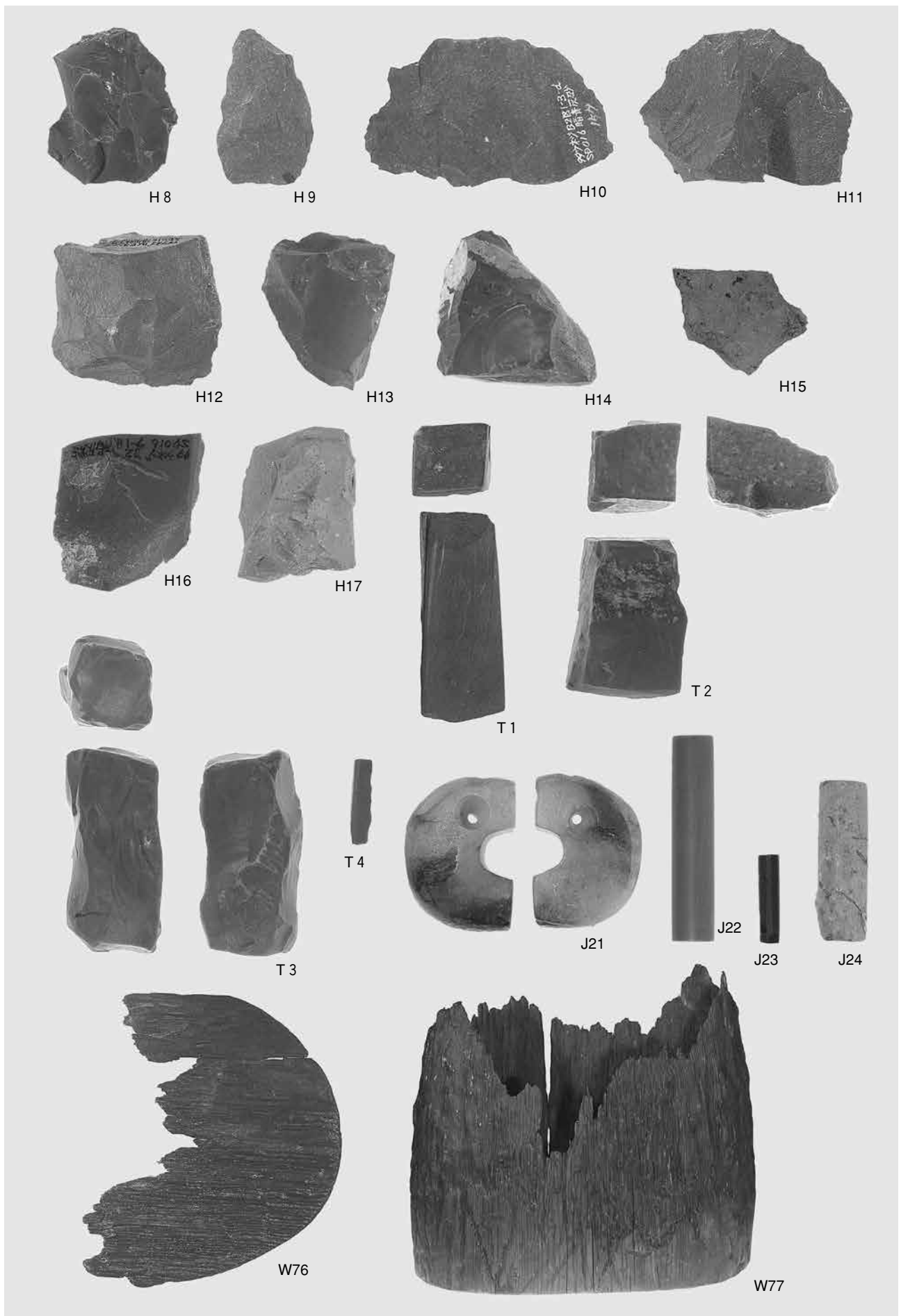


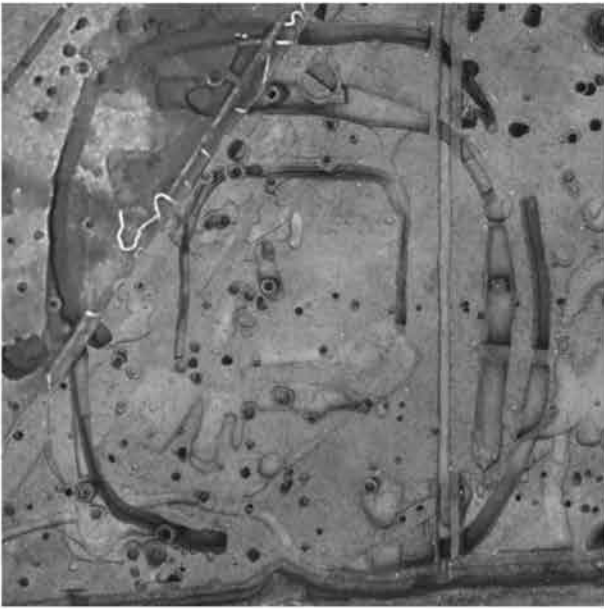












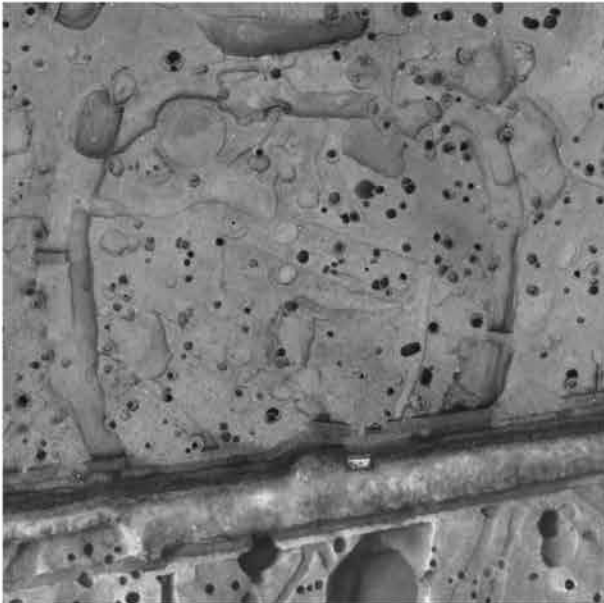
SH15・16垂直



SH15・16全景（北西から）



SH15・16内部全景（南東から）



SH18垂直



SH15・16周溝Q1区SD65



SH18全景（北西から）



SH15・16周溝Q1区SD65遺物出土状況



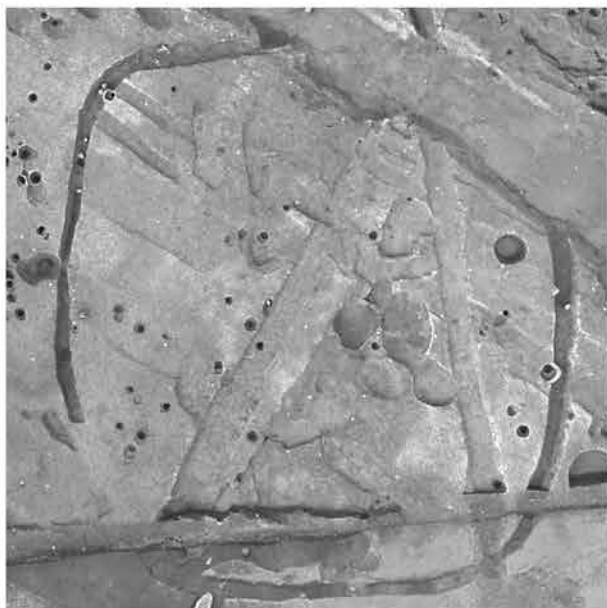
SH24垂直



SH24周溝T区SD04東溝



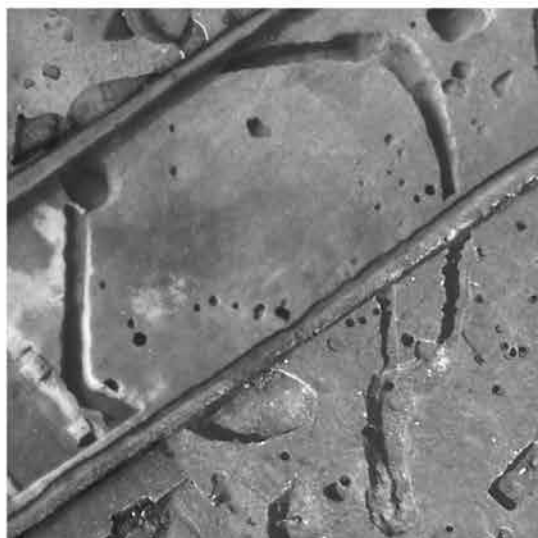
SH24周溝T区SD04西溝遺物出土状況



SH31垂直



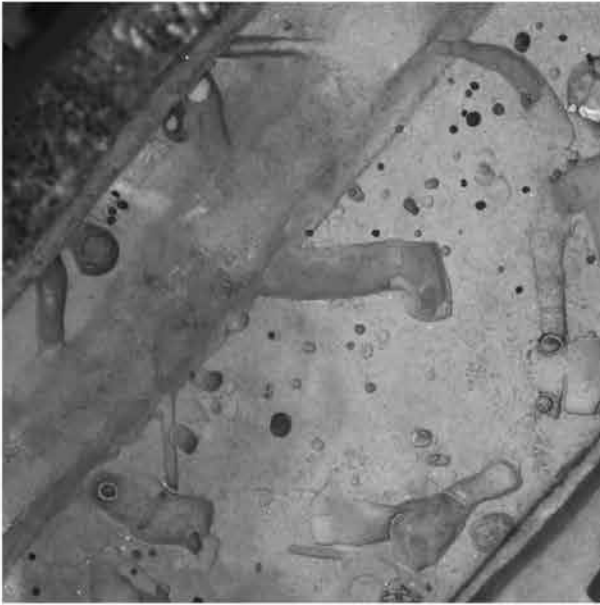
SH31周溝R2区SD10遺物出土状況



SH32垂直



SH32全景 (C2区部分のみ、北東から)



SH33垂直



SH34全景 (S2区部分のみ、南東から)



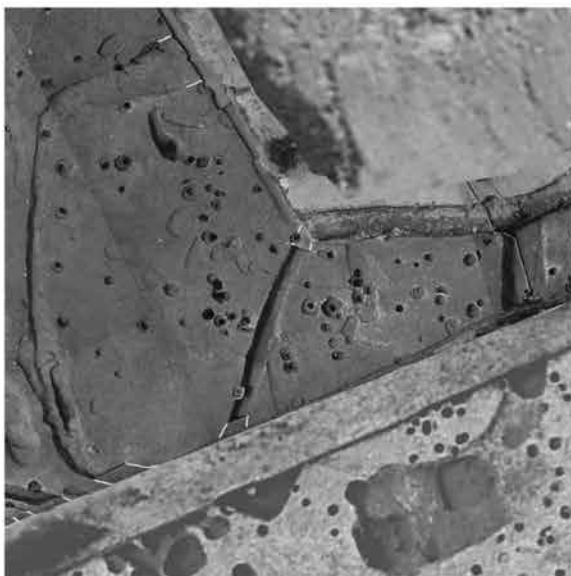
SH38全景 (南から)



SH38垂直



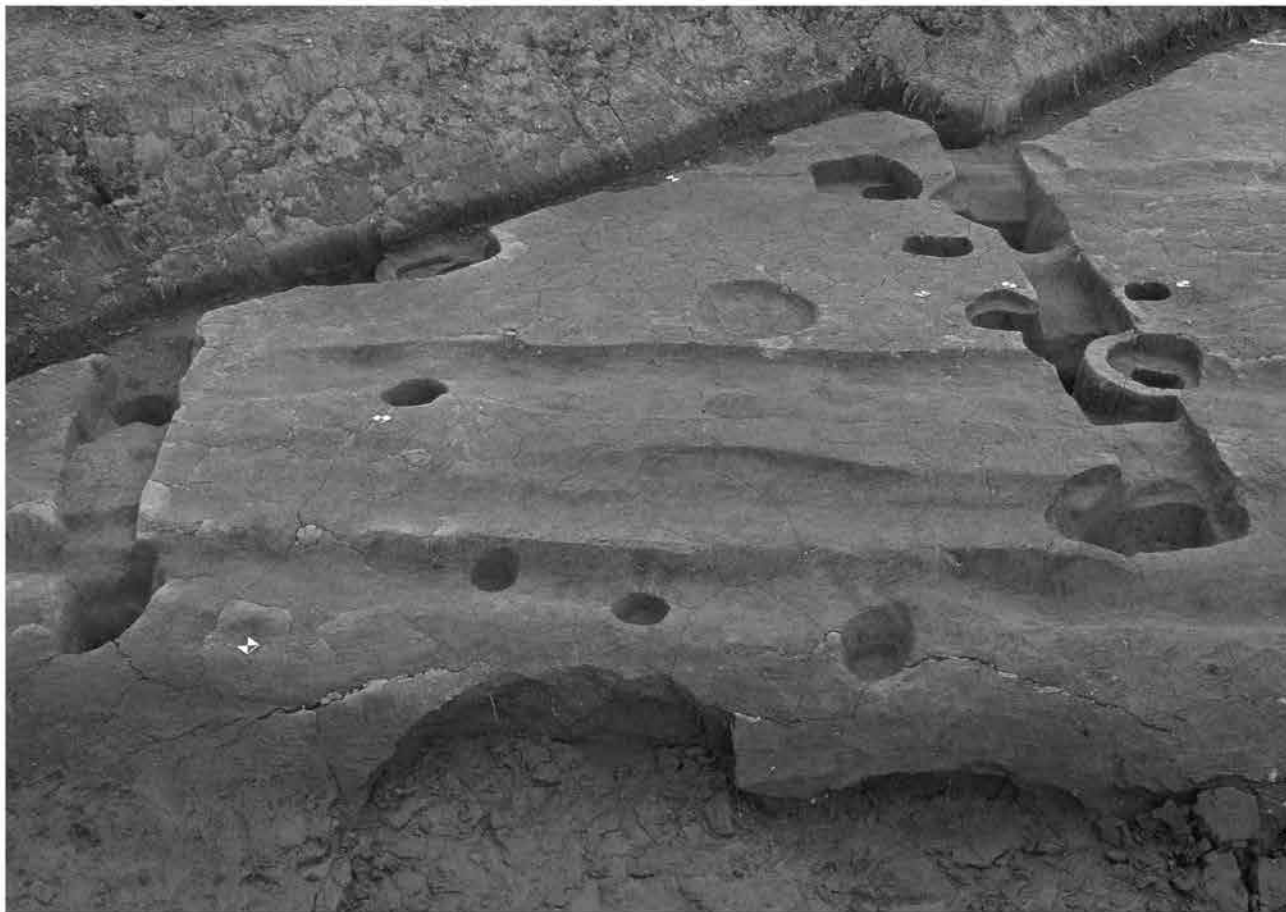
SH39全景 (南東から)



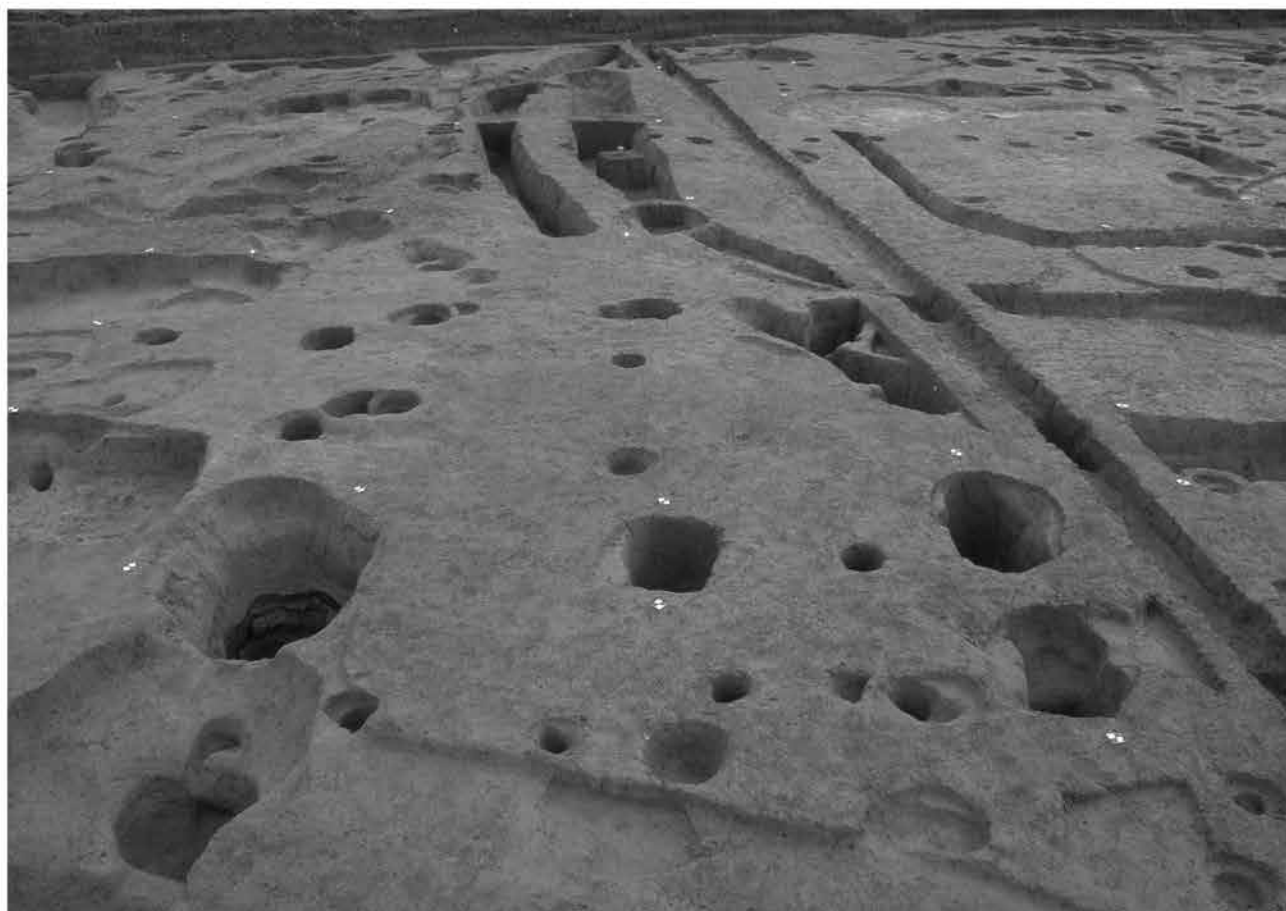
SH47垂直



SH47周溝U区SD11遺物出土状況



SB104全景（東から）



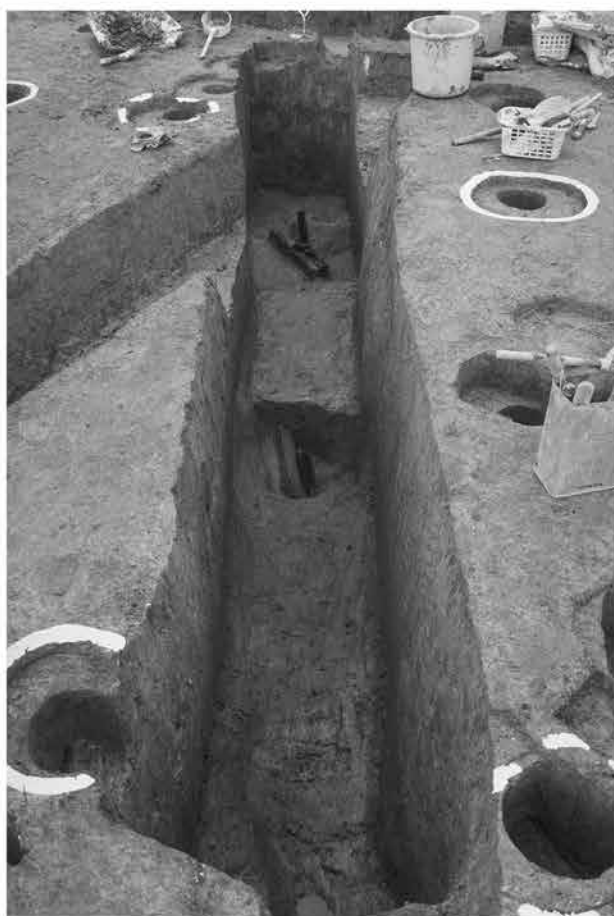
SB109・214全景（北西から）



SB123全景 (N1区部分のみ、南西から)



SB123布掘溝 (南西から)



SB127布掘溝 (南東から)



SB124全景（東から）



SB125全景（南から）



SB126全景 (N1区部分のみ、南西から)



SB127全景 (N1区部分のみ、北から)



SB113全景（北西から）



SB205全景（北から）



SB215・216全景（南西から）



SB232他全景（南東から）



A3区SE06土層断面



B2区SE01 (W260) 検出状況



F区SE04全景 (北から)



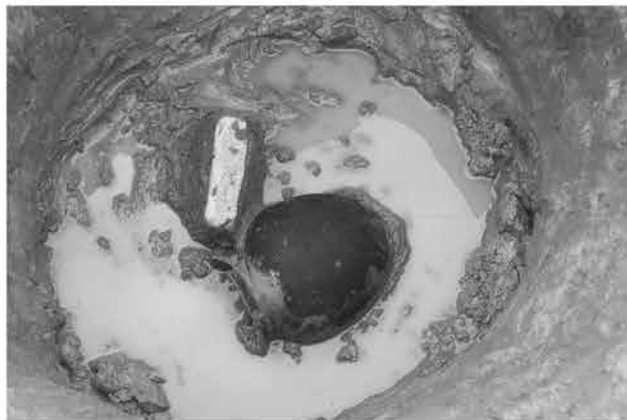
F区SE04上部土層断面



F区SE04遺物 (土器1348) 出土状況



F区SE08土層断面



F区SE08遺物（土器1342）出土状況



F区SE13全景（東から）



F区SE13土層断面・遺物出土状況



F区P15土層断面



O1区SE01全景（北から）



O1区SE01遺物（土器1341）出土状況



W区SE01土層断面



DS1全景 (A1区SD04のみ、北西から)



DS1 (A1区SD04) 土層断面



DS1 (T区SD14) 土層断面



DS2全景 (Q2区SD130のみ、南から)



DS2 (Q2区SD130) 土層断面



DN2 (I区SD04) 土層断面



DN2 (S4区SD13) 全景 (北西から)



DN3 (B2区SD14) 土層断面



DN3全景 (W区SD59のみ、南から)



DN3 (W区SD59) 土層断面



DN9 (W区川跡) 土層断面



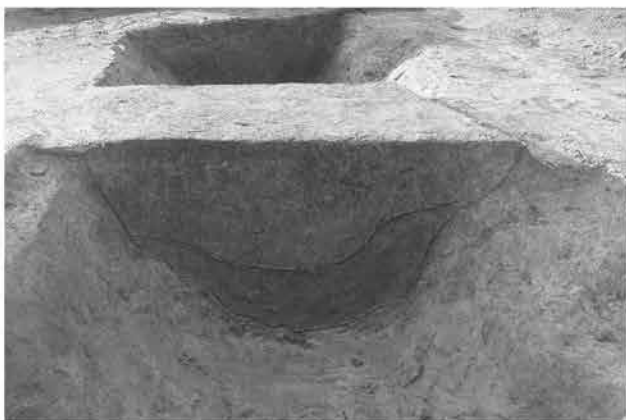
DN9 (E区SD22) 遺物出土状況



DN9 (W区川跡) 編物出土状況



DN9全景 (M1区SD22のみ、北東から)



SC2 (F区SD13) 土層断面



SC3 (G区SD10) 土層断面



SC4 (W区SD54) 遺物出土状況



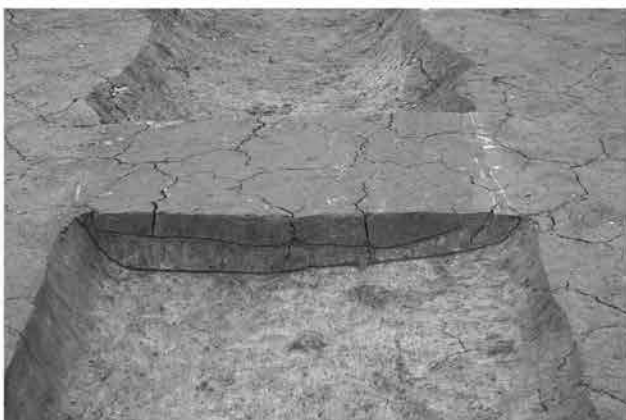
SC3 (N2区SD28) 土層断面



SC5 (W区SD53) 土層断面



SC5 (W区SD53) 遺物出土状況



SC8 (B3区SD25) 土層断面 1



SC8 (B3区SD25) 土層断面 2



A4区SK61遺物出土状況



C3区SK74土層断面



C3区SK75全景 (南東から)



C3区SK81全景 (西から)



C3区SK108全景 (東から)



C3区SK88全景 (南西から)



C3区SK108土層断面



C8区SK01遺物出土状況



Q2区SK63土層断面



Q2区SK91全景（北から）



Q2区SK100遺物出土状況



Q2区SK91土層断面



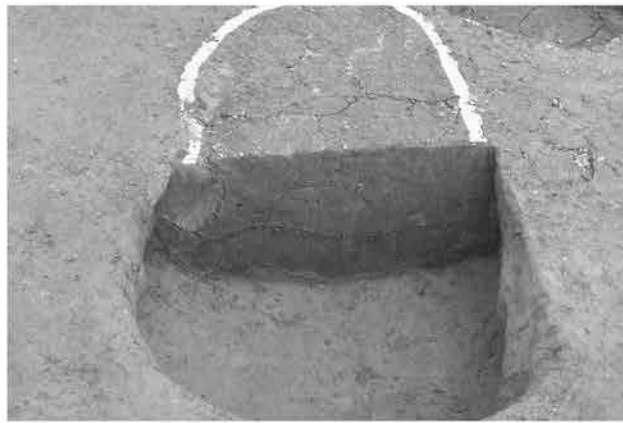
Q2区SK100・SD108全景（北西から）



R2区SK06遺物出土状況



R2区SK13土層断面



R2区SK38土層断面



R2区SK45全景（北西から）



S1区SK43全景（南から）



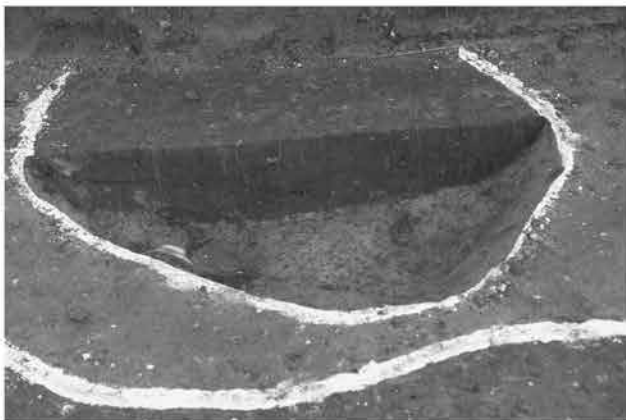
S1区SK43土層断面



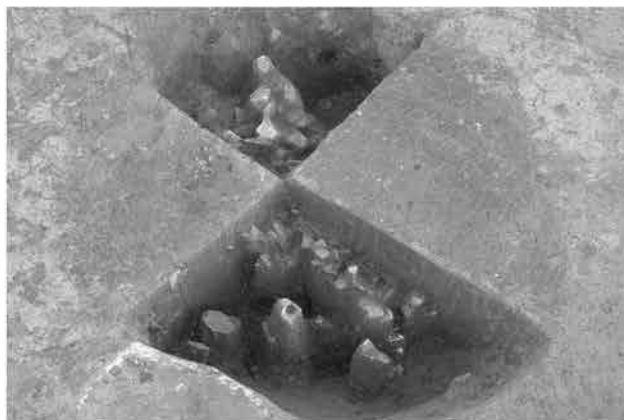
S1区SK43遺物出土状況



S1区SK38土層断面



S2区SK01土層断面



S2区SK03遺物出土状況



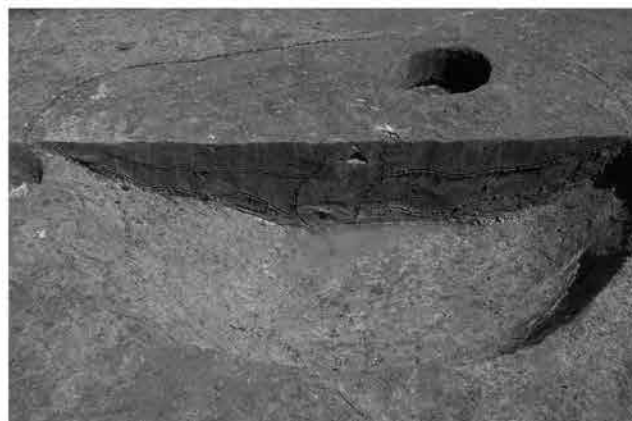
S2区SK07全景（北から）



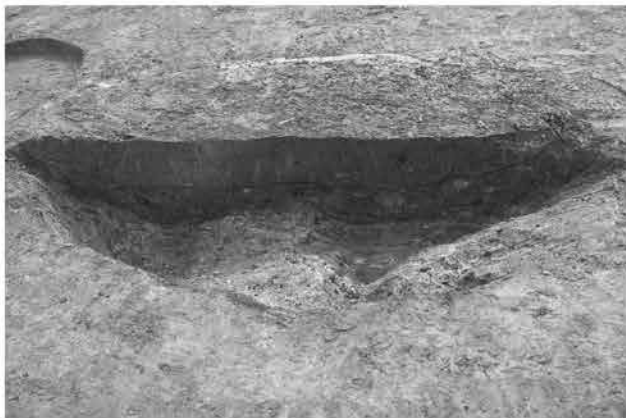
N2区SK17土層断面



S3区SK04土層断面



V2区SK12土層断面



W区SK02土層断面



W区SK10土層断面



B1区SD59土層断面



C1区SD01土層断面



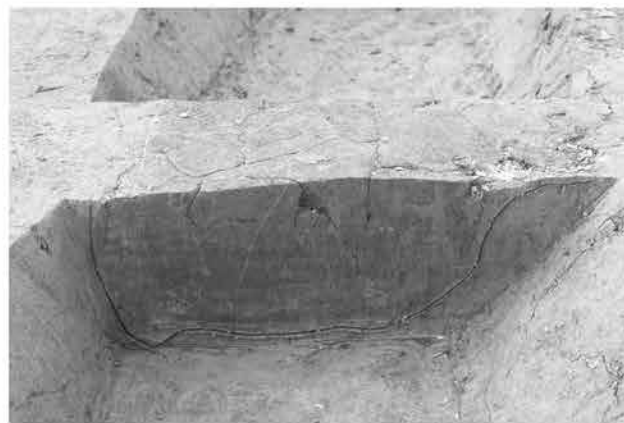
C3区SD36全景（北東から）



C3区SD36土層断面



C3区SD44全景（北西から）



C3区SD44土層断面



Q2区SD119土層断面



Q2区SD119遺物（土器1382）出土状況



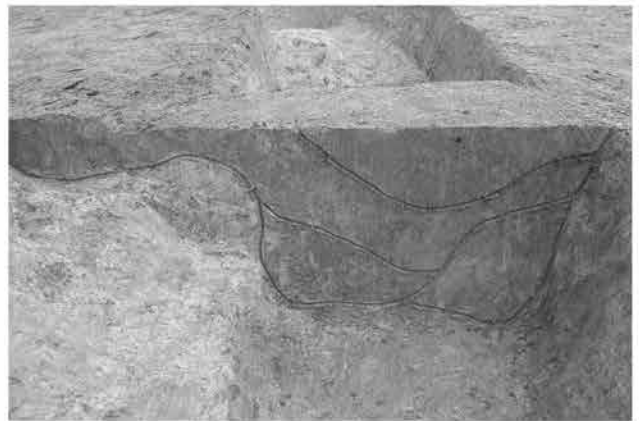
V2区SD06・07土層断面



V2区SD12土層断面



W区SD15土層断面



W区SD63土層断面



V2区SX01全景（南東から）



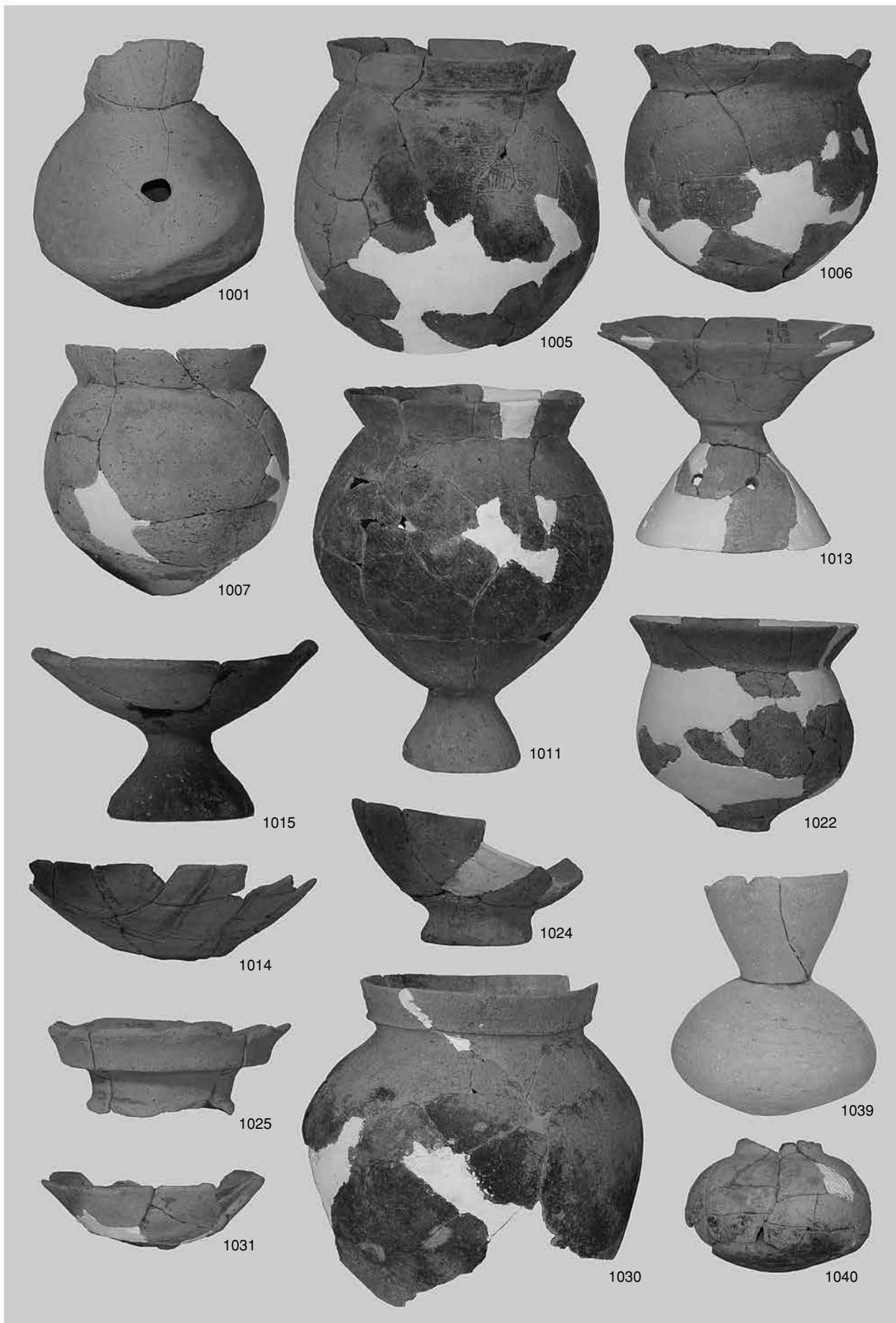
V2区SX01土層断面

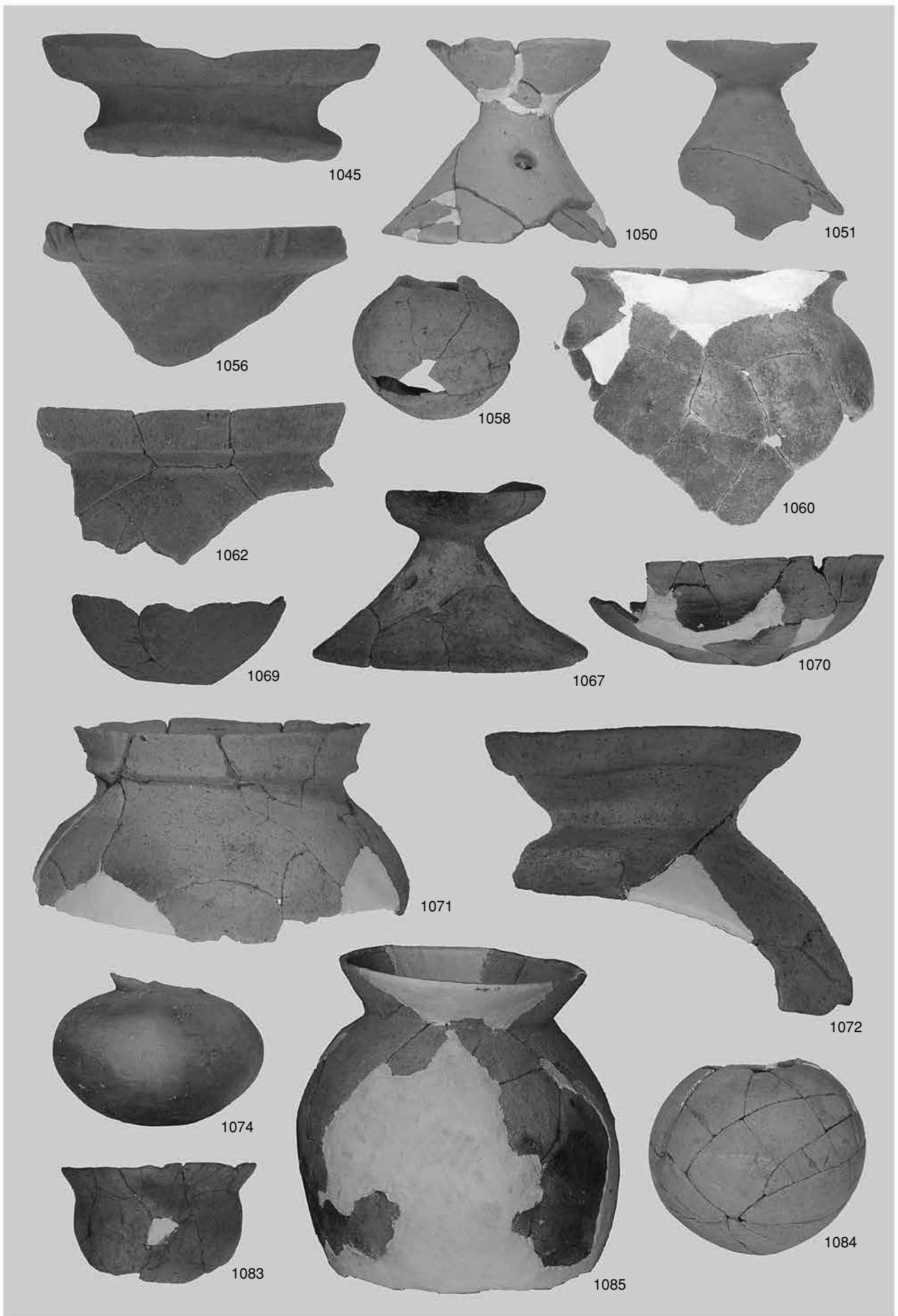


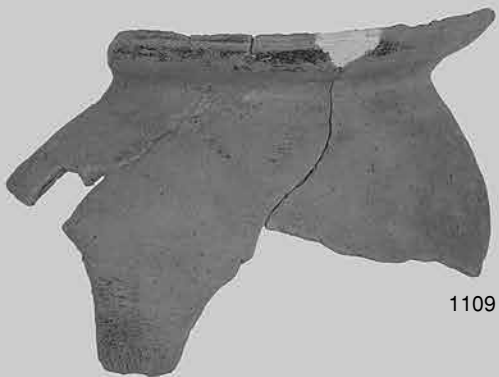
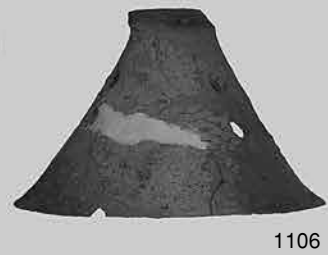
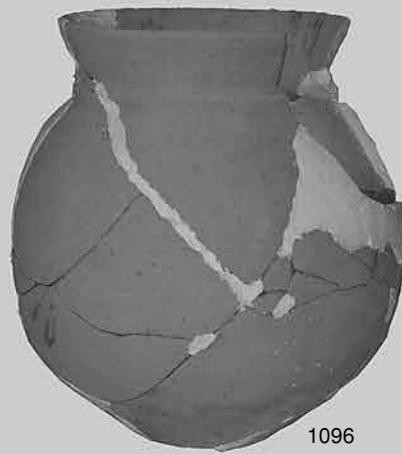
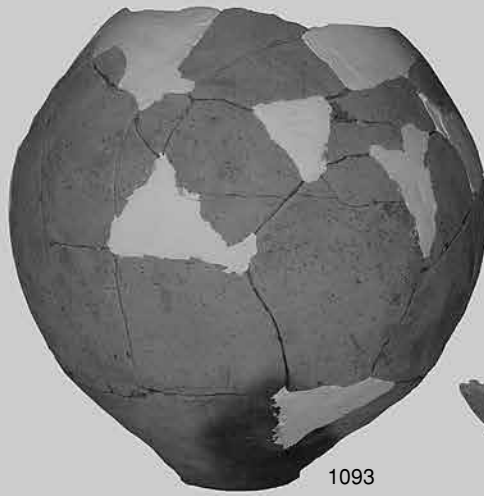
V2区SX01遺物出土状況

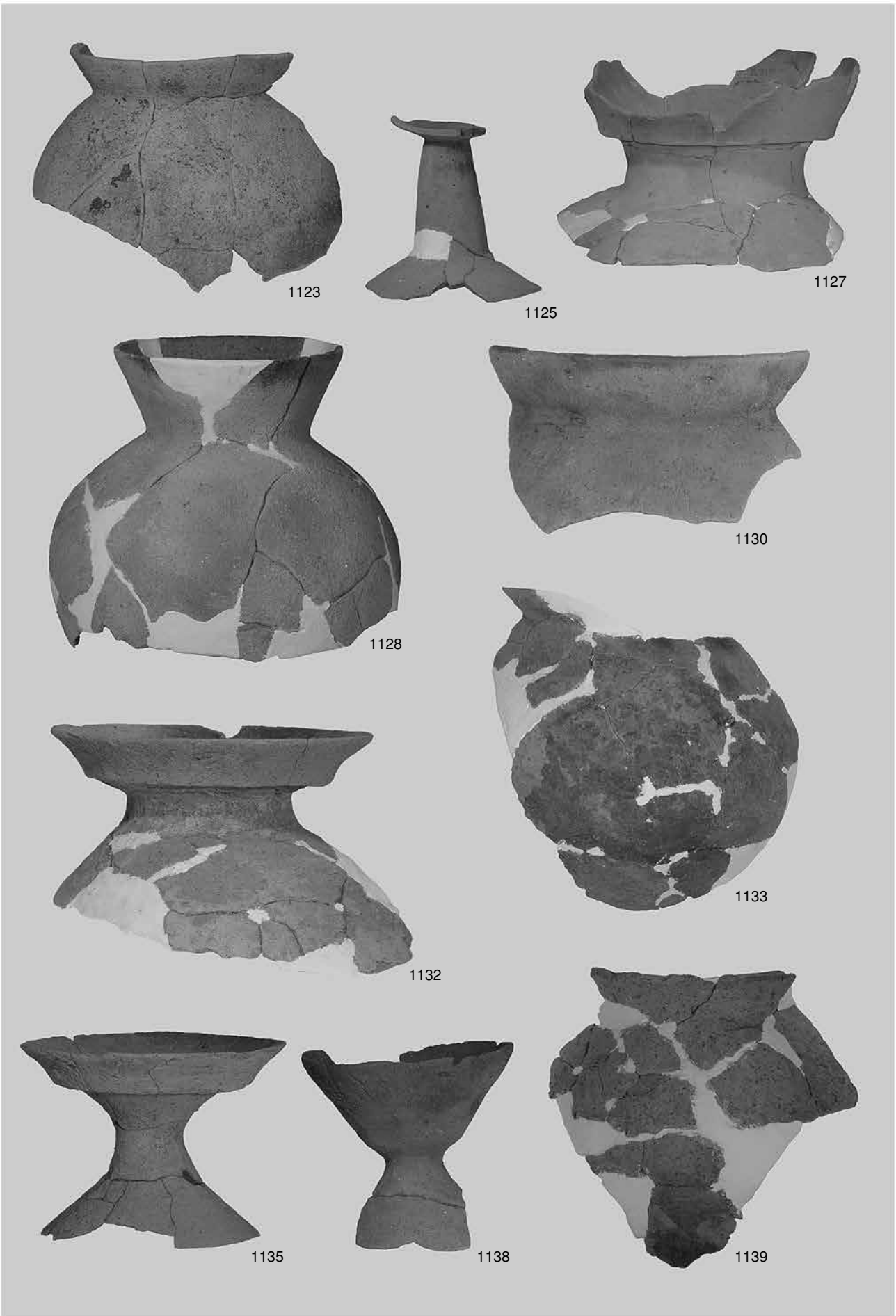


W区SX05全景（南東から）











1143



1144



1145



1148



1154



1149



1156



1158



1159



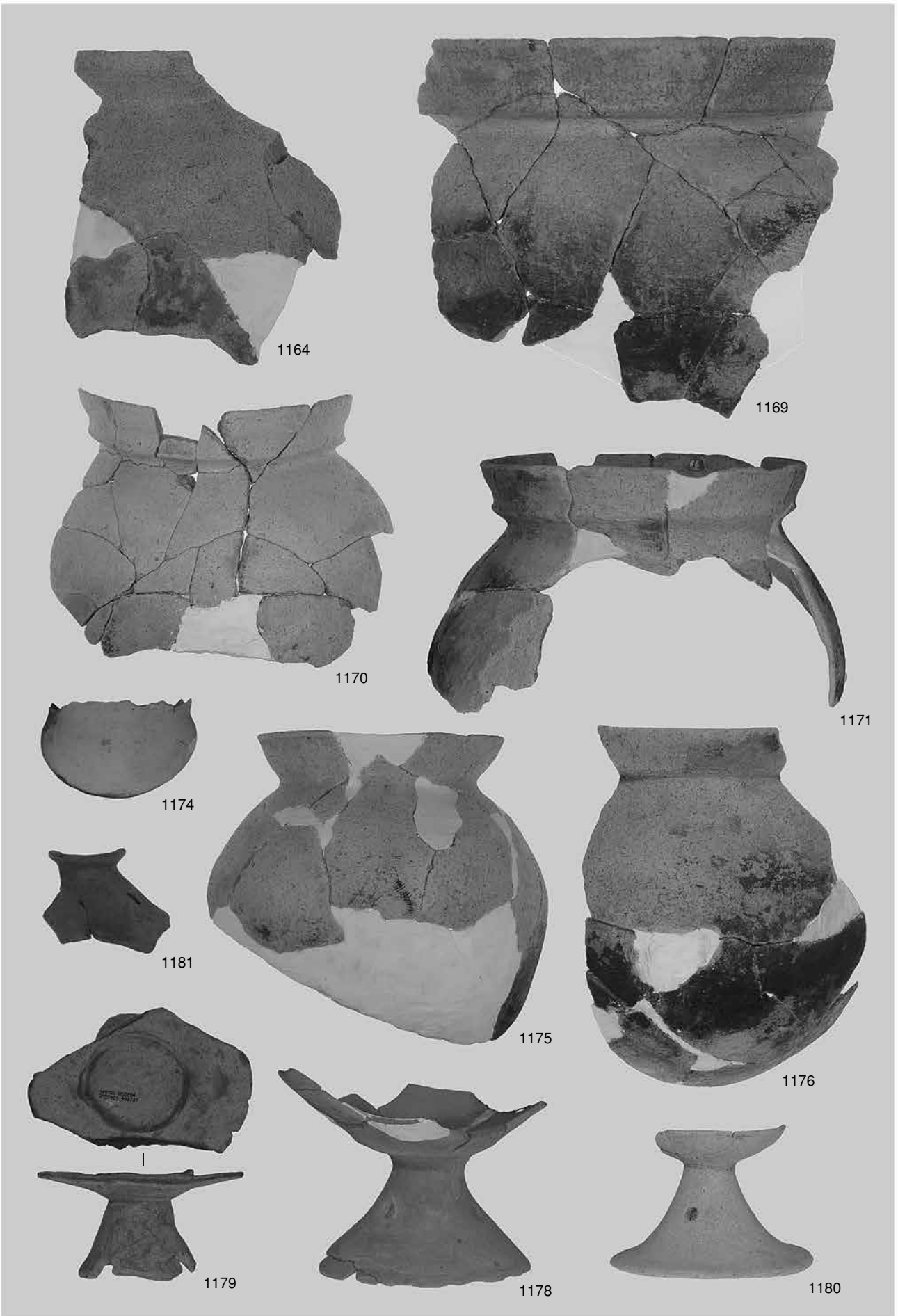
1160



1161

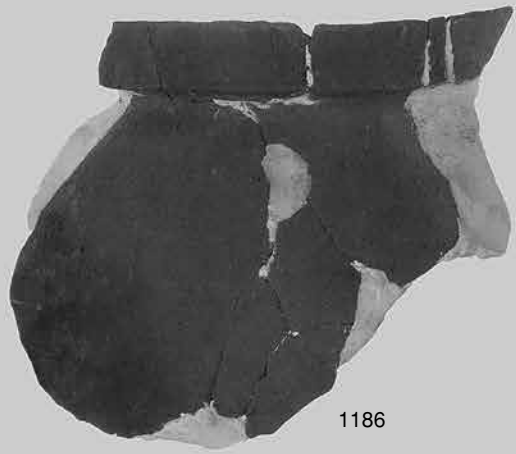


1162

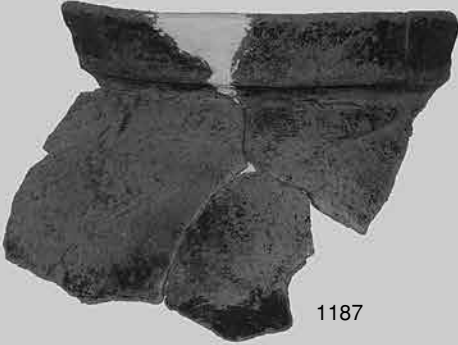




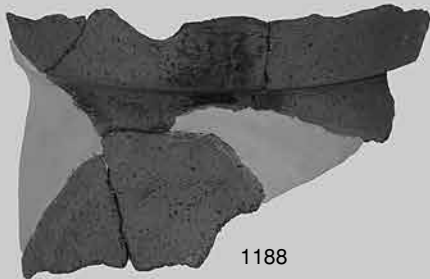
1183



1186



1187



1188



1189



1193



1192



1194



1197



1198



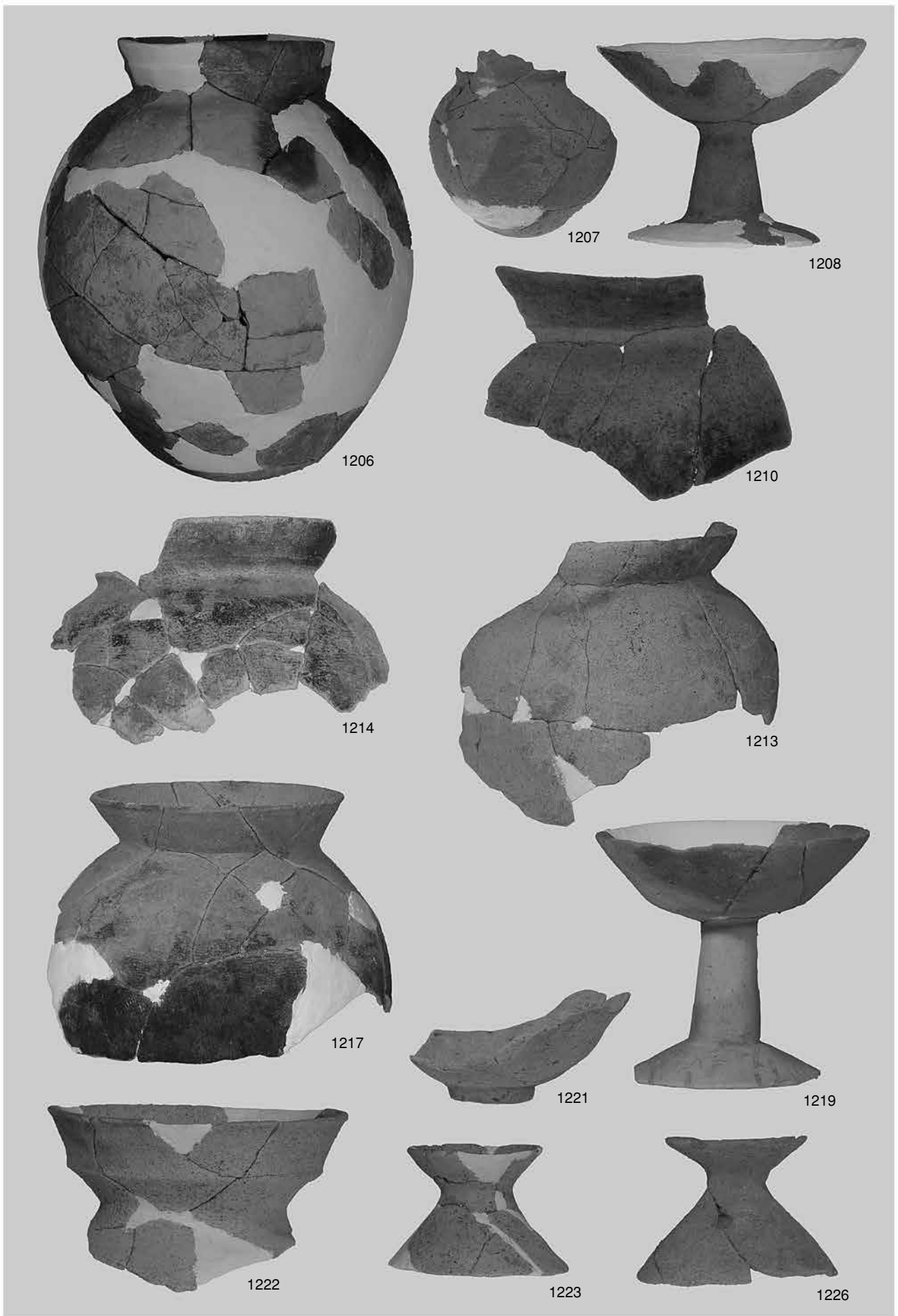
1195

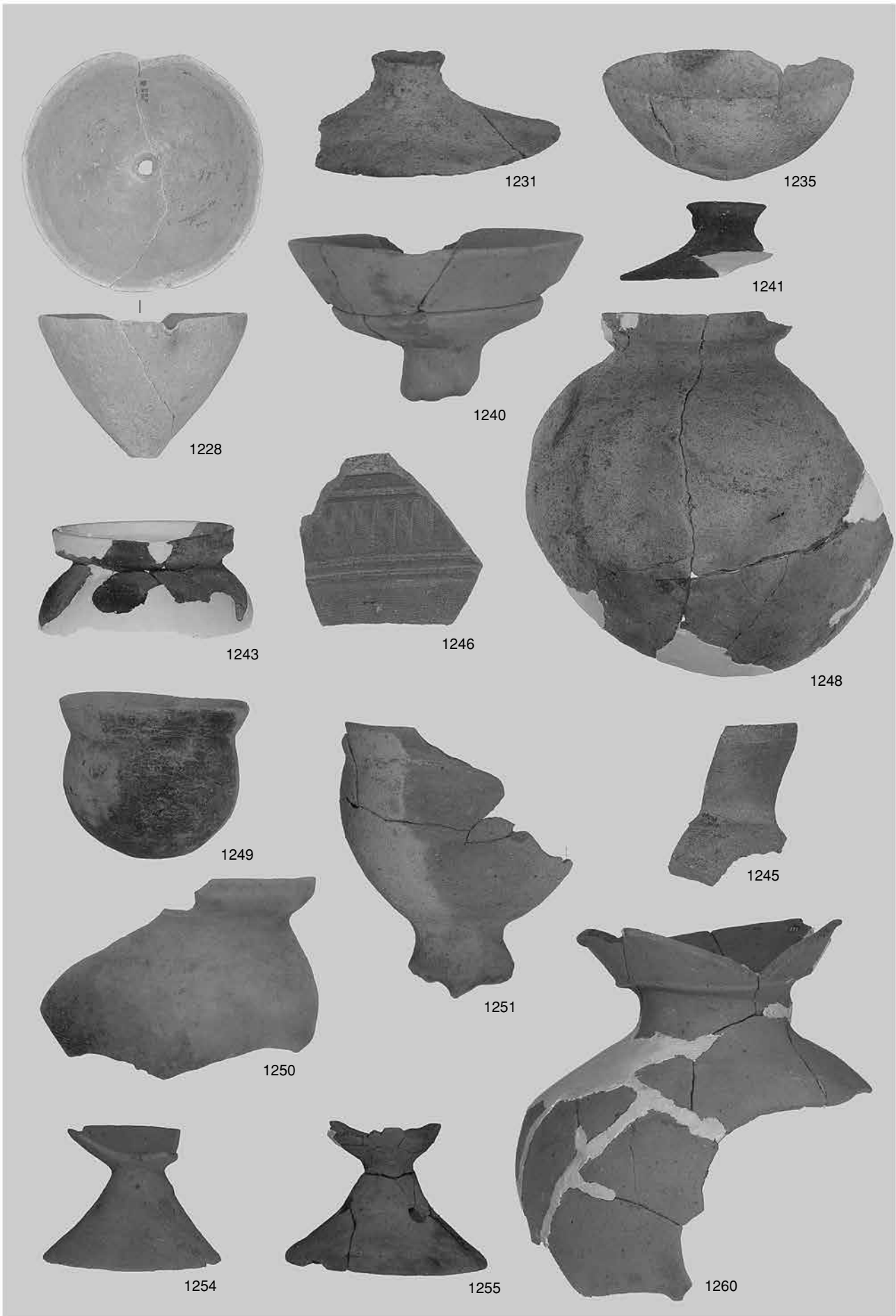


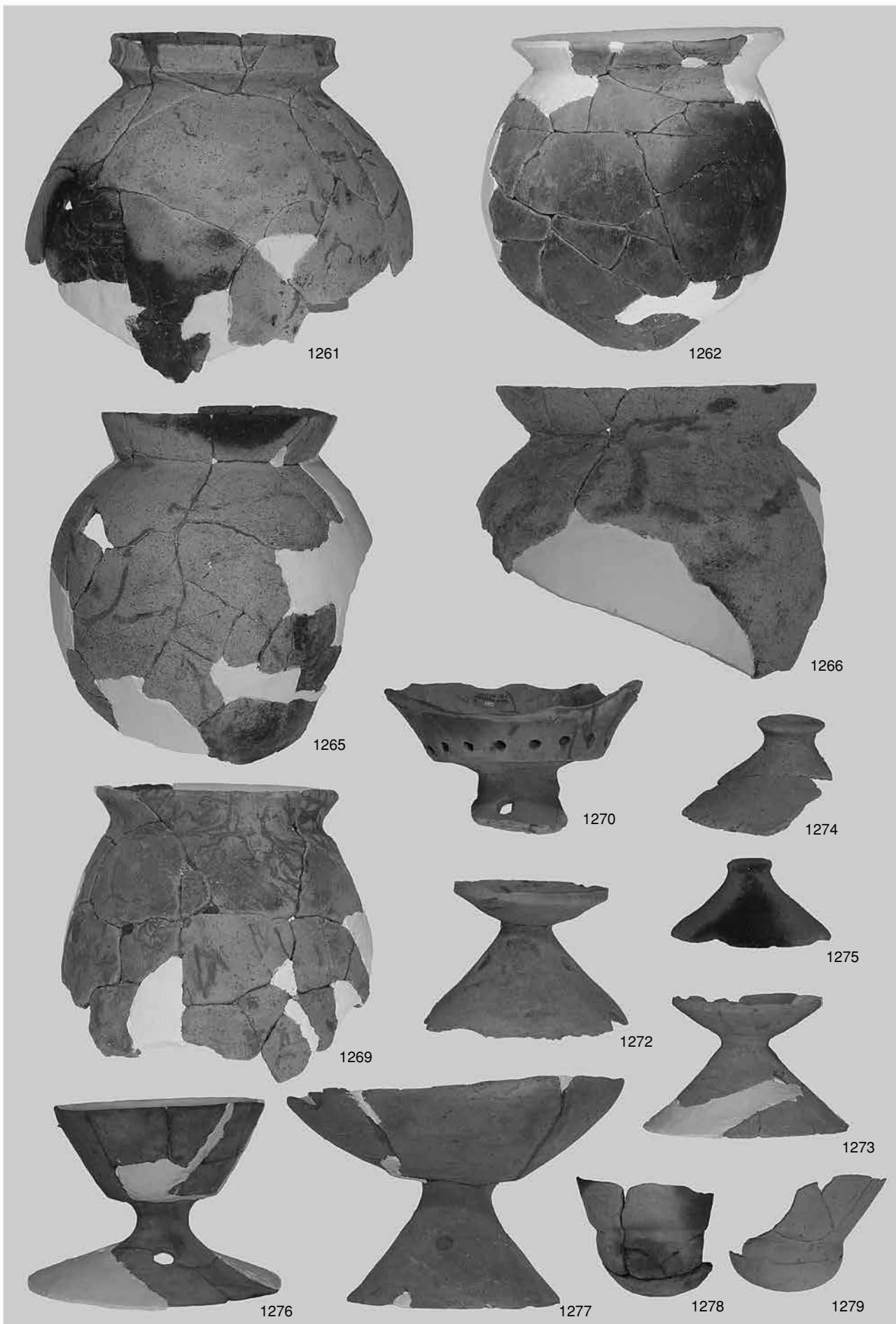
1204



1201

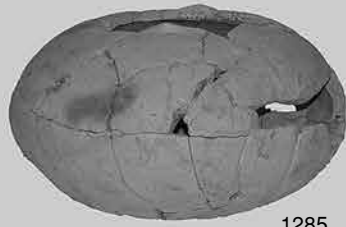








1283



1285



1284



1289



1288



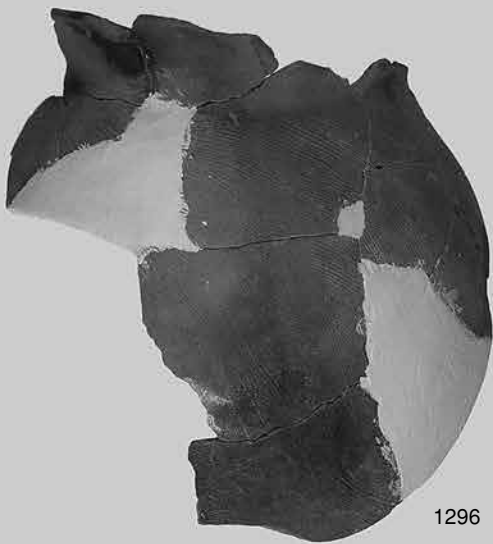
1287



1292



1297



1296



1291



1299



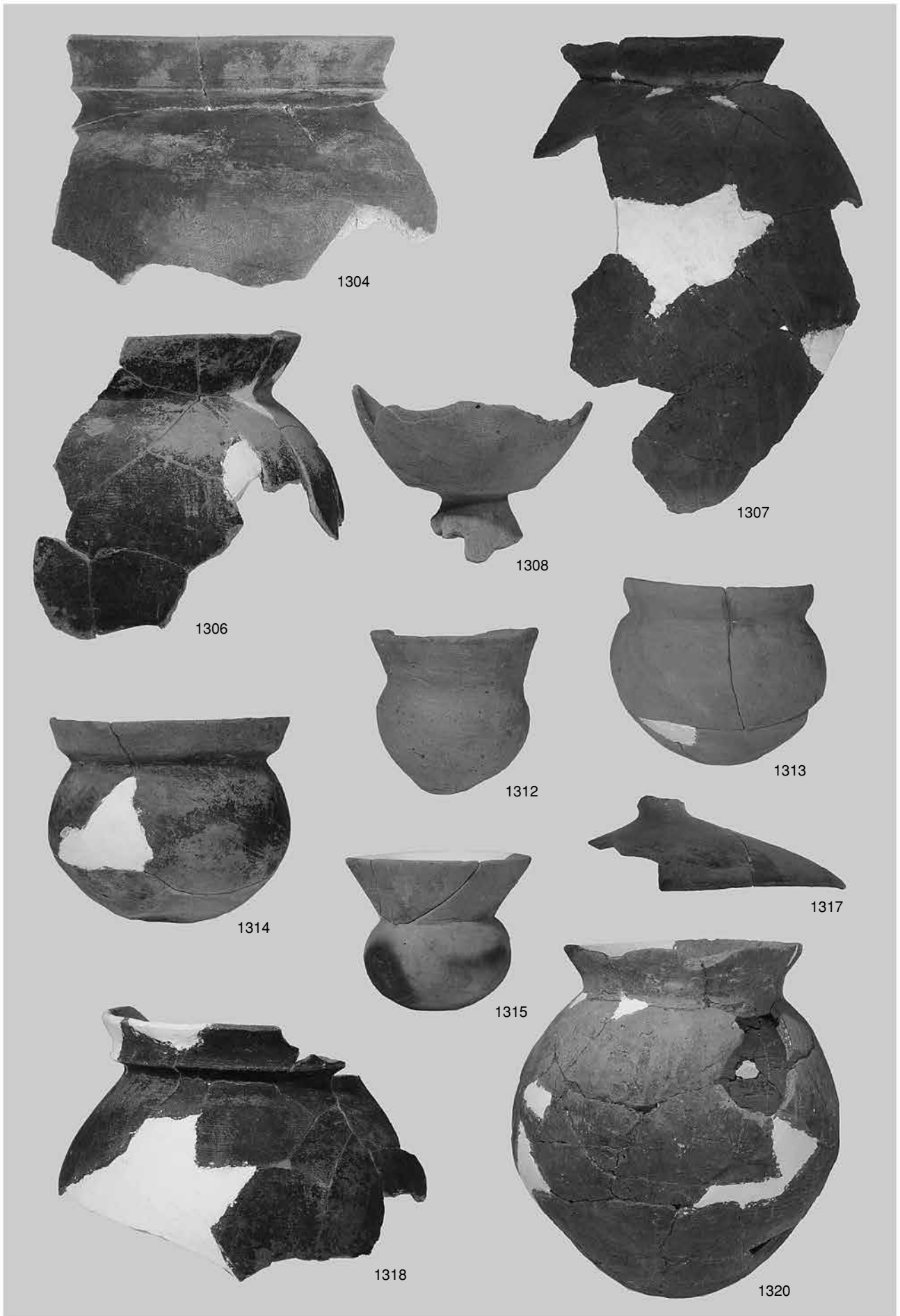
1300

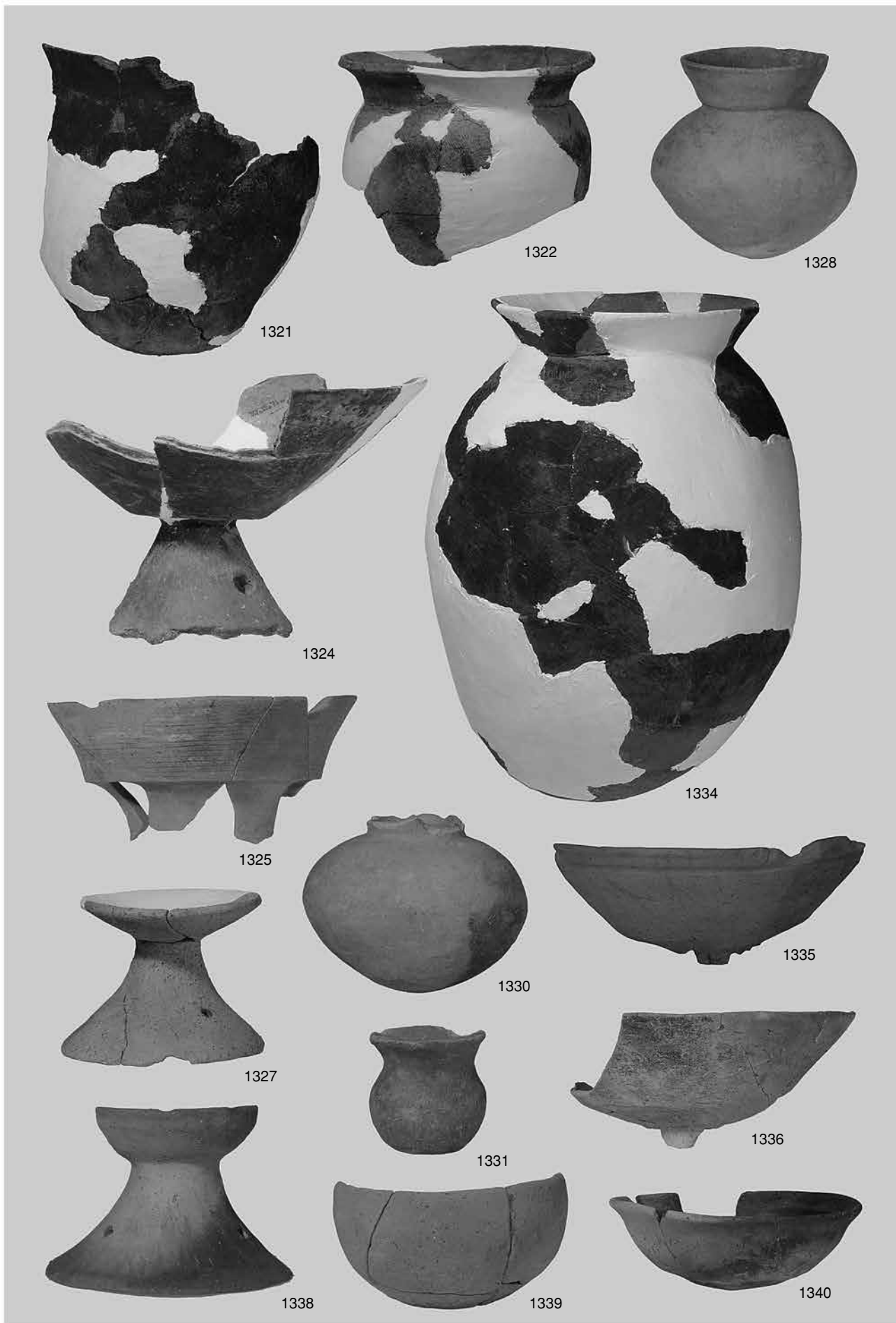


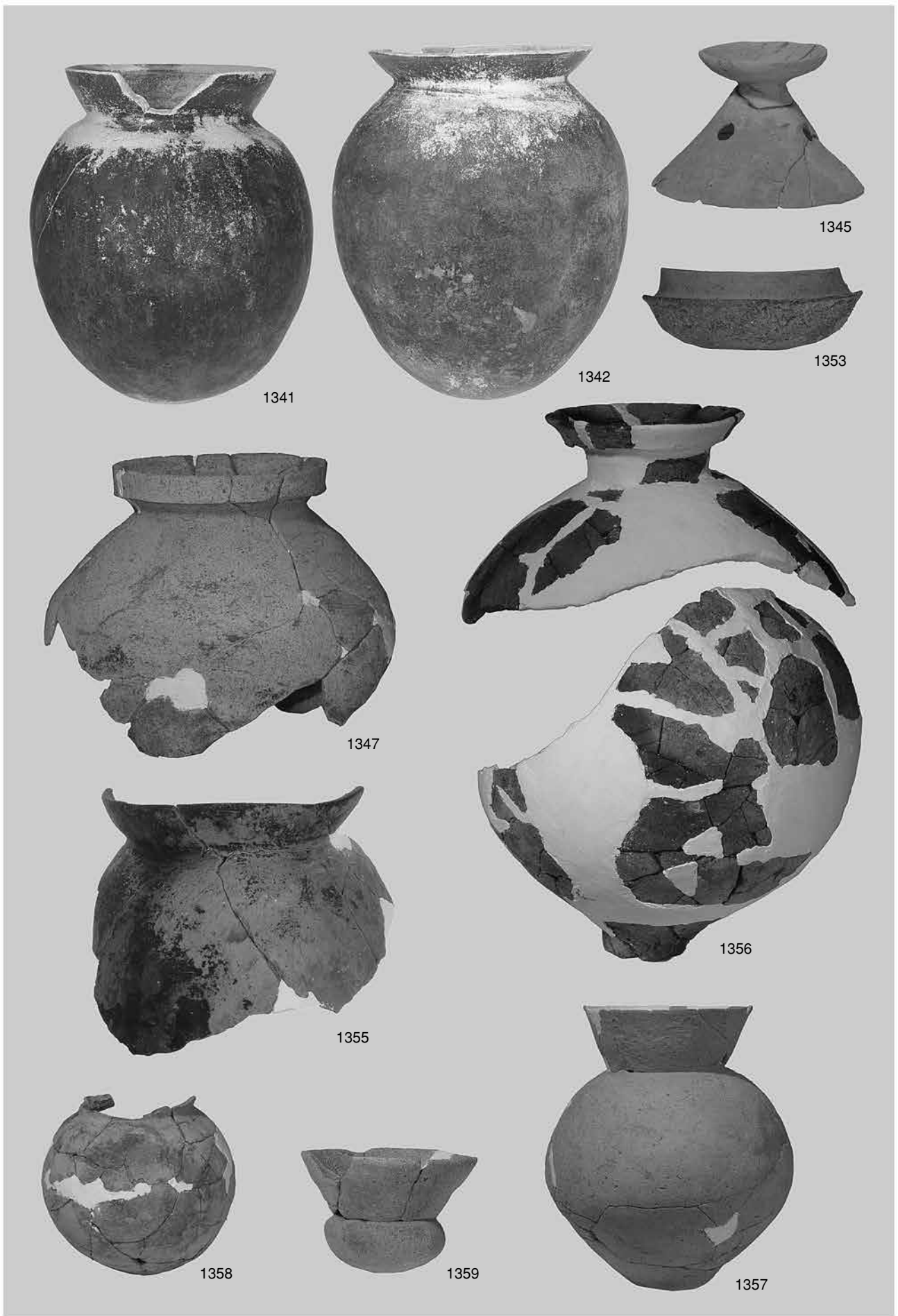
1290

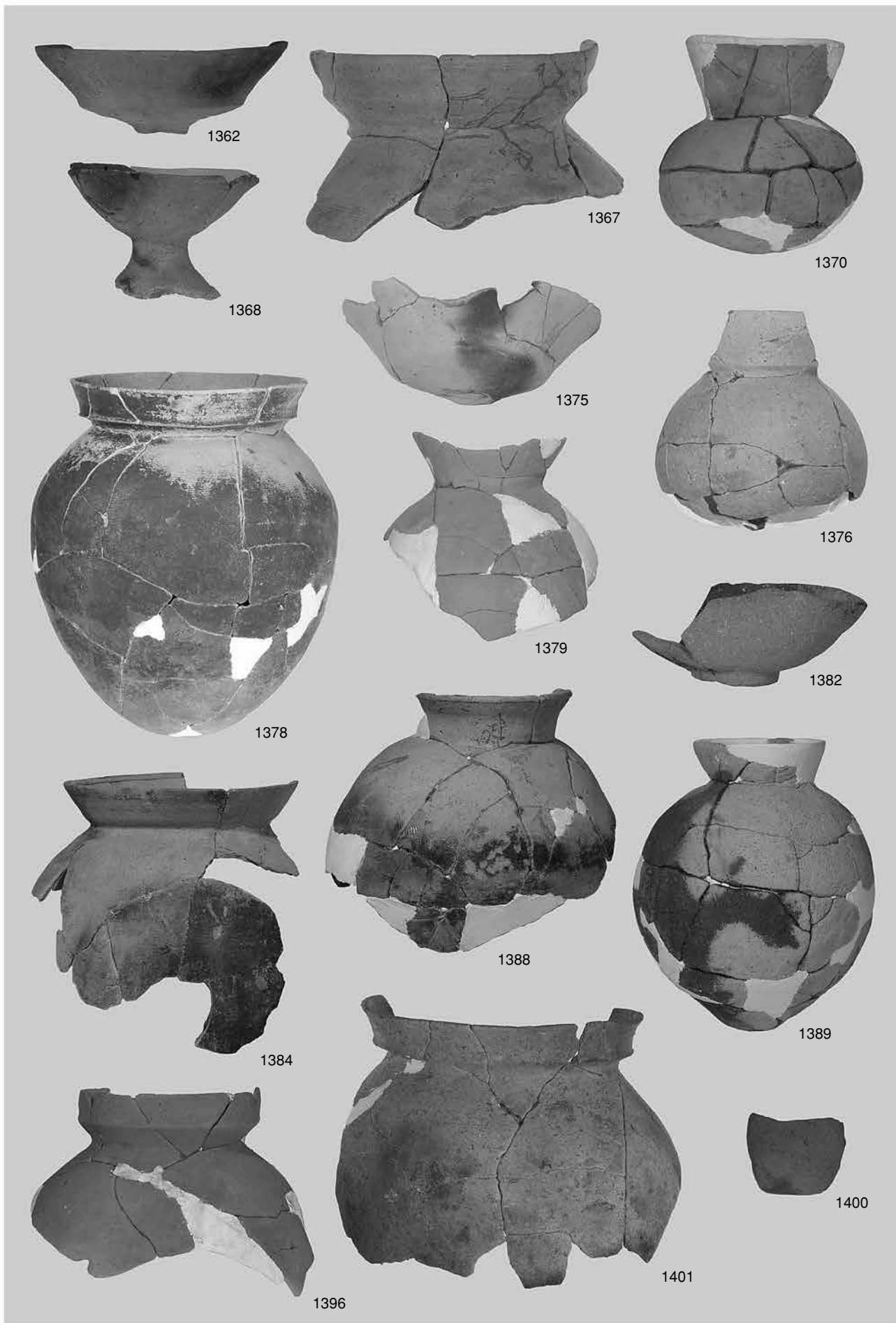


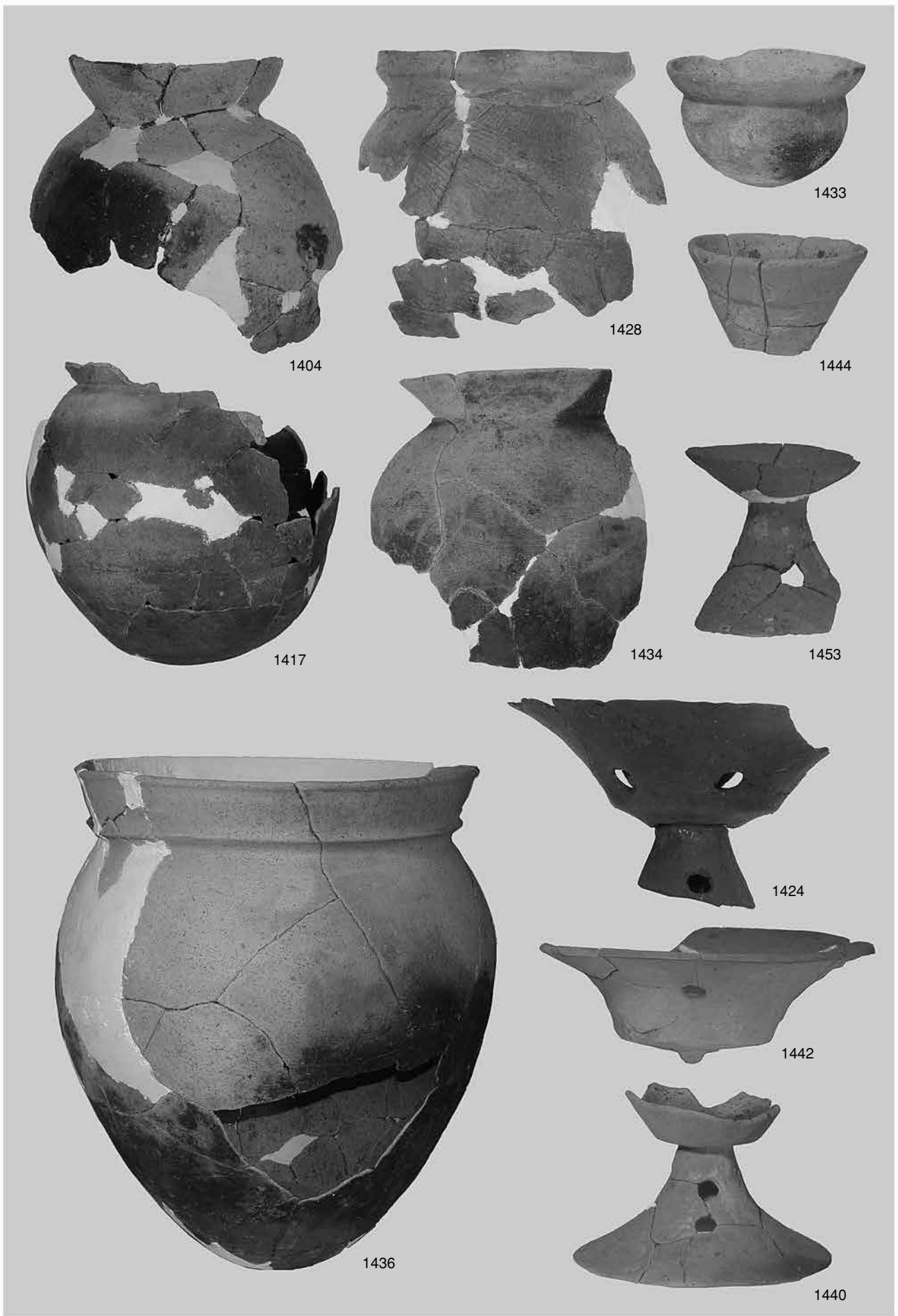
1301

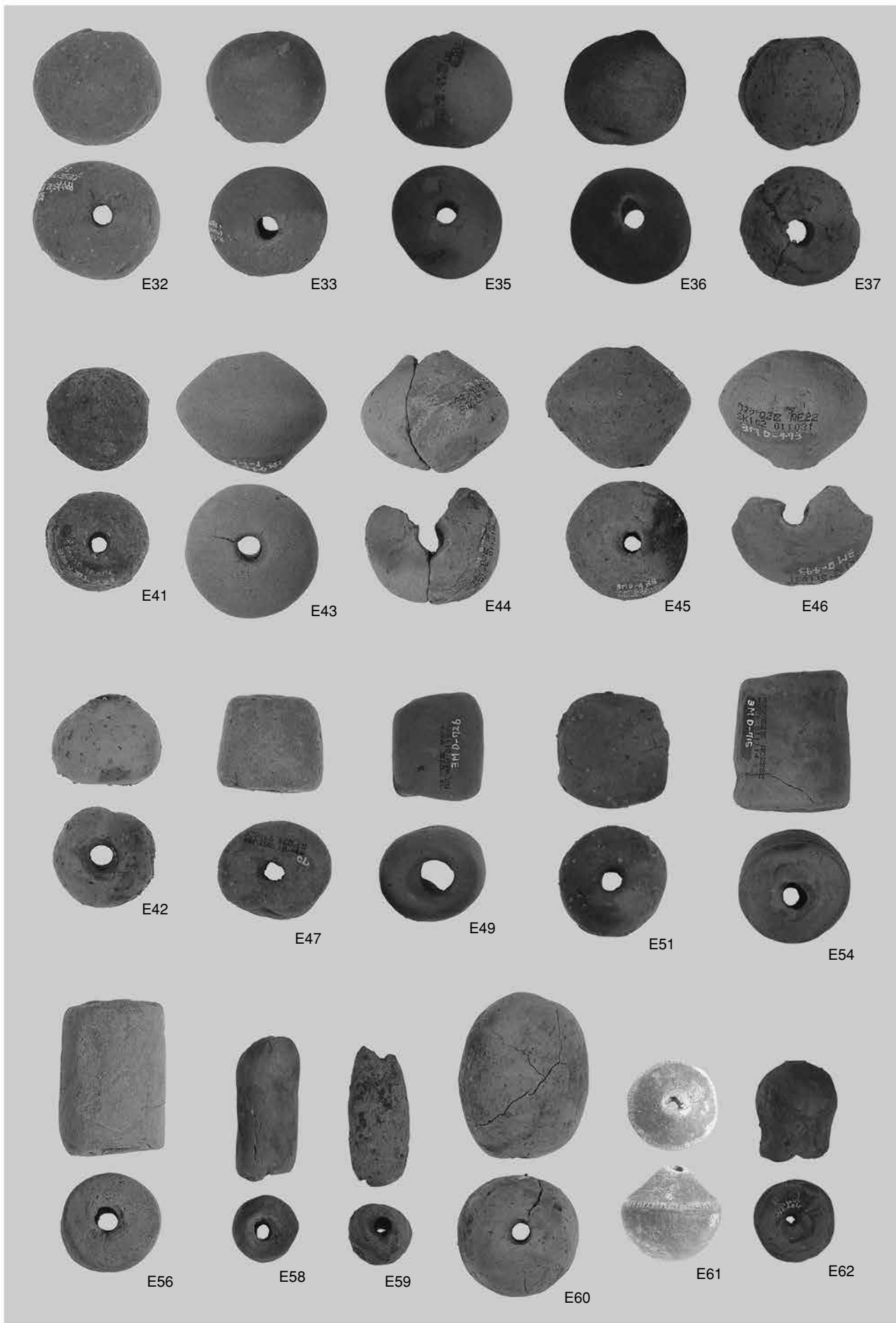


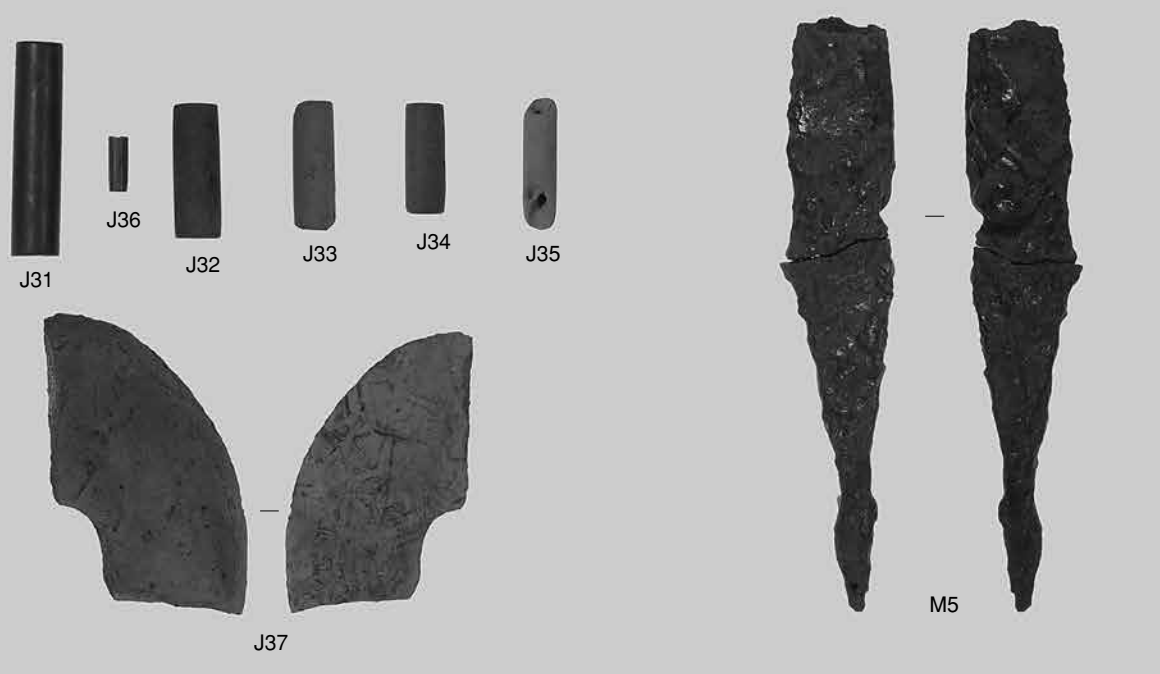












報告書抄録

ふりがな	うねだにしいせきぐん							
書名	金沢市畝田西遺跡群Ⅲ							
副書名	金沢西部第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	8							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	立原秀明 安 英樹 金山哲哉							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL (076) 229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うねだ じちゅう 畝田・寺中遺跡 うねだ 畝田遺跡 うねだだいとくがわ 畝田大徳川遺跡	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 うねだにし 畝田西 3丁目 地内	17201	01260 01261 01262	36度 35分 50秒	136度 36分 20秒	19990415～ 20030903	45,720㎡	金沢 西部第二 土地区画 整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
うねだ じちゅう 畝田・寺中遺跡 うねだ 畝田遺跡 うねだだいとくがわ 畝田大徳川遺跡	散布地	縄文時代	貯蔵穴	土器・石器				
	集落跡	弥生時代	竪穴系建物跡・掘立 柱建物跡・井戸跡・ 土坑・溝・河道	土器・土製品・石 器・木製品・石製 玉	中期後半を主体と する居住域を検出			
	集落跡	古墳時代	竪穴系建物跡・掘立 柱建物跡・井戸跡・ 土坑・溝・河道	土器・土製品・石 製品・石製玉・金 属製品	前期の居住域を検 出			
要約	沖積地に立地する縄文時代～中世の複合遺跡である。本巻には縄文時代～古墳時代前期までの調査成果を所収した。							

金沢市 畝田西遺跡群Ⅲ

発行日 平成18(2006)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 ショセキ